奈良文化財研究所学報第106冊

石神遺跡発掘調査報告Ⅰ

―石造物出土地の調査―



2025

奈良文化財研究所

奈良文化財研究所学報第106冊

石神遺跡発掘調査報告Ⅰ

―石造物出土地の調査―



2025

奈良文化財研究所



奈良文化財研究所学報第106冊

石神遺跡発掘調査報告Ⅰ

― 石造物出土地の調査 ―

2025

奈良文化財研究所

序

石神遺跡は明治35・36年（1902・1903）に、異形の石造物が出土した地として知られています。これらは出土後すぐに「須弥山」および「石人像」と呼ばれるようになり、斉明朝の時代に造られたものと考えられるようになりました。これらの石造物は、その後東京帝室博物館に寄贈されたのですが、出土地とその周辺では、昭和初期に２回の発掘調査がおこなわれました。昭和４年（1929）の発掘調査では、飛鳥小学校とその周辺で発見した「石葺」を飛鳥浄御原宮の遺構であると考えました。いっぽう、昭和11年（1936）の発掘調査は石田茂作氏（東京帝室博物館）が実施したもので、石造物の性質をあきらかにすることが目的でした。このときの調査では、地表下約３尺の深さで、飛鳥時代の石組溝や石敷などを相次いで発見しています。この成果を受けて、石田は後年、この地が『日本書紀』斉明天皇５年条に見える「甘橿丘東川上」にあたり、須弥山を立てて陸奥と越の蝦夷を饗応した場所であると考えたのです。「斉明朝の饗宴場」という石神遺跡のイメージは、原型がこのときにつくられたといえます。

石田氏の発掘調査から数十年を経て、奈良国立文化財研究所（奈文研）が石神遺跡の発掘調査に着手したのは、昭和56年（1981）のことです。その第１次調査には、石造物が出土した小字石神の水田が選ばれました。小字名に因んで、「石神遺跡」という名称が定着したのもこの頃です。その後、発掘調査は平成20年（2008）まで続き、斉明朝の一大遺跡というイメージが定着していきました。調査が進むにつれ、７世紀前半から藤原宮期にかけて、大きく３度の改作がおこなわれたことや、斉明朝には東西２つの区画に分かれていたことがあきらかとなりました。

複雑な遺構と膨大な量の出土遺物に鑑み、その正式報告書は何冊かに分けて刊行することとなりました。本書はその第１冊で、第１次から第

４次までの発掘調査報告書です。この報告書を刊行するために、令和５年度には石造物出土地の再発掘調査も実施しました。これはこの水田でおこなった通算３度目の発掘調査であり、本書を刊行するために目下の課題を解決することが調査の目的であったと聞いています。この再発掘調査は、これまで未検出であった遺構を確認するにとどまらず、遺跡全体の構造や変遷を考え直すきっかけにもなりました。

石神遺跡の研究にはおよそ120年の歴史がありますが、継続的な発掘調査によって、今も少しずつ新しい事実があきらかとなりつつあります。本書で報告するのは発掘調査成果の一部にすぎませんが、飛鳥地域における新たな研究の礎となることを願ってやみません。

最後になりましたが、石神遺跡における発掘調査の実施にご協力いただいた奈良県・奈良県教育委員会と明日香村教育委員会をはじめ、調査等にご理解いただいた大字飛鳥にお住まいの皆様、ご指導・ご助言を賜りましたすべての方に対し、厚く御礼を申し上げます。

2025年３月

奈良文化財研究所
所長　本中　眞

石神遺跡発掘調査報告Ⅰ

― 石造物出土地の調査 ―

目　　次

第Ⅰ章　序　　言 ……1

1　調査の経緯 ……1

2　調査組織 ……3

3　報告書の作成 ……3

第Ⅱ章　遺跡周辺の環境と発掘史 …… 6

1　遺跡の立地と地形 …… 6

2　周辺の遺跡 …… 10

3　遺跡観の形成過程と発掘史 …… 14

第Ⅲ章　調　　査 …… 21

1　測量と地区割 …… 21

2　調査の概要 …… 25

3　調査日誌抄 …… 29

第Ⅳ章　遺　　跡 …… 47

1　基本層序 …… 47

2　整地土と遺構検出面 …… 50

3　水田の造成と削平 …… 52

4　遺構各説 …… 54

A　Ⅰ期の遺構（7世紀前半） …… 54

B　Ⅱ期の遺構（7世紀中葉から後半まで） …… 68

C　Ⅲ期の遺構（7世紀後半から末） …… 77

D　Ⅳ期の遺構（奈良時代以降） ……82

E　古墳時代の遺構（6世紀以前） …84

F　石造物関連遺構 ……85

第Ⅴ章　遺　　物 …… 87

1　土器・土製品 …… 87

A　Ⅰ期遺構群出土土器……88
B　Ⅱ期遺構群・整地土Ｂ出土土器 ……98
C　Ⅲ期遺構群出土土器……110
D　奈良時代・平安時代の土器…129
E　東北系黒色土器……131
F　刻書土器……132
G　陶　硯……132
H　新羅土器……135
I　土製品……136
J　古墳時代の土器……137
K　中世の土器……139

2　瓦製品 ……143

A　軒丸瓦……143
B　軒平瓦……150
C　垂木先瓦……152
D　丸　瓦……153
E　平　瓦……156
F　ヘラ描瓦……166
G　瓦製円板……167

3　木製品 ……171

A　SE800井戸枠内出土木製品…171
B　その他の遺構出土木製品……182

4　金属製品 ……183

A　鉄製品……183
B　銅製品……215

5　冶金関連遺物 ……217

A　鞴羽口……217
B　鋳型・坩堝……219
C　銅素材・銅滴・銅滓・鉄素材……221
D　鉄　滓……223

6　壁　土 ……224

7　石製品 ……224

A　砥　石……224
B　小円礫……233
C　その他の石製品・玉類……234
D　室生火山岩製板石……235

第Ⅵ章　自然科学分析 ……241

1　SE800出土土師器甕の残存脂質分析 ……241

2　SE800井戸枠内出土木製品の樹種調査……250

3　石組溝SD335の堆積環境と流向 ……255

第Ⅶ章　考　　察 ……257

1　土　器 ……257

A　A－3期遺構群の出土土器とその年代 ……257

B　SE800井戸枠内出土の煮炊具 ……263

2　瓦 ……267

A　石神A・B・D・Eの生産年代 ……267

B　石神Fの生産年代 ……272

C　石神A・B・D・E・Fの来歴 ……272

D　飛鳥寺所用瓦の来歴 ……273

3　金属製品 ……277

A　鉄製品の分布と「小墾田兵庫」説 ……277

B　石神遺跡出土鉄製品と軍防令の戎具 ……279

4　遺構変遷案の再検討 ……284

A　既往の調査と時期区分 ……284

B　時期区分の見直しとその論理 ……287

C　遺構の相対順序 ……290

5　遺　構 ……292

A　柱穴埋土の類型化 ……292

B　石組溝の造営工法と機能 ……294

C　第1～4次調査区の遺構変遷 ……295

D　石神遺跡における水路網と機能の変化 ……300

E　NR310からみえる石神遺跡 ……302

第Ⅷ章　総　　括 ……303

附　　篇　小字石神出土の石造物 ……307

別　　表 ……319

英文要旨 ……329

図　　面

図　　版

写　　真

図　　面

PLAN

1　平面図の割り付け

2　第２次・石神遺跡1990−１次

3　第１次・第２次・石神遺跡1996−１次

4　第１次・石神遺跡1996−１次・飛鳥藤原第214次

5　第４次・(第５次)

6　第４次・第３次

7　第３次

図　　版

PL.

1　石神遺跡第１次調査区土層図

2　石神遺跡第３次調査区北壁土層図

3　石神遺跡第３次調査区西壁土層図

4　石神遺跡第４次調査区北壁土層図

5　SD335・435出土土器

6　SE800井戸枠内（バラス層）出土土器（１）

7　SE800井戸枠内（バラス層）出土土器（２）

8　SE800井戸枠内（礫混砂層）出土土器（１）

9　SE800井戸枠内（礫混砂層）出土土器（２）

10　SE800井戸枠内（含砂礫茶褐色有機質土）出土土器（１）

11　SE800井戸枠内（含砂礫茶褐色有機質土）出土土器（２）

12　SE800井戸枠内（砂混灰褐色粘質土）出土土器

13　SD500出土土器

14　整地土Ｂ（灰褐色土・褐色土）出土土器（１）

15　整地土Ｂ（灰褐色土・褐色土）出土土器（２）

16　整地土Ｂ（灰褐色土・褐色土）出土土器（３）

17　整地土Ｂ（灰褐色土・褐色土）出土土器（４）

18　SD347・640出土土器（１）

19　SD347・640出土土器（２）

20　SD347・640出土土器（３）

21　SD347・640出土土器（4）
22　SD347・640出土土器（5）
23　SD347・640出土土器（6）
24　SD347・640出土土器（7）
25　SE650出土土器（1）
26　SE650出土土器（2）
27　SE650出土土器（3）
28　SK518出土土器
29　SK405出土土器

写　真

Ph.

1　昭和11年調査の記念写真
2　航空写真
3　航空写真
4　調査区全景　石神第1次
5　調査区全景　石神第2次
6　調査区全景　石神第3次
7　調査区全景　石神第4次
8　調査区全景　飛鳥藤原第214次
9　石神第1次調査区の石組溝と石敷
10　石神第1・3次調査区の石組溝
11　石神第1・2次調査区の石組溝
12　石神第1・2次調査区の石列および石敷
13　石神第2次調査区の掘立柱建物SB450（Ⅰ-2期）・SB400（Ⅱ-1期）
14　石神第3次調査区西北部および南部の遺構
15　石神第3次調査区中央部および東部の遺構
16　石神第4次調査区北部および西南隅部の遺構
17　石神第4次調査区西北部の遺構
18　石神第4次調査区東部の遺構
19　石神第4次調査区西北部の遺構
20　飛鳥藤原第214次調査の検出遺構
21　飛鳥藤原第214次調査の石組溝再検出状況

22　飛鳥藤原第214次調査の検出遺構

23　石神遺跡1990−１次調査区全景・石神第１次調査区の遺構

24　柱穴・石組溝・井戸SE800詳細

25　SD335・435出土土器

26　SE800井戸枠内（バラス層）出土土器（１）

27　SE800井戸枠内（バラス層）出土土器（２）

28　SE800井戸枠内（礫混砂）出土土器（１）

29　SE800井戸枠内（礫混砂）出土土器（２）

30　SE800井戸枠内（礫混砂・含砂礫茶褐色有機質土）出土土器

31　SE800井戸枠内（含砂礫茶褐色有機質土）出土土器

32　SE800井戸枠内（砂混灰褐色粘質土）出土土器

33　SD500出土土器

34　整地土Ｂ（灰褐色土・褐色土）出土土器（１）

35　整地土Ｂ（灰褐色土・褐色土）出土土器（２）

36　整地土Ｂ（灰褐色土・褐色土）出土土器（３）

37　整地土Ｂ（灰褐色土・褐色土）出土土器（４）

38　整地土Ｂ（灰褐色土・褐色土）出土土器（５）

39　整地土Ｂ（灰褐色土・褐色土）出土土器（６）

40　SD347・640出土土器（１）

41　SD347・640出土土器（２）

42　SD347・640出土土器（３）

43　SD347・640出土土器（４）

44　SE650出土土器（１）

45　SE650出土土器（２）

46　SK518出土土器

47　SK405出土土器

48　黒色土器・獣脚硯・中空円面硯・新羅土器

49　軒丸瓦（１）

50　軒丸瓦（２）

51　軒丸瓦（３）

52　軒丸瓦（４）

53　軒平瓦・垂木先瓦

54　丸　瓦

55　平瓦（１）

56　平瓦（2）

57　平瓦（3）・瓦製円板

58　SE800井戸枠内出土木製品（1）

59　SE800井戸枠内出土木製品（2）

60　SE800井戸枠内出土木製品（3）

61　SE800井戸枠内出土木製品（4）

62　SD640 出土鉄製品（1）

63　SD640 出土鉄製品（2）

64　鉄鏃（1）

65　鉄鏃（2）

66　鉄鏃（3）

67　鉄鏃（4）

68　鉄鏃（5）・鉄斧

69　鉄鎌・刀子（1）

70　刀子（2）・鉄製工具・紡錘車・鉄針・鉄釘（1）

71　鉄釘（2）

72　鉄釘（3）・鋌

73　その他の鉄製品・銅製品

74　鞴羽口

75　鋳型・坩堝・銅素材・銅滴・銅滓

76　鉄素材・鉄滓

77　壁　土

78　砥石（1）

79　砥石（2）・その他の石製品

80　室生火山岩製板石

81　樹種顕微鏡写真（1）

82　樹種顕微鏡写真（2）

83　樹種顕微鏡写真（3）

84　樹種顕微鏡写真（4）

85　SD335埋土の堆積構造

石神遺跡発掘調査報告Ⅰ

―石造物出土地の調査―

第Ⅰ章　序　　言

第１節　調査の経緯

石神遺跡は奈良県高市郡明日香村飛鳥に所在する７世紀の一大遺跡で、飛鳥寺の北側、甘樫丘の東方に位置している。明治35・36年（1902・1903）に小字石神の水田から、いわゆる須弥山石と石人像が出土して以来、21世紀の今日にいたるまで、すでに120年が経過している。

その研究の歴史には、大きく見て２つの側面がある。１つ目は斉明朝の饗宴場（または饗宴施設）説で、須弥山石の性格に関する学説とは必ず一体で論じられる。もう１つは石神遺跡周辺を飛鳥浄御原宮に比定する学説である。２つの学説はとくに融合することなく、それぞれが別々に論じられてきた。石神遺跡で実施された過去の発掘調査は、すべてこれら伏線のいずれかと関係していると言っても過言ではない。奈良文化財研究所（2000年以前は奈良国立文化財研究所）が30年近い歳月をかけて実施してきた継続的な発掘調査も、むろんその例外ではないのである。

現在の石神遺跡は、1980年頃までは「飛鳥浄御原宮推定地」と呼ばれていた。この宮跡が飛鳥小学校とその東側隣接地にあたるとする学説が、古くに喜田貞吉によって唱えられたからである[1)]。昭和４年の発掘調査では、小学校の校地内で「石葺」を確認し、発掘者は「飛鳥浄見原宮址」の遺構と考えた[2)]が、調査はごく狭い範囲に限られていた。いっぽう、小学校の東方にある小字石神の水田では、明治35・36年に異形の石造物が出土しており、出土直後から斉明紀の須弥山に関連づける学説が登場していた[3)]。昭和11年の発掘調査では、出土地付近で石組溝や石敷を確認し、斉明朝の饗宴場跡であると後年考えられるにいたった[4)]。つまり、飛鳥小学校とその一帯は、地名等からの考証や部分的な発掘調査によって、斉明朝から天武朝にかけての重要遺跡であると古くから考えられてきたのである。しかしながら、発掘調査がごく一部に限られていたため、遺跡の全容は長らく、まったくあきらかでなかった。

しかし戦後、飛鳥寺の発掘調査が進み、その伽藍や寺域があきらかになったことで、飛鳥寺の北方に位置する飛鳥浄御原宮推定地が、にわかに注目されるようになった。とりわけ、飛鳥寺北面大垣の確認（1977）[5)]によって、小字石神の水田が飛鳥寺寺域の西北隅にあたることが判明した。さらにこのとき、飛鳥寺西門前を通るとされた中ツ道と、壬申の乱時の「飛鳥寺北路」との交点が、小字石神の水田東南部に想定されることになったため、新たな視点による全

面的な調査が必要となってきたという（『藤原概報12』55頁）。また同宮推定地の近傍では、斉明朝の漏刻台跡である水落遺跡が発見されており、昭和51年（1976）には国史跡に指定されている[6]。周辺における最新の調査成果に鑑み、奈良国立文化財研究所が同宮推定地の発掘調査に着手したのは、昭和56年（1981）のことである。飛鳥小学校とその東方地区について、「石神遺跡」という遺跡名が用いられたのはこのときが最初であるが、それはまだ仮称であって[7]、第２次調査時までは「飛鳥浄御原宮推定地」と呼ばれていた[8]。この遺跡名が奈文研の刊行物で定着するのは、1982年の下半期[9]である。

奈文研による継続的な発掘調査は、このように小字石神（飛鳥287番地）の水田を起点とし、飛鳥浄御原宮推定地の調査として始まった。その後は年度ごとに水田を１面ずつ借り受け、第21次調査（2008）まで発掘調査を継続した。平成22年度（2009）からは報告書作成のための整理作業を開始したものの、第３次調査時に検出した東西塀SA600・560等や東西溝SD347が、その東側隣接地である第１次調査区で未検出であることが、報告書の執筆を進めるうえで大きな課題となってきた。とりわけSA600は、石組溝SD334・335等の曲折に沿うかたちで、第１次調査区で北へと折れていることが予測されたため、その柱穴を実際に検出して確かめる必要が生じていた。

そこで令和５年度（2023）には、水田の地権者である辻本武史氏の承諾を得たうえで、第１次調査区の再発掘を42年ぶりに実施した（飛鳥藤原第214次調査）。その結果、SA600がSD335の手前で北へと折れていることが確認できたため、第１次調査の成果を部分的に修正することとした。こうして本書では、おもに第１～４次調査の記録に基づきつつも、それらを再解釈し、そのうえ再調査を実施したことによって、石神遺跡に関する従来の認識を修正することができた。

なお令和３・４年度（2021・2022）には、第１次調査地の東側隣接地（飛鳥302番地）でも発掘調査（飛鳥藤原第209・212次）をおこない[10]、石神遺跡東方での学術調査に着手している。これらは石神遺跡におけるこれまでの調査範囲を東へと拡張し、古代遺構の存否や範囲を確認するのが目的の調査である。これらは石神第21次までの一連の調査とは別の契機と計画とに基づく発掘調査であるため、本書はその成果を含まない。

1）喜田貞吉「飛鳥の京（下の下）」『歴史地理』12-５、1912年。
2）中岡清一「飛鳥浄見原宮址ノ一部発掘ニ就テ＝宮瀧ニ於ケル吉野離宮トノ関係明瞭トナラン＝」1929年。
3）高橋健自「飛鳥発見の石造遺物」『考古界』３－５、1903年。
4）石田茂作「飛鳥の須弥山遺跡」『飛鳥随想』1972年、学生社および矢島恭介「飛鳥の須弥山と石彫人物について」『国華』58-12、1949年。
5）「飛鳥寺北方の調査」『藤原概報８』1978年。
6）奈文研『藤原報告Ⅳ―飛鳥水落遺跡の調査―』奈文研学報第55冊、1995年。
7）「飛鳥浄御原宮推定地の調査」『藤原概報12』1982年。その47頁には、「今年度より同推定地解明の糸口ともなる小字「石神」の水田（石神遺跡と仮称する）の調査を開始した。」と見える。
8）「飛鳥浄御原宮推定地の調査（石神遺跡第２次）」『藤原概報13』1983年。
9）「飛鳥水落・石神遺跡の調査」『奈良国立文化財研究所年報1982』。この年報は註７）前掲文献の刊行（1982年４月）より遅く、1982年11月の刊行である。
10）松永悦枝・谷澤亜里「石神遺跡東方の調査―第209・212次」『発掘調査報告2023』。

第２節　調査組織

本報告書は、石神遺跡第１次調査から同第４次調査までと、石神遺跡1990−１次調査、飛鳥藤原第214次調査等の調査報告である。以下に調査責任者と担当者・現場班の調査員を掲げ、それ以外の調査関係者一括して列記する（＊は研究補佐員、＊＊はアソシエイトフェロー）。

調査次数	年度	所長	部長	調査担当者	調査員
石神遺跡第１次	1981	坪井清足	狩野　久	西口壽生	木下正史　今泉隆雄
					滝本正志＊
石神遺跡第２次	1982	坪井清足	狩野　久	上原真人	木下正史　西口壽生
					清水真一　泉　雄二＊
					滝本正志＊
石神遺跡第３次	1983	坪井清足	狩野　久	清水真一	木下正史　西口壽生
					清水真一　立木　修
					泉　雄二＊
石神遺跡第４次	1984	坪井清足	狩野　久	川越俊一	村上訒一　岩本正二
					泉　雄二＊
石神遺跡1990−１次	1990	鈴木嘉吉	牛川喜幸	深澤芳樹	安田龍太郎　佐伯博光＊

井上和人、岩本圭輔、上野邦一、大林達夫＊、菅原正明、土肥　孝、納谷守幸＊、藤田広幸＊、宮川伴子＊

（以上、奈良国立文化財研究所　飛鳥藤原宮跡発掘調査部）

飛鳥藤原第214次	2023	本中　眞	箱崎和久	福嶋啓人	森川　実	谷澤亜里	樋口典昭＊＊

（国立文化財機構奈良文化財研究所　都城発掘調査部）

第３節　報告書の作成

奈良文化財研究所による石神遺跡の発掘調査は、第１次調査（1981）から第21次調査（2008）までの28年にわたり、調査面積は延べ17,800㎡におよんでいる。出土遺物も膨大で、とくに土器は整理用の木箱で4,788箱にのぼっている。これは明日香村内で出土し、わが研究所が収蔵している土器の55％を占めている（令和５年度現在）。しかし、調査中は整理作業に着手できなかったため、報告書刊行に向けた本格的な作業は平成22年度（2010）から着手することとなった。また、平成23年度（2011）には第15〜19次調査の範囲を除く、北限の区画施設（第21次調査区）以南を報告対象とし、平成27年度（2015）の刊行を目指すことが確認された。

整理作業着手からの数年間は、出土土器の注記作業や遺構図等の整理、出土遺物の実測作業等を継続したものの、作業は遅々として進まなかった。そこで2015年頃には、出土遺物や検討事項の多さに鑑み、報告書を数次分ごとにまとめ、分割して刊行してゆく方針が担当者側から提案された。本書はその第１冊にあたり、第１次から第４次調査までを報告の対象としている。本書以後は、第５次から第９次調査までを『石神遺跡発掘調査報告Ⅱ』、第10次から第12次調査までを『石神遺跡発掘調査報告Ⅲ』としてまとめ、逐次刊行してゆく予定である。

報告書の作成は、都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）においておこなった。出土資料の整理作業は、発掘調査および検出遺構の整理を遺構研究室が、出土遺物のうち木製品・金属製品・

石製品・冶金関係遺物を考古第一研究室、土器類を考古第二研究室、瓦類を考古第三研究室、木簡を史料研究室（令和５年度まで）がそれぞれ担当しておこなった。井戸SE800出土土師器甕の残存脂質分析はサンプル採取・調整、GC-MSによる分析を村上夏希（現・昭和女子大学）、鈴木美穂・庄田慎矢が、個別脂肪酸の安定炭素同位体比の測定はリュキャン アレクサンドル・クレイグ オリヴァー（ヨーク大学）がおこなった。また、木製品の樹種の調査は小林克也（㈱パレオ・ラボ）、石組溝SD335堆積物の土壌分析には村田泰輔があたった。

なお本書では、遺構・遺物の年代観や遺跡の時期区分・遺構変遷に関する修正案を提示した。本書ではこれを「新案」という。新案には既刊の概報・紀要等に示した、調査時の見解や解釈と異なる点もあるが、本書をもって現時点での正式見解としたい。

１．本書の執筆分担は次の通りである。

第Ⅰ章　序　言		森川　実
第Ⅱ章　遺跡周辺の環境と発掘史	１～３節	森川　実
第Ⅲ章　調　査	１・２節	森川　実
	３節	福嶋啓人
第Ⅳ章　遺　跡	１～３節	森川　実
	４節	福嶋啓人
第Ⅴ章　遺　物	１節	森川　実（Ａ～Ｂⅲ・Ｂⅴ～Ｋ）・山藤正敏（Ｂⅳ）
	２節	岩永　玲
	３節	松永悦枝（現・文化庁）・山本　崇
	４～６節	松永悦枝
	７節	谷澤亜里（Ａ）・松永悦枝（Ｂ） 谷澤亜里・松永悦枝（Ｃ）・岩永　玲（Ｄ）
第Ⅵ章　自然科学分析	１節	村上夏希（現・昭和女子大学）・庄田慎矢・森川　実
	２節	小林克也（㈱パレオ・ラボ）
	３節	村田泰輔
第Ⅶ章　考　察	１節	森川　実
	２節	岩永　玲
	３節	松永悦枝
	４節	森川　実
	５節	福嶋啓人
第Ⅷ章　総　括		森川　実
附　篇　小字石神出土の石造物		森川　実
英文要旨	原文作成	森川　実
	英文翻訳	山藤正敏

２．第１～４次調査時（1981～1984）における遺構の写真撮影は、おもに井上直夫がおこなった。また、第214次調査（2024）の遺構と、出土遺物の写真撮影は栗山雅夫がおこな

った。このほか、飛鳥287番地の現況写真と石造物の写真は、飯田ゆりあの撮影による。

３．図面・図版、挿図、表の作成は各執筆者が分担してあたり、以下の各氏の協力を得た。
稲田登志子、乾 陽子、井上富美子、井上美穂、入倉美奈子、入谷敦子、笠谷香代、
清水比奈子、玉木学恵、寺口茂子、長田美知代、成迫智美、西村孝子、藤田順子、
牧村幸代、増田朋子、松田麻美、森 由季子、森田和世、森山そらの

４．奈良国立文化財研究所、奈良文化財研究所の出版物に関しては下記の略称を使用した。
また本書では、機関名も「奈文研」と省略する。

『飛鳥・藤原宮発掘調査概報26』	→	『藤原概報26』
『奈良国立文化財研究所年報2000-Ⅱ』	→	『年報2000-Ⅱ』
『奈良文化財研究所紀要2009』	→	『紀要2009』
『奈良文化財研究所発掘調査報告2023』	→	『発掘調査報告2023』
『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅴ』	→	『藤原報告Ⅴ』
『山田寺跡発掘調査報告』	→	『山田寺報告』
『吉備池廃寺発掘調査報告』	→	『吉備池報告』
『飛鳥池遺跡発掘調査報告』	→	『飛鳥池報告』
『平城宮発掘調査報告Ⅶ』	→	『平城報告Ⅶ』

５．遺構図の座標値は、平面直角座標系第Ⅵ系（世界測地系）による。高さは、東京湾平均海面を基準とする海抜高で表す。なお、2002年４月１日からの改正測量法の施行にともない、日本測地系から世界測地系へ移行することとなったが、石神遺跡第１～４次調査はすべて日本測地系に拠っているので、本書の平面座標は日本測地系で表示し、（ ）内に世界測地系の数値を示した。

６．発掘調査で検出した遺構は、文化庁編『発掘調査のてびき』、2010年に準拠し、遺構の種別を示す記号と一連の番号との組み合わせ（下記）により表記した。
SA（塀）、SB（建物）、SD（溝）、SE（井戸）、SF（道路）、SG（池）、
SI（竪穴建物）、SK（土坑）、SX（その他）、NR（流路）

７．７世紀および藤原宮期の土器の年代は、『藤原報告Ⅱ』等に準じ、飛鳥Ⅰ～Ⅴと表す。

８．飛鳥・藤原地域および平城宮・京出土軒瓦の型式名は、下記文献の記載に準じる。
花谷 浩「京内廿四寺について」『研究論集Ⅺ』奈文研、2000年。
花谷 浩「石神遺跡の瓦」『紀要2004』。
奈文研『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』1996年。

９．石神遺跡における既往の時期区分（旧案：Ａ～Ｃ期）に代わり、本書では新案（Ⅰ～Ⅲ期）を考案し、これを採用した。新案は旧案に比し、時期区分の基準を大きく改めている。本書では文脈に応じ、旧案で遺構の時期を表示することもあるが、Ⅳ・Ⅴ章およびⅦ章ではとくに断らないかぎり、新案の時期区分を用いた。

10. 第１次調査時にはSD135など、100番台の遺構番号を付していたが、第２次調査以降は、これらを300番台に置き換えている。本書でも後者に準じ、SD335などに統一した。

11. 註は原則として、各章・各節ごとにそれぞれの末尾にまとめた。

12. 本書の編集は都城発掘調査部長箱崎和久の指導のもと、森川 実がおこなった。

第Ⅱ章　遺跡周辺の環境と発掘史

第１節　遺跡の立地と地形

遺跡周辺の地形

冬野川と稲渕川との水を集めた飛鳥川は、おもにその右岸に段丘面を発達させつつ、大字島庄から大字飛鳥にかけてはその西縁を流れ、甘樫丘と雷丘との間を抜けて、さらに北西へと流下している。この河川が形成した低位段丘面は、高いほうから岡面（低位段丘Ⅰ面）と飛鳥面（低位段丘Ⅱ面）とに区分されてきた（Fig. 1）[1)]。岡面は島庄から岡、川原にかけての平坦面を

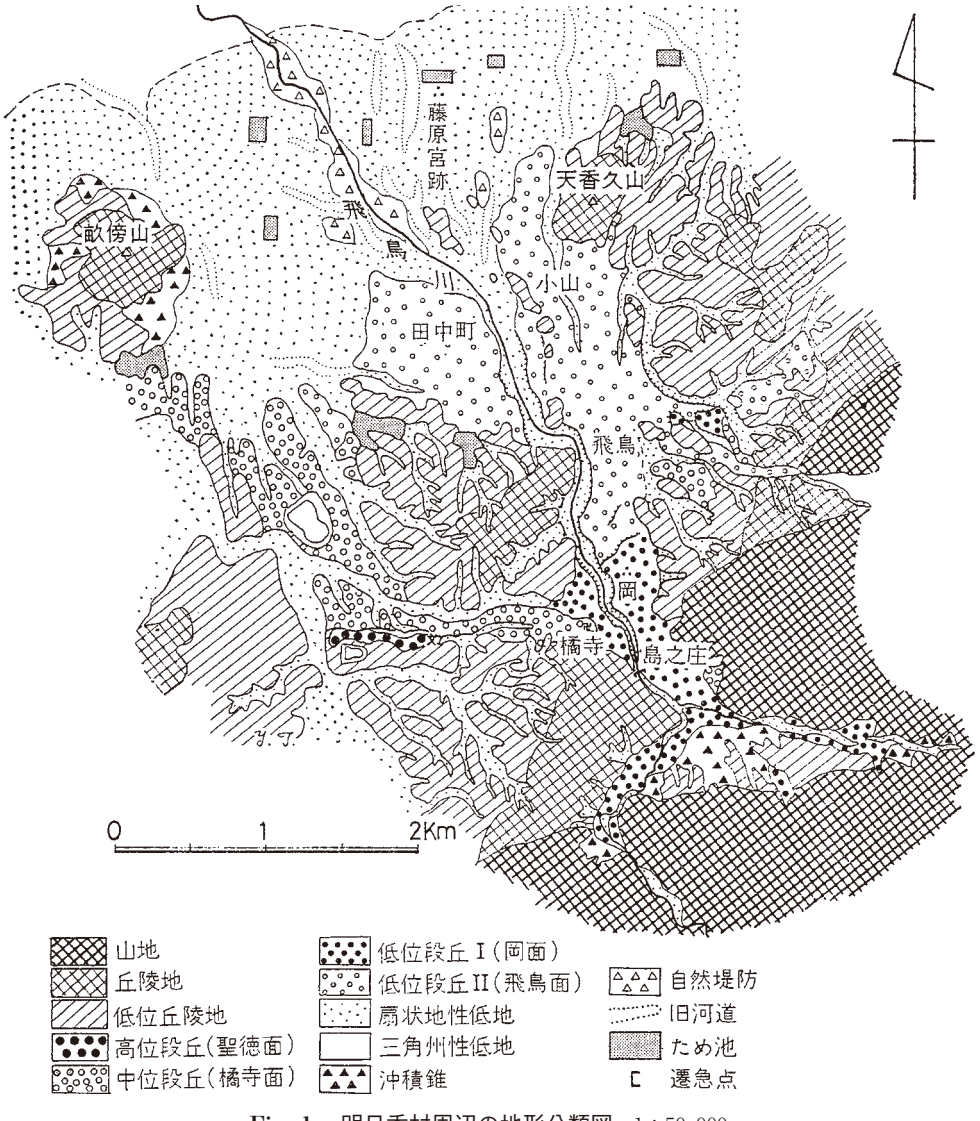


Fig. 1　明日香村周辺の地形分類図　1：50,000

指し、標高は約115～120mである。飛鳥宮跡や飛鳥京跡苑池は、この地形面上に立地している。岡面の段丘崖は飛鳥京跡苑池から奈良県立万葉文化館に向けて、南西から北東にかけて平野を横断しており、吉野川分水はこの崖線に沿って流れている。いっぽう、これより一段低い飛鳥面は、大字飛鳥から小山集落付近まで広く分布している。『日本書記』崇峻元年条に見える「真神原」は、岡から飛鳥にかけての原野を指すとされ、そこに建てられたのが飛鳥寺である。その創建以後、飛鳥諸宮をはじめとするさまざまな施設は、飛鳥寺を避けて営まれることになった。飛鳥寺の北側に位置する石神遺跡の遺構群が、飛鳥寺の創建時よりも古いとは考えがたい。石神遺跡の立地や性格を考えるとき、この事実は重要である。

大字飛鳥周辺では、この地形面は飛鳥川に向けて東から西へと緩やかに傾斜している。飛鳥坐神社前の標高は105.4mだが、水落遺跡のすぐ東側を通る段丘崖の上端（小字石橋付近）は標高102.4mで、その比高は3.0mである。また、この狭い平地の東西幅を、飛鳥川から飛鳥坐神社までの距離で示すと、それは500mに満たない。しかしながら、この間には飛鳥寺や水落遺跡・石神遺跡などが相接するように立地しているのである。

扇状地性の砂礫層

石神遺跡周辺の地形は、おもに東側から供給された砂礫が厚く堆積することで発達している。そこは西下がりの緩斜面で、東方から流下する八釣川が谷から抜け出て、中の川となる地点付近（飛鳥坐神社の北側）を扇頂とする、扇状地の扇端付近にあたると考えられる。この扇状地の勾配を、石神遺跡南側の東西道路で測ると、それは1.0％となる[2)]。石神遺跡や水落遺跡は、この小規模な扇状地の扇端付近に立地しているといえる。

2023年12月に史跡飛鳥水落遺跡東隣の個人住宅敷地内で実施した鑿井工事の立会調査（飛鳥藤原第215-１次[3)]）では、標高101.0mの深度にシルト層があり、その直下に厚い砂礫層が堆積しているのを確認した（Fig. 2）。ひと抱えもある巨礫を含むこの砂礫層は、湧水を見た現地表下6.0mまでは確認でき、層厚は少なくとも４m以上である。礫は風化せず未固結で、低位段丘に相当する扇状地の基底礫層にあたると解釈できる。また、この立会地点の北50mに位置する石神遺跡第１～４次調査地でも、基盤層は同じ砂礫層である。第４次調査で検出した井戸SE800は、現水田面から5.4mの深度に達しており、その下底は標高95.7mである。このように、水落遺跡や石神遺跡の周辺では、水の確保が容易でない。こうした水利事情は扇状地に通有で、古代と現代とで大きくは変わらない。したがって、この地区では伝統的に、飛鳥川からの引水に多くを依存してきた。これにくわえて、農業用水の不足は、水田の脇に井戸を掘ることで補ったのである。吉野川分水の通水以前には、灌漑用の井戸が随所に見られたという。

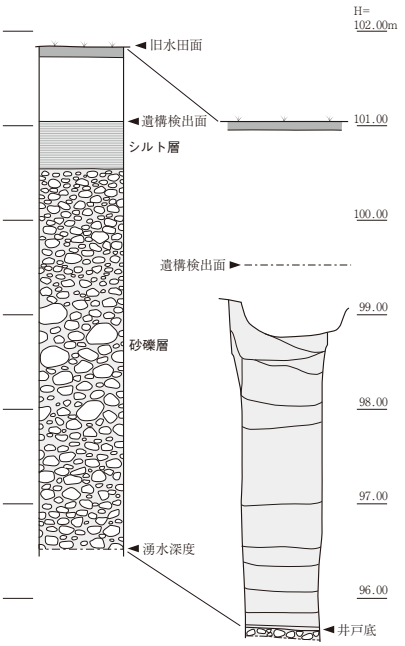


Fig. 2　扇状地礫層の深度　1：80

飛鳥川と木葉堰

飛鳥川の右岸に位置する石神遺跡周辺への導水を考えるとき、取水地として有力なのが弥勒石の近くにある「木葉堰」である。例えば和田萃は、木葉堰が７世紀後半には存在していたとし、小字石神で石田茂作が



Fig. 3　**明治24年製「大字飛鳥実測全図」に見える小字名と水路網**（矢印は現在の流向）

発掘した石組溝や、飛鳥寺西方の「大溝」が、この堰から取水していたと考えている[4)]。

大字飛鳥実測全図

明治24年製の「大字飛鳥実測全図」によれば、飛鳥川沿いに北へと流れる基幹水路が小字高樋付近で二股に分岐しており、直進する本線が水落遺跡と石神遺跡との間を抜け、さらに北へと続いている（Fig. 3）。この本線は、地元では「中水（なかすい）」または「六分川」と呼ばれた基幹水路で、現在は吉野川分水を取り入れる飛鳥工区第２号幹線となり、飛鳥面の水田を潤している。いっぽう、分岐点から飛鳥面の段丘崖に沿って延びる支線は石神遺跡第１次・第２次調査地のすぐ東側を通り、本線に平行しつつ北へと延びている。大字飛鳥周辺では、明治時代の地籍図に描かれた水路網がそのまま残り、水田区画も昭和30年代からほとんど変わっていない[5)]。つまり飛鳥川右岸域には、古代の地割や条里区画がよく残っている。石神遺跡で見つかった飛鳥時代の石組溝も、飛鳥川右岸のどこかで取水し、崖線に沿って北へ延びていたと考えられる。

これら本線と支線は、石神遺跡を縦断しつつ北へと流れている。しかし、その分枝には西下がりの地形に逆らうように、東へと延びている部分がある。その１つは小字石神の西北部で本

線から東に折れ、小字ハリワケの東縁を北へと延びる水路である。もう１つは小字戒重田・コ子ノコの南で支線から分岐し、広大な平坦地である小字丁通りの東縁を北へと延びて、現在の中の川へと落ちる水路である。「大字飛鳥実測全図」に描かれた明治時代の水路網は、農業用水が不足しがちな扇状地面上を灌漑するために、現在でも機能している。第Ⅳ章でも詳しく述べるように、第１・２次調査で検出した７世紀前半の石組溝SD335・435も、小字石神の東部（飛鳥283番地、第２次調査区）で東へ折れて丁通り地区へと延びている。むろん、この石組溝は灌漑用ではなかったはずである。しかし現在の水路網と重ね合わせて考えると、SD335・435は飛鳥川の水を小字丁通りまで導くための、飛鳥時代の基幹水路であったと推測できよう。

狂心渠の痕跡

高家・八釣地区から東へと流下する八釣川は、飛鳥坐神社のすぐ北側（小字宮ノ下付近）で折れて中の川となり、北へと流れている。現在の中の川は奥山集落の西側を通り、大官大寺の南側を西に流れてから、香久山の西麓を北へと抜けている。人工的に曲折しつつ北西へと向かうその流れは、条里地割の影響を強く受けている。ところが、旧流路は米川水系に属していたため、橿原市南浦町付近で北東へと折れ、香久山の東南麓沿いに磐余方面へと通じていたと考えられる。これが、かつて田村吉永が唱えた「狂心渠」の跡[6]である。それは奥山集落の北側で、明瞭な谷地形として残っている。

奥山久米寺の西方では、奈良時代以前の南北大溝を検出している。その幅は20m以上で、田村が推定した「狂心渠」の一部とされる[7]。その上流部にあたる飛鳥東垣内遺跡や飛鳥宮ノ下遺跡では素掘溝SD01[8]が、飛鳥池東方遺跡でも流路SD1700[9]が見つかっており、開削時期は概ね７世紀中頃という。これらの大溝や流路跡も「狂心渠」の一部であろう。この深い溝渠は、その堆積物や八釣川の土砂によって、遅くとも平安時代には埋没している[10]。その結果、石神遺跡が立地する扇状地面上は、八釣川の土砂が再び堆積する場となったと考えられる。奈良時代の流路NR310（本書Ⅳ章参照）は、扇状地面における地形発達史の枠内で理解する必要がある。

1）明日香村「歴史地理学よりみた明日香村」『続明日香村史』上巻、2006年。
2）明日香村が作成した飛鳥寺跡遺構図（１/1,000、昭和54年３月測図）による。本図によれば、東西道路の両端間の距離は315mで、この間の高低差は3.1mである。
3）この鑿井工事は水落遺跡第７次調査区の範囲内で、かつて検出した遺構を避けて実施された。
4）和田 萃「飛鳥川の堰―弥勒石と道場法師―」『日本史研究』第130号、1973年。
5）惠谷浩子「コラム　田んぼの水利を推理する」『水と暮らしの風景史　古地図と景観がひらく飛鳥』飛鳥資料館図録第77冊、2024年。惠谷によれば、飛鳥川右岸域の景観が保護されたのには、古都保存法（1966年）および飛鳥法（1980年）の功績が大きいという。
6）田村吉永『飛鳥京藤原京考証』1965年。
7）「奥山久米寺西方の調査（狂心渠推定地）」『藤原概報７』1977年。
8）明日香村教育委員会『酒船石遺跡発掘調査報告書―付、飛鳥東垣内遺跡・飛鳥宮ノ下遺跡―』2006年。
9）奈文研『飛鳥池報告　本文編〔Ⅲ〕』奈文研学報第71冊、2022年。ただしSD1700では、斉明紀では舟二百隻で運ばせたとされる「石上山の石」（天理砂岩）が出土しておらず、狂心渠であるとの確証は得られなかったと述べている（167頁）。
10）奈文研『飛鳥池報告　本文編〔Ⅱ〕』奈文研学報第71冊、2022年。SD1700の後期流路堆積物からは、10世紀に降る土師器杯・皿が出土している（183～185頁）。遅くともこの時期には、この溝渠はほぼ埋没していたと考えられる。

第２節　周辺の遺跡

先史時代の飛鳥

現在のところ、飛鳥地域で最古の人工品は飛鳥池遺跡で出土した木葉形尖頭器と有舌尖頭器（縄文時代草創期）である[1)]。近年、石神遺跡東方（飛鳥藤原第209次）でも折損した木葉形尖頭器が出土している[2)]（Fig. 4）。これらの尖頭器は単独で出土し、石器集中部等は未確認である。後期旧石器時代の遺跡は、いまだに見つかっていない。

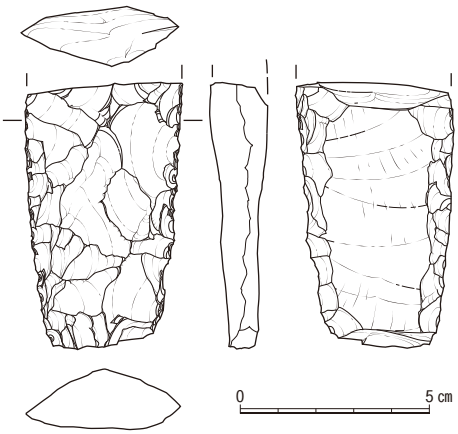


Fig. 4　石神遺跡東方出土の尖頭器　1：2

石神遺跡では建物や塀の柱穴埋土から、細片化した古い土器が出土することがあり、その中には縄文土器片が含まれる。大官大寺第４次調査では、下層調査で検出した土坑や包含層から、中期末から後期後葉にかけての縄文土器がまとまって出土している。これらは北白川Ｃ式～中津式、縁帯文成立期、宮滝２式の３群からなるという[3)]。このように飛鳥地域でも、先史時代遺跡の存在が知られているが、それらは古代遺跡の下層に埋蔵されているため、発掘調査がおよぶ機会は少ない。

本書で報告する石神遺跡第１～４次調査区では、これまでに弥生時代の土坑が見つかっているが、集落遺跡の発見にはいたっていない。これに対し、飛鳥寺から石神遺跡にかけては韓式系土器が多く出土することから、６世紀代に継続して集落が営まれたようである（Fig. 5）。石神遺跡第１次調査や飛鳥藤原第209・212次調査でも複数の竪穴建物を検出しており[4)]、古墳時代集落の遺構が実際に確認できた。さらに県道124号線の拡幅工事にともなう発掘調査（山田道第２・３次）では、石神遺跡の北方で古墳時代の河川跡と掘立柱建物、竪穴建物を検出し、河川の埋土からは布留式新段階の土器とともに朝鮮半島系の土器が出土している[5)]。西口壽生は、

古墳時代集落と渡来人

百済からの渡来人である「手末才伎（たなすえのてひと）」を上桃原、下桃原、真神原に遷居させたとする記事（『日本書紀』雄略７年条）に着目し、これら古墳時代の遺構との関連性を指摘している[6)]。西口によれば、飛鳥川右岸における河岸段丘上の開発は、渡来人を入植させておこなわれたという。

石神遺跡周辺では、これまでのところ古墳は見つかっていない。しかし雷丘の発掘調査（飛鳥藤原第139次）では、６世紀前半頃の円筒埴輪が多数出土し、７世紀の小石室も検出された[7)]。雷丘東方遺跡や山田道第２次調査のほか、飛鳥川左岸に位置する平吉遺跡でも、７世紀代の整地土から円筒埴輪・形象埴輪が出土している[8)]。その来歴を考えると、雷丘周辺の丘陵尾根上に築かれた古墳群が、７世紀代の大規模な切土で消滅した可能性が高い。

飛鳥寺の建立

『日本書記』崇峻元年条によれば、法興寺（飛鳥寺）は衣縫造の祖である樹葉の家を壊して、その跡地に建てられたという。この寺院の造営に先立ち、移住を余儀なくされたイエやムラが存在していたのである。現に飛鳥寺の西面回廊と西面大垣との間（西回廊Ｊ地点）では、６世紀の竪穴建物を一部検出している[9)]。また飛鳥寺周辺では、その下層の黒褐色土層から、飛鳥寺造営直前に遡る６世紀後半の土器群（「飛鳥寺下層」資料）が出土している[10)]。飛鳥寺一帯は「飛



1．中ツ道　2．遺物散布地（14D-0018）　3．奥山久米寺跡　4．阿倍山田道　5．豊浦寺跡　6．平吉遺跡　7．石神遺跡　8．須弥山像・道祖神像出土地
9．飛鳥水落遺跡　10．飛鳥寺下層遺跡　11．飛鳥寺跡　12．飛鳥寺西方遺跡　13．飛鳥城跡　14．遺物散布地（14D-0278）　15．竹田遺跡　16．雷城跡
17．飛鳥小谷遺跡　18．小原宮ノウシロ遺跡　19．飛鳥東垣内遺跡　20．飛鳥池遺跡　21．飛鳥寺１号瓦窯跡　22．雷丘東方遺跡　23．酒船石遺跡
24：飛鳥宮跡　25．岡遺跡　26．川原寺跡　27．川原寺瓦窯跡　28．川原寺裏山遺跡

Fig. 5　大字飛鳥周辺の遺跡分布（『奈良県遺跡地図』より転記）　1：10,000

鳥寺下層遺跡」という名称で『奈良県遺跡地図』に登載されている。

昭和31・32年（1956・1957）の飛鳥寺第１次～第３次発掘調査では、その伽藍のうち中金堂と東金堂・西金堂、塔などが発掘され、一塔三金堂という朝鮮半島伝来の伽藍配置があきらかになった[11)]。これらの調査では南門に取り付く東西の築地塀の基底部と、西門の遺構も確認しており、寺域の南限と西限があきらかになっている。その後、昭和52年（1977）には安居院の北方約220mの地点において、北面の掘立柱塀SA500と、これに沿う外濠SD501・内濠SD503を検出した[12)]。次いで昭和57年（1982）には寺域の東北隅を確認し[13)]、飛鳥寺の寺域がほぼ確定した。現在のところ、寺域西北隅の遺構は未確認だが、その推定地は小字戒重田の水田西北部である。この地点は飛鳥寺西門前の南北道路と、『日本書紀』に登場する「飛鳥寺北路」（天武元年六月巳丑条）との交差点付近にあたる可能性があり、その西北側には農道の十字路を隔てて、小字

石神の水田が隣接している。昭和39年（1964）の発掘調査では、小字戒重田の西辺近くで「瓦破片の堆積」を確認した[14]ものの、西面大垣の遺構は検出していない。

飛鳥寺西方と西槻広場

飛鳥寺西門跡から飛鳥川右岸にかけての範囲を、飛鳥寺西方遺跡と呼ぶ。一帯は『日本書紀』に見える「飛鳥寺西槻」広場の推定地として、古くから注目されてきた。このため飛鳥寺西門前では、1960年代後半に奈良県立橿原考古学研究所が発掘調査（飛鳥京跡第11・18次調査）をおこなった[15]ほか、奈文研も個人住宅の改築等にともなう発掘調査を実施しており、飛鳥寺西面大垣の遺構と、寺域西限の関連遺構群を相次ぎ検出している。このうち、西門および西面大垣の西６ｍの位置で検出した石組大溝SD6685は７世紀後半のもの[16]で、飛鳥寺の西外濠にあたるとされたが、その下層で検出した南北の掘立柱塀や土管暗渠[17]は、それ以前の寺域西限か、あるいは西方遺跡の東限施設であると考えられた。

飛鳥寺西方では、明日香村教育委員会が継続的な発掘調査（平成21～29年度）を実施しており、この区域の全体像があきらかとなってきた。その成果によれば、飛鳥寺西門前が石敷広場として整備されたのは飛鳥時代後半になってからで、これが「飛鳥寺西槻」の広場にあたると考えられる。とくに入鹿首塚のすぐ西側にあたる上段地区の１・２区（平成24年度）では、敷石遺構SX14および砂利敷SX15を広範囲で検出し、砂利敷が樹枝状に欠落している部分（砂利敷欠落痕跡SX18）も確認している。この欠落部が西槻の樹根跡とすると[18]、飛鳥寺西門からは槻木が間近に望めたことになる。

飛鳥水落遺跡と漏刻台

小字石神の西側隣接地では、昭和47年（1972）に住宅新築の事前調査がおこなわれた。これは石造物出土地周辺に重要遺構の存在が予測されたためである。奈文研による発掘調査の結果、貼石遺構の西辺・南辺と、この貼石で囲まれた建物の遺構が検出された。この重要遺構の発見を受けて関係諸機関が協議をおこない、また土地所有者の協力も得て、当該地は昭和51年（1976）に「史跡　飛鳥水落遺跡」に指定された。昭和56年（1981）には史跡整備の目的で第２次調査をおこない、貼石遺構の中心部で礎石建の総柱建物SB200を検出した。そしてこの建物が、斉明６年に中大兄皇子が造ったとされる漏刻（水時計）の遺構であると推定されるにいたったのである。

漏刻の建屋にあたるSB200の中心部には漆塗の木箱が据えてあり、その基壇内には木樋暗渠や銅管も埋め込まれていた。これらは漏刻への給水と排水の機能をもち、余水はSB200から延びる小銅管や木樋によって、北側に位置する石神遺跡のほうへ導かれている[19]。飛鳥藤原第165次調査の調査成果[20]によれば、小銅管の据付溝SX275は水落遺跡第５次調査区の北端近くで二股に分かれ、一途はここでとぎれるが、木樋暗渠Ｅ（SD263）の埋設溝はさらに北へと延び、その続きは石神遺跡第11次調査区の北端付近で折れて西へと続いている。また、木樋暗渠Ｈは同遺跡の第10～12次調査区を縦貫し、さらに北へと延びていたことが判明している[21]。飛鳥時代中頃の水落遺跡と石神遺跡とは、飛鳥川から引き込んだ一連の給排水系に属していたことがあきらかとなった。

小墾田宮と雷丘東方遺跡

推古天皇の正宮である小墾田宮は、唐客の使主である裴世清が使の旨を奏し、新羅・任那の使人が朝庭に拝礼した宮殿として知られる。推古紀によれば、そこには南門・朝庭・庁・大門があり、南庭には須弥山形や呉橋が造られた。この宮殿の有力な候補地とされているのは、石神遺跡の北西側隣接地にあたる雷丘東方遺跡である。その第３次調査で検出した井戸SE01の

井戸枠内からは、埋土最下層を中心に９世紀代の土師器食器が出土した[22]。この中には「小治田宮」「小治宮」などと書かれた墨書土器が含まれており、奈良・平安時代の小治田宮が雷丘の東方に存在した有力な証拠とされている。民家新築にともなう第１次調査のときは、奈良時代後半から平安時代初頭に降る掘立柱建物群SB101・102・103等（Ⅱ・Ⅲ期）を検出しており、『続日本紀』に見える奈良時代の小治田宮・小治田岡本宮に関連する可能性を指摘している[23]が、飛鳥時代の小墾田宮に比定できる遺構群は未発見である。推古朝の小墾田宮はなおあきらかでないが、雷丘東方遺跡とその一帯に当てる説[24]が有力である。

小墾田宮石神東方説

そのいっぽうで、推古朝の小墾田宮は石神遺跡の東側に位置していたとする見方がある。相原嘉之は石神遺跡が、須弥山形を建てたとされる「小墾田宮の南」（『日本書紀』推古20年条）にあたるうえ、整地土からは鉄鏃などが多数出土することから、壬申の乱時の「小墾田兵庫」に関連する可能性があると考えた[25]。その後相原は、「古山田道」の北側に位置する（仮称）石神東方遺跡が、小墾田宮の最有力候補地であると考えるにいたった[26]。石神遺跡の東方区域は、2024年時点ではほぼ未調査の区域であるから、相原説の正否を問うことはまだできないが、調査の進展によっては、飛鳥時代の宮殿遺構が今後発見される可能性がある。

1）奈文研『飛鳥池報告　本文編〔Ⅰ〕』奈文研学報第71冊、2021年。
2）松永悦枝・谷澤亜里「石神遺跡東方の調査―第209・212次」『発掘調査報告2023』。
3）「大官大寺下層遺跡の縄文式土器」『藤原概報８』1978年、および加藤雅士「大官大寺の縄文土器（１）」『紀要2009』・石田由紀子「大官大寺の縄文土器（２）」『紀要2010』。
4）松永・谷澤、前掲註２）論文。
5）「山田道第２・３次調査」『藤原概報21』1991年。
6）西口壽生「古墳時代の飛鳥・藤原京地域」『あすか以前』飛鳥資料館図録第38冊、2002年。
7）「雷丘の調査―第139次」『紀要2006』。
8）「平吉遺跡の調査」『藤原概報８』1978年。
9）奈文研「飛鳥寺とその周辺地域の調査」『藤原概報15』1985年。
10）西口壽生「コラム　飛鳥地域の再開発直前の土器」『年報1999-Ⅱ』。
11）奈文研『飛鳥寺発掘調査報告』奈文研学報第５冊、1958年。
12）「飛鳥寺北方の調査」『藤原概報８』1978年。
13）「飛鳥寺および周辺地の調査」『藤原概報13』1983年。
14）奈良県立橿原考古学研究所『飛鳥京跡一』164頁、奈良県教育委員会、1971年。
15）奈良県立橿原考古学研究所『飛鳥京跡二』奈良県教育委員会、1980年。
16）「飛鳥寺の調査―1996-１次」『年報1997－Ⅱ』によると、SD6685の側石裏込土から出土した土器片から、その構築が７世紀後半に降るとされる。
17）「飛鳥寺の調査（1989－１・２・３次）」『藤原概報20』1990年。
18）明日香村教育委員会『飛鳥寺西方遺跡発掘調査報告書―飛鳥寺西槻の広場の調査―』2020年。
19）奈文研『藤原報告Ⅳ』奈文研学報第55冊、1995年。
20）「水落遺跡の調査―第165次」『紀要2011』。
21）「石神遺跡第12次調査」『藤原概報24』1994年。
22）明日香村教育委員会『雷丘東方遺跡第３次発掘調査概報』1988年。
23）奈文研『藤原報告Ⅲ』奈文研学報第37冊、1980年。
24）小澤 毅「飛鳥の朝廷」『古代国家の形成』史跡で読む日本の歴史３、吉川弘文館、2010年。
25）相原嘉之「小治田宮の土器」『瓦衣千年』1999年、森郁夫先生還暦記念論文集刊行会。
26）相原嘉之「飛鳥寺北方域の開発―７世紀前半の小墾田を中心として―」『橿原考古学研究所論集16』2013年。

第３節　遺跡観の形成過程と発掘史

大字飛鳥小字石神の水田で、異形の石造物が最初に出土したのは明治35年（1902）のことである。これらの石造物は人物像１石と、出土直後から「須弥山」と呼ばれた３石との４石からなり、明治37年（1904）には東京帝室博物館に寄贈された。その後、これらの石造物は帝室博物館の倉庫で長らく保管されることとなった[1)]。

石造物の発見届

石造物の出土時から寄贈までの経緯は、これらのうち３石の一時所有者であった森国松が届け出た３通の文書に詳しい。この人物は当時、飛鳥村の村長を務めた有力者であった。その彼が提出した「埋蔵物発見届」と「解説書」「保管受書」（明治36年６月22日付）は八木警察署宛で、石造物発見時の状況を報じるとともに、一号石・二号石の大きさや特徴を詳しく記している（本書　附篇参照）。これらによれば、辻本家が所有する水田の畦畔に露出していた石造物２個を森が買い取り、そのうえで掘り起こしたのが明治35年５月頃であったことが読みとれる。つまり須弥山石のうちの２石は、耕作時に偶然出土したのではなく、畦畔に露出していたのである。また、警察署への届出は出土の１年後であったことから、森家が一時、これら石造物のいくつかを所有していたことになる。

石造物の譲渡

小字石神出土の石造物は明治37年（1904）５月18日付で、石彫人物像は辻本宇吉、須弥山石は森国松から、奈良県経由で東京帝室博物館に譲渡された[2)]。辻本宇吉は小字石神の水田の所有者で、後年石田茂作に発掘調査を勧めることになった辻本定四郎の父にあたる。こうして一号石・二号石の所有者と出土地の所有者とが、機を同じくして石造物を帝室博物館に寄贈した経緯は、森が帝室博物館に提出した「上願書」の写しから推測できる。これは明治37年２月のもので、石２個が「客年御省ノ命ニ依リ差上置候処」とあるように、宮内省の命で献納することになったことがうかがえる。ただし、２石のうち１石は「当地ニ関係アル古石ナルヲ以テ土地ニ保存仕置度候間御下戻被下度候」と、その歴史的重要性に鑑み、返還を願い出ていたことも読みとれる。結局、石造物はこのとき返還されなかったものの、森は当地を「右石発見ノ場所ハ畏多クモ人皇十九代允恭天皇遠飛鳥宮ノ宮址」と考えており、石造物の出土地を顕彰し保存することも視野に入れていたようである。

飛鳥村長森国松

森国松が明治37年２月の「上願書」で、当地が「允恭天皇遠飛鳥宮ノ宮址」であると唐突に述べたのには、前年に森家を訪れていた高橋健自からの影響があったと考えられる。明治36年５月の雑誌『考古界』で、高橋は「遠飛鳥宮と飛鳥寺との舊址」という短文を発表している[3)]。その中で高橋は、「遠飛鳥宮」が大字飛鳥の北垣内付近に存在したと考えた。この見方は、北垣内とその周辺の「ナッテンヅカ」「ダイリヅカ」「ミカド」という地名と、南殿・内裏・御門とを関連付けた付会にすぎない。しかし、高橋が大字飛鳥の小字名について詳しく述べることができたのは、大字飛鳥在住の情報提供者がいたからである。遠飛鳥宮と飛鳥寺の伽藍構成について自説を開陳した高橋は、その末尾で次のように謝辞を述べている。「以上の調査に関して、飛鳥村長森氏が従来実地目撃せしところを話されしは、予が最益を得たるところなり」。これらの情報は、明治36年頃に森国松が、高橋健自に話したものであった。

高橋はその後、同年10月にも小字石神出土の石造物を図入りで詳しく紹介し、これらを初め

て「須弥山」、「石人」と称した[4]。この短文で重要なのは、その冒頭で石造物の出土と、それが森家に一時安置された経緯を詳しく述べていることである（本書　附篇参照）。その記事によれば、いわゆる須弥山石の出土は確かに明治35年で、学校増築（飛鳥小学校を指すか）のために水田畦畔に露出していた巨石を掘り出したところ、それが異形の石造物であったため、これらを森家の庭に一時安置していたことが読みとれる。ところが石人像は、高橋が甲・乙・丙號の各石を観覧した直後の、明治36年春以降に出土したようである。

高橋健自の須弥山説

小字石神の石造物は、出土直後に世間でさまざまな注目を浴びたようであるが、この時点でこれらを須弥山に見立てる学者がいた。高橋はその筆頭で、これらを「須弥山」と称したのは彼が最初であろう。高橋はこのときすでに、小字石神の地に関して、「この辺はもと允恭天皇の遠飛鳥宮の遺址に接すれども、予は之を斉明天皇の御時のものならむと推考せり」と述べ、斉明３年条の「作須弥山像於飛鳥寺西」、および同５年条の「甘檮丘東之川上造須弥山」の記事を引用している。要するに、斉明紀に見える都貨羅・蝦夷饗応の史実と、そのたびに造立した須弥山との関係に着目したのは、この高橋説が最初である。また同年、重田定一（東京帝室博物館）が辻本家を訪れ、小字石神出土の石造物を実見したところ、「その形状及発掘地より推考してその三箇は斉明天皇五年制作の須弥山なり」と確信したという。重田説もまた、先の高橋説と同じ誌上に掲載された[5]。ところがその後、小字石神の石造物に対しては、これらが須弥山ではなく、また斉明紀中に見えるものにも当たらないとする説[6]が登場し、重田説は論駁を受けることになった。石造物出土直後の、考古学界における須弥山論争についてはこれ以上詳しく述べないが、これら石造物は帝室博物館への移管後も正体が定かでないまま、収蔵庫の一隅に長らく放置されることとなったのである。

喜田貞吉と浄御原宮説

飛鳥小学校と、これに隣接する石神遺跡が飛鳥浄御原宮にあたると最初に説いたのは喜田貞吉である[7]。石神遺跡の発掘史を考えるとき、喜田説の影響は小さくない。ここでは飛鳥浄御原宮説がどのように成立したかをあきらかにしておこう。

享保年間の地誌『日本輿地通志』（通称『大和志』）は喜田説に先立ち、島庄の東南に位置する字上居（じょうご）を浄御原宮の推定地に当てており[8]、類書も同様の説を採る。これは「浄御」・「上居」の音通にちなむものだが、宮殿をはじめとする諸施設を建てるには「上居の如き山間狭隘の地」はふさわしくないと、喜田は考えた。さらに天武崩御のとき、「京城の耆老男女が皆来りて橋西に慟哭す」と書紀に見える（持統元年八月丁酉条）のに着目し、その場所が「実に大字飛鳥附近の平地」以外になく、浄御原宮が「必ず飛鳥雷間に設けられしもの」と断定した。そのうえで喜田が着目したのが、飛鳥と雷との中間に位置する飛鳥小学校である。喜田によると、飛鳥小学校の正面には豊浦へと通じる橋が架かっており、明治44年（1911）３月にはこの橋の西詰で偶然円形の石柱が出土したという。喜田はこの石柱を根拠に、「浄御原時代の橋の位置、亦ここを距る遠からざりしを疑はず」としたうえで、「飛鳥小学校の東に小字石神と称する地あり。先年異形なる石製の大遺物数個を発掘し、今現に東京帝室博物館にあり。其の附近に小字ミカドと称する地もあり。蓋宮城南門の地か。又、田畦の間狭小の芝地を存し、土人畏敬して敢て侵さざる処もあり。其の他付近には地中に並列せる巨石ありと伝えられたる処もありて、此の地が嘗て皇居の地たりしことを推測すべき数多の材料具備せるに似たり」と述べた（15〜16頁）。喜田の考定では、浄御原宮は「・・・・・飛鳥岡本宮の南にして、法興寺の北に当り、

今の豊浦より飛鳥に通ずる橋の東、即ち今の飛鳥小学校より其の東裏の地は、殯宮を起したる南庭に当るものなるべし。小学校敷地の地ならしの際、数多の素焼土器を掘り出したるも[9]、宮址と何等かの縁あるか」（17頁）という話になる。要するに喜田は、飛鳥浄御原宮は飛鳥小学校の東側、つまり現在の石神遺跡に所在していた、と考えたわけである。

中岡清一の発掘調査

しかし喜田説は、小字名や口碑を相互に関連づけ、恣意的に解釈することで成り立っており、発掘調査の成果をふまえたものではない。石神遺跡で初めて発掘調査をおこない、実際に遺構を確認したのは中岡清一である。中岡は吉野郡中荘村宮瀧（現・吉野町）の吉野離宮でおこなった発掘調査について講演したときに、飛鳥村の上田喜八郎から「飛鳥村にも石葺あり」との情報を得て、昭和４年（1929）８月に石敷遺構の確認を目的とした発掘調査を実施した[10]。これは石神遺跡とその周辺における最も古い発掘調査で、石舞台古墳の発掘調査（昭和８年）よりも古い。調査は飛鳥小学校の農業実習地（字唐木227）と、校舎東側の芋畑（字ハリワケ279）とでおこない、いずれでも「地下二尺乃至三尺」で石葺を確認したという。中岡説では、この石葺の広がりは水持ちのわるい水田の範囲に一致し、その面積は約6,000坪におよぶとした。その報告文の表題に見えるとおり、中岡は飛鳥小学校の付近一帯を「飛鳥浄見原宮址」と考えたのであった。

石葺の発見

現在、旧飛鳥小学校の敷地東北隅近くにある敷石遺構の露出展示は、中岡が唐木227に設けたトレンチのひとつである。いっぽう、ハリワケ279は奈文研がその第６次調査をおこなった水田にあたるが、中岡トレンチの正確な位置はわからない。

昭和11年（1936）５月25日からの２週間、石田茂作は小字石神の水田で発掘調査をおこなった。調査の経緯や経過は、石田の著作である『飛鳥随想』[11]に詳しい。石田によれば、この調査は小字石神の水田を所有する辻本定四郎から調査依頼を受け、石造物の性格をあきらかにするために実施したという。このときに重要なのは、小字石神の発掘を持ち掛けたのが帝室博物館側ではなく、石造物出土地の所有者のほうだったことである。石田は、石造物を屋外に陳列した「奈良時代出土品展覧会」の期間中に辻本が訪ねてきて、発掘調査をしてもらえないか打診されたと記している。辻本がいかなる意図のもと、小字石神の発掘を石田に勧めたかはあきらかでないが、いずれにせよこのとき、石造物をつうじた二人の交流が始まったと考えられる。

辻本定四郎

石田茂作の発掘調査

発掘調査は辻本定四郎が所有している水田において、石造物が出土したとされる西北部で掘り下げをおこない、まずは「川原石群」[12]を発見することから始まった。次いで、この川原石群の東側に掘り進めたところ、地表から約３尺の深さで「石敷」を確認した。ところが川原石群と石敷との間で石組の「溝」を発見したため、以後はこの石組溝に沿って南へと掘進し、さらに西へと掘り進んで石組溝の交差点を確認した。溝の発掘は北側の水田（小字石神282・283番地）にまでおよび、最後にはこの溝が東へと曲折する手前まで掘り進んでいる（Fig. 6）。

石田が発見した遺構のうち、川原石群の東方にある「石敷」はSB400南辺の石敷SX327（第１次調査）に、また「溝」はSD334・335・435およびSD330・331（第１・２次調査）にあたる。このほか、石田が「井戸」とみなし、奈文研の第１次調査でも井戸SE340と称した遺構は、その再調査（飛鳥藤原第214次調査）で東西掘立柱塀SA600東端の柱抜取穴であることが判明した。石田はこの大垣の柱穴を、図らずも発見していたわけである。

噴水塔説

石田茂作による小字石神の発掘調査は、斉明朝期の饗宴場説を生み出すことになった。石田

はいわゆる須弥山石を噴水塔とみなし、自らは須弥山説を採らないが、「斉明天皇五年条に「甲午甘橿丘東之川上造二須弥山一而饗三陸奥与二越蝦夷一」とあるのは、地理的にも遺蹟的にもこの飛鳥小字石神の地点をあててまず誤らないであろう」（『飛鳥随想』165頁）とも述べている。また、この調査に同行した帝室博物館館員の矢島恭介は、発見した石組溝と石造物とを関連づけつつ、「それは単なる須弥山ではなくてここは饗宴場であって、その会場の景物として作られた噴水塔の様なものであり、饗宴の会場は曲水の酒宴に擬して作られた造園であり、人物像は即ちその酒席にあって歓楽の興を添えるバッカスの神であったのではあるまいか」と述べた[13]。斉明朝の饗宴場説は、こうして成立したのである。それは喜田らの飛鳥浄御原宮説とはまったく異なる、新しい遺跡の見方であった。

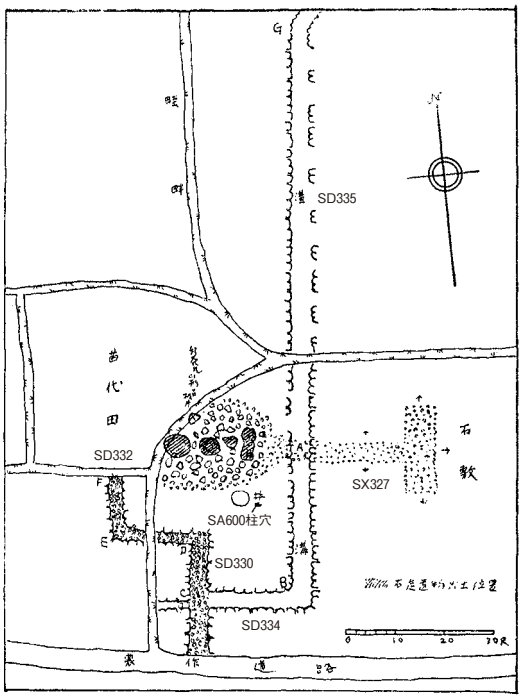


Fig. 6　1936年調査の実測図（『飛鳥随想』掲載図に加筆）

矢島恭介の饗宴場説

大字飛鳥の辻本佳央氏宅には、昭和11年の発掘調査時に撮影された調査参加者の記念写真が伝存している（Ph.1）。発掘調査に帯同した写真技師が撮影したものであろう。人物群の背景には、昭和11年当時の景観が写っている。彼らの背後には、まだ「すすき」が点在し、田植えもしていない６月初旬頃の水田が広がっている。遠景の左手には雷丘の樹叢と民家が、中央右寄りには小山の森が写り、その右手には耳成山が霞んで見える。現地にて写真の背景との照合を試みたところ、撮影地点は小字石神287番地（現・飛鳥287番地）の西北隅付近と推定できた。この場所は、明治35・36年に石造物が出土した地点である。したがってこの写真は、石造物出土地付近に調査参加者が集合し、北西向きで撮影されたものと推測できる。写真右下隅に写るトレンチの脇には掘り上げた土を盛り、北側の畦畔には掘り出した石を並べている。写真右下に写る人物の足元にある掘り込みが、石田のいう「川原石群」と「溝の遺構」、それに須弥山遺蹟東方の「石敷」を確認した東西方向のトレンチに当たると考えられる。

辻本家の古写真

この写真に写っているのは17名の男性で、発掘調査に協力した村民とみられる[14]。このうち、左から３人目で眼鏡をかけた人物と、右端の人物とは他と雰囲気が異なるうえ、帽子の意匠が同じ（黒縁で２本線がめぐる）であることから、東京帝室博物館の館員とみられる。左の人物が石田茂作で、右端の人物が矢島恭介と推定できる。また、写真には横書きで、「石神　歴史の研究事業」と読めるペン字の書入れがある。おそらく、石田が書き込んだものであろう。

残念ながら撮影から90年近くを経た今、辻本定四郎がどの人物であるか、すでに特定できなくなっている。このことを知る機会は、すでに失われたのであろう。しかし、石田の発掘調査はこの人物が勧めたものであるし、調査の遂行には村民の協力があったこともうかがえる。辻本と石田との関係は、石造物出土時の高橋健自と森国松との関係によく似ている。小字石神の

石造物をめぐっては、飛鳥村の村民と、東京の学者との交流が世代を超えて継承されているのが興味深い。石造物の保存や出土地の発掘調査に関して、飛鳥村民が果たした役割はとても大きい。

網干善教の調査

石神遺跡に再び、発掘調査の鍬が入ったのは戦後のことである。『飛鳥京跡二』[15]では、飛鳥小学校付近でおこなった予備調査の記事が見えている（164頁）。その報文からは、飛鳥小学校の北側を「北方遺構」と仮称し、その発掘調査をおこなったことと、その契機が昭和35年（1960）の小学校改築時におこなった事前調査で検出した「敷石遺構」であったことが読みとれる。この一文によると、中岡清一が飛鳥小学校の北側で発見した「敷石状の遺構」の一部を、昭和35年調査でも再確認していたことになる。ところがこのときの発掘調査が部分的であったため、「今回は新しく飛鳥小学校の東側で三本のトレンチを設定し、遺跡の予察を行なうことにした」とある。これが網干善教による、昭和39年（1964）の発掘調査である。

調査範囲は「飛鳥小学校校舎のすぐ東側の位置よりほぼ東西方向に長さ五〇米の東西方向のトレンチ」であったが、敷石遺構は確認できなかった。しかし「地表下七、八十糎下には焼土が一面にあり、そのなかには須恵器、土師器が混在」していたといい、「やはり宮跡関係の遺構があるもの」と考えている。飛鳥小学校のすぐ東側は、奈文研が実施した第５次調査の調査範囲にあたる。その調査日誌によれば、耕作土を除去し終えた時点で、1985年７月16日から同月22日にかけて、調査区を東西に横断する「網干トレンチ」を確認している。このトレンチはTDからTFラインにかけての６ｍ幅で東西に延び、日誌記事からは３ヵ所に深掘区を設けていたことがうかがえる[16]。なお、小学校東側に設けたもうひとつのトレンチは第７次調査地にあったが、その検出状況は日誌ではほぼわからない。

網干善教の発掘調査は、さらに石造物出土地の東南方にもおよんでいる。調査地は小字戒重田（飛鳥298）の水田で、石神第１次調査地の東南に位置する。「かつて須弥山石並びに同祖神像が出土した字石神の東南の位置にあたるところに南北方向に幅約五米、長さ三〇米のトレンチを設定し」、このときは「瓦破片の堆積が多くみられ」たという。

浄御原宮説のその後

昭和４年の小規模調査で確認されていた飛鳥小学校北側の「石葺」は、その一部が今も露出展示されており[17]、奈文研の第１次調査時にも参考にされた形跡がある。また第２次調査のときも、SX327に連なる石敷SX359を、当座は「天武朝敷石」と考えていたことが当時の日誌からうかがえる（５月25日日誌記事）。喜田や中岡の飛鳥浄御原宮説は、奈文研の発掘調査においても、遺構の解釈にある種の先入観を与えることがあった。

さらにその後、第７次調査（1987・1988）時には、「露出保存されている石敷（飛鳥浄御原宮推定地）」を西区と称し、石敷の清掃と実測調査とをあわせて実施している。その概要報告で、これは石敷SX1310として再報告され、Ａ３期の石敷であるSX1270とは一連のものとしている。SX1270は第６次調査で検出した四面庇建物SB1100の北石敷SX1105と一体とされ、これもＡ３期の遺構とされる（『藤原概報18』58頁、1988年）。つまり、中岡が発見した石敷SX1310は天武朝まで降らず、この時点では斉明朝頃の遺構とされたのである。現在では、石敷が見つかったから浄御原宮という論法は採用されないが、喜田や中岡の浄御原宮説は、1980年代まで影響力を有していたことになる。

奈文研が小字石神の水田を再発掘することにした動機は、①そこが須弥山像・石人像の出土

地で、斉明紀に見える須弥山造立記事との関連性がうかがえること、②喜田貞吉以来、ここが飛鳥浄御原宮に推定されてきたことにくわえ、③中ツ道と壬申の乱時の「飛鳥寺北路」との交差点が遺跡の東南部に想定されるようになったことの、以上３点である（『藤原概報12』1982年）。しかし発掘調査が年ごとに進むにつれ、浄御原宮のことはほとんど語られなくなり、「飛鳥浄御原宮推定地の調査」という触れ込みも、『藤原概報』では第３次調査から見られなくなる。

「斉明朝の饗宴施設」説へと傾斜を強める代わりに、「飛鳥浄御原宮」説の追究が先細りになった背景には、奈良県立橿原考古学研究所がおこなった飛鳥京跡の発掘調査と、『飛鳥京跡』の刊行があると思われる。末永雅雄がややためらいつつも、伝飛鳥板葺宮跡の上層遺構が浄御原宮であった可能性に触れてから[18]、その推定地は岡周辺と、小字石神周辺との２ヵ所になった。しかし奈文研の継続的な発掘調査によっても、飛鳥浄御原宮の宮殿遺構は結局見つからなかった。石神遺跡を飛鳥浄御原宮に当てる説は、今では旧説というべきであろう。

新たな遺跡観

斉明朝期の饗宴施設、または迎賓館という印象がすでに定着した石神遺跡であるが、そのＢ期の建物遺構を「小墾田兵庫」に当てる説がある。この施設は壬申の乱時に、近江方の穂積臣百足が拠とした武器庫で、『日本書記』天武元年六月巳丑条に見える。

上述のとおり、相原嘉之は石神遺跡の整地土から鉄鏃多数が出土していることも加味し、総柱建物が小墾田兵庫にあたる可能性を指摘した[19]。その後相原は、小墾田兵庫が壬申の乱の関連記事に見えることから、Ｂ期建物群が672年時点で存在していたとも考えている[20]。総柱建物が小墾田兵庫であったかはさておき、遺跡周辺にこの施設が存在していたことが強く想起されるわけである。

このほか、石神遺跡の変遷や構造を独自に検討した結果、Ａ期遺構群は饗宴施設ではなく、中大兄皇子の皇子宮であったと考えた重見泰の説[21]がある。この仮説によれば、石神遺跡出土の新羅土器や東国系土師器（黒色土器）は、Ａ期遺構群が斉明朝の饗宴施設である根拠になりえない、という。確かに近年、石神遺跡で出土した東北系黒色土器は飛鳥Ⅳ・Ⅴの土器に伴出していることがあきらかとなり、斉明朝にではなく、飛鳥浄御原宮期以降に東北地方から持ち込まれた可能性が高い[22]。したがって重見が指摘したように、東国系土師器は饗宴施設の証拠にはならない。しかしこの説も、奈文研の刊行物でこれまでに公表された遺構変遷案に基づくものであるから、遺構変遷の見直しや、出土遺物の再検討をふまえた案ではない。饗宴施設説に対する異論として、その意義は認めるものの、皇子宮説は必ず正否が問われるであろう。

学説史の総括

ここまで縷々述べてきたように、石造物出土時から現在にいたるまでの間、石神遺跡の性格に関する学説が次々に生まれ、場合によってはこれらの融合によって、確固たるイメージが醸成されてきた。このうち、最も影響力があったのが「斉明朝の饗宴場」説である。これは石田茂作の噴水塔説を下敷にしつつ、矢島恭介が初めて唱えた学説であるが、じつは高橋健自らの須弥山説とも融合しており、石神遺跡全体を説明するための総合説となった。したがって、奈文研がこれまで踏襲してきた「斉明朝の饗宴施設」説は、高橋らの須弥山説からと、石田・矢島の饗宴場説からの強い影響下において、発掘調査の成果を全体的に解釈するために形成されたのである。およそ120年分の学説史をふまえると、石神遺跡のイメージがどのようにつくられてきたかがよくわかる。しかしこのイメージが、石神遺跡を説明するための唯一のものであるかは、なお検討の余地があろう。

1）石田茂作「飛鳥の須弥山遺跡」『飛鳥随想』学生社、1972年。
2）矢島恭介「飛鳥の須弥山と石彫人物について」『国華』58-12、1949年。
3）高橋健自「遠飛鳥宮と飛鳥寺との舊址」『考古界』２-12、1903年。
4）高橋健自「飛鳥発見の石製遺物」『考古界』３－５、1903年。
5）重田定一「飛鳥京の須弥山」『考古界』３－５、1903年。
6）長井 行「博山香炉と飛鳥遺物」『考古界』３－８、1904年。
7）喜田貞吉「飛鳥の京（下の下）」『歴史地理』12-５、1912年。
8）奈良県史料刊行会編『大和名所和歌集　大和志　日本惣国風土記』奈良県史料第３巻、1978年。同書に収録した「日本輿地通志」畿内部巻第二十四　大和国之十四高市郡では、「飛鳥浄見原宮」を上居村に比定している（同書429頁）。
9）「小学校敷地の地ならしの際、数多の素焼土器を掘り出したる」とあるのは、その東側隣接地である第３次調査地から第７次調査地までの土層に対比すると、「含炭褐色土」と呼ばれた一連の褐色系土に相当する可能性が高い。この土層からはおもに飛鳥Ⅳに属する、膨大な量の土器が出土している。
10）中岡清一「飛鳥浄見原宮ノ一部発掘ニ就テ＝宮瀧ニ於ケル吉野離宮トノ関係明瞭トナラン＝」1929年。
11）石田、前掲註１）論文。
12）飛鳥287番地における最近の再調査（飛鳥藤原第214次調査）にとれば、この「川原石群」は古代の遺構ではなく、石田の発掘で露出した基底礫層であった可能性が高い。
13）矢島、前掲註２）論文。
14）この写真に写っている人物を特定するために、2022・2023年に大字飛鳥にて多少の聴き取り調査をおこなったが、撮影時からすでに86年が経過しており、特定できた人物は一部にかぎられた。
15）奈良県立橿原考古学研究所『飛鳥京跡二』奈良県教育委員会、1980年。
16）奈文研の地区割にしたがえば、深掘区はTD・TE25区、TD・TE28区とTD・TE33区の３ヵ所。これらの深掘区は「乱れた石敷」まで既掘であったが、『飛鳥京跡二』では「敷石遺構」を確認できなかったとしている。また「地表下七、八十糎下」で確認した焼土は、第５次調査時の「含炭褐色土」にあたるか。
17）昭和４年の発掘調査のとき、小学校の農業実習地で見つかった「石葺」は、昭和10年（1935）の時点でもまだ露出状態であったらしく、そのことが田村吉永の論文に書かれている。田村吉永「斉明紀に見ゆる石上池に就いて」『大和志』２－１、1935年。
18）前掲註15)。前後の文脈は省略するが、その「むすび」において、「現在飛鳥板蓋宮伝承地として調査を進めている」遺跡が、「将来あるいは飛鳥浄御原宮と判定しなければならない」可能性に触れている（同書、374頁）。
19）相原嘉之「小治田宮の土器」『瓦衣千年』1999年、森郁夫先生還暦記念論文集刊行会。
20）相原嘉之「飛鳥古京の攻防―壬申紀にみる小墾田兵庫と留守司―」『琵琶湖と地域文化』林博通先生退任紀年論集、2011年。
21）重見 泰「石神遺跡の再検討」『考古学雑誌』91-１、2007年。
22）土橋明梨紗「石神遺跡出土の東北系黒色土器―石神遺跡第３～８・11次ほか」『紀要2020』。

第Ⅲ章　調　　査

第１節　測量と地区割

調査区の設定

石神遺跡第１～４次調査は、いずれも既存畦畔で区画された水田を調査範囲とした。そのため調査区は不整形を呈する。第１次調査区は畦畔を挟んで南北２ヵ所に分かれ、南区は東西約35.5m、南北約25m、北区は東西約27.5m、南北約9.0mを調査範囲とし、調査面積はあわせて936㎡である。第２次調査区は第１次調査区の北区とも一部重複して、東西約42m、南北約40mを調査範囲とし、調査面積は1,182㎡（新規発掘部分は1,126㎡）である。第３次調査区は畦畔を挟んで第１次調査区の西隣に設定し、調査範囲は東西約55m、南北約30mで、面積は1,423㎡である。第４次調査区は第３次調査区の畦畔を挟んで北隣の水田に設定し、調査範囲は東西約54m、南北約30mで、調査面積は1,456㎡である。石神遺跡1990-１次調査は、第２次調査区北隣の水田に位置し、調査範囲は東西9.0m、南北5.0mで、調査面積は45㎡である。石神遺跡1996-１次調査は、第１・２次調査区のすぐ東側に南北に分けて調査区を設定し、北区は東西約1.2m、南北約7.2m、南区は東西約1.4m、南北約9.4mとし、調査面積は計21.8㎡である。第１次調査区の再発掘である飛鳥藤原第214次調査（以降、214次調査）は、第１次調査区の主に西半を中心に調査区を設定し、調査範囲は東西約20m、南北約23mで、面積は335㎡である。

測地系

2002年４月１日の改正測量法の施行を受け、2003年度から当研究所の発掘調査は日本測地系から世界測地系に移行した。本書で報告する各調査のうち、第214次調査を除いて、いずれも日本測地系に基づいて測量をおこなった。日本測地系から世界測地系への改算は、飛鳥藤原地域の座標変位量である、Ｘ座標＋346.5m、Ｙ座標－261.6mを日本測地系の値にそれぞれ加えれば可能となる[1)]。また標高は、東京湾平均海面を基準とする海抜高であらわす。なお、本書内の本文中挿図（Fig.）および巻末図版（PLAN）の座標数値は日本測地系で表示し、丸括弧内に世界測地系の数値を示した。

Tab. 1　調査基準点一覧

調査次数	大・中地区	基準点	測地系	基準点	Ｘ座標	Ｙ座標	標高(m)	備考
石神１次	6AMD-U	№30・40	日本測地系	№30	-168,580.700	-16,334.040	—	1989年改測値に基づく再測、現在滅失
				№40	-168,579.470	-16,136.750	99.461	1989年改測値に基づく再測
石神２次	6AMD-U	№31・49	日本測地系	№31	-168,895.827	-16,415.481	101.030	1988年改測、四等三角点
石神３次	6AMD-U	№31・49	日本測地系	№49	-168,881.932	-16,334.140	102.780	旧座標値の補正値
石神４次	6AMD-U	№31・49	日本測地系					
1990-1次	6AMD-T	№29・31	日本測地系	№29	-168,575.081	-16,304.955	98.491	1988年改測
1996-1次	5AMD-U	№31・明日香村№04	日本測地系	明日香村№04	-168,983.283	-16,416.749	98.495	1996年奈文研改測による数値
第214次	5AMD-U	№31	世界測地系	№31	-168,549.309	-16,677.042	101.030	1988年改測、四等三角点

基準点測量　発掘調査では、調査区の近傍に平面座標および水準の基準点が必要なため、基本的には調査ごとに数点の基準点を設定している。第214次調査を除く、各調査で設定した基準点は、平面直角座標系第Ⅵ系（日本測地系）に基づいている。これら基準点を設定するにあたり、基準点測量の元となった測量点・水準点をTab. 1 に示す。第１次調査の基準点測量では、1972年11月に設置の基準点・水準点No.30（現在は滅失）を起点として、1973年２月設置のNo.40につなぐ結合トラバースによって基準点を設定した。この測量時にはNo.31（四等三角点）およびNo.49（第１次調査区東南隅の仮設点）を接点とした。第２次調査では、先述のNo.49を起点、No.31を後視点とした開放トラバースによって、調査区西北隅に基準点を設置した。第３・４次調査ではNo.31およびNo.49を用いた三角測量によって、各調査区の中央北端に基準点を設置した。第１～４次調査の標高はいずれもNo.31からの直接水準移動による。

石神遺跡1990-１次調査では、第９次調査東辺に設置した基準点（1980年に設置した基準点・水準点No.29を起点、No.31を後視点とする開放トラバースにより設置）を起点とし、No.49を後視点とする開放トラバースによって、調査区西に基準点を設置した。標高はNo.49からの直接水準移動による。

石神遺跡1996-１次調査では、No.31を起点、明日香村設置の基準点No.04（1995年設置、座標値は1996年の奈文研改測値を使用）を後視点とした開放トラバースによって、直接調査区の四隅を設定した。標高はNo.31からの直接水準移動による。

第214次調査では、GNSS測量機を用いたネットワーク型RTK法で調査区を設定した[2)]。標高はNo.31からの直接水準移動による。

なお、1988年12月におこなった三級基準点および水準点測量で、それまで使用していた座標値のいくつかに誤差があることが判明した。上記の基準点No.29およびNo.30・No.40もこれに該当し、調査時に作成した図面類の座標にも補正を加える必要が生じ、本書で報告する各図版の座標値は補正を加えた数値である。具体的には第１～４次調査では、X座標の数値を－0.1m補正しており（絶対値としては0.1mを加算）、Y座標および標高については、実用上支障をきたすような誤差はなく、補正を加えていない。石神遺跡1990-１次調査ではX座標に＋0.5m、Y座標に＋0.2m（いずれも絶対値としては減算）し、標高の補正は必要ない。また石神遺跡1996-１次調査は座標・標高ともに補正対象外である。

地　区　割　奈文研では1993年度末まで、条里制の遺存畦畔を基準とする地区割（以下、旧地区割と呼ぶ）によって調査をおこなってきた。本書で報告する第１～４次調査および石神遺跡1990-１次もこの旧地区割によって調査地区を設定している（Fig. 7）。旧地区割では約125m四方の条里畦畔の区画（１坪）を基本単位とし、南北３坪、東西６坪からなる計18坪分（南北約375m、東西約630m）を大地区として設定する。大地区名は、時代を示す数字１文字、遺跡の種別をあらわすアルファベット１文字、遺跡名／位置をあらわすアルファベット２文字の計４文字で表記する。この大地区を東西方向に３分割、南北方向に６～８分割した区画が中地区である。中地区には東北隅から順にアルファベットを付す。そして中地区をさらに３m間隔で分割した区画を小地区とする。小地区名は中地区のうち東南隅となる区画を起点のA01とし、北へアルファベットを、西へ数字を順に付す。以上を原則としつつ、実際には調査ごとに調査区の位置や形状に合わせて中地区を拡大して適用するなど、柔軟な運用をおこなってきた。そのため、特に

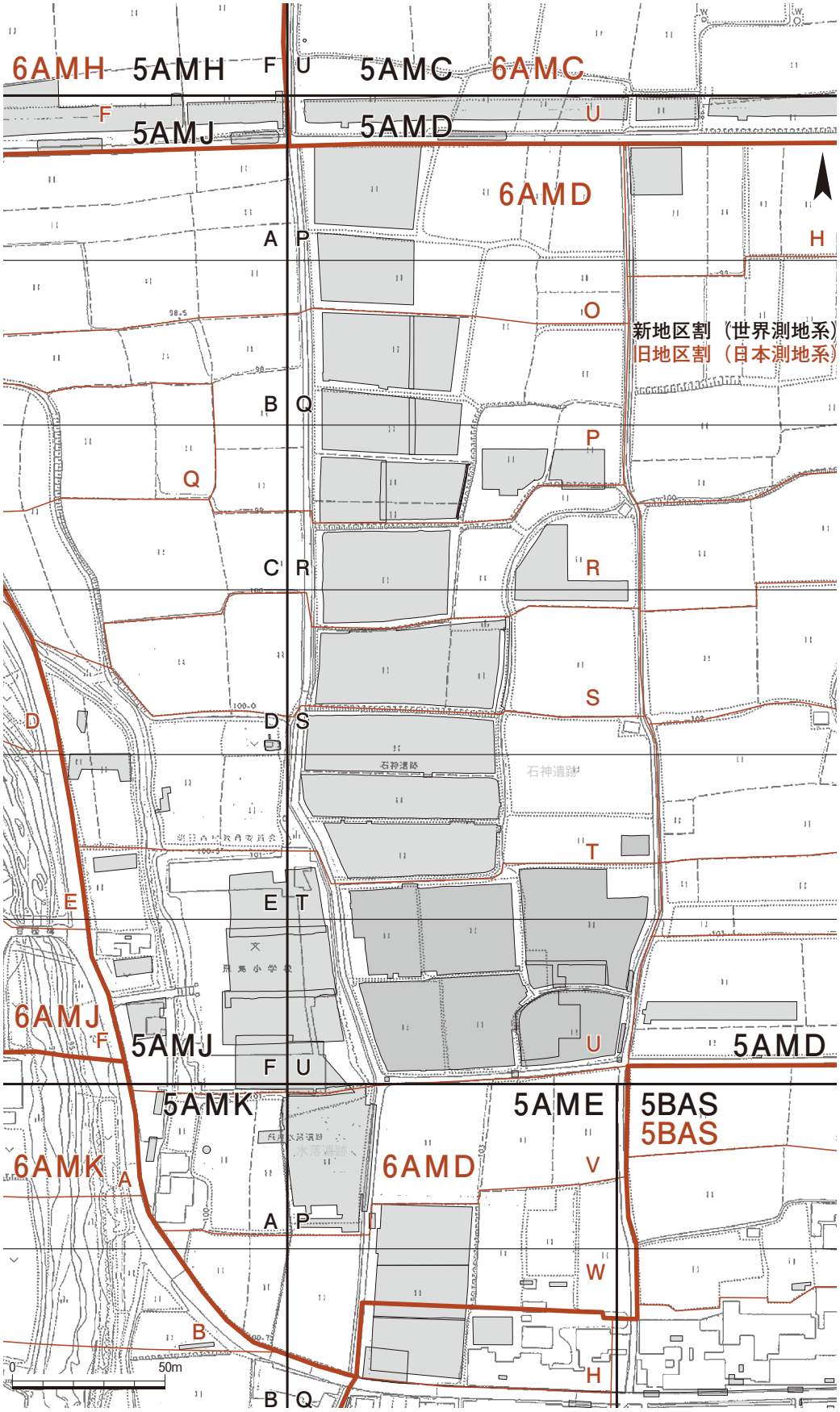


Fig. 7　石神遺跡大・中地区割図　1：2,000

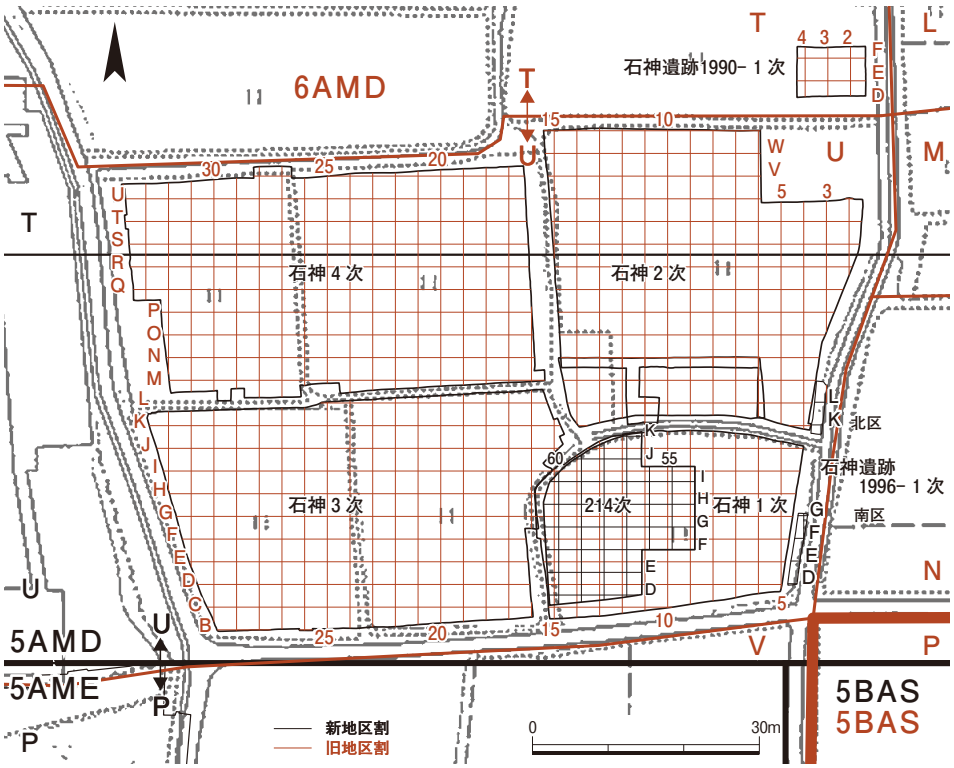


Fig. 8　第１～４次調査区周辺の地区割　1：1,000

調査区境界では、隣接する地区名が必ずしも一致せず注意を要する。

1994年度からは上記の旧地区割を廃止し、平面直角座標系（日本測地系）第Ⅵ系（原点：北緯36°、東経136°）に基づく新地区割に移行した[3)]。地区の規模や配列は概ね旧来のものを踏襲しつつ、新地区割では平面直角座標系によって地区境界を定め、規格的なものとした。大地区は東西672m、南北324m、中地区は大地区を18分割した区画で、東西222mまたは228m、南北54mである。小地区は旧来の規模と同じく３m四方とする一方、東南隅の小地区名称をA10に改めた。2002年の世界測地系への移行の際には、両座標系に基づく方眼にずれが生じ、日本測地系に基づく小地区の東南隅の点から南へ1.5m、東へ0.6m移動した別の点に、世界測地系に基づく同名の小地区東南隅が設定されることとなった。なお、石神遺跡1996－１次（日本測地系）および第214次調査（世界測地系）は新地区割で調査をおこなっている。

本書で報告する第１～４次および石神遺跡1990－１次調査区の旧地区割、石神遺跡1996－１次および第214次調査区の新地区割をFig. 8 に示す。旧地区割における第１～４次調査区の大地区－中地区は6AMD-U、石神遺跡1990－１次は6AMD-T、新地区割における石神遺跡1996－１次および飛鳥藤原第214次調査区は5AMD-Uである。

１）詳細については、内田和伸・小澤 毅・金井 健「測量法改正（世界測地系導入）に伴う測量業務の対応」（『紀要2005』22-23頁）を参照されたい。

２）奈文研でのGNSS測量機を用いたネットワーク型RTK法の導入と座標補正に関する検証については、「発掘調査におけるGNSS測量と座標補正について」（『発掘調査報告2023』例言）を参照されたい。

３）奈文研「飛鳥・藤原地域における地区設定基準の改定」『藤原概報24』1994年。

第２節　調査の概要

Tab. 2　調査一覧

調査次数	調査地区	地番	調査期間	調査面積
石神第１次	6AMD-U	飛鳥287番地	1981．9．3 ～ 1982．1.30	936.0㎡
石神第２次	6AMD-U	飛鳥282・283番地	1982．4.21 ～ 1982.10.23	1,182.0㎡
石神第３次	6AMD-U	飛鳥285-1・286-1番地	1983．7.18 ～ 1984．2.20	1,423.0㎡
石神第４次	6AMD-U	飛鳥284-1番地	1984．7．9 ～ 1985．5．7	1,456.0㎡
石神遺跡1990-１次	6AMD-T	飛鳥281番地	1991．1.28 ～ 1991．2.15	45.0㎡
石神遺跡1996-１次	5AMD-U		1996.12．2 ～ 1996.12．3	21.8㎡
飛鳥藤原第214次	5AMD-U	飛鳥287番地	2023.12．6 ～ 2024．3.15	335.0㎡

A　第１次調査

奈文研による石神遺跡の発掘調査は、旧飛鳥小学校の東側に位置する小字石神の水田から始まった。この地は明治35・36年（1902・1903）に石造物が出土したことで知られ、昭和11年（1936）には石田茂作がその出土地付近の発掘調査をおこなっている。いっぽう、飛鳥小学校とその周辺を「浄見原宮」に当てる喜田貞吉の学説以来、一帯を飛鳥浄御原宮の推定地とする見方は根強く残っていた。奈文研による発掘調査でも、第２次調査までは「飛鳥浄御原宮推定地の調査」とされており（『藤原概報12』『同13』[1]）、石神遺跡とその周辺を飛鳥浄御原宮の推定地に当てるという学説を強く意識したものであった。

ところが昭和40年代以降、石神遺跡の近隣で発掘調査が進むにつれ、遺跡の見方は大きく変化することになる。まず、昭和47年（1972）には飛鳥小学校の南側で貼石に囲まれた大規模な礎石建物が見つかり、昭和51年（1976）には飛鳥水落遺跡として国史跡に指定された。また、昭和52年（1977）の発掘調査で飛鳥寺の北面大垣が確認されたことを受け、小字石神が飛鳥寺西門の前を通る中ツ道と、壬申の乱の記事に登場する「飛鳥寺北路」との交差点付近にあたると想定されたことから、新たな視点による全面的な調査が必要になったという（『藤原概報12』55頁）。そこで第１次調査では、石造物が出土した水田の全域とその北側の水田（282・283番地）において、昭和11年の発掘調査を再確認することが主要な目的とされた。なお、「石神遺跡」という遺跡名称は、昭和57年当時は小字石神の水田に因んだ仮称にすぎなかったが、第３次調査以降は遺跡の名称として定着しており、『奈良県遺跡地図』では「石神遺跡（14D-0028）」および「須弥山像・道祖神像出土地（14D-0029）」として登載されている。

第１次調査では石田茂作による発掘調査の輪郭と、彼が発見した「石敷広場」および石組溝とを再確認し、所期の目的を果たすとともに、飛鳥時代の掘立柱建物SB301・SB325、東西塀SA311、南北溝SD321および東西溝SD322などを検出した。調査区の東半では、平安時代の土坑SK320、古墳時代の竪穴建物SI315、弥生時代の土坑SK304・306等を同一面で検出している。調査の結果、石田が発見した石組溝はSD330・331およびSD334・335として再認識され、「７世紀前半～中葉の遺構」とされたのに対し、石敷SX327は７世紀後半の遺構で、SD335等を埋め立てた後に敷設していることが判明した。つまりこの時点で、調査区西半の遺構は層位的に区別できることが知られ、Ａ期（７世紀前半～中頃）とＢ期（７世紀後半）とに大別されることとなった。ただし、SX327は掘立柱建物SB400の南石敷であることが第２次調査で判明するが、

このときはその柱穴を認識していない。また、第１次調査では東西大溝SD347を検出していなかったが、東側隣接地の発掘調査（飛鳥藤原第209次）で見つかった東西溝SD4610がこれに当たると考えられる。したがって、SD347・4610は石神遺跡の東方から延びてきて第１次調査区を横断し、その西側で北へ曲折する大溝であることが近年確定した。

このほか、床土面から掘り込んだ穴の底で、花崗岩石造物の痕跡SX344・350を確認したことで、明治35年の石造物出土地点を２ヵ所で特定している。

B　第２次調査

石神遺跡の第２次調査は、前年度における第１次調査のすぐ北側の水田で実施した。第１次調査の範囲を超えて北へと延びる石組溝SD335を追跡するために、この水田が選定されたものと考えられる。発掘調査の結果、７世紀代の遺構を検出し、これらを古いほうからＡ期とＢ期とに大別した。Ａ期の遺構（７世紀前半～中頃）にはSD335・435と石組小溝SD490、素掘溝SD365・500、掘立柱建物SB450、礫敷SX430等が、Ｂ期の遺構（７世紀後半）には掘立柱建物SB400とこれを取り巻く石敷SX359・370・401、石敷の縁石SX358等がある。

７世紀後半の南北棟であるSB400は南北６間×東西３間で、その南端が前年度の第１次調査区にかかることが判明したため、一部を再発掘して柱穴を確認している。その結果、石田茂作が最初に発見した「川原石群の東方の石敷広場」は、SB400南辺の石敷SX327にあたることが新たに判明した。

SB400等の下層では、Ａ期の基幹水路であるSD335が曲折してSD435となり、さらに東へと延びていることが判明した。また、この石組溝と併存するのがSB450と石敷SX370である。これらの遺構群は黄灰色の整地土に覆われ、Ｂ期の建物SB400を取り巻く石敷SX370・401等の下位に埋没していたことがあきらかとなった。こうした層位的な検出事例から、石神遺跡では７世紀中頃までの建物や溝が廃絶したのち、それまでの土地利用を一変させる大改作がおこなわれたことを再確認した。なお、第２次調査では、石田茂作のトレンチ調査が石組溝SD335を追跡するかたちで、飛鳥282・283番地の水田まで延びていたことを確認した。このためSD335は、その大部分がすでに発掘済であったが、SD335の未発掘部とSD435からは７世紀前半の土器が出土している。

このほか、おもに調査区の東半で弥生時代・古墳時代の土坑群を検出したほか、調査区中央部から西半にかけて平安時代の掘立柱建物SB440・459、塀SA420と、中世の掘立柱建物SB460、塀SA461・462等も検出している。

C　第３次調査

第１・２次調査では、７世紀中頃の遺構と後半のそれらとが重複していることが判明し、７世紀後半には大規模な整地をともなう大改作をおこなっていたことがあきらかとなった。またこの頃、奈文研では石造物が「この付近に設けられた園池的施設に関連するもの」と考えており[2)]、その園池的施設、ないしは「饗宴施設」の存在を第１・２次調査地の西方に想定していたことと、さらには隣接する水落遺跡との関係をあきらかにする必要から、第３次調査は第１次調査地のすぐ西側に位置する水田において実施することとなった。

調査の結果、７世紀前半から中頃の遺構として東西塀SA600、掘立柱建物SB530・620、石組溝SD331・332・333・522、石敷SX526・550・700等と、７世紀後半の遺構として東西塀SA560・581、掘立柱建物SB510・520・580、方形石組遺構SX540等、そして７世紀末頃の掘立柱塀SA610・622・670、井戸SE650、東西大溝SD347および南北大溝SD640ほか多数の土坑を検出した。これらのうち、とりわけ重要なのはSA600である。この掘立柱塀は立柱後に基壇を築成し、基壇縁に化粧石を並べたもので、柱掘形は一辺1.8m前後と大きく、柱間寸法も広い。そこで調査時には、SA600の規模や構造から見て、これより南側が水落遺跡の区画に属し、北側が石造物の出土地を含む饗宴の場に関連した施設にあたると考えられた。また、この区画塀を踏襲した掘立柱塀SA560と、第１次調査で検出していたSA305とは柱筋が一致していることから一連の塀であるとされ、その検出総長は約80mにおよぶとされた。

このほか、調査区東半で検出した東西溝SD605と東西大溝SD347は、北へ折れてそれぞれ南北溝SD621・南北大溝SD640となり、さらに北へと延びていることが判明した。

このように第３次調査では、石神遺跡の南限を画する大垣の発見という重要な成果が上がった。しかしその一方で、飛鳥京跡（飛鳥板蓋宮推定地）の上層遺構を飛鳥浄御原宮に当てる説[3)]を考慮したためか、石神遺跡を「飛鳥浄御原宮推定地」と呼ぶことはなくなり、その発掘調査も斉明朝における「饗宴施設」の性格究明が主目的となっていった。

D　第４次調査

前年度の第３次調査におけるSA600の発見により、「饗宴地区」の南限が確定したことを受け、以後の発掘調査は第９次調査（平成２年度）まで、水田を１枚ずつ北上してゆくかたちで進行することとなった。第４次調査は第３次調査区北側の水田において、「饗宴地区」に属する各時期の遺構確認と、それらの実態究明とを目的として実施された。

調査の結果、７世紀中頃の掘立柱建物SB745・750・810・811、井戸SE800、石組溝SD332・730等と、７世紀後半の建物SB735・736・820およびSB742・770、掘立柱塀SA670・775およびSA732・751、そして「藤原宮期」の建物SB830、塀SA780・781、南北溝SD621および南北大溝SD640などを検出した。このうち、調査区の北端近くで検出したSE800は石敷と側石とをともなう井戸で、その東西には大型建物SB750とSB810とを配していることから、饗宴地区の重要遺構と認識された。井戸枠内出土土器は当初、飛鳥Ⅲに属するとされたが、その後の検討では飛鳥Ⅰから同Ⅲまでの土器を含むと考えられるようになった[4)]。また、第４次調査ではＣ期（藤原宮期）の整地土である「含炭褐色土」と、Ａ－２期の整地土である「山土を含む灰褐色土」が部分的に残存していた（『藤原概報15』55頁）。第１次調査からの層位的知見を総合すると、石神遺跡では少なくとも２度にわたり、大規模な整地をともなう改作がおこなわれたことが、すでに知られていたのである。

Ａ期～Ｃ期の時期区分

第４次調査からは、検出した遺構群を古い順からＡ期～Ｃ期に大別し、Ａ期を３小期（Ａ－１・Ａ－２・Ａ－３期の各期）に細分するという時期区分を採用した。この枠組はその後も修正を受けつつ、第21次調査まで受け継がれた。ただし、第４次調査時はＡ－１・Ａ－２期を斉明朝、Ａ－３期を天武朝に当てたが、その後の区分案ではＡ期を斉明朝、Ｂ期を天武朝に変更している。

E　石神遺跡1990-１次調査

農小屋新築にともなう事前調査として、平成３年（1991）に実施した。調査地は第２次調査区の北側にある水田の東端である。調査の結果、黄褐色砂質土の上面において、７世紀中頃の東西掘立柱塀SA1460・1465、東西溝SD1461などを検出した。このうち、東西塀SA1465は第２次調査で検出した石組溝SD435の約８ｍ北に位置し、調査区外へと東西に延びている。その北側に位置するSA1460とあわせ、石神遺跡東南部の区画施設と考えられる。

F　石神遺跡1996-１次調査

農道の補修工事にともなう事前調査として、平成９年（1996）に実施した。調査地は第１・２次調査地のすぐ東側で、北区と南区とに分かれているが、顕著な遺構は検出できなかった。

G　飛鳥藤原第214次調査

この発掘調査は本書の執筆陣からなる調査班が、本書を刊行するために立案した、第１次調査区の再発掘調査である。

前述のとおり、第３次調査では石神遺跡の南限とみられる東西掘立柱塀SA600と、その後身の区画施設であるSA560を新たに検出するなど、大きな成果を挙げた。ところが、その東側隣接地にあたる第１次調査区ではSA600の柱穴列を検出していなかったため、石神遺跡の範囲を確定するために、この南面大垣を新たに確認する必要が生じていた。近年、本書の作成業務を進めるなかで、この課題の解決が急務となったことから、令和５年度に土地所有者をはじめとする地元のご理解を得たうえで、再発掘に着手した。調査区はSA600等の確認に必要な範囲を中心とし、第１次調査区の西半分をおもな調査対象とした。

調査の結果、SA600が石組溝SD335の手前で北へと折れていることを確認し、その曲折点が７世紀前半における石神遺跡の東南隅にあたることが確定した。その角にある柱穴は、かつて石田茂作が「井戸」とみなし、第１次調査時にSE340と称したもので、すでに掘り抜かれた部分は柱抜取穴にあたる。SA600は併存するSD335出土土器の年代観（令和５年時点）に基づき、皇極朝以前に遡ることとなり、A-３期遺構群よりも古い段階の区画施設であると考えられるようになった。これにくわえて、SA600の曲折点にあたる柱穴から東へと延びる東西塀SA4645と、これを付け替えたとみられるSA560も新たに検出し、７世紀前半における石神遺跡の区画が、第１次調査区の東側へと拡張されていたこともあきらかとなった。なお、これらの柱穴が第１次調査時に検出できなかったのは、流路NR310の堆積物である灰色砂礫が広く残存していたためであることも、この調査であきらかになっている。

第214次調査は、報告書作成の過程で気付かれた課題をよく検討し、綿密な計画のもとで実施した再調査であり、石神遺跡の時期区分や遺構変遷を見直すための重要な契機となった。

１）第１次調査は、隣接している水落遺跡第２次調査（1981年９月～12月）とは同時に進行していた。
２）『藤原概報13』1983年、19頁を参照。
３）奈良県立橿原考古学研究所『飛鳥京跡二』奈良県教育委員会、1971年。
４）西口壽生「石神遺跡SE800出土土器の再検討」『年報1997-Ⅰ』。

第３節　調査日誌抄

以下の調査日誌抄は、石神第１～４次調査と石神遺跡1990-１次調査・飛鳥藤原第214次調査の抄録である。第１～４次調査の日誌抄では、調査時の日々の解釈をなるべくそのまま載せた。しかし第209次・第214次調査により、第４次調査以前の遺構・層位に関する認識を見直し、そのときに付与した遺構番号を修正する必要が生じている。また、当時の日誌では同じ土層や遺構の表記揺れが少なくない。そこで以下、読解の参考とすべく、記事の一部に注釈を付すこととした。

A　第１次調査　1981年９月３日～1982年１月30日

9.3　発電機設置し、コンベヤ設置ののち東から耕作土の除去開始（06ラインまで）。
9.4　07ラインまで耕作土を除去。午後は降雨のため中止。
9.5　09ラインまで耕作土を除去。
9.7　13ラインまで耕作土の除去を進める。フェンス設置。
9.8　耕作土の除去完了。床土を半スコ掘り下げ、西端から「石田トレンチ」の検出開始。Gラインに東西畦を、10ラインに南北畦を設定。
9.9　西から床土除去に着手するが、降雨で中止。
9.10　床土を半スコ掘り下げて石田トレンチを検出（12ラインまで）。床土は黄味の強い灰褐色土だが、石田トレンチ埋戻土は茶味のある灰褐色土で小礫・砂を含んでいる。
9.11　床土の除去と石田トレンチの検出を東へと進める。予想以上に方々を掘っている。南北トレンチでは石組溝SD335の側石天端にあたる。
9.12　雨天中止。１：200の現況図と『飛鳥随想』に掲出の実測図とを比較したところ、SD335の長さなどが一致せず。石田氏の図は調査後に作図か。
9.14　08ラインまで石田トレンチの検出。UH・UI08区でトレンチ底まで掘り下げ、SX327を確認。
9.16　石田トレンチの検出了。部長より石田氏の発掘調査過程を復元してはとのお言葉あり。「石田茂作・矢島恭介両氏の発掘トレンチ図」を作成。（日誌裏に「昭和11年調査記念写真」貼付あり）
9.17　東から「暗褐土」の除去を開始。Hラインの南側では、暗褐土の下位でバラス層の広がりを確認。バラス層から奈良時代の土馬が出土。
9.18　08ラインまで暗褐土を除去。黒色土器や灰釉陶器が出土し、10世紀の土層とみる。南半では暗褐色砂礫を除去。10世紀の灰釉陶器皿が出土。
9.19　09ラインまで暗褐土の除去を進める。北半は砂が多く、南半は粘土質になる。
9.21　11ラインまで暗褐土を除去。暗褐土からは羽釜・土師器獣脚出土。
9.22　12ラインまで暗褐土を除去し、「暗灰褐土」を出してゆく。暗褐土下層から瓦器・黒色土器出土。
9.24　12ライン沿いの石田トレンチ（南北方向）を掘り下げ。調査区北端のSD335を掘り下げたところ、溝の直上を敷石（SX370）が覆うことを確認し、両者に時期差があるのはあきらか。
9.25　東西畦の北側で石田トレンチ掘り下げ、南側では暗褐土除去。
9.28　東西畦の北側で石田トレンチ掘り下げ、石を多く埋め込んでいる。南側では12・13ライン付近において、暗灰褐土上面で耕作溝を検出する。
9.29　13ラインの西側で石田トレンチを掘り下げ。埋戻土に石多し。石田トレンチの外側では暗灰褐土上面で遺構検出。
9.30　14ラインの西側で石田トレンチ掘り下げ、石組溝SD330・331を検出。また本日より、西端から暗灰褐土の掘り下げにかかる。
10.1　12ラインまで暗灰褐土の除去。東西畦の南側では粗砂面を出す。暗灰褐土直下の石敷SX370はSD335側石より上位（UJ12区）。Hライン沿いの石田トレンチで石敷SX327を確認。
10.2　SD335の側石天端を出す。東西畦の北では石田が確認した石敷SX327の再検出。南では14ライン以西で暗灰褐土を除去し、石敷を精査。
10.3　東西畦の南では石田トレンチ掘り下げ。北側でも同じ作業。
10.5　東西畦の北では14ライン以西で石田トレンチ掘り下げ。南では石組溝SD330の埋戻土を除去。SD330・331は底石あり、SD333は底が一段高く底石あり、SD334は底石なし。
10.6　SD334・335で埋戻土除去。14ライン以東の石敷を覆う暗灰褐土からは９・10世紀の黒色土器が出土。
10.7　東西畦の北側でSD335を完掘。これより東では10ラインまで、暗灰褐土とその直下の「黄褐土」を除去して石敷SX327を検出。

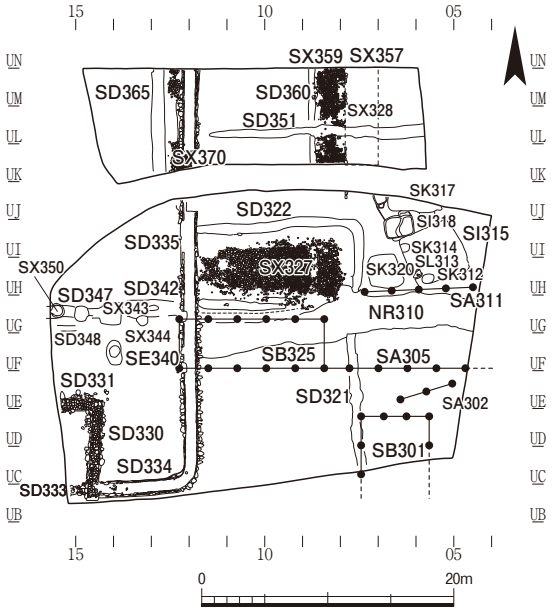


Fig. 9　**第１次調査　北区・南区**　1：600

10.12　東西畦の北側で黄褐土を除去し、石敷精査（SX327）。南側でも暗灰褐土を除去。

10.13　引き続き暗灰褐土・黄褐土を除去して石敷SX327検出。石敷上面の土層は「バラス層」（10月28日以降の「１礫」）の下に潜り込むことが判明。

10.14　東西畦の北側でSX327検出。南では暗灰褐土を除去して検出した礫面が、黄褐土の下に潜ること[1]を南北畦で確認。礫面は石敷SX327より古く、河川堆積の可能性がある。

10.15　東西畦の北側では、08ラインの西でSX327の東端を確認。UJ08区では石敷直上層から平安時代の黒色土器等出土。南側では暗灰褐土を外して粗砂・礫面を検出。

10.16　06ラインまで遺構検出進めるも、午後は雨天中止。

10.17　UH05区でカマド跡らしきものを確認、５世紀の甑１個体が出土。竪穴建物があるらしい（SI315）。南側では暗灰褐土を除去し、礫面の検出作業を続ける。

10.19　東西畦の北側では暗灰褐土の途中で竪穴建物SI315を検出するも、全形はまだあきらかでない。南側では06ライン付近で砂礫層Ⅰが途切れ、黄褐粘土の上面を削り精査。

10.20　東西畦・南北畦の土層図作成。作業員は水落遺跡に投入（20・21日）。

10.28　Kラインの北側に北区を設定し耕作土を除去（以後、これまでの調査区を南区とする）。南区では東端から、黄褐土上面でSI315の輪郭を検出。同区南半の礫層は「１礫」[2]と称して遺物取り上げ。

10.29　（北区）耕作土を除去し終え、北半で床土の除去にかかる。床土は薄く、その直下は暗灰褐土。東端では耕作溝の検出を開始。

10.30　（北区）床土の除去が完了し、暗灰褐土上面で耕作溝を検出。（南区）SI315の掘り下げ。SB301の柱穴４基を検出。東北大研修旅行一行、伊達宗泰氏、原島礼二氏来跡。

10.31　（南区）UH06区にて土坑SK320を検出、９世紀の土器が出土。07ラインの西側・Fラインの南側では１礫を除去。文化庁中野氏来跡。

11.2　（南区）Gラインの南側で１礫を除去し、南北畦を撤去。畦畔の暗褐土から緑釉陶器が出土。

11.4　（南区）07ライン付近で南北溝SD321を検出。Gライン付近の流路NR310より古い。埋土は細砂で礫を含む。NR310では最上層の暗褐土（粘土）を除去する。UF06区で帯金具片が出土。

11.5　（南区）SD321の続きを検出し、Jラインで西へと折れることを確認（SD322）。Gライン沿いでNR310上層の暗褐粘土を除去したところ、中央に深い東西溝を検出（SD326）。また、08ラインからSD335にかけて１礫を除去し、東西溝SD323・324を検出した。Fラインに小柱穴４基が並ぶ。

11.6　（南区）SD335の西側で１礫を除去し、SD335の側石上面に高さを揃える。UG15区の土坑を掘り下げ、須弥山石の痕跡を発見。剝がれた石がモナカ状に残る（SX350）。土坑は明治35年掘り出し時のものと思われる。

11.7　（南区）SD335の西側において１礫の除去と、石田トレンチ掘り上げ。EF13区の深掘りは石田図面の「井戸」にあたるか。UG15区の須弥山石抜取穴の底を精査し、略図作成。午後、飛鳥資料館の須弥山石と比較し、第１石上端の圧痕と判明。

11.9　（南区）SD335の東側ではFライン沿いでSA305柱掘方を検出。GラインでSD342の延長を検出し掘り下げ。須弥山石の「据付痕跡」は当初のそれにあらず、その周囲に古い抜取穴らしき穴も検出。南北溝SD365と、東西溝SD322を検出。

11.10　（南区）UG13区に「石人像」の痕跡あり、「抜取穴」で遺物取り上げ。SD326の南側で黄褐粘土粒を含む柱穴４基を検出[3]、西端の１基はSD335の西側石を壊している。UE05区では弥生時代の土坑SK304・SK306を検出。

11.11　（南区）SI315を掘り下げ床面精査。SK320

1）この「黄褐土」はSX327の上面を覆っていた土層で、平安時代に降るもの。その下位に潜る「礫面」は、10月19日以降の「砂礫層Ⅰ」や「１礫」の上面を指すか。

2）「１礫」は第１次調査区の南半に分布していた灰色の砂礫層である。日誌では10月28日から11月７日にかけて除去しているが、このときには完除できておらず、まだ残ったままであった。

3）この柱穴４基は、第214次調査ではSA4646として再認識した。

では土馬が、NR310では奈良時代の土器が出土。SA305柱穴検出。

11.12（南区）SK320掘り下げ。SA311の柱穴およびSB301の柱穴を検出。後者は梁行３間・桁行２間以上となる。15時に記者発表。

11.13（北区）12-13ラインで石田トレンチを掘り下げ。SD335西側石を検出し、東側石を探る。南区北端と同様に、SD335が石敷に覆われることを確認。（南区）清掃と現地説明会の準備。SI315の火処は作り付けのカマドと判明。SK320断ち割り。

11.14　現地説明会。説明は西口がおこなう。北区では石田トレンチ内でSD335の側石を検出。

11.16（北区）13ラインの西側で床土より掘り込む「バラス土坑」を検出。石敷SX359と「段石」（SX358）も検出。その東側はバラス多く（SX357）、薄い黄色粘土に覆われている。石敷面で検出した東西溝SD351は南北溝SD360より新しく、SX359を壊している。（南区）石組溝の写真撮影。

11.17（北区）SD351完掘。石敷SX359の東辺にてSX358と、バラス敷SX357を検出。SD335の未掘部分（Mライン以南）を掘り下げ。埋土は上層の「埋土」と、下層の「粗砂」「柔土（ニコ土）」とに分かれる。飛鳥Ⅰ・Ⅱの土器が少量出土。SD360と「バラス土坑」掘り下げ。

11.18（北区）UM06区の斜行溝SD355を完掘、方形周溝墓の周溝か。Mライン以北では砂混じり粘土上面で遺構検出をおこない、石敷SX370を除去しSD335を完掘。文化庁牛川氏・河原氏ら、水落遺跡整備の件で来跡。

11.19　08ラインから西側へ清掃。空撮用の標定点を設定し、全景写真撮影。

11.20　空撮。11時20分に飛来し12時に終了。午後、SD335を南から撮影。

11.21　遣り方設定。

11.24　遣り方の杭打ち。貫板も打ち始める（北区はH=101.80m・南区はH=102.10m）。

11.25　遣り方の基準線振り込み作業。

11.26　遣り方設定、北区も完了。

11.27　雨天中止。

11.28　北区から実測開始。

11.30　平面実測作業。

12.1　北区にて平面実測作業（未完）。

12.2（北区）平面実測とレベル記入。SD335の西側で掘り下げ。平安時代の土器を含む暗灰褐土を剝がしてバラスを検出する。（南区）平面実測。

12.3（北区）平面実測。13ラインの南北溝SD365をバラス面で検出。埋土には炭・鉱滓・鞴羽口と、７世紀代の土器を含む。（南区）平面実測、東半は石敷をのぞき完了。

12.4（北区）黄灰褐土を除去し柱穴を探す。その下位に小バラスの面（SX430）を確認。（南区）レベル記入、石敷をのぞき了。八木充氏来跡。

12.5（北区）SD365掘り下げ、埋土から鉱滓・土器出土。08-12ライン間ではバラス面SX430を出す。（南区）流路NR310埋土を完全に除去、奈良時代中頃の土器出土[4]。

12.7（北区）茶灰褐色粘土の柱穴多く検出すれど建物にはならず。SD365は完掘。（南区）NR310埋土を除去し、東西塀SA311柱穴・土坑SK306を検出。SK304など弥生時代の土坑を完掘。

12.8（北区）バラス敷SX357を除去。（南区）SK320では炭入り粘土より飾金具出土。NR310の砂礫層を除去し、SA311が西へと延びてゆく。

12.9（北区）UL08区・UM07区でSX357・SX358断ち割り。（南区）SI315内の貯蔵穴を完掘し、製塩土器が出土。SA305・SB325柱穴を断ち割り。弥生時代の土坑SK308完掘。

12.10（北区）SX357断割平面図、SD335断面図等作成。（南区）12ライン西側で遺構検出。NR310埋土を除去し、道祖神像（石人像）の「当たり」と見えた石の痕跡を検出。

12.11（北区）遣り方を外し、中央および西側の埋め戻し。（南区）西壁・北壁土層図の作成。SD330・SD335の掘方探しと、SD330北端にて断ち割り。

12.12（南区）昨日までに断ち割った遺構の平面図・断面図作成。実測作業ほぼ完了。

12.14（南区）石組溝掘方の実測と、SB325柱穴の断面図作成。

12.15（南区）引き続き、石組溝掘方の実測。北壁土層図のほかはほぼ完了。

12.16（南区）水落遺跡、急を告ぐ。よって北壁土層図の作成を後回しにして水落遺跡へ。作業員は埋め戻し急ぐ（埋め戻しは12.25まで）。

12.24（南区）秋山氏らによる「須弥山石」痕跡の型取り。

12.25（南区）「須弥山石」痕跡の型取り完了。型の取り上げ後に下層を調査し、東西溝が続くことを確認（SD347）。北壁土層図を描き始める。

12.26（南区）北壁土層図、描き直しのうえ完了。これにて調査終了。以後、埋め戻し。

1.29　埋め戻し完了。

1.30　機材撤去完了。

4）第１次調査ではNR310（調査時にはSD310）埋土を完除したというが、これは誤り。第214次（令和５年度）では、その掘り残しを「灰色砂礫」として掘り下げたところ、やはり奈良時代の土器が出土している（本書Fig.60）。

B　第２次調査　1982年４月21日～1982年10月23日

4.21　９時より調査開始のあいさつ。来賓として村教育長・村会議長ら参列。部長挨拶・調査員紹介。10時より作業開始、東からコンベア並べる。

4.22～25　耕作土除去。この間に地区杭打ちと現水田面のレベル測定。

4.26　西側から床土除去を開始。13ライン付近に中世のバラス群が見え始める。

4.27　12ラインでSD335を確認した石田トレンチを検出。

4.28　床土除去が10ラインまで進む。12ラインの石田トレンチは半スコ掘り下げておく。

4.30　床土除去は08ラインまで。

5.4　床土除去が04ライン付近まで進む。NHKヘリ空撮。

5.6　床土除去が完了。東端から遺構検出にかかる。中世から現代までの耕作溝多し。

5.7　昨夜の雨で大洪水。排水と耕作溝の検出。

5.8　06ラインまで耕作溝を検出。

5.11　10ラインまで耕作溝を検出。西南部の中世石溜で清掃開始。

5.12　耕作溝の検出、12ラインまで。

5.13　中世石溜の清掃了、写真撮影。

5.14　雨天中止。

5.15　石田トレンチ、SD335側石の上面が出る深さまで掘り下げ。

5.17　検出作業、調査区北半は西端まで到達。南半では中世バラス溜を断ち割り。

5.18　中世バラス土坑でバラスを除去。NHK撮影＆新聞記者来跡。

5.19　東端より遺構検出を開始。UL05区で弥生時代（第Ⅰ様式）の土坑SK383を検出。

5.20　SK383にて撮影・遺物取り上げ。SD351を検出。

5.21　埋土にバラスを含む土坑SK409・SK412や井戸SE410、羽釜片を含む溝SD397等を検出し掘り下げ。

5.22　遺構検出は07ラインの手前まで進む。

5.24　遺構検出は08ラインまで。調査区東北隅付近にて石組溝を検出（SD435）、SD335が東折したものか。ほかにSK453やSD391（古墳時代）を検出し掘り下げ。

5.25　09ラインまで遺構検出。08ラインの西側では一段掘り下げて石敷SX359を検出し、東に戻って段差・見切石（SX358）を探す。

5.26　昨日に続き07・08ラインで遺構検出。東西畦の北側では中世の攪乱が広範囲におよぶが、南側では７世紀後半の石敷SX359がきれいに出る。

5.27　遺構検出は10ラインまで進む。SX359は西へ曲がっている模様（SX401）。石敷で囲われた部分が建物となるか。石組溝SD435は砂層上面まで掘り下げ、上部は「バラス」、下部は「埋土」で取り上げ。小野山節先生・井川史子氏来跡。

5.28　遺構検出は11ラインまで進む。UQ09区にて石敷SX401を検出。東海テレビ撮影あり。

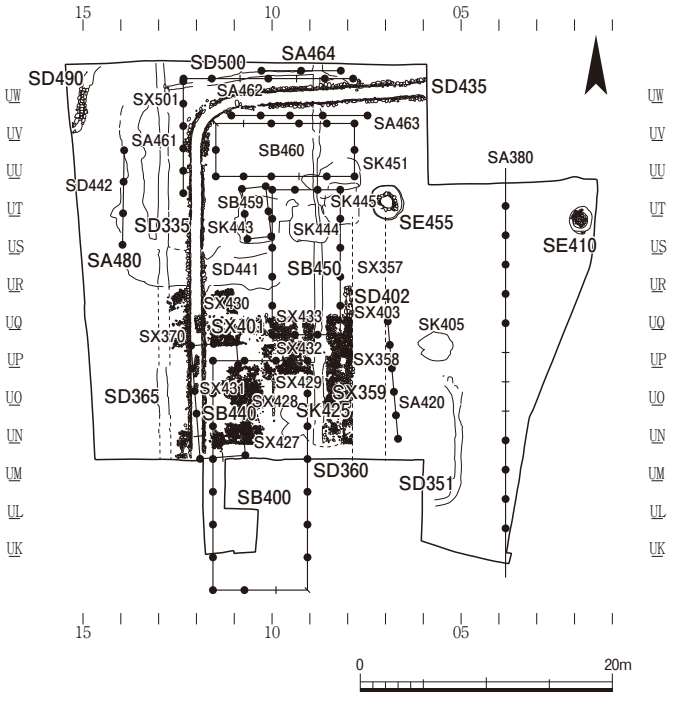


Fig. 10　第２次調査　1：600

5.29　09-11ライン間で遺構検出。UW10区にてSD435の続きを検出。
5.31　09-12ライン間で遺構検出。UW11区にてSD435が南に折れる。SD335は、東西畦の南側では上層石敷SX370に覆われるため完掘できず。王仲珠氏ご一行来跡。
6.1　昨夜の大雨のため、午前中は作業不能。ポンプ５台で排水。T-Uライン付近でSD335の東側石を検出。
6.2　SD335・435の検出と掘り下げ。溝内堆積土を順次除去。Vラインの断面観察より、上位からバラス・埋土・砂層１・ニコ土１・砂層２・ニコ土２の順で遺物取り上げ。
6.3　雨後のため遺構検出はせず、西端の中世包含層を除去。南北畦の土層図作成。
6.4　南北畦の南半を除去。上層石敷撮影のため南半を清掃。SD335の西側で中世の溝などを検出。14時に石敷を撮影。
6.5　Sラインの南側・14ラインの西側でバラス集積を検出。床土直下で見えていたもの。
6.7　石組溝上面の石敷実測了。東西畦の土層図作成にかかる。Sラインの北側（13ライン沿い）では、砂質バラス上面で南北溝SD365を検出。
6.8　東西畦西半の土層図は測了。石組溝の撮影と実測作業。本日、水落遺跡の記者発表。
6.9　調査区西北部にて石組溝SD490を検出。７世紀代で底石あり。
6.10　田植えのため作業員激減。遺構検出は西端から東へ進み、SD335は完掘。埋土から瑪瑙製垂飾が出土。Wライン付近で南北溝SD365の断面観察。整地土（バラス混粗砂・黄褐土混じりの灰褐粘質土[5]）から掘り込み、埋土はニコ土。
6.11　南北畦の撤去開始。天武朝石敷下のバラスもある程度目地が通り、計画的なバラス敷（SX430を指すか）とみられる。UW12区で東西溝SD500を検出。
6.12　ガソリンエンジン不調のため作業はかどらず。SD335・435の曲折部付近で複数のピットを検出。南北畦の撤去続ける。
6.14　SD500にて７世紀の土器多数出土。
6.15　US・UT08区付近に大土坑SK445あり、落ち込んだ石は撮影後に撤去。SD500は08ライン以東で不明瞭。
6.16　（この日、07ラインの東側で遺構検出）
6.17　記者発表。空撮用の標定点設置。調査区東南部のバラス土坑からは瓦器片などが出土。
6.18　UP05区の「祭祀土坑」SK405にて、６世紀前半までの土師器高杯が多数出土。礫とともに投入した状況を見せる。UQ04・05区の「竪穴住居」（SK404）ははっきりせず。
6.19　14時に指導委員来跡。15時から現地説明会。
6.21　UQ05区の土坑SK404で５世紀後半の須恵器出土。空撮に向けて石組溝・石敷等の清掃。
6.22　全景写真撮影。
6.23　弥生時代・古墳時代土坑SK404・405等の精査。空撮用基準杭の設置。
6.24　13時に空撮。その後遣り方設定。水糸高はH=101.600m。
6.25　水糸を配り、実測作業開始。
6.26・28　実測作業。
6.29　調査区東部の実測作業終了。昼からSK405・SK406およびSD385を掘り下げ。
6.30　実測作業終了。SK405・SD385の断面図作成と写真撮影。
7.1　調査区東南部でバラス土坑掘り下げ。弥生時代の土坑SK404・405・406で写真撮影。
7.5　UT01区の土坑掘り下げ。井戸の可能性があるので全体を掘り下げることにした。
7.6　UT01区の土坑は、深さ1.5mで石組を確認し井戸と判明（SE410）。深さ2.2mで曲物を確認。出土土器から13・14世紀の井戸か。
7.8　平面実測続く。SE410の実測と写真撮影。
7.9　SE410を完掘し、補足実測。壁面で弥生時代の土坑SK408を確認。
7.10　SK408を完掘し土器取り上げ。
7.12　UT07・08区にてバラス入の円形土坑を確認。井戸か（SE455）。
7.13　SE455で石組を確認。
7.14　SE455の掘り下げ続く。大石の除去にチェーンブロックを使用。
7.15　SE455完掘。底には礫層があるだけで曲物なし。東半分の埋め戻しほぼ完了。
7.16　SE455にて写真撮影。午後は雨天中止。
7.17　終日、排水作業。
7.20　SE455の北側で精査。全体に中世の土層が残り、これを除去して遺構検出。RラインでSD335断ち割り。SD335の西側では、砂層の整地土が上層石敷の下にあり、その下面でSD335の掘形が見える。断割の南側で黒灰色粘土の土坑SK486を検出。
7.21　UV08・09区で柱穴を検出。UV10区のSD435掘形を壊す柱穴と並ぶものと思われる（SA464）。UU08区で土坑検出。UU07区で確認のため断ち割り。
7.22　UU07区で土坑SK454検出。遺物多く６世紀後半か。

5）この整地土は７月20日以降の日誌に散見される「砂層の整地土」、あるいは「黄灰色土」と同一の土層を指している。

7.23　Vラインの南側で09ラインの西側に大きな「よごれ」あり。その下位で柱穴状の穴２基を検出。
7.26　UT08・09区で東西３間×南北２間以上の建物柱穴を検出（SB450）。北側柱の東から２基目はSD335・435にともなう可能性がある。柱穴埋土は黄灰褐色粘土で、下層の建物か。
7.27　SK454にて６世紀の土器出土。Sラインの南側では南北溝SD360掘り下げ。UP08区付近で検出した柱穴２基はSB450の南側柱列となり、上層石敷SX401の下層にあると確定。
7.28　下層建物SB450の検出続く。UO10区付近の黄灰色砂質土は整地土か。10ラインの西では、平安時代の建物SB440を再検出。
7.29　SB450の検出を南へと進める。Qラインの北で整地土を除去して下層石敷を追求。その上には黄灰色土（整地土）を介して上層石敷が載る部分がある。
7.30　石敷SX401の南側で礫がない部分に大柱穴４基あり（SB400）。これらは「砂の整地土」の上面で検出でき、SD335の掘形方を壊している。SK425を完掘し、東側の柱穴を探すことにする。
7.31　UN08・09区にてSK425を掘り下げ。UQ11区の黒灰色土坑は北半を掘り下げ。午後から台風10号接近し、翌日にかけて大雨。
8.1〜8.4　大雨で調査区冠水。甘樫橋の北で飛鳥川が氾濫し、道路流失。雷橋も流失。8.2に排水するも再び大雨、8.3は終日排水（大雨洪水警報）。8.4も終日排水。
8.5　雨後の全体清掃。SK425を再検出し、その底で柱穴を探す。下層石敷の土層観察畦は、もはや作図できないくらい傷んでいるので撤去する。
8.6　SB450の南側柱列を確認し、３×５間と判明。SB400は昨年の調査区まで延びる模様。
8.7　11時に記者発表（木下・西口）。現地説明会以後の新知見について。SB450・SB400および下層石敷SX430の写真撮影。SB400を確認するため、昨年度の調査区を再発掘することとし、11ラインの西側で耕作土を除去。
8.9　第１次調査地の再発掘区（南拡張区）では床土除去終わり、遺構検出にかかる。11ラインでSB400の大柱穴３基を検出。粘土の柱穴は柱抜取穴と判明。
8.10　南拡張区を水路際まで拡張し、SB400西側柱の６間目を検出。妻柱もその一部を確認。
8.11　SD335の西側でSA480柱穴の断割調査。南北溝SD365を断面で検出したが遺物ほとんどなし。UN12区では、整地土（砂）がSD335の側石まで続くことを確認した（日誌裏にSD335・SD365・整地土等の層位関係模式図あり）。
8.12　SB400・SB450の柱穴断ち割りと実測作業。
8.13　SB450の写真撮影と実測作業。
8.17　SB450の南側柱列を確かめるため、SD360を掘り下げ。柱穴はありそうだが、ほかの２基はよくわからない。
8.18　柱穴の実測完了。石敷の断面図は未完。石敷を除去し、砂を撒き始める。
8.19　排水作業。ただし午後、再び降雨。
8.20　雨中、SB450の柱穴断面図を作成。
8.21　柱穴の断面図・土層図完成。黒灰色土坑（SK425）を掘り下げたが、石敷SX359を壊していることを確認。本日をもって調査終了。
8.31　SK425に残っていた土師器甕を取り上げ。
9.13　台風18号の雨のため、その排水と草刈りを実施。ただし泥濘のため作業中止。
9.20　耕作土入れのためコンベアを設置。
9.21　午後から排水と草刈り。
9.30　埋め戻し終了。
10.23　飛鳥寺北トレンチの耕作土入れ終わり。（終了日はこの日と赤鉛筆で記入あり）

C　第３次調査　1983年７月18日〜1984年２月20日

7.18　明日香村課長・飛鳥総代に挨拶。東から表土掘削開始。フェンス張り。
7.19　表土掘削とフェンス張り。
7.20　水田畦畔の東側は表土掘削が完了。石田トレンチを床土上面で検出し、埋戻土を除去。石組溝SD331底石上に残る堆積層も掘り下げ。
7.21　耕作土の除去。調査区中央の水田畦畔は撤去し、埋め戻し後に復旧することに。
7.22　耕作土の除去は４分の３が完了。
7.23　雨天中止。
7.25　耕作土の除去完了。本日より学生３名参加。
7.26　西端から床土の除去を開始（27ラインまで）。Gラインに東西畦を、23ラインに南北畦を設定。遺物の取り上げは東西畦を境に「北半床土」・「南半床土」とする。
7.27　床土の除去は25ラインまで進む。九州大・横山浩一先生来跡。
7.28　床土の除去は21ラインまで。E-Gラインで玉石多く顔を出す。
7.29　床土除去は18ラインまで進む。Hライン沿いに礫混じり土があり、東西に延びている。
7.30　床土除去は16ラインまで。
8.1　床土除去完了。東端から遺構検出を開始し、マンガン混じり褐色土の上面で耕作溝多数を検出（17ラインまで）。UF16区で石田トレンチ掘り下げ。Gラインの北側でも石組溝の側石らしきものを確認、調査区の北へと延びている模様。
8.2　床土の残りを除去しつつ21ラインまで遺構

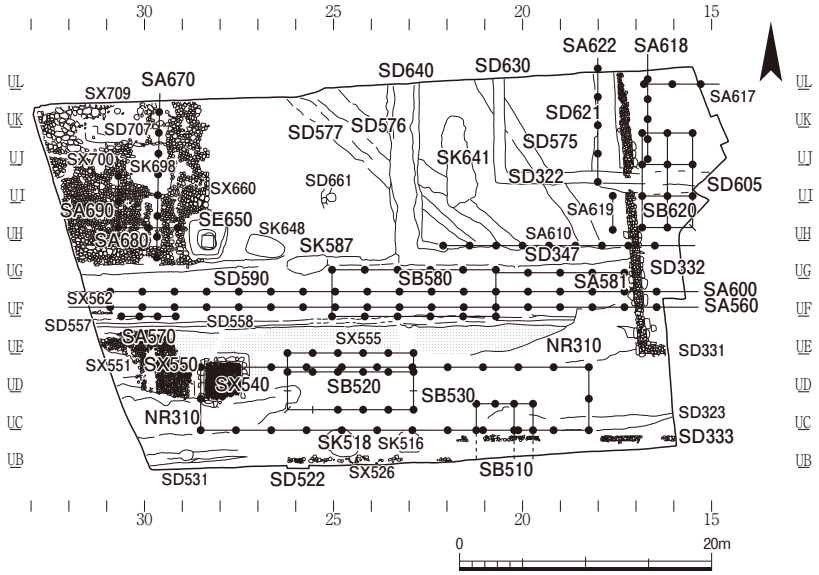


Fig. 11　第３次調査　1：600

検出。

8.3　遺構検出を23ラインまで進める。床土直下の土層は、Hラインの北側では「茶褐色フ入り土」だが、南側では「黄褐砂質土」となる。Hライン沿いにバラス多く、旧地境とみられる。

8.4　25ラインまで遺構検出。E-Gラインに拳大から人頭大の玉石が散乱している。

8.5　26ラインまで耕作溝を検出。人頭大の玉石が茶褐土に据わっている。この茶褐土は土器片を相当量含んでいる。

8.8　27ラインまで耕作溝の検出進む。

8.9　29ラインまで耕作溝の検出進む。Eラインの北（UE27・28付近）に東西石列状の玉石あり。

8.10　31ラインまで耕作溝の検出。UE30区付近に石敷らしきものあり。

8.11　褐色土上面での遺構検出終了。西端から褐色土の除去開始。調査区西北部では褐色土の下にバラスおよび焼土あり。UJ32区に２条の東西石列があり、その上を焼土が覆うものと思われる。

8.12　Gライン以北では褐色土下のマンガン層を除去。Gラインの南側では、29ラインまで褐色土の除去を進め、マンガン層の上面で止める。マンガン層・暗灰砂質土ともに石敷を覆っている。調査区南端に流路NR310あり。

8.17　台風のため作業中止。

8.18　Gラインの北側で褐色土を除去し、暗灰土上面で耕作溝を掘り下げ。Hラインの玉石散乱部にくぼみあり、その北側に焼土、南側に暗灰土あり。焼土より北側は土器を多量に含む。

8.19　27ラインまで褐色土の除去。Gライン沿いに東西溝状の落ち込みあり、中に玉石が散乱。「藤原宮期」[6]の土器多量に出土。Eラインの南側ではNR310の北肩にて石敷の一部を確認。灰色粗砂に覆われており、その上をバラスが覆う。

8.20　26ライン付近で褐色土除去。Gラインの南側では、東西溝状の落ち込みで黄色粘質土を確認。

8.21　25ラインまで褐色土除去。東へ進むにつれ褐色土が薄くなり、出土遺物も「藤原宮期」よりも古いものが目立つ。Fライン沿いで黄色粘質土の面が見えている。NR310は全体に浅いが、部分的に深い。

8.24　22ラインまで褐色土を除去。東西畦の北側の東西溝２条を、それぞれ大溝１・大溝２と称し掘り下げ。NR310からは平安時代の土師器皿が出土。

8.25　20ラインまで褐色土の除去。F-Gライン間では、バラス面の上面で小ピットが東西に並んでいるのを確認。

8.26　18ラインまで褐色土を除去。大溝１・２を検出。バラス面は18ライン付近で途切れている。NR310掘り下げ。坪井所長・狩野部長見学。

8.27　17ラインまで褐色土を除去し、大溝１・２の検出を進める。UJ19区の大石付近に南北方向の落ち込みあり。NR310掘り下げ。

8.29　16ラインまで褐色土の除去。UG17区では大溝１・２を覆う粗砂混のバラス溝があり、UH17区ではSD332の側石を覆う。石田トレンチ付近では、粗砂混バラスが石組溝を覆っている。

8.30　褐色土の除去、東端まで到達。東西畦の北側では礫敷を出す。南側では灰色粗砂を除去し、

6）第３・４次調査の日誌では、おもにC期の土坑から出土する飛鳥Ⅳの土器を「藤原宮期」のものと記している。この日誌抄では原文のままとする。

一部で整地土を出す。

8.31　東西畦の北側では石組溝SD332の掘方を検出。その埋土は底石直上から粗砂・砂礫・粘土の順に堆積している。南側ではSD332掘り下げ。

9.1　Gラインの北側でSD332掘り下げ。底石上に粗砂と砂礫層が堆積している。UI・UJ16区に黄褐粘土が入った柱穴あり（SB620の一部か）。UB17区付近でSD333を検出。

9.2　Gライン以北でSD332完掘。側石の大半は失われており、底石上に砂層が残るのみ。本日、NHK奈良局の撮影あり。

9.3　北半では18-19ライン間で褐色土を除去。Jライン付近で東西溝SD322検出。G-H間でも東西溝が重複している。東西畦の南側では黄色粘土混バラス層上面で小穴を検出（SA600柱穴か）。

9.5　UJ18区より北側では黄色粘質土の広がりを検出。その上にはバラス混じりの灰褐土が載る。UF18区付近で出土した凝灰岩は比較的大きく、黄色粘質土に覆われている。

9.6　21ライン沿いで検出した南北溝SD630は、Jライン沿いの東西溝SD322につながる見込。調査区の南半ではSD310を掘り下げ。科学万博担当官が来跡。

9.7　SD322が北折してSD630となることを確認。南半では黄色粘質土の検出を継続。UD19・20区では黄色粘質土が入った柱穴掘方2基を検出（SB530）したが、NR310で削られており、底がわずかに残るのみ。

9.8　UI・UJ21区付近でSK641を検出。遺物は「藤原宮期」。G-H間では、大溝1・2より古い溝があることが判明（SD590）。南半ではNR310掘り下げ。SD333は底石がかろうじて残るものの、目地にも自然流路の砂が詰まっている。

9.9　SK641完掘。古溝（SD590）の埋土は青灰砂。南半ではSD310の粗砂を掘り下げ。

9.10　23ラインの南北畦に沿い、SD640の東肩を検出。これとSK641との間には古い斜行溝がある（SD576）。Gラインの北側では、灰褐土・暗灰褐土の下に黄色粘土混バラス層がある。

9.12　北半ではUH22区で暗灰褐土を除去。南北畦の西側で灰褐土を除去し、南北溝を検出（SD640）。南半では23ラインの西側でNR310掘り下げ。UD29区では暗褐土を除去し、石敷SX550の広がりを確認。

9.13　北半では灰褐土を除去してSD640の西半分を掘り下げ。東半は検出のみで未掘。埋土からは「藤原宮期」の土器多数出土。

9.14　北半にて灰褐土と、その直下の炭化物混じり層を除去し、黄味がかった砂質土の面を追いかける。Hラインのやや南で、南側への落ち込みがあり（SD347の北肩か？）。SX550写真撮影。UF23区付近では黄色粘土の面を出してゆく。

9.16　UG25区にSD590より新しい土坑があり、それは大溝1・2に壊されている。SD590の北側には黄色粘質土があり、その上にバラス層が載る。南半では石組遺構SX540を精査し掘り下げ開始。その掘方はSX550を壊している。

9.17　北半では灰褐土の除去。南半ではSX540内精査。粗砂を除去すると、瓦片を多く含む土層あり。

9.19　北半では灰褐土の除去。SX540は内法3.2×3.0mで、西北隅ではNR310が側石の底まで抉っている。東西溝SD348掘り下げ。

9.20　UT27区付近にバラス面あり、遺物多し（「バラス混灰褐土」で取り上げ）。25-27ライン間でNR310北肩を検出。

9.21　北半では26ラインの西側で灰褐土の除去。UH27区の西半にて玉石の密集を確認。

9.22　北半ではUH27区にて石敷遺構の一部を検出。NR310掘り下げ、SX540では褐色土を掘り下げたところ、西南部で玉石が詰めてあるのを確認。7世紀中頃の杯出土。

9.24　NR310の粗砂を除去、褐色土下は上位から暗褐砂土・灰褐砂・粗砂。SX540では西南隅で灰褐粘土を掘り下げ、石敷面を確認。

9.26　NR310周辺にて精査をおこなうも、午後は雨天中止。

9.27　台風接近のため早めに中止。鈴木文化庁長官来跡。

9.28　台風のため作業中止。

9.29　調査区西端で検出した東西石列SX562は黄褐粘土（整地土）の敷設以前の遺構。この整地土の上位には小砂利層があり、さらに「藤原宮期」の遺物を含む灰褐土で覆われている。

9.30　東西畦の北側で石敷を確認（SX700を指すか）し、雨天決行の成果あり。東西畦下の東西溝SD590では奈良末～平安初の遺物出土。

10.1　北半では黄色整地層まで灰褐土を掘り下げ。SD590の北側で31ライン以西では、整地層を除去して石敷面SX700を検出する。石敷上をバラス層が覆い、その上に灰褐土。UJ32区では灰褐土の下、整地層よりやや上位で須恵器蓋4点が出土（7世紀中・後半）。

10.3　北半では黄色整地土上面で遺構検出。Hライン付近では石敷面を検出、上位の灰褐土からは「藤原宮期」の土器出土。東西溝SD590はバラス面から掘り込んでおり、東西溝SD348からは奈良時代末から平安時代の土器が出土。

10.4　北半では石敷SX700の検出。Iラインの北側・31ラインの西側では、石敷を灰褐土が直接覆っている。これ以外の範囲では石敷上にバラス層が載り、その上を灰褐土が覆うところが多い。

10.5　UG29区およびUJ29区・UK29区の土坑から「藤原宮期」の遺物出土。Fラインでは西端の東西石列の南で石敷を検出。この石敷を壊す東西溝は黄色整地土で覆われている。

10.6　28ラインで石敷SX700が途切れ、その東端が揃うことを確認。北端では28-29間で黄色整地土を除去して石敷面を検出。

10.7　UH-UJ30区で柱穴３基を検出（SA670の一部）。Gライン沿いでは大土坑が東西に並んでいる。出土遺物は「藤原宮期」。

10.8　26ライン付近に南北柱穴列２間分あり（SA682か）。掘方埋土は炭化物混じり土。Eライン付近では東西に並ぶ柱穴３基を確認（SB520）。UG26区でSK587検出。

10.11　バラス層上面から掘り込む柱穴あり。UG24区の土坑SK585からは「飛鳥Ⅲ」の土器が出土。

10.12　流路NR310に重複する掘立柱建物SB520を検出。柱痕跡に黄色粘土が混じる。７世紀後半代の建物と理解しておく。

10.13　北半では南北溝SD640が、Gライン沿いの東西溝SD347につながることが判明。溝幅が広く、埋土も同じ。南半ではDライン付近で柱穴４間分（SB530）と、Fラインの北側で東西方向の柵列11間分とを検出（SA560）。

10.14　調査区北東部では黒褐色粘質砂の上面で遺構検出、SB630柱穴は埋土に黄色土を含む。UK15区には１ｍ四方に石敷SX611（のちSD730底石）が残る。SA600柱穴は、19-20ライン間の２基がSD332で壊されているため、柱掘方が立柱後の積土に覆われる状況が確認できる。

10.15　現地説明会にむけての清掃。泉森氏・千田氏来跡。

10.16　現地説明会。

10.17　北半ではSD332の東側で遺構検出。Kライン北側で東西石列SX612あり、北側が一段高く、SD332側石天端に揃っていたものか。

10.18　東北部でSD605・630を検出。西北部では灰褐土を除去したところ、黄色整地土は残らず、焼土面で遺構検出。その下にバラス層あり、石敷はさらにその下位にあるか。

10.19　北半では東端から21ラインまで精査。南半では基壇上面を精査し、北寄りで東西に並ぶ柱掘方３基を検出。土坑SK641を検出、遺物は天武朝頃。西北隅では黄色土上面で遺構検出。

10.20　Fライン沿い（19・20区）にてSA600の柱掘方を２基検出。その南側の東西溝SD558は礫敷SX555を壊している。SD576・577を検出。SX555の下位に黄色整地土を確認。

10.21　23ラインの南北畦を撤去。西北部では整地土を除去し、バラス敷と石敷SX700との関係を見極める。SX700は北西に向かって傾斜し、上面には黄味を帯びた粘土が貼り付いている。目地からは水落遺跡と同時期の土器片が出土[7]。午後、西半の写真撮影。

10.22　前日の写真撮り直し。北半では南北畦の撤去。UC20区にSD333側石抜取穴と重複する柱穴あり。Gライン沿いでは20・21区にSD347と重複する柱穴が２基ある（SA581）。

10.24　23ラインで南北畦を撤去し、SD640を完掘。「藤原宮期」の遺物出土。20-23間では、F-G間で柱掘方２列を掘り下げ（SA581・600）。Dラインの南側でも柱掘方を検出（SB510）。

10.25　UE・UF23区にて南北方向の浅い溝があり、これを掘り上げ。整地黄色粘土に覆われた柱穴を検出した。UB20-22区にかけて木樋の痕跡とみられる粘土が東西に延びているのを確認。

10.26　北半ではバラス層除去。その直下の黄色整地土に貼り付いている。Ｆライン沿いの基壇上面では、昨日検出した柱穴を壊す柱掘方が南側にあると判明。南半ではSB520柱穴を新たに検出。SB510は南北棟で東庇か。

10.27　北半ではバラス層を除去し黄色土の面を出す。SB520柱穴はE-Fライン間で礫面を壊して掘り込んでいる。またその内側に別の建物がある模様。基壇上で見つけた４列の東西柱列のうち、一番南のものは柱痕跡に瓦が落ち込んでいる。

10.28　SB580の柱痕跡は基壇南側石の下位にあり、基壇土の上面では見えない。SB520の柱穴が礫面SX555を壊している。

10.29　北半では炭混じりの小穴多い。南端で検出した土坑SK518は「藤原宮期」の遺物を含む。

10.31　27ライン以西では石敷上面で精査。SX540は上層バラス（バラス面の一層上）から掘り込んでいる。

11.1　空撮に向けて全面清掃。標定点の測距と標高測定。

11.2　11時15分から空撮。午後は地上写真の撮影。

11.3　午前中は地上写真の撮影、午後は遣り方設定。

11.5　遣り方設定と水糸配り。

11.7　水糸配り。

11.8　実測作業開始。

11.16　実測作業終了（作業は８日間）。

11.17　実測作業を継続しつつ、東北部より断ち割り開始。SD332では上層底石の一部を外し、下層底石との間の砂層から土器が出土。

11.18　実測作業を継続。SB630の柱抜取穴には

7）同日付の「石敷目地」出土土器は須恵器杯G身の底部小片と、杯G蓋片とを含む。

黄色粘土が詰まる。ほかにSA618・SA622の柱穴を２基ずつ検出。SA600の柱穴は掘方が大きいが、基壇土の途中からでなければ見えない。柱穴を覆う基壇土は版築状の互層をなす。南側石の抜取痕とみられる東西の小溝を検出。

11.19　実測作業と断ち割り。SB630ほぼまとまる。

11.21　SB630の西南隅柱穴で掘方精査、SD332より古い可能性大。土坑SK626掘り上げ。

11.22　実測作業と断ち割り。SA622は４間分まで確認。SA600基壇上面では、23ラインの東側で版築層を除去し、砂質土上面で柱掘方を検出。これらは斜行溝SD576・577より新しい。

11.24　SB630の西側柱筋に揃えた、これより新しい柱列を検出（SA618か）。Hラインの南側で東西柱列７間分を検出。南北柱列SA622とは一連か。SA600基壇上では、SA600よりSA560のほうが新しいと判断する。斜行溝SD575を新たに検出。

11.25　調査区西北部で黄色整地層を除去。SA600基壇東半では掘方と柱痕跡の掘り下げ。

11.26　調査区西北部で黄色整地層を除去。同層は７世紀前半の遺物を含む[8]。SK587で「藤原宮期」の土器多く出土。南半では東西に長い建物SB530の柱穴検出を続ける。

11.28　東北部で平面実測。西北部では黄色整地土の除去と、SK587・SK688およびUG28区の大土坑（のちSE650）を掘り下げ。南半ではSB530の検出を継続。

11.29　SB630柱掘方はSD332側石の据付掘方に、SB530の柱掘方はSD333側石の据付掘方に壊されている。またSB530の柱穴はUB24区の土坑(SK518を指すか）に壊されている。

11.30　SB630柱穴断面図の作成とSD332写真撮影。UG28区の大土坑は井戸と判明（SE650)。「藤原宮期」の土器片多量に出土。UI29区の大土坑SK698を完掘し、黄色粘土の柱痕跡・掘方を検出(SA670)。SB630の柱抜取穴はSD332側石の据付掘方より新しい。

12.1　SE650抜取穴掘り下げ。地表下２ｍで井戸枠の横板材を確認し写真撮影。南北柱列SA670はGラインの北へと延びていることを確認。その柱穴埋土は黄色粘質土。

12.2　調査区西半部でSA600の柱穴を検出。またSA670柱穴が南へと延び、石敷SX700を壊していることを確認。SA600とSD332との交差点にて、前者の柱掘方を検出。SB520は東西11間と確定。SE650埋土掘り上げ。井戸枠を２段まで確認し、再度写真撮影。

12.3　SE650の実測終了。井戸底の砂層はまだ遺物を多く含んでいる。西北部の平面実測も終了。

12.5　西北部では土層図の作成開始。西南部では29ライン沿いでSA600基壇断ち割り。SB530の西妻柱掘形はSX540の西南隅で壊されている。

12.6　西北部で土層図作成、東南部では平面実測。西南部ではSB530西妻柱の検出が難航。SA600掘方は明瞭だが、SA560の掘方見えず再精査。

12.7　地上写真撮影。文化庁次長来跡。

12.8　北半中央部で埋め戻し。東半で土層図作成。西半ではSA670柱穴断ち割り。

12.9　SB530写真撮影と、SA600・SA560断ち割り。

12.10　埋め戻し継続。SA600基壇上の柱列を東半にて断ち割り。北側の２列より新しい東西柱列あり、これよりも新しい東西溝もあり、当初基壇の側石掘方か。

12.12　SA600基壇上で精査。西端に向かうにつれ基壇土が厚くなり、SA600柱掘方の上を黄色土が覆い、その上からSA560柱穴を掘る。さらに桁行５間の建物SB580と、そこから東へ延びるSA581とが重複しているとみる。

12.13　SA600柱掘方（東から２基目）を断ち割り。SD332の側石据付掘方が柱掘方を壊している。調査区西端でSA570柱穴を検出。14時に記者発表。

12.14　SA600柱掘方（東から２基目）の断ち割りと実測。西北部の石敷SX700の断面図作成。

12.15　SB630が東へ延びるかどうかを確認するため、辻本氏水田の畦の一部を掘り下げ開始。西壁土層図作成し、石敷面は埋め戻しにかかる。文化庁河原氏来跡。

12.16　辻本氏の畦は表土・床土の除去終わる。

12.17　辻本氏の畦掘り下げ。

12.19　辻本氏の畦掘り下げ続く。

12.20　辻本氏の畦ではSB630柱穴を検出。坪井所長来跡。

12.21　南壁土層図の作成。辻本氏水田の畦復旧。SA600基壇の断面精査で、石敷と側石との関係が判明。側石には２時期分があり、石敷は古い側石の据え付け後に敷いている。新しい側石を据えたときに、石敷は埋没していたと思われる。

12.22　土層図完成。UB26区で南北石組溝SD522を検出。その南側を拡張したが、瓦混じりの土坑で壊されている。

12.23　SD522は南端の石敷SX526と同時期で、７世紀中葉のもの。15時から年末の片付け。

1.9　記念写真撮影。埋め戻し開始。

2.6　畦作り・床土入れ終了。

2.7　耕作土を東から入れ始める。

2.20　埋め戻し完了。

8）この日「７世紀前半代の遺物」が出土したのは、同日の取上ラベルによれば「UG27黄色整地」だが、出土土器は土師器・須恵器小片のみで、「７世紀前半」のものかはわからない。

D　第４次調査　1984年７月９日～1985年５月７日

7.9　調査開始。周辺整備とコンベア設置。
7.10　西から耕作土の除去開始。
7.16　耕作土の除去完了（所要６日間）。
7.17　東から床土の除去（18ラインまで）。南端では床土直下にバラス層あり。
7.18　20ラインまで床土の除去。
7.19　23ラインまで床土の除去。
7.20　26ラインまで床土の除去。
7.21　27ラインまで床土の除去。
7.23　29ラインまで床土の除去。
7.24　32ラインまで床土の除去。
7.25　床土の除去終了。
7.26　西から二番床を除去して遺構検出。褐色土までの間に灰褐粘質土が10cmほどある。
7.26　東西畦の北は29ラインまで、南は30ラインまで遺構検出。Pラインの北側には淡灰粘質土あり、北半ではその上面で遺構検出。
7.28　28-30間で耕作溝検出。
7.30　26-29間で耕作溝検出。
7.31　本日より東の水田（26ラインの東）へ。東西畦の北側は二番床が厚く１スコだが、南側は半スコ（25ラインまで）。Pライン北側の淡灰粘質土は瓦器を含む。
8.1　23ラインまで二番床を除去。本日より学生５名参加。
8.2　22ラインまで二番床を除去。23ラインを超えると半スコでバラス検出。
8.3　20ラインまで二番床を除去。
8.4　19ラインまで二番床を除去。北半では耕作溝多数検出。
8.6　17ラインまで二番床を除去。18ラインを挟んで褐色砂（南北溝）を検出。UM17区で「試掘坑」検出、石組溝の底石見えるがいつ掘られたかは不明。
8.7　二番床の除去、東端まで到達。24ラインまで写真撮影のため掃除。
8.8　24ラインの西側で写真撮影のため清掃。
8.9　写真撮影。22ライン以西・Pライン以北に分布する土層を「淡褐土」と称して除去。南半が薄く、北半は厚さ40cm。淡褐土からは黒色土器が出土。UT23区では新羅土器出土。
8.10　23-25ライン間で淡褐土を除去し、褐色土を出す。褐色土は東西畦の南側でバラス・遺物を多く含む。UU24区で検出した自然流路からは瓦器が出土し、13世紀以降のもの。
8.11　25-27間で淡褐土を除去し、褐色土を出す。褐色土からは遺物多く出土。
8.17　27-29間で淡褐土を除去。Rライン付近で石敷を検出。その直上に１層（石敷直上褐色土）あり、これを淡褐土が覆う。Sラインの北側では、淡褐土の直下に１層ありと判明。
8.18　28-29間で淡褐土を除去し、昨日に続きRライン沿いで石敷を検出。その上面の層は「石敷直上褐色土」で取り上げ。
8.20　29-31間で淡褐土除去。石敷は29ラインの西側では保存状態がよくないが、上面のレベルから第３次調査の石敷とは同一と判明。石敷より北では淡褐土の下に鉄分層があり、これを除去する

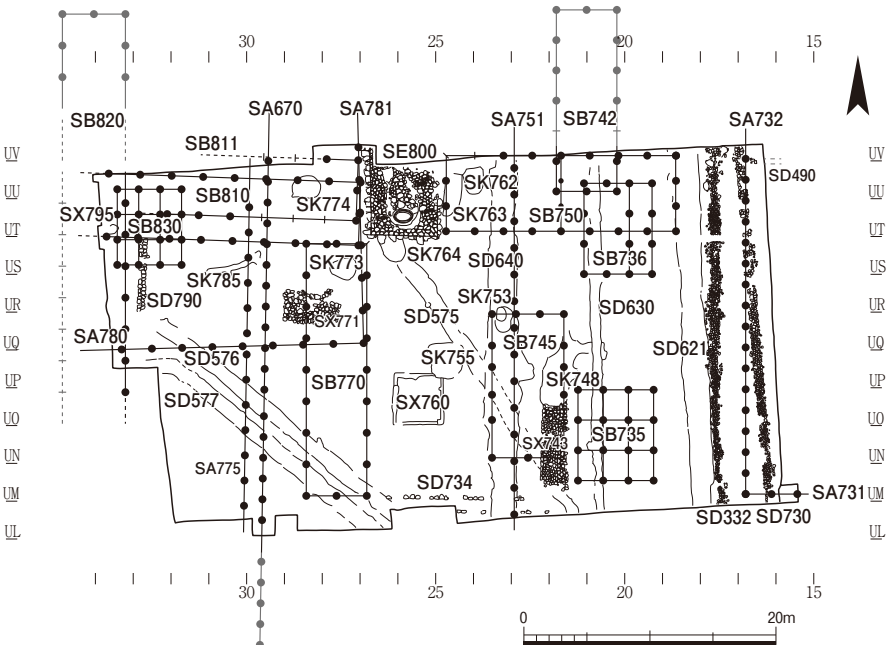


Fig. 12　第４次調査　1：600

と褐色砂質土がある。

8.21　31ラインの西側で淡褐土除去。UR33区では幅２mの石組を検出。埋土は暗褐土で、石の直上を黄色土が覆っている。

8.22　UR33・US33区で南北に延びる石列を検出（SD790）。UO32区で勾玉出土。

8.23　東端より褐色土の除去。17ラインで南北溝の東肩検出を試みるがはっきりせず。

8.24　UM・UN18区でSB735にともなう石敷を検出。その東面は揃っているが、西面はやや不規則。石敷上面には黄色土が薄く被っているが遺物出土せず。

8.25　20-21間で褐色土を除去し遺構検出。UP20区でSB735北辺の石敷を検出。

8.27　UO21区東半で褐色土を除去し、黄色土の範囲を確認。その西半では褐色土下でバラスとSB735石敷を検出。石敷を覆う黄色土がバラス下に潜ることが判明。

8.28　UO21区の石敷は幅２mで、その西側の礫敷が整地土（黄色土）で覆われていることがトレンチ調査で判明。この整地土は南北大溝（SD640）で壊されている。東西畦の北側では淡褐土直下の土層を除去し遺構検出。南側では褐色土を除去しSD640を検出。その西肩はバラスを出すことで検出した。褐色土からは黒色土器が出土。先日来検出してきた石敷は、建物を囲うものか。

8.29　24ライン付近でSD640西肩の検出を試みるが、US-UU間では検出できず。UU23・24区の北排水溝では「藤原宮期」の遺物が大量に出土。UM-UO間では石敷を検出するが、部分的に残存するのみ。

8.30　SD640の両肩を検出し掘り下げ開始。取上土層名は上から「褐色土」・「灰褐砂土」の順。北排水溝ではSD640とこれより古い土坑が重複していると判明。

8.31　SD640では「灰褐砂土」を掘り下げ。UO・UP23区ではSD640東壁に「黄色土を含む層」がある。

9.1　SD640では「灰褐砂土」の除去完了。UT・UU23区では、溝底で炭混暗灰粘質土の広がりを確認。UP・UQ24区では褐色土を除去し、焼土混じりの土坑（SK755か）を検出。

9.3　北半では褐色砂質土を除去し、US25区で「北になだらかに落ちる線」を検出[9]。南半では褐色土を掘り下げ、礫を出しながら遺構検出。UP25・UQ25区で落ち込み（SK755か）を検出。このときは「褐色土下半」で取り上げ。褐色土・褐色土下半は炭と焼土を含む。遺物はほとんどが「藤原宮期」のもの。

9.4　北半では褐色砂質土を除去し遺構検出。UU26区では灰褐粘質土を掘り下げて石敷を検出（SE800石組の石敷）。

9.5　29ラインに南北畦を設定する。UU26区では灰褐粘質土を掘り下げ、石敷を検出。UM29区付近[10]では褐色土を掘り下げ、黄褐土上面で遺構検出をおこない、一部で黄褐土を除去し石敷SX700を検出。

9.6　29ラインの南北畦東側に幅１mの南北トレンチを設け、バラス面を検出。M-P間では黄褐土を除去。29ラインの西側では褐色土を除去して黄褐土面を出す。UU28区で土坑SK774検出。遺物の時期は「藤原宮期」。

9.7　南半では褐色土を除去し、黄褐土上面で遺構検出。UU28区の土坑SK774は埋土が３層からなり、最上層は黄褐粘土。

9.8　29ライン沿いの南北トレンチでバラスを検出。Tラインの北側でゆるやかに北へ下降し、その直上に黄灰褐砂土が堆積している。

9.10　北半では排水作業。南半では黄褐土上面で遺構検出をおこない、土坑多数を検出。

9.11　北半ではUS29区の北側で褐色土を掘り下げ遺構検出。南半では29-30ライン間で黄褐土、褐色土を掘り下げ遺構検出。

9.12　29-31間で遺構検出。

9.13　UT30区にてSB811柱穴掘り下げ。埋土は淡黄灰褐砂土。UP・UQ31区では褐色土を掘り下げ、黄褐土上面で土坑多数を検出。

9.14　UP・UQ31・32区では「大土坑」を掘り上げ、黄褐土上面で遺構検出。UT33区でも黄色土を掘り込んだ柱穴を検出（SB830か）。UU33区でも「土坑」を検出し、掘り上げてから柱穴を検出。

9.17　北半では「土坑」を地区ごとに掘り下げてSB830柱穴を検出。US32区で新羅土器３片出土。

9.18　雨天中止。

9.19　北半では「土坑」の東肩を検出し、褐色粘質土を掘り下げ。あるいは地区ごとに「土坑」で掘り下げ。南半でもUO32区およびUP31・32区を「土坑」で全体に掘り下げ遺構検出。

9.20　北半ではUR31区・US30区で土坑を掘り切り東西に延びる溝を検出（SK785か）。UO32区で斜行溝SD576を検出。

9.21　「南北大溝」を掘り切り遺構検出。

9.22　「南北大溝」の底で遺構検出。

9.25　16-17ライン間で南北石組溝SD730の底石

9）このとき確認したUS25区の落ち込みは、SE800石組とほぼ重なっていることから、その埋土の一単位を指すとみられる。

10）日誌ではUM27・UN27区とあるが、平面図を見るとUL28区で検出した石敷SX700を指すとみられる。

確認。褐色砂礫・暗褐砂礫に覆われている。底石がない部分には黄褐土を含む土があり、抜取痕跡の埋土とみられる。一部に東側石が残る。

9.26　SD730底石をすべて検出。石が抜けた部分は黄褐色砂混土の柱穴埋土で、６間分を確認（SA732）。東西畦の南にも続く模様。底石は東側石の「地山」とみていたバラス層の下に潜ることを確認した。SD332を壊している「南北溝１～３（新しい順）」を検出。

9.27　「南北溝１・２」を掘り切り、UO-UQ間で「南北溝３」を掘り下げ。その結果、SD332の底石と東側石の抜取痕を検出した。その抜取痕は「南北溝３」より新しいが西側が不明瞭。底石上には灰褐粗砂が堆積し、溝埋土とみられる。

9.28　SD730を壊しているSA732柱穴を検出。UO16区より南では未検出。東西畦の北側では「南北溝１」とその下層を掘り上げ。

9.29　東西畦の北でSD332側石の抜取埋土と溝埋土とを検出。底石まで掘り下げる。

10.1　東西畦の北側ではSD332の底石と側石の抜取痕跡を検出。SD621で埋土下層のバラスを除去。UT18・UU18区でSB742柱穴３基を検出。

10.2　SD621の西側では褐色砂礫土を除去しSB742柱穴を検出。UT19区でSK741を検出。東西畦の南側では21ライン沿いで南北溝SD630を検出、本日は上層を掘り下げ[11]。

10.3　東西畦の南側ではSD630掘り下げ。北側では褐色砂礫土を除去。

10.4　東西畦の北側ではSD630を上層・下層（ニコ土・砂層）で掘り下げ。南側ではSB735西辺の石敷を覆う黄色粘土を出す。UP・UQ21区では黄色粘土を壊す土坑SK748を検出し掘り下げ中。

10.5　東西畦の北側ではSD630掘り下げ。その西側では褐色砂礫を除去し、UT22区にて柱穴１基を検出（SB750か）。南側ではSK748掘り下げ。遺物は「藤原宮期」。

10.6　東西畦の北側では21-23ライン間で精査。南側ではSK748完掘。

10.8　東西畦の北側では21-23ライン間で精査。南側では19-21ライン間で再精査。

10.9　東西畦の北側ではUT19区の土坑（SK741か）で黒色土器出土。SD630はこれより新しい。南側では石敷に囲まれた範囲で黄色土を出すが、柱穴検出にいたらず。

10.11　東西畦の北側で検出していた土坑多数は、総柱建物SB736の柱穴と考えられる。ほかにも別の建物あり。南側では黄色土とバラスを出しつつ遺構検出。

10.12　SB736は南北３間と判明。東西畦の南側では黄色粘土が詰まった柱穴を検出（SB735）。柱抜取穴か。

10.13　SD630東肩でSB736の柱穴推定位置（US20・UT20区）を精査。UU21区の柱穴はSB736柱穴より新しい（SB742）。畦南側のSB735は総柱建物か。

10.15　畦の北側ではSD630西肩でSB736・SB742柱穴掘り下げ。南側ではUM19・20区で土坑を掘り下げ、黄色粘土を含む柱穴を３基検出（SB735）。

10.16　SB736は総柱ではなく、２×３間の南北棟で東に庇ありと思われる。畦の南側ではSB735西辺石敷上の黄色粘土を除去。UO21・UP21区では黄色粘土の柱穴（SB735）を検出。

10.17　雨天中止。

10.18　UM-UQ間で南北大溝SD640の下層バラスを掘り下げ、ほぼ完掘。溝底ではUQ23区で土坑状の落ち込みあり（SK753）。

10.19　東西畦の北側ではSD640西肩で褐色土を除去し、バラス面を出しつつ遺構検出。南側では石敷の内縁に沿う溝状遺構を検出。SB735基壇側石の抜取痕跡とみられる。

10.20　東西畦の北側ではSD640のバラス層掘り下げ。南側ではSB745柱穴を検出。

10.22　SD640ではUR-UTライン間でバラスとその下位の灰褐砂礫を除去。その下層の炭混灰褐土がSB750柱穴を覆う。UU23区ではSD640の西肩を検出するため掘り下げ。

10.23　SD640ほぼ完掘。SK762とSK763との新旧関係は不明。SK755下層掘り上げ。UO24区では褐色砂礫を除去してバラスを出す。

10.24　東西畦の北側ではSB736の柱穴より古い黒褐色埋土の柱穴を検出。UVライン沿いでも柱穴検出。南側ではUP22区にて土坑掘り下げ。

10.25　黒褐色埋土の柱穴は南北３間×東西３間以上の建物になると判明（SB750）。UM24区では東西溝SD734の北側石を検出。

10.26　SB750柱穴は東から５基目まで確認。また、UO23・UP23区でもSB745西側柱を検出。

10.27　東西畦の北側ではSD640の西側で北に落ちる土層を掘り下げ遺構検出。UT24区では柱抜取穴を検出するが掘方は見えず。南側ではSD640西肩でSB745西側柱を検出、SD640より古くSD575より新しい。

10.29　東西畦の北側ではSD640東肩でSA751の柱穴５間分を検出。UU23区ではSD640底面に暗灰砂礫の堆積を確認。南側では25ライン西にて礫を残しつつ褐色土を掘り下げ。

11）同日の日誌には「この南北溝はUM20では石敷より新しく、UP20では黄色土より新しい」と書かれている。石敷はSB735の南辺石敷を指し、黄色土は北辺石敷付近にあたるので、SD630はこの建物より新しい。

10.30　バラスを出しながら遺構検出。US25区の北側では全体を「大土坑」として掘り下げ。UT25区ではこれより新しい隅丸正方形の遺構あり、その中央部に径約１ｍの落ち込みあり。その北には黄色粘土層があり、部分的に石敷が残る。
10.31　東西畦の北側では26～29ライン間で「褐色土下半」を掘り下げ、バラスを出しつつ遺構検出。南側では26ラインの西側でバラスが途切れたため、UN-UP間を「大土坑」として掘り下げ。
11.1　東西畦の北側では、26-29ライン間にてバラス・黄褐土（整地土）を壊す暗褐土（炭・焼土を含む）の広がりを「大土坑」と称して再度検出。
11.2　昨日来の「大土坑」を掘り下げるがかなり深い様子。UT29・US29区で南北塀SA670柱穴を、UT30・UT31区でSB810・SB811柱穴を検出。
11.5　SB810・SB811柱穴の検出続く。柱抜取穴は黄褐細砂（ニコ土）を埋土とするが、掘方埋土は地山との区別が難しい。
11.6　SB830柱穴２基を検出。UT33区では黄色粘土（整地土）を除去してバラスを出し、SB820の柱穴２基を検出。これらはSB830柱穴より古い。UT32区の柱穴から新羅土器出土、以前出土したものと同一個体。
11.7　東西畦の北側では「炭化物土坑」を掘り、バラス面でSB830柱穴を検出。このバラスは整地層と思われ、目地から飛鳥Ⅳの杯蓋が出土。南側では27ライン沿いでSB770東側柱４基を検出。
11.8　SB830西南隅の柱穴を検出。UT33区では土坑と「炭化物土坑」を掘り下げ、炉跡らしき遺構SX795を確認。US32区では南北に並ぶ石敷（SD790）を検出。砂層と褐色土が覆う。東西畦の南側ではSB770柱穴の検出続く。
11.9　UR32区でSD790を検出。底石上には砂層の堆積があり、その上を含炭黄灰土が覆う。その東側の黄褐粘土は側石の抜取埋土か。
11.10　US33区でバラス（整地土）を除去し黄褐粘土の柱穴等を検出。東西畦の南側ではSB770西側柱の推定位置に黄褐粘質土が広い範囲にあり、これを除去。
11.12　US27区で「大土坑」を掘り下げ、SK773とSA781柱穴（UR27区「柱穴１」）を検出。SK773は「藤原宮期」。UQ28区ではSB770とSA780柱穴の重複を確認。
11.13　東西畦の北側では、炭化物を含む汚れた土全体を「大土坑」で掘り下げ。調査区南端のUM26区にて石組溝SD734が斜行溝SD576に壊されていることを確認。
11.14　東西畦の北側では含炭褐色土と「大土坑」を除去しバラスを出しつつ検出作業。UU27・28区の北は「大土坑下半」で掘り下げ。調査区南端ではUM24区にてSD734の南側石を検出。
11.15　雨天中止。
11.16　UT27区で「柱穴１」（SA781か）と重複する「土坑４」を検出。UR28区では柱穴を検出（SB770か）。東西畦の南側では29ライン沿いで柱痕跡らしきピット５基を検出（SA670か）。
11.17　UT27区の「土坑４」は「柱穴１」より古いと判定（SB810か）。遺物多く出土し、時期は「藤原宮期」より古い。
11.19　UT27区の「柱穴１」南側でこれより古い柱穴を検出（SB811）。US26区では「大土坑」を掘り下げつつ、再び遺構検出。斜行溝SD575を壊す土坑SK764があるが、その北側が不明確。埋土は炭混じり暗褐粘質土で、掘り下げると砂層あり、その下位にバラスあり。
11.20　UT25区付近で石組を検出。南側石は東西５ｍ分。UT26区「土坑２」「大土坑」等を掘り下げるが地山は出ず、側石の掘方も見えず。トレンチを設けて側石を検出。
11.21　UT26区の「土坑２」を掘り下げ。「上層礫群」と同一面の土坑（UT25区）は写真後に掘り下げ。27ライン沿いで西側石を確認。石組内の堆積土を掘り下げ、底石を検出中だが、UT25区の「石組上土坑」で壊されている部分あり。
11.22　石組内堆積土から掘り込む土坑を掘り下げ。埋土は灰褐土で深く、井戸になる可能性あり。南北畦の東側でも南側石を３石検出。東端はなお不明。ＵＱライン沿いで東西塀SA780を検出。
11.24　（この日日誌記事なく、図のみあり）
11.26　UQ32区で「南北礫溝」を掘り、柱穴を検出（日誌記事ほとんどなく、この日の詳細不明）。
11.27　UU26区の石組では「中層礫群」まで掘り下げ、礫群の範囲を出す。東西畦の断面観察では、「土坑２」が「石組上土坑」を覆うことが判明。
11.28-11.30　現地説明会の準備。
12.1　現地説明会。
12.3　UT26区の「石組上土坑」は西半分を断ち割り。60㎝ほど掘り下げたところで井戸枠とみられる木材を検出（SE800）。一木の刳抜材か。UR21・22区の東西畦下で黒褐土混砂礫が東西に延びるのを確認、石組溝か（SD744）。北側石が３石分残る。南側石は不明だが、SD640西肩に残る１石につながるか。
12.4　UT26区の石組上土坑は、本日より「井戸」として遺物取り上げ。
12.5　UT26区の井戸SE800で写真撮影。井戸枠内には礫が投げ込まれた状態で、土師器甕など遺物多く出土（取上名は「井戸灰褐砂」）。
12.6　UU・UT25区にて南北畦撤去し、SE800石組の東側石を検出。北側では底石上まで土坑が重複している。
12.7　SE800石組内ではUU26区にて「中層礫群」

を除去し、底石および中央部の落ち込みを検出。北端には炭混暗灰褐粘質土あり。UU26区では底石直上の「中層礫群」を除去、土器細片が多数出土。

12.8　SE800石組内にてUU25区の「中層礫群」と、その直下のバラス層を除去し、黄色粘土の面を出す。

12.10　SE800石組中央部の埋土を上から山土・灰褐粘質土・灰褐砂質土の順で掘り下げ。暗灰褐砂質土の下面で底石を検出。

12.12　UU26区の「土坑３」は下層底石を壊していることを確認。その下層は炭化物を含まず、礫を投げ込んだ状態。

12.13　SE800井戸枠内で「バラス層」と「礫混砂」を掘り下げ。バラス層下部から土師器甕を中心に土器多数出土。井戸掘方をその南半で検出。UR19・20区にてSD744検出、埋土は小礫混暗褐砂。南端の拡張区ではSD734の続きを検出。

12.17　SE800井戸枠内で「含砂礫茶褐有機土」・「砂混灰褐粘質土」・「バラス混粘質土」・「灰褐砂」の順に掘り下げ。「灰褐砂」が最下層で、その下の「青灰細砂」が井戸の底にあたる。「含砂礫茶褐有機土」の下半からは完形の土器が投げ込まれた状態で出土。「砂混灰褐砂礫」で取り上げた遺物は茶褐有機土で「馬フン層」となる[12]。

12.20　写真撮影。SE800井戸枠はスギ材で、二材からなると判明（光谷拓実氏）。

1.18　方形溝SX760の西北隅から釘出土、木質部も残る。30ライン沿いで南北塀SA670を検出。柱痕跡には黄色土が混じる。

1.21　SB770とSA781との重複部２ヵ所で断ち割るも、どちらも１基の柱穴に見えるため再検討を要す。SE800南側石の掘方を断ち割り。斜行溝SD575一部掘り下げ。

1.22　柱穴断ち割り。

1.23　SB736・SB750・SA781等の柱穴断ち割り。UR32・US32区では「上層礫敷」を除去し、石組溝SD790と、北から続く黄褐土の柱穴（SB820）を検出。

1.24　33ラインの柱穴は南北６間分を検出（SB820）。UR33区のそれはSD790西側石の抜取痕跡より古い。

1.25　UR33区でSB820柱穴を確認、その直上を黄褐土が、さらにその上を含炭褐色土が覆うことを確認。Ａ期の建物と考えられる。SD790はその東を区画する溝か。

1.26　（この日記事とくになし）

1.28　（この日記事とくになし）

1.29　（この日写真貼付のみ）

2.1　調査区西南隅にてSB820柱穴を検出、斜行溝SD577より新しいことを確認。東南隅付近ではSA732柱穴４基を検出。

2.2　SB750東南隅の柱穴断ち割り。

2.5　（この日日誌記事なく、写真貼付のみ）

2.6　SB800石組の西側石から西へ延びている石列を検出。西側石から３ｍほど西で北に折れている模様。

2.7　SA781柱穴等断ち割り。（写真貼付のみ）

2.8　UU27区で南北塀SA781に壊される柱穴あり（SB811）、柱痕跡には黄色粘土が詰まる。SE800石組より古い柱穴あり（SB810）。

2.9　SB811柱穴断ち割り（写真貼付のみ）。

2.12　SE800石組の底石抜取穴（UU25区）から新羅土器出土。

2.13　空撮と写真撮影。

2.14　UT26区にて南北塀SA751に壊される柱穴を検出（SB810）。柱掘方のプランは整地土およびSE800石組の側石掘方埋土に覆われている。

2.18　（写真貼付のみ）

2.25　（写真貼付のみ）

2.27　SB745・SA751柱穴断ち割り。

2.28　調査区西北隅にて「バラス整地層」の上から掘り込んだ柱穴を検出。埋土が黄褐色山土の柱穴と一連のものか。「バラス整地層」の下位でSB810を検出。南北棟SB820は整地後に建てている。

3.2　（写真貼付のみ）

3.4　SA732柱穴断ち割り。（写真貼付のみ）

3.5　（写真貼付のみ）

3.6　（写真貼付のみ）

3.7　UU27区で調査区を北へ拡張し、SE800石組の側石を覆う土坑２基を確認。それぞれ「西土坑」「東土坑」として掘り下げ。28ライン沿いで側石３石をさらに確認。

3.11　SE800石組の西側石が西へ折れているのを確認。底石は土坑で壊されているが、SB811柱穴を検出。UT24区では、SE800石組の東側石掘方がSB750柱抜取穴を壊していることが判明。

3.12　（写真貼付のみ）

3.16　（写真貼付のみ）

3.18　（写真貼付のみ）

3.20　（写真貼付のみ）

3.22　（写真貼付のみ）

4.25　（写真貼付のみ）

4.1　考古第一研究室に埋め戻し引き継ぎ。

5.2　埋め戻し完了。

5.7　撤収完了。

12）これは同日に「砂混灰褐砂礫」として取り上げた遺物が「含砂礫茶褐有機土」に包含されていたもので、後者とあわせて「馬フン層」、つまり腐植性の泥炭質土にあたるという意味かとみられる。

E　石神遺跡1990-１次調査　1991年１月28日～1991年２月15日

1.25　申請者の大鳥氏・村教委立ち合いのもと、調査区の縄張り。農小屋を含む範囲を調査区とする。
1.28　機材搬入のち、耕作土・床土掘削開始。
1.29　耕作溝の検出と掘り下げ。西半では暗褐色土の除去にかかる。
1.30　南北溝SD1463と、調査区南半で「東西溝」を検出。

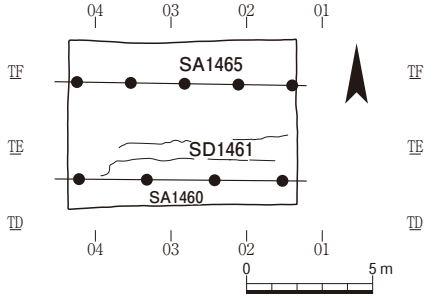


Fig. 13　石神遺跡1990-１次調査　１：300

1.31　東西塀SA1465の柱穴４間分を検出。
2.1　「東西溝」南肩確認のため、調査区を南へ0.5m拡張。SA1465の柱間は2.1m。
2.2　南北溝SD1463（中世）掘り下げ、SA1465はこれより古い。「東西溝」の東端で断ち割り。
2.4　「東西溝」の南端に山土混褐色土で埋めている部分がある。
2.5　「東西溝」東端の断割で柱穴を確認したため、同溝を黄褐色砂質土まで掘り下げて東西塀SA1465を検出。
2.6　SA1465柱掘方４基と柱抜取穴を検出。
2.7　農小屋の位置が変更になったので、その基礎に合わせて調査区を北へ１m拡張することに。
2.8　写真撮影。その後、貫板の打設と水糸配り。
2.12　実測作業。
2.13　柱穴の断割作業。
2.14　砂撒きと埋め戻し作業。
2.15　埋め戻し完了。

F　飛鳥藤原第214次調査　2023年12月６日～2024年３月15日

12.6　重機掘削開始。発電機・コンベヤ・テント等を搬入。東隣の県有地（飛鳥302番地）を土置き場とし、耕作土と第１次調査時の埋戻土とは別置とする。第１次調査時の撒き砂は真砂土と判明。
12.7　耕作土の除去完了し、埋戻土の除去にかかる。同日、豊田宅の鑿井工事にともなう掘削範囲の縄張り。
12.8　調査区の南辺で埋戻土の除去が終わり、作業員が真砂土まで掘り下げ。SD330・SD335の側石を確認。
12.11　引き続き重機掘削。西北部は埋戻土に礫多く、深い。

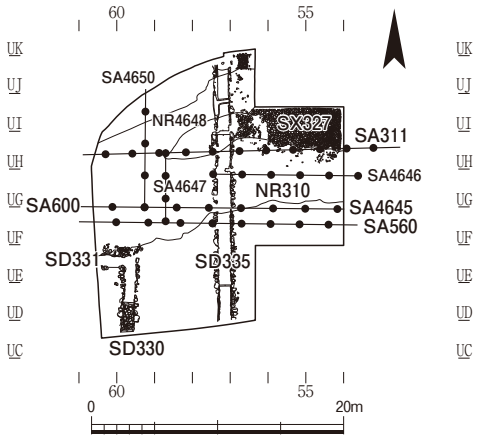


Fig. 14　飛鳥藤原第214次調査　１：600

12.12　雨天中止。
12.13　調査区西側の埋戻土はほぼ除去。SD335の側石天端とSX327との間に段差あり、重機掘削では要注意。
12.14　森川・福嶋は豊田宅で鑿井工事の立会（飛鳥藤原第215-１次）。重機掘削は東側の張り出し部のみとなる。
12.15　森川は豊田宅にて立会。扇状地の基底礫層を深く掘り込んでいる。湧水は現地表下約６m。重機掘削は調査区の東北隅のみが残る。
12.18　重機掘削は午前中で完了。午後、コンベヤ設置。夕方、関本氏と埋め戻しの段取りについて打ち合わせ。
12.19　SD335側石の天端を露出させ、南から真砂土の手掘り除去にかかる。
12.20　SD335側石およびSD330・331側石の頭出しと、真砂土の除去。両石組溝の据付掘方を確認。
12.21　引き続き真砂土の除去。UF58・59区に東西方向のトレンチ跡あり、SB325[13]が西へ延びるかを確認するための断割か。UG59区付近でSA600柱穴の検出を試みるも未完、埋戻土・真砂土まだ残るため。
12.22　真砂土除去と遺構検出。SE340の北側想定位置で柱穴らしきものを確認、SA600か。58ライン以西ではSA560・SA311らしき柱穴も検出。
12.25　SD335西側の真砂土除去終わる。SD335

13）第１次調査で検出した「建物SB325」は、第214次で再検討した結果、東西塀SA4646として再認識したが、その調査日誌ではまだ「SB325」と記してある。



Fig. 15　住民への説明会（2024年２月29日）



Fig. 16　現場見学会（2024年３月２日）

西側（UJ・UK57区）にはＡ期整地土が残るか、SX327と同じ高さ。

12.26　SX327上の真砂土除去終わる。SB325北側柱の柱穴には赤褐色の粘土ブロックと炭が含まれる。SX327南辺近くではSA311柱穴の検出が難航、とても難しい。UGラインの北側では砂利層を確認、第１次調査の「１礫」にあたるか。NR310の堆積物が残っていると思われる。

1.10　調査区西半南側から遺構検出にかかる。NR310の堆積物が５㎝厚で残っており、その下位で確認できた柱穴は、SA600東延長部にあたると考えられる（UG54・55区）。この東西塀はUG59区で北へ折れ、かつ東へも延びているのでT字形となる。第１次調査で検出した「SB325」の柱穴は北側柱と南側柱とで埋土が全く異なるため、別の遺構にすべきか。

1.11　調査区東半ではNR310の掘り残し範囲を確認。UD・UE間には黄褐色の砂質土が広がり、流水にともなう堆積物とみられる。UE58区にも砂礫層あり、これらもNR310の堆積物であろう。

1.12　UG54・55区付近においてNR310堆積物を「灰色砂礫」と称し除去、奈良時代の土器出土。

1.15　UG55・56区と、SD335の西側とで「灰色砂礫」の除去。SD330の東側では、その東側石にぶつかって堆積した砂礫層が厚く残るようである。UFライン以南の砂礫層はそのままとし、SA600柱穴の検出を進めることに。

1.16　NR310の掘り残し部分を「東西礫溝」として除去し、UG55・56区でSB325柱穴を再検出。しかし、NR310の砂礫層にまだ覆われており、全容はわからない。

1.17　56ラインの東側で「灰色砂礫」を除去し、SB325柱穴を検出したが、SA600東延長部の柱穴はよく見えない。UF57区の土坑は石田茂作のトレンチ跡と判明したので掘り下げ。SE340付近でも「灰色砂礫」を除去し、SA600柱穴を検出。

1.18　雨天中止。

1.19　UG54区東端でSA4645の柱穴を確認。UH57・58区では「灰色砂礫」を除去し、SA311柱穴を２基検出。UH59区でもSA4645柱穴を再確認したが、全体は見えず。UF59・60区のSA560柱穴は非常に見にくい。UG58区では南北に並ぶ柱穴２基を検出。

1.22　UG59区でSA600柱穴の掘方を検出、砂礫層の地山に掘り込んでいる。その抜取穴は「井戸」またはSE340として、以前の調査で掘り抜いている。UF59区のSA560柱穴は抜取穴が見えていたが、掘り下げるとはっきりしない。UF57区のSB325柱穴埋土には粘土ブロックが入らない。UF・UG58区で新たに検出した柱穴は1.8m等間。抜取穴埋土には黄色粘土ブロックが含まれる。

1.23　UG56区でSA4645の柱穴を検出。UG56区ではSB325北側柱穴の周囲で「灰色砂礫」を除去。

1.24　調査区東半で遺構検出。UG55区でSA4645の柱穴を検出したが、北半はNR310の砂礫層で見えず。56ライン沿いの南北断割ではSA311柱穴がかかるはずだが確認できず。UI56区では、SD335東肩に昭和11年調査の埋戻土を見つけたので掘り下げ。

1.25　56ライン東側の南北断割を拡幅し、地山の砂礫層まで掘り下げたところ、NR310の砂礫層でSA4645の柱穴が覆われていることを確認。SX327南端の敷石は、昭和11年調査のときに乱された部分がある模様。

1.26　UI56区の南北断割では、UHライン北側に残る黄褐色土が、削剥を受けたNR310砂礫層の上に堆積しているのを確認した。このためその上面では、SA311柱穴等は検出できないことが判明。黄褐色土は本来、SX327を覆っていた新しい土層と考えられる[14]。

14）この日以前は、SX327の南側に分布する黄褐色土は「Ａ期整地土」に相当すると考え、その上面で東西溝SD347やSA311柱穴の検出を目指していた。しかしながら、黄褐色土がNR310埋積後の堆積物であることが同日判明したため、この土層はSX327を被覆していた「黄褐色土」（第２次調査）と同一層であるとの認識をもつにいたった。

1.29　写真撮影に向けて清掃。
1.30　本日も清掃。コンベヤや道具は水田の東端へ片付け。
1.31　写真撮影は午前中で完了。午後はsfM写真撮影を終え、実測作業のための釘撒きも終えたところで降雨。
2.1　水糸を張り実測開始。SD335の北端と南端で埋戻土を除去し、北端では第１次調査時の溝断面を出す。また北壁を押し、第１次調査時の北壁を露出させたが、実際の土層断面と、当時の土層図とはかなり異なることが判明。
2.2　SX327の敷石部分は、sfMオルソ画像から書き起こして作図。その他は現場で実測。作業員はSD335埋戻土の掘り下げ。第１次調査時の北壁で分層し、基本層序を確認。
2.5　雨天中止。
2.6　排水作業ののち実測作業。
2.7　実測作業ほぼ完了し、レベル記入開始。朝日新聞・毎日新聞記者来跡、夕刻本中所長・今井部長らに説明。
2.8　実測図へのレベル記入終わり。午後、高橋克壽氏（花園大）の立ち寄りあり。
2.9　総合研究会開催のため現場休み。
2.13　排水作業ののち、柱穴の清掃と断割トレンチの設定。
2.14　SD330・335間において、UDライン沿いに東西断割を、59ライン東側にも南北断割を設け、NR310由来とみられる砂層を掘り下げ。10：30より検討会、遺構の解釈について部員同意。
2.15　昨日の断割を掘り下げ。UF57区の攪乱坑側面に、SA4645の柱穴が辛うじて残るのを確認。午後、諫早直人氏（京都府立大）ご一行らが来跡。村田泰輔（埋文センター）によれば、SD335溝内の砂層は恒常的な流水がもたらした堆積物であるという。後日、土壌サンプルを採取することに。小澤毅氏（三重大）も来跡。
2.16　10時に橿考研ご一行の現場見学。石組溝の底石の有無は、宮殿の内側・外側のちがいを示すのでは、との意見あり。調査区北西部では検討会の指摘により礫層を除去。UG59・UH59区では、SA600柱穴内の埋戻土を除去し掘り下げ。58ラインの南北断割ではNR310の断面を確認、SD347は削られていて残らない模様。UH56区の南北断割も掘り下げ。午後、SD330・335の写真撮影。
2.19　UL59区では礫層を除去した結果、SA600柱穴掘方がひと回り大きくなった。UH56区の断割ではSA311柱穴を確認。午後、庁舎にて記者発表資料の読み合わせ。産経新聞・NHK記者来る。
2.20　調査区北西部で礫を除去したところ、SA600南北部分の柱穴が軒並み大きくなる。径1.5～2.0ｍで。大垣に相応しい大きさ。UH56区の断割ではSA311柱穴を確認したものの、SD347は確認できない。
2.21　雨天中止。記者発表資料を仕上げる。
2.22　UG60区ではSA600柱穴周辺で礫を除去し、地山を壊す大きな掘方を確認。掘方埋土には礫や粘土ブロックが、抜取穴埋土には黄色粘土ブロックが含まれる。 UG58区でもSA4645の柱穴を探すが未完。共同通信記者来る。
2.27　SA600柱穴の掘り下げ完了。SD335では溝埋土を切り直し、上から順に遺物取り上げ。朝日・毎日・奈良新聞の各紙記者来る。青木敬氏（國學院大）、学生２名引率で来跡。石組溝の側石や柱穴の深さなどについて、ご意見をうかがう。
2.28　記者発表前の清掃完了し、コンベヤも撤去了。産経新聞記者来跡。
2.29　10時より庁舎にて記者発表。11～12時、現場を記者に公開。午後は断面図を作図するも、15時からの雨で作業中止。
3.1　朝から排水作業。明日予定している写真撮影部分を中心に掃除するも、現地見学会の設営はほとんどできず。13時半から大字飛鳥の住民向け見学会を実施、27名の参加あり。
3.2　10時45分から15時まで、現地見学会を開催。午前中は福嶋が、午後は森川が解説を随時おこなう。来場者数は805人、同日開催の本薬師寺の見学会（橿原市）との相乗効果。
3.4　SD335北端の溝埋土にて土壌サンプル採取（村田泰輔）。小谷徳彦氏（甲賀市）・小田主任研究員が見学。本日、砂撒き完了。
3.5　雨天のため埋戻作業を順延。作業員は休み。
3.6　排水作業をおこない、10時から埋め戻し開始（関本氏）。作業員は排出土のシート除去と機材等撤収。287番地に置いてあった土はすべて埋め戻し、302番地の土も運び始める。
3.7　埋め戻し続行、遺構面が埋まり１回目の填圧をおこなう。
3.8　埋め戻しと発電機・ノッチタンクの撤収。
3.11　埋め戻し４日目。
3.12　雨天のため埋め戻し中止。
3.13　埋め戻し５日目、午後からは耕作土の搬入にかかる。作業員は本日まで。
3.14　埋め戻し６日目。302番地に残置していた耕作土はすべて、287番地に搬入し終え、重機進入路の鉄板も撤去済。午後には埋め戻し了、畦塗りも済んだ。
3.15　重機で水田面を均す作業を15時頃までおこない、重機・キャリア撤収。午後、飛鳥総代・島田氏と辻本佳央氏に埋め戻し完了を報告。

第Ⅳ章　遺　　跡

第１節　基本層序

第１～４次調査の間でも、基本層序の認識や、遺物取り上げ時の土層名称は同じではない。そこで本書の報告範囲において、遺構変遷を再構築するにあたっては、各次調査の層序を相互に対比し、この区域の標準層序を樹立しておく必要がある。そのための資料は調査日誌や土層図・断面図、それから遺物取上ラベルの情報などであるが、第１次調査区における再発掘調査（飛鳥藤原第214次、令和５年度）で得た知見も重要である。そこで本書では、第１次から第４次調査までの調査記録を整理統合し、そのうえで第214次調査の層位認識と対照することで、石神遺跡東南部における標準層序を確立したい。調査後およそ40年を経た2023年現在、本書の執筆陣は当時の調査に参加していない研究員ばかりである。石神遺跡における調査経験の欠如を補いつつ、調査の経過や層位認識を復元するためには、調査日誌や土層図等を批判的に検討し、それらを一次資料として読み解く必要があったことを付言しておく。

第４次調査までの調査面積は延べ5,000㎡におよび、その土層図は70枚を数える。各次調査の土層図のうち、石神遺跡東南部における標準層序を端的に表しているのは次の土層図である。

①　第１次・第３次東西畦の土層図（旧UGライン[1)]）
②　第３次調査北壁土層図（または第４次調査南壁土層図）
③　第４次調査北壁土層
④　第３次調査西壁土層図

これらのうち、①～③は東西方向の土層断面図で、西下がりの地形面上に立地している石神遺跡がどのような地形改変を受けたかをよく表している。また、④は東西大垣SA600・SA560等の基壇や石敷SX700と、これらを被覆する整地土との層位的関係を示すものである。既往の概要報告に見えている土層名のほか、調査日誌や出土遺物の取上ラベルに記入された土層名（以下、取上層位という）を参考にしつつ、第１次調査区の再調査（飛鳥藤原第214次調査）で得た知見も加えると、各次調査の標準層序は次のとおりである。

第１次・第２次調査区

本書で報告する範囲の東半にあたる第１次・第２次調査区では、耕作土・床土の下位に暗褐色砂質土ないしは暗灰褐色砂質土が堆積している。このうち、暗灰褐色砂質土はⅡ期の掘立柱建物SB400を取り巻く石敷（SX327・SX370）や東西溝SD347等を直接覆い、黒色土器片を含むことから平安時代に堆積した土層である（Fig.17）。SB400の下位には層厚20㎝前後の黄灰色砂質土があり、Ⅰ期の石組溝SD335・435やSB450を直接覆っている。第２次調査の日誌では、黄灰色砂質土は「黄灰色土」、あるいは「砂質の整地土」と呼ばれた土層である。SD335の側石は、本来この土層に覆われていたはずだが、後世の浸食や石田茂作の発掘調査により、両者

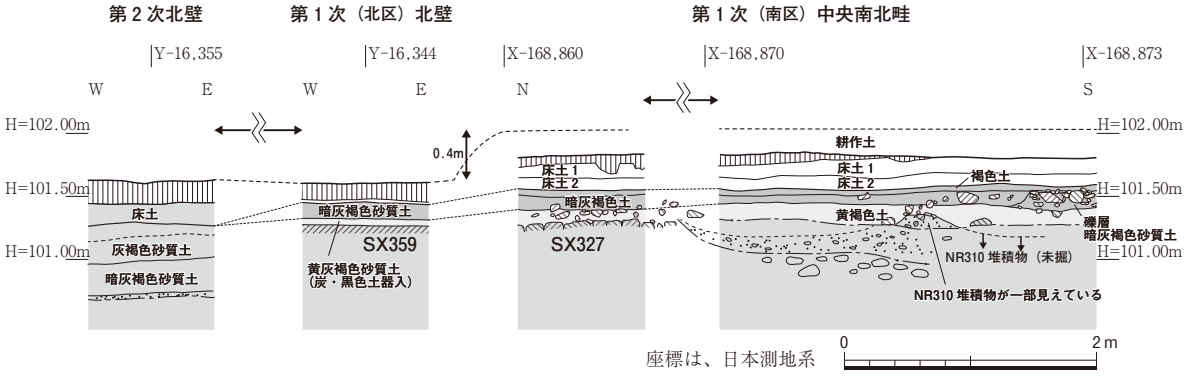


Fig. 17　第１・２次調査区の層序（柱状図）　1：60

の層位的関係を確認できる部分は一部にかぎられる。

第214次調査の成果によれば、流路NR310は第１次調査区の南半から第３次調査区の南半にかけて延びている河道跡で、扇状地面の傾斜にしたがいつつ東から西へと流下している。それは少量の水が常時流れていた河道跡というよりは、出水時の土石流で埋まった奈良時代の災害痕跡の可能性がある[2)]。第214次調査では、NR310の浸食が石敷SX327の南辺を崩し、SD335の側石を洗掘して露出させ、SD330等の側石上半を押し流したと考えられた。NR310を埋積する灰色の砂礫や粗砂・シルトは奈良時代中頃の土器を含み、第１次調査区の中央部から第３次調査区の南部にかけて堆積したようである。また、流路南側では黒色土器片を含む混礫土や砂礫・粗砂の広がりを確認したものの、上述の黄灰色砂質土は浸食により失われていた。このように、NR310は第１・３次調査区の遺構を壊し、基本層序に欠落を生じさせている。

NR310の浸食

調査地の基盤層は未固結の暗褐色砂礫で、拳大未満から人頭大までの礫を多く含んでおり、扇状地性堆積物の上部にあたると考えられる。この砂礫層の層厚が少なくとも４ｍを超えていることは、第Ⅱ章で述べたとおりである。また、この砂礫層を被覆する黄褐色粘土もいわゆる「地山」にあたり、その上面では古墳時代の竪穴建物[3)]や弥生時代の土坑を検出している。しかし、第１次調査区の西半ではNR310の浸食等により、黄褐色粘土は消失したと考えられる。

このほか、第１次調査区の北西部において、床土上面で検出した不整形の大土坑は、明治35・36年に石造物を掘り出したときの探索坑で、この範囲では基本層序が広く攪乱を受けている。

第３次・第４次調査区

第１次・第２次調査区の西側に位置する第３次・第４次調査区では、耕作土・床土の下位に褐色砂質土が厚く堆積している。ただし両区とも、褐色砂質土はおもに西半にしか残らず、東半では削平を受けて失われたと考えられる（水田の造成と削平については後述）。第３次調査では通称「褐色土」と「灰褐色土」、第４次調査では「淡褐色土」と「褐色土」とに分けて掘り下げているが、それぞれは褐色砂質土の上部と下部とを指しているとみられる。なお、第４次調査では、褐色砂質土をおおむね除去してから、遺構検出面上に残存していたこの土層を「土坑」・「大土坑」と称して逐次除去していったことが調査日誌からうかがえる。これらの多くは遺構カードに上書きされたが、遺構平面図には記入されず、遺構番号も付していないので、本書では遺構として認識していない。

褐色砂質土は炭や礫、土器や金属製品・冶金関連遺物などを多く含んでおり、土質や色調か

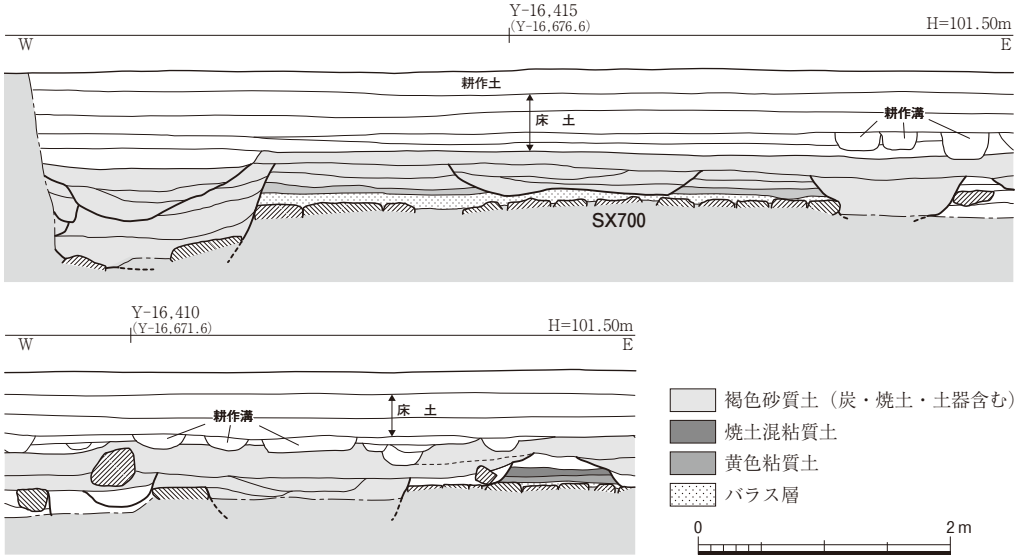


Fig. 18　第３次調査区北壁土層図（部分）　1：60

らも、第５～７次調査区と第10～12次調査区に広く分布している「含炭褐色土」や、水落遺跡の貼石遺構を埋めている褐色砂質土に対比できる。第３次調査の「褐色土」や、第４次調査の「淡褐色土」出土土器は細片化が進んでいることから、褐色砂質土の上部は長年の耕作で擾乱を受けている可能性が高い。これに対し、その下部にあたる「灰褐色土」・「褐色土」の出土土器は保存状態がよい個体を多数含み、水田の造成や耕作の影響をあまり受けていない。その大多数は飛鳥Ⅳのもので、この土層の堆積時期を示していると考えられる。

遺跡南部の標準層序

褐色砂質土の直下には、基盤層である暗褐色砂礫が露出している範囲もあるが、「黄色山土」を含む灰褐色砂質土や、石敷を覆う黄色粘質土が広がる範囲もある。第３次調査区の北壁西半には、Ⅰ期の石敷SX700を薄いバラス層が覆い、その直上に黄色粘質土、焼土層、褐色砂質土の累重を確認できる地点（日本測地系Y-16,407付近、Fig.18）があり、石神遺跡南部における標準層序の模式地となろう。このうち、黄色粘質土は石敷上や建物の周囲にのみ分布し、調査区全体に広がる土層ではないが、この層準がⅡ期の遺構検出面にあたると考えられる。焼土層や焼土混粘質土も残存範囲がかぎられるが、その直上を褐色砂質土が覆っている点は重要である。

1）ただし、第１次調査の東西畦・南北畦は、調査中盤に図化を終え撤去しているため、その後に検出し掘り下げた流路NR310と、これを埋積している堆積物は描かれていない。

2）地形図によれば、飛鳥坐神社の北側付近を扇頂とする、西下がりの小さな扇状地が発達している。つまり、石神遺跡が立地する扇状地面を発達させたのと同じ営力が、奈良時代以降に回復したことで、その表面は土砂が再び堆積する場となった。NR310は土石流の痕跡ともいえ、石神遺跡の南辺付近をその土砂で覆ったのである。

3）第１次調査区の東半で検出した竪穴建物SI315や、飛鳥藤原第209次調査のSI4612・4613などがこれにあたる。松永悦枝・谷澤亜里ほか「石神遺跡東方の調査―第209・212次」『発掘調査報告2023』。

第２節　整地土と遺構検出面

整地土の認識と記載例

石神遺跡の概要報告には、７世紀代の整地土にかんする記事が散見される。それらの記事によれば、層位を異にする２つの整地土が存在していたことがうかがえる。例えば、第２次調査のときは「・・・・・北半の本調査区では、Ａ期の礫敷や整地土層の残りがよく、その上面で一辺１ｍ余の方形柱掘形と、黄色粘土を含む柱抜取穴が明瞭に検出された。」（『藤原概報13』17頁）と、Ａ期整地土にかんする記事がある。また第４次調査のときは、「西半部は耕土、床土、淡褐色土、褐色土の下にＣ期の整地土である含炭暗褐色土（10～20㎝）、Ａ－２期の整地土である山土を含む灰褐色土が部分的に認められ、以下、暗褐色砂礫となる。」（『藤原概報15』55頁）とあり、Ａ期・Ｃ期の整地土が累重関係にあったことが読み取れる。また、第８次調査の概報でも、Ａ－３期の遺構は「Ａ－２期以前の遺構を一部は利用するがほとんどを廃し、大規模な整地を伴う計画的な造営を行っている。」（『藤原概報19』50頁）と述べており、Ａ期の中でも整地土を指標に２つの小時期を識別できたようである。現に第７次調査区では、石組溝SD900（Ａ－２期）は断割調査で一部を確認したのみだが、これはＡ－３期の建物遺構（SB980・SB990・SB1200）を保存するために、この整地土を掘り下げなかったからである。このように、石神遺跡には層位を異にする２つの整地土が存在していたことがうかがえるものの、こうした整地土が基本層序のどの層位にあたり、どの範囲に分布していたかは明確ではない。そこで以下、前項で述べた基本層序の中で、これら整地土がどの土層に相当するかを示しておく。

整地土Ａ

SD890とSD900との層位的関係（第５～７次調査区）が示すように、旧案でいうＡ－２期以前の遺構は、Ａ－３期整地土と呼びうる盛土層によって覆われていたことが知られている。この整地土は「山土を含む灰褐色土」（第５次調査『藤原概報16』51頁）であり、または「黄色細砂質土」（第６次調査『藤原概報17』55頁）であったともいう。第２次調査の日誌では、７世紀前半から中葉にかけての石組溝SD335・435や建物SB450を覆う整地土を「黄灰色砂質土」と呼んでいる。また、第３次調査の調査日誌では、石敷SX700を覆う黄色粘質土を「黄色整地土」、第４次調査でも「黄色粘土（整地土）」などと呼んでいる。つまりＡ－３期整地土は、旧案のＡ－１・２期（７世紀中葉まで）の遺構群を覆い、かつＡ－３期およびＢ期遺構群の基盤層となっている盛土層で、前項で述べた黄灰色砂質土（第１・２次調査区）や、黄色粘質土（第３・４次調査区）に相当する。第214次調査の成果を参考にすると、石敷SX327と、石組溝SD335の側石天端との間に介在する土層がＡ期整地土の指標となる。この土層はⅠ期の石敷SX700がよく残る第３次調査区の西北部にも「黄色整地土」として、広く残存していたと考えられる。本書では新たな遺構変遷案に基づき、これらの土層を「**整地土Ａ**」と呼び替える。旧案ではこの整地土で、Ａ－２期以前とＡ－３期とを区別していたが、本書で提案する新しい遺構変遷案では、Ⅰ期遺構群とⅡ期のそれらが層位的に区別される。

整地土Ｂ

既往の『概報』では、７世紀後半（旧案のＢ期）に整地をおこなっていた、という共通認識がうかがえるものの、このときの整地土に関する必要十分な記事は少ない。しかし第５次調査以降、「含炭褐色土」と称して遺物を取り上げた土層がこれにあたる可能性があり、最近ではその出土土器の概要を報告するために、便宜的に「Ｂ期整地土」と呼んできた[1)]。それは炭・焼

土・礫を多く含んでおり、上述の基本層序では褐色砂質土と称した一連の土層に相当する。その広がりは第３次～７次調査区にと、第10～12次調査区の全域におよび、水落遺跡SB200貼石遺構の埋立土である炭化物層および褐色砂質土（『藤原報告Ⅳ』39頁）にも対比できることから、石神遺跡から水落遺跡にかけての広い範囲に分布していると考えられる。ただし、第３次・第４次調査では、この土層には「褐色土」または「灰褐土」などと、第５次調査以降の「含炭褐色土」とは異なる土層名を与えているため、相互の対応関係を整理しておく必要がある。

第３次調査の「灰褐色土」と第４次調査の「褐色土」は炭や焼土、礫を多く含んでおり、第５次調査以降の「含炭褐色土」に対比できる。出土土器の内容や出土量からみて、これらの炭混じり土は一連の盛土層で、Ｂ期整地土にあたると考えられる。そこで本書では、新しい遺構変遷案に基づき、これらの土層を「**整地土Ｂ**」と呼び替える。本書で提案する新しい遺構変遷案では、Ⅱ期遺構群とⅢ期のそれらが層位的に区別される。ただし次節で述べるように、炭・焼土等を含む褐色土の分布は西側に偏っており、第３次調査区では旧24ライン以西、第４次調査区ではおもに旧26ライン以西にかぎられていたことが土層図から読み取れる。これより東側の「灰褐色土」・「褐色土」は、厳密にいえば整地土Ｂに当たらない可能性もある。

石神遺跡の西部に広く分布している炭混じりの褐色砂質土は、石神遺跡の西南方に位置する水落遺跡にも分布している。『藤原報告Ⅳ』によれば、水落遺跡の貼石遺構を埋めている土は下層：灰褐色粘土層（廃絶直後の堆積層）と上層：暗褐色粘質土層（貼石を埋め立てた整地層）とからなり、後者は炭化物の多い下部（炭化物層）と、これが少ない上部（砂質土層）とに分かれていたという（39頁）。これら貼石遺構埋土からは坩堝・鞴羽口・鉱滓が多量に出土している。水落遺跡の側から見ると、最も近接している石神遺跡第３次調査区の「褐色土」および「灰褐色土」と、貼石遺構を埋めている暗褐色粘質土とは、層相や出土遺物との両方でまったく同じ土層である。

水落遺跡の暗褐色土

水落遺跡にはＢ期の建物が４棟あり、このうちＢ－１期のSB248は、貼石の埋立土に掘り込んだ掘立柱建物である[2)]。しかし『藤原報告Ⅳ』によれば、その柱穴すべてが、暗褐色粘質土の上面で検出できたわけではない。SB248東側柱列の柱掘方は貼石遺構の東辺と重複しているが実際には「一部の柱穴については貼石遺構の土層確認用の断面観察によって、埋土上面から掘り込むことを確認しているが、多くは検出時にはそれと気付かず、貼石遺構底石の抜取穴内で確認した」という（64頁、傍線加筆）。暗褐色粘質土上面では、柱穴等の検出が容易でなかったことがうかがえる。この事実を重視すると、石神遺跡のほうでも褐色砂質土の層準における、７世紀後半に降る遺構群（Ⅲ期遺構群）の検出が技術的に困難であった可能性がある。

遺構検出面

ここまでを理念的にまとめると、第１～４次調査区の遺構検出面は、上位から順に①整地土Ｂの上面、②整地土Ａの上面、そして③整地土Ａの下面の３面である。例えば第３次調査では、床土より下位の掘り下げは「褐色土」除去（８月）と遺構検出、「灰褐色土」除去（９・10月）、「黄色整地土」上面で遺構検出（９月14日以降）、「黄色整地土」の除去と石敷SX700の検出（10月）、西北部で「黄色整地土」の除去（11月末）と進んでいる。同様に第４次調査でも、床土より下位は「淡褐色土」の除去（８月）、「褐色土」の除去（８・９月）、「土坑」「大土坑」の掘り下げ（９月下旬）と進んだ。ただし第３次調査の場合、①の遺構検出は事実上、「灰褐色土」の掘り下げ後となり、第４次調査のときも、①は「褐色土」の下位であったように見受けられる。

第３節　水田の造成と削平

水田面の高低差

石神遺跡が立地している扇状地面は、原地形にしたがい東から西へと緩やかに傾斜している。このため、小字丁通りから小字石神にかけては東西に３段の水田面からなり、東から西へ、また南から北へと順次低くなっている。この水田段差は扇状地地形にしたがうものだが、飛鳥時代の地割や区画を反映しているのではなく、後世の水田造成によって形成されたものである。本書の報告範囲にかぎると、調査時における水田面の標高は第１次調査区（飛鳥287番地）が102.0m、第２次調査区（飛鳥283番地）が101.7mで、西側の第３次調査区・第４次調査区はそれぞれ101.2～101.3mと100.9～101.1mである。水田面の高低差が最も大きいのは第１次・第３次調査区の間で、その比高は約0.7mである。また、第１次・第４次調査区間の比高は約1.0mにおよぶ。

第３次調査区は現在、１筆の水田となっているが、発掘調査時には旧24ライン付近に南北方向の畦畔があり、東西２筆の水田に分かれていた。この畦畔の東側が飛鳥286-１番地、西側が飛鳥285-１番地である。同調査の北壁土層図等によれば、286-１番地は標高101.3m、285-１番地は101.2mで西側が低い。ここで重要なのは、285-１番地には含炭褐色砂質土（整地土Ｂ相当層）が層厚10～40cmで薄く残存しているのに対し、286-１番地ではこの土層が欠落していることである（Fig.19）。286-１番地はⅢ期の大溝SD347・640の曲折部にあたるが、ここには含炭褐色砂質土が残っていないため、大溝と整地土との層位的関係はあきらかにできない。また、第４次調査区（飛鳥284-１番地）にも旧26ライン付近に南北方向の畦畔があり、その西側の１筆（100.8m）は、東側の１筆（101.0m）よりも一段低くなっていた。その北壁・南壁土層

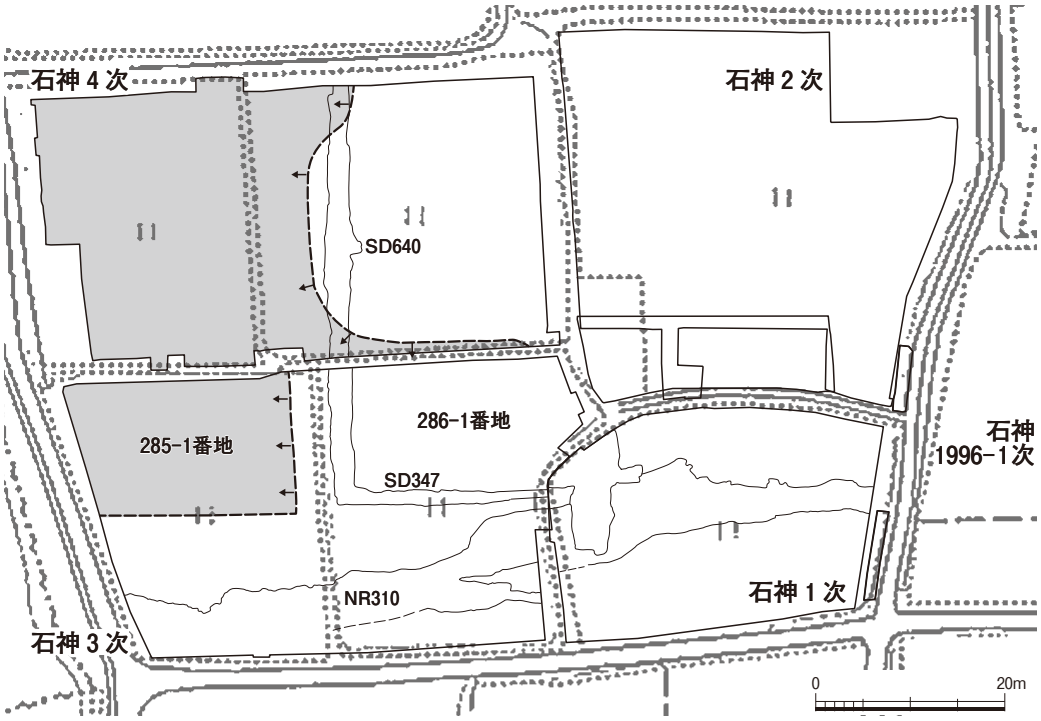


Fig. 19　第１～４次調査区における含炭褐色砂質土の分布（アミ部分）　1：800

図によれば、整地土Ｂに相当する含炭褐色砂質土はおもに西半に分布し、東半にはあまり残らない。また「灰褐色土」（第３次）や「褐色土」（第４次）の出土遺物が、第３・４次調査区の東半で、とくにⅢ期の南北溝SD640よりも東側で少なくなるのも、整地土Ｂ相当層が耕起によって削平を受けているため、と考えるのが自然である。

このように、整地土Ｂは第３・４次調査区の東半には分布しないか、あるいは西半に比し層厚が薄い。これはこのような水田地形が、原地形の高い方を階段状に削平することで形成されたからである。その結果、石神遺跡における水田の造成は整地土Ｂを一部消失させただけでなく、その下層にあたるⅠ期の遺構面も壊した可能性が高い[3)]が、いずれにせよ第１・２次調査区と第３・４次調査区との間の、基本層序の不連続を惹起することとなった。いっぽう飛鳥285-１番地でも、水田面を造り出す際に一定程度の削平を受けたとみられるが、耕起を繰り返しても整地土Ｂは残存したのである。これはこの整地土が、西下がりの地形に応じて層厚を増していたうえに、耕作の影響が東半ほど深くおよばなかったためである。

第３・４次調査区の間では、耕作に起因するとみられる土層の欠落や不連続は確認できないものの、含炭褐色砂質土の層厚（日本測地系Ｙ-16,407地点付近）は、第３次調査区の約25～40cmに対し、第４次調査区では約20cmとなっており、後者のほうが薄い（Fig.20）。これは水田面が低い第４次調査区において、耕作の影響が深くまでおよんだことを意味する。ただし、その下位にある山土を含む黄褐色土（整地土Ａ）の層厚に変化はなく、これに覆われる石敷SX700もよく残っている。本書の報告範囲のうち、基本層序が最もよく残るのは第３次調査区の西北部で、それはSA600の北側であるといえよう。

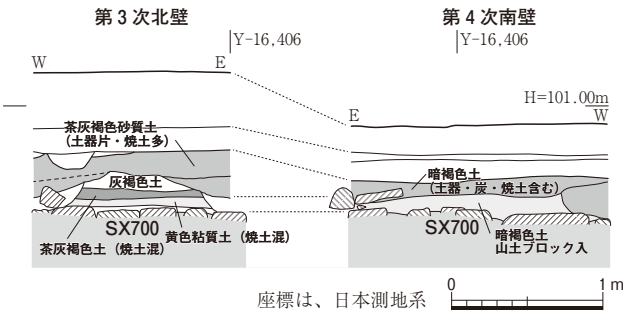


Fig. 20　褐色砂質土の層位的連続性　1：50

1）森川 実・大澤正吾「石神遺跡Ｂ期整地土・SD640出土の土器群―石神遺跡第３～５次・第10～12次」『紀要2018』。この短報では、「Ｂ期整地土（取り上げ名「含炭褐色土」）は天武朝の大規模な改修にともなう盛土」であると述べた（146頁）が、第３次調査区の「灰褐色土」と、第４次調査区の「褐色土」がこの「含炭褐色土」と同一の整地土であり、さらには水落遺跡の暗褐色土にも相当することには触れていない。

2）『藤原報告Ⅳ』によると、水落遺跡のＢ期は「Ａ期の遺構の廃絶後、周囲の貼石遺構を埋めるなど周辺部を含めた大規模な整地をおこなって造営」された時期（63頁）とされる。このうち、Ａ期はSB200を中心とする斉明朝の漏刻台の時期であるから、これよりも降るＢ期は石神遺跡のＢ期（旧案）に対比できよう。水落遺跡のＢ期建物群は、石神遺跡の整地土Ｂに対比できる暗褐色土上面から柱穴を掘り込んでいるため、本書の年代的枠組ではⅢ期相当となる。

3）Ⅱ期の石組溝SD332は第３次・第４次調査区の東辺で検出した南北方向の石組溝であるが、その側石の大部分は削平によって失われており、わずかに底石を残すのみであった。ところが、第１次調査区の西南部で検出したSD330・331の側石はなお１石分が残っており、耕作による影響は底石までおよんでいない。同じ石組溝でも、水田面ごとに削平の度合いは大きく異なる。このように西下がりの水田地形では、水田の東半で遺構の保存状態が不良となる傾向がある。

第４節　遺構各説

本書で報告対象とする第１～４次および石神遺跡1990-１次調査、飛鳥藤原第214次調査（以下、第214次調査とする）では、６世紀以前から中世までの遺構を数多く検出した。加えて、明治時代の石造物発見に関わる痕跡も検出している。以下では、７世紀代の遺構、奈良時代以降のⅣ期の遺構、古墳時代以前（６世紀以前）の遺構、そして明治時代の石造物発見に関連する遺構にわけて報告する[1)]。なお、７世紀の遺構に関しては、Ａ～Ｃ期という従来の時期区分に代えて、Ⅰ～Ⅲ期という新たな区分を考案した。この区分法や遺構変遷の変更点は、Ⅶ章第４・５節を参照されたい。

Ａ　Ⅰ期の遺構（７世紀前半）

ⅰ　Ⅰ-１期

Ⅰ期の区画施設

掘立柱塀SA600（PLAN４・７，Ph.15・20・24）　第３次調査区南半および第214次調査区西部で検出した基壇をもつ掘立柱の東西塀。西の第10次調査区へもつづく。第１次調査では未検出であったが、その再調査である第214次調査で新たに検出した。1936年の発掘調査では、その東端の柱穴を発見したものの、石田茂作はこれを「円形井戸を思わせる穴」と認識しており[2)]、奈文研の第１次調査でもこの見方を踏襲したため[3)]、柱穴とは認識していない。しかし第214次調査では、この「井戸」の周囲で柱掘方を検出し、SA600東端の柱穴として再認識するとともに、1936年の調査時に柱痕跡部分を「井戸」として掘り抜いていたことが判明した。

SA600の造営方位はほぼ正方位にのる。柱掘方は地山面から穿つが、第３次調査区西辺部は

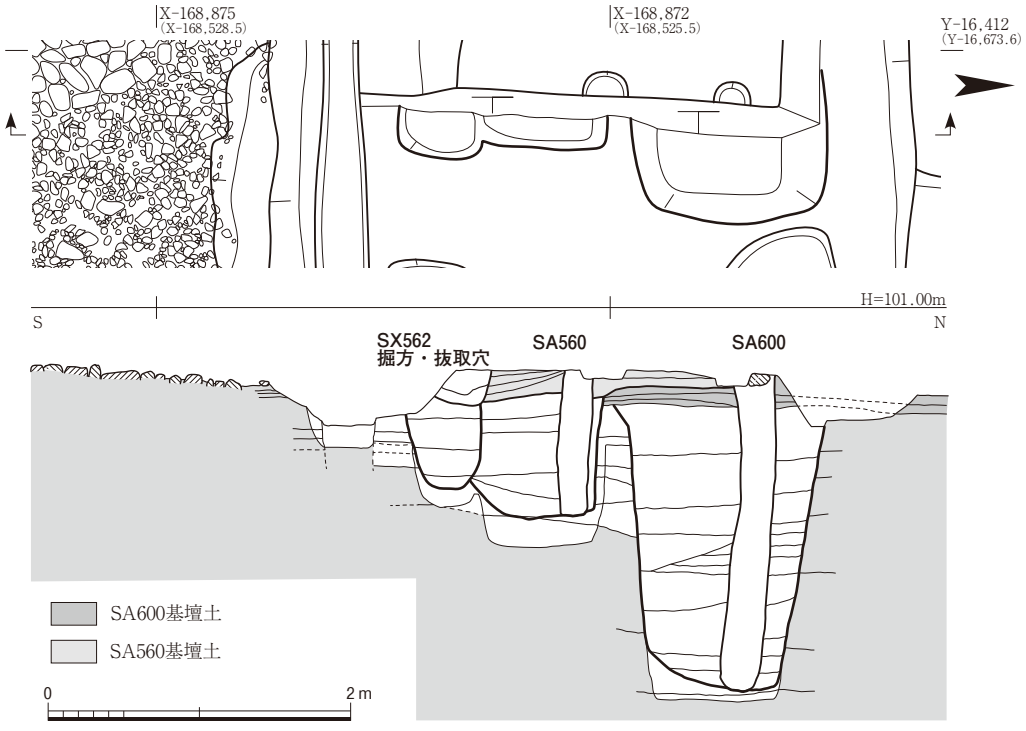


Fig. 21　SA600・560基壇土断面図　1：50

地形が低く、調査区西端から４基ほどまでは一旦、整地をおこなった後に柱穴を掘っている。この整地土は暗褐色砂質土で、厚さは調査区西端で10～20㎝である。

SA600の柱穴は、第３次調査区では20基、東西19間分（47m）を、第214次調査区では２基、東西２間分（４m）を検出した。柱間寸法は約2.5mである。柱掘方は一辺1.4～1.9mの隅丸方形を呈し、深さは約２mに達する。いずれの柱穴にも径30～40㎝の柱痕跡がある。一部の柱穴では柱抜取穴を検出しており、抜取穴を掘って地中部分で柱を切断したものもある。柱掘方の埋土は礫を含む暗褐色または灰褐色砂質土で、柱痕跡および柱抜取穴の埋土は黄色粘土ブロックを含む黄褐色もしくは茶褐色砂質土である。なお、SA600の柱抜取穴（第３次調査区西端から５基目）から奥山廃寺式軒丸瓦が出土した。

基　　壇

第３次調査区で検出した基壇は、南北幅約３m、高さ15㎝ほどが残存し、柱を据えた後に、厚さ５㎝弱の版築によって築造される（Fig.21）。基壇土は黄褐色もしくは暗褐色粘質土で、基壇縁には化粧石を並べていたとみられ、基壇南面で化粧石の据付掘方と抜取穴を検出した。基壇の出は南面で柱心から1.9m、北面で1.1mと、南面がやや広い。なお、第214次調査区では流路NR310の浸食で大きく削平され、基壇土は未検出である。

第214次調査区内のSA600はその東端で北へと折れ、南北塀SA4650となる。また、第３次調査区の西隣に位置する第10次調査区では、SA600の西延長部の柱穴４基を検出し、さらに西に7.5mを隔てて、柱筋を揃える大型の掘立柱塀SA1600を確認した。柱間寸法にややばらつきがあるが、造営方位はSA600と等しく、SA1600はSA600と一連の遺構と考えられる。SA1600も含めたSA600の検出総長は102m以上におよぶ。

石組溝と並走する区画施設

SA600は後述の石組溝SD334・335・435と同時期に機能した遺構で、東に取り付くSA4645との関係から、Ⅰ－２期まで存続すると考えられる。柱穴の規模は藤原宮の大垣に匹敵するもの[4)]であることから、SA600はⅠ期の石神遺跡南限を区切る大規模な区画施設と考えられる。

掘立柱塀SA4650（PLAN２～４，Ph.20）

第214次調査で新たに検出した掘立柱の南北塀。流路NR310の浸食もしくは明治時代の石造物探索にともなう攪乱が著しいが、柱穴を３基検出した。造営方位はほぼ正方位にのり、SA600東端の柱穴を始点に北進し、第２次調査区よりもさらに北へ延びると推定される。同時期の遺構である石組溝SD335との距離は、溝心と柱心との間で約６mである。SA600と同様に基壇を有することが推定されるが、攪乱が著しく、未検出である。

SA4650の柱掘方は一辺約1.4mの隅丸方形で、検出面からの深さは約1.4m、柱間寸法は約2.5mである（Fig.22）。柱掘方の埋土は礫や土器片、黒色粘土ブロックを含む灰褐色

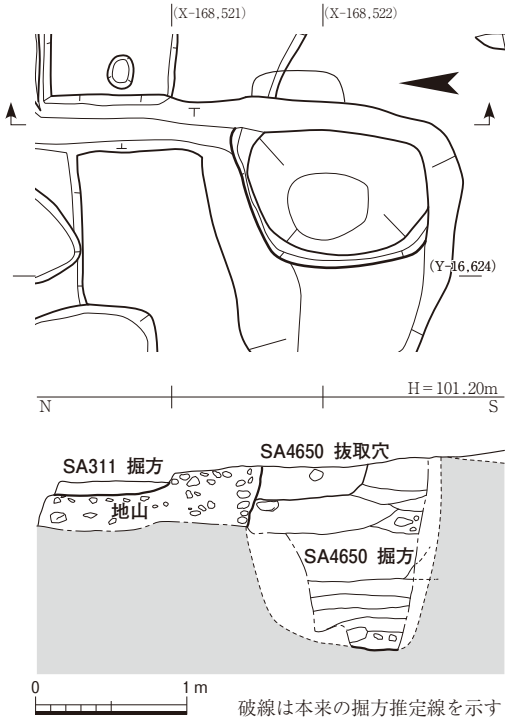


Fig. 22　SA4650柱穴断面図　1：50

粘質土で、柱抜取穴は小礫や黄褐色粘土ブロックを含む暗褐色粘質土である。

SA4650は第１次調査時に未検出であったが、第１次調査北区の推定柱位置に黄褐色粘土を含む茶灰褐色粘質土の柱穴を検出しており、これはその柱抜取穴と推定される。第２次調査区では、南北塀SA480の柱穴がSA4650の推定柱位置に合致することから、前者は後者の一部である可能性がある[5)]。

SA4650はSA600に接続するⅠ－１・２期の大規模な区画塀であり、特にⅠ－１期においては石神遺跡の東を限る区画施設であったと考えられる。なお、SA4650が第２次調査区よりさらに北へ延びると仮定すると、石神遺跡1990－１次調査区で検出した東西塀SA1460と接続する可能性がある。その場合、SA600・SA4650・SA1460に沿うかたちで、石組溝SD334・335・435が併走し、両者が一体的に機能していたといえる。

Ⅰ期の区画外を流れる基幹水路

石組溝SD334・335・435（PLAN２～４，Ph.９・11・21・22・24）　第１・２次調査区において、整地土Ａである灰黄褐色粘質土の下位で検出した一連の石組溝。このうち、SD334・335は1936年の発掘調査で発見され、近くで出土した石造物（石田茂作のいう「噴水塔」）への給水や、「曲水宴」との関わりでかつて注目された。この石組溝は、石田らが「斉明朝の饗宴場」説を着想する際のおもな根拠となっており、研究史上でも重要な遺構である。

SD334は第１次調査区西南隅から東に約７m進み、緩やかに屈曲してSD335となる。SD335は第１次調査区から第２次調査区にかけて約60m北流し、東へ緩やかに屈曲してSD435となる。後者の検出区間は約18mで、調査区外の東へと延びている。SD334の溝幅は内法で0.8～0.9m、深さは0.7mで、側石には幅30～60cm、高さ30～60cmの自然石を用いる（Fig.23・24）。西半約２mの側石４石は幅55cm、高さ50～70cmの大型の一枚石を１石ずつ立て並べている。東半では幅30～50cm、高さ30～60cmのやや大型の石の上に、幅30～40cm、高さ20～30cmの小型の石を２～３段横積みする。底石はなく、抜取痕跡もみられない。SD335・435は、上端の溝幅を1.2m、下端の溝幅を0.9mとし、逆台形断面を呈する。溝の深さは1.0mで、側石には幅30～70cm、高さ30～40cmの自然石を用いて、３～４段横積みして造られる。SD334と同じく、底石はない。

第１次調査区内のSD334・335の溝内は、1936年の発掘調査時に大半が完掘状態であったが、水田畦畔直下の未掘部分に本来の溝埋土が残されていた。第214次調査時の断面観察によれば、底部から60cmまでは雲母や黄褐色細砂を多く含み、粗砂と細砂・シルトが互層をなしている（Fig.23・151参照）。この水成堆積物の直上には、埋立土とみられる炭化物や雲母が混じる褐色粘質土が25cmの厚さで堆積する。最上層の15cmほどは、石敷SX327の敷設面である整地土Ａが溝内にも落ち込んで堆積したものである。側石の大きさや積み方は、後述のSD330・331とは異なり、両者の構築時期差がうかがえる。なお第214次調査では、SD335埋土の堆積構造をあきらかにするべく土壌採取を実施した（第Ⅵ章第３節、255頁参照）。

SD335はその西側石が７世紀前半の東西塀SA4645（Ⅰ－２期）に壊されており、これより古い。水成堆積物からは飛鳥Ⅰの土器が出土していることから、これら一連の石組溝はⅠ－１期の遺構と位置付けられる。SD435は第２次調査区より東へつづいており、Ⅰ－１期の遺跡区画がさらに東方へ広がることを示唆する。先述のように、区画塀SA600・4650およびSA1460の曲折に沿いつつ、これらと一体的に機能した石組溝と考えられ、区画施設の外側を流れる基幹水路の役割が推定される。

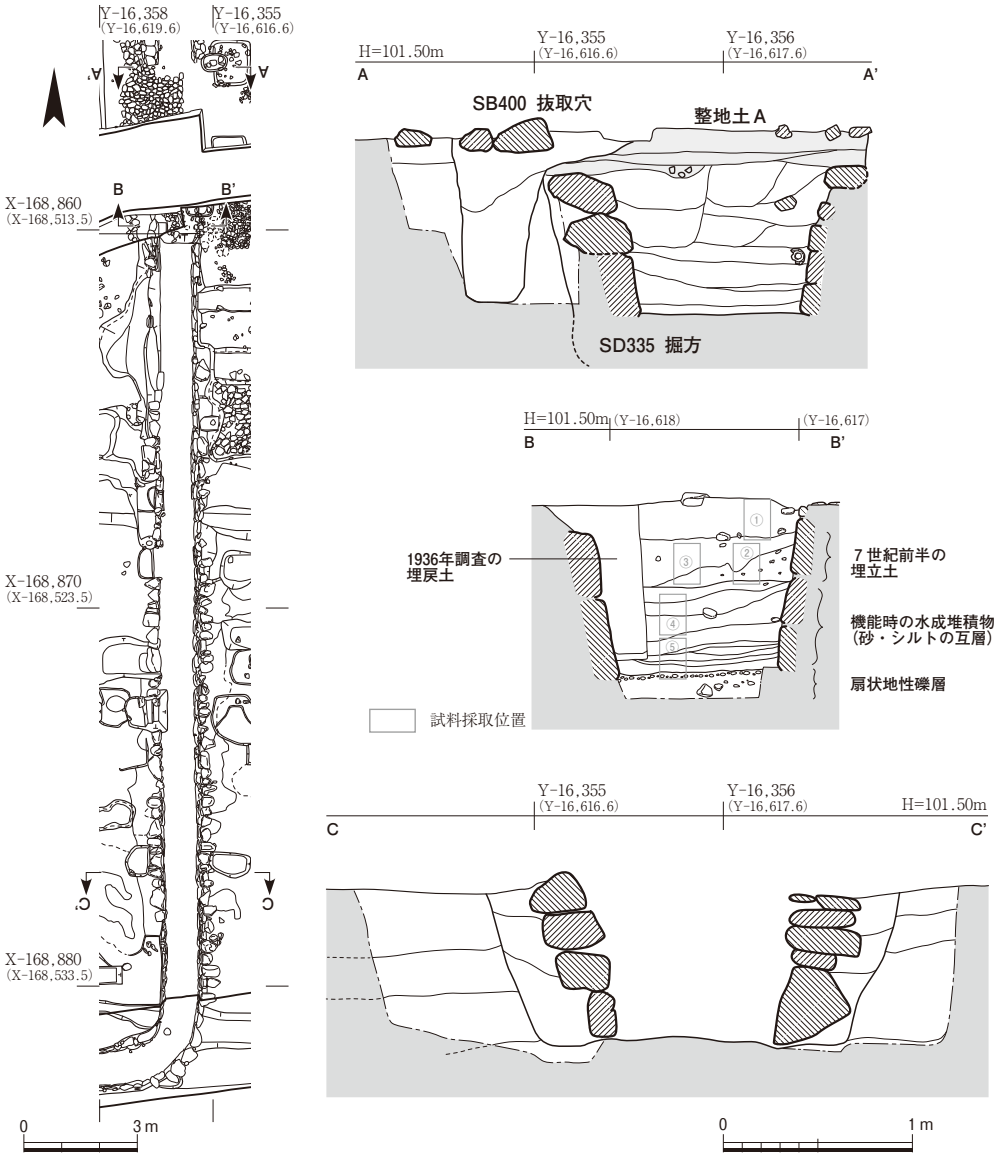
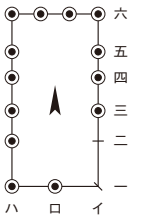


Fig. 23　SD335断面図　1：40（断面位置図は1：200）

掘立柱建物SB745（PLAN６，Ph.18）　第４次調査区中央部で検出した南北棟の掘立柱建物。造営方位は方眼北に対して東に約２°振れる。桁行５間（11.4m）、梁行全長は5.8mであるが、南妻柱列は柱間を２間、北妻柱列は柱間を３間に割る。桁行の柱間寸法は1.7～3.0mと不揃いで、梁行は南面が2.9m、北面が約1.9mである。柱掘方は一辺1.2mの隅丸方形で、深さは検出面から0.6～1.2mである。いずれの柱掘方にも径20㎝ほどの柱痕跡が残る。柱掘方の埋土は暗褐色粘質土、柱痕跡の埋土は黄色粘土の山土を含む暗褐色粘質土で、Ⅰ期の柱穴に共通する特徴を示す。



SB745東南部は総柱建物SB735（Ⅰ－２期）の西面石敷SX743に覆われており、これらより古い遺構である。北妻柱列を３間とする意図は北面中央間に出入口を設けるためと推察され、そうであるならば、妻入の建物であったと考えられる。石神遺跡の建物遺構では、SB745のように妻柱の柱間が異なる例は他になく、特異な形式といえる。出入口があるとすれば、北に位置

妻入建物

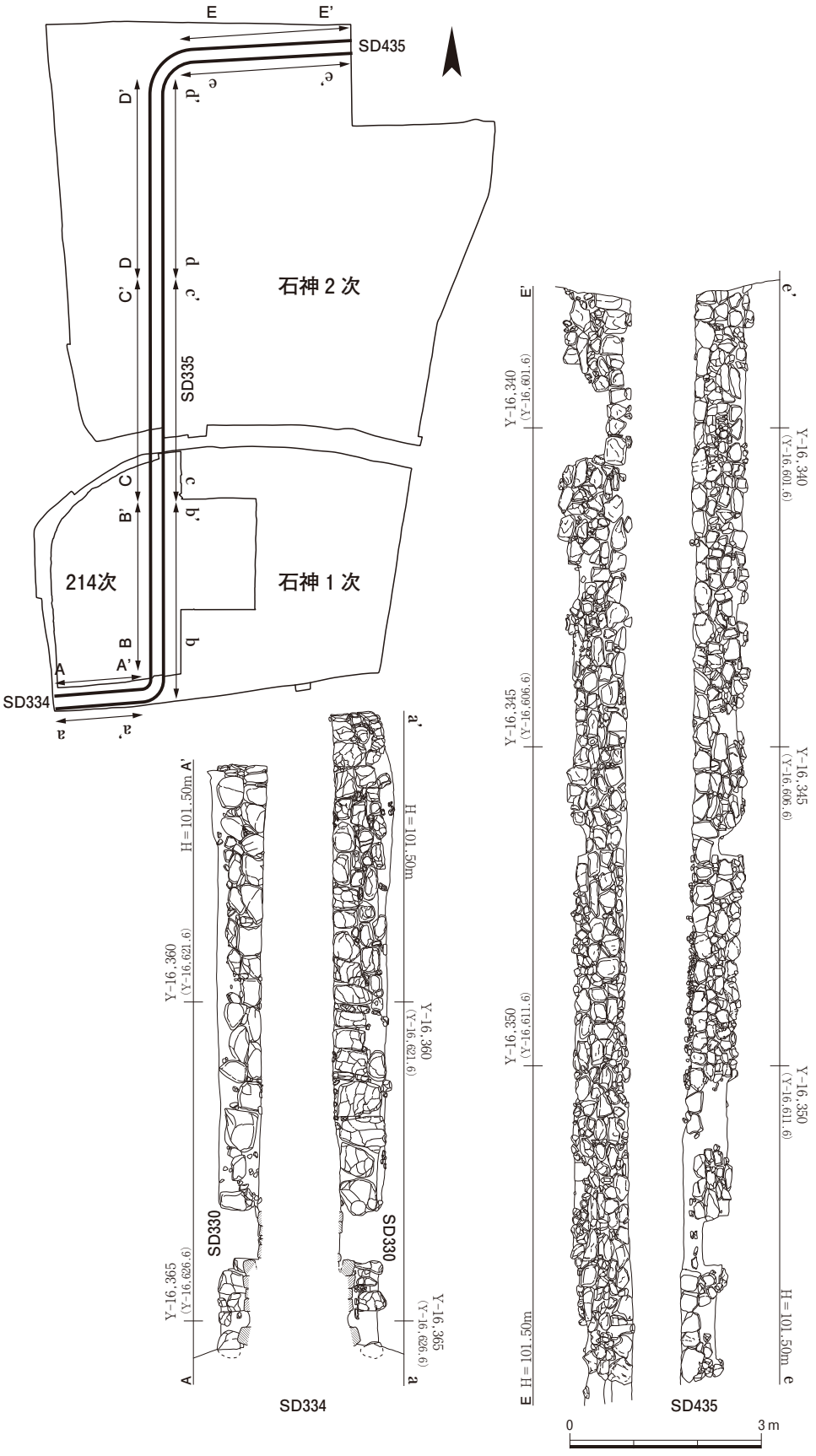
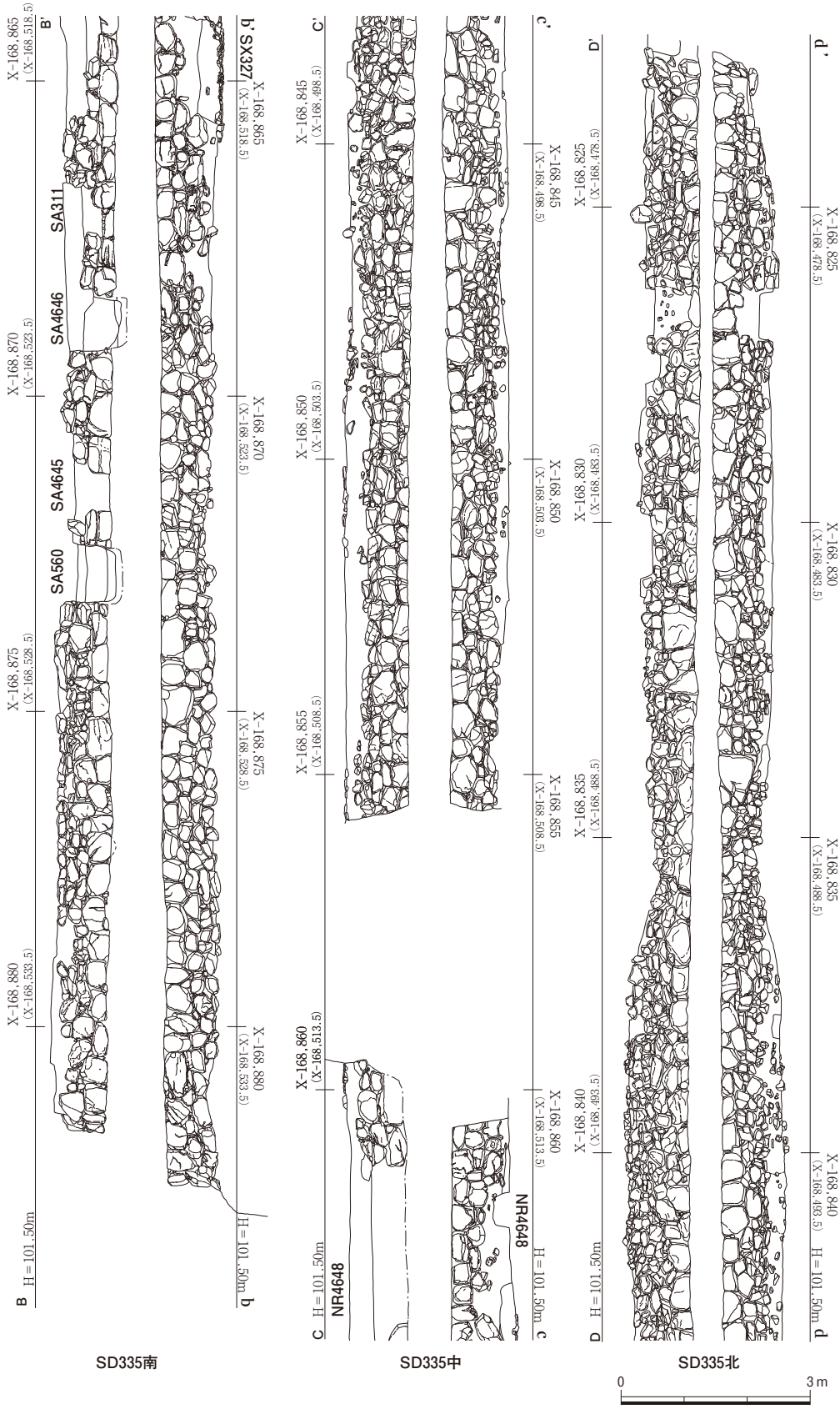


Fig. 24　SD334・335・435の側石立面図　1：100


SD335南
SD335中
SD335北
SA311
SA4646
SA4645
SA560
SX327
NR4648
NR4648
B
B'
C
C'
D
D'
q
q'
p
p'
H=101.50m
X-168,880 (X-168,533.5)
X-168,875 (X-168,528.5)
X-168,870 (X-168,523.5)
X-168,865 (X-168,518.5)
X-168,860 (X-168,513.5)
X-168,855 (X-168,508.5)
X-168,850 (X-168,503.5)
X-168,845 (X-168,498.5)
X-168,840 (X-168,493.5)
X-168,835 (X-168,488.5)
X-168,830 (X-168,483.5)
X-168,825 (X-168,478.5)
X-169,880
X-169,875
X-169,870
X-169,865
0
3m

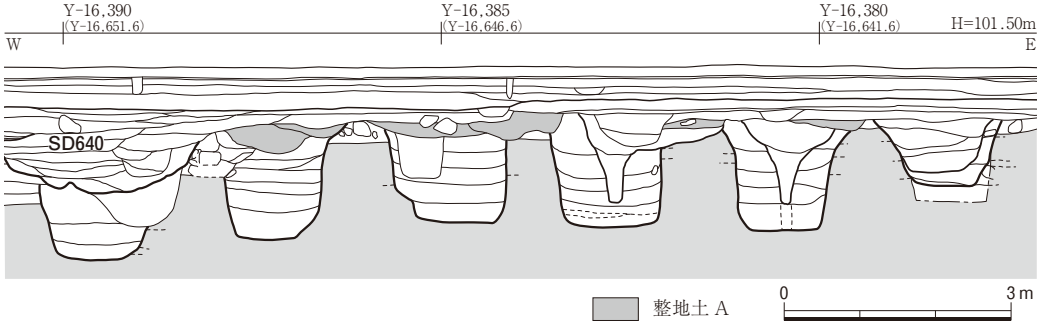
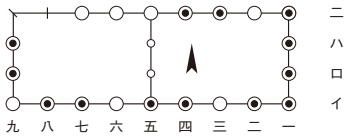


Fig. 25　SB750柱穴断面図　1：100

するSB750（Ⅰ-1・2期）との関係が示唆される。



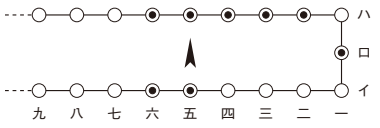
掘立柱建物SB750（PLAN5・6，Ph.16・24）　第4次調査区東北部で検出した東西棟の掘立柱建物。造営方位は方眼北に対して東に約2°振れる。桁行8間（18.2m）、梁行3間（6.1m）で、柱間寸法は桁行が約2.3m、梁行が約2.0mである。桁行を二分する位置に間仕切りの柱穴が確認でき、SB750は内部を東西2室に分けた建物と推定される。

側柱の柱掘方は一辺1.2～1.6mの隅丸方形で、深さは検出面から0.9～1.5mである。すべての柱が抜き取られており、柱抜取穴は柱穴を不整形に掘り下げたのち、ほぼ真上に柱を抜き取っている（Fig.25）。側柱の柱掘方の埋土は灰褐色土で、粘質土と砂質土の互層である。柱抜取穴は黄色または赤褐色の粘土ブロック（山土）を多量に含む褐色土で埋まる。

間仕切りの柱穴は柱掘方が一辺1.0m、深さ0.6mで、側柱に比してやや小振りである。柱掘方の埋土は暗褐色の粘質土と砂質土の互層で、山土を少量含んでいる。柱抜取穴の埋土は、黄褐色と赤褐色の粘土ブロック（山土）を多量に含む褐色土である。柱掘方にも山土を含むことから、側柱の掘削よりも遅れて穿たれたと考えられ、施工の時間差が読み取れる。

SB750柱穴は整地土A（黄色粘土ブロックを含む灰褐色粘質土）に覆われる。遺構の重複関係をみると、SB750の西妻柱列の柱掘方の掘削は井戸SE800（Ⅰ-1期）の側石据付掘方よりも先行し、かつ柱抜取痕跡はこの側石の据付掘方を壊しており、SB750と井戸SE800は同時併存していたと考えられる。また掘立柱建物SB736（Ⅱ-2期）よりも古い遺構であり、SB750はⅠ期を通して存続した遺構と考えられる。

SE800と同時併存



掘立柱建物SB810（PLAN5・6，Ph.17）　第4次調査区西北部で検出した東西棟の掘立柱建物。その西北隅は山土や黄色粘土ブロック、バラスを含む整地土Aに覆われる。桁行8間（20.3m）以上、梁行2間（5.1m）で、柱間寸法は桁行・梁行ともに約2.5mである。調査区外の西へさらにつづくとみられる。造営方位は方眼北に対して東に約2°振れる。柱掘方は一辺1.3～1.4mの隅丸方形で、検出面からの深さは0.5～1.1mである（Fig.26）。柱はすべて抜き取られている。柱掘方の埋土は、暗褐色または暗灰褐色の砂質土と粘質土との互層である。柱抜取穴は一部に黄色または赤色粘土を含む黄褐色粘質土で埋められる。

SB810の柱掘方は井戸SE800の側石据付掘方より古く、抜取穴が側石掘方を壊していることから、この建物はSE800と併存していたと考えられる。また、その柱穴はSB820（Ⅱ期）と重

SE800と同時併存

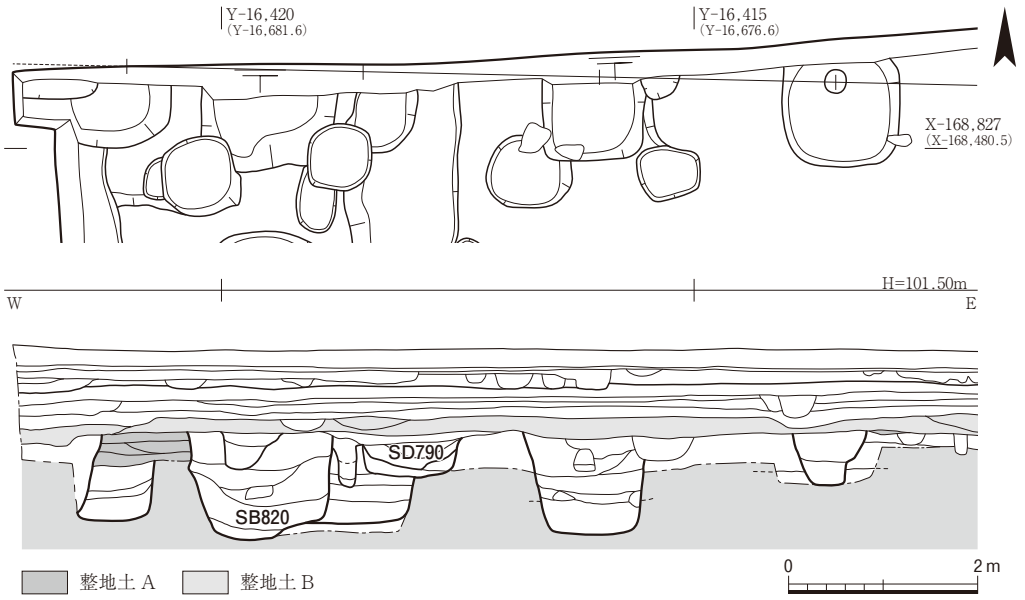


Fig. 26　**SB810柱穴断面図**（第４次調査区北壁土層図）　1：80

複し、これよりも古い。SB810は、ほぼ同規模であるSB811（Ⅰ－２期）に建て替えられる。

井戸SE800（PLAN５・６，Ph.16・17・24）　第４次調査区北辺中央部で検出した井戸。その井戸枠はスギの幹を刳り抜いて製作した板材２枚を組み合わせたものである[6)]。井戸枠の周囲に、東西5.3m、南北6.8m以上の方形区画の石敷を造り、北を除く石敷縁の三方に側石を立てる。石敷は人頭大の玉石を用い、井戸枠北側から約1.4mの幅で一段下げて石敷を造る。周辺の石敷も含めたSE800全体は整地土Ｂに覆われている。

石敷縁の側石は１～２段の高さ20～40㎝分が残る。SE800の西南に残る同時期の石敷SX771を当時の遺構面とみれば、井戸石敷面までの比高は約１mあり、側石は全体で４～５段分を積んでいたと推定される。SB750・810（Ⅰ－１期）の柱掘方はSE800側石の据付掘方より古く、その抜取穴が側石掘方を壊していることから、三者は併存していたと考えられる。また、西側石では改作の状況がうかがえ、当初は西南隅から北に4.8mの位置で西に折れて、さらに3.7mの位置で北に折れていたものが、Ⅰ－２期には西側石を1.9m北に延ばして西に折れる形に改修されている。

SB750・SB810と併存

井戸の深さは石敷面から3.8mで、基盤層である扇状地礫層を掘り込んでいる。井戸枠は底面から高さ約3.0m分が残る（Fig.27）。２枚の板を合わせた井戸枠の平面は紡錘形で、東西内法長は上端で1.4m、下端で1.2m。南北内法長は上端で0.8m、下端では0.7mで、井戸底に向かって若干窄まっている。板厚は最大で18㎝である。北側の井戸枠には底面から35㎝の高さに、南側の井戸枠では底面から15㎝の高さに、40～45㎝の楕円形の孔を開けている。この孔は井戸の内側から穿たれたもので、断面は円錐台形を呈し、外側の径は31～34㎝である。この孔は井戸の取水口の役割を果たしていたと推定されるが、調査時には湧水がほとんどみられなかった。なお、井戸の掘方は未検出であり、井戸枠は取り上げず現地保存した。

井戸枠内の埋土は大きく６層に分かれる。上から１層目は灰褐色砂、２層目はバラス層、３層目は礫混砂、４層目は含砂礫茶褐色有機質土、５層目は砂混灰褐色粘質土、最下層の６層目

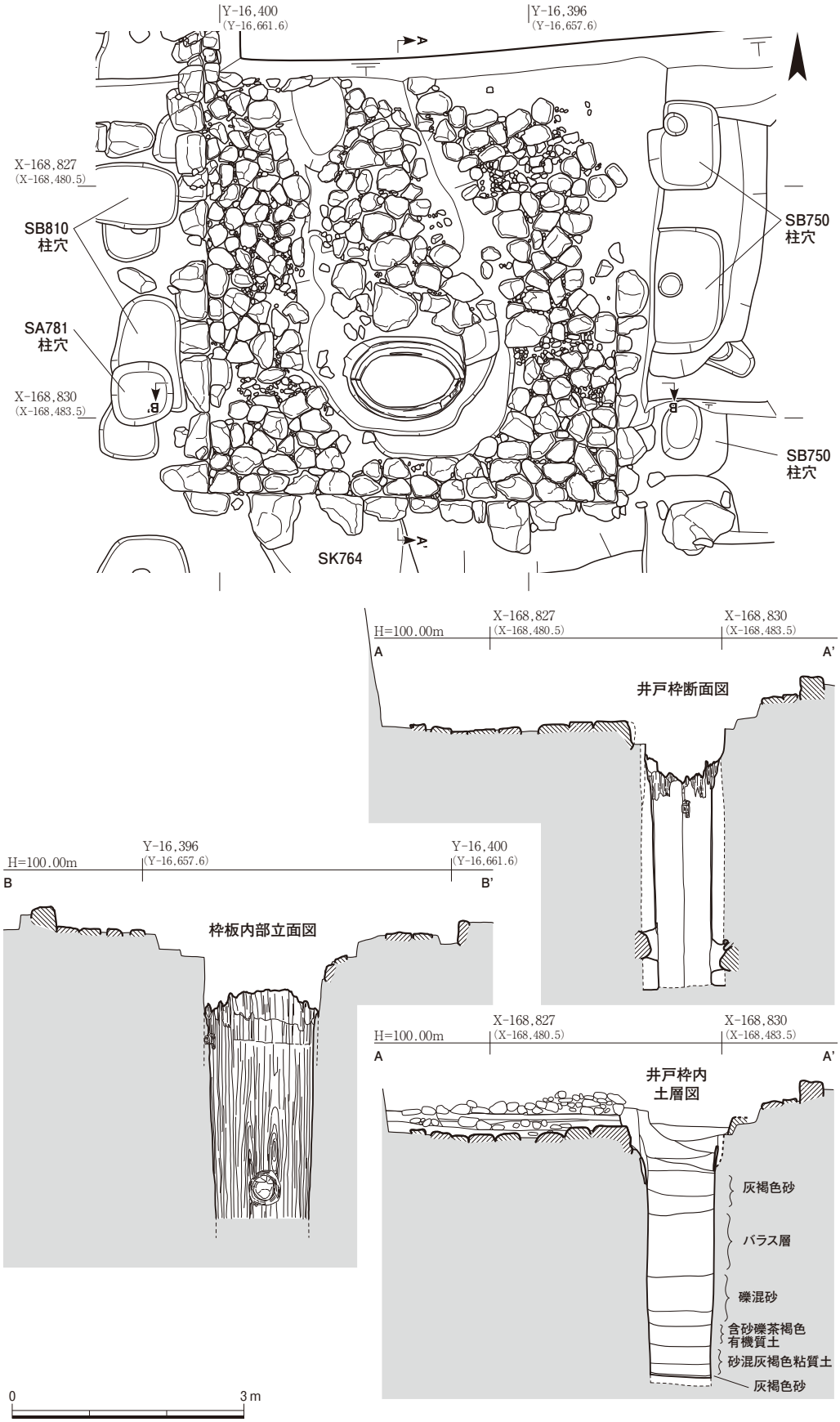


Fig. 27　SE800平面図および東西・南北断面図　1：80

は灰褐色砂（以上、取上土層名による）である。最下層の灰褐色砂は機能時の堆積土、つづく砂混灰褐色粘質土と含砂礫茶褐色有機質土は廃絶直後に堆積した有機質土とみられ、ともに飛鳥Ⅰの土器が出土している。礫混砂・バラス層は埋立土で、礫混砂からは飛鳥Ⅰ最新相または同Ⅱ、バラス層からは飛鳥Ⅱの土器が出土している。最上層の灰褐色砂からは飛鳥Ⅳの土器が出土し、石敷を含めたSE800全体を覆う整地土Ｂと一連のものと考えられる。したがって、SE800はⅠ－１期に造営され、斉明朝（Ⅱ－１期）には半ば埋没していたと考えられる。なお、井戸枠内の各層からは、スス・コゲに塗れた土師器煮炊具や須恵器壺類が多数出土している。これらはSE800の廃絶後に井戸枠内に投棄されたもので、井戸機能時の土器ではない。

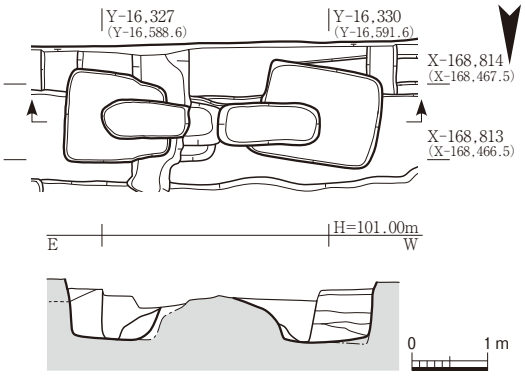


Fig. 28　SA1460柱穴断面図　1：100

斉明朝には半ば埋没

掘立柱塀SA1460（PLAN２，Ph.23）　石神遺跡1990－１次調査区南端で検出した東西方向の掘立柱塀。３間分（8.0m）を検出し、調査区外へさらにつづく。柱間寸法は約2.7mで、造営方位はほぼ正方位にのる。柱掘方は一辺1.0～1.5mの方形で、深さは検出面から約0.8mである。柱はいずれも抜き取られ、抜取穴は柱掘方の中心から東もしくは西の方向に延びる楕円形を呈する（Fig.28）。柱掘方の埋土は茶褐色粘質土と灰褐色砂質土の互層で、黄色もしくは黄褐色の粘土ブロックや山土を含まず、Ⅰ期の特徴を示す。これに対し、抜取穴は山土や灰黒色粘土を含む黄褐色砂質土で埋められる。

SA1460は東西溝SD1461（Ⅱ－１期）に壊されており、これより古い。先述のように、調査区西端の柱穴から西へと延びる場合、SA4650（Ⅰ－１・２期）と接続する可能性がある。石組溝SD435との位置関係も踏まえると、SA1460は石組溝と一体的に機能した遺構と考えられる。基壇に相当する遺構は未検出である。なお、SA600およびその東延長部であるSA4645との南北距離は約58mである。

掘立柱列SA4647（PLAN４，Ph.20）　第214次調査区西半で新たに検出した南北方向の掘立柱列。柱間３間分（5.4m）を検出した。造営方位は正方位にのり、柱間寸法は約1.8mと狭い。周囲にこれと連続する柱穴は確認できなかったため、柱間３間分の柱列と認識しておく。柱穴は流路NR310によって大きく削平を受けている。柱掘方は0.8～1.0mの隅丸方形で、いずれの柱穴にも柱抜取穴が確認できる。検出面からの深さは約0.6mである。柱掘方の埋土は一部に小礫を含む暗褐色もしくは黒褐色粘質土で、抜取穴の埋土は黄色粘土ブロックおよび土器片を含む暗褐色粘質土である。

SA4647はSA560（Ⅱ－１期）・SA311（Ⅲ期）と重複し、これらより古い。いっぽう、SA600やSA4645（Ⅰ－１・２期）とは重複がなく、小期の決定は難しい。しかしながら、その柱掘方埋土にはSA600の基壇に由来するような黄褐色土は含まれておらず、SA600・4650造営後に柱穴を掘削したとは考えにくい。不明な点が多いものの、本書ではSA600・4650造営時の仮設的な塀もしくは足場穴のような柱列と考えておく。

Ⅰ期区画内の石敷

石敷SX700・771（PLAN６・７，Ph.14～17・19）　SX700は第３次調査区西半の掘立柱塀SA600以北で検出した石敷。第４次調査区西南隅でも一部検出した。第３次調査区内は東西約14m、南北約13mの範囲で、敷石は径20㎝大から長径１mに達するものまで確認できる。大きい敷石は第３次調査区西北部およびSA600北辺に集中し、その間にやや小さめの敷石を配置している。敷石南辺の一部には凝灰岩切石も用いられる。またSX700の東端では、東に面を揃えた径30～50㎝の見切石（SX660）を南北約５m分検出した。SX660以東にはSX700と上面を揃えるバラス面が調査区中央部まで広がり、さらに東方にも広がっていたと推定される。

SX700は地山とみられる茶褐色粘質土上に敷設され、敷石上には整地土Ａとみられる暗黄色粘土混じりのバラス層が覆い、さらにその上には整地土Ｂとみられる土器や炭化物が混じる暗茶灰色粘質土が堆積する。敷石上面は自然地形と同様に、西北方へと緩やかに下降する。SX700東南隅から西北隅までの比高は約10㎝で、勾配は約1.5％である。南北塀SA670（Ⅱ－２期）や井戸SE650（Ⅲ期）と重複し、これらよりも古い。整地土Ａの下位に埋没していることから、SA600機能時（Ⅰ－１・２期）の石敷と考えられる。

SX771は第４次調査区西半中央部において、東西約4.5m、南北約2.6mの範囲で検出した石敷。径20～30㎝の石を用いる。掘立柱建物SB770（Ⅱ－２期）の柱穴に壊されており、これよりも古い。SX700・771はⅠ期におけるSA600およびSA4650に区画されたその内側に敷設された石敷とみられる。

方形区画SX760（PLAN６）　第４次調査区中央部やや南寄りで検出した方形区画遺構。ほぼ正方位の向きに造営される。幅20～30㎝、深さ10～20㎝の素掘溝が長さ約４mで方形にめぐる。溝底には、さらに幅５～10㎝、深さ10～15㎝の黄褐色粘質土の粘質化した凹みが確認できる。西北隅のこの凹み部分から、先端部を東に向けた長さ約30㎝の釘が出土した。釘に縦方向と横方向の杢目が残っており、この凹みは四隅を釘止めにした板状の木材が埋設されていた可能性が高い。しかしながら、方形区画内には関連する遺構もなく、性格は不明である。土坑SK755（Ⅲ期）に壊され、これよりも古い。SX760はSB745（Ⅰ－１期）の西約4.4mの位置にあり、南辺の溝がその柱筋とも揃うことから、Ⅰ－１期の遺構と考えておきたい。

ⅱ　Ⅰ－２期

掘立柱塀SA4645（PLAN４，Ph.20・22）　第214次調査で新たに検出した東西方向の掘立柱塀。SA600とSA4650の接続点から東へ６間分（15m）を検出し、さらに東へつづくとみられる。造営方位はSA600と同じく正方位にのる。SA600東端の柱穴との柱間は約３mで、これより東の柱間寸法はややばらつきがあるものの、概ね約2.5mである。なお、SA600のような基壇は未検出である。SA4645の柱掘方は一辺1.0～1.2mの隅丸方形である。検出面からの深さは約0.8mで、一部の柱穴に30×80㎝の柱抜取穴が確認できる（Fig.29）。柱掘方の埋土は礫混じりの灰黄褐色砂質土で、柱抜取穴の埋土は黄色粘土ブロックを含むにぶい黄褐色砂質土である。その柱穴は石組溝SD335（Ⅰ－１期）の西側石を壊しており、これよりも新しい。

Ⅰ－１期区画を東へ拡張

SA4645はSA600の東延長部分にあたるが、SA600よりも柱穴は小規模である。SD335を埋め立てたのち、区画を東へと拡張するために設けられた区画施設と考えられる。

掘立柱建物SB301（PLAN４）　第１次調査区東南隅で検出した桁行２間以上、梁行２間の南

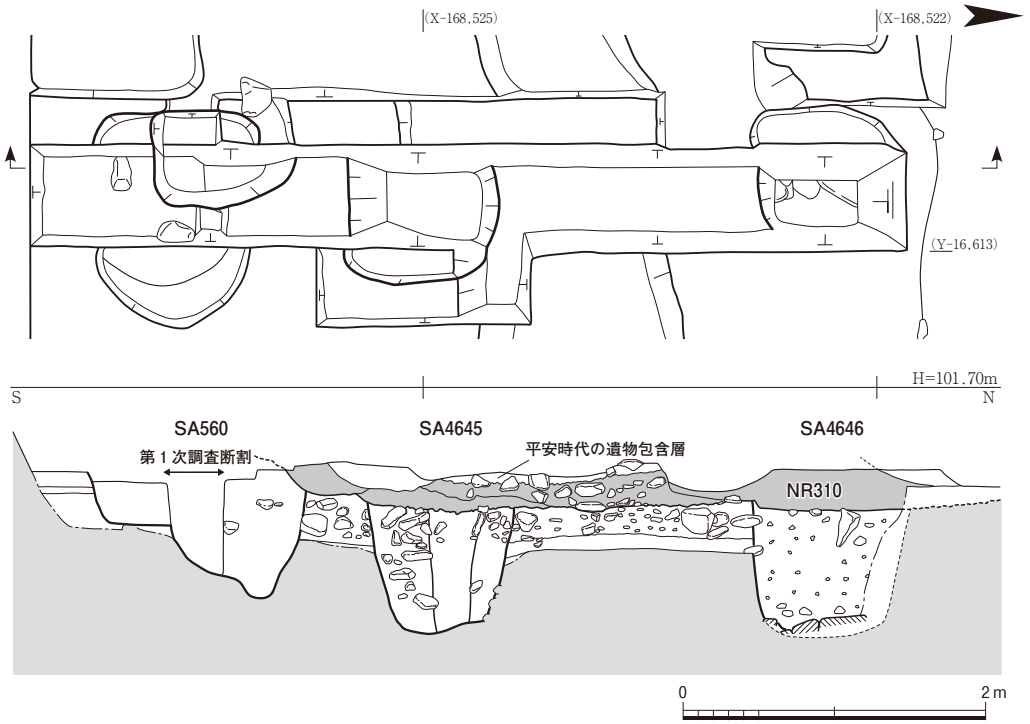
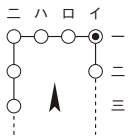
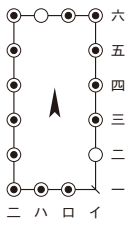


Fig. 29　SA4645・4646柱穴断面図　1：50

北棟の掘立柱建物。調査区外の南へつづく。造営方位は方眼北に対して西へ約１°振れる。柱間寸法は桁行約2.3m、梁行約1.8m。柱掘方は黄色土の地山から掘り込まれた一辺1.0mの隅丸方形で、東北隅の柱穴（イ－一）で柱痕跡を確認している。検出面からの深さは約0.7mである。柱掘方の埋土は黄灰色粘土ブロック混じりの暗灰色砂で、抜取穴の埋土は黄灰色粘土を含む暗灰色粘土である。西側柱列が平安時代の素掘溝SD321に壊される。時期を決定づける具体的な要素はないものの、Ⅰ－２期に区画が東へ拡張した際に造営された建物のひとつと考えておきたい。



掘立柱建物SB450（PLAN２・３，Ph.13）　第２次調査中央部において検出した南北棟の掘立柱建物。礫を含む黄褐色砂質土の下で検出した。桁行５間、梁行３間で、建物は方眼北に対して東に約１°振れる。柱間寸法は桁行2.3m、梁行1.8mである。柱堀方は一辺0.9～1.1mの隅丸方形で、径0.3m程度の柱痕跡を残す。柱掘方の埋土は、黄褐色土を含む暗灰褐色粘質土または粗砂で、柱痕跡にはブロック状の黄褐色土が混じる灰褐色粘質土が詰まる。



南妻柱筋の柱穴は礫敷SX401（Ⅱ－１期）で覆われており、これより古い遺構と考えられる。Ⅰ－１期の南北塀SA4650や石組溝SD335・435の東側に位置することから、区画が東へ拡張したⅠ－２期に新たに造営された建物と考えておく。

石列SX427～429・431～433（PLAN３，Ph.12・13）　SB450の周囲には、これにともなうとみられる石列がある。その西南隅では、柱筋に沿ってＬ字形に曲がる石列SX432・433を検出した（Fig.30）。SX432はSB450南辺にあって南側に面を揃え、SX433はSB450西側にあって同じく西側に面を揃えている。いずれも建物内外を区切る見切石とみられる。SX432の南2.8mの位置では、南側に面を揃えた東西石列SX431を約3.6m検出した。また、SX431東端を北限

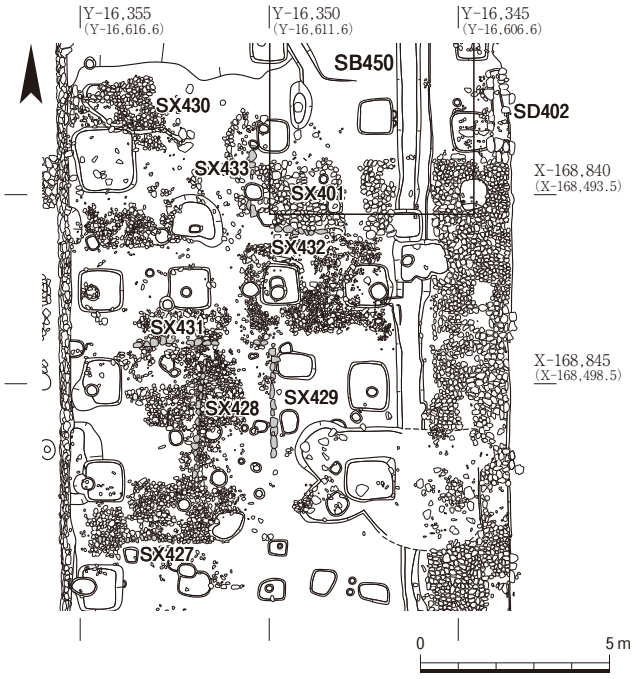


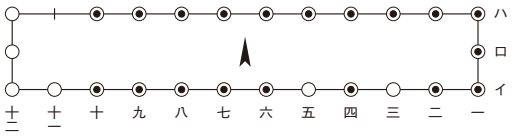
Fig. 30　SB450と周辺の石敷・石列　1：200

として、西側に面を揃えた南北石列SX429を約3.0m検出した。さらに、SX429の西1.6mの位置では、東側に面を揃えた南北石列SX428を南北3.4mの範囲で、SX431の南4.6mの位置には北側に面を揃えた東西石列SX427を東西3.4mの範囲で検出した。

礫敷SX430（PLAN３）　石列SX432・433の外側に広がる礫敷で、SB450に関連するもの（Fig.30）。後世の破壊が著しく、全体の広がりは明確ではないが、西は石組溝SD335よりも東側、東はSB400東のバラス敷SX357（Ⅱ－１期）の下層で確認している。

掘立柱建物SB530（PLAN７，Ph.14・24）

桁行11間の長大建物



第３次調査区南部で検出した東西棟の掘立柱建物。桁行11間（30m）、梁行２間（4.9m）の長大な建物で、ほぼ正方位の向きに建つ。西面妻柱列は、方形石組遺構SX540や流路NR310によって破壊されるが、SX540西北隅の断割調査およびNR310の南北両肩部分の土層断面で柱掘方を確認した。柱間寸法は桁行約2.8m、梁行約2.5mである。柱穴は一辺1.1～1.8mの隅丸方形で、直径30cm程度の柱痕跡を残す。柱掘方の埋土は暗褐色・暗灰色の砂質土や粘質土で、柱痕跡の埋土は黄色粘土ブロック混じりの暗褐色粘質土である。

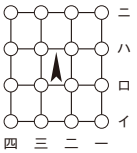
SB530の南側柱心から石組溝SD333の溝心までは0.8mの距離を隔て、SD333の西半約７m分がSB530と並行することから、SD333はSB530の南雨落溝として機能していたと考えられる。SD333の溝掘方はSB530の柱掘方を壊しており、建物の造営後に雨落溝を設けたという造営手順が確認できる。SB530はⅡ期の遺構であるSB510・520やSX540よりも古い。

石組溝SD333（PLAN４・７）　1936年の発掘調査時に発見され、第１次調査区西南隅部および第３次調査区南辺で再検出した石組の東西溝。溝幅は内法0.5m、深さ0.5mで、検出長は約18mである。第１次調査区内では遺構の残存状況も良く、側石は高さ45cm、幅30cmの一枚石を並べて、溝底に径20cm程度の玉石を敷く。一段低い第３次調査区内では側石は抜き取られ、底石のみが断続的に残り、調査区西半では削平されて未検出である。

雨落溝

側石の掘方がSB530の柱掘方を掘り込んでいることから、SD333はSB530の造営後に造られたことがあきらかである。前述のように、SD333はSB530の雨落溝であったと考えられる。したがってSD333は、これまでSD330に接続する石組溝と考えられてきたが、遺構の重複関係を整理した結果として、SB530と同じくⅠ－２期の遺構と考える。

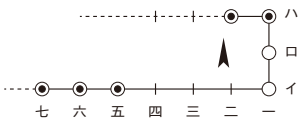
石敷をともなう総柱建物



総柱建物SB735（PLAN６，Ph.18）　第４次調査区東南部において、淡褐色粗砂上面で検出した掘立柱の総柱建物。南北３間（7.3m）、東西３間（6.0m）の南北棟建物。方眼北に対して東に約２°振れる。柱間寸法は南北（桁行）約2.4m、東西（梁行）2.0mである。柱掘方の掘削は東西方向に掘られた布掘り工法による。布掘りは東西長約7.5m、南北幅1.2～2.0mで、深さは検出面から約1.5mである（Fig.31）。柱を立てた後、布掘り掘方は暗褐色もしくは褐色の砂礫土で埋められ、その上を黄褐色粘質土が混じる褐色砂礫土が覆う。最上面には人頭大の礫を敷き詰めている。柱抜取穴は隅柱が1.2m四方、その他は一辺0.7～1.1mの隅丸方形もしくは円形で、黄色・黄褐色粘土で埋めている。抜取穴下部は先細りで柱痕跡状となる。抜取穴を掘ったのち、地中で柱を切断したとみられる。

布掘り工法

SB735の四周には石敷SX743をめぐらせている。柱心から石敷外縁までの距離は、西面が約2.8m、その他は約1.6mである。また石敷と柱との間には、幅0.3m、深さ0.2mの溝がめぐり、縁石の抜取痕跡の可能性がある。つまり、SB735の床下は石敷SX743よりもやや高めて施工されていたといえる。Ⅰ期の遺構であるSA600とは柱穴の深さや柱抜取方法が類似することにくわえ、SB745（Ⅰ－１期）との重複関係も考慮すると、SB735はⅠ－２期の遺構と考えられる。



掘立柱建物SB811（PLAN５・６，Ph.17）　第４次調査区西北部で検出した東西棟の掘立柱建物。東妻柱列と南側柱列および北側柱列の一部を検出した。桁行６間（15m）以上、梁行２間（4.9m）で、西妻柱が未検出であるため、桁行規模は未確定である。造営方位は方眼北に対して東に約２°振れる。柱間寸法は桁行約2.5m、梁行約2.4mである。

柱掘方は一辺1.2mの隅丸方形で、柱痕跡様の径20㎝程度の抜取穴を残す。柱穴の深さは検出面から0.5～0.7mとやや浅いものの、柱穴底面の標高はSB810とほぼ同じである。柱掘方の埋土は暗褐色砂質土および粘質土で、柱抜取穴の埋土は黄色粘土混じりの暗灰褐色粘質土である。未検出の柱穴も多く不明な点があるものの、SE800の西側石の北への拡張と関連し、SB810（Ⅰ－１期）を北に約２m移動して建て替えたⅠ－２期の建物と推定される。

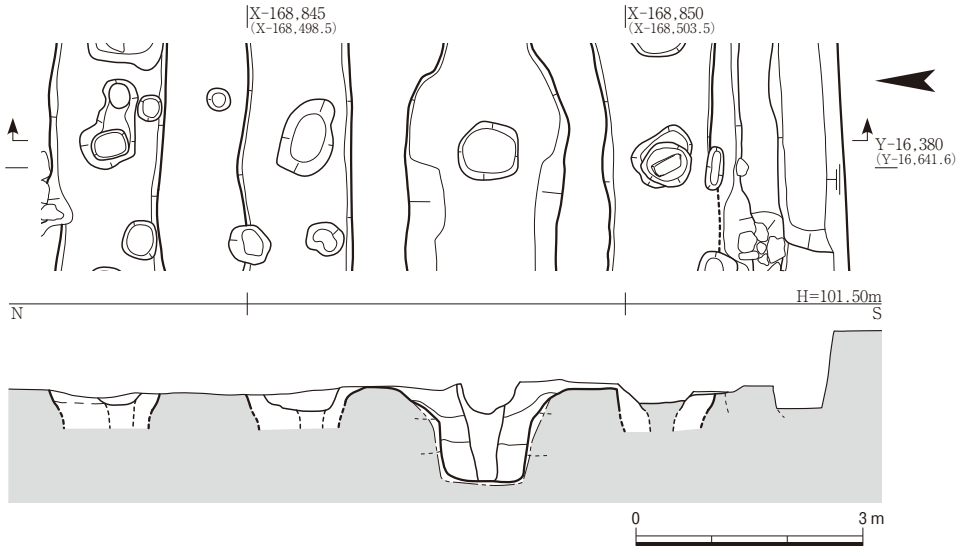


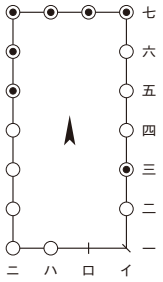
Fig. 31　SB735の布掘り工法　1：100

B　Ⅱ期の遺構（7世紀中葉から後半まで）

i　Ⅱ－1期

石敷をともなう建物

掘立柱建物SB400（PLAN 3・4，Ph.12・13）　第1・2次調査区にまたがって検出した南北棟の掘立柱建物。周囲には石敷（SX327・359・370・401）を帯状にめぐらせる。柱穴はこれら石敷を敷設した整地土の上面で検出した。建物規模は桁行6間、梁行3間で、ほぼ正方位の向きに建つ。柱間寸法は桁行2.6m等間、梁行2.5m等間である。柱掘方は一辺約1.2mの隅丸方形で、直径20cm程度の柱痕跡が残る。柱掘方の埋土は暗褐色もしくは灰褐色砂質土（粗砂）で、柱痕跡の埋土は黄褐色粘土を含む暗灰色もしくは灰褐色粘土である。石組溝SD335の掘方を壊しており、これよりも新しい。遺構の重複関係から、周囲の石敷とともにⅡ期の遺構と考えられる。柱痕跡の埋土に炭化物を含まないことから、Ⅱ－1期の遺構とみられる。



石敷SX327・359・370・401（PLAN 3・4，Ph. 9・11～13・22）　第1・2次調査区で検出した石敷で、SB400を回字形に取り巻く（Fig.32）。SB400北側の石敷はSX401、東側はSX359、西側はSX370、南側はSX327である。第1次調査では、SX327が暗灰褐色土直下の黄褐色土[7]に直接覆われることを確認している。これに加えて、第214次調査ではSD335を覆う整地土A（灰黄褐色粘質土）の上面に敷設していることを確認した。石敷の範囲は東西約15.4m、南北約28mの規模で、敷石には10～20cm大の河原石を用いる。なお、SX327は当初、SB400の南面に広く敷設されたが、奈良時代以降の流路NR310・4648の浸食を受け、その一部は消滅している。

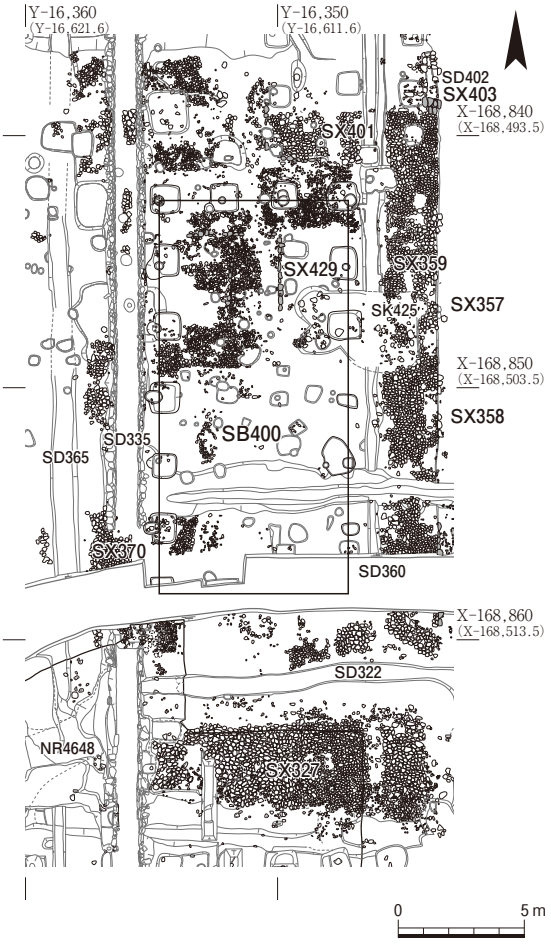


Fig. 32　SB400と周辺の石敷・石列　1：300

石列SX358・バラス敷SX357・石列SX403（PLAN 3・4）　掘立柱建物SB400の東面に位置する石列およびバラス敷。SX358[8]は第1次調査区および第2次調査区において検出した南北方向に並べた石列（Fig.32）。石敷SX359の東端にあり、その縁石にあたる。この石列の東側は、石敷SX359よりも約20cm高い平坦面として造成されている。この段差を造成する際に、石列SX358の裏込めとして東約3mにわたりバラスを敷いている（SX357）。SX358は北

に行くと南北石組溝（SD402）の東側石に接続し、さらに北へつづく。

SX403は石敷SX401の北側を画する２条の石列で、長さ40～50㎝、幅20㎝程度の石を東西に並べる。石の残存状況は非常に悪いが、北側の石列は北面を、南側の石列は南面を揃えて据えている。これらを石組溝に見立てると、溝幅は石の外面で約80㎝となる。東端はSD402の南端と接続する。

掘立柱塀SA560（PLAN４・７，Ph.15・20・22・24）　第１・３次調査区を横断して検出した基壇を有する掘立柱の東西塀[9]。第214次調査では未検出の柱穴を３基検出した。SA600（Ⅰ-１・２期）の南約1.3mに位置し、造営方位はほぼ正方位にのるが、SA600よりも東でやや南に振れる。第３次調査区の西に位置する第10次調査区でも検出しており、これまでの検出総長は約128mにもおよぶ。東端はなお未検出で、第１次調査区よりも東へと延びることから、この区画塀の東西幅はさらに大きくなる。柱穴掘方は一辺0.8～1.2mの隅丸方形で、直径30㎝前後の柱痕跡が残る。柱掘方の埋土は暗褐色もしくは灰褐色砂質土で、柱痕跡の埋土は黄色粘土ブロックが混じる暗褐色粘質土である。

Ⅱ期南限の区画施設

基壇は柱を立てた後に、灰色もしくは黄色粘土ブロック混じりの暗褐色砂質土を20㎝ほど互層に積み上げて構築する（Fig.21、54頁参照）。基壇外装は調査区西端部分でわずかに残存し、基壇土南面に河原石を揃えて並べる（SX562）。基壇の出は、南面で柱筋から0.8mで、北面は基壇外装が残存しないため不明であるが、基壇土の広がりからみて南面よりも広いと考えられる。なお、第３次調査区では、柱筋から約1.6m南側で東西溝SD558を検出している。検出長約38m、幅0.3～0.6m、深さ約0.3mで、SA560基壇築造後に掘り込まれたものである。SD558はSA560基壇南辺を流れる排水溝とみられる。その埋土からは有段式丸瓦や平瓦が複数出土した。

基　　壇

SA560の柱穴はSA600の柱掘方および基壇土を掘り込んでおり、これよりも新しい。また、SA560はSB580およびSA581（Ⅱ-２期）と重複し、これらよりも古い。SA560はⅡ-１期における石神遺跡南限の区画施設と考えられる。

掘立柱列SA4646（PLAN４，Ph.22）　第214次調査で再検出した東西掘立柱列で、第１次調査では「SB325」の北側柱と考えたもの。流路NR310の浸食で削平を受けているとみられる。造営方位は正方位にのり、柱間寸法は約2.5mである。SA560とは約3.9m隔てている。柱掘方は明瞭でなく、柱掘方よりも大きく抜取穴を掘り、柱を抜き取ったものと考えられる。柱抜取穴は一辺0.8～1.4mの隅丸方形で、柱抜取穴の埋土は橙色粘土ブロックを多量に含む礫混じり粘質土である。深さは検出面から約0.9mである（Fig.29、65頁参照）。

その西端の柱穴は石組溝SD335の西側石を壊しており、これよりも新しい。すぐ北側に位置するSB400の目隠し塀の役割が推定される。

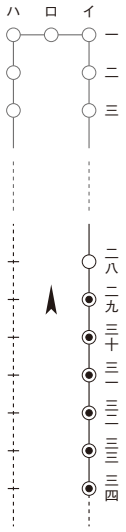
目隠し塀

掘立柱塀SA775（PLAN５・６）　第４次調査の西半部において検出した南北方向の掘立柱塀。11間分（22.3m）を確認したが、第３・５次調査では未検出である。柱間寸法は約2.0mで、方眼北に対して東に約１°振れる。柱穴の平面は0.5～1.0mの円形もしくは隅丸方形で、いずれにも直径15㎝前後の小振りな柱痕跡がある。柱掘方の埋土は褐色粘質土で、柱痕跡は黄褐色粘質土で埋められる。検出面からの深さは0.3～0.6mと浅い。

SA775の柱穴は６世紀末の溝SD576・577より新しいが、その他の遺構との重複関係はない。約1.5m東に位置するSA670（Ⅱ-２期）とは先後関係が不明であるが、柱筋が揃わないため、

両者は同時並存したとは考えにくい。SA775の柱痕跡には炭化物を含まず、SA670に比してSA775の柱穴規模が小さいことから、本書ではSA775をⅡ－１期とし、その後SA670（Ⅱ－２期）に建て替えたと考えておきたい。

Ⅱ期の長廊　**掘立柱建物SB820**（PLAN５・６，Ph.19）　第４次調査区西辺で検出した南北棟の掘立柱建物。柱穴７基（イ－二八～三四）を検出した。北側の第５～８次調査区では西側柱列や北妻柱列を検出し、南北に長大な建物であることが判明している。第８次調査区までの検出長は、桁行は33間（81.3m）以上、梁行２間（4.9m）で、柱間寸法は桁行・梁行ともに2.5mである。造営方位は方眼北に対して東に約１°振れる。第４次調査区内で検出した柱穴では、柱掘方は一辺1.1～1.3mの隅丸方形で、検出面からの深さは0.8～1.2mである。柱痕跡は径30～40cmである。柱掘方の埋土は山土や黄色粘土ブロックを含む灰褐色粘質土および砂質土で、柱痕跡の埋土は炭や焼土を含む赤褐色粘質土である（Fig.26参照）。



SB820の東側に位置する石組溝SD790は雨落溝とみられ、削平を受けた部分もあるが、北の第７次調査区まで検出している。また第５次調査以北では、建物西に柱に接して見切をもつ石敷SX880が敷設される。

他の遺構との重複関係によれば、SB810（Ⅰ－１期）より新しく、SB830やSA780（Ⅲ期）よりも古い。また、第４次調査区の北壁にかかる柱穴は、整地土Ａを掘り込んで穿たれており、柱痕跡には整地土Ｂと同様の炭や焼土が含まれることから、SB820はⅡ期を通して存続した遺構（Ⅱ－１・２期）と考えられる。

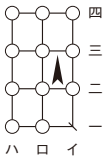
雨　落　溝　**石組雨落溝SD790**（PLAN５・６）　第４次調査区西北隅で検出した石組溝。その続きは北側の第７次調査区まで延びる。第４次調査区では南北5.8m分を検出した。幅約0.6mで、底石は東西２列に並べているが、その多くは抜き取られている。第５次調査ではSB820の東雨落溝であることが判明している。

南北溝SD365（PLAN２・３）　第２次調査区において整地土Ａの上面で検出した素掘りの南北溝。SD335の西側約2.7mに位置する。調査区を南北に縦断する約39m分を検出し、さらに北へ延びる。ほぼ正方位にのって造営され、溝の幅は60～80cm、深さは約20cmである。南は流路NR310および1936年の発掘調査トレンチによって削平を受けているとみられ、第１次および第214次調査でも未検出である。

溝埋土は灰褐色砂質粘土で、底部には粗砂が堆積する。溝底の比高から、北流したと考えられる。第２次調査区北端で東西溝SD500が直交し、SD500をせき止める位置に、SD365の東壁に面をあわせた自然石が遺存している（SX501）。両者には明確な時期差はなく、同時期に開口していた溝であると考えられる。SD365からは飛鳥Ⅰの最新相から同Ⅱにかけての土器が少量出土した。同時期の遺構であるSB400西側の石敷SX370はSD365よりも東に分布することから、SB400の西辺に設けられた排水溝と考えられる。

東西溝SD500（PLAN２）　第２次調査区北端で検出した素掘りの東西溝。約15m分を検出した。石組溝SD435の北約２mに位置し、西端付近で素掘溝SD365と交差する。さらに東西へ延びていたと考えられるが、削平を受けて不詳である。溝幅0.5m、深さ0.2mで、溝埋土は暗灰色粘質砂土である。埋土からは飛鳥Ⅰの最新相から同Ⅱにかけての土器が出土した。

総柱建物SB620（PLAN３・４，Ph.15・24）　第３次調査区東北部で検出した掘立柱の総柱建物。桁行３間（7.5m）、梁行２間（4.0m）の南北棟建物で、造営方位はほぼ正方位にのる。建物周囲に部分的な石敷を検出し、石敷をともなう建物の可能性がある。柱間寸法は桁行約2.5m、梁行約2.0mである。柱穴は柱掘方と、それに匹敵する大きな抜取穴からなる。柱掘方は一辺1.4～1.8mの隅丸方形で、柱掘方の埋土はおもに暗褐色砂礫である。柱掘方の深さは検出面から0.8～1.2mである。抜取穴は楕円形で、東方へ柱を抜き取り、黄色粘土で埋めている。



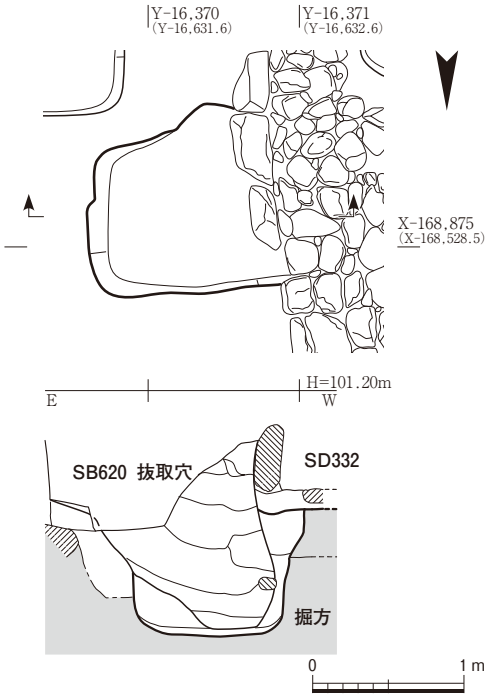


Fig. 33　SB620柱穴断面図　1：50

石組溝と同時併存

SB620西南隅の柱掘方（ハ－一）は、Ⅱ－１期の石組溝SD332の掘方よりも先行して掘られるが、SB620の抜取穴は溝掘方を壊しており、両者が併存していたことを示している（Fig.33）。また後述のように、Ⅱ－２期のSD730と重複し、これよりも古い。掘方には黄色粘土ブロックを含まず、抜取穴にのみ含む特徴はⅠ期の遺構に共通しているものの、SD332との重複関係や整地土Ａを切り込むような埋土の様相は確認できないため、SB620はⅡ－１期の遺構と考えられる。なお、後述するSB620の北妻柱筋から約3.8mの位置には、目隠し塀とみられる掘立柱塀SA617が位置する。

掘立柱塀SA617（PLAN３・４）　第３次調査区東北隅において、暗褐色バラス面にて検出した掘立柱の東西塀。造営方位は正方位にのる。柱間寸法は約2.3m。柱掘方は一辺0.8mの隅丸方形で、深さは約0.6mである。柱痕跡および柱抜取穴は確認できない。柱掘方の埋土は黄灰色もしくは暗褐色砂質土である。第３次調査区から東に延びる可能性もあるが、第１次調査区内では未検出である。西端の柱穴は、約3.8m南に位置する総柱建物SB620と柱筋を揃えており、SB620に付随する目隠し塀であろう。

Ⅱ期の区画内を流れる石組溝

石組溝SD330・331・332（PLAN２～７，Ph.10・11・15・18・21）　第１次調査区西南隅から第３・４次調査区内で検出した一連の石組溝で、ほぼ直角に曲折しつつ、SD330→SD331→SD332と続く。SD330・331とSD332の一部は、1936年の発掘調査で石田茂作が発見し、そのときに掘り下げていたため、埋土は残らない。SD330は南北溝で、第１次調査区外の南から続き、北へと約８m延び、西へ折れて東西溝SD331となる。SD331は約７m西進し、北へ折れてSD332となる。SD332は第３・４次調査区内で約52m分を検出し、さらに北へ延びて、第５・６・８・20次調査でその延長部分を確認している。SD330は方眼北に対して東に約４°振れ、SD331はほぼ正方位に設けられる。SD332は、第３次調査区部分では方眼北に対して西に約４°振れるが、第４次調査区北半ではほぼ真北に進む。

SD330・331の溝幅は0.7～0.8m、深さは0.7mで、高さ60～70㎝、幅50～60㎝の一枚石を側

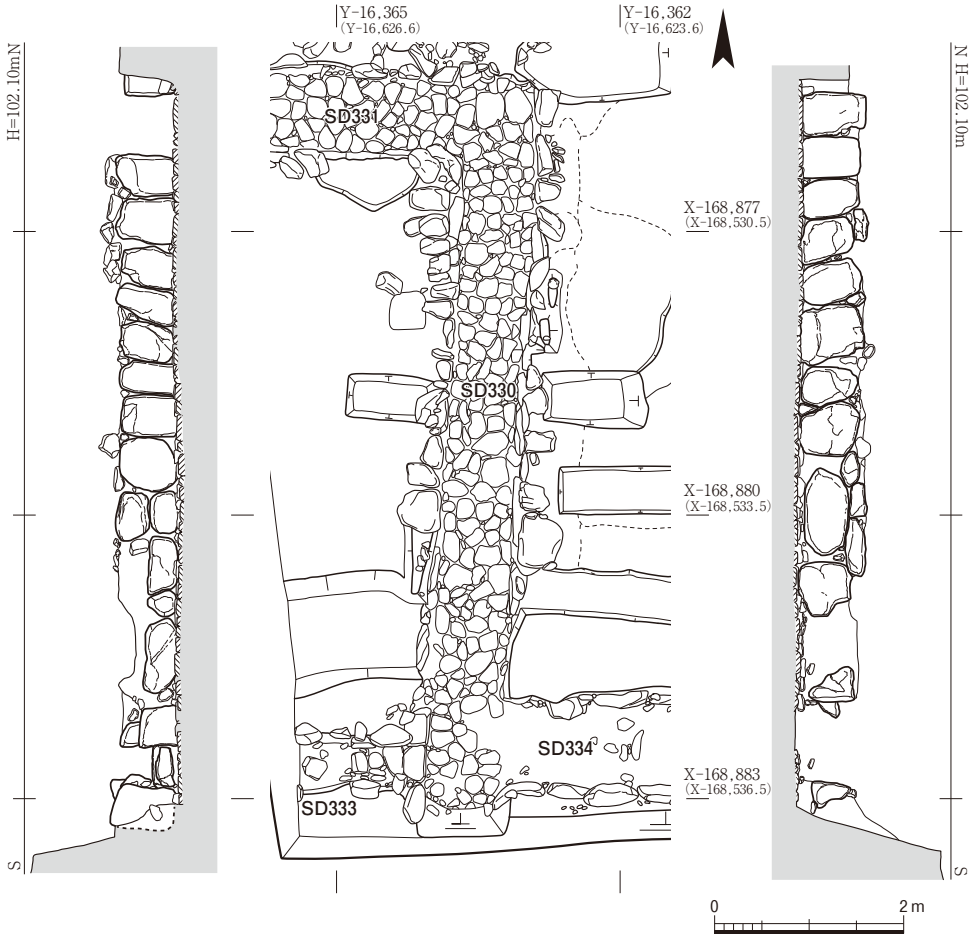


Fig. 34　SD330側石立面図　1：80

石として立て並べ、溝底には径20㎝程度の玉石を敷く（Fig.34）。SD332は大半の側石が抜き取られており、底石のみが残る。SA560を貫通する部分では側石掘方に河原石を詰め込んで、堅固な裏込地業をおこなっている。第３次調査区内ではSD332の底石が厚さ約10㎝の砂の堆積層を挟んで二重に敷かれている部分があり、改修されたことを示している。

SD330・331は1936年の発掘調査時に完掘されていたが、SD332では未掘の溝埋土を確認した。埋土は、下位から順にバラス混褐色砂、褐色砂（ニコ土）、灰褐色粗砂、黄褐色土混褐色砂、バラス混灰褐色砂が堆積している（Fig.35）。これらの砂層からは、飛鳥Ⅰないし Ⅱに属する土器が少量出土している。

飛鳥Ⅰ・Ⅱの土器

第１次調査区西南隅部では、SD334（Ⅰ－１期）とSD330とが交差している。この交差点が1936年の調査時にすべて完掘されているため、両者の前後関係は明確ではない。しかしながら、溝側石の構築方法や底石の有無、出土土器の年代差などから、両者間には微妙な時期差があるとみられる。第214次調査では、SD335は側石の最上段が残されている部分があるものの、SD330は最上段の少なくとも１石分が流路NR310によって押し流されたことを確認している。このことからも、SD330はSD335よりも新しい。

他の遺構との重複関係によれば、SD330は東西溝SD322・SD347や東西塀SA311（Ⅲ期）よりも古い。いっぽう、SD332側石掘方はSA600（Ⅰ－１期）の柱掘方より新しいものの、SA600の

抜取穴との関係は不明である。また、先述のとおり、SD332とSB620は併存関係にあると考えられる。

以上をまとめると、SD330・331・332は石組溝SD334・335・435よりも新しく、Ⅱ－１期の石組溝となる。その後、ほどなくして東隣の南北石組溝SD730（Ⅱ－２期）に付け替えられたとみられる。しかしながら、整地土Ａとの層位的な前後関係は、なおあきらかにできていない。

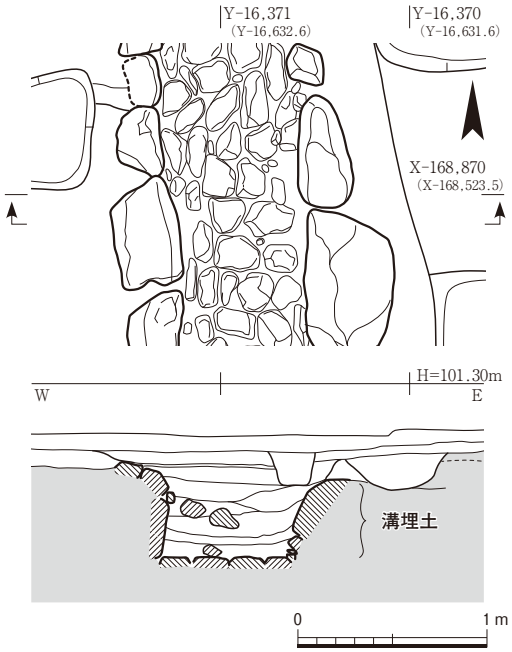


Fig. 35　SD332断面図　1：40

石組溝SD490（PLAN２）　第２次調査区西北隅で検出した斜行する石組溝。方眼北に対してやや東へ傾き、南西から北東方向へ緩く蛇行して流れ、調査区外へ続く。溝の内法幅は30～40㎝で、深さは30～40㎝程度残存する。側石と底石には径20～40㎝の自然石を用いる。一部では２段分の側石が残存し、かつては側石を複数石積み上げていたとみられるが、全体的に削平されており、当初の高さは不明である。SD490の底石標高は100.50mで、SD365の溝底とはほぼ同じ高さであり、Ⅱ－１期の遺構と考えられる。なお、西隣の３次調査区内ではSD490の延長部分を検出しておらず、流路については不明な点が多い。

石敷SX550・555（PLAN７，Ph.14・15）　SX550は第３次調査区西南隅において、東西約７m、南北約７mの範囲で検出した石敷[10]。淡黄灰褐色砂質土の上面に敷設される。敷石には径約20㎝大の河原石を用いる。北縁はSA560の基壇外装（SX562）にすりつく（Fig.36）。北東から南西に向かって緩やかに高まっており、最も高い西南部の敷石は削平のため残らない。また南部も流路NR310に壊されている。SX555はSX550の東に南北2.0～3.6m、東西約35mの範囲で検出した石敷。黄色の整地土上に敷かれている。敷石には径５～10㎝の小さな礫を用いる。　Ⅱ期の石敷

これらの石敷は、敷き詰めた石の大きさが異なるものの、その上面の標高は揃う。いずれもSA560（Ⅱ－１期）と同時期の遺構と考えられる。その他遺構との重複関係では、同時期の方形区画SX540の側石掘方に壊されており、SX540に先行して石敷が造営されたことがわかる。

掘立柱塀SA1465（PLAN２，Ph.23）　石神遺跡1990－１次調査区北半で検出した掘立柱の東西塀。４間分（8.4m）を検出し、調査区外へつづくとみられる。造営方位は正方位にのる。柱間寸法は約2.1mとやや狭い。柱掘方は一辺0.8～1.3mの東西にやや長い隅丸長方形で、検出面からの深さは約0.6～0.9mである。柱掘方には径25㎝前後の柱痕跡が確認できる。柱掘方の埋土は山土を含む暗褐色土および明黄褐色土の互層で、柱痕跡の埋土は暗褐色粘質土である。土坑SK1467（Ⅲ期）よりも古い。南に位置する東西素掘溝SD1461も同時期の遺構とみられ、一体的に機能したことが推定される。

素掘溝SD1461（PLAN２，Ph.23）　石神遺跡1990－１次調査区南半で検出した素掘りの東西溝。幅約2.4m、深さ約0.5m。溝埋土は暗茶褐色土および山土混じりの茶灰褐色粘質土で、流水の

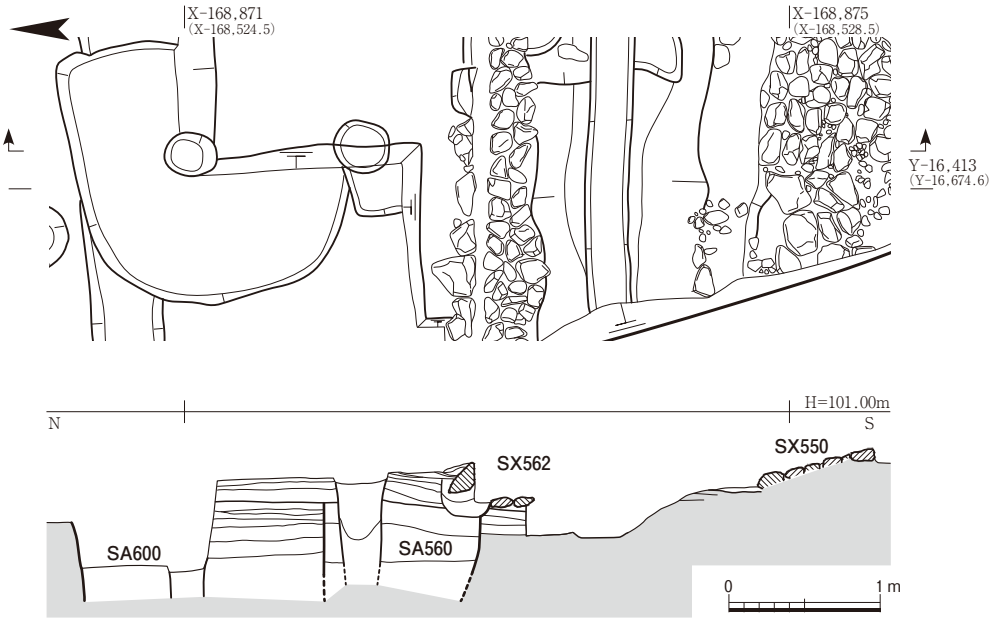
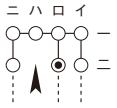


Fig. 36　石敷SX550とSA560基壇外装SX562断面図　1：50

形跡は認められない。北に並走する同時期の東西塀SA1465との距離は、溝北肩から柱筋まで約２m、溝心からは約3.2mである。

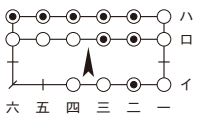
ii　Ⅱ－２期



掘立柱建物SB510（PLAN７）　第３次調査区西南部で検出した掘立柱建物。桁行１間分を確認し、梁行は２間で、東面に廂をもつ南北棟建物とみられる。調査区外の南につづく。建物は方眼北に対して東に約１°振れる。柱間寸法は桁行1.9m、梁行1.5m、廂の出1.5mである。柱掘方は一辺0.7～1.1mの隅丸方形で、一部の柱穴には径20㎝程度の柱痕跡が残る。柱掘方の埋土は暗褐色砂質土もしくは粘質土で、柱痕跡の埋土は黄色粘土ブロック混じりの暗褐色砂質土もしくは粘質土である。

SB510の柱穴はSB530柱穴およびSD333側石堀方（Ⅰ－２期）を掘り込んでおり、これらより新しい。また、SB510の北妻柱筋はSB520（Ⅱ－２期）の南側柱筋と位置を揃えており、ともに廂付きの建物と考えられ、両者は計画的に配置されたと推定される。

一面廂建物



掘立柱建物SB520（PLAN７）　第３次調査区中央南部で検出した掘立柱建物。北側に１間の廂をもつ桁行５間（10m）の東西棟建物。柱間寸法からは梁行２間（2.8m）とみられるが、妻柱の柱穴は流路NR310に壊されている。柱間寸法は桁行2.0m、梁行1.4m、廂の出は1.4mである。柱掘方は一辺1.0～1.3mの隅丸方形で、径20～40㎝の柱痕跡が残る。柱掘方の埋土は暗褐色粘質土もしくは砂質土で、柱痕跡の埋土は黄色粘土ブロック混じりの暗褐色粘質土である。SB530（Ⅰ－２期）の柱穴や石敷SX555（Ⅱ－１期）と重複し、これらより新しい。先述のとおり、SB510とSB520はともに廂付きの建物で、柱筋も揃えることから、両者は同時期に計画的に配置されたことがうかがえる。

掘立柱建物SB736（PLAN５・６，Ph.16）　第４次調査区東北部で検出した南北棟の掘立柱建物。重複関係から、SB750（Ⅰ－１期）よりも新しい。身舎は桁行３間（7.3m）、梁行２間

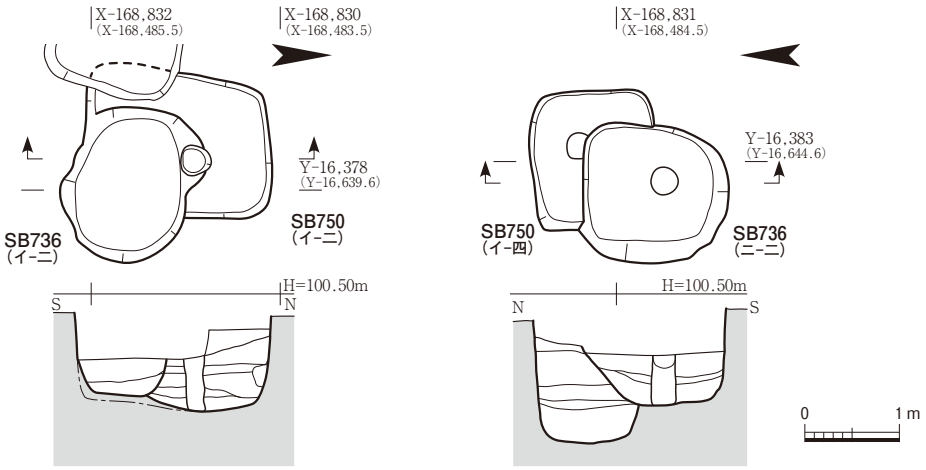
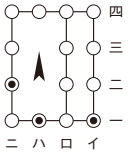


Fig. 37　SB736・750柱穴断面図　1：80

（3.6m）で、東側に廂が取りつく。柱間寸法は桁行約2.4m、梁行約1.8mで、身舎柱から廂柱までの梁行は約1.8mである。造営方位は方眼北に対して、東に約2.5°振れる。

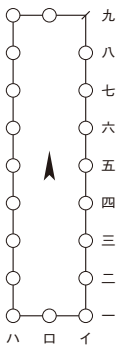


身舎柱および廂柱ともに、柱掘方は一辺1.4～1.6mの隅丸方形で、深さは0.8～1.0mが残る。柱穴の規模は身舎と廂でさほど変化がないものの、埋土の特徴が異なる。身舎柱の掘方埋土は山土を含む褐色砂礫もしくは暗褐色粘質土で、抜取穴埋土は黄色もしくは淡黄褐色土である（Fig.37）。いっぽう、廂柱の掘方埋土は褐色砂質土もしくは砂礫土で、抜取穴埋土は赤褐色の山土や炭化物を含む褐色土で埋められる。

なお概要報告では、身舎の南から２番目の柱位置にある、上面が平坦な花崗岩自然石を「束石」と判断し、加えてSB735と桁行規模が同規模であることから、SB736も同じく総柱建物と判断していた（『藤原概報15』）。しかし本書では、①SB735はⅠ－２期の遺構であること、②造営方位はSB736の方が東へ大きく振れること、③布掘り工法を用いたSB735とは建て方が異なること、④柱穴埋土の特徴が異なることなどから、その年代的位置を改めた。これにより、SB735とSB736とは併存しなくなる。東石の存在は床張り建物と考えるほうが自然であり、SB736は東面に廂をもつ一面廂建物と考える。

一面廂建物

掘立柱建物SB770（PLAN５・６）　第４次調査区西半部において、炭や焼土を含む暗褐色土（整地土Ｂ）の下で検出した南北棟の掘立柱建物。桁行８間（20.0m）、梁行２間（4.7m）で、ほぼ正方位の向きに造営される。柱間寸法は桁行約2.5m、梁行約2.4mである。

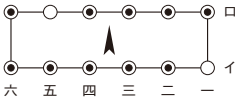


柱掘方は柱抜取穴に壊されており未検出である。柱抜取穴は一辺0.9～1.1mの隅丸方形で、検出面からの深さは0.3～0.8mである。柱抜取穴の埋土は山土を含む灰褐色粘質土である。遺構の重複関係ではⅢ期の掘立柱塀SA781よりも古く、SB810（Ⅰ－１期）や石敷SX771（Ⅰ－１・２期）より新しい。

掘立柱塀SA670（PLAN５～７）　第３次および第４次調査区西部で検出した南北方向の掘立柱塀。第３調査区内で７間分（11.6m）、第４次調査区内で15間分（27.1m）を検出した。造営方位は方眼北に対して東に約１°振れる。第５次調査区でも６間分（14.2m）を検出しており、

調査区間の未調査部分も含めると、総長は63.6mとなる。柱間寸法はやや不揃いであるが、概ね1.7～1.8mである。柱穴は一辺0.6～1.5mの隅丸方形で、径20～40㎝の柱抜取穴がある。柱穴は検出面から0.5～0.8mが残る。柱掘方の埋土は黄灰色もしくは暗褐色粘質土で、柱抜取穴の埋土は黄色もしくは褐色粘質土である。

他の遺構との重複関係によれば、SA670はSA780（Ⅲ期）よりも古く、SB810（Ⅰ－１期）よりも新しい。SA670は西隣の掘立柱塀SA775（Ⅱ－１期）を建て替えたもので、ともに７世紀中葉から後半頃にかけての区画塀であったと理解できる。加えて、第４次調査区の北から２基目と３基目の間の柱間寸法は約3.6mと広く、柱穴が検出できないことから、この部分は塀が途切れて通路として機能していたと推定される。



掘立柱建物SB580・東西塀SA581（PLAN４・７）　SB580は第３次調査区中央部で検出した東西棟の掘立柱建物。桁行５間（13m）、梁行１間で、柱間寸法は桁行約2.6m、梁行約3.8mである。建物は正方位の向きに建つ。

柱掘方は一辺0.7～0.9mの隅丸方形で、直径30㎝の柱痕跡が残る。柱掘方の埋土は黄色粘土ブロック混じりの暗褐色粘質土で、柱痕跡の埋土は暗褐色もしくは灰褐色粘質土である。SA581はSB580の東北隅柱（ロ－一）から東に４間延びる東西塀。第１次調査区では未検出である。柱間寸法は2.6mで、SB580とほぼ同寸である。柱掘方は一辺0.7～1.1mの隅丸方形で、柱痕跡が残る。柱掘方および柱痕跡の埋土は黄色粘土ブロック混じりの灰褐色砂質土である。

SB580およびSA581は、東西塀SA560（Ⅱ－１期）およびその基壇と重複し、これより新しい。また東西溝SD347（Ⅲ期）と重複し、これより古い。したがって、SB580およびSA581は、Ⅱ－１期のSA560を建て替えたⅡ－２期の遺構と考えられる。

石組溝SD730（PLAN２・３，Ph.18）　第４次調査区東端で検出した北流する石組溝。方眼北に対して西に約５°振れる。検出長は約28.6mで、調査区外の南北につづくとみられるが、南端は周辺のいずれの調査区でも未検出である。ほぼすべての側石が抜き取られており、底石のみが残る（Fig.38）。幅は約0.7mで、底石には径20～30㎝の玉石を敷き詰める。溝掘方は幅約1.8mで、掘方埋土は暗灰褐色砂質土。側石抜取穴は礫や土器片の混じる暗褐色砂質土で埋められる。一部では厚さ10～20㎝の溝埋土が残り、溝埋土はバラス混じりの暗灰色砂質土である。SD730の底石標高は、すぐ西側に位置するSD332と比較して、調査区北辺で約５㎝、南辺で約20㎝高い。

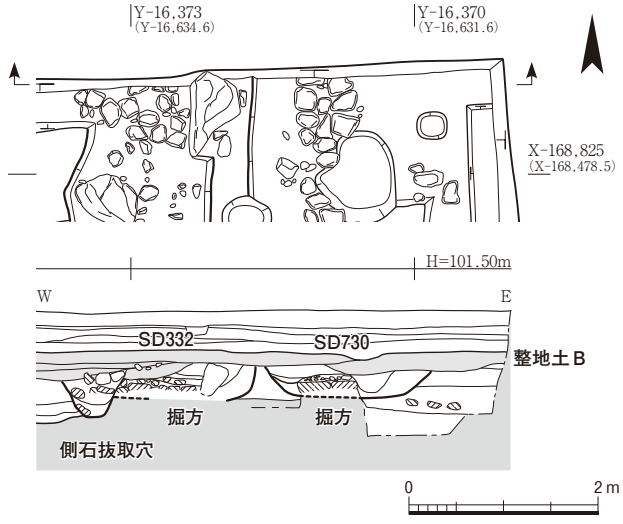


Fig. 38　SD332・730断面図　1：80

SD730の底石はSA732・731（Ⅲ期）に壊されており、これより古い。いっぽう、第３次調査区ではSB620（Ⅱ－１期）を検出している

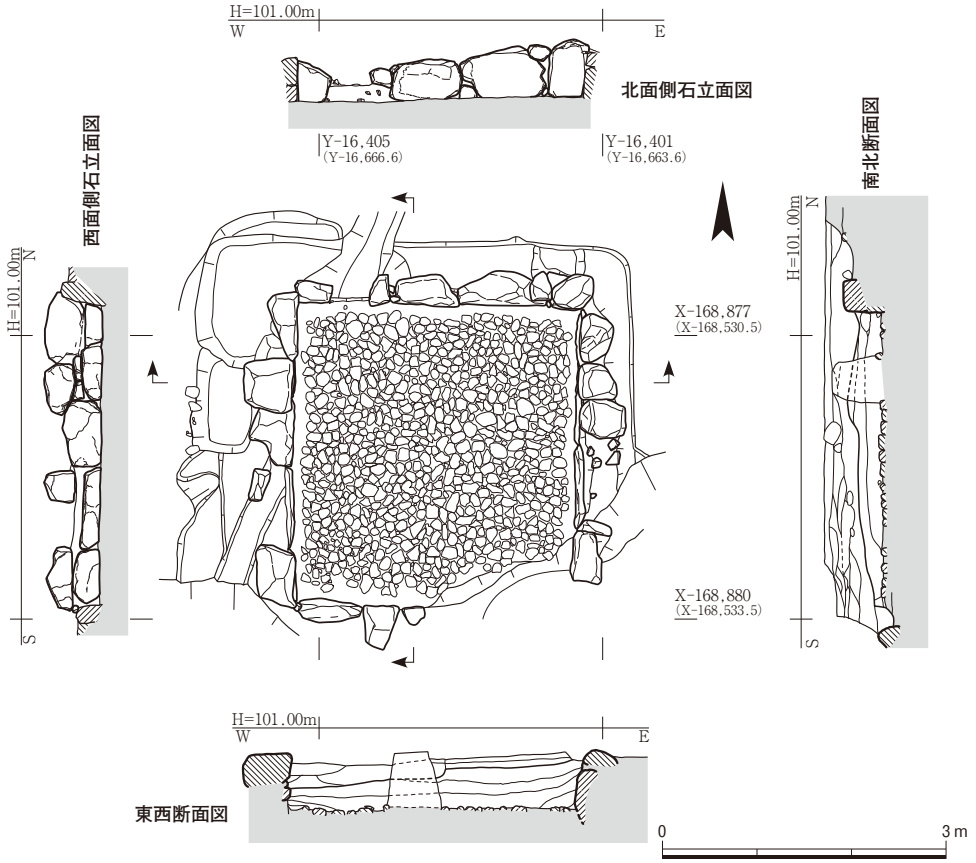


Fig. 39　SX540断面図および立面図　1：80

ものの、SD730は未検出であり、削平によって消滅したのであろう。先述のように、SB620は石組溝SD332と同時併存していたと考えられるため、SD730はSD332から付け替えたⅡ－２期の遺構と解釈する。

石組溝の付け替え

方形石組遺構SX540（PLAN７，Ph.14・15）　第３次調査区西南部で検出した方形の石組遺構。平面は内法で東西約３m、南北3.1～3.2mである。周囲には幅0.2～0.9mの自然石の側石を立て、側石は内側に面を揃える（Fig.39）。深さは側石上端から約0.6mで、内部底面には拳大の礫を敷き詰める。側石掘方はSB530（Ⅰ－２期）の柱穴やSX550・555（Ⅱ－１期）を掘り込んでおり、これらより新しい。

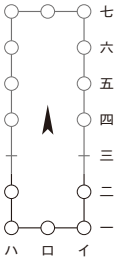
SX540の掘方埋土（裏込土）は、一部に砂質土や礫が混じるものの、黄色ないし褐色粘質土である。内部礫敷も黄色粘土上に敷設される。石組内の埋土は下位から順に、バラス混じりの暗褐色粘質土、暗褐色粘質土、暗褐色砂質土、瓦片を多く含む暗褐色粘質土、暗褐色バラスである。滞水の形跡は確認できない。また、取水もしくは排水の施設もなく、遺構の性格は不詳である。石組内最上部は暗褐色粘質土の瓦堆積層に覆われている。この堆積層は整地土Ｂの一部とみられる。

整地土Ｂ

Ｃ　Ⅲ期の遺構（７世紀後半から末まで）

掘立柱建物SB742（PLAN５，Ph.16）　第４次調査区東北部および第５次調査区東南部で検出した南北棟の掘立柱建物。桁行６間（14.6m）、梁行２間（4.9m）で、造営方位は方眼北に

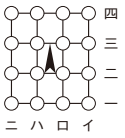
対して西に約1°振れ、同時期の南北塀SA751とほぼ等しい。SA742の西側柱筋からSA751の柱筋までの距離は約3.6mである。



柱間寸法は桁行約2.4m、梁行約2.5mである。柱掘方は一辺0.9～1.2mの隅丸方形で、柱抜取穴は未検出である。柱掘方の深さは検出面から0.5～0.9mである。柱掘方の埋土は炭化物や黄橙色の山土を含む暗黄褐色粘質土である。SB750（Ⅰ-1・2期）やSB736（Ⅱ-2期）よりも新しく、平安時代の素掘溝SD630よりも古い。

総柱建物

総柱建物SB830（PLAN5・6，Ph.17・19）　第4次調査区西北隅で検出した総柱の掘立柱建物。東西3間（5.1m）、南北3間（6.0m）で、南北規模がやや大きく、南北棟建物と考えられる。造営方位は方眼北に対して東に約1°振れる。柱間寸法は南北（桁行）約2.0m、東西（梁行）約1.7mである。柱掘方は一辺0.5～0.7mと小振りな隅丸方形で、柱痕跡や抜取穴は検出していない。柱掘方の深さは0.4～0.6mと浅い。柱掘方の埋土は礫や山土、炭化物を含む褐色粘質土である。柱穴掘方（ロ-二）から土師器壺A（Fig.59、128頁）が出土している。他の遺構との重複関係から、掘立柱建物SB820やその雨落溝SD790（Ⅱ-1期）よりも新しい。SB830は同時期の掘立柱塀SA780・781に囲まれた区画内部に位置し、SB830の南側柱列からSA780までの柱心々間距離は約6.8mで、東側柱列からSA781までの同距離は14.2mである。



炉跡SX795（PLAN5・6，Ph.19）　第4次調査区西北隅で検出した炉跡。SB830の西側柱筋の柱穴（ニ-二）に近接する。規模は一辺約0.6mで、四周に約10㎝幅で黄色粘土の縁取りがめぐる。中央部は被熱により赤化し、最上面は炭化物を多く含む。飛鳥Ⅳの土師器甑（Fig.58、128頁）が出土した。

掘立柱塀SA380（PLAN2～4）　第2次調査区の東端において検出した全長約26m以上の南北塀。中世の土坑群によって壊されているが、この土坑群から北で5基、南で4基の合計9基の柱穴を検出し、調査区外につづくとみられる。北5基分は黄褐色土上面、南4基分は床土下の褐色土上面で検出した。土坑群に壊された部分にはさらに3基分の柱穴が想定できる。造営方位は方眼北に対して西に約1.5°振れる。柱間寸法は北4間が2.3m等間であるのに対して、南3間は北から2.7m、2.5m、2.3mと不揃いである。柱穴は一辺0.7～0.9mの隅丸方形で、柱掘方か柱抜取穴かは不明である。柱穴埋土はバラス（礫）や黄褐色の粘土ブロックが混じる灰褐色土もしくは褐色土である。柱穴からは飛鳥Ⅳに属する土師器杯A片が出土した。

Ⅲ期の区画施設

掘立柱塀SA311（PLAN4・7，Ph.22）　第1次調査区東半から第3次調査区にかけて検出した東西塀[11]。Ⅲ期の大規模な区画施設のひとつである。第1次調査で4間分（約8.5m）、第3次調査で8間分（約17m）を検出した。第1次調査区外の東へつづき、飛鳥藤原第209次調査でも25間分（約52m）を検出した。第214次調査では石敷SX327の南側に一部未検出の区間があるものの[12]、合計6基の柱穴を検出し、遺構が連続することを確認した。西端は東西溝SD347が北折する手前まで延び、南北塀SA751に接続すると考えられる。第3次から第209次調査区までの検出総延長は85m以上である。SA311の造営方位は方眼北に対して西で南に約1.3°振れる。

SA311の柱間寸法は約2.1mで、柱掘方は一辺0.7～1.0mの隅丸方形である（Fig.40）。第3次および第214次調査区では、一部の柱穴で径20㎝の柱痕跡を検出した。柱掘方の埋土は黄色

または橙色の粘土ブロックを含む黄褐色粘質土で、柱痕跡の埋土は黄褐色粘質土である。

第３次調査区内では、SA311とSD347は近接して並走する。前者の柱穴掘方は後者に壊されているが、これは前者の南半が後者の側方浸食で削られたものと解釈できることから、両者は同時期に併存していたと考える。

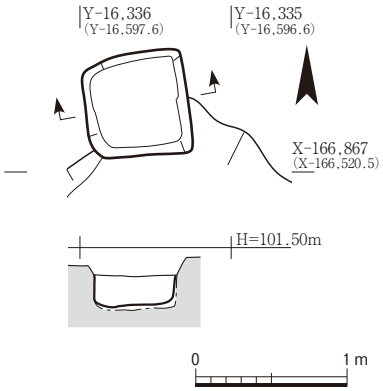


Fig. 40　SA311柱穴断面図　1：50

掘立柱塀SA732（PLAN２～４，Ph.18）　第３次調査区東北部および第４次調査区東辺で検出した掘立柱の南北塀[13)]。第３次調査区では柱穴を５基、第４次調査区では17基を検出した。両調査区間の未掘部分にも柱穴１基の存在が推定され、総延長は22間分（約36m）と考えられる。さらに北へ延伸するとみられるが、第５次調査区以北では調査区外に位置する。造営方位はほぼ正方位にのる。柱間寸法は約1.6mと狭い。柱掘方は0.8～1.4mの南北に長い楕円形もしくは隅丸方形で、検出面からの深さは0.5～1.0mである。第３次調査区の南から４基目の柱穴のみ柱痕跡が残る。柱掘方の埋土は黄灰色または暗褐色の砂混粘質土で、一部に礫や黄色土が混じる。また第４次調査区の柱掘方には炭や山土が混じる。柱痕跡の埋土は小礫を含む暗灰色砂質土である。SA732は、SB620やSA617（Ⅱ－１期）、SD730（Ⅱ－２期）と重複し、これらより新しい。なお、第４次調査区南端に位置する柱穴には、東へ２間分延びる掘立柱塀SA731が接続している。

掘立柱塀SA731（PLAN３）　第４次調査区東南隅で検出した東西方向の掘立柱塀。第４次調査区内で検出した南北塀SA732の南端の柱穴と接続する。２間分を検出したが、東に位置する第１次調査北区内では未検出である。柱間寸法は約2.1m。柱掘方は0.8～1.1mの南北に長い楕円形で、柱痕跡は未検出である。柱穴の深さは検出面から約0.5mである。柱掘方の埋土はバラスと暗褐色土が混じる暗褐色粗砂である。SA731の柱掘方は石組溝SD730（Ⅱ－２期）の底石を壊しており、これより新しい。

掘立柱塀SA622（PLAN３・４・６・７）　第３次調査区東北部で検出した掘立柱の南北塀。南北素掘溝SD621の西肩に沿って４間分（約9.3m）を検出した。柱間寸法は約2.3mである。柱掘方は一辺0.8～1.1mの隅丸方形で、柱痕跡および柱抜取穴は確認できない。柱穴の深さは検出面から0.3～0.5mである。柱掘方の埋土は黄色粘土ブロックを含む黄褐色もしくは暗褐色砂質土である。

SA622は平安時代の素掘溝SD322と重複し、これよりも古い。南端の柱穴は素掘溝SD605・621の屈折部分に位置している。SD621は、SA622の柱掘方を壊しているように見えるが、これはSD621の溝肩が浸食で広がったためと理解し、両者は併存していたと考えられる。

掘立柱塀SA751（PLAN５～７）　第４次調査区中央部で検出した南北塀で、SD640の東肩と重複している。第３次調査区内ではSD640によって削平を受けたためか未検出である。第４次調査ではSD640の溝底で12基の柱穴を検出した。さらに北に延び、第５～７次調査区でも検出しており、総検出長は82.1mにおよぶ。造営方位は方眼北に対して西に約１°振れる。

SA751の柱間寸法は2.1mである。柱掘方の直径は0.8～1.0mで、一部の柱穴では柱痕跡を確認している。柱穴の深さは検出面から0.5～0.9mである。柱掘方の埋土は山土や炭化物を含

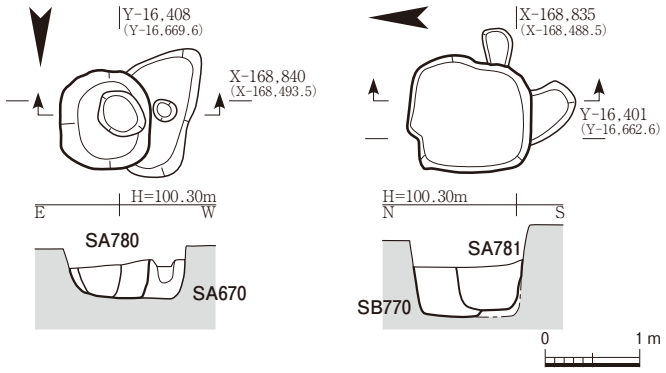


Fig. 41　SA780・781柱穴断面図　1：80

む黄色粘土と褐色粗砂の互層で、柱痕跡の埋土は炭化物や焼土を含む黄褐色粘土である。第６・７次調査で検出した柱穴では、柱掘方の埋土にも炭化物が含まれることを確認している。

SA751の柱穴はSB745（Ⅰ-１期）の柱穴を壊し、またSB735（Ⅰ-２期）を取り巻く石敷の敷設層を掘り込んでいることから、Ⅱ期以降の遺構と考えられる。また、第３次調査区内では未検出ではあるものの、第４次調査区南端の柱穴から柱間2.1mで南に延長すると、東西塀SA311の西端柱穴の柱位置に合致する。したがって、SA751はSA311に接続するⅢ期の大規模な区画施設のひとつであり、併走する素掘溝SD347・640に削平されつつも一体的に機能した遺構と考えられる。

Ⅲ期の区画施設

掘立柱塀SA780・781（PLAN５・６，Ph.19）　第４次調査区西半部で検出した掘立柱塀。東西塀SA780は西側の第11次調査区を横断してさらに西へ延びる。南北塀SA781は北側の第７次調査区内まで延び、西折してSA1175となる。第４次調査区では、SA780は８間分（19.2m）、SA781は６間分（15.0m）を検出した。他の調査区も含めると、SA780の検出長は全長61m以上、SA781は70.2mである。造営方位は、方眼北に対してともに西に約２°振れる。SA780の柱間寸法は2.2～2.6mと不揃いで、平均2.4mである。SA781の柱間寸法は約2.5mである。

SA780の柱穴は一辺0.9～1.4mの隅丸方形で、柱抜取穴を残す。柱掘方の埋土は含炭褐色土で、柱抜取穴の埋土は山土の混じる含炭褐色土である。柱穴の深さは検出面から0.6～0.7mである（Fig.41）。SA781の柱掘方は1.1～1.3mの隅丸方形で、抜取穴は未検出である。柱穴の深さは検出面から0.3～0.9mである。柱掘方の埋土は土器、炭、山土を含む暗褐色粘質土もしくは褐色土である。

他の遺構との重複関係では、SB810・811（Ⅰ期）、SA670やSB820（Ⅱ期）と重複し、これらより新しい。SA780・781は総柱建物SB830などを囲むⅢ期の大規模な区画施設である。

総柱建物を囲む区画施設

素掘溝SD347・640（PLAN４～７，Ph.15・18）　SD347は第１次調査区西端と第３次調査区で検出した東西溝[14]。第１次調査区では約2.1m分、第３次調査区では約22m分検出した。その西端で北に折れて南北溝SD640となる。検出長が短いものの、造営方位は方眼東に対して北へ約１°振れる。第214次調査では、奈良時代以降の流路NR310によって大きく浸食を受けていたことが判明している。溝幅は1.5～1.8mで、深さ約0.5mである。

NR310の浸食

SD640は第３・４次調査区の中央部で検出した南北溝である。さらに北へ延び、第８次調査区で北西へと曲折してSD1346となり、さらに北へ折れてSD1347として北進する。第８次調査区までの検出総長は約110mにおよぶ。第３次調査区では約15m分、第４次調査区では約28m分を検出した。造営方位は方眼北に対して西へ約１°振れる。溝幅は2.0～2.6mで、深さ0.4～0.6mである。溝埋土は底から順に暗灰褐色砂、暗褐色粘質土・砂質土、暗灰黄褐色砂質土の

順で堆積する。暗褐色粘質土・砂質土は炭化物や土器を多量に含んでいる。

SD347・640の埋土からは多量の土器や鋳造関連遺物等が出土した。飛鳥Ⅳの土器も多く含まれ、ともにⅢ期の遺構と考えられる。

素掘溝SD590（PLAN７）　第３次調査区で検出した東西溝。東端はSD347およびSD640の屈折点に接続する。調査区西端までつづき、検出長は25mである。西側の第10次調査区では未検出で、調査区間の未掘部分で南もしくは北に折れると思われる。溝底の比高から西流していたとみられる。溝幅は0.6～1.0m、深さは0.2～0.3mで、SD347・640よりも細い。

土坑SK1467（PLAN２）　石神遺跡1990-１次調査区の西北隅で検出した土坑。南北3.5m以上、東西約2.5m、深さ0.3mで、調査区の北側へとつづく。東西塀SA1465（Ⅱ-１期）の柱穴を壊す。埋土は暗褐色砂質土で、埋土からは飛鳥Ⅳの土器が出土した。

素掘溝SD605・621（PLAN３～７，Ph.16・19）　東西溝SD605は第３次調査区東北部で検出した素掘溝で、約９m分を検出した。西端で北折し、南北溝SD621となる。SD621は第３次調査区内で約8.4m分、第４次調査区内で約28m分を検出した。さらに北へ延びて第８次調査区までつづき、検出総長は約125mにおよぶ。SD605は検出長が短く、造営方位は不明である。SD621は方眼北に対して西に約２°振れる。SD605の東延長部は第１次調査および第214次調査でも未検出で、流路NR4648によって壊されている可能性がある。

SD605は幅約２m、深さ約0.2mで、SD621は幅約2.2m、深さ0.3mである。溝埋土は褐色もしくは灰褐色微砂で、最上層はやや黄色味をおびた暗褐色土で埋まる。底部にはマンガンの沈着層が確認できる。埋土からは鉄鏃が出土した。SD605・621はSB750（Ⅰ-１・２期）やSB620（Ⅱ-１期）、SD332（Ⅱ-１期）よりも新しく、平安時代の素掘溝SD322より古い。

井戸SE650（PLAN７）　第３次調査区西半で検出した井籠組の井戸。内法一辺の長さは約0.9mである。井戸掘方は東西約3.5m、南北約4.0mの規模で、深さは約2.8mである。底部には２段分の枠板が残るものの、上半部は径1.3mの円形穴を穿って抜き取られている。枠板は高さ30㎝、厚さは３㎝で、取り上げずに現地保存とした。井戸枠内からはおもに土師器煮炊具や須恵器壺類からなる多量の土器（飛鳥Ⅳ）が出土した。

土坑SK518（PLAN７）　第３次調査区南辺中央部で検出した楕円形の土坑。東西約2.6m、南北2.3mの規模で、深さは約0.7mである。埋土からは７世紀末頃の土器や鋳造関連遺物が出土した。SB530（Ⅰ-２期）と重複し、これよりも新しい。埋土からは飛鳥Ⅳの土器が出土した。

大土坑SK641（PLAN６・７）　第３次調査区北半中央部付近で検出した、南北に長い楕円形の大土坑。東西2.4～2.8m、南北約7.4mの規模で、深さは約0.2mである。埋土からは飛鳥Ⅳの土器が出土した。

土坑SK587・648（PLAN７）　SK587は第３次調査区中央部、掘立柱塀SA600の北側で検出した土坑。東西約3.2m、南北約1.5mの楕円形で、深さは約0.3mである。東西塀SA600（Ⅰ-１・２期）やSA560（Ⅱ-１期）の基壇を壊し、また東西溝SD590（Ⅲ期）と重複し、これよりも新しい。SK648はSK587の北西にある土坑で、東西約3.2m、南北約1.0mの楕円形を呈し、深さは約0.4mである。SK587からは飛鳥Ⅳの土器が、SK648からは土師器壺Ａが出土した。

土坑SK748（PLAN６）　第４次調査区東半で検出した不整形土坑。東西約5.4m、南北約7.4mの規模で、深さは約0.2mである。埋土は褐色粘質土で、礫を多量に含む。総柱建物

SB735（Ⅰ－２期）およびその西側に敷設された石敷SX743を壊している。飛鳥Ⅳの土器が出土した。

土坑SK755（PLAN６）　第４次調査区中央部で検出した隅丸方形の土坑。東西約2.8m、南北約3.0mの規模で、深さは約0.3mである。埋土は暗褐色または灰褐色の粘質土で、焼土や炭化物を含む。斜行溝SD575（Ⅰ期以前）や方形区画SX760（Ⅰ－１期）と重複し、これらより新しい。埋土から飛鳥Ⅳの土器が出土した。

土坑SK764（PLAN５・６）　第４次調査区北半中央部で検出した楕円形土坑。東西約0.9m、南北約1.0mの規模で、深さは約0.5mである。埋土は暗灰褐色粘質土で、炭を多量に含み、飛鳥Ⅳの土器が出土した。

土坑SK774（PLAN５）　第４次調査区北辺中央部で検出した楕円形土坑。東西約1.2m、南北0.8mの規模で、深さは約0.2mである。埋土は褐色粘質土で、炭化物や焼土を含み、飛鳥Ⅳの土器が出土した。

D　Ⅳ期の遺構（奈良時代以降）

ⅰ　奈良時代～平安時代

流路NR310・4648（PLAN４・７，Ph.14・22）　NR310[15]は第１・３次調査区で検出した幅3.0～6.0m、深さ0.7～1.5mの河道で、第214次調査でも再検出した。第１次調査区では北東から南西へと流下しており、その南半にはNR310が運搬した砂礫層が厚く堆積していた。第214次調査の所見によれば、NR310の堆積物は拳大から人頭大の礫を多量に含む砂礫層で、遺跡東方から流下してきた土砂で埋没している（Fig.９参照）。

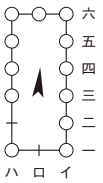
NR310は７世紀代の遺構が廃絶した後に、遺跡東方からの土砂が流下することで形成された流路跡であり、多くの遺構がその浸食で壊れている。第214次調査時の観察によれば、NR310はSB400南辺の石敷SX327を側刻によって崩し、SD330側石の上半を押し流したとみられる。またその浸食は、SD335の側石天端を洗い出し、側石の一部を転倒させている。NR310の経路上では、整地土Ａは遺存していない。この流路を埋めた堆積物からは、奈良時代中頃の土器や平安時代の黒色土器、７世紀代の瓦類や基壇化粧の凝灰岩切石などが出土した。

第214次調査区の北半では、NR310へと合流する流路NR4648を新たに検出した。平安時代の素掘溝SD322の下位に位置し、石敷SX327の敷石が乱れる南北幅2.2～2.6m、東西約11mの範囲がこれに該当するとみられる。SD335以西では石造物を掘り出したときの掘削により判然としないが、第３次調査区まで南西に向かって流れていたと考えられる。

遺跡周辺の地形発達史

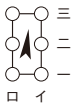
NR310・4648は、平城遷都後から平安時代までの石神遺跡の土地利用の変遷や、遺跡周辺の地形発達史を考えるうえでも重要な遺構といえる。

掘立柱建物SB440（PLAN３）　第２次調査区西南部で検出した掘立柱建物。桁行５間（9.0m）、梁行２間（3.6m）の南北棟建物で、造営方位は方眼北に対して西に約５°振れる。柱間寸法は桁行・梁行ともに約1.8mである。柱穴の平面は径0.4～0.6mの小規模な円形である。すぐ北に位置する掘立柱建物SB459と同時期の遺構とみられる。柱穴埋土からは黒色土器が出土した。



掘立柱建物SB459（PLAN２・３）　第２次調査区中央部で検出した掘立柱建物。桁行２間

(4.0m)、梁行１間の小規模な南北棟建物で、建物は方眼北に対して西に約６°振れる。柱間寸法は桁行約2.0m、梁行約2.1mである。柱穴の直径はいずれも0.4mと小振りである。柱穴埋土からは黒色土器が出土した。



土坑SK320（PLAN４）　第１次調査区東北部で検出した土坑。平面は一辺約2.8mの隅丸方形で、土坑東南隅に直径約2.0mの円形の穴がさらに深く込まれている。埋土には多量の炭が混じり、９世紀前半の土師器や黒色土器のほか、瓦、土馬、金具などが出土した。

素掘溝SD321・322・630（PLAN４～７，Ph.24）　SD321は第１次調査区東南部から北流する南北溝で、約20m分を検出した。調査区外の南からつづく。SD322はSD321北端から西折し、第１次調査区内で約13m分、第３次調査区内で約17m分を検出した。SD322はさらに北折してSD630となり、第８次調査区までつづき、検出長は約123mにおよぶ。

SD321は溝幅0.5～0.7m、深さ0.1～0.2m。SD322は溝幅0.5～0.7m、深さ0.1～0.2mで、溝埋土からは黒色土器片が出土した。SD630は溝幅0.6～1.0m、深さ約0.4mである。

南北溝SD360（PLAN２～４）　第１・２次調査区で検出した平安時代の南北素掘溝。検出長は第１次調査北区南端から第２次調査区北端まで約38mである。石敷SX359（Ⅱ-１期）を掘り込む。溝幅は約0.6m、深さは0.1mである。

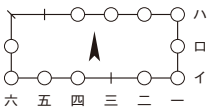
掘立柱塀SA420（PLAN３）　第２次調査区南辺中央部で検出した南北塀。柱穴を６基検出した。造営方位は方眼北に対して西に約５°振れる。検出長は9.6mで、柱間寸法は約1.9mである。柱穴は直径0.4mの小円形で、柱穴埋土は不明だが、黒色土器など平安時代の土器が出土した。

ⅱ　13・14世紀代

石組井戸SE410・455（PLAN２・３）　SE410は第２次調査区東北隅で検出した石組井戸。井戸掘方は径約２mの円形で、深さは検出面から約2.5mである。検出面から0.6m下の位置まで石組が残存し、底部に向かって窄まっていく。石組の内法は上端で径約1.6m、下端で約0.4mである。最下部には高さ40㎝、幅37×47㎝の曲物を据えている。

SE455はSE410の西約15mの位置で検出した石組井戸。井戸掘方は径約2.5mの円形で、深さは検出面から約2.3mである。石組は内法径約１mで、ほぼ垂直に積み上げる。いずれも井戸埋土から13世紀代の瓦器が出土した。

掘立柱建物SB460（PLAN２）　第２次調査区北部で検出した掘立柱建物。桁行５間、梁行２間で、正方位の向きで建つ東西棟建物である。柱間寸法は桁行2.2m、梁行2.1mで、柱穴の平面は直径0.4～0.5mである。



掘立柱塀SA461・462（PLAN２）　SB460の北と西を囲うように建てられた掘立柱塀。SA461はSB460の西妻柱筋から西に2.4mの位置にある南北塀である。造営方位は方眼北に対して西に約1.5°振れる。５間分（9.1m）を検出し、柱間寸法は約1.8mで、柱穴は直径0.3～0.6mである。SA462はSB460の北側柱筋から北に3.5mの位置にあり、SA461の北端から東へ延びる東西塀である。正方位の向きで建つ。６間分（13.5m）を検出した。柱間寸法は2.2mで、柱穴の平面は径0.3～0.6mである。SB460とSA462は柱筋を揃えているうえ、いずれも瓦器をともな

中世の土地利用

う14世紀代の遺構である。その他の瓦器をともなう遺構とともに、中世の土地利用を知る上でも重要な遺構である。

素掘溝SD351・441・442（PLAN２・３）　SD351は第２次調査区南半で検出したＬ字形に折れ曲がる素掘溝。東西溝部分の長さは約20mで、南北溝部分の長さは約10mである。溝幅は0.5～1.0m、深さは0.1～0.2mと浅い。類似した溝には、第２次調査区西北部で検出したＬ字形の素掘溝SD441・442がある。SD441は調査区中央付近でSD335に跨って検出された東西素掘溝で、幅2.1～3.1m、深さ約0.2mである。SD441はSD335の西側約３mのところで北に折れて、南北素掘溝SD442となる。SD442は幅1.2～3.0m、深さ0.1～0.3mである。SD351・441・442は掘立柱建物SB460や塀SA461・462などの遺構と関連し、14世紀代の遺構とみられ、同時代の宅地の区画単位を構成する溝と考えられる。

宅地の区画単位

E　古墳時代の遺構（６世紀以前）

竪穴建物SI315（PLAN４，Ph.23）　第１次調査区東北隅において、黄褐色土の地山上面で検出した古墳時代中期の竪穴建物。平面は東西4.6m、南北4.2mのほぼ正方形で、建物は方眼北に対して西へ約25°振れる。建物内西南部から５世紀頃の甑が出土した。床面では西南隅にカマド（SL313）、その南西と西北隅に貯蔵穴とみられる小土坑２基（SK312・314）を確認した。小土坑からは細片化した製塩土器が出土した。

竪穴建物SI318（PLAN４）　第１次調査区東北隅において、黄褐色土の地山上面で検出した古墳時代中期の竪穴建物。東西3.8m、南北3.5mで、建物の振れはSI315と同様に、方眼北に対して西へ約25°振れる。南辺はSI315に掘り込まれているが、ほぼ同時期の遺構とみられる。

土坑SK404・405・406（PLAN３）　第２次調査区東半で検出した古墳時代の土坑群。東西６m、南北６mの範囲で検出した。不整円形の土坑が互いに接している。このうち、SK405からは５世紀代の土師器・須恵器がまとまって出土した。

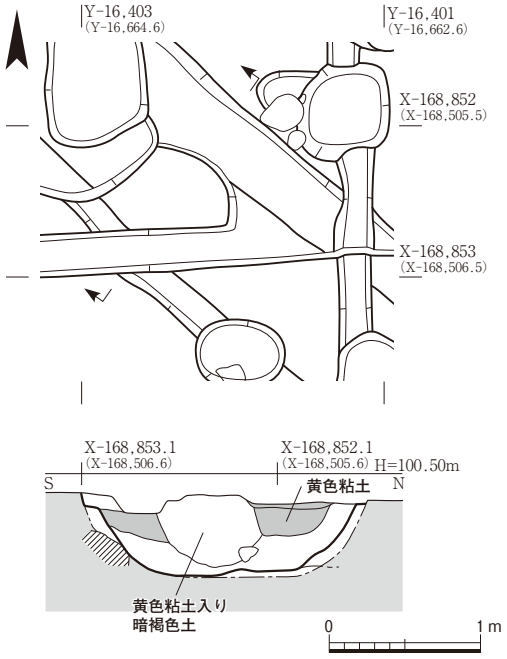


Fig. 42　SD577平面図・断面図　1：50

斜行溝SD575・576・577（PLAN６・７）　第３・４次調査区で検出した、Ⅰ期の造営に先行する斜行溝。東からSD575、SD576、SD577と並び、第３次調査区の東南隅から北西に向かって放射状に延びる。SD576とSD577は溝心間で約２mの距離を隔てて並走し、第４次調査区西端でSD577のみ真西方向に折れる。いずれの溝も周囲の調査区では未検出である。

SD575は幅0.8～1.4m、深さ約0.5mで、検出総長は約46mである。SD576は幅1.2～1.5m、深さ0.4m、SD577は幅1.2～1.4m、深さ約0.5mで、ともに検出総長は約54mである。SD575の一部とSD577の溝両肩には、黄色粘土または黄色粘土を含む淡青灰色粘土

の粘土帯が確認でき、それらに挟まれた溝中心部は黄色粘土の山土を多量に含む暗褐色土で埋められる（Fig.42）。流水を示す痕跡は確認できない。これら溝両肩の粘土帯を裏込土とみれば、造営当初は木樋を据えていた可能性もある。溝埋土からは少量であるが、古代の瓦片や古墳時代の羽口、飛鳥Ⅰに属する須恵器が出土した。ただし、木樋そのものは遺存していない。

木樋の痕跡

SD575・576・577はいずれも、SA600などのⅠ期の遺構に先行する溝で、飛鳥寺創建前後の６世紀末からⅠ期が造営される７世紀前半以前の遺構と考えておきたい。

Ⅰ期造営以前

F　石造物関連遺構

石造物抜取痕跡SX344（PLAN４）　SX344は第１次調査区の中央やや西寄り、SD335の西側に位置する小土坑で、平面は直径0.8mの円形である。もうひとつの石造物痕跡であるSX350（後述）からは東へ約６ｍを隔てている。1936年調査に関する石田茂作の著述[16]を参考にすると、SX344は明治35・36年（1902・1903）に出土した石造物が据わっていた痕跡とみられる。Fig.6（第Ⅱ章第３節、17頁）に掲げた1936年調査の実測図と見比べると、須弥山石の第２・３石目もしくは石人像の痕跡にあたると考えられるが、そのいずれかは不明である。第１次調査時に完掘しており、石造物に由来した花崗岩の痕跡は残っていない。

石田茂作

石造物抜取痕跡SX350（PLAN４，Ph.23）　第１次調査区西半において、水田の床土面から掘り込む穴の底部で検出した痕跡（Fig.43）。直径1.0～1.2mの不整形な輪状に、幅７～14㎝の花崗岩の層が残存する[17]。明治35年に出土した石造物の痕跡とみられ、須弥山石第一石目の上面の形状に酷似しており、出土時点ですでに天地逆の状態であったことがわかる。1936年調査の実測図（Fig.6）にも、須弥山の第Ⅰ石らしき痕跡を畦際に描いており、SX350にあたると推定できる。SX350の上層に瓦器が含まれること、SX350の直下でSD347（Ⅲ期）を検出していることから、須弥山石の第一石がこの場所に埋没したのは、７世紀末から12世紀までの間と考えられる。

須弥山石第一石目の痕跡

石造物探索坑（PLAN４）　第１次調査時に床土上面で検出した、不整形の攪乱坑。飛鳥287番地の西北部にあり、床土以下を虫食い状に掘り下げている。その範囲は東西約９m、南北約６ｍにおよび、前述のSX344・350もこの範囲内にある。掘削は基盤となる砂礫層におよんでいる。明治35・36年に相次いで石造物を掘り出した際の探索坑である可能性が高い。第214次調査の調査過程で、その埋戻土を概ね除去したものと思われる。

明治35・36年の石造物探索

探索坑は石造物の発見に関連する人工的な掘削痕跡であるが、とくに遺構番号は与えない。このほか、第１次調査では床土上面で、1936年調査のトレンチ跡も検出している（附篇４節、317頁Fig.174参照）。

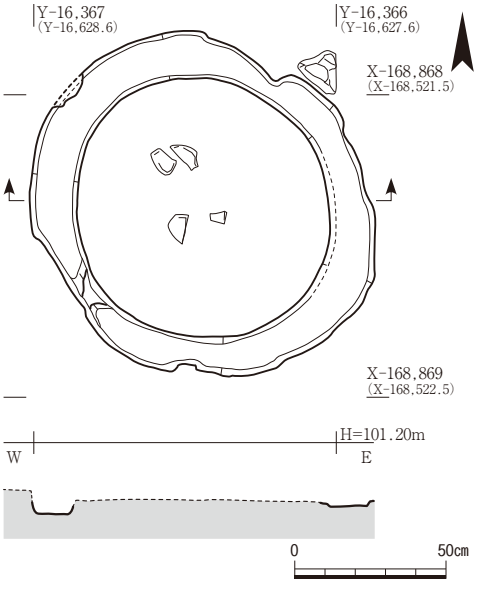


Fig. 43　SX350平面図・断面図　1：25

1）本節で取り上げる建物遺構はすべて掘立柱建物で、柱穴の検出状況を示す番付図を掲載した。番付は東南隅（東南隅を未検出の場合は東北隅）を起点とし、桁行を漢数字順、梁行をイロハ順で記した。各柱穴の凡例は次のとおりである。●は柱根が残る柱穴、⊙は柱痕跡が残る柱穴、○は掘方もしくは抜取のみが残る柱穴、＋は未検出であるが、推定される柱位置を示す。

2）石田茂作「飛鳥の須弥山遺跡」『飛鳥随想』学生社、1972年。石田はこの柱穴について、「・・・・・直径二尺五寸深さ地表下八九尺に達する円形井戸を思わせる穴を発見した」と述べている（159・160頁）。

3）『藤原概報12』では、SA600東端の柱穴を「SE140」として識別している。これは石田の認識をそのまま踏襲したためとみえるが、遺構そのものへの詳しい言及はない。

4）藤原宮第24次調査（『藤原概報９』）で検出した藤原宮東面大垣は、柱間寸法約2.7mの一本柱塀で、柱掘方は一辺約1.8mの隅丸方形で、柱抜取穴は柱掘方よりも長い楕円形を呈する。推定される柱の直径は約45cmである。なお、藤原宮の大垣に使用された柱は、その後、平城宮第一次大極殿院の東面築地回廊を横断する木樋暗渠に転用された（『平城報告Ⅺ』）。

5）SA480の柱掘方埋土はバラス混じりの灰褐色粘質土、柱痕跡の埋土は黄褐色土で、SA4650と同様である。柱位置が合致することも踏まえて、本稿ではSA480とSA4650を同一の遺構と考えておく。

6）井戸枠はスギ材とされる（『藤原概報15』）が、取り上げずに現地保存としたため、その確認はできない。

7）第２次調査時の土層図によれば、「黄褐色土」はSB400の南辺石敷SX327を覆う土層で、平安時代の土器を含んでいる。

8）第１次調査ではSX328、第２次調査時ではSX358と別の遺構番号が付されていたが、同一遺構のため、本書ではSX358に表記を統一した。

9）第１次調査では東の柱穴５基をSA305としたが、本書ではSA560に統一した。また、第１次調査では、SA560の一部を梁行１間の掘立柱建物SB325としていたが、第214次調査で確認した結果、SB325の南側柱はSA560、北側柱はSA4646としてそれぞれ独立した塀の遺構であると解釈した。

10）調査時はSX550西南部の台状の地形の高まりをSX551としていた（『藤原概報14』）。NR310により上面が削平されており、遺構の性格も不明であった。遺構の検出状況を鑑みて、本書ではSX551を石敷SX550の一部分であると解釈した。

11）第３次調査ではSA610と別の遺構番号を付していたが、第214次調査を経た今、SA311とは一連の塀であることが判明したため、本書ではSA311に統一した。

12）石敷SX327の南側のSA311と重複する部分には、奈良時代以降の流路NR310および中世の遺物包含層が堆積していた。第214次調査の断割では、これら後世の堆積層の下位でSA311の柱穴を確認している。

13）第３次調査時はSA618、第４次調査以降はSA732として遺構番号を付していた。同一遺構であるため、本書ではSA732に統一する。

14）第１次調査区の東側で実施した第209次調査では、東西溝SD347の東延長上で東西溝SD4610を検出し、両者を一連の遺構と考えている（『発掘調査報告2023』）。SD4610埋土上層は埋立土（灰黄褐色～褐色砂質土）および砂礫層（灰褐色～暗褐色砂礫および粗砂）で、下層は水成堆積層（灰褐色～灰黄色の細砂および粘砂）である。第209次調査では、SD4610上層をNR310の一部、下層をSD347と解釈した。しかしながら、第214次調査の観察では、SD4610下層がNR310の粗砂層に対比でき、前者が後者と一体である可能性が浮上している。これについては、今後も石神遺跡東方の発掘調査を継続し、引き続き検討を加えていく予定である。

15）既往の概要報告では「自然流路SD310」『藤原概報14』）と称していた流路跡である。本書では文化庁編『発掘調査のてびき』（2010年）に準じ、「流路NR310」と改めた。なお、水落遺跡の発掘調査（飛鳥藤原第165次）では、人為的な護岸石列（SX4406、検出長2.5m）を一部で検出している。これはNR310に重なった後世の遺構と現段階では解釈するが、今後の検討課題である。

16）石田、前掲註２）論文。

17）SX350は第１次調査時に、実測や写真撮影後に掘り下げられたため現存しない。

第Ⅴ章　遺　　物

第１節　土器・土製品

石神遺跡第１次～第４次調査で出土した土器・土製品は、整理用木箱で780箱である。これは第21次調査までに出土した土器・土製品4,788箱のうち、16.3％を占めている。

本書では遺構変遷上の区分にしたがい、Ⅰ期・Ⅱ期・Ⅲ期の順で、溝、井戸、土坑などの遺構や整地土ごとに出土土器の記載をおこなう（本節Ａ～Ｃ項）。これらはすべて、７世紀前半（飛鳥Ⅰ）から７世紀末・８世紀初頭（飛鳥Ⅴ）にかけての土器である。これに次いで、奈良時代・平安時代の土器（Ｄ）と、７世紀代の東北系黒色土器（Ｅ）、刻書土器（Ｆ）、陶硯（Ｇ）、新羅土器（Ｈ）、土製品（Ｉ）、古墳時代の土器（Ｊ）、須弥山石出土地点で出土した土器片を含む中世の土器（Ｋ）等もあわせて報告する。

本書で用いる土器の器種名や手法の呼び方、時期区分は、おもに『藤原報告Ⅱ』および『平城報告Ⅶ』にしたがう。しかしながら、既刊の『藤原報告』や『山田寺報告』『飛鳥池報告』等における器種名の表記揺れもあるため、本章の執筆にあたっては若干の整理が必要であった。そこで本書では、分類記載上の器種名は既刊の各例を参考にしつつ、例外的な用例を廃し、全体の統一を図った。これは『藤原報告Ⅴ』の別表２・３を部分的に書き換えるものである。また、土師器杯Ｇの概念は、既刊の刊行物の中で大きく変質しているので、本書ではその一部を「杯Ｊ」として独立させることとした。各器種の分類記載上の特徴や、既往の器種分類の変更点については、別表１・２を参照されたい。

土師器供膳具の調整手法は、ヘラケズリの有無や範囲でａ・ｂ・ｃ手法を、ヘラミガキの有無や範囲で０・１・２・３手法を区別し、この両者を掛けあわせてa0手法、b1手法などと記す。この点は既刊の学報と同じである。また、須恵器供膳具の蓋は、これまでは「杯Ｂ蓋」に分類することが多かったが、SD640出土土器等の計量的検討によれば、無台食器である椀Ａの蓋を一定量含んでいることが判明している。そこで本書では、杯Ｂ蓋という分類単位を見直し、これらを単に「杯蓋」と称することにした。それぞれがいかなる器種の蓋であったかは、遺構別・土器群ごとの記載のなかで述べたい。

土器の色調を記載する場合は、『新版標準土色帖』のマンセル表色系にしたがった。土師器供膳具は橙色（Hue 2.5YR 6/6および6/8・Hue 5YR 6/8など）や明赤褐色（Hue 5YR 5/6または5/8）を呈する個体が圧倒的に多い。そこで土師器では、これら橙色系の色調から大きく外れる個体についてのみ、その色調を示す。いっぽう須恵器の色調は、多くの場合で灰白色（Hue N 8/または7/）または灰色（Hue N 6/または5/）が近似色となり、参考にできる色相が限られるため、特殊例にかぎり色調を明記する。

A　Ⅰ期遺構群出土土器

i　SD335・435出土土器（PL. 5）

第１・２次調査で検出したⅠ－１期の石組溝SD335・435は、第１次調査区の南端付近から北へと延びるSD335（約60m）と、それが曲折して東へと延びるSD435（約18mを検出）とからなる。このうちSD335は、大部分が石田茂作の発掘調査で完掘されている。SD335の大部分はこのときに発掘されてしまい、本来の堆積層をとどめたのはごく一部となったが、石田はSD335が「作土」とその下位の「河砂」で埋まっていたと述べている。作土・河砂はその層相からみて、それぞれが第１次調査における「石溝バラス」「石溝埋土」と、「石溝砂層１」「石溝ニコ土１」「石溝砂層２」「石溝ニコ土２」[1]などに対応していると考えられる（Tab. 3）。いっぽう、SD435は1936年の発掘調査では未発掘で、その埋土がよく残っていたため、SD335よりも出土土器が多い。溝埋土はSD335と共通し、上部の「石溝バラス」「石溝埋土」が埋立土、下部が機能時堆積層である。後者は上位から順に「砂層１」「ニコ土１」「砂層２」「ニコ土２」に分かれる。本書では、第１・２次調査と、飛鳥藤原第214次調査で出土した土器を一括し、ひとつの資料群とみなすが、SD335出土土器の全体像をあきらかにするには、1936年調査出土土器（Tab. 4）[2]にあたらねばならないことを付言しておく。

石組溝の層序

Tab. 3　SD335・435の土層名

取り上げ土層名	断面図（No.42）との対応関係	1936年調査との対比
石溝バラス 石溝埋土	暗褐色粘質砂土	「作土」
石溝砂層１ 石溝ニコ土１ 石溝砂層２ 石溝ニコ土２ 石溝最下層粘土 石組溝底バラス	灰褐色粗砂 淡黄灰色ニコ 灰褐色砂 暗灰色粘土	「河砂」

Tab. 4　1936年調査の出土土器

土師器			陶　器（須恵器）		
皿		1	埦	残欠	3
高坏	脚部残欠	1		残片	1
	底部	2		底部残欠	1
	耳	1		脚部	1
	残片	一括	埦蓋		1
				残欠	3
			壺	残欠	1
			坩	口縁部残欠	1
			甕	残片	一括

土師器　SD335・435出土の土師器には杯Ｃ、杯Ｇ、杯Ｈ、把手付台付椀、高杯Ｃ、高杯Ｇ、甕がある。その大部分は第２次調査出土で、多くは溝の埋立土である「石溝埋土」こと暗褐色粘質砂土から出土したものだが、一部は「石溝砂層」「石溝ニコ土」から出土している。

杯Ｃは３つの規格からなる。１～３は杯ＣⅠ。いずれも細片化しているが、半球形の器形をなし、外面をヘラミガキで整える。１は一段放射暗文で、見込に螺旋暗文を施すもの。底部外面に針書きがある。２・３は二段放射暗文を施しており、底部外面にはヘラケズリ痕が残る。いずれもSD435埋土上部出土。

４～８は杯ＣⅡ。杯ＣⅠと同様に、外面をヘラケズリで整えたのちヘラミガキを施した個体（４・５）もあるが、ヘラミガキを欠いた個体（６～８）のほうが多い。８の底部外面には黒斑がある。４～６がSD335、７・８はSD435の出土。

９～11は杯ＣⅢ。底部外面は不調整のままで、口縁部外面にはヘラミガキを施している。９・10がSD335、11はSD435ニコ土２の出土。

杯Ｃに次いで目立つのが粗製の小型食器で、多くを杯Ｇが占めている。飛鳥時代前半のそれ

らは、その器形や胎土等の特徴から３種類に細分されている[3]ので、本書でもこれにしたがう。

杯Ｇａ類（12～14）は端部を小さく外反させた直立気味の口縁部をもち、外面にはユビオサエの痕跡が環状に残る。類例は藤原京右京七条一坊西南坪のSD4955（飛鳥Ⅰ）などで出土している[4]。13がSD335、12・14はSD435埋土上部の出土である。

杯Ｇｂ類（15・16）は椀形で口縁端部の内側に小さな内傾面をつくるのが特徴である。16は完形で、口径11.3㎝。外面にはユビオサエによって生じたくぼみが円環状に残り、第１～４指の指頭圧痕も明瞭である。胎土は砂質で、赤褐色の粒子と金雲母とを含む。色調は明赤褐色である。器形・大きさともに杯Ｇｂ類の典型例である。15がSD335砂層（第214次調査）、16はSD435の砂層２からの出土。

杯Ｇｃ類（17～19）は口縁部外面に面をつくり内弯するものを指す。20もこれに類するか。これらの胎土は精良だが軟質に焼けているものが多い。明瞭なユビオサエの痕跡が外面を環状にめぐり、17・18には粘土紐の巻き上げ痕も消えずに残る。内面に板ナデ痕跡をとどめる個体も多い。17は完形品で、杯Ｇｃ類の典型例である。色調は灰白色（Hue 2.5Y 8/2）。17がSD335からの出土で、ほかはすべてSD435埋土上部からの出土。これらの類例は川原寺下層SD367[5]、甘樫丘東麓遺跡SX037[6]、同遺跡SK184[7]など、飛鳥地域では飛鳥Ⅰ後半の土器群に多い。

杯Ｈ（21～27）は底部外面をヘラケズリで整形した粗製の丸底食器。胎土には雲母を含み、にぶい橙色を呈する。25・27がそれぞれSD335ニコ土１・SD435砂Ⅰの出土であるほかは、SD335・435埋土上部の出土。

把手付椀（28）は強く内弯する口縁部に角形の把手を付した独特の器形で、SD335から１個体が出土している。底部外面はヘラケズリで整え、口縁部外面にヘラミガキを施す。角形の把手は中実で手捏ねによっており、口縁部の底部寄りに開口のうえ差し込んだものとみられる。色調は明赤褐色で、杯Ｃに同じ。SD335埋土上部の出土。

高杯Ｃ（29・30）は口縁部がやや内弯する杯部に脚台を付した高杯で、口縁端部のおさめ方や胎土・色調等が杯Ｃに調和的なもの。脚部の内側には絞り目が残り、30には芯棒痕跡がある。29はSD335埋土上部の、30はSD335砂層の出土。

高杯Ｇ（31）は胎土・色調が杯Ｇｂ類に共通する。杯部と脚部との接合部付近が残る。杯部見込には小黒斑がある。胎土には金雲母を含む。SD335の砂層１からの出土。

甕類は口縁部・胴部ともに小破片が多く、PL.５では４例のみを示した。32・33は内外面ともに上部がハケ目調整で、外面は斜め方向のハケ、内面は横方向のハケで整える。胎土は砂質で灰白色（Hue 10YR 8/2）を呈し、いわゆる「伊勢・伊賀型」の特徴[8]を示している。32はSD335埋土上部の、33はSD435埋土上部の出土。34は口縁部と胴部との屈曲が弱く筒形を呈する。35は口縁部が外方へと大きく開いた甕。34・35ともにSD435の出土。

須恵器　SD335・435出土の須恵器はおもに杯Ｈ身とその蓋、杯Ｇ身とその蓋からなり、これに壺・甕類がくわわる。土師器と同様に細片が多く、実測や計測に耐えうる個体は少ない。

杯Ｈは杯身（39）とその蓋（36～38）とからなる。36は頂部外面をロクロケズリで整形している。37の頂部外面はヘラ切りのままである。これらよりやや小さいのが38で、その頂部はロクロケズリで整形する。色調は灰色で、猿投産か。39の受部径は約11.5㎝で、底部外面はヘラ切りのままである。36はSD335、37～39はSD435の出土で、39はニコ土層１からの出土。

杯Ｇは杯身（44）とその蓋（40～43）とからなる。蓋は復元外端径が10.0～11.0cm。杯Ｇ身は口径9.0cmで、40の受部径にほぼ等しい。底部外面はヘラ切りのままである。飛鳥時代前半の杯Ｇには、黒味をおびた暗灰色の個体が少なくないが、本例もその１つである。43がSD335埋土上部の出土で、これ以外はSD435埋土上部の出土。

45は『山田寺報告』において「杯Ｊ」として分類記載されたもの[9]。口縁端部の直下が「く」の字形に屈曲するのが特徴的である。飛鳥地域では、飛鳥Ⅰの土器群に少量含まれていることが多い。SD435埋土上部より出土。

盤Ａ（46）は底部外面をロクロケズリで整形し、同内面には灰緑色の自然釉がかかる。SD435埋土上部出土。類例がSD435のすぐ北側に位置するSD500で出土している。

短頸壺（48）は胴部中央に２条の沈線をめぐらせ、胴部下半から底部にかけては手持ちヘラケズリの痕跡が残る。胎土には亜炭粒を多く含む。SD435埋土上部出土。同壺の蓋（47）は頂部にロクロケズリを施しており、ロクロは右回りか。SD335埋土上部出土。

平瓶（49）はほぼ完形で、胴部径は17.0cm。頂部には暗緑色の自然釉が厚くかかり、底部にかけて流下しているが、自然釉が剝落した部分にはカキ目が露出する。底部から胴部下半にかけてはロクロケズリ痕が残る。東海産か。SD435埋土上部出土。

甕（50）は胴部から底部までをほぼ欠いているが、胴部上半は外面に横方向のカキ目が、内面には当て具痕が残る。SD435出土。

ⅱ　SE800井戸枠内出土土器（PL．6～12）

第４次調査で検出したⅠ－１期の井戸SE800は、刳り抜いたスギ材２枚を組みあわせて井戸枠とし、周囲に人頭大の玉石を方形に敷き、石敷の四方に側石を立てたもので、石敷面からの井戸の深さは3.8mにおよぶ（『藤原概報15』1985年）。井戸埋土は上位から順に「井戸灰褐色粘土」、「井戸バラス」、「礫混砂」、「井戸含砂礫茶褐色有機土」、「井戸砂混灰褐色土」、そして「井戸灰褐色砂」となる（Fig.44）。

井戸枠内の層序と土器

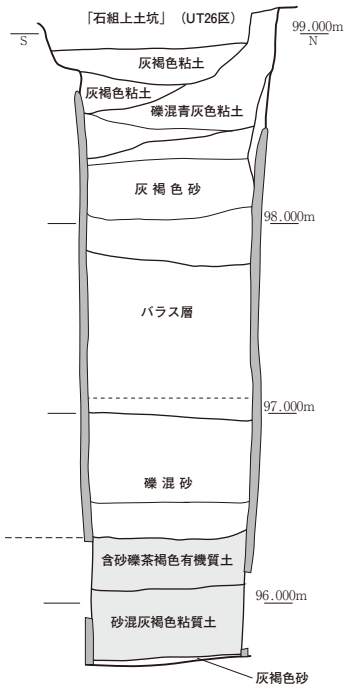


Fig. 44　SE800井戸枠内の層位　1：40

井戸枠内の層序と土器　　SE800出土土器は、その概要報告では飛鳥Ⅲに属するとされたが、その後上位から順に１層（「灰褐色粘土」ほか）が飛鳥Ⅳ、２層が飛鳥Ⅲ（「灰褐色砂」と「井戸バラス」）、３層（「礫混砂」）が飛鳥Ⅱの土器様相に近く、最下部の４層（「含砂礫茶褐色有機質土」と「井戸砂混灰褐土」）が飛鳥Ⅰの新段階であるとする新見解が出され[10]、今日にいたっている。後者の年代観は土師器杯Ｃの径高指数を重視しつつ、須恵器平瓶の器形変化も考慮したものとなっている。SE800出土土器の記載では、井戸埋土の深度に応じて土器が新しくなるかどうかが、ひとつの焦点となる。以下、井戸埋土出土土器は上位から順に、層位ごとに記載する。

ａ　**埋土最上部**（Fig.45）

井戸枠内の埋土最上部は、取上名を「石組上土坑」または「井戸枠内灰褐砂」といい、前者の断割時に井戸枠を確認するまでは土坑と認識していたものである。SE800の石組を埋め立てた土砂とは一連で、井戸枠内に落ち込んだ整地土Ｂにあたると解釈できる。出土土器は少量だが、SE800石敷埋土出土土器（本書107頁）とは不可分で、飛鳥Ⅳに属する。51～53は土師器杯Ｃで、底部外面を不調整にとどめるもの。径高指数は27.0前後で、大官大寺下層SK121出土例や、整地土Ｂ出土のそれら（本書）に近似する。51は礫混灰色粘土、52は灰褐色砂、53は「石組上土坑」出土。

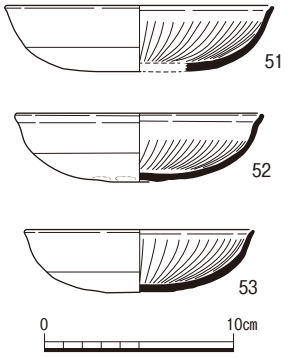


Fig. 45　SE800埋土最上部出土土器　1：4

ｂ　**バラス層**（PL.６・７）

石敷面から下へ1.3～2.1mの層準で、遺物取上名は「井戸バラス」である。井戸枠内の断面図によれば、その下半は人頭大礫が多い。少量の食器類と、多数の土師器甕・須恵器壺類が出土した（Tab.５）。

土師器　　杯ＣⅠ（54）は略完形品。口径16.0cm、器高4.5cm（径高指数28.1）である。底部をヘラケズリで整え、口縁部外面に粗いヘラミガキを、内面には粗い一段放射暗文を施す。

杯Ｈ（55・56）は底部外面をヘラケズリで整えた小型粗製杯で、底部と口縁部との境界が明瞭なもの。いずれもにぶい黄色を呈する。このうち、56は略完形で、口径10.3cmである。

甕Ａ（57～68）にはスス・コゲが付着し、被熱痕跡をとどめる個体が多い。57は小型の球胴形甕で、スス・コゲの付着あり。58～64は中型の球胴形甕で、胴部最大径が14～16cmのもの。胴部外面を縦方向のハケで整え、内面に指頭圧痕や板ナデの痕跡をとどめる個体（58～62・64・65）が多く、重度の使用痕跡をとどめた個体を含む。58の胴部内面はスス・コゲで全体に黒色を呈し、外面にもコゲが斑状に付着している。また、胴部外面の下半には被熱による剝離痕がある。59の胴部外面はススで黒ずんでおり、被熱による剝離痕が点在する。60・62の胴部内外面にスス・コゲが付着し、全体が黒色を呈する。63はこれまで「近江型」と呼ばれてきたものである。64は内面の下半を縦方向のヘラケズリで整えている。本例も近江・伊賀ないしは伊勢産の甕か。

65～67は胴部最大径が16～18cmの球胴形甕。65はなで肩でやや面長の球胴形甕で、胴部外面には黒斑が明瞭に残るが、ススも付着している。66は直立気味の口縁部をもつやや広口の球胴形甕で、黒斑はあるがスス・コゲは認められない。67は胴部から口縁部にかけてスス・コゲが付着している。胴部外面には焼成後に刻まれたＤ字形

Tab. 5　SE800バラス層出土土器の組成

土師器				須恵器			
器種名	部 位	破片数	%	器種名	部 位	破片数	%
杯Ｃ	口縁部	1	0.71	杯 類	底 部	1	1.92
杯Ｇ	口縁部	2	1.43	壺	口縁部	4	7.69
杯 類	口縁部	0	0.00		胴 部	5	9.62
	底 部	2	1.43		底 部	5	9.62
甕	口縁部	30	21.43		高 台	1	1.92
	頸 部	1	0.71	平 瓶	口縁部	2	3.85
	胴 部	70	50.00		肩 部	1	1.92
	底 部	28	20.00	提 瓶	胴 部	1	1.92
竈		1	0.71	甕	口縁部	14	26.92
壺	胴 部	1	0.71		胴 部	31	59.62
	底 部	4	2.86		底 部	1	1.92
		n＝140				n＝52	

Tab.５～８に掲げた破片数には、図示した各個体を「１点」として含めている。

の線刻がある。68は大型の球胴形甕で、胴部径20cm前後のもの。外面にはスス・コゲが斑状に付着している。

甕Ｂ（69）は球胴形の胴部に一対の把手を付した大型の甕で、胴部中央に穿孔のうえ、角状の把手を差し込んでいる。胴部外面には大きな黒斑がある。スス・コゲは顕著でないが、胴部内面の下半はやや暗く変色しており、使用痕とみられる。

甕Ｃ（70）はほぼ完形に復したもの。胴部内面の上半を横方向のハケで、内面の下半も縦方向のハケで整えている。胴部外面は底部下端から口縁部にかけて、ススやコゲが広く付着する。胴部内面にも薄いコゲがあり、胴部上位に褐色の帯がめぐる。

須恵器　　短頸壺（71～73）は蕪形の胴部に外反する短い口縁部を付した壺で、有蓋壺とみられるが、いわゆる薬壺形とは異なるものを指す[11]。71は胴部の中位以下を左回りのロクロケズリで整形しており、胎土中に含まれる亜炭[12]が尾を引くように延びる。完形品。72はやや肩が張る胴部に１条の沈線を巡らせた短頸壺で、丸底気味の底部はロクロケズリで整形している。73は胴部がなで肩で面長の短頸壺で、胴部から頸部をロクロナデで整えるが、底部は不調整にとどめる。口縁部の付け根付近に矢印状の浅い線刻がある。完形品。

平瓶（74）は胴部の最大径が約16cmで、頂部との境界に１条の沈線をめぐらせる。頂部中央を粘土円板で閉塞し、その横に開口して頸部を貼りつけている。底部外面はおもに直交する方向のヘラケズリでやや粗く整えている。完形品。

提瓶（75）はロクロで成形したほぼ球形の胴部を一旦閉塞し、その後側方に開口して頸部を付したもので、頸部を欠くものの胴部は完形である。失った頸部から底部にかけては濃緑色の自然釉が流下している。頸部直下の内底にも自然釉の溜まりがある。

ｃ　礫混砂（PL. 8・9）

バラス層直下の遺物取上名は「礫混砂」といい、石敷面の下位約2.1～2.8mの層準にあたる。バラス層の下半は人頭大礫が多く、その直下にある礫混砂とは明瞭に区別できたようである。本土層からは少量の食器類と、多量の土師器甕・須恵器壺類が出土した（Tab. 6）。

Tab. 6　SE800礫混砂出土土器の組成

土師器				須恵器			
器種名	部位	破片数	%	器種名	部位	破片数	%
杯C	口縁部	3	0.29	杯 G	口縁部	2	1.71
杯H	口縁部	4	0.39	杯 J	口縁部	1	0.85
杯 類	底 部	3	0.29	杯 類	口縁部	2	1.71
鉢B		1	0.10	壺 蓋		3	2.56
甕	口縁部	124	12.10	壺	口縁部	15	12.82
	頸 部	15	1.46		頸 部	3	2.56
	胴 部	756	73.76		肩 部	7	5.98
	底 部	65	6.34		胴 部	8	6.84
甕・甑	把 手	49	4.78		底 部	6	5.13
壺	口縁部	1	0.10		脚 台	1	0.85
その他		4	0.39	平 瓶	口縁部	14	11.97
n＝1025					肩 部	2	1.71
					胴 部	1	0.85
					底 部	2	1.71
				甕	口縁部	6	5.13
					胴 部	40	34.19
				その他		4	3.42
				n＝117			

土師器　　杯ＣⅠ（76・77）のうち、76は口径17.0cm、器高5.5cm（径高指数32.4）である。底部は不調整で一部に木葉痕を薄くとどめ、口縁部外面にはヘラミガキを施す。77は深形の杯ＣⅠ。その深い器形や底部外面をヘラケズリで整える点は、飛鳥Ⅰの杯ＣⅠに通じる特徴である。78は杯ＣⅢ。底部外面には大きな黒斑がある。

杯H（80～82）は底部をヘラケズリした粗製杯。81・82は口径10.2～10.5cmで、井戸バラス層で出土したものとはほぼ同じ大きさ

である。色調はにぶい橙色。

鉢Ｂ（79）は口径20.3cmで、半球形の底部と内弯気味にひらく口縁部とからなり、口縁端部は小さく外反する。

甕Ａ（83～95）は球胴形の煮炊具で、把手を付していないもの。胴部片・口縁部片が多量に出土した。83～86は小型で、胴部最大径が12cm前後のもの。83・86はスス・コゲなどの使用痕跡は見られないが、84・85にはスス・コゲが付着している。

87～96は中型の球胴形甕で、胴部最大径が14～17cmのもの。92は胴部外面の上位に１条の沈線がめぐらせた、典型的な「近江型」。93は器形と、灰白色の色調・胎土からは「伊勢・伊賀型」か。94・95は長胴傾向の球胴形甕。94は胴部内面を横方向のハケで整え、口縁端部を上方へと小さく摘み上げるもの。近江から伊勢にかけての産か。本来の色調は灰白色である。95は胴部内面を横方向のハケで整え、その下半に縦方向のヘラケズリを施したもの。96は平底の甕または広口の壺。底部には広葉樹の葉脈痕が明瞭に残り、胴部外面は粗いハケで整える。産地不明だが、あるいは東北地方のものか。これらのうち、87・91は口縁部や胴部に黒斑があるがスス・コゲはなく、使用痕跡は認められない。これに対し、88～90・92～96は口縁部や胴部にスス・コゲが付着し、89・95の胴部外面には被熱による剝離痕が点在する。

木葉底の土師器甕

97は大型の球胴形甕で、胴部上半には横方向に連続する指頭圧痕が環状にめぐる。スス・コゲは認められない。98は下膨れの胴部に直立気味の口縁部を付した長胴形甕で、胴部内面の下半にヘラケズリを施すもの。胴部外面にはススが薄く斑状に付着する。大和産とはみえないが、詳しい産地は不明である。

99～101は甕の底部。いずれも底部内面にコゲがあり、コメの煮炊きで生じた使用痕跡が顕著である。99の内底部には長径約４㎜の炭化穀粒が多数付着し、焦げ付いた飯粒とみられる。100は底部が平底で、内底部にはいちど糊化したとみられる炭化物が厚く付着する。101も内底部に直径約８cm、厚さ１～２㎜で暗褐色を呈する炭化物が層をなして付着しており、胴部内面にも飯粒らしき炭化物粒が残る。

炭化穀粒の付着物

須恵器　杯Ｇ身（102・103）は底部外面をロクロケズリで整える。102は底部から口縁部にかけての破片だが、103は完形品。これらは甘樫丘東麓遺跡SK184や、飛鳥池遺跡灰緑色粘砂層出土の須恵器杯Ｇに類似する。

104はこれまで杯Ｊとして報告してきた小型杯。口縁部を小さく外方へと折り、端部を上方へと摘み上げるのが特徴で、底部外面はヘラ切りのままとする。本例は滋賀県野洲市で出土する「て」字状口縁の須恵器杯と同一で、鏡山窯の産品として知られている[13)]。

近江産の須恵器杯

壺蓋（105）は外端径10.5cm、受部径9.6cmで、自然釉がかかる頂部には「小」字形の線刻がある。色調は灰色。完形品。広口壺（106）は小型品で、壺Ｃと呼んでいるもの。その低い頸部の周囲には蓋を被せて焼いた痕跡が残り、その直径は7.5cmである。底部外面を左回りの粗いロクロケズリで整え、胴部の肩には１条の沈線がめぐる。完形品。

平瓶（107～109）はいずれも胴部が扁球形で、７世紀の特徴を示している。107は底部外面を左回りのロクロケズリで整形し、胴部中位に１条の沈線をめぐらせる。108は胴部に暗緑色の自然釉がかかるが、胴部側面には、焼成時に直径10～11cmの杯と接していた痕跡がある。ほぼ完形。109は頂部に灰緑色の自然釉と灰がかかり、カキ目を広く覆っている。底部外面は左

回りのロクロケズリで整形しており、頂部中央を閉塞後、その横に開口して口縁部を貼り付けている。開口部の直径は約４㎝。頂部から胴部側面にかけて付着する暗褐色の漆は古い割れに沿って帯状に付着し、割れ口にも残ることから、割れた胴部を漆で接いだ補修痕とみえる（Ph.29）。

漆接ぎの補修痕

長頸壺（110）は胴部が算盤玉形で、脚台は打ち欠いており、頸部を欠失するもの。胴部下半を左回りのヘラケズリで整形している。胴部の最大径は18.0㎝で、１条の沈線をめぐらせる。111・112は長頸壺の脚台。このうち、112は対向する２ヵ所に長方形の透孔を配する。

甕（113）はその口縁部で、縦方向に長い波状文をめぐらせる。

ｄ　含砂礫茶褐色有機質土（PL.10・11）

礫混じり砂層直下の遺物取上名は「含砂礫茶褐色有機土」といい、石敷面から下へ2.8～3.1mの層準にあたる。これより上位の埋土が井戸埋立土であるのに対し、この土層はSE800が人為的に埋められるまでの間に自然堆積したもので、井戸廃絶直後の遺物を包含していると考えられる。この層準からは少量の食器類と、多量の土師器甕・須恵器壺類が出土した（Tab.７）。

井戸廃絶時の土器群

土師器　　杯ＣⅡ（114）は口径13.8㎝、器高4.8㎝（径高指数34.8）である。底部をおもに単一方向のヘラケズリで整える。内面には粗い一段放射暗文を施す。

杯Ｇc類（115～117）は粗製小型埦で、胎土や色調に特徴ある一群である。SE800井戸枠内では、この層位のみで出土している。このうち、116は略完形で、内面には板状工具の接触痕が複数残る。色調は灰白色。類例はSD335・435やSD500から出土している。

杯Ｈ（118・119）は底部をヘラケズリで整形した粗製杯。口径11.4～13.0㎝で、上位層の杯Ｈに比しやや大きい。

甕Ａ（120～131）は球胴形の煮炊具で、胴部片・口縁部片が多量に出土した。120～123は小型の球胴形甕で、胴部径が10～15㎝のもの。胴部外面をハケで整え、同内面はユビオサエのままとする。このうち、120・122・123は胴部内外面にスス・コゲが付着し、123の胴部外面には被熱による表面の剝離痕も残る。121はスス・コゲが付着せず、煮炊きに用いた形跡がない。

124～127・129～131は中型の球胴形甕で、胴部径が15～18㎝のもの。124の底部外面はススで黒色を呈し、被熱による剝離痕が点在する。125は全体にスス・コゲが付着している。126は胴部外面に大きな黒斑があるが、スス・コゲはまったく付着していない。127は平底気味で面長の球胴形甕で、口縁部から胴部にかけてスス・コゲが付着し、外面は全体に黒色を呈する。129の胴部外面には吹き

Tab. 7　SE800茶褐色有機質土出土土器の組成

土師器				須恵器			
器種名	部位	破片数	%	器種名	部位	破片数	%
杯Ｃ	口縁部	1	0.11	杯Ｇ蓋	口縁部	1	0.34
杯Ｇ	口縁部	3	0.32	杯　類	口縁部等	3	1.01
杯Ｈ	口縁部	2	0.21	高　杯	口縁部等	2	0.67
杯　類	口縁部	1	0.11		脚　部	1	0.34
	底　部	1	0.11	壺　類	口縁部	37	12.46
鉢	口縁部	1	0.11		頸　部	10	3.37
甕	口縁部	71	7.49		肩　部	11	3.70
	頸　部	23	2.43		胴　部	25	8.42
	胴　部	714	75.32		底　部	4	1.35
	底　部	29	3.06		高　台	3	1.01
	把　手	10	1.05	平　瓶	口縁部	50	16.84
甑	口縁部	1	0.11		頸　部	17	5.72
甕・甑	把　手	28	2.95		肩　部	9	3.03
長頸壺	口縁部	1	0.11		胴　部	11	3.70
その他		62	6.54	横　瓶		4	1.35
n＝948				甕	口縁部	22	7.41
					頸　部	6	2.02
					胴　部	74	24.92
				その他	把　手	7	2.36
				n＝297			

こぼれが流下した痕跡がある。130・131の胴部内外面にはスス・コゲが付着する。131は胴部下半をヘラケズリで整形したやや面長の個体で、伊勢・伊賀の産か。

128は大型広口の球胴形甕で、胴部径は21㎝前後である。胴部外面と内面の下半をハケで整え、口縁端部は小さく上方へと摘み上げる。胴部外面に黒斑があるが、スス・コゲは付着せず、煮炊きに用いた明瞭な痕跡はない。

甑（132）は中位より下を欠くため、把手や蒸気孔の様子はわからない。口縁部は片口となる。上で見た121・126とは胎土や色調がよく似ており、同じ産地のものか。胴部外面には大きな黒斑が残る。

長頸壺（133）は頸部に縦方向の、胴部にはおもに横方向のヘラミガキを施している。完形品。

須恵器　短頸壺（134）は胴部に１条の沈線をめぐらせ、底部は左回りのロクロケズリで整える。長頸壺（135・136）は胴部以下が完形のもの。135は胴部中位に２条の沈線を配し、その間には右上がりの櫛目圧痕を帯状にめぐらせる。台脚の三方に透孔を穿つ。136は台脚の付け根付近に四角い透孔を２つ切開したもの。細頸壺（137）は頸部を欠くが、その付け根に環を付している。胴部中位に２条の沈線を配し、上の沈線に接する列点文を帯状にめぐらせる。

平瓶（138～141）は胴部が扁球形のもの。138は胴部のほぼ全面にカキ目がおよぶ。完形品。139は略完形で、胴部側面には焼成時の溶着で生じた楕円形の剝離痕がある。口縁部と頂部には自然釉が厚くかかる。140は底部に自然釉が付着し、窯詰時に倒立させて焼成したもの。底部のロクロケズリは左回り。141は胴部のほぼ全面と口縁部にカキ目を施したもの。頸部を挟んで一対の粘土円板を貼り付ける。灰のかかり方や自然釉の流下方向から、倒立させた状態で焼成したもの。完形品。

横瓶（142）は胴部成形後に上端を閉塞して俵形となし、その回転体に細かいカキ目を施して整える。その後、回転体の側面に開口して別作りの口縁部を付している。口縁部の周囲には貼付時のナデ痕が残り、この部分のカキ目は消えている。胴部中央には「＊」形の線刻がある。

甕（143・144）は胴部外面に格子状のタタキ目を、内面に同心円状の当て具痕を残す。143の胴部径は約22㎝で、口縁端部には外傾する面がある。144の復元胴部径は約27㎝で、口縁部は内側に少し巻き込む。

e　砂混灰褐色粘質土（PL.12）

含砂礫茶褐色有機質土の直下は「砂混灰褐色粘質土」で、これが調査で到達した井戸埋土の最下層である。その深度は石敷面から下へ3.1～3.5mである。この土層の最下部は、井戸枠内の断面図では灰褐色砂となっていて、これが井戸底であると思われる。井戸がまだ機能していた時期の堆積土と思われるが、出土土器は少ない（Tab.８）。

土師器　杯ＣⅠ（145）は口径16.9㎝、器高7.2㎝。底部外面は４分割でヘラケズリし、口縁部にはヘラミガキを施す。内面には二段放射暗文があり、上段のそれは左上がりである。径高指数は42.6で、杯ＣⅠのなかではもっとも深い部類である。類例は山田道SD3880や山田寺下層整地層で出土しており、飛鳥Ⅰの中でも古相を呈する。146は杯Ｃの小破片である。

杯Ｇ（147）は底部を不調整にとどめた粗製杯で、その底部には黒斑がある。

把手付台付椀（148）は口径12.0㎝、高さ14.8㎝で、脚裾の直径は約10㎝である。杯部内面の暗文は下半が放射状であるのに対し、上半はコイル状の暗文を縦方向に連ねて二段構成とし

把手付台付椀

Tab. 8　SE800灰褐色砂質土出土土器の組成

土師器				須恵器			
器種名	部 位	破片数	%	器種名	部 位	破片数	%
杯C	口縁部	2	0.749	杯G蓋		1	0.57
杯G	口縁部	1	0.375	杯 類	底 部	1	0.57
杯 類	口縁部	5	1.873	壺	口縁部	7	3.98
	底 部	4	1.498		肩部	2	1.14
把手付台付椀		1	0.375		胴部	10	5.68
甕	口縁部	14	5.243		底部	5	2.84
	頸 部	3	1.124		高 台	1	0.57
	胴 部	210	78.65	平 瓶	口縁部	13	7.39
	底 部	2	0.749		頸 部	2	1.14
	把 手	3	1.124		肩 部	2	1.14
短頸壺		1	0.375		底 部	1	0.57
長頸壺		1	0.375	甕	口縁部	9	5.11
壺	口縁部	2	0.749		頸 部	4	2.27
	胴 部	1	0.375		胴 部	117	66.48
その他		17	6.367	その他		1	0.57
n＝267				n＝176			

ている。杯部外面はヘラミガキで飾り、その下半に把手を付している。杯部と脚台とは貼り付けでつなぎ、その接合部に段差が残る。脚台は高杯Cのそれによく似ており、内面には絞り目と円環状にめぐる指頭圧痕とが明瞭に残る。脚台の裾には横方向のヘラミガキを施している。ほぼ完形。本例に類似する台付椀が、石神遺跡第20次調査の橙斑灰褐色土から出土している[14)]。

甕A（149～151）は胴部最大径が12㎝までの小型の球胴形甕である。149は胴部上半の一部に縦方向のハケ目を認めるが、大部分はユビオサエのままである。胴部外面はススによって黒く変色する。150は短い口縁部をもつ広口の小型甕。胴部外面の大部分を縦方向のヘラケズリで整える。胴部外面はススによって黒色化しているが、同内面にはコゲ等は認められない。151は胴部外面に直径約７㎝の黒斑があるが、ス ス・コゲは一切付着せず、使用痕跡は認められない。

長頸壺（152・156）は球形の胴部に長い頸部を付したもの。152は頸部を欠き、胴部のみが完存する。胴部下半は４分割のヘラケズリで整形し、上半には４分割のヘラミガキを施している。156は球形の胴部に頸部を接いだもので、頸部の長さはおよそ13㎝である。胴部から頸部にかけてはおもにナデで整形し、ヘラケズリやヘラミガキ痕は一切認められない。完形品。

短頸壺（153）はやや潰れた球形の胴部に短い頸部をくわえたもの。胴部外面の下半はヘラケズリで整え、その中位から上半にかけてヘラミガキを施している。胴部内面の下半には不定方向のハケ目が残る。胴部外面に黒斑がある。

須恵器　広口壺（154）は壺Cと呼んできたもので、胴部が算盤玉形を呈する。底部外面を右回りのロクロケズリで整えたうえ、その中央部に２条の平行線をヘラ描きしている。肩部に降灰があるが、内面にはかからない。胎土には径５㎜までの粗大な長石粒を含む。

平瓶（155）は胴部が扁球形のもの。胴部最大径は14.5㎝。頂部と頸部とに降灰を認め、底部には左回りのロクロケズリで生じた渦巻きが明瞭に残る。

このほか、須恵器甕の胴部片を素材とする円板が出土している（137頁、Fig.69）。

ⅲ　Ⅰ期建物・塀出土土器（Fig.46）

Ⅰ期の掘立柱建物や掘立柱塀から出土した土器は少量で細片化しているため、図示できるものは一部にかぎられる。以下、出土土器の概要を記しておく。

SA600　第３次調査区の南半で検出したⅠ－１期の掘立柱塀。その造営時期を示す土器はないが、UF29区の黄色基壇土では土師器杯C片（157）が出土している。

SB450　第２次調査で検出した掘立柱建物で、SB400の下層にあり、Ⅰ期の遺構とされる。

出土土器は細片が多いが、北側柱の東から２基目（UT08区）で土師器高杯Ｃが出土している。このほか、須恵器杯Ｈ身やその蓋の小片が出土している。

SB750　第４次調査区の東北部で検出したⅠ－１期の掘立柱建物。柱穴出土土器はすべて小片で、報告できる土器はない。弥生土器・縄文土器（突帯文土器）の混入あり。

SB810　第４次調査区の西北部で検出したⅠ－１期の掘立柱建物。その柱穴はSA670・SB820（Ⅱ－１期）・SA781・SB770（Ⅱ－２期）・SB830（Ⅲ期）の柱穴や土坑SK774と重複し、これらより古い。土師器杯Ｈ（158）はUS31区の柱穴出土。須恵器杯Ｈ身（159）は口縁部の小片で、立ち上がりは短く内傾する。US32区の柱穴出土。

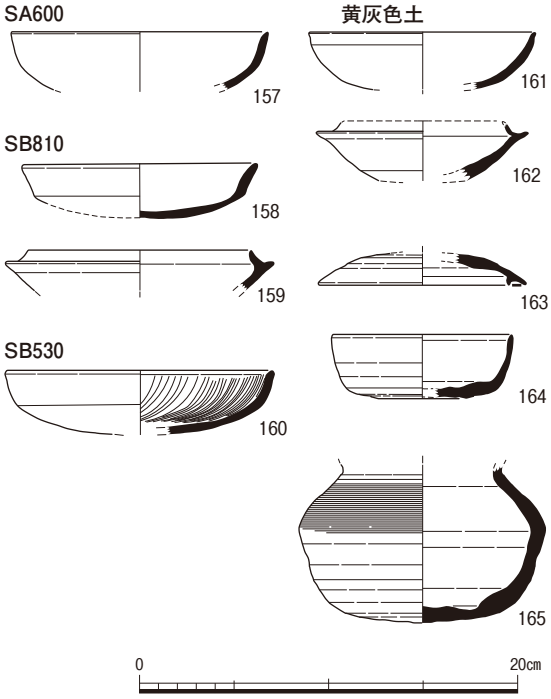


Fig. 46　Ⅰ期建物柱穴・黄灰色土出土土器

SB811　第４次調査で検出したⅠ－２期の掘立柱建物。UU27区の柱穴抜取穴埋土から古墳時代の須恵器杯身が出土している。弥生土器や石器の混入あり。

SB530　第３次調査区の東端近くで検出したⅠ－２期の掘立柱建物。UC20区の柱穴掘方からは土師器皿Ａ片が、UB22区の柱穴掘方でも土師器杯Ｃ（飛鳥Ⅳ）が出土している（160）。

ⅳ　黄灰色土出土土器（Fig.46）

黄灰色土は第１・２次調査に分布する整地土Ａの一部[15)]で、石組溝SD335の側石天端を覆い、これよりも層位的に上位にある。また、その上面が南北溝SD365の掘込面にあたるほか、掘立柱建物SB400を囲む石敷SX327等も、黄灰色土の直上に敷いたものである。つまり黄灰色土は、SD335とSD365等を層位的に区別するうえで重要な土層である。出土土器は僅少で細片化しているが、SD365・SD500出土土器よりは古い。ここでは第２次調査の「黄灰土」から出土した個体のうち、図示できる個体を掲出しておく。

整地土Ａ出土土器

土師器　杯Ｃ、杯Ｇ、杯Ｈ、高杯、甕の胴部片・口縁部片などがあるが、いずれも細片である。杯Ｇ（161）は復元口径12.0cm。胎土には金雲母を含む。

須恵器　杯Ｈ身の小片、杯Ｇ身とその蓋のほか、短頸壺、甕の胴部片・口縁部片がある。杯Ｈ（162）は口径11.0cm前後、受部径は約10cmとみられる。外面に降灰を認め、天地逆で焼成したもの。杯Ｇ身（164）は口縁部をほぼとどめないが、ヘラ切り痕の中央部をその中心に見立てると、復元口径は9.5～10.0cmとなる。杯Ｇ蓋（163）の外端径はおよそ11.0cm、受部径は9.5cm強と思われる。短頸壺（165）は胴部のおよそ３分の１が残る。カキ目を施した肩部には降灰があり、底部外面は右回りのロクロケズリで整形している。162・165はUS08区において、SB450の柱穴直上で出土したものである。

B　Ⅱ期遺構群・整地土B出土土器

i　SD332出土土器（Fig.47）

SD332は、第１次調査区で検出したSD330・331の続きにあたり、第３・４次調査区の東辺付近を北へと延びる石組溝である。旧案ではA期をつうじて存続するとされたが、本書ではⅡ－１期に位置づけた。出土土器は第３次・第４次調査をつうじて僅少で、その多くは細片であるが、第３次調査では土師器杯Cや須恵器杯H蓋など、飛鳥Ⅰないしは同Ⅱに属する土器が出土した（Fig.47上段）。これらは溝中位の砂礫層から出土したものである。いっぽう、「南北石溝」「南北石溝埋土」とのラベルを付して取り上げた一部の土器は、この溝を埋め立てた整地土に包含されていた可能性が高い。

土師器　杯C（166～169）のうち、166・167は口縁部の小片で、復元口径は12.0cm前後。このうち、166は底部をヘラケズリで整えたのち、口縁部にヘラミガキを施すもので、167は底部を不調整にとどめるもの。168は復元口径13.0cmで、杯CⅡに分類されるもの。底部外面をヘラケズリで整えたのち、口縁部にヘラミガキを施している。これらは第３次調査区のUH17区において、溝内の砂礫層から出土したもので、SD332機能時の土器である。169は杯CⅠで、深形のもの。底部外面をヘラケズリで整える。高杯C（170）は口径16.5cmで、杯部内面には一段放射暗文と螺旋暗文を施す。脚部と杯部との接合痕が、わずかな段差として杯部外面に残る。皿AⅠ（171）は底部をヘラケズリで整え、口縁部にヘラミガキを施す。

SD332機能時の土器

須恵器　杯G蓋（172）は外端径9.8cmで、受部径は8.5cm前後。頂部はロクロケズリで整え、ロクロの回転方向は右回り。つまみは小さく乳頭状を呈する。杯A（173）は口径13.2cmで、丸みをおびた底部の中央にはロクロケズリを施している。溝内の砂礫層（UH17区、第３次調査）出土。

ロクロ土師器　杯A（174）は復元口径15.0cmで、その器形は須恵器杯Aに同じ。色調はにぶい赤褐色（Hue 2.5YR 5/4）で、普通の土師器よりも赤黒い。

ii　SD365出土土器（Fig.47）

SD365は第１次・第２次調査で検出したⅡ－１期の南北溝で、SD335の西2.7mの位置にある。第２次調査では、Ⅰ－１期の石組溝SD335の側石を被覆する整地土A（黄灰色土）の上面でSD365を検出している。つまり、SD335よりもSD365のほうが層位的に上位の遺構である。また、次項で述べるSD500との併存が考えられる。出土土器は僅少であるが、土師器杯Cや須恵器杯G蓋など、飛鳥Ⅱに属する土器のほか、炭化物層からは飛鳥Ⅳに属する土器も出土した（Fig.47下段）。

土師器　杯CⅢ（175）は復元口径10.0cm。底部外面は不調整にとどめる。第１次調査区の溝埋土（炭化物層）から、炭化物や鉱滓・鞴羽口とともに出土したもの。杯CⅡ（176）は口縁部片で、復元口径は13.0cm前後。底部外面にユビオサエの痕跡が残る。第２次調査区の溝埋土から出土。杯G（177）は復元口径11.4cmで、外面に粘土接合痕があり、底部内面にはユビオサエの凹凸が残る。第２次調査区の溝埋土から出土。杯H（178）は復元口径11.0cmで、ヘラケズリで整えた底部と口縁部との間に明瞭な段差がある。第２次調査区の溝埋土から出土。皿

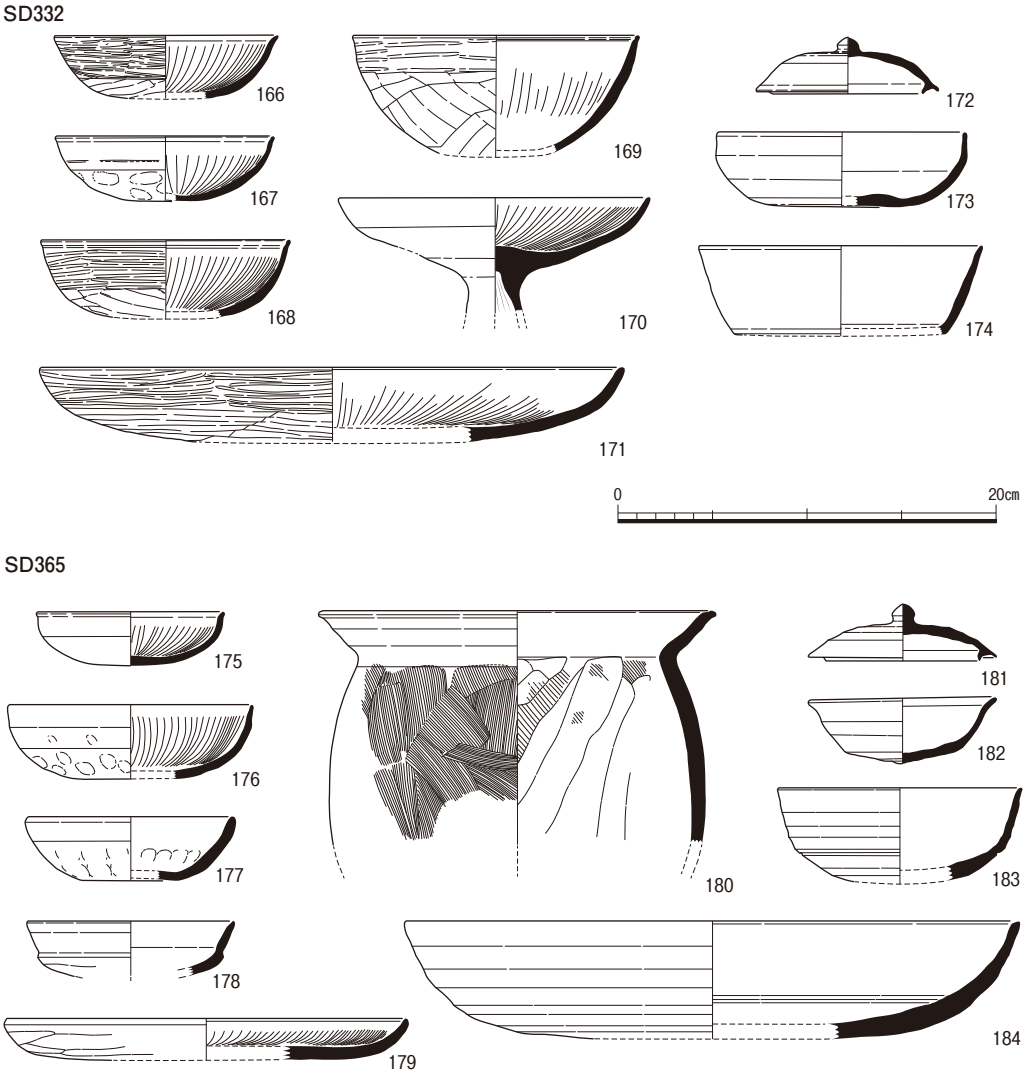


Fig. 47　SD332・SD365出土土器　1：4

A（179）は復元口径22.0cm程度で、底部外面をヘラケズリで整えている。口縁端部は上方へ小さく摘み上げ、内側への巻き込みはない。第１次調査区の出土で、炭化物層から出土したものとみられる。甕A（180）は内弯気味の口縁部が外方へとひらく。胴部内面を縦方向のヘラケズリで整えるものの、一部に縦方向のハケ目が残る。第１次調査区の溝埋土（炭化物層）から出土。

須恵器　　杯G蓋（181）は外端径10.4cmで、受部径は9.0～9.5cmと推定される。頂部はロクロケズリで整え、ロクロの回転方向は右回り。つまみは小さく乳頭状を呈する。第２次調査区の溝埋土上層から出土。杯J（182）は口径10.0cmで、外反しつつ外方へとひらく口縁部が特徴的である。底部中央にはヘラ切り痕が明瞭に残る。炭化物層（第１次調査）の出土とみられる。椀（183）は復元口径13.0cmで、口縁部にはロクロ目がめぐり、ロクロケズリとの境界が明瞭な段差となっている。第２次調査区の溝埋土上層から出土。盤A（184）は復元口径32.0cmで、底部外面は右回りのロクロケズリで整える。第２次調査区の溝埋土上層から出土したものである。

ⅲ　SD500出土土器（PL.13）

SD500は第２次調査で検出したⅡ－１期の東西溝で、石組溝SD435の北側約１ｍの位置にある。埋土からは整理用の木箱で３箱の土器が出土した。出土土器はさほど多くはないが、土師器杯Ｃや須恵器杯Ｈ・杯Ｇの大きさや技術形態的特徴から、飛鳥池遺跡灰緑色粘砂層や甘樫丘東麓遺跡SK184出土の土器群に類似する様相を示す。

土師器　SD500出土の土師器には杯Ｃ、杯Ｇ、杯Ｈ、高杯Ｃ、甕がある。杯ＣⅠ（185～187）は深手で椀形のもの。185の底部は４分割のヘラケズリによるが、口縁部下半が不調整のままで残る。外面のヘラミガキは確認できない。186の底部外面には多方向のヘラケズリ痕が残り、口縁部から底部にかけて粗いヘラミガキを施す。なお、186・187は同一個体の可能性がある。杯ＣⅢ（188・189）はいずれも底部外面を不調整にとどめ、ヘラミガキも施さない。これらは口径10.0cm前後で、189の内面には板状工具の痕跡が残る。杯Ｇ（190～192）は胎土や色調、口縁部の微細形態により、杯Ｇa類（190）・杯Ｇb類（191）と杯Ｇc類（192）に分かれる。このうち、190は口縁端部をわずかに外反させるもので、胎土に砂粒分を多く含む。191は外面に指頭圧痕が明瞭に残る。192は口径10.3cmで、杯Ｇc類の標準的な大きさを示す。外面には粘土紐接合痕が明瞭に残り、黒斑もある。色調は浅黄橙色（Hue 10YR 8/3）である。杯Ｈ（193・194）は底部をヘラケズリで整形する粗製杯。194は口縁部が外反気味の個体である。高杯Ｃ（195～197）は口縁端部のおさめ方や胎土・色調等が杯Ｃに似る。195の杯部内面にはアバタ状の潰痕が残る。脚部内面には指頭圧痕が明瞭に残り、黒斑も認められる。196も杯部内面にアバタ状の潰痕があり、脚部との接合痕が明瞭に残る。197は杯部を欠くが、195・196とほぼ同巧である。高杯Ｇ（198）の杯部内面には195と同様の潰痕が残るため、暗文の有無はわからない。脚部のユビオサエ痕や、脚部と杯部との接合法は195・196と同じである。

甕（199～206）は胴部の細片が多いが、そのヴァラエティは比較的豊富である。199は球形の胴部とほぼ直立する口縁部とからなり、頸部に明瞭なくびれがない。胴部外面に黒斑があり、外面にはススが薄く付着する。200は胴部内面を斜め方向のヘラケズリで、201は横方向の板ナデで成形している。202は赤褐色を呈し、横方向の板ナデで整形したもの。203の復元口径は約27.0cmである。204は口径約11.0cmの小型甕。胴部外面の下半は横方向のヘラケズリで整えたものか。外面にはススが薄く付着している。205の胴部内面には径５～７㎜の礫が無数に露出しているが、外面はハケ目調整により、礫の多くが沈み込んでいて見えない。206はいわゆる「伊勢・伊賀型」の範疇に含まれるもの。胴部外面にはススが薄く付着している。

製塩土器　207は砲弾を倒立させたような器形の製塩土器。器形はやや寸詰まりの長胴甕のようだが、胴部外面にはハケ目等の調整痕が一切残らない。また、器壁がごく厚く、胴部と口縁部との間にくびれはほとんどない。胎土中に径３㎜までの礫を非常に多く含む。胴部外面にはユビオサエの凹凸があり、粘土接合痕が荒々しく残る。その産地は不明である。

須恵器　SD500出土の須恵器には杯Ｈとその蓋、杯Ｇとその蓋、広口鉢、盤Ａなどがあるが、土師器と同様に細片化が進んでおり、図化できる個体は少ない。標本となる個体が少ないものの、飛鳥Ⅰないしは同Ⅱに比定される既知の土器群に対比しても違和感はない。

杯Ｈには杯身（210・211）とその蓋（208・209）とがある。208は口径10.3cmで、頂部外面にヘラ切り痕を残す。209は口径10.6cmで、頂部はロクロケズリ。208・209ともに杯身（210）の

受部径に見合う大きさである。210は底部外面にヘラ切り痕をとどめ、かつ井桁状の線刻がある。立ち上がりは低く内傾し、外端径は11.5㎝で、受部径は10.5㎝である。211は薄く堅緻な焼き上がりの杯身で、復元口径は10.6㎝。その特徴的な器形からは東海産とみられ、甘樫丘東麓遺跡SX037出土品に類例がある[16]。208～210の法量・器形は甘樫丘東麓遺跡SK184出土例や、飛鳥池灰緑色粘砂層出土例などに近似する。杯Ｇには杯身（213）とその蓋（212）とがある。212は自然釉がかかる頂部外面に宝珠形の小さなつまみを付した蓋で、外端径は10.7㎝。受部径は9.3㎝。213は杯Ｇの一種とみられるが、口縁端部が外方へとひらく点が典型的な杯Ｇ身とは異なる。底部にはヘラ切り痕が残り、口縁部から底部にかけての器壁がもっとも厚い。

直口壺（214）は広口で扁平な胴部に直立する口縁部をそなえた小型の壺。ロクロナデで挽きあげた直口口縁の口径は実測値で7.7㎝。胴部下半は左回りのロクロケズリで整える。広口鉢（215）は扁平にして大口径の個体とみられる。また、底部の大部分を欠くため全形もよくわからない。器形がやや類似する須恵器鉢が、石神遺跡第19次調査のSD4260で出土している[17]。

盤Ａ（216）は口径31.0～33.0㎝で、底部外面はロクロケズリで整形している。見込には直径14.5㎝程度の重ね焼痕がある。口縁部と底部外面は暗褐色を呈し、ロクロ目に沿って黒光りする部分もある。底部外面に残る黄土のハケ塗痕から、ロクロの回転は左回り。器体は焼成時の歪みが大きい。黄土を塗布する特徴などから、尾張産か。およそ半分が、SD500に隣接する「土坑」（UW10区）から出土したものである。

ⅳ　整地土Ｂ出土土器（PL.14～17）

石神遺跡では、第５次調査区西半および第10～12次調査区全域において、炭混じりの褐色土（取上名は「含炭褐色土」）が広く堆積することが知られている。これらはⅡ期の遺構群を覆うことから、Ⅲ期の改作にともなう整地土と考えられ、石神遺跡の遺構変遷を考えるうえで重要である。『紀要2018』では「Ｂ期整地土」として、その出土土器の概要を報告した。第３・４次調査区にも、この整地土が分布していることはほぼ確実であったが[18]、そこでは「含炭褐色土」で取り上げた土器がほとんどなかったため、第５次調査以降の「含炭褐色土」に対比できる土層を、層位的に特定する必要があった。

第３次調査区では、整地土Ａにあたるとみられる黄褐色粘質土[19]の上位に、バラス混じり灰褐色土や、灰褐色土（UFライン以北）が堆積している。本書では出土遺物の取上名に因み、これらの土層を「灰褐色土」という。灰褐色土は土器片と炭を多く含むので、「含炭褐色土」とは一連の整地土であったと考えられる。また、灰褐色土の上位層は「褐色土」という[20]。

第３次調査の「灰褐色土」

第４次調査区西半部では、整地土Ａにあたる山土を含む灰褐色土（調査日誌では「黄色土」あるいは「黄褐土」）の上層に含炭褐色土と褐色土が堆積し、この上に包含層とみられる淡褐色土が堆積する[21]。第４次調査の日誌によれば、褐色土の直下で整地土Ａを検出した場合も多く（第Ⅲ章２節参照）、含炭褐色土と褐色土が同じ土層であった可能性が高い[22]。

以上から、第３次調査区の灰褐色土（取上名は「灰褐土」、「灰褐土Ｂ」、「バラス混り灰褐土」、「灰褐土（バラス）」等）と、第４次調査区の褐色土（取上名は「褐色土」、「含炭褐色土」、「含炭褐色土下半」、「褐色土下半」、「焼土混り褐色土」、「炭混灰褐粘質土」、「暗褐土」等）が、整地土Ｂに対比できると考えられる。なお、本書の報告範囲では、SD347・640は整地土Ｂを除去した後

第４次調査の「褐色土」

に検出しており、両者の検出順序に錯誤があったようにも見受けられる。これはおそらく、整地土Ｂの上面ではSD640等の検出が困難であったからであろう。したがって、UGライン・23ライン沿いの整地土Ｂ出土土器は、SD347・640の埋土に包含されていた可能性があるため、以下では扱わない。

第３次調査区の灰褐色土出土土器は保存状態が良好であり、図化のため復元できた資料が多い。このため、以下で抽出した土器のうちその大半を占めている。

土師器（PL.14・15）　整地土Ｂ出土の土師器には、杯Ａ、杯Ｂ、杯Ｂ蓋、杯Ｃ、杯Ｄ、杯Ｇ、杯Ｈ、杯Ｊ、皿Ａ、皿Ｂ、皿Ｂ蓋、皿Ｅ、皿Ｈ、高杯Ａ、高杯Ｃ、高杯Ｇ、鉢Ａ、鉢Ｂ、鉢Ｃ、鉢Ｈ、大型鉢、片口付鉢、盤Ａ、壺Ａ、壺Ｂ、甕、鍋、甑、竈などがあり（Tab.９）、このほかに東北系の黒色土器杯も数点含まれる。図示したもののうち、灰褐色土（第３次調査区）出土土器は217・221・223～232・235・238～242・244～250・252・253・259・260・262～264・266・268・269・271～275・277・278・282・284～286、含炭褐色土（第４次調査区）出土土器は220・243・258・267・276、褐色土（第４次調査区）出土土器は218・219・222・233・234・236・237・251・254～257・261・265・270・279～281・283である。

217～221は杯Ａ。口径16.8～18.4cm、器高4.3～5.6cm、径高指数は23.4～30.2であり、すべて杯ＡⅠに分類できる。217はもっとも口径が小さく、口径16.8cm、器高4.8cmである。内面摩耗のため暗文が確認できず、外面はa0手法で仕上げる。218～221は内面に二段放射暗文を施し、外面はb1手法で調整。このうち219は、底部が丸底状を呈しやや深手である（口径18.4cm、器高5.6cm、径高指数30.2）。221は復元口径18.4cm、器高4.3cm、径高指数23.4ともっとも扁平である。218・220の底部内面には螺旋暗文を施す。217・221の底部外面には木葉圧痕が残る。

222は杯Ｂ。復元口径18.0cm、器高6.2cm。a1手法で仕上げ、内面に二段放射暗文を施す。

223～226は杯Ｂ蓋。223～225の外面には密なヘラミガキを施す。223は復元外端径12.0cmと小型であり、頂部内面に二段の螺旋暗文がある。224・225はそれぞれの復元外端径が15.6cm、16.6cmであり、やや扁平なつまみを有する。226は復元外端径18.8cmであり、外面の大部分が摩耗するものの全面ヘラミガキとみられ、内面には二段の螺旋暗文を施す。

227～256は杯Ｃ。杯ＣⅠ、杯ＣⅡ、杯ＣⅢに概ね分けられるが、口径の変化が漸移的であるため明確な区分が難しい。249～255は杯ＣⅠ（口径14.4～15.4cm）であり、いずれもa0手法で仕上げ、内面の暗文は一段である。249・252・253は左上がりの一段放射暗文。253の底部内面には螺旋暗文がみえる。251の内面には全体的に漆が付着し、元来丹塗りされていたとみられる。238～248は杯ＣⅡ（口径12.5～14.0cm）であり、a0手法による調整が大多数であるが、238・239は底部外面を軽いヘラナデで仕上げる。内面には一段放射暗文があり、239・245・248は底部内面に螺旋暗文がある。244は灯明器で、口縁端部の数ヵ所に油煙が付着する。240は内面全体に漆の付着あり。227～237は最多の杯ＣⅢ（口径10.0～12.5cm）。a0手法により器面を調整し、内面には一段放射暗文を施す。227は底部内面に螺旋暗文があり、229・235・236・237には左上がりの一段放射暗文を施す。234の底部外面には「＋」の針書きあり。他に、ひときわ大きな杯Ｃ（256）（復元口径18.4cm、器高5.0cm、径高指数27.2）がある。口縁端部は外方に屈曲、丸底を呈しやや深手である。b1手法により調整し、内面に二段放射暗文と螺旋暗文を施す。調整と暗文は杯Ａに類似し、杯Ａの変異器種とみなせるかもしれない。

Tab. 9　整地土出土土器の組成

土師器

器種名		整地土Ｂ（３次）		整地土Ｂ（４次）	
		個体数	%	個体数	%
杯・杯蓋	杯Ａ	32	0.68	34	0.49
	杯Ｂ	131	2.80	108	1.57
	杯蓋	120	2.57	173	2.51
	杯Ａ/Ｂ（細分不可）	508	10.86	668	9.70
	杯Ｃ	842	18.00	1485	21.56
	杯Ｄ	10	0.21	8	0.12
	杯Ｇ	100	2.14	72	1.05
	杯Ｈ	170	3.63	227	3.30
	杯Ｊ	36	0.77	76	1.10
	東北系黒色土器杯	0	0.00	4	0.06
	不明杯	8	0.17	17	0.25
皿・皿蓋	皿Ａ	36	0.77	34	0.49
	皿Ｂ	26	0.56	32	0.46
	皿蓋	79	1.69	69	1.00
	皿Ａ/Ｂ（細分不可）	195	4.17	426	6.19
	皿Ｃ	3	0.06	1	0.01
	皿Ｅ	0	0.00	0	0.00
	皿Ｈ	2	0.04	2	0.03
	皿Ｊ	1	0.02	1	0.01
椀	椀Ｃ	0	0.00	2	0.03
鉢	鉢Ａ	23	0.49	1	0.01
	鉢Ｂ	2	0.04	8	0.12
	鉢Ｃ	8	0.17	7	0.10
	鉢Ｈ	152	3.25	129	1.87
	大型鉢	27	0.58	25	0.36
	片口付鉢	2	0.04	3	0.04
高杯	高杯Ａ	19	0.41	30	0.44
	高杯Ｃ	2	0.04	4	0.06
	高杯Ｇ	2	0.04	0	0.00
	高杯脚部	154	3.29	222	3.22
盤Ａ		11	0.24	8	0.12
壺	壺Ａ	79	1.69	67	0.97
	壺Ｂ	25	0.53	24	0.35
	長頸壺	0	0.00	1	0.01
甕	甕Ａ	2	0.04	0	0.00
	甕Ｂ	4	0.09	4	0.06
	甕Ｃ	0	0.00	1	0.01
	甕（細分不可）	1345	28.76	2026	29.42
鍋	鍋Ａ	0	0.00	0	0.00
	鍋Ｂ	0	0.00	0	0.00
	鍋（細分不可）	7	0.15	2	0.03
煮炊具類把手（細分不可）		304	6.50	402	5.84
甑		38	0.81	152	2.21
竈		172	3.68	332	4.82
計		4677	100.00	6887	100.00

土師器総計	整地土Ｂ（３次調査区）		整地土Ｂ（４次調査区）	
供膳具	6953	38.16	11781	34.59
煮炊具	11268	61.84	22279	65.41

須恵器総計	整地土Ｂ（３次調査区）		整地土Ｂ（４次調査区）	
供膳具	2858	34.71	3621	35.82
貯蔵具	5375	65.29	6489	64.18

須恵器

器種名		整地土Ｂ（３次）		整地土Ｂ（４次）	
		個体数	%	個体数	%
杯	杯Ａ	84	2.84	104	3.01
	杯Ｂ	66	2.23	89	2.58
	杯Ｇ	1	0.03	2	0.06
	杯Ｈ	11	0.37	13	0.38
	杯Ｊ	1	0.03	0	0.00
杯蓋	杯Ｇ蓋	2	0.07	10	0.29
	杯Ｈ蓋	11	0.37	7	0.20
	杯蓋（かえり有）	170	5.75	329	9.53
	杯蓋（かえり無）	312	10.55	379	10.97
	杯蓋（細分不可）	73	2.47	58	1.68
杯Ａ/Ｂ（細分不可）		276	9.34	483	13.98
杯／椀口縁部（細分不可）		190	6.43	271	7.85
杯／椀底部（細分不可）		618	20.91	735	21.28
杯／椀高台（細分不可）		238	8.05	229	6.63
皿・皿蓋	皿Ａ	36	1.22	28	0.81
	皿Ｂ	7	0.24	8	0.23
	皿蓋（かえりあり）	6	0.20	11	0.32
	皿蓋（かえりなし）	51	1.73	23	0.67
	皿Ａ/Ｂ（分類不可）	31	1.05	37	1.07
椀	椀Ａ	19	0.64	13	0.38
	椀Ｂ	10	0.34	4	0.12
	椀Ｃ	3	0.10	0	0.00
鉢	鉢Ａ	37	1.25	33	0.96
	鉢Ｅ	11	0.37	17	0.49
	鉢Ｆ	5	0.17	5	0.14
	台付大型鉢	2	0.07	1	0.03
	鉢（細分不可）	11	0.37	12	0.35
盤Ａ		13	0.44	8	0.23
大型蓋		2	0.07	0	0.00
高杯	高杯	5	0.17	35	1.01
	高杯脚部	3	0.10	8	0.23
	高杯Ａ	10	0.34	0	0.00
	高杯Ａ脚部	10	0.34	3	0.09
	長脚高杯	0	0.00	4	0.12
	長脚高杯脚部	4	0.14	15	0.43
	短脚高杯	2	0.07	0	0.00
	短脚高杯脚部	4	0.14	6	0.17
壺	壺Ａ	2	0.07	1	0.03
	壺Ａ蓋	16	0.54	12	0.35
	壺Ｂ	3	0.10	13	0.38
	壺Ｃ	22	0.74	12	0.35
	短頸壺	21	0.71	14	0.41
	長頸壺	26	0.88	20	0.58
	広口壺	32	1.08	12	0.35
	壺蓋	7	0.24	7	0.20
	壺（分類不可）	34	1.15	63	1.82
細頸瓶		22	0.74	13	0.38
平瓶		141	4.77	50	1.45
𤭯		5	0.17	8	0.23
横瓶		15	0.51	11	0.32
提瓶		7	0.24	4	0.12
甕		268	9.07	234	6.77
計		2956	100.00	3454	100.00

＊1　土師器・須恵器ともに杯椀類・甕類の胴部片は除外している。杯椀類の底部片については、須恵器においてのみ計上した。
＊2　上記の他、第３次調査区より20点、第４次調査区より30点のロクロ土師器小片が出土しており、いずれも供膳具に分類できる。

257～261は杯Ｈ。口径は11.0～15.0cmで、とくに12.0～13.0cmが多い。いずれもb0手法だが、260・261は口縁部が強く外反する。258を除き、口縁部と底部の境界に明瞭な稜をもつ。260は内面全体に漆が付着する。

262は無暗文で底部を不調整にとどめる粗製杯。『藤原報告Ⅱ』において、かつて「土師器杯Ｇ」として報告されたグループであるが、杯Ga～Gc類と区別しておく必要から、本書では杯Ｊと呼ぶ。口径12.2cm、器高3.0cm。a0手法により、口縁部が軽く外反する。

263～266は皿Ａ。内弯気味の口縁部をもち、深手のもの（263・264）と浅手のもの（265・266）がある。深手の皿Ａは、263が復元口径20.4cm、器高4.4cm、264が復元口径24.4cm、器高

4.5cm。いずれもa0手法で仕上げるが、263の内面には一段放射暗文を施す。浅手の皿Ａは、265が復元口径22.8cm、器高2.5cm、266が復元口径22.4cm、器高3.0cm。265はa0手法、266の器面調整はb0手法による。266の内面には、一段放射暗文と密な螺旋暗文を施す。

267・268は皿Ｂ。267は口径17.0cm、a1手法により仕上げる。高台が低く、内面に二段放射暗文と螺旋暗文を施す。268は復元口径25.0cmの大型品である。高台が低く、丸底が下方に突き出す。内外面ともに摩耗し、調整は不詳である。

269は皿Ｂ蓋。復元口径32.0cmと大型であり、対応する身は抽出資料の中には見出せない。外面に密なヘラミガキを、内面には螺旋暗文を施す。

270は皿Ｅ。飛鳥時代には希少な器種である。口径15.8cm、器高1.3cmのほぼ完形品。口縁部下外面には、把手の剝離痕が１ヵ所あり。外面全体に密なヘラミガキを施す。

271は皿Ｈ。口径は17.6cmで、全体の歪みが大きい。口縁部が大きく外反し、口縁部と底部の境界に明瞭な稜がみえる。b0手法により調整し、口縁部外面の一部に黒変あり。

272は鉢Ａ。b0手法であるが、横方向のヘラケズリは胴部外面上位にもその一部がおよぶ。二段放射暗文と螺旋暗文を施している。

273は鉢Ｂ。b1手法により仕上げ、内面には暗文がみられない。

274～277は壺Ｂ。274・275・277はほぼ完形品である。274は口径7.7cm、器高6.3cm。口縁部内外面にヨコハケを施し、胴部外面はユビオサエ、内面はヨコナデ・ユビオサエのままとする。口縁部内面にススが薄く付着し、口縁部から肩部にかけて外面の一部には黒斑がある。胴部には粘土紐接合痕が螺旋状にめぐる。275は口径7.7cm、器高6.2cm。胴部内外面にユビオサエを残し、粘土紐接合痕がめぐる。口縁部から底部にかけて内面の一部に漆が付着する。276はやや薄手で、摩耗する胴部外面はおそらくナデ調整、内面はユビオサエのままである。口縁部下内面に粘土紐接合痕あり。277はほぼ完形の大型品で、口径10.8cm、器高8.0cm。胴部外面はユビオサエのままで、螺旋状の粘土紐接合痕がめぐり、内面には板ナデを施す。口縁部から底部にかけて内面に漆が付着している。

278・279は小型の甕。278は復元口径12.0cm。胴部外面を縦方向のハケ、口縁部内面を横方向のハケ調整、胴部内面はナデ調整とみられる。胴部外面の一部に黒変あり。279は口縁部が「く」の字に屈曲し、胴部は下膨れの外形を呈する。胴部外面を縦方向のハケ、底部外面を斜め方向のハケで調整。内面は、頸部に横方向ハケを施し、胴部全体を縦方向にヘラケズリする。口縁部下から底部の外面および口縁部から胴部の内面の一部にススが薄く付着する。

280・281は下半部が欠損する大型の甕であり、復元口径はそれぞれ、24.4cm、26.4cm。280は口縁端部に小さな受部あり。胴部外面を縦方向・斜め方向のハケ、胴部内面を右上がりの細かいハケで仕上げる。胴部外面の一部に黒斑あり。281は甕Ｂ。胴部中位外面に把手基部の痕跡がわずかに残る。口縁部は「く」の字に屈曲し、口縁端部がわずかに肥厚する。胴部外面を縦方向のハケ、内面を横方向の板ナデで仕上げ、口縁部内面は横ハケで整形する。胴部外面の一部に黒斑あり。

282・283は甕Ｃ。下半部が欠損する282（復元口径28.4cm）は口縁部が大きくひらき、口縁端部は内側に肥厚する。底部まで残存する283（復元口径23.6cm）は口縁端部を短く摘み上げる。胴部外面には部分的にススと思しき黒変がみられる。いずれも胴部外面を縦方向のハケ、口縁

部内面を横方向のハケ、胴部内面上半を横方向の板ナデにより調整する。283は底部外面を不定方向のハケで調整し、胴部内面下半から底部内面にかけてはユビオサエとナデで仕上げる。

284は鍋Ａ。復元口径22.4cmとやや小振り。胴部外面上半に縦方向のハケ、下半に横方向のハケを施す。口縁部下半から胴部にかけての内面は、やや不規則な横方向のハケで調整する。

285・286は鍋Ｂ。復元口径は285が28.4cm、286が34.0cm。胴部外面を縦方向または左上がりのハケ、口縁部内面を横方向のハケで整える。胴部内面は、285ではナデ、286では上半を横方向の板ナデ、下半をユビオサエおよびナデ調整。285・286ともに把手は１つしか残らない。

須恵器（PL.16・17）　整地土Ｂ出土須恵器には、杯Ａ、杯Ｂ、杯蓋、杯Ｇ、杯Ｇ蓋、杯Ｈ、杯Ｈ蓋、杯Ｊ、皿Ａ、皿Ｂ、皿蓋、椀Ａ、椀Ｂ、椀Ｃ、高杯、高杯Ａ、長脚高杯、短脚高杯、鉢Ａ、鉢Ｅ、鉢Ｆ、台付大型鉢、盤Ａ、大型蓋、壺Ａ、壺Ａ蓋、壺Ｂ、壺Ｃ、短頸壺、長頸壺、広口壺、壺蓋、平瓶、瑞、横瓶、提瓶、甕類が含まれる（Tab.９）。図示したもののうち、灰褐色土（第３次調査区）出土土器は288・290・291・293～303・307・309～314・316～320・322・325・327・329～331・333・335・337～341・344・345・347・348・350～354・356・358・359・361・363～367、含炭褐色土（第４次調査区）出土土器は287・289・306・308・336・343、褐色土（第４次調査区）出土土器は292・304・305・315・321・323・324・326・328・332・334・342・349・355・357・360・362である。なお、346は、バラス混灰褐色土および灰褐色土（第３次調査区）出土土器片の接合品である。

287～303は杯Ａ。杯ＡⅠ、杯ＡⅡ、杯ＡⅢに分けられる。299～303は、口径15.5～17.5cm、器高3.2～4.6cmの杯ＡⅠ。扁平な形態をもち、径高指数は平均値で22.0（最小値18.8＝301、最大値26.7＝303）。底部外面は、303を除き、ロクロケズリで丁寧に整える。303は、底部外面をヘラ切り後にナデで調整。その内外面には薄い降灰がみられ、一部が釉化する。299・301の底部外面にヘラ記号あり。295～298は、口径12.5～14.5cm、器高2.9～3.9cmの杯ＡⅡ。杯ＡⅠに比べやや高く、径高指数は平均値で24.7（最小値22.3＝295、最大値28.3＝297）。底部外面の調整は、295・296ではヘラ切り不調整、297・298はロクロケズリ。298は尾張産とみられ、口縁部と底部の境界に稜があり、色調が赤みを帯びる。287～294は、口径9.0～12.0cm、器高3.5～4.4cmの杯ＡⅢ。典型的な逆台形のもの（288・290・292）のほか、全体的に丸みを帯びるもの（291・293）もみられる。底部外面をヘラ切りのまま（287・289・291・293・294）や、ヘラ切り後ナデで整えるもの（288・290）がほとんどであるが、292はロクロケズリで丁寧に仕上げる。その底部外面にヘラ記号がある。291の内面には、部分的に漆が付着している。

304～312は杯Ｂ。抽出点数は、杯Ａに比べて圧倒的に少ない。口径17.0～19.2cmの杯ＢⅠ（309～312）と12.5～15.0cmの杯ＢⅡ（304～308）からなる。杯ＢⅠは、底部外面をロクロケズリで整える。309は、底部外面の高台内側に沿って爪痕を連続的に残す。310はやや薄手で、その形態から尾張産の可能性がある。杯ＢⅡの多くは底部外面をヘラ切りしナデで整えるが、308は右回転の粗い板ナデを施す。306は高台が他の資料に比べて高い特徴がある。

313～340は杯蓋。かえりをもつもの（313～326）と、これをもたないもの（327～340）に分類でき、両者はほぼ同数である。受部径にしたがい、大型（口径15.0～19.5cm、325・326・335～340）・中型（口径12.5～14.5cm、321～324・329～334）・小型（口径90.0～12.0cm、313～320・327・328）に分類でき、杯Ａ・杯Ｂの区分にほぼ対応する。かえりをもつ杯蓋では小型品が、

かえりをもたない杯蓋では大型品が多い傾向があり、中型品はいずれもほぼ同数がある。かえりをもたない杯蓋には、外端部までロクロケズリを施すものがある（331・332・336・339）。331・332は頂部に段を有し、つまみが丸みを帯びることから、尾張産と考えられる。339は陣笠形の特徴的な形態と質感から、尾張産と判断できる。334の頂部内面にヘラ記号あり。340の外面には、小型の杯と思しき重焼痕が２ヵ所に認められる。

341～343は杯Ｇ。口径10.8～11.2cm。口縁部がやや外反するもの（341・343）と直立するもの（342）がある。底部外面は、341・343がヘラ切り後ナデ、342がロクロケズリである。

整地土Ｂ出土の杯Ｈ身・蓋は少ない。344は杯Ｈ蓋（口径12.6cm、器高3.6cm）。頂部外面全体をロクロケズリする。口径分布によれば、飛鳥Ⅰのものであろう[23)]。

345・346は皿Ａ。345は口径27.2cm、器高3.9cm。外面は側面と底部縁辺をロクロケズリし、底面にはユビオサエ後に不定方向の粗いナデを施す。346は口径30.0cm、器高3.5cm。底部外面はやや粗いロクロケズリで仕上げる。口縁端部に浅い溝がめぐる。

347は皿蓋。外端径34.8cm、器高6.0cm。抽出資料中にこれに対応する皿はない。頂部外面の広い範囲を軽めのロクロケズリで仕上げる。

348～353は椀Ａ。数は少ないが、椀ＡⅠ・椀ＡⅡ・椀ＡⅢに概ね分類できる。いずれも底部外面をロクロケズリで調整する。352・353は椀ＡⅠであり、口径はそれぞれ17.6cm・19.6cm。全体的につくりが丁寧であり、口縁部外面の下半をロクロケズリで仕上げる。349～351は椀ＡⅡ。口径は13.4～14.2cmに収まるが、器高は4.8～8.3cmと幅広い。口縁部外面の下半から底部外面をロクロケズリで仕上げる。350のロクロケズリは左回転であり、底部外面中央には「又」のヘラ記号あり。348は口径11.2cm、器高5.0cm、径高指数44.2の椀ＡⅢ。これらのうち、351～353は尾張産の可能性がある。

354は鉢Ａ。口径17.9cm、器高13.0cm。胴部外面下半から平底の底面にかけてロクロケズリを施す。全体的につくりが丁寧であり、淡橙色（Hue 10YR 7/4）の色調を帯びることから、尾張産の可能性も考えられる。

355は鉢Ｅ。口径26.8cm、器高20.1cmであり、外形がほぼ逆台形を呈する。内外面に指頭圧痕を連続的に残し、外面を平行タタキ後にロクロナデ、内面をロクロナデにより仕上げる。底部はロクロケズリで平坦に仕上げる。

356は壺Ｂ。復元口径11.6cm、復元器高19.9cm。肩部の屈曲直下に櫛描波状文を施し、平行沈線で上下を区画する。櫛描波状文の下の胴部外面には、２条１組の平行沈線２組を一定間隔で配する。胴部外面下位から底部外面をロクロケズリで仕上げる。底部は、わずかに凸面を呈する平底。色調が淡橙色（Hue 5YR 8/3）を帯びることにも鑑み、尾張産と考えられる。

357は壺Ｃ。復元口径4.2cm、器高4.5cm。胴部内外面ともにロクロナデで仕上げ、底部外面をヘラケズリにより調整する。

358・359は肩の張る広口の壺。断面長方形に近い外形を呈する。358は復元口径10.6cm、器高13.3cm。外面全体に広く降灰がみられ、一部で釉化。底部外面をロクロケズリで調整する。359は復元口径12.0cm、器高12.9cm。胴部外面下半から底部外面にかけてロクロケズリで仕上げ、底部外面中央はユビオサエのままとする。外面全体にわずかな降灰がみられ、肩部には重焼痕がうっすらと残る。

360・361は壺Ａ蓋。360は受部径9.7㎝、361は受部径15.3㎝。いずれも外面全体に降灰と頂部外面で一部自然釉の降着がみられ、頂部をロクロケズリで仕上げるようである。

362は平瓶。全体的に丁寧につくられ、扁平な外形をもち、口径が広い特徴がある。胴部は内外面ともにロクロナデで仕上げるが、上面は不定方向のヘラナデで調整する。外面全体が黒変するが、下地の色調は淡橙色である。上記の特徴から、尾張産と考えられる。

363は横瓶。砲弾形胴部全体の約半分（成形時の上半部）が残存する。内面に粘土板による閉塞痕あり。胴部外面全体を平行タタキで成形する。胴部内面全体に同心円状の当て具痕を残し、内外面ともに一部をロクロナデで磨り消す。口縁部外端径は14.0㎝。口縁部内面から胴部外面全体にかけて降灰・釉化がみられ、胴部内面と頸部外面には自然釉が降着する。

364～367は甕。364は口縁部が外反し、口縁端部が外方に折れ曲がる。復元口径14.4㎝。全体をロクロナデで仕上げるが、胴部外面の平行タタキ目をロクロナデにより磨り消す。365・366は口縁部が外反し、口縁端部が内側にわずかに肥厚する。365は口径18.4㎝。胴部外面を格子叩きし、カキ目で仕上げる。頸部外面にヘラ記号あり。366は復元口径22.0㎝。胴部外面を平行叩きし、カキ目で仕上げる。367は甕Ｃ。復元口径55.0㎝と大型で、口縁部が直立し口縁端部が内傾する平坦面をなす。胴部外面を平行タタキで成形し、胴部内面には当て具痕が残るが、いずれもロクロナデにより磨り消す。尾張産の可能性あり。

ｖ　SE800石敷埋土出土土器（Fig.48）

井戸SE800には、井戸枠の周囲に人頭大の玉石からなる石敷が付属している。その東西幅は5.3mで、北辺をのぞく三方では側石の下半を確認しており、方形の石組であったことが知られる。SE800石敷埋土は、この石組区画を、側石１～２段分の深さ（20～40㎝）で埋めていた整地土を指すが、実際にはⅠ期遺構群を広範におおう整地土Ｂの一部とみられる。本書ではこの事実に留意しつつも、SE800を跡形なく整地した時期を示すものとして、石敷埋土出土土器をとりあげた。これらの土器群は、出土時に「土坑炭混じり暗灰粘質土」との取上名を付しており、埋め立てた石組区画の中央にできたくぼみを「土坑」と認識したようである。第４次調査では、整地土の単位を「土坑」、「大土坑」と称して掘り下げることが多かったようで、本例もこれに同じ。出土土器は19箱で、飛鳥Ⅳに属している。

土師器　368～370は杯Ａ。このうち、368は口径11.0㎝の完形品で、これまで杯ＡⅢとして分類記載されてきたもの。内面は右回りナデ上げののち二段放射暗文を施し、口縁部外面にはヘラミガキを施すが、底部外面は不調整である。369は底部外面を軽くヘラケズリするが、中央部に木葉痕が残存する。また、370の底部は不調整のままで、その中央で２つの木葉痕が交叉している。また、その口縁部内面にはアバタ状の潰痕が無数に残る。371は杯Ｂ。杯Ａよりもひと回り大きく、深い。外方へと踏ん張る高台の直径は12.2㎝である。内面に二段放射暗文と螺旋暗文を、口縁部外面にヘラミガキを施す。372～374は杯Ｃ。このうち、372は口径11.0㎝の完形品で、368（杯ＡⅢ）とは同じ大きさのもの。375は皿Ａ。口径22.9㎝で、内面に一段放射暗文を施し、底部外面は不調整にとどめる。376は皿Ｂ。高台径は14.0㎝で、口径のおよそ半分にすぎない。底部外面をヘラケズリし、口縁部にかけて粗いヘラミガキを施すが、内面に暗文はない。377は鉢Ｈ。底部から口縁部にかけての広い範囲を粗い手持ちヘラケズリで整

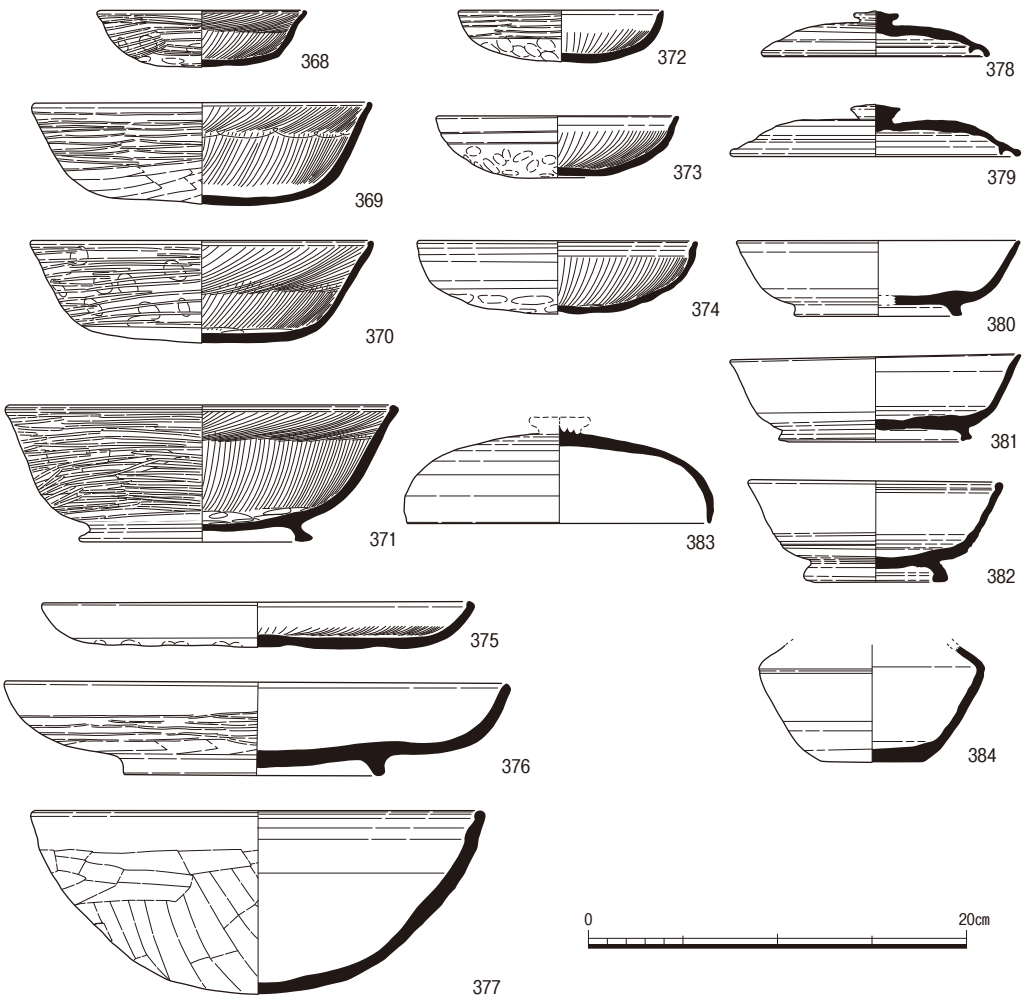


Fig. 48　SE800石敷埋土出土土器　1：4

えたもの。

須恵器　　378・379はかえり付の杯蓋。前者は外端径が12.1cmの完形品で、受部径は10.8cm。頂部はロクロケズリで整えており、ロクロの回転方向は右回り。380～382は杯Ｂ。380は口径15.1cmで、高台径は9.0cmと、口径よりもかなり小さい。焼成がやや甘く軟質に焼きあがる。381は口径15.4cmで、高台の内側にはヘラ切り痕が残る。382は口径13.4cmとやや小ぶりで、高台径は7.7cm。高台を含む径高指数は42.5である。また、口縁部と底部との境界付近には１条の沈線がめぐる。その器形は杯Ｂのなかでもあきらかな古相を呈し、大官大寺下層SK121出土例などによく似る。

383は蓋。およそ半身が残るが、つまみを欠失する。丸いドーム状の頂部はロクロケズリで整え、ロクロの回転方向は左回り。384は小型壺の胴部。胴部径は12.0cm前後とみられるが、肩より上を欠失している。肩の直下には１条の沈線がめぐる。

vi　Ⅱ期建物・塀出土土器（Fig.49）

石神遺跡第１次調査区から第４次調査区にかけての範囲で検出した遺構群のうち、Ⅱ期に属している掘立柱建物は８棟、掘立柱塀は５条であるが、柱穴出土土器は少量で、すべて細片化

しているため、報告できる土器はない。以下、建物・塀ごとに出土土器の概要のみ述べる。

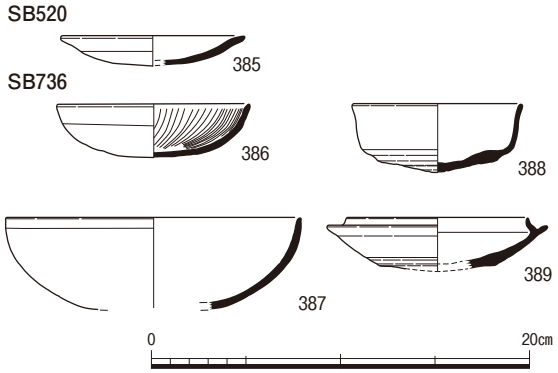


Fig. 49　Ⅱ期建物柱穴出土土器　1：4

SA560　SA600の南側で検出した東西掘立柱塀で、『藤原概報14』では「７世紀後半代の遺構」とされる。本書ではⅡ－１期の区画施設とした。その柱掘方はSA600の基壇土上面から掘り込んでおり、一部でSA600の柱掘方と重複している。出土土器は細片のみである。

SB400　第２次調査時に認識した南北掘立柱建物。これまでＢ期（天武朝）の建物としてきたが、本書ではⅡ－１期に当てた。第１次調査の南区ではこの建物柱穴を検出していない。土器は建物東北隅・西北隅の柱穴から出土した土師器の細片のみである。

SA775　４次調査区の中央西半で検出したⅡ－１期の掘立柱塀で、SA670のすぐ西側に位置する。UP29区の柱穴で須恵器杯Ｈ身の小片が出土している。

SB620　第３次調査区の東端近くで検出したⅡ－１期の掘立柱建物。既往の遺構変遷ではＡ－２期にしている（『紀要2009』の図90）。柱穴出土土器は細片ばかりで、報告できる土器はない。

SB820　第４次調査区の西端で検出したⅡ－１期の南北棟掘立柱建物。第４次調査で確認した東側柱の柱穴のうち、北から３基目（US33区）から土師器杯Ａが出土した。

SA670　第４次調査区の中央西半で検出したⅡ－２期の掘立柱塀で、その柱痕跡は黄褐色土で埋めている。UN29区の柱穴で須恵器皿蓋片が、UM29区の柱穴では土師器杯Ａ片が出土しており、Ⅱ－１期の塀柱穴にしては土器がやや新しい。弥生土器の混入が目立つ。

SB520　第３次調査区で検出した東西掘立柱建物で、旧案の遺構変遷ではＢ期となっている（『紀要2009』の図90）が、本書ではⅡ－２期の建物とした。UD26区の大柱穴では平安時代に降る土師器皿（385）と土釜片が出土している。NR310に浸食されていることから、これらは平安時代の土器の混入であろう。

SB580　第３次調査区で検出した東西棟掘立柱建物。東西塀SA560より新しいことから、本書ではⅡ－２期に降らせた。UG25区の柱穴では土師器甕口縁部と、尾張産須恵器の杯蓋片（かえりなし）など、飛鳥Ⅳ以降に降るものが出土している。SA560をⅡ期の遺構とすると、これより新しいSB580はⅢ期以降の建物となる。

SB736　第４次調査区の西北部で検出したⅡ－２期の総柱掘立柱建物。出土土器の大部分は小破片である。US21区の柱穴では土師器杯ＣⅠ・杯ＣⅢが１個体ずつ、US19区の柱穴から須恵器杯Ｈ身が１個体出土している。このうち、土師器杯ＣⅢ（386）は口径10.1㎝で、底部外面を不調整にとどめるもの。杯ＣⅠ（387）は器表面の剝落が進み、調整はわからない。須恵器杯Ｈ身（389）は外端径11.7㎝で、同杯Ｇ身（388）は口径9.5㎝である。これらの土器はその法量からみて、飛鳥Ⅱに属すると考えられる。

SB770　第４次調査区で検出したⅡ－２期の掘立柱建物で、抜取穴は山土を含む黄色粘土で埋める。出土土器の大部分は小破片で、報告できるものはない。

C　Ⅲ期遺構群出土土器

i　SD347・640出土土器（PL.18～24）

調査地の東方から延びる東西大溝SD347は、第３次調査区の東南部で曲折し、南北大溝SD640となって北方へと延び、さらに曲折しつつSD1347として、石神遺跡の北方へと続いている。第１次調査ではSD347をほとんど検出できていないが、その東側隣接地で実施した飛鳥藤原第209次調査では、この東西大溝を約50ｍにわたり検出している（『発掘調査報告2023』）。第７次調査までの出土分も含めると、SD347・640出土土器は膨大であるが、本書では第３次・第４次調査の出土土器を報告する（Tab.10）。

なお『紀要2016』・『紀要2017』および『紀要2018』では逐次、SD640出土土器（第３次から第７次調査まで）の概要を報告してきたが、そこに実測図を掲載した土器でも、本書には採録しなかったものがいくつかある。これはおもに紙幅の制約によるものだが、本書では代わりに他の未報告例を図示することで、土器様相の全体を表示することを念頭においた。また器種名は、『紀要』での報告時から変更したものがある。

土師器（PL.18～20）　杯Ａ（390～401）はその口径から杯ＡⅢ、杯ＡⅡ、杯ＡⅠに分かれる。杯ＡⅢ（390）は復元口径11.0㎝で、内面に二段放射暗文を施すが、外面は不調整にとどめ、

Tab. 10　SD347・640出土土器の組成

土師器		破片数	%
杯・杯蓋	杯A	197	1.09
	杯B	7	0.04
	杯蓋	134	0.74
	杯A/B（細分不可）	630	3.48
	杯C	783	4.32
	杯D	49	0.27
	杯E	2	0.01
	杯G	227	1.25
	杯H	191	1.05
	杯J	61	0.34
皿・皿蓋	皿A	467	2.58
	皿B	63	0.35
	皿蓋	39	0.22
	皿A/B（細分不可）	499	2.76
	皿H	16	0.09
鉢	鉢A	174	0.96
	鉢B	2	0.01
	鉢H	273	1.51
	大型鉢	1	0.01
高杯	高杯A	5	0.03
	高杯C	13	0.07
	高杯H	1	0.01
	高杯脚部	43	0.24
盤A		149	0.82
壺	壺A	86	0.47
	壺B	28	0.15
	長頸壺	0	0.00
甕		13733	75.84
鍋		6	0.03
甑		122	0.67
竈		74	0.41
東北系黒色土器		9	0.05
製塩土器		24	0.13
計		**18108**	100.00

土師器総計		
供膳具	4026	22.42
煮炊具	13935	77.58

須恵器総計		
供膳具	4080	55.54
貯蔵具	3266	44.46

須恵器		破片数	%
杯	杯A	118	1.61
	杯B	299	4.07
	杯G	13	0.18
	杯H	2	0.03
	杯J	5	0.07
杯蓋	杯G蓋	2	0.03
	杯H蓋	10	0.14
	杯蓋（かえりあり）	108	1.47
	杯蓋（かえりなし）	463	6.30
	杯蓋（細分不可）	343	4.67
杯A/B（細分不可）		178	2.42
杯／椀口縁部（細分不可）		654	8.90
杯／椀底部（細分不可）		558	7.60
皿・皿蓋	皿A	467	6.36
	皿B	63	0.86
	皿蓋	90	1.23
	皿A/B（分類不可）	499	6.79
椀	椀A	38	0.52
	椀B	42	0.57
	椀C	10	0.14
鉢	鉢A	60	0.82
	鉢E	14	0.19
	鉢F	11	0.15
	台付大型鉢	1	0.01
	鉢（細分不可）	1	0.01
盤A		25	0.34
高杯		6	0.08
壺	壺A	1	0.01
	壺A蓋	14	0.19
	壺B	4	0.05
	壺C	24	0.33
	短頸壺	7	0.10
	長頸壺	18	0.25
	広口壺	2	0.03
	壺（分類不可）	242	3.29
細頸瓶		15	0.20
平瓶		204	2.78
横瓶		24	0.33
甕		2711	36.90
計		**7346**	100.00

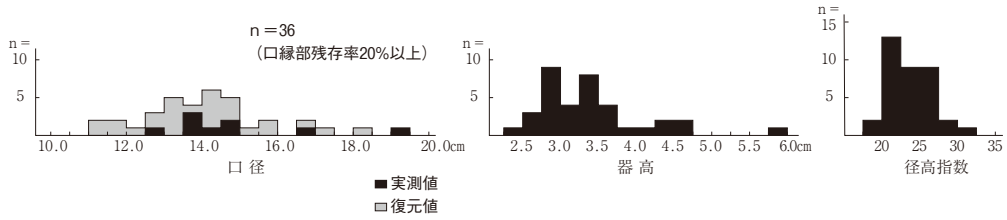


Fig. 50　土師器杯Ｃの口径・器高度数分布（SD640等出土）

ヘラミガキも施さない。杯ＡⅡ（391）は左上がりの粗い一段放射暗文を施す例で、復元口径は14.4cm。底部をヘラケズリで整えるが、ヘラミガキは施していない。なお本例は、『紀要2018』では「杯Ｃ」として報告しているが、本書では杯Ａの変異とした。飛鳥池遺跡水溜遺構出土の「杯Ac類」（『飛鳥池報告Ⅱ』Fig.1-18）に類似しているためである。杯ＡⅠ（392～401）は口径16.5～20.5cm、器高4.5～6.5cmで、径高指数は27.5～33.0（標本平均30.0、n=12）である。内面に二段放射暗文を施し、色調は橙色を呈する。このうち、392～394・397～399はa1手法で、底部外面を不調整にとどめる。392・394の底部外面には木葉痕が残る。395・396はb1手法で、底部外面をヘラケズリするもの。400はb0手法で、口径20.7cm、器高6.6cmと大きい。内面には黒斑があり、アバタ状の潰痕が点在する。401は口縁部がほぼ直立した特殊な器形で、口径20.4cm、器高5.5cm。b3手法とみられ、二段構成の放射暗文の下端には横位の螺旋暗文を重ねている。外面はヘラケズリののちヘラミガキを施す。

杯Ｃ（402・406～422）は従来、その口径から杯ＣⅠ、杯ＣⅡ、杯ＣⅢに分かれているとされたが、SD347･640出土土器では口径12.5cmから16.0cmまでの一群が非離散的にみえる（Fig.50）ため、杯ＣⅠと杯ＣⅡとの区別ができなかった。これら以外に、口径12.5cm未満の一群と、口径17.0～20.0cmの一群とがある。406は口径11.2cmで、杯ＣⅢに相当する。407～418は口径12.8～15.0cmで、いずれも底部を不調整にとどめ、ヘラミガキを施さないもの（a0手法）。419～422は口径15.5～17.0cmで、従来の杯ＣⅠに相当する大きさだが、このうち420・421は丸底で椀形を呈する。このほか、402は口径19.2cmと大きく、底部を４分割のヘラケズリで整えたうえで、口縁部に粗いヘラミガキを施すもので、あるいは浅手の鉢に分類できるか。

杯Ｄ（403・404および423・424）は平底から内弯する口縁部が立ち上がる杯[24]。403は口径21.0cm前後、器高6.5cmで、口縁部は内弯し、その端部が内側へと肥厚している。404の口縁部は内弯し、その端部が内側へと肥厚している。本例は『紀要2018』では「鉢Ａ」としたが、既刊の学報等を参考にし、本書では杯Ｄに改めた。423の底部には直径約12cmの大きな黒斑がある。424は底部外面を６分割のヘラケズリで整えたもの。

杯Ｂ蓋（405）はその頂部外面にヘラミガキを施す。なお図示しないが、第４次調査では杯Ｂ身の底部片が４点出土している。

425～437は無暗文で底部を不調整にとどめる粗製杯で、胎土・色調や口縁部形態などから、複数群を識別できる。このうち、425～433は『藤原報告Ⅱ』において、かつて「土師器杯Ｇ」として識別・報告されたグループであるが、本書では杯Ｊと呼ぶ。にぶい褐色を呈し、金雲母を含む胎土やその器形が特徴的である[25]。これらには口径11.5～13.5cmで、短い口縁部を外反させた浅手の個体（429～433）のほかに、口径11.5～12.5cmで、口縁部の外反が弱くやや深手の個体（427・428）もある。430の口縁部内面にはススが付着し、432の底部外面には黒斑がある。

土師器杯Ｊ

これに対し、434は赤褐色を呈し、端部を小さく外反させた口縁部の形態から、杯Ga類と呼ばれてきたもの[26]。底部は不調整だが指頭圧痕は目立たない。胎土には金雲母を含んでいる。435は杯Gc類と呼ばれた一群に似る[27]。436の内面にはハケによる乱ナデ痕が残る。

杯Ｈ（437～441）は外反気味の口縁部と、手持ちヘラケズリで整形した底部とからなり、両者の境界に明瞭な稜をなす無暗文の粗製杯である。

鉢Ｈ（442・443）は杯Ｈと同じ胎土・色調で、口径が17.0～21.0cmである。いずれも底部を欠くが、器高は6.0cm以上である。直立する口縁部と底部との間ににぶい稜線がめぐる。底部外面は不定方向のヘラケズリで整えている。

皿Ａ（444～447）は広く平坦な底部から、内弯気味の口縁部が短く立ち上がるもの。その端部は内側に丸く肥厚する。444～446は底部を不調整にとどめるもので、復元口径は約21cm。448・449は皿Ｂ。448は口縁部をほとんど欠くが、高台径は19.8cmで、口径は25.0cm前後。口縁部の立ち上がりがやや長く、暗文は二段となる。449の高台径は20.0cmで、口径は29.0cm前後となる。暗文は確認できない。高台の内側に「＊」形の浅い線刻がある。

高杯Ａ（450）は杯部の内面中央に螺旋暗文と放射暗文とが残り、外面にはヘラミガキを施している。縦方向のヘラケズリで整形した脚部の断面形は11角形である。

451～459は甕Ａのうち、口径が18.0cm未満のもの。451の胴部外面にはススが、内面にコゲが付着する。452の胴部外面は被熱とススとで荒れている。453は口縁端部の特徴や胎土・色調から、かつて「伊賀・伊勢型甕」[28]と呼ばれた一群である。454の胴部外面には縦方向のハケ目上に「＊」字形の針書きがある。455は内面を縦方向のヘラケズリで整えたもので、河内産の可能性が高い。外面に薄くススが付着する。456の胴部外面には黒斑があるが、ス ス・コゲは付着していない。457は口径18.0cmで、口縁端部が水平に短く伸びるもの。ス ス・コゲは付着していない。458の胴部外面には被熱による変色がある。459の容量（頸部以下）は2,230mℓである。胴部外面にはススが薄く付着するが、底部は円形の「ススなし部」[29]となる。内面の頸部直下には喫水線状の淡い黒染みがある。

460・461は広口の甕Ａ。前者は胴部内面の上半を板ナデで整え、その下半にオサエ痕の凹凸を残すもの。後者は内面の調整は板ナデ。外面にはススが、内面には薄いコゲが付着する。

462～469は甕Ａのうち、口径が20.0～25.0cmのもの。462・463は口縁部が「く」の字形に屈曲する撫肩の器形で、462の胴部外面には黒斑がある。464の胴部外面にはススが、内面にはコゲが付着する。465は胴部外面にハケ調整を施さず、オサエ痕の凹凸をとどめるもの。胎土・色調が杯Ｊ（425～433）に似る。467は胴部内面の上半を横方向のハケで整えるもので、伊勢・伊賀産の可能性がある。468・469の外面にはススが薄く付着する。

470・471は広口の甕Ａ。470は胴部外面の下半は不定方向のハケ、内面の上半はヨコナデで、その下半にはオサエによる凹凸が残る。いずれもス ス・コゲは見られない。472は胴部中位より下を欠くが、その大きさからは甕Ｂの上半部にあたる可能性が高い。473・474は甕Ｂで、胴部中位に一対の把手を貼り付けたもの。両者ともに外面に黒斑があるが、ス ス・コゲは見られない。475に把手は残らないが、やや胴長の甕Ｂであった可能性がある。

476～479は甕Ｃ。476・477の胴部外面にはススが、478の胴部内面には薄くコゲが付着する。479はほぼ完形に復元できた事例で、頸部以下の推定容量は7,120mℓである。胴部内面の上半は

板ナデ、下半はオサエのち不定方向ナデ。胴部外面にススが薄く付着する。

ミニチュア土器　480・481は『藤原報告Ⅱ』等で「壺Ｂ」として報告されたもの。480は外面をユビオサエのままとし、内面はナデで仕上げる。481は外面に縦方向のハケ目を残す。482は小型の高杯。中実の脚部は鼓状を呈し、これに杯部を貼り付けた接合痕跡が残る。

須恵器（PL.21～24）　計測値に基づいて杯身と杯蓋との対応関係を整理すると、SD640出土の須恵器食器は多くが有蓋であったと考えられる。そこでPL.21では、口径の大きさから概ね対応関係にある杯身と杯蓋とを上下に並べつつ、左から右へと４列に配列した。また従来、奈文研の刊行物では慣例として、杯類の蓋を「杯Ｂ蓋」と呼ぶことが多かったが、実際には杯Ｂの蓋ではないものも数多く含まれている。そこで本書では、須恵器の杯蓋と杯・椀類との対応関係を、個別記載の中で述べることにしたい。

杯Ａ（484～491）は口径10.5～13.5㎝、器高3.5～4.5㎝で、『藤原報告Ⅱ』では「杯ＡⅣ」とされた一群を指す。器形が逆台形であることから、杯Ｇには分類できない個体が多い。また、489～491のように丸底気味の個体も含んでいる。これらには491のように、底部外面をヘラ切りのままにとどめるものが多いが、489・490は左回りのロクロケズリで整えている。491の内面にはタール状の物質が円環状に付着している（アミ部）。

小口径食器の蓋はきわめて少ない。483はかえり付の蓋で、杯Ｇの蓋と考えられるが、本例に見合う大きさの杯Ｇ身は出土していない。また、484～491に対応する蓋も欠いていることから、SD640出土の須恵器杯Ａは大部分がすでに無蓋化していたと考えられる。

椀Ａ（501～511）は口径11.0～14.5㎝、器高5.0～10.0㎝で、逆台形のシルエットが特徴的な深形食器の一群である。これには尾張産が多く、底部外面を丁寧なロクロケズリで整形しているため、口縁部との屈曲点が明瞭である個体が多い。これらのうち、尾張産と推定された個体は501・503・505・509・510である。492～500は受部径13.0～14.0㎝台の杯蓋で、かえりをもたないもの。494・496～500は推定尾張産である。ことに496～498は扁平な頂部と短く折り曲げた端部、それに丸い宝珠形のつまみが特徴的である。口径14.0㎝台の杯Ｂ身に推定尾張産が含まれないことを考慮すると、492～500はおもに椀Ａの蓋からなると推定できる。

尾張産の須恵器

高杯（512）は口径11.0㎝で、内弯気味の口縁部は端部が小さく内傾している。脚裾部を欠くものの、残存高は6.2㎝である。

杯Ｂ（523～531）は口径14.0～16.0㎝、器高3.5～4.5㎝で、高台径は8.5～13.5㎝とばらつきが大きい。『藤原報告Ⅱ』では「杯ＢⅢ」と呼んだ一群であり、有台食器の中で最も出土点数が多い。このうち、529は底部外面をロクロケズリで整えるもので、これ以外はヘラ切り痕をとどめている。この一群に尾張産は含まれないが、529は湖西産と推定される[30)]。

湖西窯産の須恵器

杯Ａ（532～535）は浅形のもの。口径は14.0～16.0㎝で、上述の杯Ｂとは口径が一致している。これらのうち、535以外に尾張産とみられる個体はほとんどなく、椀Ａで尾張産が主体を占めているのとは対照的である。

杯蓋（515～517）はかえり付のもの。受部径13.0～15.0㎝で、杯Ｂの蓋にあたる。518～522はかえりをもたない杯蓋。受部径は14.0～16.0㎝である。これらの杯蓋はいずれも扁平な宝珠形つまみを付すもので、杯Ｂ（523～531）の蓋である。

杯Ｂ（547～550）は大口径の一群である。口径18.0㎝前後で、高台径は13.0～14.0㎝となり、

口径に対する高台径の割合が大きい。底部はやや出尻のものが多く、その外面を左回りのロクロケズリで整形したのち、高台を貼り付けている。549・550は尾張産と推定される。杯Ａ（551）も尾張産で、前述の杯Ｂ（547～550）とは法量と器形とがおおむね一致している。

椀Ｂ（513・514および554・555）のうち554・555は口径16.0～17.0cm、器高5.5～6.5cmで、『紀要2018』では「杯Ｂ」として分類記載したものである。554は高台の内側に軽いロクロケズリ痕を残す。555は湖西産である。いっぽう、513は口径18.8cm、器高9.6cmと背高の椀で、口縁部が斜め上方へと直線的に立ち上がる。514は口径21.6cm、器高7.5cmで、鋺形の器形に高台を付したもの。器形は552・553に似ており、本例も尾張産とみられる。

椀Ｃ（552・553）は口径17.5cm前後、器高6.5cmで、丸底気味の底部は左回りのロクロケズリで整形しており、全体に銅鋺形を呈する。552の外面には自然釉がかかる。いずれも尾張産。

杯蓋（536～546・556）はかえりをもたないもの。受部径は18.0～20.0cmで、上で述べた杯Ａ・Ｂ（547～551）・椀Ｃ（552・553）・椀Ｂ（554・555等）の蓋にあたる。これらの蓋のうち、544・546は尾張産と推定されるが、536・540は美濃産の、541・545は播磨産の可能性がある。556はその受部径から、皿の蓋であろう。

皿Ａ（557～560）は広く平坦な底部から口縁部が短く立ち上がるもの。558は底部をロクロケズリで整えるがやや不徹底で、口縁部との屈曲が不明瞭である。焼成はやや甘い。559は底部外面をロクロケズリで、同内面を不定方向のナデで整えるもの。胎土には石英・長石粒を多く含む。560は平坦な底部をロクロケズリののち、ロクロナデで整えたもの。

561～566は皿Ｂ。561は復元口径19.4cmで、口縁部の立ち上がりも短い。平坦な底部はロクロケズリによる。562は平坦な底部から、口縁部がほぼ垂直に立ち上がる器形である。563・564は皿形でもやや深手で、出尻となった底部をロクロケズリで整える。564はその高台がほとんど剝落したもの。565は尾張産で、出尻気味の底部をロクロケズリで整えている。566の底部は右回りのロクロケズリで整える。胎土には亜炭とみられる黒色粒を含む。

盤Ａ（567）は広く平坦な底部と、短く外方へとひらく口縁部とからなり、一対の把手を貼り付けている。口径約40cmで、器高は10.5cmである。口縁部外面の下半は手持ちヘラケズリで、底部内面は横方向のハケで整える。

鉢Ａ（568～571）は口径15.2～21.8cmで、口縁部は内弯しつつ立ち上がり、569・570はその端部を外方へと小さく折り曲げる。571の底部は狭い平底状で、ロクロケズリで整える。

鉢Ｆ（572～574）は須恵器の臼[31]である。572は口径17.8cmで、底部側を欠いている。573は鉛直方向の打撃を加えることで生じた底抜けの事例。半分に割れた底部の片側のみが残る。底部内面には直径3.5cmの破孔が開き、この破孔を中心とする割れ円錐の剝離痕は直径6.0cmである。

底抜けの須恵器臼

底部内面に摩耗痕は認められないが、本例が臼として用いられたことを示している。574は胎土が瓦に似て非常に粗く、焼成も瓦質に焼きあがるもの。底部外面には樹種不明の葉脈痕が網目状に残る。なお藤原京右京一条一坊西北坪のSB8670柱穴からも、「瓦を思わせる胎土と焼成の擂り鉢」が出土しており[32]、574の類例として挙げられる。

575は小型の広口壺で、壺Ｂと称してきたもの。復元口径は8.8cmで、底部から口縁部までをロクロナデで整形している。胎土には白色粒子を多く含んでいる。

短頸壺（576～580）には大小各種がある。576は小型品で、平坦な底部と胴部下半とをロク

ロケズリで整形している。狭い肩部には薄く降灰を認めるが、短く直立する口縁部には灰がかからず、有蓋であったと考えられる。色調はやや赤味をおびた灰褐色で、尾張産。577の口縁部外端には鱗状の剝離痕が並ぶ。578は短く立ち上がる口縁部の内面と肩部とに暗緑色の自然釉がかかることから、無蓋のもの。579・580は短頸壺とみられ、胴部下半を手持ちヘラケズリで整形したもの。ヘラケズリは前者が８分割で、後者は６分割とみられる。

壺Ｂ（581・582・586）は平坦な底部から長い胴部が立ち上がり、肩部との間が明確に角張る器形である。前二者は肩部の最大径が20㎝前後で、581は胴部外面に左回りのロクロケズリを施し、暗緑色の自然釉がかかる。582は口縁部が短く立ち上がり、肩部に環状の耳を貼り付けた四耳壺で、そのうちの２つが残る。短く立ち上がる口縁部の外面には、蓋の内側面が一部溶着している。586は肩部径が22.0㎝で、肩部には灰緑色の自然釉がかかる。

壺Ａ（587）は薬壺形の一種か。口縁部の付け根から約２㎝外側には、蓋を被せて焼成した痕跡があり、その内側には自然釉がかからない。肩部には耳が外れた痕跡が残る。焼成は良好で、灰白色に焼き上がる。583～585は壺Ａ蓋。583・584の頂部には緑色の自然釉と降着物が付着している。585の外面は緑色の自然釉で覆われているが、素地は灰白色で堅く焼き上がる。頂部内面は多方向のナデで整える。588は壺の肩部片で、３本の沈線間に格子目を刻んで埋めている。外面には緑色の自然釉がかかり、胎土や焼成などからも備前産の可能性が高い。長頸壺（589）の肩部には自然釉がかかり、胴部側面に流下している。

590は壺類の口縁部。体部側をほぼ欠くものの、開口部の内面にはわずかな段差があり、粘土円板を貼り付けた閉塞痕跡を一部切り取ったようにみえることから、平瓶の口縁部であろう。

591は壺Ｋか水瓶の胴部とみられる。肩部には１本の沈線がわずかに残る。また、胴部外側にはかえり付の杯蓋片が溶着している。592・593は壺胴部。592は胴部上半に２本の浅い沈線をめぐらせ、その間を列点文で埋める。胴部から口縁部にかけては自然釉がかかる。焼成は良好で、灰白色に焼き上がる。備前産か。593は胴部上半に２本の沈線をめぐらせ、下半には手持ちヘラケズリの痕跡が残る。丸みを帯びた肩から胴部下半にかけて、暗緑色の自然釉が付着している。

フラスコ形長頸瓶（594）は高さ14.0㎝、最大径16.0㎝前後の扁球形をロクロ成形で作り出し、粘土円板で開口部を閉塞したのち、その球体の側部に開口して頸部を貼り付けている。体部成形時の底部はロクロケズリで整えている。頸部から胴部にかけては緑色の自然釉がかかり、その流下によって溶着が生じている。東海地方の産品であろう。

横瓶（595）は砲弾形をなす体部の一端が残り、成形時の底部側とみられる。胴部外面には平行タタキ目の上にカキ目を施し、内面には同心円文の当て具痕が残る。横瓶はこのほかにも１個体出土している。

596～599は、口縁部が直線的に立ち上がるか、またはわずかに外反する甕。『飛鳥池報告』では「甕Ｂ」と呼んでいる。596は口縁端部に内傾面をもち、口縁部の外面に１条の沈線をめぐらせる。胴部内面には当て具痕が残るが、外面のタタキ目はナデによりほとんど薄れている。597は胴部外面のタタキ目を擦り消し、その上に灰が降着している。胴部内面の当て具痕も、ヨコナデでほぼ擦り消している。598の胴部外面はカキ目でタタキ目が消えており、その上を灰緑色の自然釉が覆う。胴部内面は軽いヨコナデにより、同心円文の当て具痕が一部潰れてい

るが、これらを消すにはいたらない。口縁部の内面から胴部にかけて濃緑色の自然釉が流下している。599の口縁部は内弯気味に直立し、胴部外面には平行タタキ目が縦に残るが、口縁部直下はヨコナデで擦り消している。胴部内面に残る同心円文の当て具痕も同様である。

600～607は、口縁部が外反しつつ立ち上がる甕。『飛鳥池報告』をはじめ、既刊の報告書では「甕Ａ」に分類されることが多いが、その口縁部形状は多様である。口縁部が強く外反し、その端部に外傾する面をもつ604や、短い口縁部の端を上方へと摘み上げた602・603もある。このうち、600・601は口縁端部が玉縁状に丸く肥厚するもので、胴部外面にはカキ目を施し、内面には同心円文の当て具痕を残すもの。601は粗いカキ目でタタキ目がほぼ消えているが、胴部内面の当て具痕がヨコナデ後も消えずに残る。色調は灰色で、胎土には長石粒を多く含む。

602・603は短い口縁部の端を上方へと摘み上げたもので、602は胴部外面の平行タタキ目がナデで薄れており、内面の当て具痕もナデ消している。603は胴部外面のタタキ目を丁寧にナデ消しており、内面の当て具痕もヨコナデで消去している。尾張産。604は頸部が「く」の字形に強く屈曲し、胴部外面の平行タタキ目の上にカキ目を施し、胴部内面には同心円文の当て具痕を残す。605は口縁部から胴部上半にかけての破片で、外面のタタキ目はカキ目で消えており、内面の当て具痕上にも軽いヨコナデを施している。606は外面のタタキ目をカキ目でほぼ消去しているが、内面の当て具痕をそのままにとどめるもの。607は甕の口縁部である。

608・609は広口で口縁部が短い大容量の貯蔵容器で、甕Ｃと呼んでいるもの。前者は口径約30㎝で、胴部の中位に把手を貼り付けており、本来は一対であったと考えられる。

ⅱ　SD590出土土器（Fig.51）

SD590は第３次調査区の西部で検出したⅢ期の東西溝で、井戸SE650のすぐ南側に位置している。その東端はSD347・640の屈曲点に通じており、SB580（Ⅱ－２期）の北側柱筋と一部重複している。出土土器は整理用の木箱で３箱あり、飛鳥Ⅴに降る可能性がある。

土師器　　無暗文の杯（610）は浅形の供膳具で、口径15.0㎝。本例は、藤原宮東面内濠SD2300出土例（飛鳥Ⅴ）で「椀Ｚ」と呼び、杯Ｃから区別された一群[33]に酷似している。ⅢＡ（611）は口径23.0㎝で、内面には一段放射暗文を施す。底部外面は不調整にとどめる。

須恵器　　杯Ｂ（612・613・616）のうち、612は口径13.6㎝、613は口径12.6㎝で、いずれも高台の内側にヘラ切り痕を残す。色調は612が灰白色でやや軟質に焼き上がり、613が灰色である。これに対し、616は底部を左回りのロクロケズリで整えるもので、尾張産とみられる。杯蓋（614・615）はかえりをもたないもの。614は外端径17.8㎝で、頂部のロクロケズリは右回り。頂部内面が摩滅していることから、転用硯の可能性がある。615は口径18.0㎝で、笠形の頂部をロクロケズリで整形し、扁平なつまみを付す。鉢Ｆ（617）は円盤状を呈する底部の側面にタタキ目が残り、底部外面は不定方向のナデで仕上げている。内面に顕著な使用痕は認められない。

ⅲ　SD621出土土器（Fig.51）

SD621は第３次調査区から第８次調査区にかけて延びる南北溝で、北でやや西に振れるため、西方に位置するSD640とは完全には平行していない。第３・４次調査区ではおよそ40m分を検

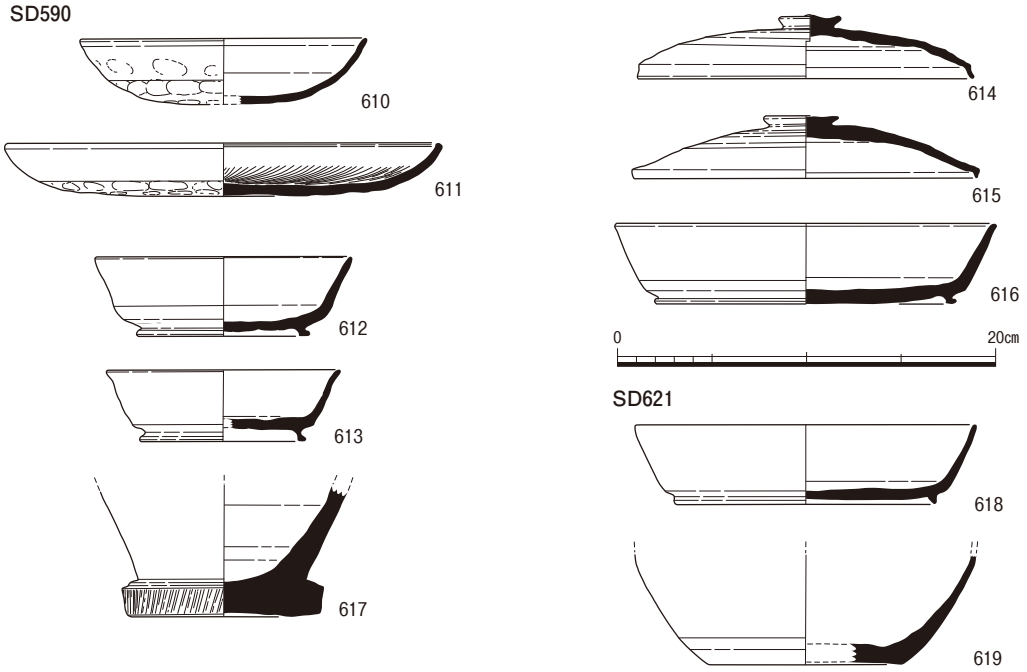


Fig. 51　SD590・SD621出土土器　1：4

出しており、埋土からは少量の土器が出土した。

須恵器　　杯Ｂ（618）は口径18.2㎝で、高台の内側には左回りのロクロケズリ痕が残る。尾張産で、堅緻に焼きあがる。壺胴部（619）は下半のおよそ半分が残る。胴部外面には流下した緑色の自然釉が付着し、また内面にも灰緑色の自然釉が降着している。底部外面は左回りのロクロケズリ。このほか、盤Ａの口縁部片が出土している。

ⅳ　SE650出土土器（PL.25～27）

第３次調査で検出したⅢ期の井戸SE650は、内法が一辺0.9mの井籠組の井戸である。深さは約2.8mで、上半部の井戸枠は抜き取られているが、下２段分が残る。その概要報告では、須恵器杯蓋内面に身受け（かえり）のないものが含まれることから「７世紀末頃」としている。

土師器　　杯Ｃ（620～625）は浅形のもの。620は口径約14.0㎝。底部外面はユビオサエのままとし、黒斑が残る。621～624は口径14㎝前後に復元できるもので、底部外面を不調整にとどめる点は620に同じ。620～624は井戸枠抜取穴埋土からの、625は井戸掘方からの出土。

鉢（626）は口縁部の小片で、口縁部は上方で直立気味となり、端部は内側に軽く巻き込む。底部外面をヘラケズリで整え、口縁部に粗いヘラケズリを施したものである。

壺Ｂ（627）は口縁端部をほぼ欠くが、胴部は完形である。口径約6.5㎝、器高4.5㎝。胴部外面はユビオサエのままで、粘土紐巻き上げ痕が途切れつつも渦巻状に一周する。

甕Ａ（628～640）は中・小型で、胴部径が13.0～20.0㎝の球胴形甕である。628は胴部外面に縦方向のハケ目を残し、内面はナデ・オサエのまま。胎土に金雲母を多く含む。629の胴部内面には板ナデ痕が残る。630の口縁部外面には十字形のヘラ記号がある。631の胴部内面は斜め方向のヘラケズリで整える。632は胴部径が約20.0㎝で、口縁部は打ち欠きですべて残らない。633は胴部内面をヘラケズリで整形している。634は胴部下半を縦方向のヘラケズリで、内

面もヘラケズリで整えたもの。635の胴部上半には１次ハケ目が残る。

637～640は胴部外面の下半をヘラケズリし、内面をハケで整えたもの。これらは器形・調整のパターンや胎土・色調が共通し、これまで「近江型」[34]と呼ばれてきたものである。639・640は胴部中位に１条の沈線をめぐらせるもので、類例は近江や伊賀地域にも分布している[35]。

これらの甕のうち、胴部外面にスス・コゲが付着するのは630・636～639である。とくに637は、胴部外面のほぼ全体と口縁部の内側とにススが付着するが、底部外面にはススがかからず円形に抜けている。いっぽう、629・632～635・640にはスス・コゲが付着せず、煮炊きに用いた形跡に乏しい。632・634・640には黒斑がある。

甕Ｂ（641・642）は大型で球胴形のもの。641は胴部中位に一対の把手を貼りつけており、底部は平底に近い。胴部外面の下半に縦方向のハケ目が一部残るものの、把手より上位のハケ目は不明瞭で、内面には指ナデで生じた凹凸が残る。胴部外面の下半には薄くススが付着する。

642は口縁部から胴部中位までと、把手の基部付近が残る。スス・コゲは認められない。

甕Ｃ（643～645）のうち、643・644は胴部径に比し器高が著しく大きい長胴形甕で、他地域産とみられるものである。643は胴部径14.5cmに対して器高23.8cm。胴部は内外ともにヨコナデおよびオサエで成形したままにとどめるため、器表面に成形時の凹凸が残る。胴部の中央上寄りには、平行する縦方向のヘラ記号が２条ある。胴部外面には黒斑があり、ススやコゲは認められない。いっぽう、644は胴部径12.6cm、器高24.8cmで、643よりも縦長傾向が強い。胴部の内外面は縦方向のハケで整える。外面にススが付着している。両者は井戸最下層の出土。645は甕Ｃの胴部下半にあたるとみられるもの。底部はやや平底に近く、その中央に平行する６条の線刻がある。胴部外面に黒斑を認めるものの、スス・コゲは認められない。

壺Ａ（646・647）はいわゆる薬壺形で、胴部中央に一対の把手を貼り付けるもの。646の胴部外面は上位３分の２を６分割の稠密なヘラミガキで整えるが、下部にはヘラケズリの条痕がよく残る。高台径は9.8cm。647は把手よりも上位は無数の潰痕で器表面が荒れているが、ヘラミガキで仕上げたものとみられる。胴部内面には横方向のハケ目が残る。

須恵器　　杯蓋（648）は外端径約17cmで、かえりをもたないもの。色調はにぶい赤褐色で、硬く焼きあがる。尾張産。杯Ｂ（649）は復元口径約16cm。高台径はおよそ9.5cmである。

壺Ａ（650）は口縁部を欠くが、胴部はほぼ完形。肩と底部内面とに灰がかかる。底部外面は手持ちヘラケズリ。色調は灰色で、胎土には長径５㎜までの石英・長石を多く含む。

広口壺（651）[36]は口縁部を一部欠くほかは完形。胴部径18.4cmで、胴部の張り出しが明瞭な「く」の字形をなし、均整のとれた器形となっている。この張り出しのすぐ上と、頸部の中位とにはそれぞれ１条の沈線をめぐらせる。口縁端部は平坦で、内側にやや肥厚する。胴部にはかすかにヘラケズリ痕が残るが、底部外面には工具痕とユビオサエ痕が残る。

平瓶（652～657）は全体に平底で肩が張ったものが多い。652は頂部が完存するが、頸部と底部を欠く。頂部外面には濃緑色の自然釉がかかる。653は胴部下半から底部にかけては粗い手持ちヘラケズリを施す。654も頸部の付け根から底部にかけてほぼ半身が残るもの。底部は平底で、外面をロクロケズリで整える。655の頸部は外方へと大きくひらく喇叭形。頂部には濃緑色の自然釉がかかる。656の頂部には重ね焼きで溶着した器物の痕跡が残り、頸部には２条の沈線がめぐる。底部外面のロクロケズリは右回りか。657の底部外面は不定方向のヘラケ

ズリで軽く整えたのみである。濃緑色の自然釉が頸部から胴部側面にかけて流下している。

横瓶（658）は俵形に成形した胴部をいちど閉塞し、側面に開口して頸部を付している。内面には閉塞部付近を除き、同心円状の当て具痕が隈なく残り、外面にはタタキ目が残る。頸部から胴部上半にかけて、濃緑色の自然釉が薄くかかり、左図右端には直径7.5cmの重ね焼き痕がある。地色は灰白色で東海地方産のもの。

提瓶（659）は扁球形の胴部をいちど閉塞し、回転体の側面に開口して頸部を付したもので、頸部の左右に環状の耳を貼り付ける。しかし、図右側の耳跡は自然釉に覆われているようで、焼成前には片耳を欠いていたようにもみえる。頸部から胴部にかけて、灰緑色の自然釉が滴となって流下しているが、その下地に斜格子タタキ目がうすく残る。胴部を扁球形の回転体としてみた場合、その直径は約23cm、高さ20.5cmとなる。地色は灰白色で、東海地方産。

v　SK518出土土器（PL.28）

土坑SK518は、第３次調査区の南端付近で検出した平面楕円形の土坑である。その概要報告では飛鳥Ⅳ～Ⅴ段階に相当し、井戸SE650出土土器とはほぼ同時期としている（『藤原概報14』1984年）。

土師器　杯ＡⅠ（660～662）は内面に二段放射暗文を、口縁部外面にヘラミガキを施すもの。662のみ放射暗文の上段が左上がりで、かつ下段との間に連弧暗文を配する。また、660の底部外面は不調整で、661・662はヘラケズリで整えている。口縁端部はいずれも内側に巻き込む。

杯Ｃ（663～666）は浅形のもの。663はこれまで杯ＣⅢとして分類記載されたものにあたるか。664・665はいずれも底部を不調整にとどめる。666の底部外面も不調整のままだが、口縁部外面にはヘラミガキを施す。これら杯Ｃの法量分布は、SD640のそれらとおおむね一致する。

高杯Ｃ（667）は脚部以下を欠くが、杯部の底部外面には直径約10cmの粘土円板の痕跡があり、その中央に芯棒痕跡（直径2.6cm）がある。内面には一段放射暗文と連弧暗文を配し、中央部には螺旋暗文を施している。杯部外面のヘラミガキは、欠失部も含めると６分割で施したか。

ⅢＢ蓋（668）は外端からつまみ中心までの長さを倍し、口径約32.0cmに復元できる。頂部にはヘラミガキを施し、中央に直径3.6cmの扁平なつまみを付している。

杯Ｇ（669・670）のうち、669の底部には黒斑があり、木葉痕の一部も残る。670は小破片である。

杯Ｈ（671）は底部外面をヘラケズリし、口縁部との境界にややにぶい稜をなす。

ⅢＡⅠ（672・673）は復元口径約21.0～22.0cm。口縁端部が内側に巻き込んで肥厚する。底部内面にはアバタ状の潰痕があり、ことに673は暗文が確認できない。

鉢Ｈ（674）は口径23.0cm。胎土は671と同じで、色調はにぶい橙色（Hue 7.5YR 7/4）。

甕Ｃ（687）は口径25.8cmで、口縁部から底部までよく残る。胴部内面の中位から下半も縦方向および斜め方向のハケで整える。胴部外面にススが付着する。

鍋（688）は胴部下半を欠くが、同上半の外面を縦方向のハケで整えており、内面にも横方向のハケ目が残る。口縁部の一部を波状口縁として片口につくる。使用にともなうススやコゲは認められない。なお、本例とは器形や胎土を同じくする片口の土師器鍋Ｂが藤原宮土坑SK1306で出土している（『藤原報告Ⅱ』PL.59-73）。

須恵器　　杯蓋（675～680）にはかえりがあるもの（676・678）とこれをもたないもの（675・677・679・680）とがある。675は外端径10.9cm。口径約10.0cmの杯と一具をなすものである。677は口径13.0cm前後の杯に見合うもの。678は外端径が15.9cm、受部径が14.5cmで、杯Ｂの蓋であろう。頂部を右回りのロクロケズリで整える。679は外端径が17.3cm、受部径が16.6cm。頂部のロクロケズリは右回りで、亜炭がケズリの条痕に沿って延びる。680は679と同様で、外端径は17.0cm前後に復元でき、頂部ロクロケズリも右回り。

杯Ａ（681）は全体に底部が丸く、平坦な底部に直立気味の口縁部を付したものとは器形が異なる。底部外面は左回りのロクロケズリで整形したもの。杯Ｂ（682）は口径約15.5cmで、飛鳥Ⅳの有台杯としては一般的な大きさである。内面は底部が不定方向ナデで、高台の内側にはヘラ切り痕を残す。椀Ａ（684・685）は平坦な底部と直立気味の口縁部からなり、底部外面はロクロケズリで整形している。684の復元口径は15.0cm前後。685の口径は17.0～18.4cmだが、歪みが大きい。皿Ａ（683）は短い口縁部がほぼ直立し、底部外面を左回りのロクロケズリで整える。尾張産。皿Ｃ（686）は口径約30cm。底部外面のロクロケズリは右回り。

甕（689）は口径23.4cm、胴部径42.0cm。底部を欠くが、口縁部から胴部下半までがよく残る。胴部外面には格子目状のタタキ目が残り、その上をカキ目でおおう。その肩には濃緑色の自然釉がかかる。また、胴部内面には同心円状の当て具痕が残る。

vi　SK587出土土器（Fig.52）

SK587は第３次調査区の中央に位置し、東西塀SA600のすぐ北側で検出した長楕円形の土坑

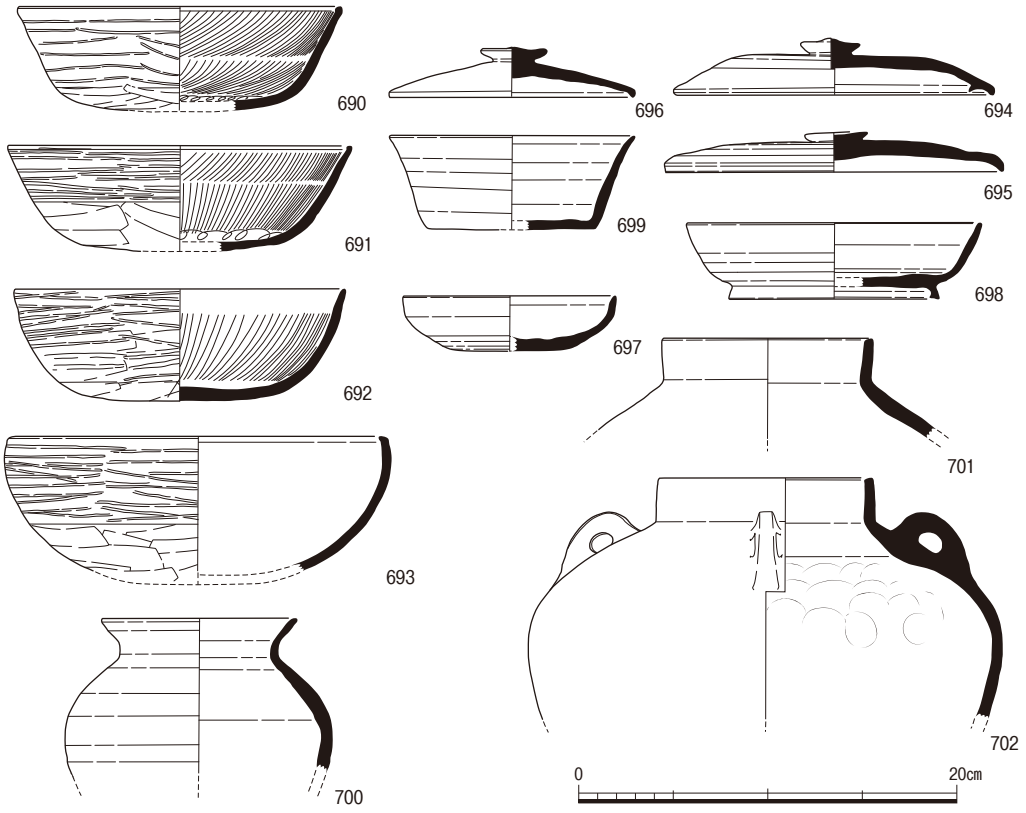


Fig. 52　SK587出土土器　1：4

で、掘立柱建物SB580の西北隅柱穴にほぼ接しており、その西北には土坑SK648がある。出土土器は１箱で、飛鳥Ⅳに属する。SK518出土の須恵器杯蓋と接合した個体がある。

土師器　杯Ａ（690・691）は二段放射暗文を施し、底部はヘラケズリで整えたもの。接合しないが、両者は同一個体の可能性がある。いっぽう、深形の杯Ｃ（692）は口径17.6cmで、器高6.1cmと深く、口縁端部の巻き込みは認められない。鉢Ａ（693）は復元口径21.0cm。口縁部上半はヘラミガキで飾り、下半はヘラケズリのままとする。底部に黒斑の一部が残る。

須恵器　杯蓋（694～696）のうち、694はかえり付で、外端径は16.8cm。受部径は15.5cmで、杯Ｂの蓋とみられる。本例はSK518出土品との接合例である。695・696はかえりをもたない杯蓋。前者は外端径が17.9cm、受部径が16.0cmで、杯Ｂの口径に一致する。いっぽう、後者は外端径が13.0cmで、受部径は12.0cm。石神遺跡出土の土器群では、これに見合う口径の須恵器杯Ｂが皆無であるから[37]、本例は椀Ａの蓋であろう。杯Ａ（697）は底部中央にヘラ切り痕が残る。杯Ｂ（698）は口径15.4cm。椀Ａ（699）は口径13.1cmで、口縁部はややひらき気味に立ちあがる。底部はロクロケズリで平坦に整形している。

700は短頸壺。701は壺Ｂで、その肩に自然釉がかかる。702は六環壺で、胴部上半から口縁部にかけてのおよそ半身が残る。環は短い口縁部の周囲におよそ60°刻みで割り付け、あわせて６つを配していたと推定できるが、残るのは２つのみである。

vii　SK641出土土器（Fig.53）

SK641は第３次調査区の北半で検出した長楕円形の土坑で、SD630とSD640との間に位置し、斜行溝SD576の埋土を掘り込んでいる。出土土器は４箱で、飛鳥Ⅳに属している。

土師器　杯Ａ（703・704）のうち、703は口径17.3cmで、一段放射暗文を施すもの。底部は不定方向のヘラケズリで整える。色調は浅黄橙色。暗文が一段構成であることや色調が特異な個体で、他地域産か。704は口径19.0cmで、口縁部下半から底部外面をヘラケズリで整える。底部外面には大きな黒斑がある。杯ＣⅠ（705～708）のうち、705は深形のもの。口縁部下半から底部にかけては不調整で、中央に木葉痕が残る。これに対し、706～708は浅形で、口径は13.5～15.0cmである。これらは底部を不調整にとどめ、707には木葉痕が残る。709は皿Ａ。底部外面は不調整にとどめ、指頭圧痕の凹凸が指紋とともによく残る。

須恵器　杯蓋（710～712）にはかえり付の710と、これをもたない711とがある。前者は外端径が16.2cmで、受部径は15.0cm。後者の外端径は18.0cmである。712はその内面に木葉痕が残る。

杯Ａ（713）は大型深手の埦形で、底部外面はロクロケズリで整える。杯Ｂ（714）は713と同様に埦とみなすべきもの。杯Ａ（715）は浅手のもので、底部外面にはヘラ切り痕が残る。杯Ｂ（716・717）は口径18.0cm前後で、ほぼ同じ大きさのもの。皿Ａ（718）は完形品で、底部外面をロクロケズリで整えており、ロクロの回転は左回り。719は線刻のある須恵器片。

viii　SK748出土土器（Fig.54）

土坑SK748は、第４次調査区の中央東寄りで検出した不整形土坑で、南北溝SD621と同SD640との中間の位置にあり、南北棟掘立柱建物SB745（Ⅰ－１期）や、SB735（Ⅰ－２期）に付

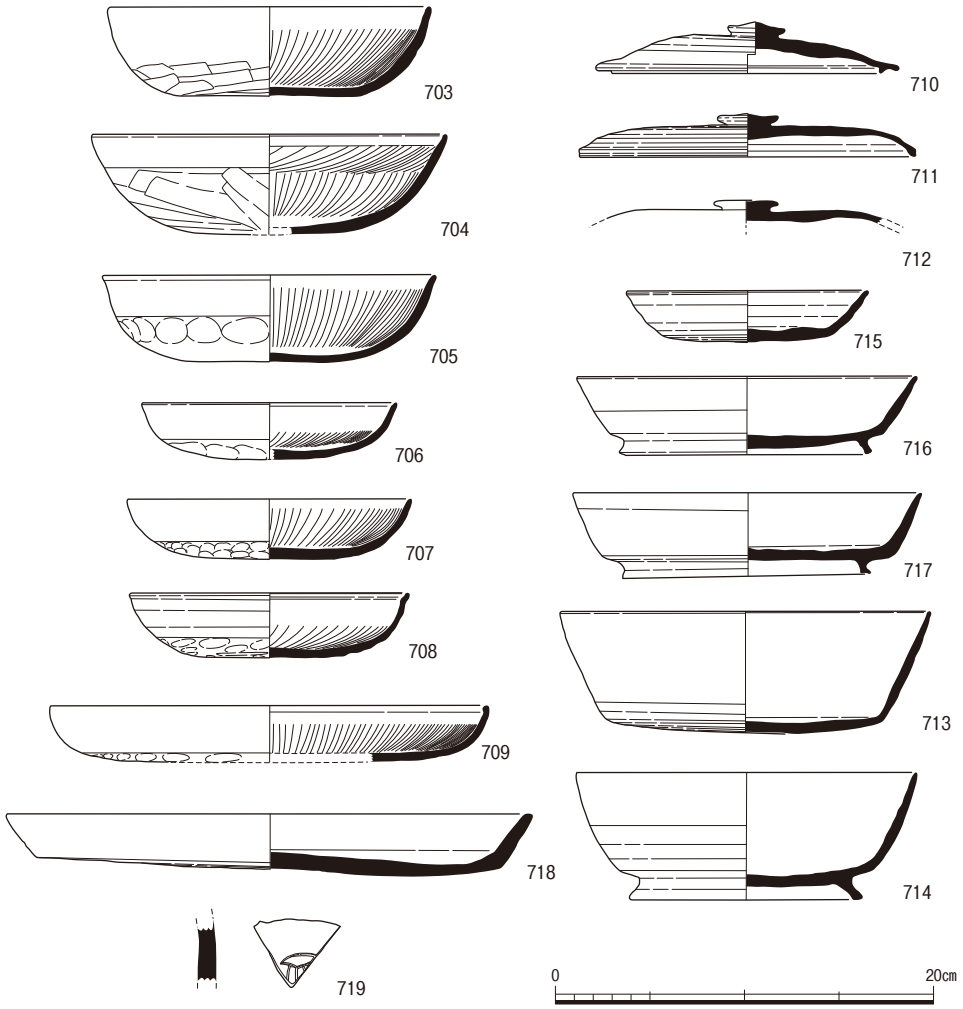


Fig. 53　SK641出土土器　1：4

属する石敷より新しい。本土坑出土の土器も飛鳥Ⅳに属する。

土師器　　杯ＡⅠ（720・721）はいずれも底部外面をヘラケズリで整え、口縁部外面にはヘラミガキを施す。720は口径16.2cm。内面の二段暗文は下段がほぼ直立し、上段は左上がり。721は口縁端部が内側に巻き込むもの。杯ＢⅠ（722）の内面には二段放射暗文が残り、口縁部外面上半はヘラミガキを施す。皿ＢⅠ（723）は口径20.0cmで、口縁部は内弯気味に短く立ち上がり、端部が内側に巻き込む。内面と高台の内側には右回りのナデ痕が残る。杯ＣⅠ（724～726）は口径14.0～15.0cmである。いずれも内面に一段放射暗文を施し、底部外面は不調整のままとする。杯ＣⅢ（727・728）は口径10.6～11.5cm。底部は不調整のままである。杯Ｊ（729）は口径12.0cmで、口縁部は外反し、底部を不調整にとどめるもの。皿ＡⅠ（730）は口径27.0cmで、内面に一段放射暗文を施し、底部外面はおそらく６分割のヘラケズリで仕上げている。

甕Ｂ（731）は胴部中位に一対の把手を貼り付けたもの。部分的ではあるが、胴部内外面にはハケ目が残る。胴部外面には黒斑があるが、スス・コゲは付着していない。甕Ａ（732）は口径15.0cmで、口縁部から胴部中位にかけてと、胴部下半の破片とに分かれている。外面には縦方向のハケ目が残る。胴部内外面と口縁部内側にスス・コゲが薄く付着している。

須恵器　　杯Ｈ身（733）は外端径10.8cm、口径9.0cmで、内傾気味の立ち上がりは高さ1.2cm

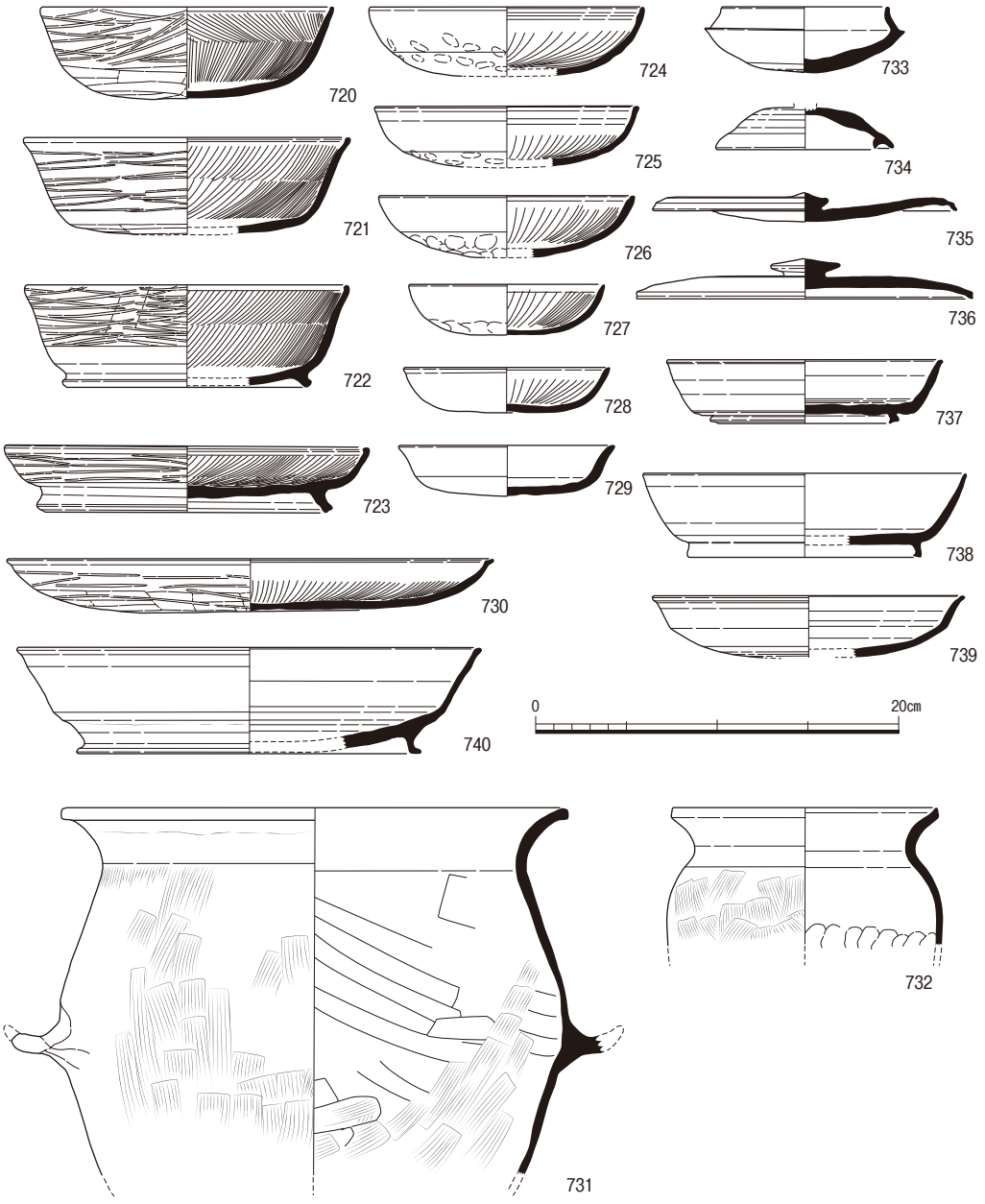


Fig. 54　SK748出土土器　1：4

である。底部外面はロクロケズリで整えており、ロクロの回転は左回りとみられる。完形品。

杯Ｇ蓋（734）は口径9.9cmで、つまみを欠失する。受部径は8.6cmである。色調は灰色。杯蓋（735・736）はかえりをもたないもの。735は口径17.0cmで、平坦な頂部をロクロケズリで整えるが、つまみを貼付けたためか中央部がやや陥没している。猿投産か。736は頂部外面をロクロケズリで整えたもので、ロクロの回転は右回り。杯Ｂ（737・738）のうち、737は底部内面には不定方向のナデ痕跡が残るが、中央部が摩耗している。底部外面は高台内側にヘラ切り痕が残る。杯Ａ（739）は口縁部が中位で屈曲し、これより上位が外反する。底部外面はロクロケズリ。あるいは高杯の杯部か。皿Ｂ（740）は口径25.5～26.0cmに復元できる。高台の内側にはロクロケズリ痕をとどめている。

ix　SK755出土土器（Fig.55）

土坑SK755は、第４次調査区の中央で検出した土坑で、南北溝SD640の西側に位置し、斜行溝SD575と、方形区画SX760（Ⅰ－１期）の東北隅を壊している。上で述べたSK748などと同様に、出土土器は整理用の木箱で14箱を数え、飛鳥Ⅳに属するとみてよい。

土師器　　杯ＡⅠ（741）は底部外面を６分割の丁寧なヘラケズリで整え、口縁部外面にはヘラミガキを施すが、ユビオサエの凹凸が消えずに残る。口径18.3㎝。内面の二段放射暗文は右上がりで、見込みには螺旋暗文を施す。杯ＣⅡ（744）は内面に一段放射暗文を施し、底部外面は不調整のままとする。杯ＣⅢ（742・743）は口径11.0㎝で、底部は不調整のままであるが、743は口縁部外面にヘラミガキを施す。また、745は器形や色調が杯ＣⅢに似る。口径は11.0㎝前後である。杯Ｈ（746）の外面には黒斑がある。盤Ａ（747）は復元口径34.0㎝で、口縁部は内弯気味に立ち上がり、口縁端部を内側に軽く巻き込む。口縁部外面はヘラミガキを施すが、ヘラケズリで整えた底部に大きな黒斑がある。

須恵器　　杯Ｇ（753）は復元口径10.6㎝で、底部にはヘラ切り痕が残る。内面には灰がかかり、焼成時には無蓋の状態であったか。杯蓋（748～752）はかえり付で、外端径は11.0～13.2㎝。受部径は差し渡しで10.0～10.7㎝で、杯Ｇ身に見合う大きさである。ただし、750の受部径は11.8㎝で、杯Ａなど無台食器の蓋とみられる。750の頂部外面には「人」字形のヘラ記号がある。杯Ａ（754）は口径13.5㎝で、杯類としては浅手のもの。底部外面のロクロケズリは右回りで、「キ」形のヘラ記号がある。杯Ｂ（755）は猿投産の小片である。

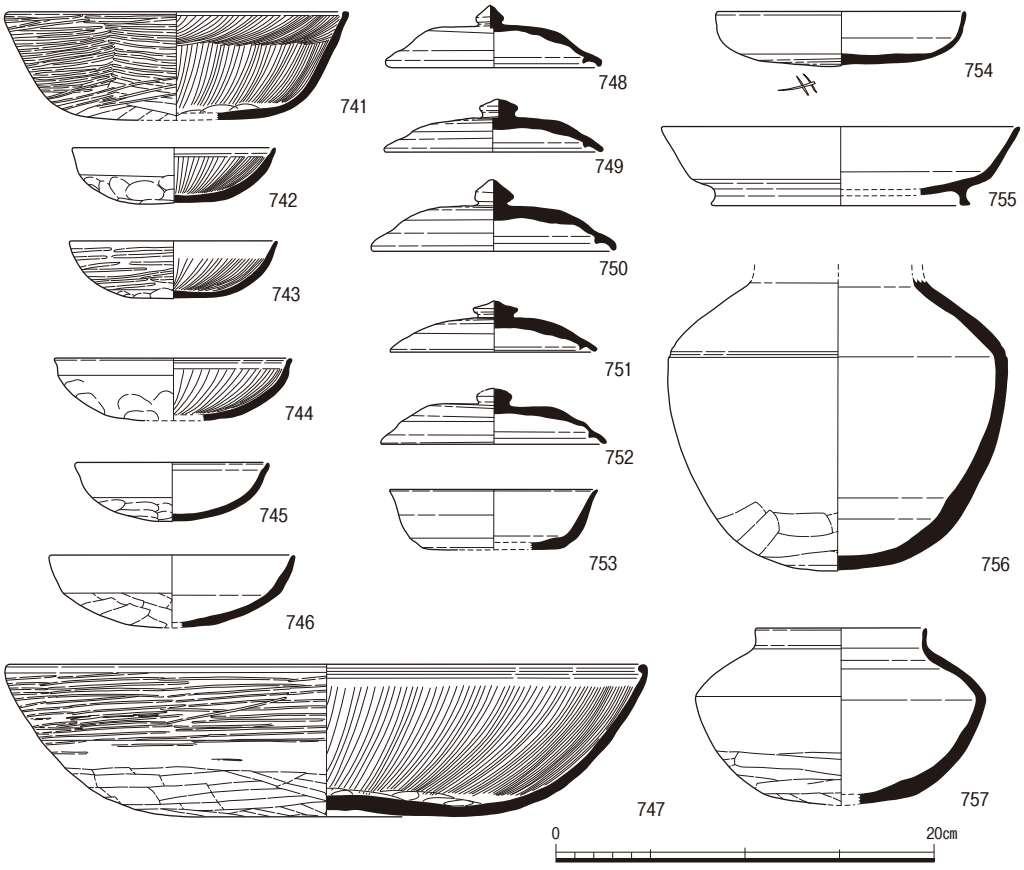


Fig. 55　SK755出土土器　1：4

長頸壺（756）は胴部径が18.0㎝のもの。頸部と体部のおよそ半分を欠くが、残存する部分には灰緑色の自然釉がかかり、その流下方向からは転倒した状態で焼成されたものと考えられる。底部外面は手持ちヘラケズリで粗く整えている。割れ口の色調は灰白色で、堅緻に焼きあがる。備前産か。短頸壺（757）は胴部径15.4㎝、器高9.5㎝で、体部のおよそ半分が残る。肩部と内面に灰がかかり、底部外面は手持ちヘラケズリで整えている。

x　SK764出土土器（Fig.56）

土坑SK764は、第４次調査区で検出したⅢ期の土坑で、井戸SE800のすぐ南側に位置する。この土坑は掘削時にSE800石敷の南側石を壊しており、土坑の底には南側石の最下段が３石残っている。出土土器は整理用の木箱で６箱あり、飛鳥Ⅳに属している。

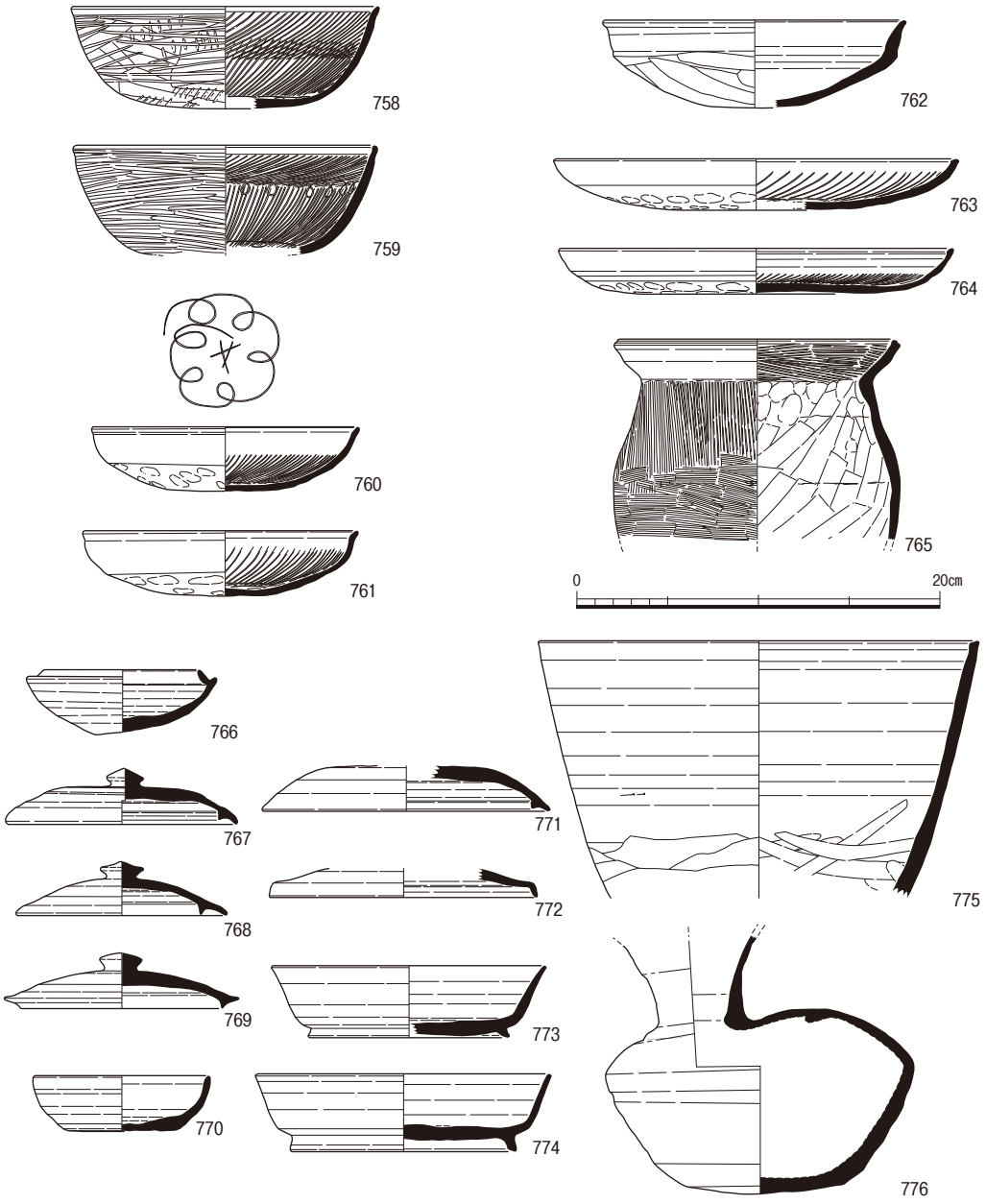


Fig. 56　SK764出土土器　1：4

土師器　　杯ＡⅠ（758・759）は内面に二段放射暗文を施し、口縁部外面にはヘラミガキを施す。底部外面はヘラケズリで整える。杯Ｃ（760・761）は前者が口径14.9㎝、後者も14.8㎝で、内面に一段放射暗文を施している。底部はいずれも不調整にとどめている。なお760の見込みには「艾」形の線刻がある。鉢Ｈ（762）は口径16.5㎝で、底部外面をヘラケズリで整形しており、底部から口縁部にかけて明瞭に屈曲する。皿Ａ（763・764）は内面に一段放射暗文を施すもの。甕Ａ（765）は口縁部から胴部上半までが残る。口径は15.6㎝で、口縁部はやや内弯する。胴部内面には斜め右へと上がるヘラケズリ痕が明瞭である。

須恵器　　杯Ｈ（766）は完形で、外端径は10.5㎝。底部外面にヘラ切り痕をとどめる。短い立ち上がりは内傾し、口径は8.5㎝。須恵器杯Ｈのなかでも最小の部類に属する。杯蓋にはかえり付のもの（767～769・771）とかえりをもたないもの（772）とがある。768・769の頂部内面は摩滅しており、転用硯とみられる。771・772は杯Ｂの蓋であろう。杯Ｇ（770）は口径10.0㎝で、口縁部上半に１条の浅い沈線をめぐらせ、底部にはヘラ切り痕をとどめる。杯Ｂ（773・774）は高台径約11.0㎝で、口径は16.0㎝前後。甑（775）は口径25.0㎝で、口縁部下半はロクロケズリで整形している。口縁部内面には、ロクロ目の凸部が擦れてわずかに摩耗している部分がある。平瓶（776）は胴部が扁球形のもの。頂部中央を粘土円板で閉塞し、その横に開口して頸部を貼り付けている。胎土には亜炭とみられる黒色粒子が多く含まれる。

xi　SK774出土土器（Fig.57）

土坑SK774は第４次調査区の北端近くで検出した土坑で、井戸SE800の西側に位置している。出土土器は整理用の木箱で16箱を数え、飛鳥Ⅳに属する。なお、本土坑から出土した東北系の黒色土器（Fig.62-818）は、本節Ｅ項に載せる。

土師器　　杯ＡⅠ（777）は底部外面を不調整にとどめ、口縁部外面にはヘラミガキを施す。口径17.0㎝。内面の二段放射暗文は右上がりで、見込みには螺旋暗文を施す。

杯ＣⅠ（778）は口径14.9㎝である。内面に一段放射暗文を施し、底部外面には指頭圧痕の凹凸が残る。杯ＣⅢ（779～781）は口径11.0㎝前後で、底部は不調整のままである。

皿Ａ（782・783）は復元口径20.0～21.0㎝で、782は底部をヘラケズリで、783は底部を不調整にとどめる。鉢Ｈ（784）は口径19.0㎝で、底部外面をヘラケズリで整える。

甕（785～788）は中・大型の球胴形のもの。785は復元口径16.0㎝で、胴部内面を横方向のヘラケズリで整える。786は短い口縁部の端を小さく摘み上げるもので、縦方向のハケで整えた胴部には薄くススが付着する。787は復元口径22.0㎝で、短く外反する口縁部をもち、胴部内面は縦方向のヘラケズリで整える。788は復元口径25㎝で、外反する口縁部と胴部とが「く」の字形に強く屈曲するもの。胴部外面のハケ目は疎らで、内面にはヨコナデ痕が残る。

須恵器　　杯蓋（789）はかえり付で、外端径は16.8㎝、受部径は15.5㎝。頂部外面は右回りのロクロケズリで整える。内面中央部がやや摩滅しており、転用硯に用いたものか。790はかえりなしで、復元外端径は16.0㎝。頂部内面の中央部が摩滅している。

皿蓋（791）は外端径34.0㎝で、右回りのロクロケズリで整えた頂部は笠形を呈する。つまみを欠くものの、器高は6.7㎝である。内面の重焼痕は直径31.5㎝で、この皿蓋とは一具をなす大皿とみられる。792も皿蓋の口縁部片で、復元外端径は30.0～32.0㎝。

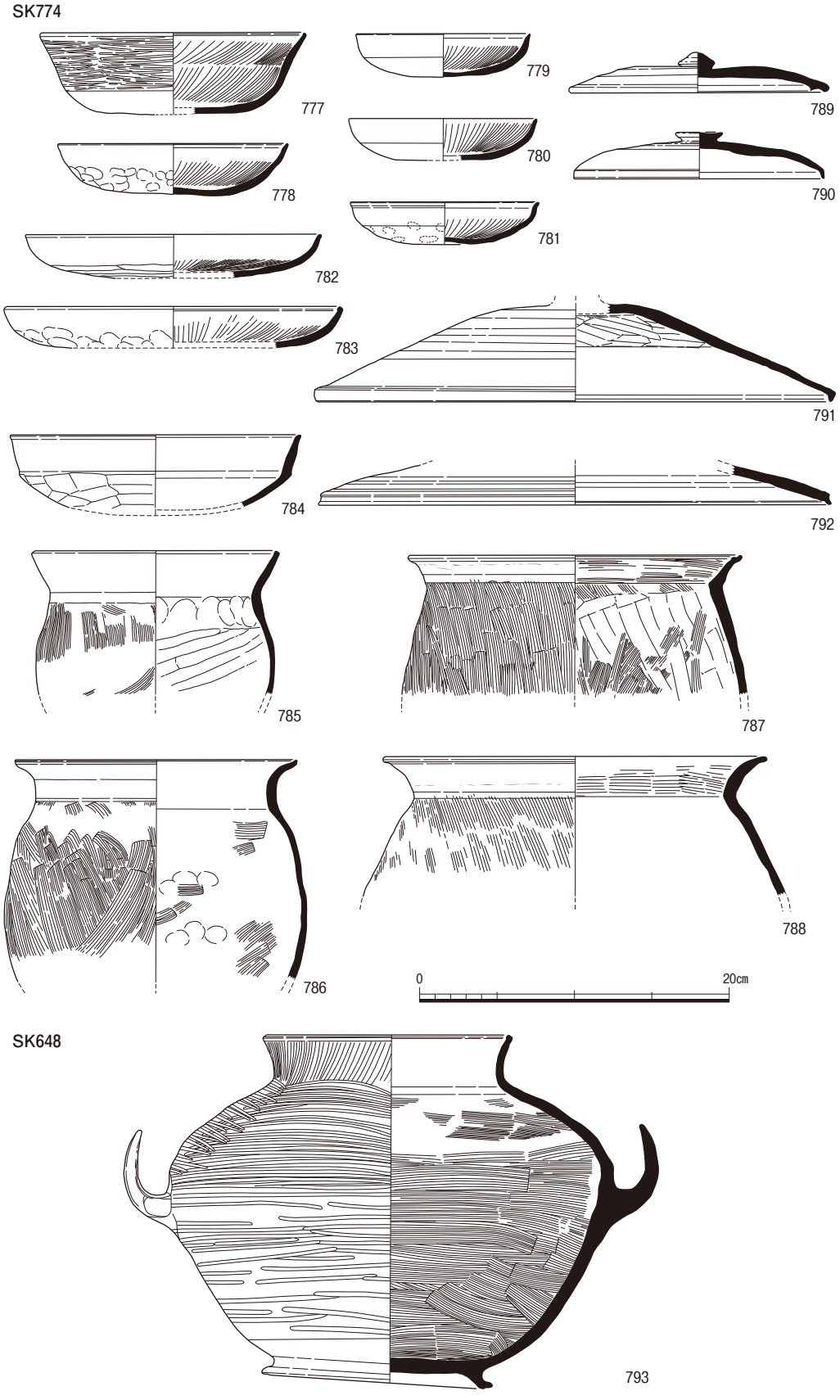


Fig. 57　SK774・SK648出土土器　1：4

xii　その他の土坑出土土器（Fig.57・58）

SK648出土土器　　第３次調査で検出したSK648は、Ⅲ期の井戸SE650の東方に位置する楕円形の土坑である。埋土からは土師器壺Ａが出土した（Fig.57-793）。頸部から胴部までのおよそ半分と、把手の片側とが残り、底部は完存する。胴部外面には横方向のヘラミガキを、短い頸部には縦方向のヘラミガキを施す。胴部内面はおもに横方向のハケ目で整える。飛鳥Ⅳの土器群では薬壺形の類例が少なく、本書ではほかにSE650・SB830出土例を掲出するのみである。

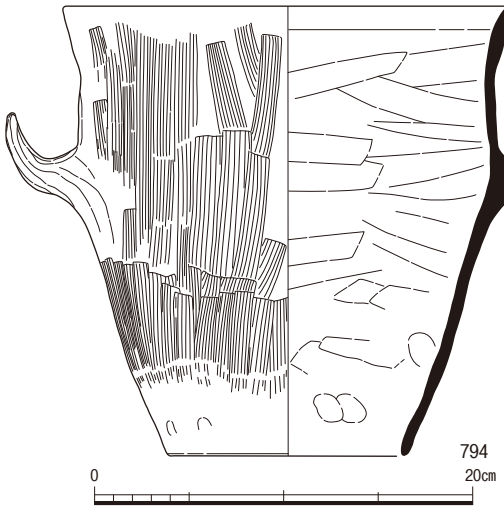


Fig. 58　SX795出土土器　1：4

SX795出土土器　　SX795は第４次調査区の西辺付近に位置する土坑で、SB830の西側柱筋の柱穴（ニ－二）に接しており、SB810の身舎とは重複する位置にある。土師器甑（Fig.58-794）の胴部は外面を縦方向のハケで整え、内面は横方向の板ナデで仕上げている。底部は筒状に開口し、その直径は12.0㎝である。胴部中位には把手を貼り付ける。ススは認められない。

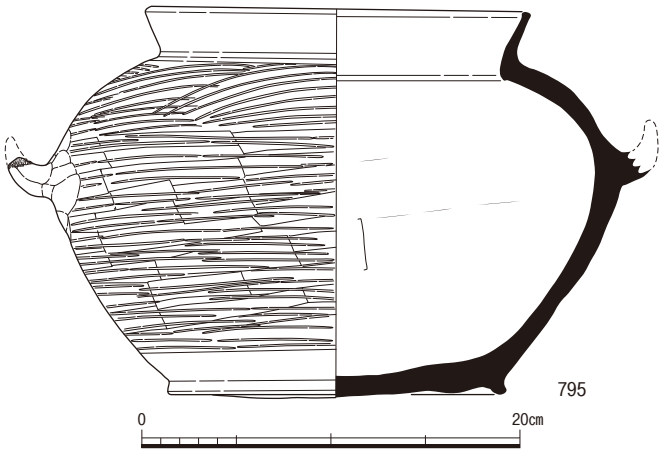


Fig. 59　SB830柱穴出土土器　1：4

　このほか、SK753・SK762・SK763・SK737・SK779・SK785等でも飛鳥Ⅳの土器が出土している。

xiii　Ⅲ期建物・塀出土土器（Fig.59）

SA732　　第４次調査区東端で検出した南北方向の掘立柱塀。UK16区の柱穴（第３次調査区）で土師器杯Ｈが、UO16区の柱穴（第４次調査区）から須恵器杯Ｈ片が出土している。

SA781　　第４次調査区の中央部で検出した東西塀で、その東端で北に折れて南北塀SA780となる。図化できる土器はないが、土師器杯Ａ・杯Ｂ、須恵器杯Ａ・杯Ｂ・杯蓋片（かえりなし）が含まれ、飛鳥Ⅳに降るとみてよい。

SB830　　第４次調査区の西北隅付近で検出したⅢ期の総柱掘立柱建物で、SB810（Ⅰ－１期）やSB820（Ⅱ期）の柱穴と重複し、これらの建物より新しい。報告できる土器は少ないが、土師器杯Ａ片や須恵器杯蓋片（尾張産）・杯Ｂ片など、飛鳥Ⅳに降る土器片が少なからず出土している。土師器壺Ａ（795）は薬壺形で、ほぼ完形。胴部外面はヘラミガキで整え、その中央に一対の把手を付している。ロ－二の柱掘方埋土から出土したものである。

D　奈良時代・平安時代の土器

i　NR310出土土器（Fig.60）

NR310は第１・３次調査区で検出した、奈良時代から平安時代の流路である。その堆積物は最上層の暗褐色粘土（「東西溝暗褐粘土」として取り上げ）と、中・下層の粗砂・砂質土とからなり、粗砂（「東西自然流路」または「（東西）自然流路粗砂」などとして取り上げ）からは弥生土器および７・８世紀の土器が出土した。いっぽう、最上層の暗褐色粘土からは９世紀代の土師器・黒色土器片が出土している。出土土器は整理箱で10箱あり、弥生土器と７～９世紀の土師器・須恵器などからなるが、多くが細片化しており、図示できるものは一部にかぎられる。

土師器　杯Ａ・杯Ｃ、皿Ａ、皿Ｂ、高杯、甕、かまど片などがある。796は杯Ａ。口径20.0㎝で、内面には間隔が広い一段放射暗文を施す。底部外面はヘラケズリで整えている。類似する個体は平城宮SK820（平城宮土器Ⅲ）にあり、そこでは「杯ＡⅡ」に分類している[38)]。797は皿Ｂ。復元口径約32㎝で、内面には１段放射暗文と螺旋暗文を施す。底部中央部を欠くが、あきらかに出尻底である。飛鳥藤原第214次調査出土。なお、細片のため図示しないが、暗褐色粘土からは９世紀頃の皿Ａ片や黒色土器片が出土している。

須恵器　杯Ａ・杯Ｂ、杯蓋、壺・平瓶、甕がある。798は杯Ａ。口縁端部付近が内外ともに薄く黒ずみ、焼成時の重焼痕とみられる。底部外面にはヘラ切り痕が一部残る。法量からは奈良時代のものか。799は杯Ｂ。高台の内側にはヘラ切り痕が残る。800は壺Ｋ。胴部の肩には薄く灰がかかり、内面にも開口部の直下に灰などの降着物が付着している。胴部側面はロクロナデののち、ロクロケズリで軽く整形しており、「二」字形のヘラ記号がある。

ii　SK320出土土器（Fig.61）

SK320は第１次調査区で検出した直径約2.0m、深さ約1.3mの土坑で、多量の炭が混じる埋土からは土師器、須恵器、土馬、金銅製飾金具などが出土した。出土土器はいずれも平安時代初頭のものである。なお、本土坑から出土した土馬（Fig.68-846）は本節Ⅰ項に載せる。

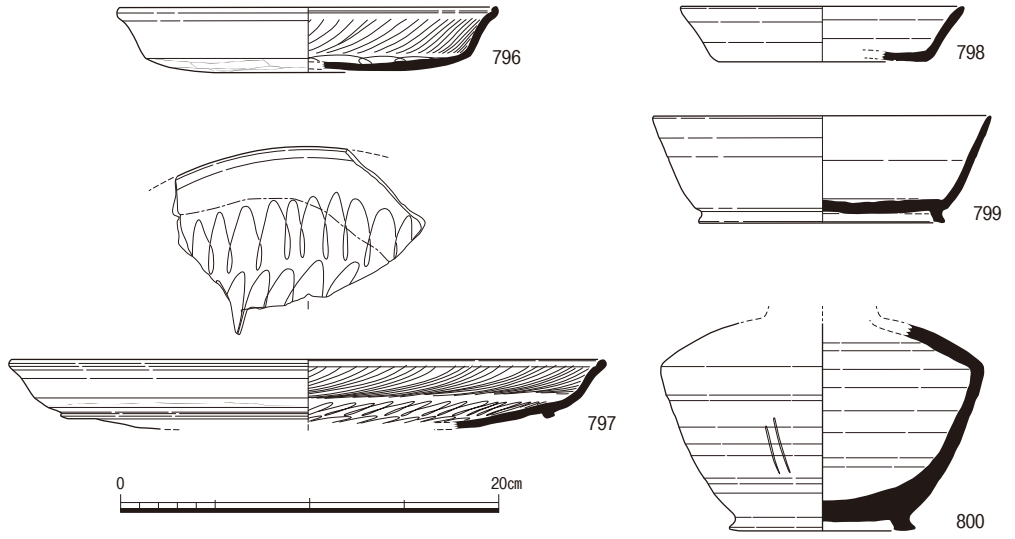


Fig. 60　NR310出土土器　1：4

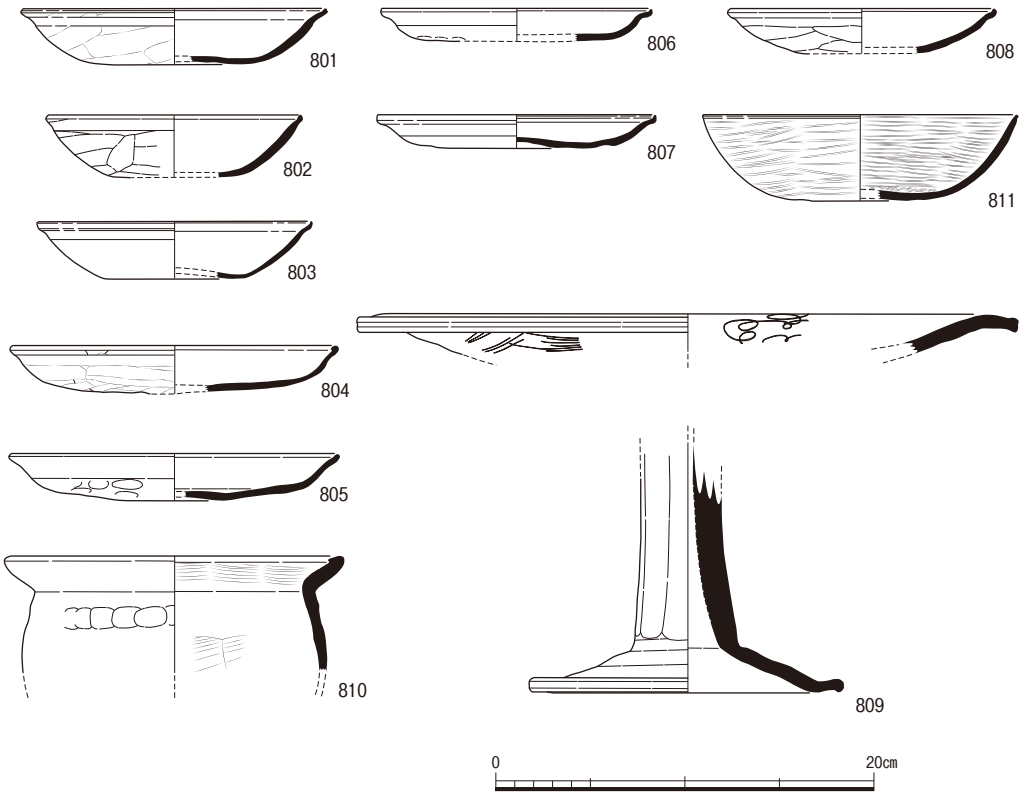


Fig. 61　SK320出土土器　1：4

土師器　　土師器食器には杯Ａ・皿Ａの２種類があり、これに高杯が加わる。杯Ａ・皿Ａともに、口縁端部を上方へと小さく摘み上げる個体が多く、器壁は概して薄い。801～803は杯Ａ。801・802は口縁部外面にヘラケズリを施すが、上半のヨコナデはくぼみとして残る。いっぽう、803は外面を不調整にとどめ、口縁端部のみをヨコナデで整える。

804～808は皿Ａ。口径17.5cm前後の皿ＡⅠ（804・805）と、14.5cm前後の皿ＡⅡ（807・808）とがある。806は口縁部がほぼ残らないが、皿ＡⅡであろう。804および808は底部外面を不定方向のヘラケズリで整形しているが、これら以外は不調整にとどめている。809は高杯Ａ。脚柱部と杯部片とがあり、同一個体とみられる。長い脚柱はその断面が九角形で、その内側には芯棒痕跡がある。杯部内面には螺旋暗文が残り、外面には粗いヘラミガキを施している。図示しないが、ほかに断面七角形の脚柱と、断面八角形の脚柱が１点ずつある。これらの土師器食器は、その器形・法量や調整手法からみて、９世紀半ばから後半にかけての土器群（平城京東三坊大路SD650A[39]を標式とする）とみられる。

９世紀の土器

810は甕。胴部下半から底部を欠いている。口縁部内面と胴部内面には横方向のハケ目が残るが、胴部外面にはユビオサエの痕跡が円環状にめぐる。

須恵器　　土坑埋土からは須恵器甕の胴部片が少量出土しているものの、食器類は出土していない。

黒色土器　　上に掲げた土師器食器には、黒色土器Ａ類の杯Ａ（811）がともなう。おもに内面に稠密なヘラミガキを施し、外面は暗褐色を呈する。胎土はやや砂質で、金雲母を含む。

E　東北系黒色土器

石神遺跡では、７世紀代の黒色土器が65点出土している。これらは出土時から、東北地方からもたらされた土器とされ、蝦夷が持ち込んだものとされてきた。つまり「斉明朝の饗宴施設」説を補強する材料として評価されてきたわけだが、これには異論もある[40]。また近年、石神遺跡出土の東北系黒色土器が、石神遺跡Ｂ期・Ｃ期の遺構から、飛鳥Ⅳ・Ⅴの土器とともに出土していることもあきらかとなった[41]。

本書の報告範囲ではSD640や、SK774からの出土例が３点含まれるものの、残余は「大土坑」や、第４次調査時の「褐色土」などから出土したものである。このうち、前者は調査の便宜上「大土坑」などと称して掘り下げているが、実際には整地土Ｂの一部であったと考えられる。以下、第３次・第４次調査区出土の16点をすべて掲出する（Fig.62）。

812～820は口縁部と底部との境界が屈曲し、明瞭な段差をもつもの。内面にヘラミガキを施したうえで黒色処理をおこない、底部外面はヘラケズリで整える。これらのうち、正確な口径がわかるのは813・814で、それぞれ14.6cm、15.2cmである。813の底部外面には黒斑がある。816は口縁部と底部との段差が不明瞭なもので、器壁はやや厚い。口縁部外面にもヘラミガキを施している。また、820は鉢のひらきが大きく、段差が明瞭である。これらの外面はにぶい橙色や、明褐灰色など、明るい色調が多い。813・819はSE800石組内、816・817はSD640、818はSK774からの出土だが、812・815は第４次調査の「褐色土」からの出土である。

821～823は内面にヘラミガキを施し、底部外面をヘラケズリで整えるが、口縁部と底部との境界に明瞭な段差をもたないもの。812～820に比し、ヘラケズリの範囲が広い。821・822は口径13.0cm前後、823は18.0cm前後とみられる。外面の色調は821がにぶい黄橙色、822が浅黄橙

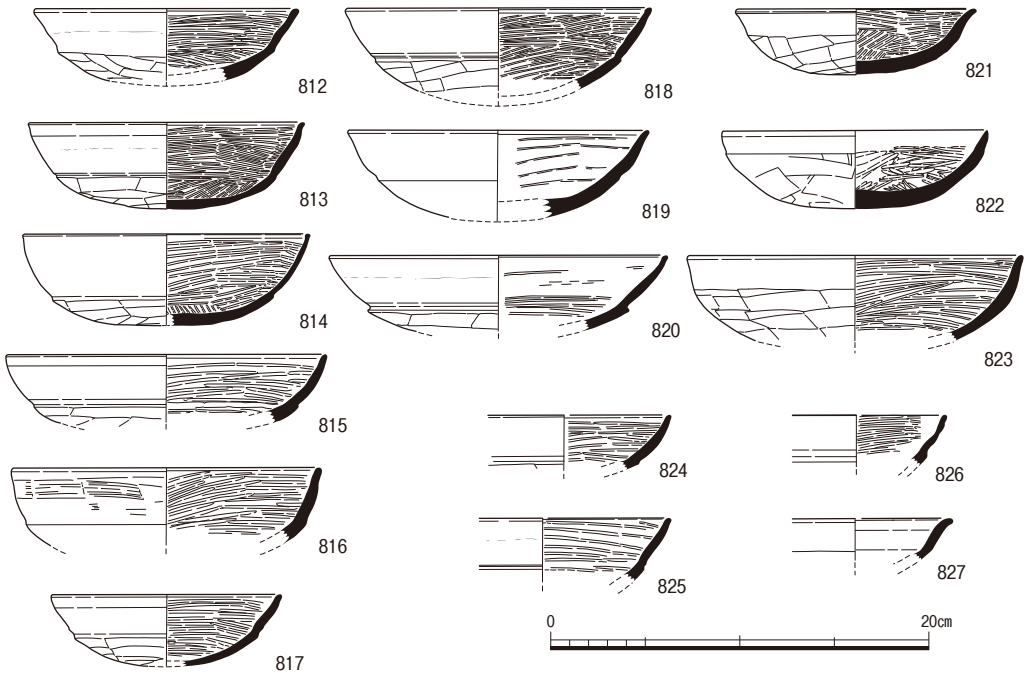


Fig. 62　第１～４次調査区出土の東北系黒色土器　1：4

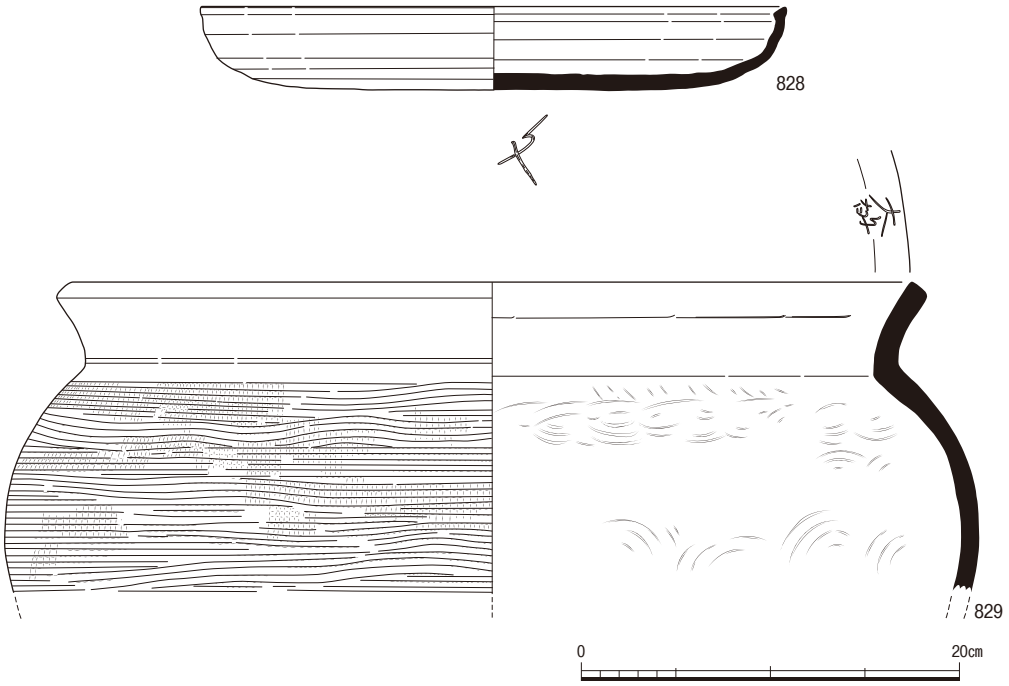


Fig. 63　刻書土器　1：4

色で、823はにぶい橙色である。

824～827は黒色土器の口縁部片で、口縁部に段をもつもの。特徴や色調は812～820に同じ。第４次調査の褐色土や「大土坑」から出土したものである。

F　刻書土器

石神遺跡第１次から第４次調査にかけては、刻書土器３点が出土している。本書ではこのうち、文字が判読できた２点を図示する（Fig.63）。なお、器表面にヘラ書きや針書きで、何らかの記号を刻んだ土器は、本節Ａ～Ｃ項で個別に記載している。

828は須恵器皿Ａで、尾張産のもの。底部外面をロクロケズリで整形したのち、中央部に「久」字をヘラ書きする（焼成前）。第４次調査のSD640出土。底部外面に「久」字を刻んだ須恵器杯は、第３次調査区のSD590でも出土している。829は須恵器甕Ｃで、その口縁部内面には「大□」との針書き（焼成後）がある。第３次調査のSD640出土。

G　陶　　硯

石神遺跡第１次から第４次調査にかけては、34点（14個体分）の陶硯が出土している。その内訳は蹄脚円面硯１個体、圏足円面硯８個体、獣脚硯１個体、中空円面硯１個体、不明１個体と、平安時代の風字硯２個体である。これらは細片化しており、同一個体片が第３次調査区から第５次調査区にかけて出土した例もある。以下、種類ごとに記載をおこなう（Fig.64）[42)]。

圏足円面硯　　硯部とそれを支える輪状の脚台とを一体で整形し、長方形や十字形の透かし孔を開口した円面硯。830は小型の圏足円面硯ａで、硯体側が残る。硯面の一部はやや摩滅している。第３次調査区の灰褐色土出土。831は圏足円面硯ａで、硯体側が残る。外堤と陸との間にはＶ字形の海が切り込み、硯面は摩耗している。第３次調査区の灰褐色土出土。832も硯体

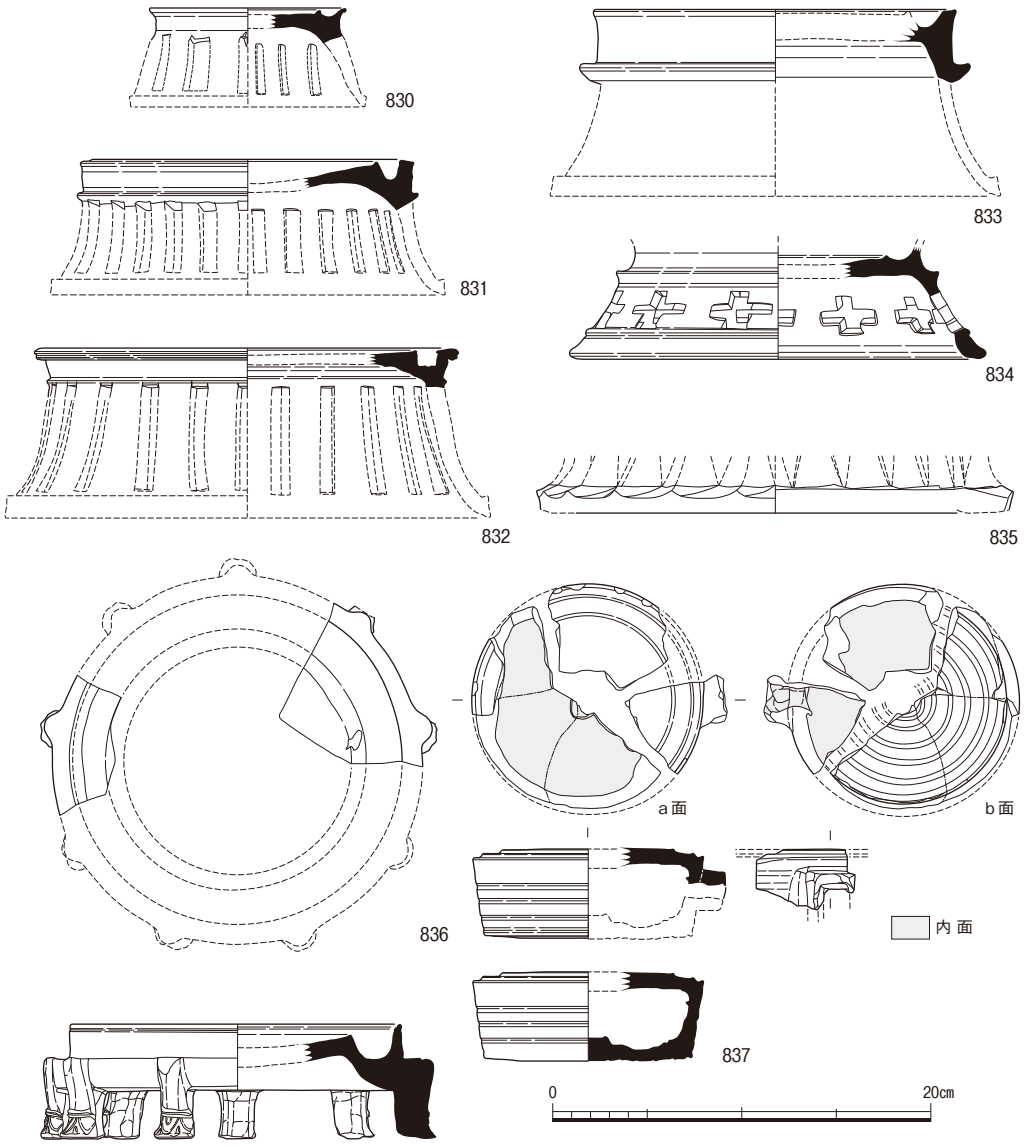


Fig. 64　第１～４次調査区出土の陶硯　1：4

側の破片で、脚柱４本分と、切削で開口した透かし孔が交互に並んでいる。硯面は摩耗している。833は圏足円面硯ａか。透かし孔の形状はわからないが、その上端にはヘラによる切削痕が残る。透かし孔の直上には凸帯をめぐらせており、その付け根と海の底に自然釉が残る。第４次調査区の褐色砂礫出土。834は４片からなるが、互いに接合しない。海と陸との境界には凸線をめぐらせ、この内堤より内側の硯面が摩耗している。脚台には十字形の透かし孔を開けている。脚台部の底面から硯部の内面にかけては降灰が認められることから、硯面に灰がかからないよう、底部を上向きにして焼成したものである。

蹄脚円面硯　835は蹄脚円面硯Ａ。脚柱は断面三角形で、その剝落痕が４つ、脚台部の上面に連接して残る。脚台部は環状で、内面・外面ともに横位のヘラケズリで整形している。透かし孔の底辺は脚柱の貼り付け後にヘラケズリで整形しており、下に凸の緩い円弧を描いている。UU27区（第４次調査）で出土。

獣脚円面硯　836は複数の獣脚で硯部を支える円面硯で、脚柱どうしを連結する環状の脚台をもたないもの（Fig.64-836）。硯体の下面中央部は浅い盤形をなし、その外縁に脚柱を貼り付

けている。脚柱の開き間隔は40°であるから、９本の脚柱で支えたものと復元できる。獣脚を模した脚柱は２本が現存し、型押しによる２条の凸線と、蹄を象ったような三角形文とを外向きに見せている。脚柱の両側面は縦方向のヘラケズリで整形しており、内側にはやや丸みのある稜角ができる。脚柱の底面から硯体の下面にかけて、濃緑色の自然釉が厚くかかる。

本例は第３次調査区の褐色土から１片、第４次調査区の褐色土から４片が、また第11次調査区からも１片が出土しており、胎土・色調や自然釉から、すべて同一個体とみられる。現在は脚柱とともに復元した状態にあるが、一部は破片のままで収蔵している。なお、本例を百済製品と推定した見解[43]もあるが、本書ではその正否を問わない。

中空円面硯

中空円面硯　太鼓形をなす体部の側面に開口し、把手を付した須恵器で、中空円面硯と呼ばれるもの。第４次調査区から第５次調査区にかけて、６片の同一個体片が出土し、一部が接合する。このうち、１片は第５次調査のSD640から出土したものだが、他の５片は第４次調査のSK773および褐色土・「大土坑」で出土している。このため本例は、本書で報告することにした（Fig.64-837）。以下、各部の名称は先行研究に拠る[44]。

本例は直径12.2㎝で、硯面（ａ面）には径9.0㎝の凸線をめぐらせて内外を区画しているが、陸と海との段差は明瞭でなく、外堤も微弱である。また硯面には、摩耗や墨痕は認められない。これに対し、沈線を６重にめぐらせた底面（ｂ面）のほうは軽く摩滅しており、こちら側で墨を磨った可能性がある。硯体の側面には３本の沈線をめぐらせたのち、外方からの切削で開孔し、断面四角形で中空の「把手」を貼り付けている。下面には火襷がある。なお石神遺跡では、ほかに第13次調査でも中空円面硯が出土している[45]。

風字硯　第２・３次調査区で出土したものが２点あり、いずれも平安時代に降る（Fig.65）。838は陸側の左脚付近の破片で、全体の約３分の１が残る。硯面の内外面に稠密なヘラミガキをくわえ、黒化処理を施している。硯面は緩やかに弯曲し、その中央部は墨を磨ることで摩耗しているが、外縁寄りはヘラミガキの光沢をとどめている。支脚は雲形で、底部のヘラミガキ後に貼り付けたもの。色調は内外面ともに黒色を呈する。褐色砂質土（第２次調査区）から出土。839は手前側を中心に約２分の１が残り、外面と側面にはヘラケズリ痕がある。ほぼ平坦な硯面の中央部はやや摩耗している。底部には支脚の剝離痕が２つ残る。色調は灰白色を呈する。奈良時代から平安時代の流路NR310（第３次調査区）の灰褐色粗砂から出土。

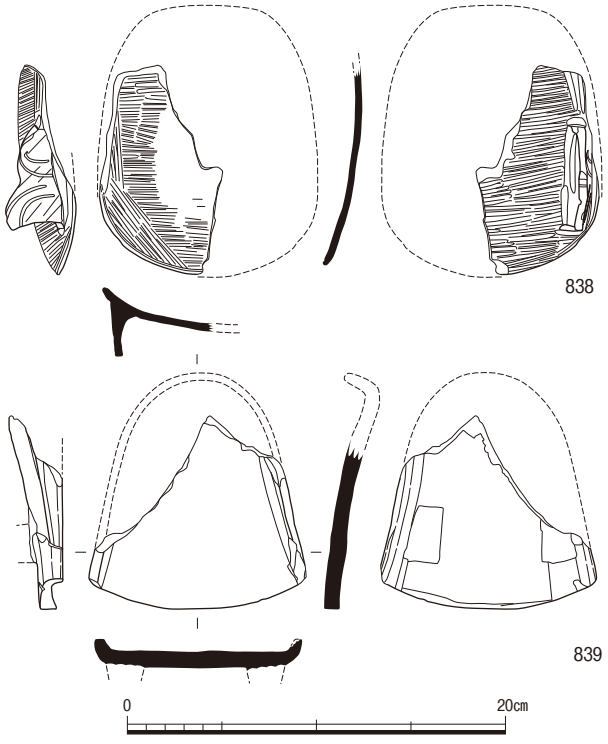


Fig. 65　第２・３次調査区出土の風字硯　１：４

H　新羅土器

石神遺跡第３・４次調査区では、新羅産の印花文土器が２個体分出土している（Fig.66）。いずれも細片化しており、整地土や包含層から出土した破片が大多数を占めるが、石神遺跡の出土遺物の中でも特筆すべきものである。本書ではこれらの出土状況にも鑑み、遺構別・層位ごとではなく、新羅土器というまとまりで報告をおこなう。

840は盤口壺の頸部。復元口径10.4cmで、その特徴的な口縁部には２本の、頸部には３本の沈線がめぐる。後述の841とは異なり、口縁端部を上方へと小さく摘み上げる点が異なる。色調は灰色で、口縁部内面には灰緑色の自然釉が付着する。SE800石敷の底石抜取穴埋土出土。

841は盤口壺で、新羅土器の出土例として広く知られたものであるが、頸部から体部・底部までの同一個体片を用いて、１個体に復元したものである[46)]。口縁部の外端径は11.9cm（実測値）

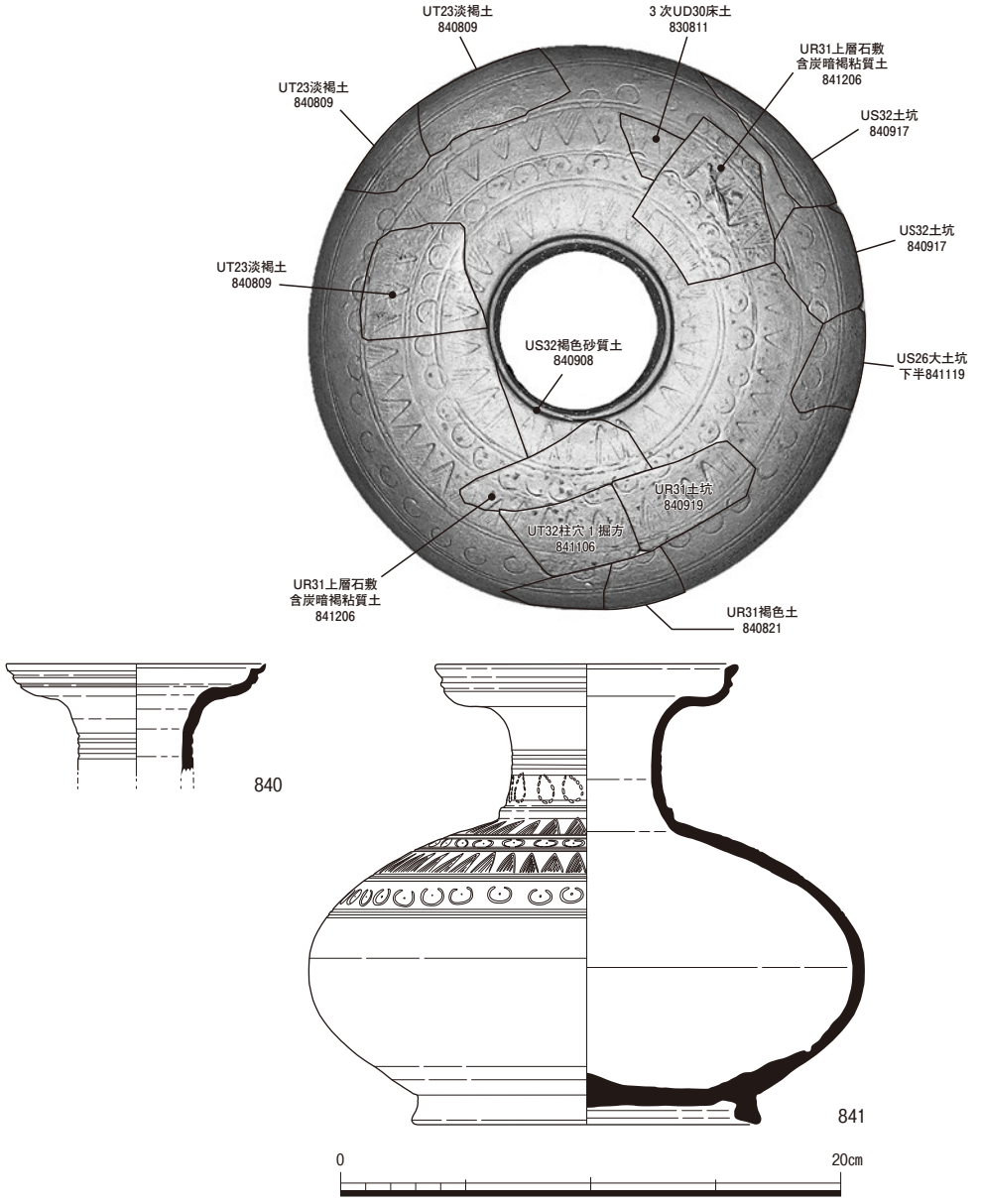


Fig. 66　第３・４次調査区出土の新羅土器　1：3

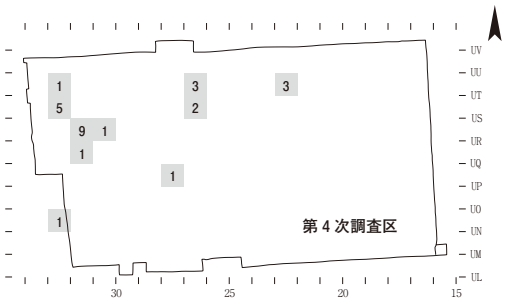


Fig. 67　新羅土器の分布　1：1,000

で、その盤口の外面には２本の沈線がめぐる。口縁端部にはやや内傾する平坦面があり、840とはおさめ方が異なる。頸部の中位には２本の沈線を、頸部の付け根にも１本の沈線を配し、その間を涙滴形の列点文で埋めている。扁球形をなす体部の上半から頸部の付け根にかけて、２本一組の圏線を４重にめぐらせ、文様帯を４分割している。下から１・３段目の文様帯には直径1.0㎝のコンパス文を、２・４段目には高さ1.7㎝、底辺0.9㎝の鋸歯文（その内側は左下がりの刻線４本で埋める）を横位に押印する。３段目のコンパス文のうち、一部は幅狭の文様帯からやや逸脱し、下方の圏線と、２段目に配した鋸歯文の頂部を潰している。また、下から４段目の鋸歯文も下方の圏線に重複し、これより新しい。圏線を引いて文様帯を分割したのち、下方から順に印花文を押印したものと考えられる。高台は外端で接地し、底部の整形はロクロケズリによる。色調は体部内面が灰白色で、口縁部や頸部、体部上半にかけては灰緑色の自然釉がかかる。とくに盤口内側に降着した自然釉は露滴状を呈する。意図的に施釉した形跡はなく、目跡も認められないが、高台の接地面に陶片の一部が付着する。復元後のため、内面の観察は一部に限られるが、底部中央には灰緑色の自然釉が降着している。

新羅土器の分布範囲

Fig.67に示すように、841の同一個体片はおもに第４次調査区の西半で出土しており、出土層位も床土（第３次調査区）から淡褐色土・褐色土（第４次調査区）のほか、遺構番号を付していない複数の「土坑」「大土坑」に分かれている。後二者は第４次調査時に、褐色土の最下部を土坑・大土坑と称して掘り下げたときに出土した陶器片と推定される。したがって、そこから出土した新羅土器片も、整地土Ｂ相当層に包含されていたものと考えられる。Ⅰ期の遺構からは出土していない。

Ⅰ　土製品

ⅰ　土　　馬（Fig.68）

本書の報告範囲では、12点の土馬が出土している。内訳は脚部片が５点、胴部片が５点、頸部・頭部片が２点である。このうち、第１次調査区で出土したものが７点を占め、第３次調査区で３点、第４次調査区で２点が出土している。本書では胴部片と頭部片の６点を載せる。

842は土馬の頸部から頭部までが残り、粘土円板を折り曲げて作り出した頭部には竹管で目を表現する。手綱の表現はみられず、扁平に作る頸部の背側を薄く仕上げて鬣を表現している。NR310（第１次調査区）出土。843も土馬の頭部で、粘土円板を折り曲げ、側面が半月形をなす頭部を作り出したもの。灰褐色粘質土（第３次調査区）出土。844は胴部のみが残る。鞍や手綱の表現はみられない。四肢の間には前脚の間から尻尾の付け根にかけて、ひと筋の強いナデ痕跡が残る。845も四肢と頭部を欠くが、後上方へと延びる尻尾はほぼ残っている。本例にも鞍や手綱の表現はない。いずれも第１次調査区の暗褐色土出土。これら４点は奈良時代の土馬である。846・847は胴部が完存するものの、四肢の端部と頸部・尻尾を欠く。前脚・後脚は「ハ」字形にひらき、尻尾は後上方へと伸びる。846は第１次調査区のSK320から、847は第１次調査

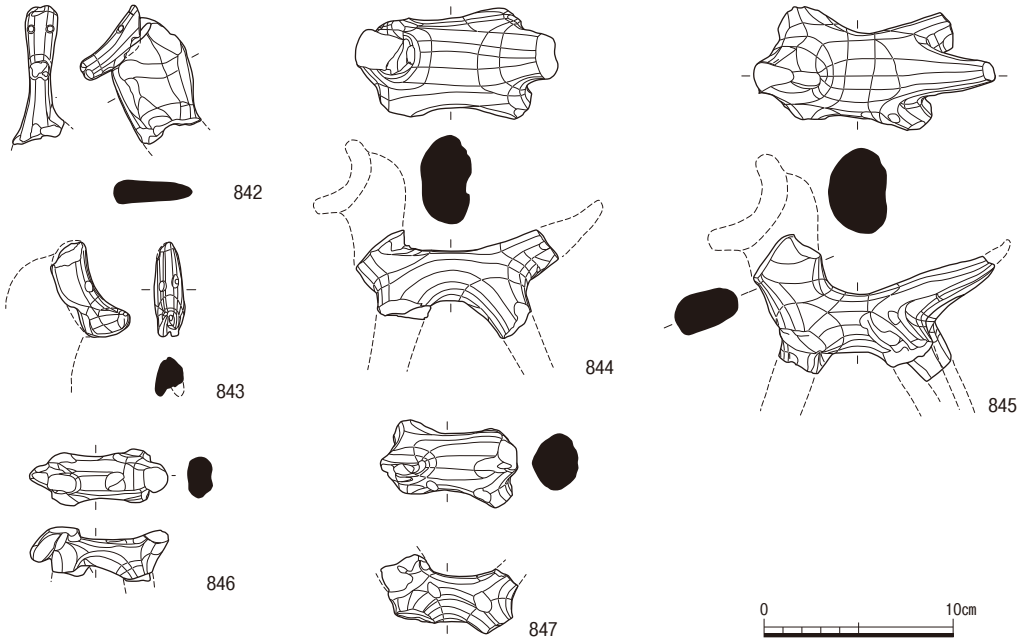


Fig. 68　第１・３次調査区出土の土馬　1：4

区南端の東西溝SD323から出土したもので、いずれも平安時代に降る。

ii　土製円板（Fig.69）

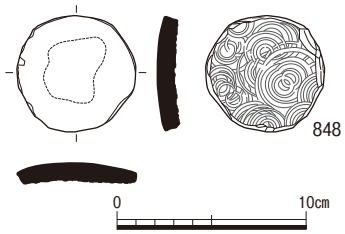


Fig. 69　土製円板　1：4

石神遺跡第１次から第４次調査にかけて出土した土製円板は、全部で19点を数える。土師質の有孔円板は２点あり、土師器の円板は８点、須恵器の円板は９点である。土師器は甕胴部片を用いたものが多いが、杯Ａの口縁部片や、杯類の底部片を丸く打ち欠いたものもある。須恵器も甕胴部片を素材とする例が多い。土師器・須恵器の両方とも、側縁は打ち欠いたままにとどめる例と、その後研磨して角を丸くおさめた例とがある。研磨は鋸歯状縁の凸端を滑らかにした程度で、打ち欠きのくぼみをそのままに残す場合が多いが、須恵器甕の胴部片を素材とした例では、側面を丁寧に磨いて平滑に仕上げている。以下、土製円板の代表例を掲出しておく。なお、瓦製の円板は本章２節に掲出する。

848は須恵器甕の胴部片を素材とする。凸面側が外面にあたり、中央部のタタキ目は摩耗によって消去している。凹面側には当て具痕が残る。側面は研磨によって角が取れており、輪郭は円形を呈する。井戸SE800井戸枠内の最下層にあたる砂混灰褐色粘質土からの出土。

J　古墳時代の土器

i　SI315出土土器（Fig.70）

SI315は第１次調査区で検出した古墳時代の竪穴建物で、その西南隅付近に「カマド址」と目される焼土SX313があり、そのすぐ東南側には「貯蔵穴」とされる小土坑SX312がある。また、西北隅近くにも小土坑SX314がある。SX312からは土師器杯、須恵器杯Ｈ身、製塩土器片が出土したほか、その東側およそ1.0mの住居址埋土から土師器甑が出土した。このほか、竪

竪穴建物埋土の土器



Fig. 70　SB315出土土器　1：4

穴埋土からは土師器高杯の脚部片や、土師器甕の口縁部・胴部片が出土している。

土師器　849は小型丸底土器。胴部のおよそ4分の1が残る。胴部外面の下半にはハケメがごく薄く残るが、上半には指頭圧痕が残る。内面に横方向のヘラケズリを施し、器壁の厚みを減じている。上ノ井手遺跡SE030上層出土例（小型丸底土器Db類[47]）に似る。850はSX312から出土した杯の小片。底部から口縁部にかけては半球形で、口縁端部がヨコナデによりやや屈曲する。底部外面は不調整とみられる。

853は土師器甑で、SI315の西南隅付近で、竪穴の埋土から出土したもの。その器形は裁頭砲弾形で、胴部外面は下端から口縁端部にかけて縦方向のハケで仕上げている。内面には右下方から左上方へと弓なりに掻き上げたヘラケズリの痕跡が明瞭に残り、口縁部近くには斜め方向のハケ目も残存している。胴部中位のやや下寄りには一対の角状把手があり、この把手を挿入するために刳り抜いた孔の縁がわずかに残るが、そのほとんどは内面のヘラケズリで消去されている。底部中央に蒸気孔を1つ穿ち、その四周に長径4.0～5.0cmの蒸気孔を4つ刳り抜いている。ススは確認できない。

須恵器　851は杯H蓋。口径12.0cmで、頂部中央にロクロケズリを施す。852は杯H身。復元口径10.0cmで、その外端径は12.0cm程度。立ち上がり高は受部から2.0cmで、端部は面をなし内傾している。底部のほとんどを欠くが、一部にロクロケズリ痕が残り、回転は右回り。和泉陶邑窯TK23またはTK47型式に属する[48]。竪穴建物西南隅のSX312出土。

製塩土器　SI315西南隅のSX312からは製塩土器片が出土しているものの、細片化しており図化に耐えない。器表面の色調は灰白色ないしは橙色で、胎土には赤褐色のクサリ礫粒（＜7㎜）を含んでいる。器壁がごく薄い小片ばかりで、接合はできないが、本来は1個体か。

ii　SK405出土土器（PL.29）

SK405は第2次調査区の東部で検出した古墳時代の土坑で、竪穴建物SI315とともに、古墳時代集落の西端付近に位置する。調査時には「祭祀土坑」と呼んでいたことが、取上ラベルからうかがえる。埋土からは土師器高杯を中心とする5世紀代の土器が多数出土している。

土師器　854～863は高杯のうち、口縁部が内弯気味に立ち上がるもの。脚部の上端を杯部に

差し込み、結合部に粘土を付け足して接合している。脚柱部内面には成形時の絞り目が縦皺として残り、854～857・859～861・863は杯部側に、芯棒を差し込んだ小孔をとどめている。脚裾部はナデで整えるが、858は内面にユビオサエの凹凸を残している。これらのうち、854～857・859～861は橙色または明赤褐色を呈しており、赤味が強い。これに対し、858・862はやや褐色を帯び、胎土に石英・長石や雲母を含んでいる点で区別される。862は脚柱部に透孔を２つ開ける。

865～869は高杯の脚部。854～863と同様に、その内面には成形時の絞り目が残る。866は色調や胎土の特徴が858・862と共通している。なお、867の脚裾部内面にはハケ目が残る。864は口縁部が逆台形にひらくが、底部との間の稜線が不明瞭な高杯。杯部の外面下端付近には縦方向のハケ目がわずかに残る。脚部の内面はヘラケズリによる。色調はにぶい橙色である。

870・871は高杯のうち、口縁部と底部との境界が屈曲し、口縁部が外上方へと外反するもの。870の内面には松葉状の暗文を放射状にめぐらせている。脚部は脱落しているが、杯部の底部外面には芯棒痕跡が残る。871は口縁部外面にハケ目をとどめる。872・873はこれらの脚部とみられ、脚柱部の下寄りに透孔を１つ開けるもの。脚柱部内面は右回りのヘラケズリで整えている。透孔はこのヘラケズリ後に開口する。

874～876は小型の甕。874は口縁部が外反気味で、口径12.0cm。胴部内面はナデによるが、横方向のハケ目もわずかに残る。875・876は口縁端部に内傾面をもつもので、胴部外面はハケで整え、内面には指頭圧痕を残す。876は明赤褐色で、内面にはコゲが薄く付着する。

877・878は小型壺。扁球形の胴部に外方へとややひらく口縁部を付しており、胴部外面はハケで調整する。胴部最大径はいずれも15cmである。877は口縁部を欠くが、底部内面はハケで整える。878の口縁部には縦方向のヘラミガキを施し、胴部内面はヘラケズリで整える。

須恵器　879～881は杯Ｈとその蓋。879は杯蓋で、口径11.0～12.0cm。880・881は杯身で、口径は880が10.6～10.8cm、外端径12.6～12.9cm。881は完形品である。口縁部の立ち上がりはともに1.7cmで、880の端部には内傾面がある。底部外面はロクロケズリで、881は右回り。これらは和泉陶邑窯TK23またはTK47型式に属している[49]。

882・883は高杯。口縁部と底部との境界には稜線をめぐらせており、喇叭形にひらく脚部を杯部に貼り付けている。杯部はロクロナデで仕上げ、底部外面はロクロケズリ。884は鼈。その上半を欠く口縁部には波状文をめぐらせる。また、胴部中位には２条の沈線をめぐらせ、その間を波状文で埋めてから、沈線間に直径1.2cmの孔を穿つ。底部外面には「卅」形のヘラ書きがある。885は甕の口縁部。その外面にはやや尖り気味に垂下する凸帯と細い凸線とをめぐらせ、その間を波状文で埋める。

Ｋ　中世の土器

ｉ　SE455出土土器（Fig.71）

SE455は第２次調査区の東北部で検出した石組井戸である。石組埋土からは13・14世紀代の土師器・瓦器が出土した。ここでは出土土器のうち、図示できる個体を掲出しておく。

土師器　小皿と土釜とからなり、これら以外を含まない。小皿には①口径8.0cm前後で扁平なもの（886～891）と、②底部中央が上げ底となるもの（892）、そして③口縁部が強いヨコナ

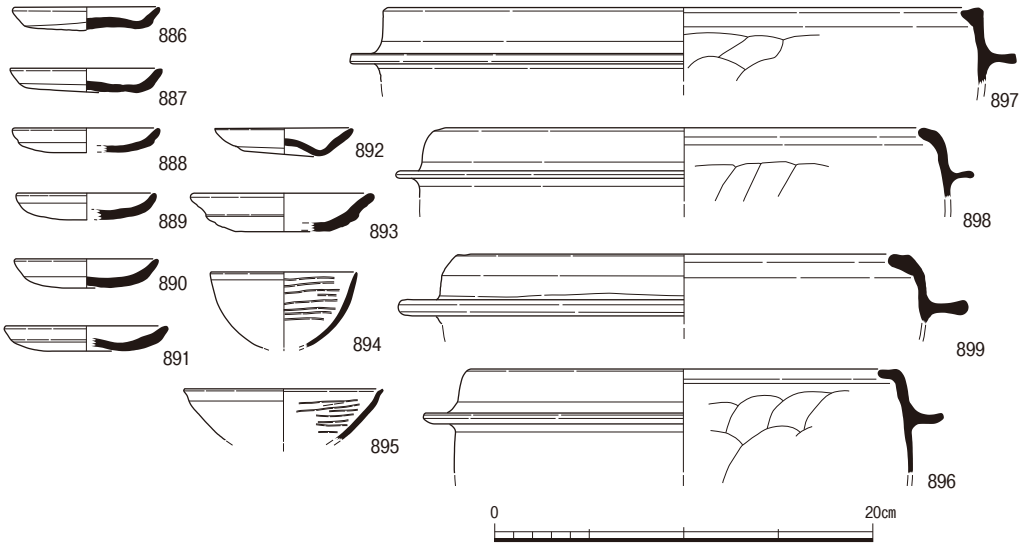


Fig. 71　SE455出土土器　1：4

デにより外反するもの（893）がある。近年公表された興福寺系土師器皿の分類[50]によると、①・③は土師器皿Ｄ類、②は同Ｆ類にあたる。このうち、最も出土量が多いのが①である。この一群に属している886～891は短く立ち上がる口縁部と、扁平な底部とからなり、底部外面にユビオサエや粘土接合痕を残す。１段のヨコナデが口縁部をめぐり、底部との境界に段差が生じたものがある。色調はにぶい橙色で、胎土には石英・長石を疎らに含む。これに対し、892はいわゆる「へそ皿」に類し、色調はにぶい褐色を呈する。

土釜（896～899）は大部分が大和Ｈ型[51]に属している。897の肩部には幅1.2cmの鍔を付し、内面には円形圧痕が重なりつつ残る。898はH3型で、口縁端部が凹面をなすもの。幅1.0cmの鍔をめぐらせる。899は口縁部を内側に折り畳んで肥厚させたもので、内面に折り目が見える。口径22.5cmで、幅2.0cmの鍔をめぐらせる。胴部の器壁が薄く、鍔より下半を欠く。

興福寺系土師器皿の編年を参考にすると、土師器小皿はⅡ-Ｇ期（1290～1380年頃）に属するか。ただしSE455では、これらの小皿にともなう大皿（口径10～12cm）は出土していない。

瓦　器　　小片のみだが、ここでは瓦器椀２個体を示す。894は復元口径7.7cmで、器形が半球形を呈するもの、内面の圏線ヘラミガキは粗く、外面のヘラミガキは確認できない。底部を欠くものの、川越俊一による瓦器椀の編年案では第Ⅳ段階に属する[52]。895は復元口径10.6cmで、見込みの圏線ヘラミガキは粗く、外面のヘラミガキは確認できない。川越編年では第Ⅲ段階Ｅ型式のもの。このほか、瓦質土器の擂鉢片と、須恵器片が少量出土している。

ii　SX344・SX350周辺出土土器（Fig.72）

第１次調査区は、明治35・36年に須弥山石および石人像が出土した水田にあたる。これら石造物の出土地付近は、石田茂作の発掘調査によってすでに調査済であったため、その原状はとどめていなかったが、飛鳥287番地西北部で花崗岩石造物の痕跡SX350・SX344を確認した。これら石造物痕跡の近くでは、ごく少量の土器片が出土している。いずれも小片だが、石造物が埋没した時期を示す可能性があるため、ここにそれらを掲載する。

900～902は土師器皿。900は口縁部の小破片。底部を欠くものの、その器形は土師器皿Ｄ類[53]

に属し、室町時代（15・16世紀頃）のものとみられる。SX344出土。901は口縁端部を上方へと小さく摘み上げた「て」の字状口縁の小片である。その器形から11世紀後半から12世紀前半のもの。902は口縁部の小片で、器壁が薄い。南都における平安時代前半期の事例[54]に照らせば、およそ10世紀代のものであろう。901・902はSX350出土。903は土師器杯Ｃの口縁部片とみられるが、その内面に暗文は確認できない。SX350周辺出土。これ以外には須弥山石抜取穴埋土から、瀬戸焼の卸皿や土師器皿小片が出土している。

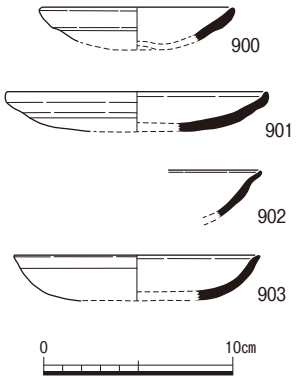


Fig. 72　SX350等出土土器
1：4

1）「ニコ土」とは飛鳥地域にてシルト質土を指す言葉である。
2）石田茂作「飛鳥の須弥山遺跡」『飛鳥随想』162-163頁、学生社、1972年。
3）奈文研『藤原京右京七条一坊西南坪発掘調査報告』1987年では、「SD4955出土土器」の項目（14頁）において、飛鳥Ⅰの土師器杯Ｇをａ～ｃ類に細分している。
4）前掲註３）参照。
5）『年報1997-Ⅱ』。
6）『藤原概報25』1995年。
7）『紀要2010』。
8）小笠原好彦「近畿地域の七・八世紀の土師器とその流通」『考古学研究』27-２、1980年。
9）『山田寺報告』335頁。
10）西口壽生「石神遺跡SE800出土土器の再検討」『年報1997-Ⅰ』。
11）71～73は、『藤原報告Ⅴ』別表３（478・479頁）にて「壺Ａ」（31）とされた個体を含むが、薬壺形の須恵器壺Ａと区別しておくために、本書ではこれらを単に短頸壺と称する。
12）神野 恵・村田泰輔・金田明大「須恵器の墨ぼかしは「炭」ぼかし」『紀要2020』。
13）徳網克己「西河原遺跡群とその周辺」『琵琶湖と地域文化―林博道先生退任記念論集』2011年。
14）「石神遺跡（第19・20次）の調査―第145・150次」『紀要2008』。
15）第１次調査時の取上土層名は「黄灰褐土」、第２次調査のときは「黄灰土」である。
16）「甘樫丘東麓の調査」『藤原概報25』1995年所載の須恵器杯Ｈ身（Fig.72-33）。
17）前掲註14）文献の図122-50。
18）森川 実・大澤正吾「石神遺跡Ｂ期整地土・SD640出土の土器群―石神遺跡第３～５次・第10～12次」『紀要2018』、146頁参照。
19）第３次調査日誌では「黄色粘質土」、「黄色粘土混バラス層」、「黄味がかった砂質土」、「黄色粘土」、「黄褐粘土」、「黄色整地土」、「黄味を帯びた粘土」などの名称で言及がある。
20）第３次調査区西壁土層図を参照すると、「茶褐砂質土」・「暗茶褐砂質土」およびこの直下の「バラス混り暗茶褐砂質土」の堆積状況を確認できる。これらの土層がそれぞれ灰褐色土とバラス混じり灰褐色土に相当するのであろう。
21）「石神遺跡第４次調査」『藤原概報15』1985年。
22）第４次調査では、「褐色土」は遺物包含層（上部）と整地土（下部）とを一括した土層であった可能性がある。その土層図では、北壁で「褐色土」と「土器片と炭が混じる褐色土」（「整地土」と付記）を、南壁でも「暗褐土」と「含炭暗褐土」とを区別しているからである。しかしながら、「褐色土」の上部と下部とで出土土器を区別することはできない。
23）尾野善裕「飛鳥時代宮都土器編年の再編に向けて―飛鳥・藤原地域を中心に―」『飛鳥時代の土器編年再考』奈文研・歴史土器研究会共催シンポジウム資料集、2019年。
24）例えば『藤原京右京一条一坊発掘調査報告』では、無暗文のそれ（fig.9-56）を「杯Ｄ」と呼ぶが、『飛鳥池報告　本文編〔Ⅱ〕土器・土製品』（奈文研2022）では、「平底から弧を描いて内彎気味に立ち上がる口縁部の端部が丸く内肥厚」する一段暗文の土師器食器を「杯Ｄ」と呼

んでいる。SD640出土例は、後者を参考にしつつ「杯Ｄ」として分類記載をおこなう。

25）別表にも示したように、本書でいう土師器杯Ｊは、かつて『藤原報告Ⅱ』で「杯Ｇ」として報告したものと同じである。1980年代以降、新たに杯Ga～Gc類という３種類の粗製杯が識別されるにおよび、杯Ｇという器種は多様な粗製杯の集合体と化したが、本書ではこれらを一緒に報告するために、その概念を整理する必要が生じた。そこで、考古第二研究室の研究員（令和５年度当時）が審議した結果、旧・杯Ｇを杯Ｊと呼び替えることとした。

26）前掲註３）文献。

27）前掲註３）文献。

28）小笠原、前掲註８）論文。

29）加藤雅士「把手つけたはなし―使用痕跡からみた７世紀後半、飛鳥・藤原の煮炊具―」『吾々の考古学』、和田晴吾先生還暦紀年論集刊行会、2008年。

30）尾野善裕・森川　実・大澤正吾「飛鳥地域出土の湖西窯産須恵器」『紀要2017』。

31）森川 実「古代の陶臼」『古代文化』73-１、2019年、古代學協会。

32）奈文研『藤原京右京一条一坊発掘調査報告』1997年。

33）高橋 透「藤原宮東面内濠SD2300出土土器（１）―第24次調査から」『紀要2012』。

34）小笠原、前掲註８）論文。

35）同様の特徴をもつ土師器甕は、三重県伊賀市北堀池遺跡（『北堀池遺跡発掘調査報告』三重県教育委員会、1980年）や、同市森脇遺跡（『研究紀要』12―森脇遺跡―三重県埋蔵文化財センター、2002年）でも出土している。このように伊賀地域は、飛鳥地域から見るといわゆる近江型甕の分布圏としてもっとも近い位置にある。

36）本例は『藤原報告Ⅴ』別表３　７世紀の須恵器の器種（478・479頁）にて「壺Ｂ」（32）とされたが、その典型例である石神遺跡第５次調査出土例（33：「瓮五十戸」刻書あり）と区別しておくために、本書では単に広口の須恵器壺と称する。

37）森川 実「飛鳥時代における須恵器食器の法量変化」『飛鳥時代の土器編年再考』奈文研・歴史土器研究会共催シンポジウム資料集、2019年。

38）奈文研『平城報告Ⅶ―内裏北外郭の調査―』奈文研学報第26冊、1976年。

39）奈文研『平城報告Ⅵ―平城京左京一条三坊の調査―』奈文研学報第23冊、1975年。

40）重見 泰「石神遺跡の再検討―中大兄皇子と小墾田宮」『考古学雑誌』91-１、2007年。

41）土橋明梨紗「石神遺跡出土の東北系黒色土器―石神遺跡第３～８・11次ほか」『紀要2020』。

42）陶硯の種類と各部名称は、奈文研『平城京出土陶硯集成Ⅰ―平城宮跡―』2006年に拠った。

43）千田剛道「獣脚硯にみる百済・新羅と日本」『文化財論叢Ⅱ』1995年。

44）菊井佳弥「中空円面硯小考」『大阪文化財論集Ⅱ』2002年。

45）「石神遺跡の調査―第110次」『紀要2001』。この事例は、硯面の内堤内側が顕著に摩耗し、複数の線状痕も認められることから、やはり陶硯として用いたものであろう。

46）本書では1980年代に作成した復元前の実測図にくわえ、復元後の三次元計測にもとづく上面観も示すが、後者の文様配置は、復元時の考証に基づいていることを付け加えておく。

47）安達厚三・木下正史「飛鳥地域出土の古式土師器」『考古学雑誌』60-２、1974年。

48）平安学園考古学クラブ『陶邑古窯址群Ⅰ』1966年。

49）前掲註48）文献参照。

50）神野 恵「土器・陶磁器」『名勝旧大乗院庭園発掘調査報告』奈文研学報第97冊、2018年。

51）菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』奈文研創立30周年記念論文集、同朋舎、1982年。

52）川越俊一「大和地方出土の瓦器をめぐる二、三の問題」『文化財論叢』奈文研創立30周年記念論文集、同朋舎、1982年。

53）以下、土師器皿類の分類は、奈文研『名勝旧大乗院庭園発掘調査報告　本文編』2018年の「Fig.43　土師器皿の分類と消長」に掲出のものに準じる。

54）森下恵介・立石堅志「大和北部における中近世土器の様相―奈良市内出土資料を中心として―」『奈良市埋蔵文化財センター紀要1986』1986年、奈良市教育委員会、および三好美穂「南都における平安時代前半期の土器様相―土師器の供膳形態を中心とした分類試案―」『奈良市埋蔵文化財センター紀要1995』1995年、奈良市教育委員会。

第2節　瓦 製 品

第１～４次調査区から出土した瓦は、軒丸瓦155点、軒平瓦９点、垂木先瓦１点、丸瓦381点（49.63kg）、平瓦1,715点（116.19kg）である[1)]。これらに加え、瓦製円板を９点報告する。軒瓦の型式名については、石神遺跡の中で一貫した番号は付さず、飛鳥・藤原地域の軒瓦は花谷浩の分類[2)]に、平城宮・京の軒瓦は『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』の記載[3)]に準じて報告する。丸瓦・平瓦については、今回、石神遺跡の中で一貫した番号を付して報告する。出土遺構・層位については、特定できた情報のみを記し、それ以外の場合は出土調査区を記載する。

A　軒 丸 瓦

素弁蓮華文10型式、複弁蓮華文５型式が出土した。型式不明のものを含め、６世紀末から７世紀前半の素弁蓮華文軒丸瓦が106点と、軒丸瓦全体の約７割を占める。

ⅰ　素弁蓮華文軒丸瓦

素弁蓮華文軒丸瓦は、瓦当文様から大きく４つの系統に分けられる。第一は、弁端中央に桜花状の切れ込みを入れて反転を表現した、いわゆる弁端切り込み式の一群である。飛鳥寺Ⅰ・Ⅵ・Ａ型式および石神Ｆ型式が該当する。第二は、弁端に点珠を置いて反転を表現した弁端点珠式の瓦で、飛鳥寺Ⅲ型式が該当する。第三は、剣先形を呈した８弁を幾何学的に割り付け、その弁端に点珠を置く角端点珠式の一群である。石神Ａ・Ｂ・Ｄ・Ｅ型式が該当する。第四は、８弁を均等に割り付け、やや肉厚な蓮弁の先端が肥厚して稜をなす船橋廃寺式の軒丸瓦である。同笵例はないが１点のみの出土であるため、型式番号は付していない。

ａ　弁端切り込み式

飛鳥寺Ⅰ型式（Fig.73-１・２・５，Ph.49-１・２）　飛鳥寺創建瓦を代表する型式で、「花組」瓦工の所産[4)]。蓮弁は10弁、蓮子は１＋５。蓮弁は長めで、弁端は丸みを帯びる。桜花状の切れ込みが明瞭。間弁先端は盛り上がって左右に大きく広がる。外縁と弁区の間に、幅0.4cm程の断面U字状の空間がある。笵は笵端が側面に被る笵型Ａ（毛利光俊彦による分類[5)]）で、丸瓦部は無段式（行基式）。飛鳥寺以外では、飛鳥池遺跡・飛鳥池東方遺跡・豊浦寺跡・平吉遺跡・古宮遺跡・和田廃寺・高麗寺跡などに同笵例がある[6)]。　飛鳥寺Ⅰ型式

これまでに２度の彫り直しが確認されている[7)]。彫り直し前のⅠ型式ａが３点、主に蓮子や中房周囲を彫り直したⅠ型式ｂが２点、彫り直しの段階が不明のものが15点出土した。１・２はⅠ型式ａ。蓮子が小粒で、中房は浅く窪む。１は瓦当厚[8)]1.3cm。蓮弁Ａ（花谷浩の設定[9)]に従う）の弁端に三角形の笵傷がある。瓦当裏面はナデにより平坦に仕上げる。精良な胎土に１㎜未満の砂粒をわずかに含む。やや軟質で、内・外面ともににぶい赤褐色である。第１次調査区包含層出土。２は瓦当厚0.8cm。笵に粘土を詰めた際に生じた凹凸を瓦当裏面に残す。胎土に１㎜程の砂粒を含む。やや軟質で、内・外面ともに橙色である。第３次調査区包含層出土。５はⅠ型式ｂ。彫り直しにより蓮子が大きくなり、中房に圏線がめぐる。蓮子周辺や間弁[10)]ｅ・ｇ（花谷浩の設定[11)]に従う）沿いに笵傷が目立つ。瓦当厚は2.0cm前後。丸瓦先端の凸面側を斜めにヘラ

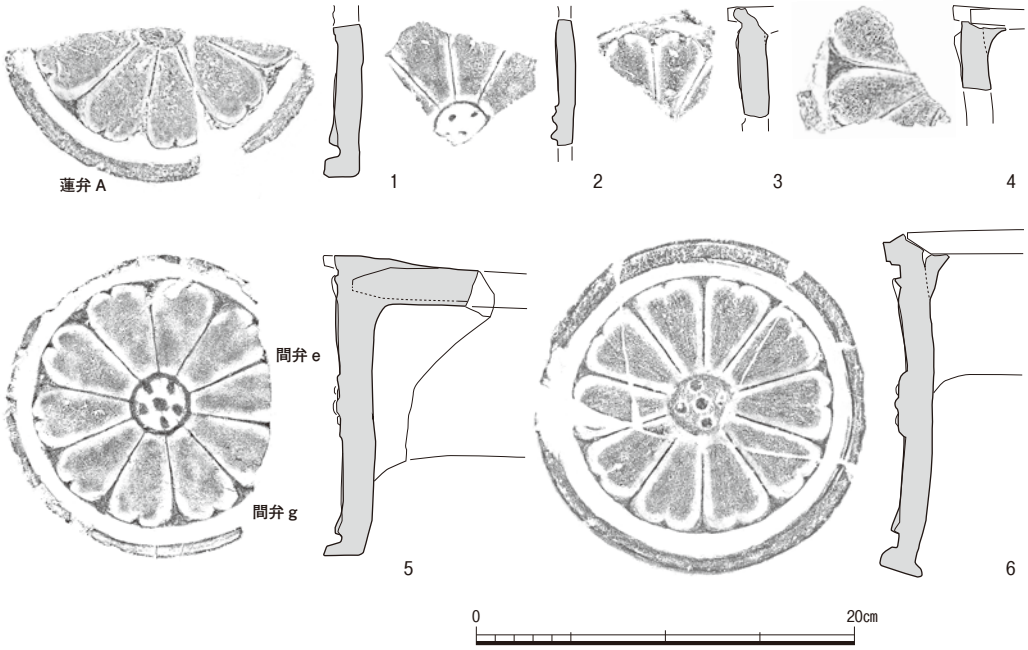


Fig. 73　素弁蓮華文軒丸瓦（弁端切り込み式）　1：4

ケズリし（凹面側の様相は不明）、瓦当上端からやや下方に接合する。接合粘土を丸瓦の凹・凸両面側に貼り、両面ともに横ナデを施す。瓦当裏面は中高で、ナデにより仕上げる。丸瓦部はわずかしか残存しないが、凹面側は無調整、凸面側はナデを施す。胎土は精良。硬質で、内・外面ともに灰色である。流路NR310出土。

飛鳥寺Ⅵ型式

飛鳥寺Ⅵ型式（Fig.73-３，Ph.49-３）　飛鳥寺創建瓦の１つ。蓮弁は11弁、蓮子は１＋５。弁端が丸みを帯びるとともに、間弁先端が銀杏の葉状に広がり、かつ高く盛り上がる点が飛鳥寺Ⅰ型式に似るため、弁端切り込み式の文様系統に含めておくが、蓮弁先端の切り込み部分が丸く膨らむ点や奇数弁である点は、弁端点珠式に近い[12]。瓦当径は14.0cm前後、笵は笵型Ａ。丸瓦先端凸面側を斜めにヘラケズリする点から「花組」系瓦工の所産とみられるが、一部に瓦当裏面下縁を突出させるものがあるなど、同じ「花組」のⅠ型式とは異なる側面も指摘されている[13]。飛鳥寺以外では、飛鳥池遺跡・飛鳥池東方遺跡から出土している。

小片が２点出土した。３は瓦当厚1.4cmで、瓦当裏面下縁の仕上げは不明。胎土に１～２㎜大の砂粒を多く含む。硬質で、内・外面ともに灰色である。第１次調査区床土出土。

飛鳥寺Ａ型式

飛鳥寺Ａ型式（Fig.73-４，Ph.49-４）　飛鳥寺創建期の瓦。蓮弁は10弁、蓮子は１＋５。中房圏線が太く、中房底部は弁区と同じ高さにある。蓮弁は弁央に低い稜が通るものの全体的に平板で、弁端の丸みが飛鳥寺Ⅰ型式に比して強い。飛鳥寺Ｂ型式と同笵の可能性も指摘されているが[14]、各蓮弁基部の幅がやや異なり、確証は得られない。飛鳥寺のほか、姫寺廃寺・高麗寺跡に同笵例があるが、少なくとも姫寺廃寺出土例と飛鳥寺出土例は瓦当厚や胎土、焼成の特徴が異なる。また、姫寺廃寺例は無段式丸瓦の先端凸面側を斜めにヘラケズリしており、「花組」の技術系統を引くことがあきらかであるが、飛鳥寺出土例は丸瓦部が残らず様相は不明。

第３次調査区から１点のみ出土した（４）。瓦当厚は1.3cm。瓦当断面に、層状に重なる厚さ0.3～0.5cmの粘土の単位が認められる。丸瓦先端の凹面側は無加工（凸面側の様相は不明）。瓦

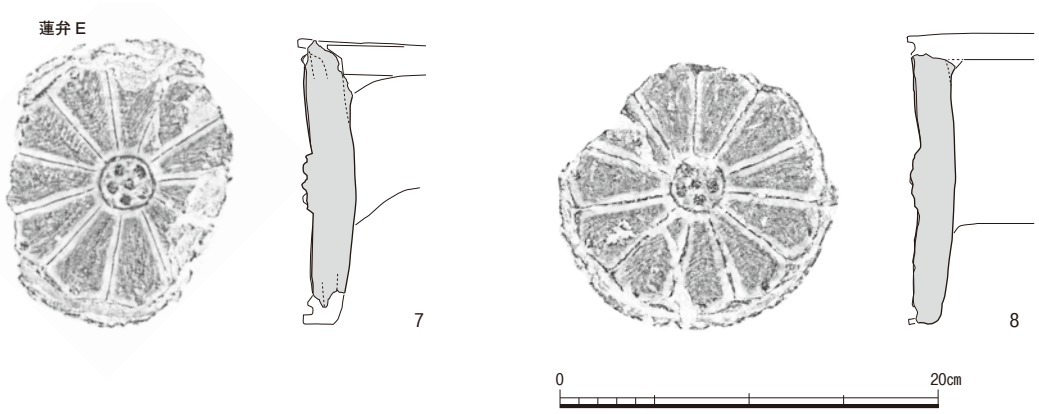


Fig. 74　素弁蓮華文軒丸瓦（弁端点珠式）　1：4

当裏面はナデ調整。胎土に1㎜未満の砂粒を含む。硬質で、内・外面ともに灰色である。瓦当厚、胎土、焼成の特徴は、飛鳥寺出土例に近似する。

石神Ｆ型式（Fig.73-６，Ph.49-５～８）　蓮弁は10弁。飛鳥寺Ⅰ型式に比して弁端の丸みが弱く、蓮弁は平板。また、飛鳥寺Ⅰ型式に比して弁端の輪郭線や間弁の直線部分が太い。半球状に盛り上がる中房に1＋4の蓮子を置くほか、外縁と弁区の間に幅0.8㎝と幅広の平坦面をもつ点は、一部の角端点珠式と共通する。瓦当径は17.0㎝前後、瓦当厚は1.0～2.0㎝。外縁上面に段差があるが、幅が不揃いであり、笵端かどうかは不明。これまでに石神遺跡以外からの出土は確認されていない。　石神Ｆ型式

本型式と認定できた4点と、これに該当する可能性の高い小片5点が出土した。6は凹面側を斜めにヘラケズリした丸瓦（凸面側の様相は不明）を瓦当上端に接合する。瓦当裏面は概ね平坦にナデを施すが、下縁には突出とそれに沿うごく浅い窪みがみられる。これらは丸瓦接合後に、下縁を強くナデたか、指で摘まみながらナデたことで生じたとみられる。第4次調査区出土。瓦当裏面下縁が6ほど明瞭には突出しない個体（Ph.49-８）や、丸瓦接合時に支持ナデツケを施す個体（Ph.49-６）もある。上述の9点とも、精良な胎土に1㎜程の砂粒を含む。やや軟質で、内・外面ともに灰色のものと、内面が橙色、外面が灰黄色のものがある。

ｂ　弁端点珠式

飛鳥寺Ⅲ型式（Fig.74-７・８，Ph.50-１、51-３）　飛鳥寺創建瓦を代表する型式で、「星組」瓦工の所産。蓮弁は11弁、蓮子は1＋5。外縁と弁区の間に幅0.3㎝程の平坦面がある。彫り直しは複数回に及ぶとみられるが、現状では間弁基部が中房に達しないⅢ型式ａと達するⅢ型式ｂに大別されている[15]。笵は笵端が外縁外周までの笵型Ｂで、丸瓦は有段式（玉縁式）。飛鳥寺以外では、飛鳥池遺跡・飛鳥池東方遺跡・豊浦寺跡・奥山廃寺・甘樫丘東麓遺跡で出土している[16]。　飛鳥寺Ⅲ型式

Ⅲ型式ｂが2点、彫り直しの段階が不明のものが2点出土した。7は花谷浩のいう笵傷4段階[17]に相当するもの。間弁先端は紡錘形に近い。蓮弁Ｅ（花谷浩の設定[18]に従う）の輪郭線沿いや蓮子周辺の笵傷が目立つ。瓦当断面に、層状に重なる厚さ0.3～0.6㎝の粘土の単位が認められる。丸瓦接合位置に目印となる細い溝を切ったのち、先端片枘形の丸瓦を接合する。瓦当裏面は中高で分厚く、回転ナデのち不定方向のナデにより仕上げる。精良な胎土に1㎜以下の砂粒をわずかに含む。硬質で、内面は灰白色、外面は灰色である。第2次調査区包含層出土。8は

花谷のいう笵傷３段階に相当するもの。間弁先端は銀杏の葉状を呈し、７よりも高く盛り上がる。また間弁の直線部分は７よりも太い。瓦当裏面の断面形および調整法、胎土、焼成の特徴は７と同様。南北溝SD365出土。

ｃ　角端点珠式

石神Ａ型式　**石神Ａ型式**（Fig.75-９・10，Ph.50-２・３、51-４・５）　以下の石神Ｂ・Ｄ・Ｅ型式とともに、先端に点珠のある剣先形の８弁を整然と割り付け、中房が低い半球状を呈する角端点珠式に属す[19]。蓮子が１＋４である点も、石神Ｂ・Ｄ・Ｅ型式や奥山廃寺出土の一部の同文異笵瓦と共通する。蓮弁は平板で、間弁は１ヵ所を除き直線部分と紡錘形の先端部とが接しない。外縁と弁区の間に幅0.7～0.8cm程の平坦面がある。瓦当径は推定17.5cm前後、瓦当厚は1.4～1.8cm。笵端の位置は判然としない。飛鳥池遺跡から同笵例（飛鳥寺Ｃ型式）が出土している[20]。

本型式と認定できた４点と、これにあたる可能性のある小片３点が出土した。いずれも瓦当断面に、層状に重なる厚さ0.3～0.5cmの粘土の単位が認められる。丸瓦先端は無加工（９）もしくは片枘形（10）で、瓦当上端に接合する。丸瓦凹面側に接合粘土を貼るが、10は粘土貼り付け前に支持ナデツケを施す。瓦当裏面は平坦にナデを施す。胎土に１㎜未満の砂粒を含む。石神遺跡からは、やや軟質で内面が灰黄色、外面が灰色ないし暗灰色のものと、硬質で内・外面とも灰色ないし青灰色のものが出土しているが、飛鳥池遺跡出土の同笵品には内面が赤褐色、外面が暗褐色の資料も含まれる。９は南北大溝SD640出土。10は石神遺跡第10次調査区の出土品であるが、最も残りが良いため掲載した。

なおこれまでに、石神Ａ型式に似るものの瓦当文様の形状や笵傷が一致しないとして、石神Ｃ型式が設定されている[21]。当該型式の標式資料（Fig.75-11、流路NR310出土）は、丸瓦先端の凹面側を斜めにヘラケズリし接合する点においても上述の石神Ａ型式の個体と異なる。しかし、残存範囲が限られていることもあり、Ａ型式の文様形状との明瞭な違いや、笵傷を不一致とする確実な根拠は見いだせなかった。良好な資料の増加をまって、再検討する必要がある[22]。

石神Ｂ型式　**石神Ｂ型式**（Fig.75-12，Ph.50-４、51-６）　石神Ａ型式に似るが、紡錘形を呈する間弁先端部の最大幅が約0.9cmと太い。また、石神Ａ・Ｄ・Ｅ型式と異なり、間弁の直線部分や先端部に明瞭な稜がない。外縁と弁区の間に幅0.7～0.8cmの平坦面がある。瓦当径は推定19.0cm前後で、瓦当厚は1.0～1.5cm。笵は笵型Ｂとみられる。石神遺跡以外では、本型式と確実に判定できる資料は出土していない。

本型式と認定できた２点と、これにあたる可能性が高い小片１点が出土した。12は７弁分が残存する。丸瓦の先端は凹面側を斜めにヘラケズリするか無加工とみられ（凸面側の様相は不明）、瓦当上端に接合する。瓦当裏面には平坦にナデを施し、下縁をわずかに突出させる。第４次調査区整地土Ｂ出土。上述の３点とも、胎土に１㎜未満の砂粒を含み、やや軟質で、内面がにぶい橙色、外面が灰色である。

石神Ｄ型式　**石神Ｄ型式**（Fig.75-13～16，Ph.51-１・７～９・12）　外縁と蓮弁の間の平坦面が幅0.4～0.6cmと、石神Ａ～Ｅ型式の中で最も狭い。また、外縁の立ち上がりが石神Ａ～Ｅ型式の中で相対的に低い。間弁の直線部分や先端部の稜は明瞭。瓦当径は17.5cm前後で、瓦当厚は2.0～2.5cmと厚手のものが多い。笵端の位置は判然としない。これまでに石神遺跡以外からの出土は確認されていない。

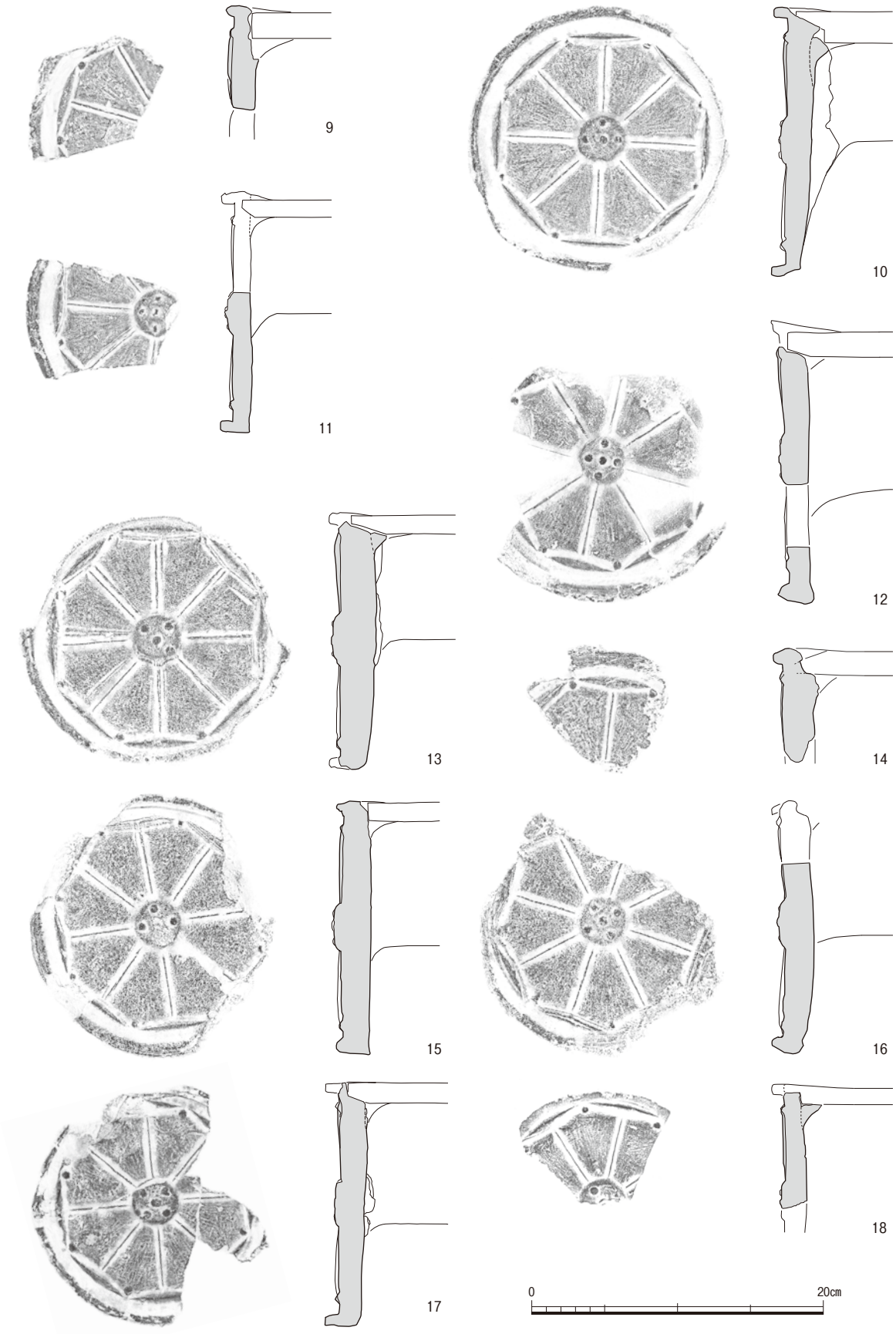


Fig. 75　素弁蓮華文軒丸瓦（角端点珠式）　1：4

本型式に該当する８点と、これにあたる可能性が高い小片５点が出土した。丸瓦先端の加工法は多様で、13は凹面側を、14は凸面側をそれぞれ斜めにヘラケズリし（13の凸面側の様相は不明）、15は無加工ないし片枘形とみられる。いずれの個体も、丸瓦の接合位置は瓦当上端で、少量の接合粘土を丸瓦凹面側に貼る。接合部の丸瓦凹面側に横ナデ、凸面側に横ナデもしくは横ケズリを施す。瓦当裏面はナデを施し、瓦当中央はほぼ平坦ないしわずかに中高となるが、下縁は強くナデることで凹線状の窪みや突出が生じたもの（16）とそうならないもの（13・15）がある。丸瓦先端の加工と瓦当裏面調整の相関は不明。13は掘立柱建物SB520柱穴（掘方・抜取穴のいずれかは不明）、14・15は第３次調査区、16は土坑SK518出土。上述の13点とも、胎土に１～３㎜大の砂粒を多量に含む。硬質で、基本的に内・外面とも青灰色であるが、内・外面のいずれかもしくは両方が赤褐色のものもある。

なお後述の通り、有段式丸瓦１類A2が本型式に対応していた可能性がある。

石神Ｅ型式

石神Ｅ型式（Fig.75-17・18，Ph.51-２・10・11）　瓦当径は16.5㎝前後で、石神Ａ～Ｅ型式の中で最も小振りである。蓮弁の径に対する中房径の割合が石神Ａ・Ｂ・Ｄ型式に比してやや大きい。外縁と弁区の間の平坦面は幅0.8～0.9㎝で、間弁の直線部分や先端部の稜は明瞭。間弁や点珠の周辺、外縁と弁区の間の平坦面に笵傷がある。瓦当厚は1.0～2.3㎝。笵は笵型Ｂとみられる。同笵品が奥山廃寺から出土している（奥山廃寺Ⅱ型式Ｅ）。

出土点数は４点。瓦当断面に層状に重なる粘土の単位が認められる個体があるが、石神Ａ型式ほど明瞭ではない。丸瓦先端は基本的に片枘形に加工するが（18）、17は凹面側を斜めにヘラケズリしている可能性もある。接合位置は瓦当上端で、丸瓦先端が外縁の一部となる場合が多い。丸瓦接合部は凹面側に少量の接合粘土を貼り、凹面側・凸面側ともに横ナデを施す。瓦当裏面にはナデを施し、ほぼ平坦かわずかに中高に仕上げる。17は南北大溝SD640、18は第２次調査区包含層出土。上述の４点とも、胎土は精良。硬質で、基本的に内・外面とも暗青灰色である。

石神遺跡出土品と奥山廃寺出土品は、製作技法や胎土、焼成の特徴が共通する。両遺跡出土品とも、点数が少なく大半が破片資料であるという制約があるが、確認できる範囲では、笵傷の進行に差は認められない。

d　船橋廃寺式

船橋廃寺式

第３次調査区から小片が１点出土した（Fig.76-19，Ph.52-１）。蓮弁は肉厚でごく緩やかな照りむくりがあり、端部は丸みを帯びる。蓮弁の輪郭線の有無は定かでないが、稜の痕跡をわずかに残す。隣り合う間弁の頭部は接しない。中房の周囲に圏線がめぐる。瓦当厚は約1.5㎝。笵型は不明。瓦当断面に、層状に重なる厚さ0.2～0.8㎝の粘土の単位が認められる。丸瓦先端は凹面側を斜めにヘラケズリし（凸面側の様相は不明）、瓦当上端に接合する。瓦当裏面は平坦に仕上げる。胎土に１㎜大の砂粒を含む。やや硬質で、内面は暗灰色、外面は灰黄色である。

弁端の形状や隣り合う間弁の頭部が離れている点、中房に圏線が入る点、胎土および焼成の特徴などが、型式番号未設定の古宮遺跡（小墾田宮推定地）第２次調査出土軒丸瓦（Fig.76-20，Ph.52-２）や、末ノ奥窯産の可能性が指摘されている豊浦寺Ⅲ型式Ｄ[23]に似る。ただし、これらに比して蓮弁がやや大きく、間弁の直線部分は細い。



Fig. 76　**素弁蓮華文軒丸瓦**（船橋廃寺式）　1：4

ii　複弁蓮華文軒丸瓦

飛鳥寺ⅩⅣ・ⅩⅥ型式・川原寺601型式Ａ、大官大寺6231型式のほか、川原寺611型式の可能性があるものが出土した。

飛鳥寺ⅩⅣ型式（Fig.77-21・22，Ph.52-３・４）　蓮弁は８弁で、蓮子は１＋４＋８。外縁は素文の傾斜縁で、内縁に圏線がめぐる。坂田寺21型式と文様構成が同じで、21型式Ｂと同笵。笵は笵型Ａ。飛鳥寺の伽藍中心からは創建瓦に匹敵する量が出土しており、天武朝の飛鳥寺官寺化にともなう伽藍整備に用いられた可能性が指摘されている[24]。同笵例が飛鳥池遺跡にある。　飛鳥寺ⅩⅣ型式

これまでに２度の彫り直しが確認されている[25]。蓮子や蓮弁を彫り直したⅩⅣ型式ｂが３点、彫り直しの段階が不明のものが２点、本型式の可能性のある小片が３点出土した。21はⅩⅣ型式ｂ。蓮子は0.9cm前後と大粒で、蓮弁の輪郭はⅩⅣ型式ａのような鋭さを欠く。瓦当面の欠損部分から、丸瓦広端面に施されたキザミ目ないし切り欠きとみられるものが見える。丸瓦部凹面から瓦当裏面にナデを、丸瓦部凸面に横ナデを施す。胎土に１～５㎜大の砂粒を含む。硬質で、内・外面ともに灰色である。第２次調査区包含層出土。22は彫り直しの段階が不明の資料。丸瓦広端部に施された歯車状の切り欠きと、広端面のキザミ目が認められるが、凹・凸面は接合粘土によりキザミ目が確認できない。胎土は精良で１～２㎜大の砂粒をわずかに含む。硬質で、内面は灰色からにぶい橙色、外面は灰色である。第１次調査区床土出土。

飛鳥寺ⅩⅥ型式（Fig.77-23，Ph.52-５）　蓮弁は８弁で、弁の輪郭線が子葉の延長線上で途切れがちである。蓮子は１＋８＋８とみられる。外縁は線鋸歯文をもつ傾斜縁で、内縁に圏線がめぐる。元興寺創建瓦の6201Ab（飛鳥寺ⅩⅤ型式ｂ）に似るが、割付が均一でないほか、蓮弁と間弁が一体化している箇所があるなど、文様の崩れが目立つ。積み上げ式成形台一本づくり技法による[26]。これまでに確認されたものは飛鳥寺出土の１点に限られ、点数がきわめて少ない。　飛鳥寺ⅩⅥ型式

本型式と認定できた２点と、これにあたる可能性の高い小片１点が出土した。23は瓦当下部を残す。瓦当厚は3.8cm前後。胎土は精良で１㎜未満の砂粒を含む。やや軟質で、内・外面ともに灰黄色である。流路NR310出土。

川原寺601型式Ａ（Fig.77-24，Ph.52-６）　川原寺創建瓦の１つ。蓮弁は８弁で照りむくりが強い。蓮子は１＋５＋９で周環がめぐる。外縁は右上がりの面違鋸歯文をもつ傾斜縁で、内縁に圏線がめぐる。同笵例が荒坂瓦窯・飛鳥寺・大官大寺・高麗寺跡・崇福寺・南滋賀廃寺・大津廃寺で確認されている。　川原寺601型式Ａ

内区の下半を残す１点が第３次調査区包含層から出土した（24）。瓦当厚は中房部分で2.9cm。瓦当裏面は中凹みにケズリ調整するⅠ型（金子裕之による分類[27]）。丸瓦部は残存しないが、先端

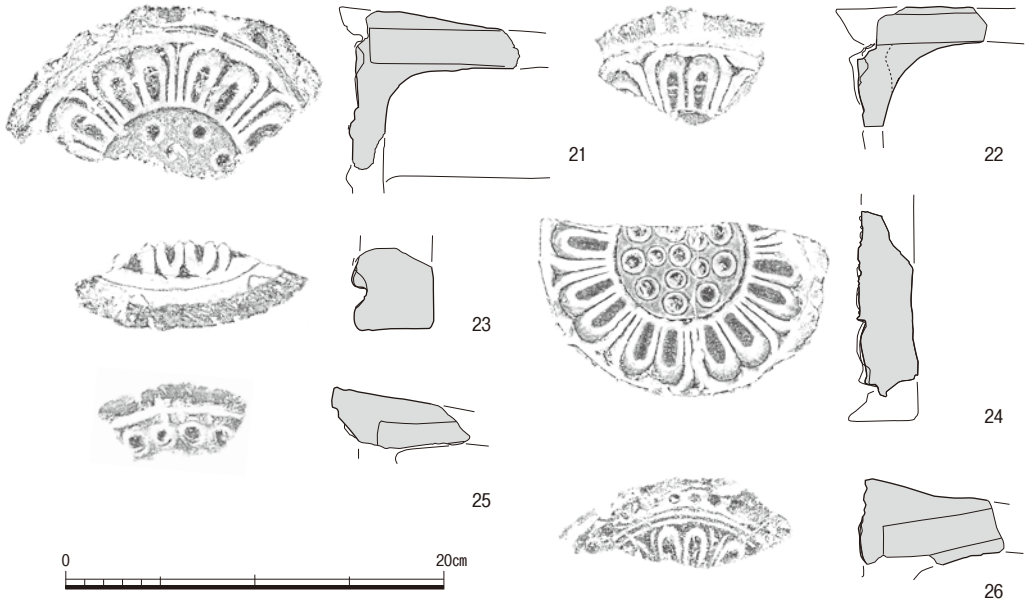


Fig. 77　**複弁蓮華文軒丸瓦**　1：4

にキザミ目を入れて接合することが知られる[28]。胎土は精良で、1㎜未満の砂粒をわずかに含む。極めて硬質で、外面が青灰色、内面は青灰色・赤褐色である。胎土や焼成の特徴から、荒坂瓦窯産とみられる。

大官大寺6231型式

大官大寺6231型式（Fig.77-25，Ph.52-7）　大官大寺創建瓦の1つ。外縁を残す小片1点が中世バラス溜（第1次調査区西北部から第2次調査区西南部にかけて広がる中世の廃棄土坑群）から出土した（25）。外縁の形状からB種ないしC種のいずれかに該当する。蓮弁は8弁で、蓮子は1＋6。笵は笵型B。丸瓦の先端を連続するV字形に抉り込み、凹面に斜格子のキザミ目をつけて接合する。胎土に1㎜以下の砂粒を含む。硬質で、内・外面ともに青灰色である。

その他　蓮弁1弁強を残す1点が中世バラス溜から出土した（Fig.77-26，Ph.52-8）。外区の珠文が密で、その内外に圏線がめぐる。子葉はさほど盛り上がらない。間弁は潰れ気味であるが、人字形とみられる。外縁を欠き、かつ笵ずれを起こしていることから断定し難いが、蓮弁や珠文の特徴から川原寺611型式の可能性が高い。丸瓦先端は無加工で、瓦当上端からやや下方に接合する。丸瓦部凸面は縦位のケズリ調整。胎土に1～3㎜大の砂粒を少量含む。やや軟質で、内・外面ともに赤褐色である。

B　軒平瓦

古代の瓦としては、重弧文4型式、均整唐草文1型式が出土した。このほか、中世以降の軒平瓦が2型式出土した。

i　重弧文軒平瓦

飛鳥寺Ⅰ型式B

飛鳥寺Ⅰ型式B（Fig.78-1，Ph.53-1）　飛鳥寺東南禅院所用瓦とされる三重弧文軒平瓦の1つで、瓦当厚が約3.0㎝とⅠ型式の中で相対的に薄い。凹線の幅は0.5～0.7㎝で、弧線は平坦面をもつ。顎は直線顎。飛鳥寺瓦窯SY1200操業最終段階の製品と考えられている[29]。これまでに確認されているものの約8割が飛鳥池遺跡から、残りが飛鳥寺から出土している。

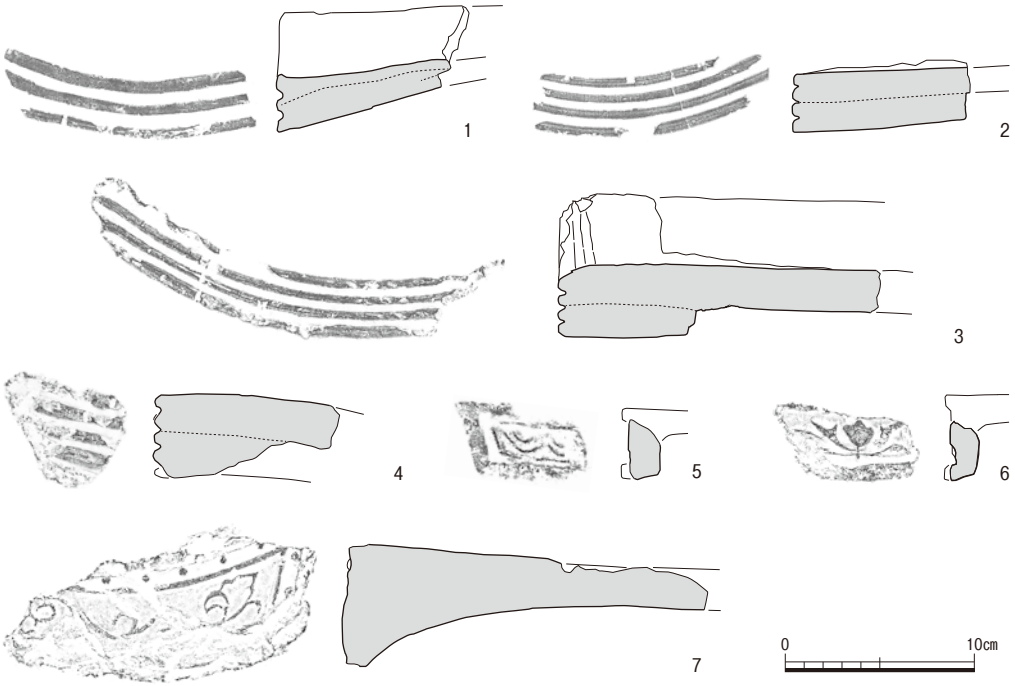


Fig. 78　軒平瓦　1：4

瓦当左半を残す1点が第3次調査区耕作溝から出土した（1）。凹面はほぼ無調整で、側縁に面取りも施さない。凸面にはごくわずかに叩き板のアタリが認められるが、大部分はナデ消している[30]。撚り紐の分割界線に沿って分割し、側面をケズリにより仕上げる。胎土に1～2㎜大の砂粒を多く含む。硬質で、内・外面ともに青灰色である。

飛鳥寺Ⅱ型式

飛鳥寺Ⅱ型式（Fig.78-3，Ph.53-3）　これまでに飛鳥寺北方遺跡で出土している四重弧文軒平瓦であるが[31]、種番号は未設定。飛鳥寺Ⅱ型式A2に似るが、A2に比して凹線が深く、弧線の丸みが弱い。弧線は平坦面をほぼもたない。貼り付け段顎で、側面は下面が幅広の剣先形に面取りする。

瓦当左半を残す1点が中世バラス溜から出土した（3）。瓦当上端に挽き型の痕跡を残す。顎の長さは6.8cm、顎の深さは1.3cm。凹面は縦ナデのち瓦当寄り約5.0cmの範囲に横ナデを施す。凸面は縦縄タタキのち横ナデ調整で、タタキ痕をほぼ残さない。精良な胎土に1㎜以下の砂粒のほか、ごくわずかに5㎜を超える小石を含む。硬質で、内・外面とも灰色である。凹面を丁寧に調整する点や側面を剣先形に面取りする点、焼成の特徴などが川原寺651型式の一部の種に似る。同じ挽き型による製品が川原寺から出土しているか否か、今後の精査を要する。

川原寺651型式E

川原寺651型式E（Fig.78-2，Ph.53-2）　川原寺創建瓦である四重弧文軒平瓦の1つ。凹線が細く、弧線は0.5cm程の平坦面をもつ。顎は段顎で、側面は剣先形に面取りする。飛鳥池遺跡からも出土しており、軒丸瓦の川原寺601型式とともに天智朝における飛鳥寺への施入との関連が指摘されている[32]。

瓦当右半を残す1点が井戸SE650掘方から出土した（2）。瓦当上端に挽き型の痕跡を残す。顎の長さは9.0cm、顎の深さは1.4cm。凹・凸面ともに丁寧なナデ・ミガキにより仕上げる。側面の面取りは、狭端側から瓦当側に向けたケズリによる。胎土は精良で、1～3㎜大の砂粒を含む。極めて硬質で、内面が赤褐色、外面が青灰色である。胎土や焼成の特徴から、荒坂瓦窯

産とみられる。

その他（Fig.78-４，Ph.53-４）　同型式に属す五重弧文軒平瓦が２点出土した。凹線は深さ0.3～0.4cmで断面U字形、凸線は太く丸みを帯びるが、上から３本目は平坦面をもつ。顎は段顎とみられる。少なくとも飛鳥寺Ⅲ型式Ａ・Ｂ・Ｃとは挽き型が異なる。いずれも顎部を破損しており、顎の長さ・深さは不明。瓦当厚は4.3cm。縦縄タタキ痕のある平瓦部に粘土板を貼り付けて顎部を成形する。凹面は瓦当寄り約4.0cmの範囲を横ケズリしたのち側縁に面取りを施し、顎面は横ナデで調整する。胎土に１㎜未満の砂粒を多く含む。やや硬質で、内・外面ともに灰色である。４は瓦当左端を残す資料で、最下部の弧線を欠く。中世バラス溜出土。

ⅱ　均整唐草文軒平瓦

飛鳥寺Ⅵ型式

飛鳥寺Ⅵ型式（Fig.78-７，Ph.53-７）　小葉が派生する上向きの中心葉と逆三角形からなる中心飾を起点に、三日月形の葉をもつ唐草文が反転しながらのびる。唐草の端部には蕾状のものが生じており、外区には珠文がめぐる。平安時代前期の瓦である。飛鳥寺のほか、元興寺・興福寺に同笵例があり、特に元興寺では同文異笵の２種とともに出土数が多い[33]。

出土点数は２点。７は右半を残す資料で、右脇区中央の珠文２つに笵傷がある。曲線顎Ⅱ（毛利光俊彦による分類[34]）で、顎面の幅は1.0cm程。凹面は、瓦当寄り約5.0cmの範囲および側縁にケズリを施すが、それ以外は無調整。凸面は、縦縄タタキのち瓦当寄り約10.0cmの範囲を縦ケズリし、さらに瓦当寄り約3.0cmの範囲に横ナデを施す。側面は縦ケズリ調整。胎土は精良で、１～２㎜程の砂粒をわずかに含む。硬質で、内・外面ともに灰色である。瓦当面に無数の小孔が開いており、砂粒が剝離した可能性がある。これらの特徴は、元興寺旧境内北辺（第７次調査）出土の同笵品と共通する。元興寺から飛鳥寺へと、あるいは元興寺に供給した瓦窯から飛鳥寺へともたらされたと考えられる[35]。第２次調査区包含層出土。

ⅲ　その他の軒平瓦

中世以降の軒平瓦が２点出土した（Fig.78-５・６，Ph.53-５・６）。５は内区左端に波状文をもち、瓦当面に離れ砂が付着する。中世の瓦であろう。第１次調査区床土出土。６は橘唐草文軒平瓦の中心飾りを残す。文様から、江戸時代後期以降のものとみられる。第２次調査区包含層出土。

Ｃ　垂木先瓦

垂木先瓦

土坑SK748から細片が出土した（Fig.79-１，Ph.53-８）。１点のみであり、かつ文様の大半を欠いているため、型式番号は付していない。船橋廃寺式で弁端が丸く、蓮弁の照りむくりと弁先端の稜をわずかに残す。摩滅により、蓮弁の輪郭線の有無は定かでない。胎土に１㎜大の砂粒を多く含む。軟質で、内・外面ともに灰白色である。

蓮弁の形状が甘樫丘東麓遺跡出土の垂木先瓦（Fig.79-２，Ph.53-９）に似るが、同笵関係は不明。また、この類例に加え、古宮遺跡垂木先瓦Ａ（飛鳥寺垂木先瓦Ⅴ型式）・Ｂや別の甘樫丘東麓遺跡出土垂木先瓦（Fig.79-３，Ph.53-９）などに胎土や焼成の特徴が似る。ただしこれらの類例は、外面は灰白色であるものの、内面は灰黒色である点が異なる[36]。

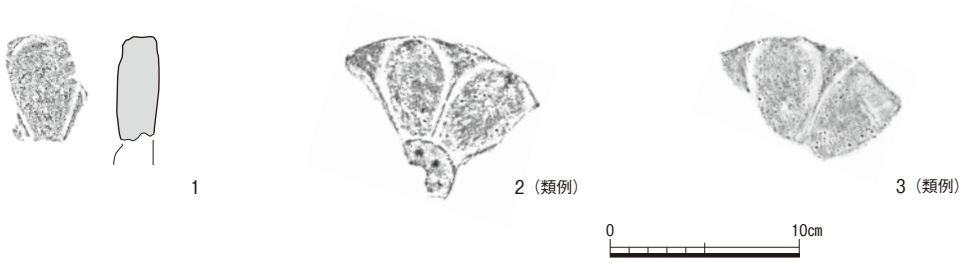


Fig. 79　垂木先瓦　1：4

D　丸　　瓦

無段式（行基丸瓦）と有段式（玉縁丸瓦）の両方が出土した。小片が多いため、無段・有段の判別がついたものは第１～４次調査区出土丸瓦総数の約27％にあたる102点に限られる。内訳は無段式が15点、有段式が87点である。無段式は凹面調整の有無に基づき、有段式は側面に破面の凹凸や分割截面を残さないものを玉縁の成形法に基づき、それぞれ２類に大別した。

以下、後述の平瓦とともに、製作技法の基本的な分類名については佐原真・大脇潔の記載[37]に、飛鳥寺および飛鳥池遺跡出土瓦の分類名については花谷浩の記載[38]に準じて報告する。

i　無段式丸瓦

一木模骨に粘土板を巻き付けて成形するものに限られ、側板連結模骨や竹状模骨を使用した確実な資料は出土していない。いずれも凸面のタタキ痕を丁寧にナデ消し、側面はｃ手法で調整する。

１類（Fig.80-１，Ph.54-１）　凹面を調整しないものを１類とする。　無段式丸瓦 １　類

10点出土。いずれも凹面側縁または凹・凸両面の側縁に面取りを施す。１は長さが判明した資料で、全長42.0㎝。凹面に糸切痕（Ur）、粘土板合わせ目（Ｓ型）、布圧痕を残す。胎土に１～２㎜大の砂粒を多く含む。硬質で、内・外面ともに橙色である。流路NR310出土。上述の10点はいずれも、飛鳥池遺跡出土の行基丸瓦７類と製作技法や胎土、焼成の特徴が共通する。

２類（Fig.80-２，Ph.54-２）　凹面の一部に縦位のハケ目を施すものを２類とする[39]。　無段式丸瓦 ２　類

中世バラス溜から４点出土。いずれも凸面は横ナデし、凹・凸両面の側縁に面取りを施す。軟質で内・外面ともに橙色のもの（２）と、硬質で内面が黄褐色、外面が青灰色のものがある。２は精良な胎土に１㎜大の砂粒をわずかに含む。

ii　有段式丸瓦

側面をａ手法で調整する小片が１点出土したが[40]、それ以外は全てｃ手法で調整する。後者を玉縁の成形法により２類に大別した。このうち１類は、模骨が筒部までのＡ手法を用いるもので、いずれも筒部は模骨に粘土板を巻き付けて成形し、玉縁部は別の粘土で作る[41]。これをさらに、筒部の成形・調整法に基づき細分した。１類の総数は、有段式丸瓦の８割余りを占める[42]。２類は模骨が玉縁先端に及ぶもので、わずかに２点を確認したのみである。

１類A1（Fig.81-３，Ph.54-３）　１類のうち、筒部凸面を平行タタキで成形したのちナデを施すものを１類Ａとし、胎土や焼成の違いでA1とA2に分けた。A1は胎土に１㎜未満の砂粒を　有段式丸瓦 １　類

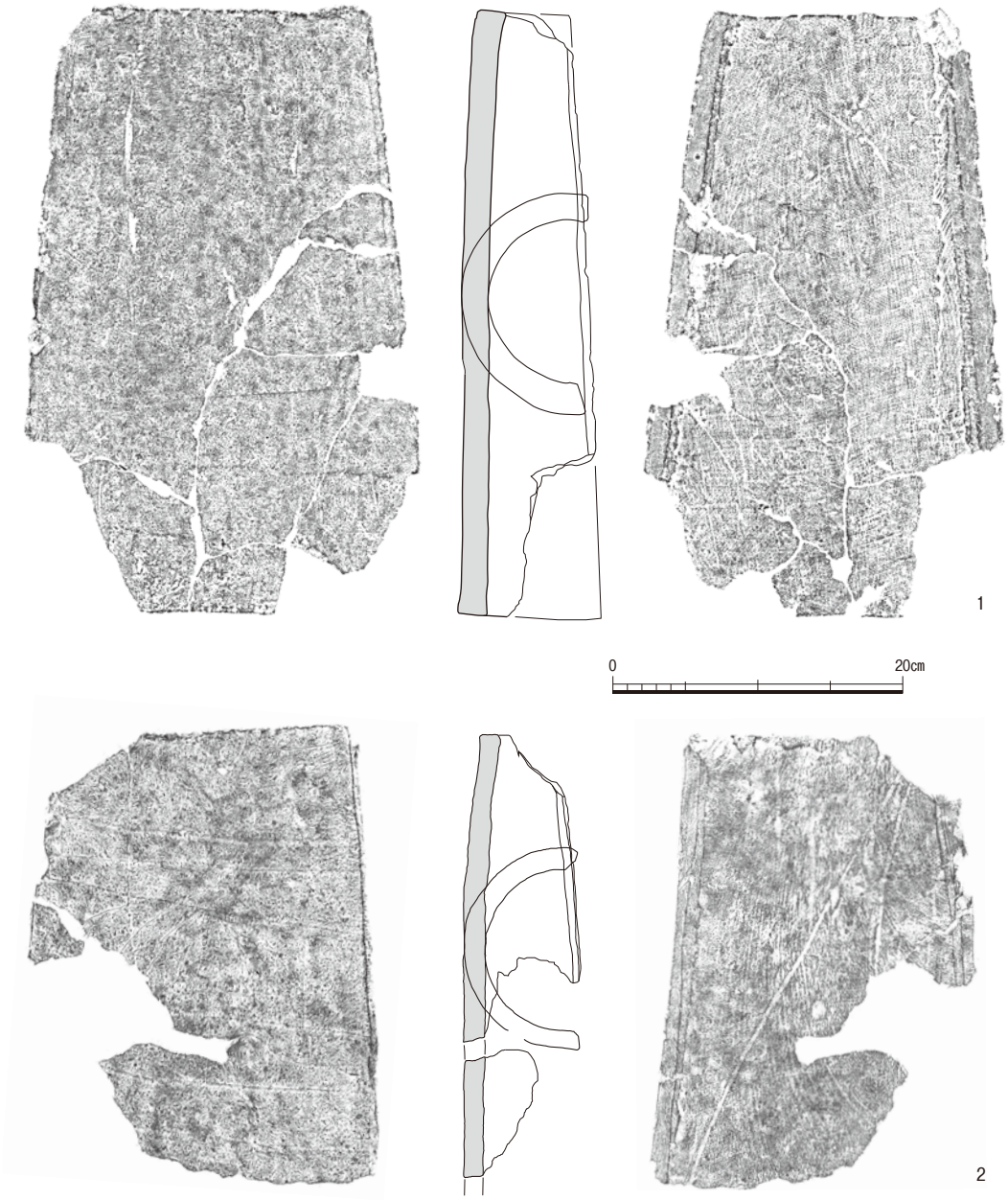


Fig. 80　無段式丸瓦　1：5

含み、やや軟質で、内・外面ともに灰黄色ないし橙色を呈するもの。

３は玉縁部を欠く。凸面には、側面からほど近い位置に分割截線を残す。凹面には、粘土板合わせ目（Ｓ型）と目の大きさが異なる２枚の布の綴じ合わせ目を残す。凹面側縁と広端部に面取りを施す。東西溝SD558出土。

１類A2（Fig.81-４・５，Ph.54-４・８）　A2は胎土に１～３㎜大の砂粒を多量に含み、硬質で、内・外面とも青灰色を呈するもの。

模骨上面はほぼ平坦。凹面は布圧痕を残し、凹面側縁に面取りを施す。胎土や焼成の特徴が軒丸瓦の石神Ｄ型式と共通することに加え、計17点中15点が石神Ｄ型式の分布域（Fig.159）から出土していることから、石神Ｄ型式の丸瓦部であった可能性がある。４は連結部、５はタタキ痕を残す筒部で、ともに石組遺構SX540出土。

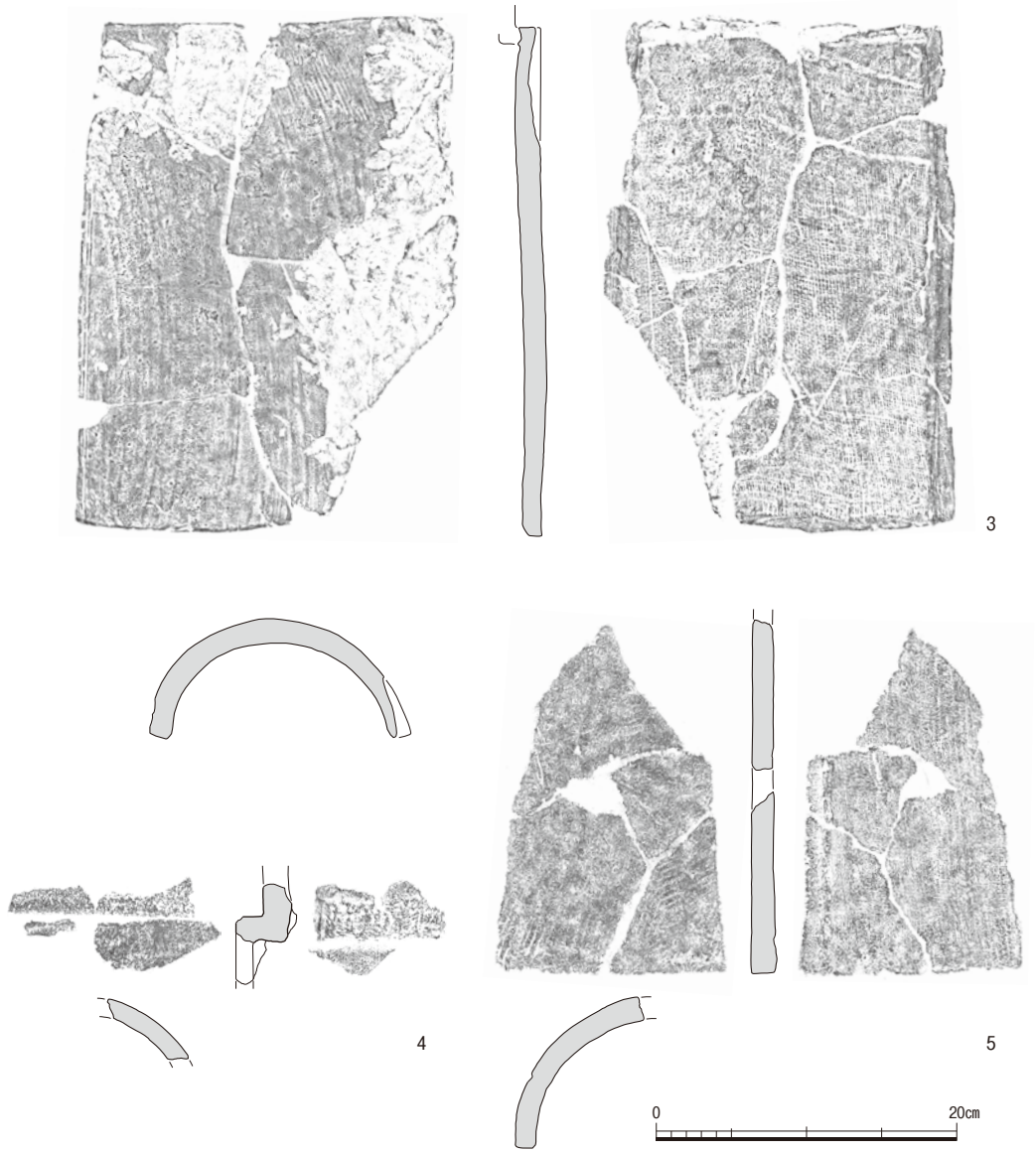


Fig. 81　有段式丸瓦１類Ａ　1：5

１類Ｂ（Fig.82-６～９，Ph.54-５・６・８）　　１類のうち、筒部凸面をナデにより仕上げ、叩き板の痕跡を残さないものを１類Ｂとする。この中には、筒部凸面に横位の板ナデないしハケ目を施したのち、さらにその痕跡の大部分をナデ消すもの（６・７）のほか、最終的に極めて丁寧なナデを施すことで、それ以前の調整の有無が不明であるもの（８・９）が含まれる。筒部粘土と玉縁部粘土の接合位置は個体ごとに異なる。

６は模骨上端から少し上に突き出た粘土板の内側に玉縁を接合する。模骨上面はなだらかに盛り上がる。凹面は一部にナデを施すが、糸切痕（Ul）、布の綴じ合せ目を残す。凸面には側面から約1.5cmの位置に浅い分割截線を残す。凹・凸両面とも、側縁に面取りは施さない。胎土は精良。やや軟質で、内面はにぶい橙色、外面は灰白色である。東西溝SD558出土。７は模骨上端にわずかに達しない粘土板に玉縁から肩にかけての粘土を接合する。模骨上面は平坦。胎土は精良。軟質で、内・外面ともにぶい橙色である。石組遺構SX540出土。８は模骨上端か

ら少し上に突き出た粘土板の内側に玉縁を接合する。模骨上面は平坦。筒部凹面は一部にナデを施すが、糸切痕（Ul）、布圧痕を残す。凹面側縁に面取りを施す。連結面にナデを施した際に生じたとみられる粘土の溢れを肩に残す。胎土は精良。やや軟質で、内面は灰白色、外面は灰色である。釘穴があるため軒丸瓦の丸瓦部であった可能性があるが、第１～４次調査区出土の軒丸瓦にはこれと組み合う積極的な候補はない[43]。流路NR310出土。９は模骨上面に折り曲げた粘土板の上に玉縁を付加しており、粘土板を折り曲げた際に生じた溝状の窪みを筒部凹面に残す。模骨上面はほぼ平坦。凹面側縁付近に分割界点を残す。凹・凸両面とも側縁に面取りは施さない。精良な胎土に１㎜未満の砂粒を含む。やや軟質で、内面は白色、外面は灰色である。石組遺構SX540出土。

有段式丸瓦２類

２類（Fig.82-10，Ph.54-７）　２類に該当する２点は、いずれも筒部をほぼ残さない。10は連結面をわずかに残す。筒部と玉縁部を一連の粘土板で作り肩に粘土を貼り足すＣ手法を用いるが、この技法を全面的に採用するのは吉備池廃寺や山田寺以降とされる[44]。玉縁部凹面には粘土板合わせ目（Ｚ型）と布圧痕を残し、凸面はナデ調整。胎土は精良。軟質で、内・外面とも橙色である。流路NR310出土。

Ｅ　平　　瓦

丸瓦と同様に小片が多いため、成形や調整の様相がある程度判明した資料は一部にとどまるが、それらは全て粘土板から成形しており、粘土紐を用いた確実な資料は含まれない。大半が桶巻き作りによるが、わずかながら凸面布目平瓦や一枚作りの可能性があるものも出土している。ここでは、桶巻き作りによるものを成形・調整法に基づき１～５類に大別し、凸面布目平瓦を６類、一枚作りの可能性があるものを７類とした。１～３類は「花組」の瓦[45]との共通点が多く認められる瓦、４～７類はそれ以外の瓦である。

ｉ　１　　類

平瓦１類

粘土板桶巻き作りの平瓦のうち、格子タタキないし斜格子タタキで成形し、かつ側面をａまたはｂ手法で調整するものを平瓦１類とした。この一群に属す瓦は、内・外面ともに褐色ないし橙色で、凹面は無調整ないし最小限の調整に留め、凹面側から分割截線を入れる。こうした特徴は、「花組」の瓦の多くと共通する。１類のうちタタキ痕の一部をナデ消すものをＡ、タタキのち凸面にハケ目を施すものをＢとし、Ａは叩き板の違いで細分した。

なお以下では、叩き板に刻まれた線に言及する場合、「○㎜間隔の刻線」のように表記するが、この場合の間隔は刻線と刻線の中軸間の距離を指すこととする。また「線幅」は、叩き板に刻まれた刻線の幅を指す。

１類A1（Fig.83-１，Ph.55-１）　直交する幅約４㎜の刻線（1.8～2.3㎝間隔×約1.2㎝間隔）により形成された格子各単位の隅を１ヵ所斜めに切り欠いた叩き板を用いるもの。したがって、タタキ痕各単位の凹部は五角形を呈する。飛鳥池遺跡出土の平瓦１類A5にあたる。

１はａ手法で側面を調整する。胎土に１㎜以下の砂粒を多く含み、軟質である。第１次調査区包含層出土。

１類A2（Fig.83-２，Ph.55-２）　線幅約４㎜の格子（1.1～1.8㎝間隔の刻線×約1.1㎝間隔の刻

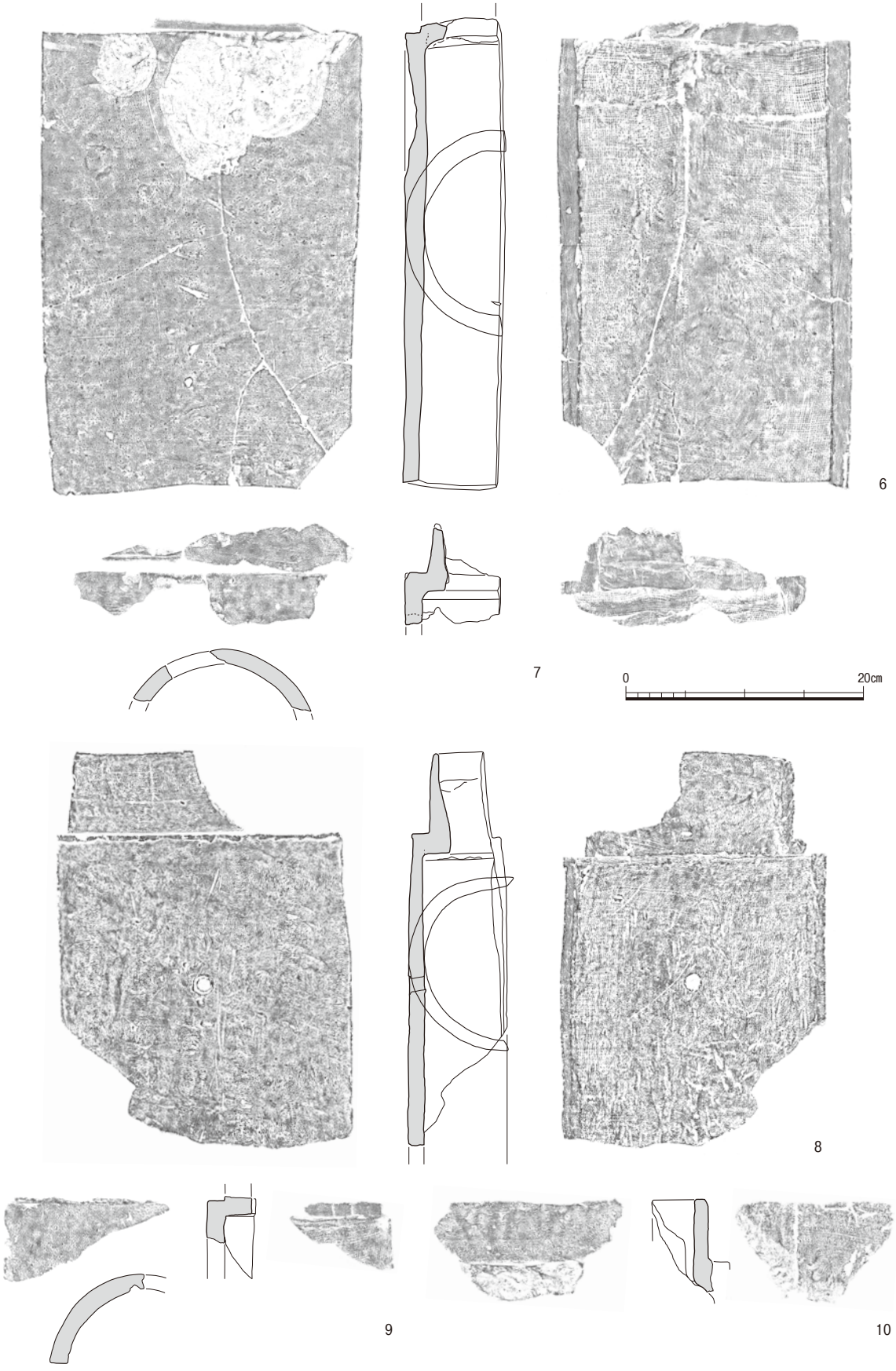


Fig. 82　有段式丸瓦1類B・2類　1：5

線）を刻んだ叩き板を用いるもの。

2はａ手法で側面を調整する。凹面は一部にナデを施すが、側縁付近に撚り紐の分割界線を残す。胎土に１～２㎜大の砂粒を多く含み、軟質である。第１次調査区包含層出土。

１類Ｂ（Fig.83-３，Ph.55-３）　線幅約２㎜の斜格子（約0.8㎝間隔の刻線×約1.1㎝間隔の刻線、交差角約60°）を刻んだ叩き板により成形し、凸面に横位のハケ目を施すもの。板状工具の幅は6.0㎝前後。飛鳥池遺跡出土の平瓦１類E1にあたる。

３は長さが判明した資料で、全長47.5㎝。側面調整は片方がａ手法、もう片方がｂ手法。凹面に糸切痕（Ur）、粘土板合わせ目（Ｓ型）、撚り紐の分割界線などを残す。胎土に１～２㎜大の砂粒を多く含み、軟質である。流路NR310出土。

ⅱ　２　　類

平瓦２類　粘土板桶巻き作りの平瓦のうち、平行タタキで成形し、かつ側面をａまたはｂ手法で調整するものを平瓦２類とした。凹面は布目を残すものの、一部にナデやハケ目を施すものもあり、凹面をほぼ調整しない「花組」の原則から外れる。しかし、いずれも撚り紐の分割界線を基準に凹面側から分割截線を入れており、この点が「花組」の瓦と共通することから「花組」の技術系統を引く瓦とみられる。２類のうち、凸面を調整しないものをＡ、ナデ調整するものをＢ、ハケ目調整するものをＣとし、それぞれを叩き板の違いで細分した。

２類A1（Fig.84-４，Ph.55-４）　線幅１～２㎜、６本／３㎝の密度の刻線を刻んだ叩き板を用いるもの。タタキ痕は叩き締めの円弧を描く。

４は狭端の一部を残す。側面調整はｂ手法で面取りは施さない。凹面は無調整。胎土に１㎜大の砂粒を多く含む。硬質で、内・外面ともに赤褐色ないし赤紫色である。第２次調査区出土。胎土や焼成の特徴が飛鳥池遺跡出土の平瓦２類A2に近い。

２類A2（Fig.84-５，Ph.55-５）　線幅約１㎜、12本／３㎝の密度の刻線を刻んだ叩き板を用いるもの。

５は狭端の一部を残す。側面調整はａ手法で面取りは施さない。凹面は狭端付近の一部にナデを施すが、大部分は無調整である。胎土に１～２㎜大の砂粒を多く含む。軟質で、内・外面ともに灰色である。東西溝SD558出土。

２類B1（Fig.85-６，Ph.55-６）　線幅約１㎜、７～８本／３㎝の密度の刻線を刻んだ叩き板を用いるもの。

６は広端の一部を残す。側面調整はｂ手法で面取りは施さない。凹面はほぼ無調整で、布の綴じ合せ目が認められる。胎土に１～２㎜大の砂粒を多く含む。軟質で、内・外面ともににぶい橙色である。東西溝SD558出土。

２類B2（Fig.85-７，Ph.55-７）　線幅１～２㎜、７本／３㎝の密度の刻線を刻んだ叩き板を用いるもの。

７は広端の一部を残す。側面調整はｂ手法で面取りは施さない。凹面広端付近には補正の叩き締めの結果とみられる平行タタキ痕があり、これを側板の凹凸をならすハケ目調整が上書きする。胎土に１～２㎜大の砂粒を多く含む。軟質で、内・外面ともに灰色である。東西溝SD558出土。

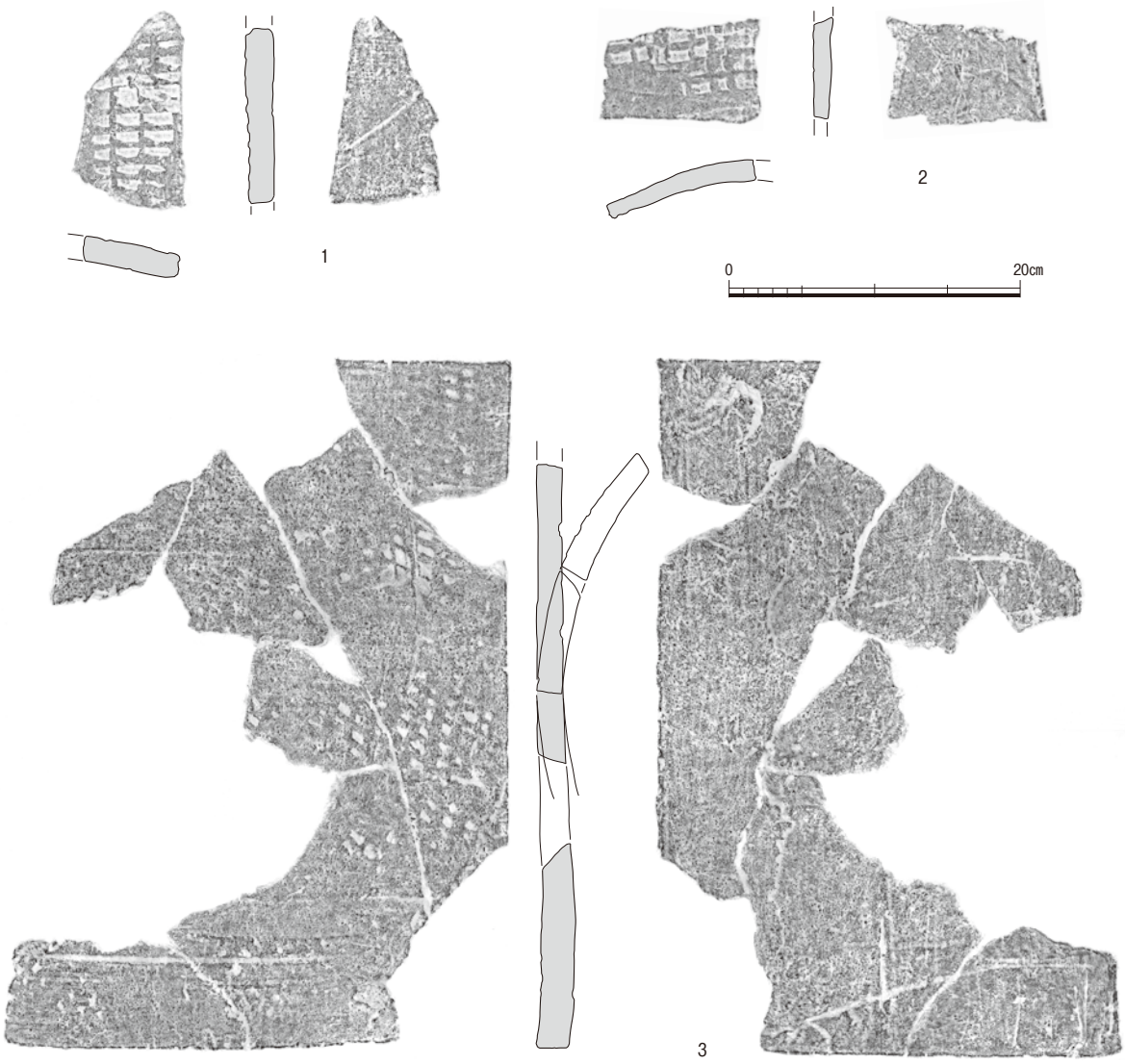


Fig. 83　平瓦 1 類　1：5

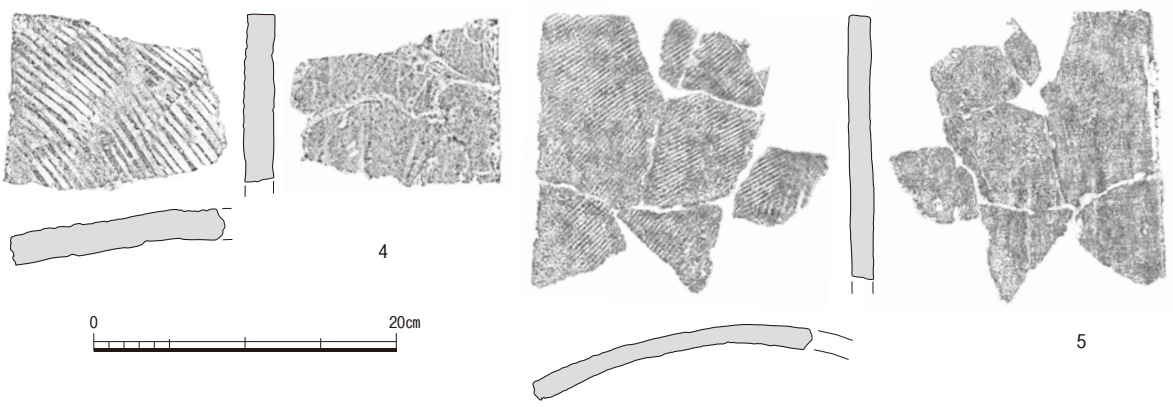


Fig. 84　平瓦 2 類 A　1：5

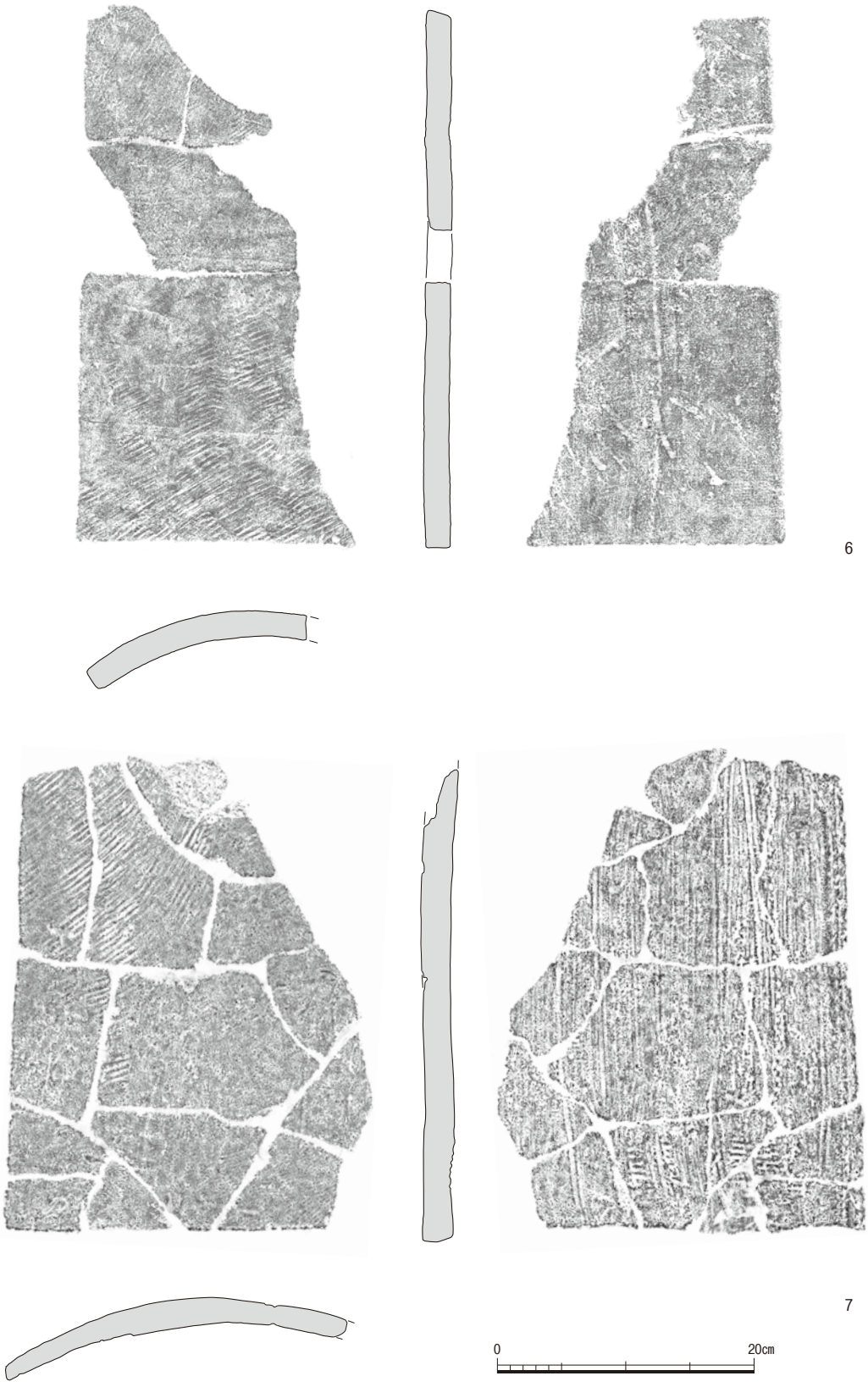


Fig. 85　平瓦２類Ｂ　1：5

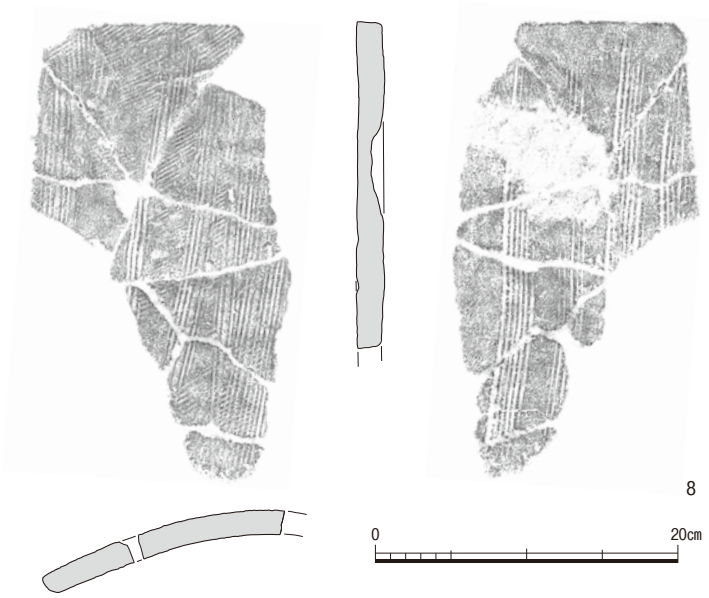


Fig. 86　平瓦２類Ｃ　1：5

２類Ｃ（Fig.86-８，Ph.55-８）　線幅１㎜、12本／３㎝の密度の刻線を刻んだ叩き板を用いるもの。凸面のハケ目は縦位で、板状工具の幅は2.0㎝前後。

８は狭端の一部を残す。側面は狭端寄り約5.0㎝の範囲が無調整、残りをｂ手法で調整し、面取りは施さない。凹面側には、凸面調整に用いたものと同じとみられる板状工具で側板の凹凸をならす。胎土に１～２㎜大の砂粒を多く含む。軟質で、内・外面ともににぶい橙色である。東西溝SD558出土。

ⅲ　３　類

粘土板桶巻き作りの平瓦のうち、凸面の調整により２次成形に用いた叩き板の痕跡を残さないものを平瓦３類とした。分割手法や側面調整、胎土や焼成に「花組」の瓦の多くと共通する特徴が認められる。点数が少ないため、細分せず個別報告する（Fig.87-９～11，Ph.56-１・２）。　**平 瓦 3 類**

９は凸面にハケ目を施し、広端部に補正の叩き締めを加える。補正タタキの叩き板は無文とみられる。凹面は側板の段差をナデにより平坦にする。広端部に同心円文の当て具痕を残す。側面調整はａ手法。胎土に１㎜未満の砂粒を多く含む。軟質で、内・外面ともに橙色である。第１次調査区石田トレンチ（埋戻土）出土。11は凸面にナデを施し、広端部を無文タタキで補正する。これに対応する当て具痕を凹面に残す。凹面側縁に撚り紐の分割界線を残す。側面調整はａ手法。精良な胎土に１㎜未満の砂粒をわずかに含む。やや硬質で、内・外面ともに灰色である。流路NR310出土。10は凸面にナデを施す。凹面は無調整だが、広端寄り約1.0㎝の範囲に面取りを施す。凹面側縁に撚り紐の分割界線を残す[46]。側面調整はａ手法。広端面に３～４条の浅く細い弧線がみられる。胎土は精良。やや軟質で、内・外面ともに橙色である。第２次調査区出土。なお、10と同様の弧線をもつ瓦が石神遺跡第21次調査でも出土しており（Fig.87-12）、櫛歯状工具を広端面に当てながら回転台を利用して施文したこと、および軒先に用いられた可能性が指摘されている[47]。軒瓦としての使用に関しては、資料の増加をまって判断したい。

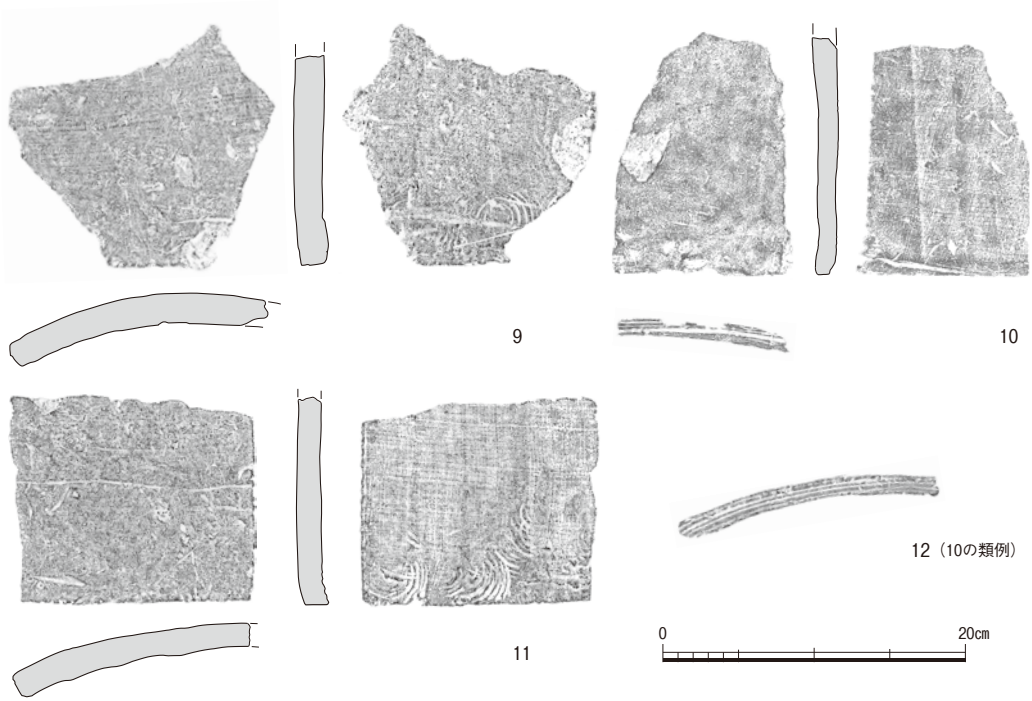


Fig. 87　平瓦３類　1：5

iv　4　　類

平瓦４類　粘土板桶巻き作りの平瓦のうち、格子タタキないし斜格子タタキで成形し、かつ側面調整がｃ手法のものを平瓦４類とした。このうち、タタキ痕の一部をナデないしハケ目により消すもの（花谷浩のいう板ナデ調整[48]を含む）をＡ、調整不明のものをＢとし、Ａは叩き板の違いに基づき細分した。

４類A1（Fig.88-13，Ph.56-３）　線幅２～３㎜の格子（1.2～1.5㎝間隔の刻線×0.6～1.3㎝間隔の刻線）を刻んだ叩き板を用いるもの。タタキ痕は正方形と長方形が混在する。板ナデによりタタキ痕の一部を消す。

13は凹面に縦ナデを、凹面側縁に面取りを施す。精良な胎土に１～２㎜大の砂粒を含む。硬質で、内・外面ともに青灰色である。飛鳥池遺跡出土の平瓦７類C1に似るが、叩き板が同一か否かは判断できない。第２次調査区出土。

４類A2（Fig.88-15～17，Ph.56-４）　線幅１～２㎜の斜格子を刻んだ叩き板を用いるもの。飛鳥池遺跡出土の平瓦８類Ｄにあたり、複数のタタキ痕が共存するものもある（斜格子タタキと異なるタタキを含む）。第１～４次調査区では６点が出土し、飛鳥池遺跡出土の平瓦８類D1にみられる斜格子タタキ痕（約1.0㎝間隔の刻線×約1.2～1.5㎝間隔の刻線、交差角約80°）と、D2にみられる斜格子タタキ痕（約1.0㎝間隔の刻線×約1.0㎝間隔の刻線、交差角35～40°）に加え、D3にみられる「＊」字形のタタキ痕（数条の線を多方向に組み合わせたもの）を確認した。いずれも精良な胎土に１～２㎜大の砂粒を含み、硬質なものが多い。

15は上記のうちD1にみられるタタキ痕を残す。凹・凸両面とも一部にナデを、凹面側縁に面取りを施す。凹面には糸切痕（Ur）を明瞭に残す。内・外面ともに灰色である。中世バラス溜出土（飛鳥寺1982C調査出土の破片と接合）。16はD1・D2の２種類のタタキ痕が共存する。凸面は一部にナデを施し、側縁を幅1.0㎝程面取りする。凹面は縦位のハケ目調整。内・外面と

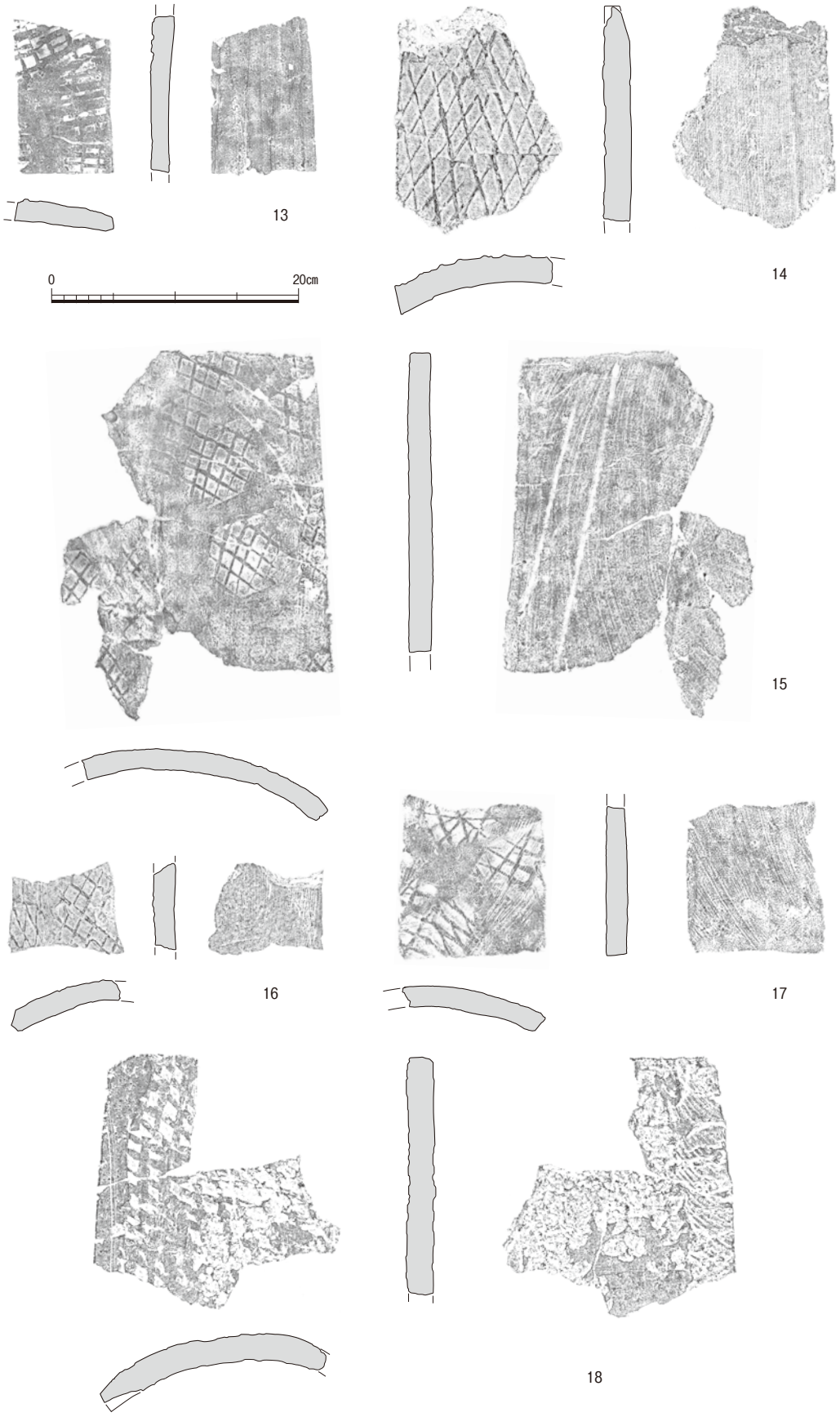


Fig. 88　平瓦 4 類　1：5

もに橙色である。第１次調査区包含層出土。17はD2・D3の２種類のタタキ痕が共存する。凹面は一部にハケ目を施し、側縁を幅約0.8cm面取りする。凸面はハケ目のちタタキを施し、さらにその一部をナデ消す。内面は灰色、外面は橙色である。第２次調査区出土。

４類A3（Fig.88-18，Ph.56-５）　線幅約４㎜の斜格子（約1.2cm間隔の刻線×約1.6cm間隔の刻線、交差角65～70°）を刻んだ叩き板を用いるもの。

18は狭端の一部を残す。凹面にはナデを施すが、粘土板合わせ目（Ｚ型）に沿って粘土が剝離しており、剝離面に糸切痕を残す。凸面は側縁に幅2.5cm程の面取りを施す。精良な胎土に１㎜大の砂粒をわずかに含む。硬質で、内・外面ともに灰色である。叩き板や凹面調整、幅広の面取りを施す点が飛鳥池遺跡出土の平瓦８類A1に似る。第２次調査区出土。

４類Ｂ（Fig.88-14，Ph.56-６）　線幅約１㎜の斜格子（1.6～1.8cm間隔の刻線×1.3～2.6cm間隔の刻線、交差角45～50°）を刻んだ叩き板を用いるもの。残存する部分は凸面無調整であるが、小片のため、欠損部位を調整している可能性を考慮しＢに分類した。

14は狭端の一部を残す資料。凹面は調整せず、凹面狭端に面取りを施す。糸切痕（Ur）を残す。凹・凸両面とも側縁に面取りは施さない。第１次調査区包含層出土。このほか、側板の凹凸を平坦にする程度のナデを施す個体も出土した。いずれも胎土に１～５㎜大の砂粒を多く含む。硬質で、内・外面ともに灰色ないし青灰色である。飛鳥池遺跡出土の平瓦８類C1に凹・側面の調整、胎土、焼成の特徴などが近似するが、８類C1は凸面の広い範囲にナデを施す点が異なる。叩き板が同一か否かの判断も難しい。

v　５　　類

平瓦５類　粘土板桶巻き作りの平瓦のうち、縦位の縄タタキで成形するものを平瓦５類とした。いずれも縄は１段Ｌ。残存する範囲に凸面調整はみられない。点数が少ないため分類名は付さず、細片を除いた２点を個別報告する（Fig.89-19・20，Ph.56-７）。

19はタタキ痕が瓦の長軸に対し傾斜する。凹面は側板の凹凸を平坦にする縦ナデを施す。胎土に１～５㎜の砂粒を多く含む。硬質で、内・外面ともに灰色である。掘立柱建物SB520柱穴出土（掘方・抜取穴のいずれかは不明）。20はタタキ痕が瓦の長軸に平行する。凹面は一部にナデを施すものの、糸切痕、粘土板合わせ目（Ｚ型）、布圧痕を残す。凹・凸両面とも側縁に面取りは施さず、側面はｃ手法で調整する。胎土に１㎜大の砂粒を多く含む。硬質で、内・外ともに灰色である。第２次調査区出土。

vi　６　　類

平瓦６類　凸面に布目と側板痕を残す瓦である。４点出土。細片を除いた２点を報告する（Fig.89-21・22，Ph.57-１）。

21は剣先形を呈する側面を残す。凸面の布目は大半が縦ケズリにより消される。22は21に比して凸面のケズリ調整の及ぶ範囲がやや狭い。いずれも凹面は丁寧に横ナデを施す。精良な胎土に１㎜大の砂粒をわずかに含む。極めて硬質で、内・外面とも灰色ないし青灰色である。成形・調整法および胎土や焼成の特徴から、川原寺創建瓦の１つで荒坂瓦窯産とされる川原寺平瓦Ⅵ類（小谷徳彦による分類[49]）とみてよいだろう。21は第２次調査区、22は流路NR310出土。

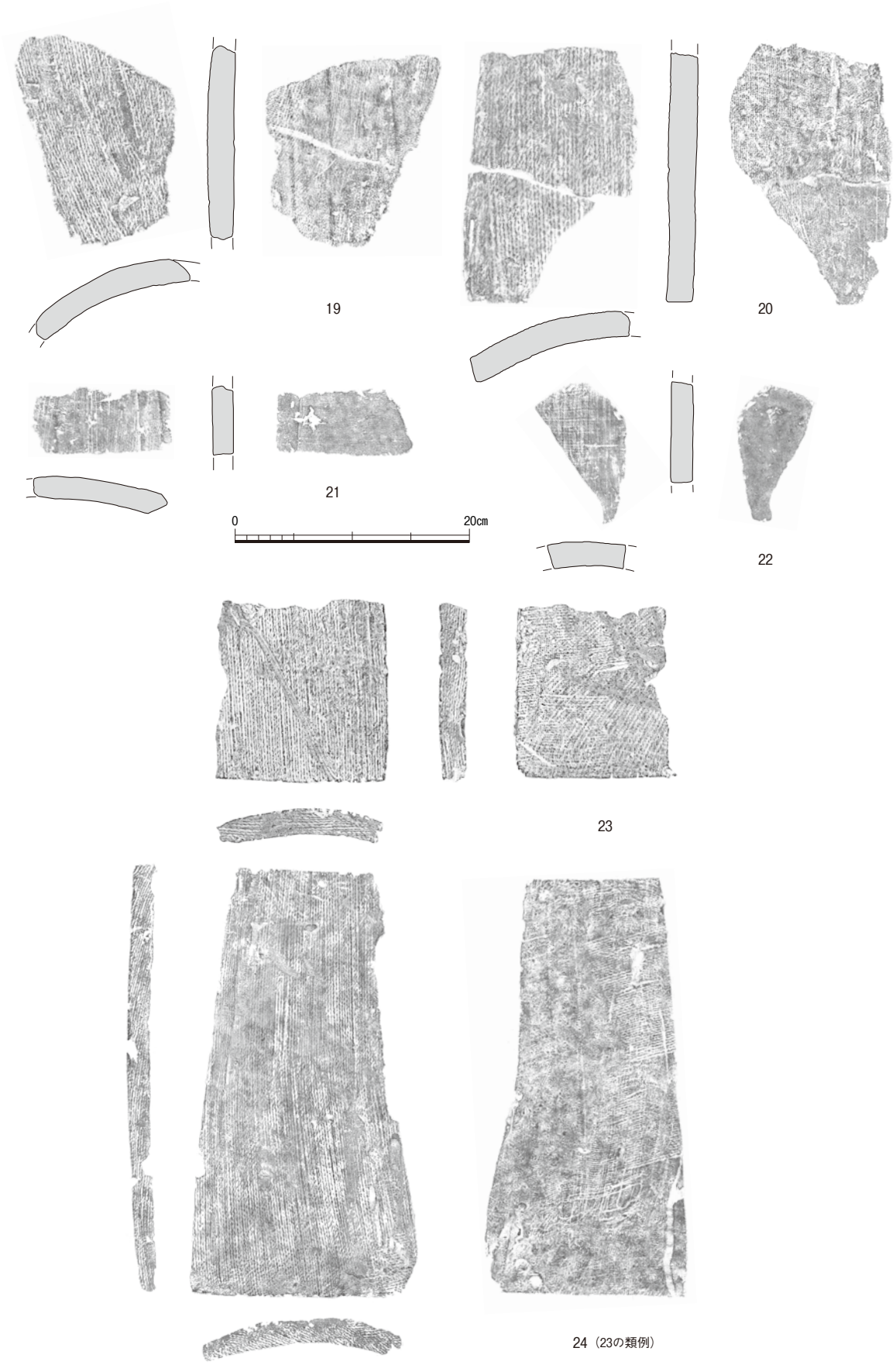


Fig. 89　平瓦５・６・７類　1：5

ⅶ　7　　類

平瓦７類　縄タタキ痕のある瓦で明確な側板痕が認められないものが数点出土している。このうち、一枚作りの可能性があるものを平瓦７類として報告する（Fig.89-23，Ph.57-２）。

23は粘土板技法で成形し、凸面のほか、凹面の一部（主として側縁）、側面、広端面を縄タタキで整える[50]。縄目の密度は14～15本／３㎝。凹面には糸切痕（Ur）および布圧痕を残す。布端は確認できないものの、側板痕がないことや側面にタタキを施すことから、一枚作りの可能性が高い。胎土は精良。硬質で、内面は薄灰色、外面は青灰色である。第３次調査区床土出土。同様の特徴をもつ瓦が、第４次調査区からも１点出土している。

３面以上に縄タタキ痕のある例は、歌姫西瓦窯（Fig.89-24，Ph.57-３）やその供給先である法華寺（下層遺構）、同じく歌姫西瓦窯からの供給が推定される平城京左京三条二坊六坪などから出土している[51]。23はこれらの類例と縄目（杉山洋のいうa4種[52]に近似）や胎土、焼成の特徴も類似することから、確証は得られないものの、何らかの事情により歌姫西瓦窯ないしその供給先からもたらされた可能性が指摘できる。

F　ヘラ描瓦

ヘラ描瓦　計４点のヘラ描瓦が出土した。丸瓦の凸面に記されるものが３点、平瓦に記されるものが１点である（Fig.90-１・２，Ph.57-４）。細片を除いた２点を報告する。

１は文字を記した丸瓦で、かろうじて２文字を残す[53]。向かって右側は「四」や「罡（岡）」の可能性があるものの、特定は困難である。左側は天地不詳。凹面は縦位のハケ目調整、凸面はナデ調整。胎土は粗く、１～２㎜大の砂粒を含む。硬質で、内・外面ともににぶい赤褐色である。第１次調査区石田トレンチ（埋戻土）出土。２は戯画ないし記号の類を描いた丸瓦。数本の直線と曲線を組み合わせるが、何の表現であるか判然としない。類例が山田寺跡から出土

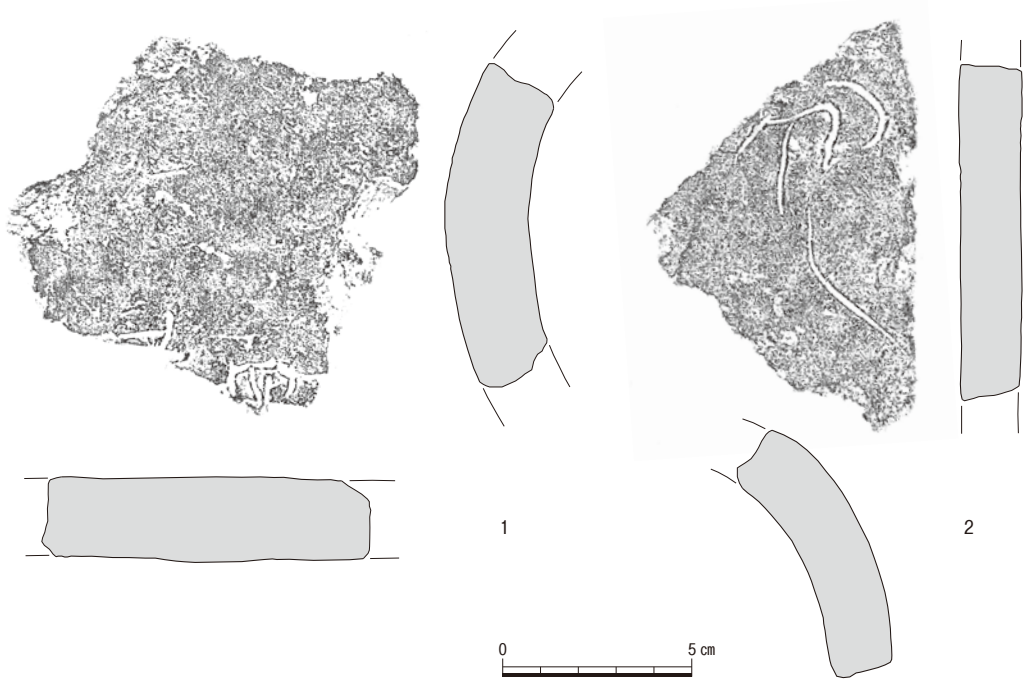


Fig. 90　ヘラ描瓦　１：２

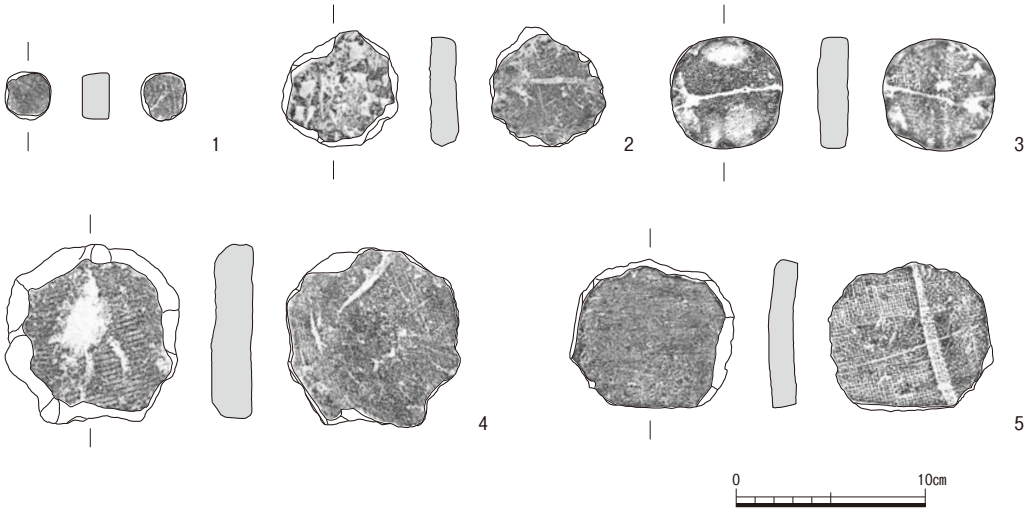


Fig. 91　瓦製円板　1：4

している[54]。凹面は無調整、凸面はナデ調整で仕上げる。側面は分割破面を調整しないａ手法。胎土に１～２㎜大の砂粒を多く含む。やや軟質で、内・外面ともに灰色である。第３次調査区整地土Ｂ土出土。

G　瓦製円板

瓦から加工した円板が第３次調査区で１点、第４次調査区で８点出土した[55]。直径の最大値が　瓦 製 円 板
3.0cm未満の小型のもの、4.5～7.0cmの中型のもの、8.5～10.0cmの大型のものがあり、内訳は小型１点、中型４点、大型４点である。５点を報告する（Fig.91-１～５，Ph.57-５）。

１が小型、２・３が中型、４・５が大型である。１は最大径2.4cm、厚さ1.3cm、硬質。２は最大径6.4cm、厚さ2.0cm。凸面格子タタキ、凹面ナデ調整の硬質な平瓦を加工する。３は最大径6.3cm、厚さ1.6cm。凸面ナデ調整、凹面無調整の軟質な平瓦を加工する。４は最大径10.0cm、厚さ2.2cm。凸面平行タタキ、凹面一部ナデ調整、側面調整ａ手法の硬質な平瓦を加工する。５は最大径8.9cm、厚さ1.4cm。凸面ナデ調整、凹面無調整、側面調整ｃ手法の硬質な平瓦を加工する。出土した９点のうち外周を研磨するのは１・３のみで、残る７点は打ち欠きの痕跡を残す。１は第４次調査区整地土Ｂ、２は第４次調査区床土、３は南北溝SD332西側石抜取、４は第４次調査区、５は土坑SK641出土。

円板の性格や用途は、これまでのところ判然としていない。第１次～第４次調査区から出土した８点の形態的特徴や出土状況からも、性格や用途を絞り込むことはできなかった。

１）古代のものに限れば、軒瓦は162点、丸瓦・平瓦は約166kgで、それぞれ、2021年度までに石神遺跡の発掘調査（石神遺跡第１～21次・1990-１次・1996-１次・飛鳥藤原第114-１次・209次・214次調査）で出土した古代の軒瓦総数の５割強、丸瓦・平瓦総量の１割強にあたる。調査ごとに検出面や遺物の取り上げ方に違いはあるが、その点を差し引いても、軒瓦の出土数が第１～４次調査区において傑出していることはあきらかである。

２）花谷 浩「京内廿四寺について」『研究論集Ⅺ』奈文研、2000年。花谷 浩「石神遺跡の瓦」『紀要2004』。
飛鳥寺の瓦には、正式な型式番号をもつものと、正式な型式番号をもたず仮番号が付与されて

いるものがあるが、本稿では仮番号であってもそれを踏襲することにした。

3）奈文研『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』1996年。

4）納谷守幸「軒丸瓦製作手法の変遷―飛鳥地域出土の７世紀前半代の資料を中心にして―」『明日香村文化財調査研究』第４号、明日香村教育委員会、2004年。
「花組」や後述の「星組」という用語に関して、それぞれに特徴的な文様・技法をもつ瓦の集合を指して使われる場合があるが、本稿では納谷の意に忠実に、それらの瓦を製作した瓦工集団およびその系統を指すことにする。

5）毛利光俊彦「軒丸瓦の製作技術に関する一考察―笵型と枷型―」『畿内と東国の瓦』東京国立博物館、1990年。以下、笵についてはこの分類にしたがって報告する。

6）このほか、橘寺表採品に飛鳥寺Ⅰ型式に近似する瓦があるが（保井芳太郎『大和上代寺院志』大和史学会、1932年）、同笵か否かは不明。

7）奈文研「飛鳥寺の調査（1992-１次）」『藤原概報23』1993年。

8）本稿では特に断りがない限り、軒丸瓦の瓦当厚は弁央で計測した。

9）花谷 浩「第Ⅳ章　3　瓦塼類」『飛鳥池報告』奈文研、2021年。

10）中房に向かって伸びる直線部分は、本来的には隣り合う蓮弁の隙間から顔を出す間弁の表現にあたるはずであるが、蓮弁が盛り上がりに欠ける点や間弁と蓮弁の先端が連結する点などから、蓮弁どうしの界線と化した印象を受ける。本稿で触れる弁端点珠式や角端点珠式も同様で、特に後者は上述の表現に対する意識を完全に欠いているといえるだろう。

11）花谷、前掲註９）。

12）花谷 浩は、Ⅵ型式の弁端の形状や11弁である点が、立部寺（定林寺）創建軒丸瓦や檜隈寺軒丸瓦Ⅰ型式Ａと似ることから、これらが「花組」の中でも飛鳥寺Ⅰ型式ａの製作者とは異なるグループの所産であると推定する。花谷 浩「飛鳥寺・豊浦寺の創建瓦」『古代瓦研究Ⅰ』奈文研、2000年。

13）花谷、前掲註12）。清水昭博『古代日韓造瓦技術の交流史』清文堂、2012年。
Ⅰ型式とⅥ型式を「花組」の中のグループ差とみる点において、花谷・清水の見解は一致している。ただし、花谷が渡来系氏族のかかえる瓦工の関与を想定する一方で、清水はこのグループ差が工人差に起因するものであるか時間差を反映するものかはあきらかでないと述べる。

14）大脇 潔「飛鳥時代初期の同笵軒丸瓦―蘇我氏の寺を中心として―」『古代』第97号　早稲田大学考古学会、1994年。

15）花谷、前掲註９）・12）。

16）このほか、檜前寺（第172次）・水落遺跡（第７次）・藤原宮（第41-７次）・雷丘北方遺跡（第75-19次）でも飛鳥寺Ⅲ型式の可能性が高い弁端点珠式の小片が出土している。

17）笵傷進行と間弁先端の形状変化に関する花谷の見解（前掲註９））では、「笵傷３段階」で間弁先端の形状は紡錘形に近いものから銀杏の葉状を呈するものになり、その後「笵傷４段階」において再び紡錘形に近いものに戻ることになる。しかし実際のところ、花谷のいう「笵傷４段階」における間弁先端の形状は「笵傷１・２段階」のものに近く、また間弁がもっとも肥大しているのは「４段階」ではなく「３段階」のものである。花谷のいう「笵傷３段階」の個体には、「４段階」の個体よりも笵傷の増えた個体もある。以上から鑑みると、間弁先端の形状は紡錘形から銀杏の葉形へと単方向に変化すると考える方が自然であるが、この点も含め、飛鳥寺Ⅲ型式の彫り直しや笵傷進行について再検討する必要があるだろう。

18）花谷、前掲註９）。

19）第１～４次調査区から出土した角端点珠式軒丸瓦は、軒丸瓦総数の約35％にあたる55点である。このうち種を認定できたもののみを報告する。

20）水落遺跡（第２次）および飛鳥寺（1996-１次）出土の角端点珠式軒丸瓦も石神Ａ型式とする意見があるが（花谷、前掲註９））、前者については１弁に満たない細片のため、後者については石神Ａ型式に比して瓦当文様が全体的にやや小さいため、確証は得がたい。

21）花谷、前掲註２）・９）。

22）花谷が「石神Ａとは笵傷が一致しないのでこの型式と認めた２点」（前掲註９））については、瓦当の残存状況が良好でないため、Fig.75-11の個体と同笵か否かの判断がつかなかった。この２点についても、今後の再検討を要する。

23）井内 潔「屋瓦遠隔地生産の一側面」『古代文化』44-１、古代学協会、1992年。大脇、前掲註14）。
24）上原真人『歴史発掘11　瓦を読む』講談社、1997年。花谷 浩「瓦からみた飛鳥寺の造営、そして飛鳥池遺跡」『古代』第141号、早稲田大学考古学会、2018年。
25）花谷、前掲註24）。
26）花谷 浩「飛鳥寺軒瓦拾遺」『年報1996-Ⅰ』。
27）金子裕之「軒瓦製作技法に関する二、三の問題―川原寺の軒丸瓦を中心として」『文化財論叢』奈文研、1983年。
28）花谷 浩「飛鳥の川原寺式軒瓦」『古代瓦研究Ⅲ』奈文研、2009年。
29）花谷 浩「飛鳥寺東南禅院とその創建瓦」『瓦衣千年―森郁夫先生還暦記念論文集―』森郁夫先生還暦記念論文集刊行会、1999年。
30）飛鳥池遺跡出土の同型式には縦縄タタキ痕を残すものがある（花谷、前掲註９））。Fig.78-１もかすかに縄目らしき痕跡を残す。
31）第192-１次・第197-２次調査で出土している。
32）花谷、前掲註２）。
33）飛鳥寺Ⅵ型式は、奈良市埋蔵文化財調査センター『奈良市埋蔵文化財調査概要報告　昭和61年度』1987年、45頁の28と同笵。28は同頁掲載の26・27に近似するが、第一に中心飾りが異なるほか、唐草基部の流れ方や葉・蕾状のものの形態、珠文位置などにもわずかに違いが認められる。以上は、奈良市埋蔵文化財調査センターで実施した元興寺出土資料との照合調査で確認した内容であり、同センターの原田憲二郎氏から得たご教示を含む。なお、飛鳥寺では26・27は出土していない。
34）毛利光俊彦「第Ⅵ章　考察　１　屋瓦　Ａ　平城宮・京出土軒瓦編年の再検討」『平城宮発掘調査報告Ⅻ―内裏の調査Ⅱ―』奈文研、1991年。
35）元興寺から飛鳥寺への飛鳥寺Ⅵ型式の供給については、以下の指摘がある。中井公「平城京初期官寺の建立と瓦生産」『伊達先生古稀記念　古文化論叢』伊達先生古稀記念論集編集委員会、1997年。
36）古宮遺跡出土垂木先瓦については、末ノ奥窯産とされる豊浦寺軒丸瓦Ⅲ型式Ｄと胎土や焼成の特徴が共通するとの指摘がある（小澤 毅・西川雄大「飛鳥の船橋廃寺式および細弁蓮華文軒丸瓦」『古代瓦研究Ⅰ』奈文研、2000年）。外面が灰白色で軟質のものと外面が灰褐色でやや硬質のものがあり、石神遺跡出土垂木先瓦と似るのは前者である。
なお、Fig.79-２は高田貫太「甘樫丘東麓遺跡の調査―第146次」『紀要2007』、Fig.79-３は石田由紀子「甘樫丘東麓遺跡の調査―第151・157次」『紀要2009』に詳しい。
37）佐原 真「平瓦桶巻作り」『考古学雑誌』58-２、日本考古学会、1972年。大脇 潔「丸瓦の製作技術」『研究論集Ⅸ』奈文研、1991年。大脇 潔「７世紀の瓦生産―花組・星組から荒坂組まで―」『古代』第141号、早稲田大学考古学会、2018年。
38）花谷、前掲註９）。
39）Fig.80-２は糸切痕のようにも見えるが、布目を切っていることからハケ目と判断できる。
40）凹面は無調整、凸面はナデにより仕上げるため叩き板の種類は不明。凹面側から分割截線を入れる。胎土に１～２mm大の砂粒を多く含む。やや軟質で、内・外ともに橙色である。胎土や調整の特徴は、「花組」の瓦に多く見られるものである。
41）第１～４次調査区で出土したＡ手法の有段式丸瓦は、概ね①模骨上面に折り曲げた粘土板の上に玉縁を付加するもの、②模骨上端から少し上に突き出た粘土板の内側に玉縁を接合するもの、③模骨上端にわずかに達しない粘土板に玉縁から肩にかけての粘土を接合するものに分かれる。①②が③に比して多いものの、いずれか２つの中間の様相を示すものも少なからずある。こうした筒部粘土と玉縁部粘土の接合位置の違いが、単に切り出した粘土板の長さに応じて処理した結果なのか、それ以外の要因によるものなのかは、判断できなかった。
なお、大脇（前掲註37））によるＡ-１手法が①、Ａ-２手法が②に対応し、納谷（前掲註４））のａ手法が②・③、ｂ手法が①に対応する。
42）有段式丸瓦87点のうち玉縁の成形法が判明したものは75点で、うち73点がＡ手法である。
43）第１～４次調査区出土の軒丸瓦の中でもっともこれに胎土や焼成の特徴が近いものは石神Ａ型

式であるが、瓦当裏面に残る接合痕跡から、石神Ａ型式の丸瓦の径（外周）が瓦当径とほぼ同じ17.5㎝前後と判断できるのに対し（Fig.75-９・10参照）、Fig.82-８の個体は外周の径が14.5㎝と小さく、候補から外れる。

44）日本における玉縁Ｃ手法の初現は定かでない。奈文研『古代瓦研究Ⅰ』（総合討議）、2000年。

45）大脇、前掲註37）、花谷、前掲註９）・12）など。

46）Fig.87-10は分割界線が広端面に届いていることから、粘土円筒を桶から外し天地を返して広端部を乾燥させる際、分割界線のある範囲で粘土板を切り落としていると判断できる。また、広端沿いに凹面を面取りするほか、全体が扁平であるといった特徴をもつ。こうした手の込んだ作りをする点から、軒先に用いられた可能性は高い。

47）石田由紀子「石神遺跡（第21次）の調査―第156次　瓦類」『紀要2009』。

48）花谷、前掲註９）。

49）小谷徳彦「川原寺の創建瓦」『古代瓦研究Ⅲ』奈文研、2009年。

50）一次成形法の如何を問わず凸面以外にタタキを施す例があるが、以下の文献に示されるように、成形にかかる補正ないし補足の叩き締めの痕跡と考えられる。杉山 洋「Ⅳ章　遺物　２　瓦塼類」『平城京左京三条二坊六坪発掘調査報告』奈文研、1986年。李 銀眞「４　遺物　（３）瓦類」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　周山廃寺』京都市埋蔵文化財研究所、2019年。奈文研『古代瓦研究Ⅶ』（平城宮式軒瓦の展開１　総合討議）、2017年。

51）左京三条二坊六坪出土例については、段顎ＩＬの6667Ａを生産した奈良山丘陵の「未知の窯」産という可能性も否定できないが、杉山（前掲註50））が推定するように、複数面を叩く軒平瓦・平瓦の出土が確認されている生産地が歌姫西瓦窯に限られることから、現時点では歌姫西瓦窯産とみておく。

52）杉山、前掲註50）。

53）釈読は山本 崇（文化遺産部歴史史料研究室）による。

54）奈文研『山田寺報告図版編』2002年　Ph.210－39・42・43・47などに、直線と曲線を組み合わせる点が似る。ただし、上記の山田寺跡出土瓦は、いずれも平瓦に施文されている。

55）石橋茂登は石神遺跡から出土する円板の数が近隣の他遺跡を圧倒すると述べるが、これには人為的に円形を作り出したものか、判断が難しいものが多数含まれている。いずれも直径2.0㎝にも満たない零細資料である。そこで本書では、打ち欠きや側面研磨があきらかな瓦製円板９点を載せるにとどめた。石橋茂登「飛鳥藤原の瓦製円板」『紀要2004』。

第3節　木 製 品

木製品の大半は、石神遺跡第4次調査において検出した井戸SE800から出土している。井戸枠内の層序は4層に大別されており、各層からは刀子柄や楔、横櫛、斎串などの製品とともに、加工棒、板状や円形の穿孔をもつ用途不明品、雑木が出土している。とくに井戸枠の底面から15～35cmの高さに開けた取水口からは、楔状を呈する木製品や加工痕のある細片が多く出土した。以下、井戸枠内出土の木製品を出土層位別に詳述する。木製品の分類は『木器集成図録近畿古代編』（奈文研史料第27冊）に準ずる。井戸枠内埋土の層序は、第Ⅳ章4節および本章1節を参照されたい。また、木製品の木取りや樹種等はTab.15・16（Ⅵ章2節）に示した。

A　SE800井戸枠内出土木製品（Fig.92～100，Ph.58～61）

ⅰ　埋土最上部出土木製品（Fig.92，Ph.58）

刀子柄（Fig.92-1）　柄の中央部分で刀背方向に曲折するⅠ式の刀子柄で、表面には擦痕が斜め方向に残る。柄を固定し、滑り止めの目的で紐状のものを巻き付けた痕跡と考えられる。柄の断面形は楕円形で、柄元にかけて厚さを減じる。柄元は一段の打欠きをめぐらせ、表面は丁寧に削って滑らかに整えている。鏃の着装の痕跡は確認できなかった。茎孔は長三角形の両

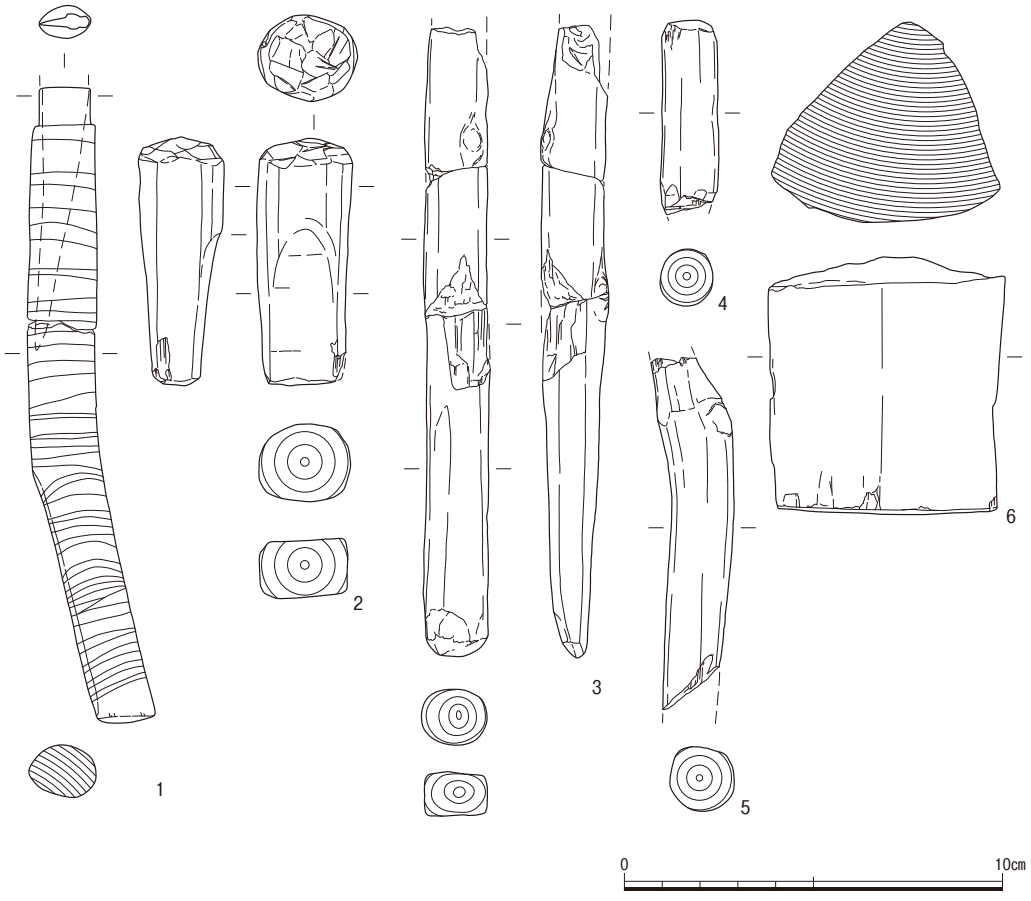


Fig. 92　SE800埋土最上部出土木製品　1：2

辺が突出する菱形に近い形態で、刀身は平造りであったことがわかる。残存長16.8cm、幅1.8cm、最大厚1.4cm。樹種はクスノキ科の芯去削出材[1)]。

楔（Fig.92-２）　全長のおよそ中ほどから削り面が始まる丸材型[2)]。基端部は細かなケズリにより丸みを帯びる。断面形は、基部は楕円形、先端近くは長方形を呈する。全長6.5cm、基部の幅1.8cm、厚さは最大で2.3cm。樹種はコナラ属アカガシ亜属の芯持丸木材。

加工棒（Fig.92-３～５）　コナラ属アカガシ亜属の芯持丸木材を用いた棒状品。３は中位が断面楕円形、下端部が断面長方形の加工棒。残存長16.5cm、最大径1.7cm。４・５は断面円形の加工棒。４は遺存する下端面に細かなケズリを施す。残存長5.1cm、最大径1.5cm。５は節が残り、「く」字状に緩やかに曲がる。残存長9.1cm、最大径1.7cm。

輪切り状木製品（Fig.92-６）　三角柱状を呈する用途不明品。最大厚6.1cm、高さ6.8cm。樹種はコウヤマキのみかん割材。

ⅱ　バラス層出土木製品（Fig.93, Ph.58）

斎　串（Fig.93-７）　両端を圭頭状につくり、上端近くの側面、左右一箇所に切込みをいれるＢⅢ式の斎串。片側の切込みは欠失する。上端両側縁はケズリによって面取りする。全長23.7cm、最大幅2.0cm。ヒノキ科の柾目材[3)]。

加工棒（Fig.93-８～11）　８は断面六角形に面取りした棒状品。中央は面に沿って刳込みを入れ、先端は削り細めて円頭形にかたどる。端部は面をもつ。形状から陽物形の可能性もあるが、亀頭部にあたる部分が中央に位置するなど、既存資料とは形状がやや異なる。全長11.0cm、最大幅2.2cm。樹種はヒノキの芯去削出材。９・10は断面円形の加工棒で、10は端部に向けて緩やかに弯曲し、端部は面をもつ。９は残存長14.0cm、最大厚1.8cm、10は残存長17.7cm、最大厚2.0cm。ともにクスノキ科の芯持丸木材。11は断面隅丸方形の加工棒。全面を細く長く削り出し、隅丸方形に整える。一面にススが付着する。残存長33.1cm、最大幅2.6cm。樹種はクスノキ科の芯持丸木材。

不明木製品（Fig.93-12）　針葉樹の板目材を方形に加工した板状品で、横断面は緩やかに弯曲する。表裏を細かく斫り、平坦に仕上げるが、片面の斫りはやや粗い。各側面も斜めに削り出して面取りを施す。片方の面には墨の痕跡がかすかに残るが、文字等の確認にはいたらなかった。全長10.3cm、幅9.5cm、厚さ1.8cm。

ⅲ　礫混砂出土木製品（Fig.94～96, Ph.59・60）

楔（Fig.94-13・14）　13は主面・側面を両面から削った後に、先端・基部を両面から細かく削って整える。さらに基端部に向けて細かく削り出す。割材ｂ型。全長5.8cm、最大幅3.8cm、基部の厚さ2.0cm。14は主面を数回に分けて先端部方向に削り出して、厚さを減じる。割材ｂ型。先端部に円孔があることから楔の転用品の可能性が考えられる。残存長11.6cm、最大幅3.5cm、基部の厚さ1.3cm。樹種はともにヒノキの板目材。

栓（Fig.94-15）　断面楕円形の栓。全長の中ほどからさらに細く削り、先端を尖らせる。頭部は多角形に削り出す。側面に３条の凹線状の切込みをもつ。全長10.3cm、最大厚9.7cm。樹種はヒノキの芯去削出材。

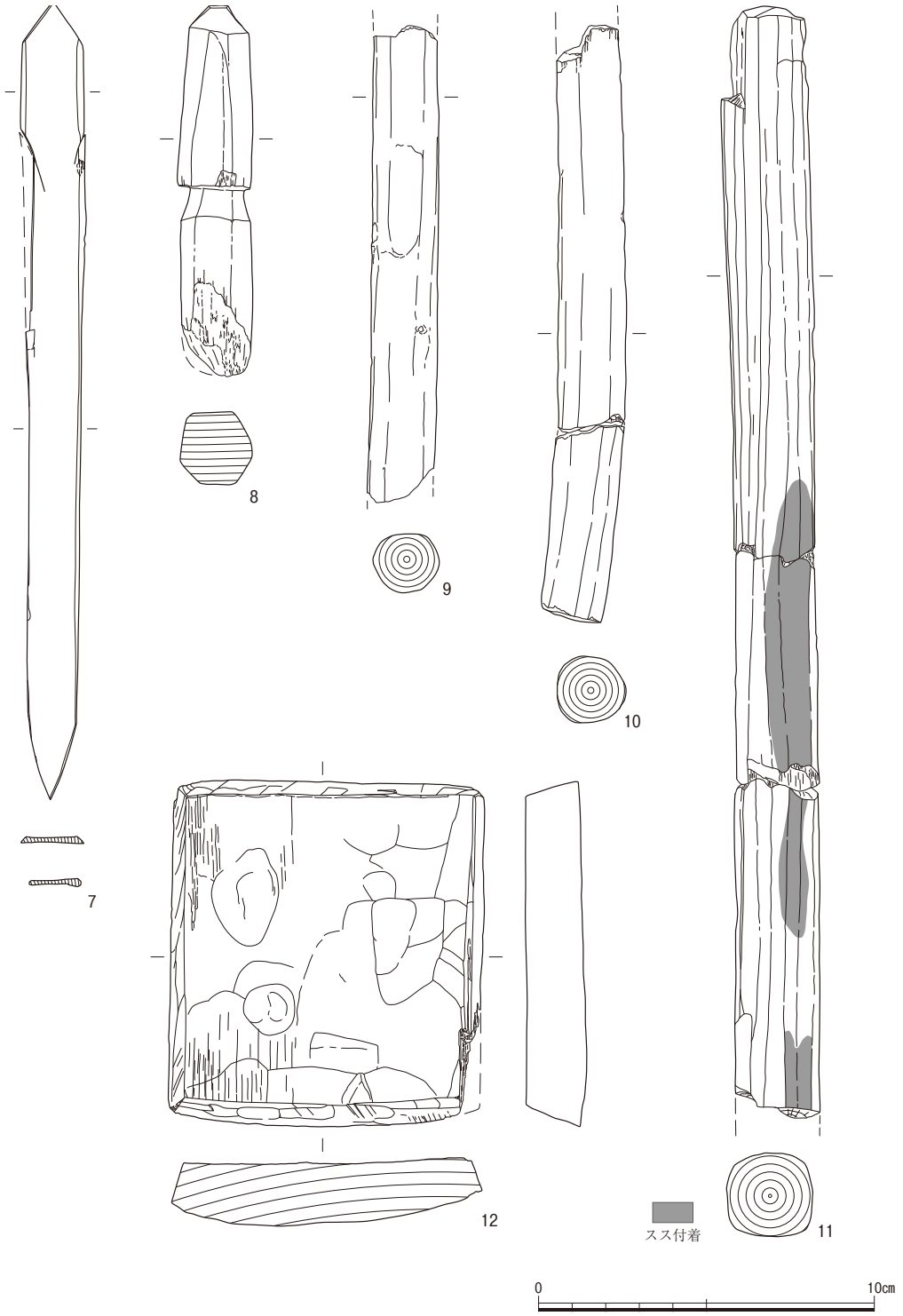


Fig. 93　SE800　バラス層出土木製品　1：2

蓋（Fig.94-16）　円盤状を呈する蓋。下半部は径を狭く断面逆「凸」字状にすることで、合せ口とする。中央には長方形の穴を２個穿つ。穴周囲に紐等の擦痕はみられなかった。直径5.0cm、最大厚0.9cm。樹種はヒノキの板目材。

刳　物（Fig.94-22）　円形鉢状を呈する刳物で、厚い底部からたちあがり、上方へ向けて極端に薄く仕上げる。口縁端部を欠く。底部中央に穴を穿ち、直径2.4cmの円形の栓でふさぐ。

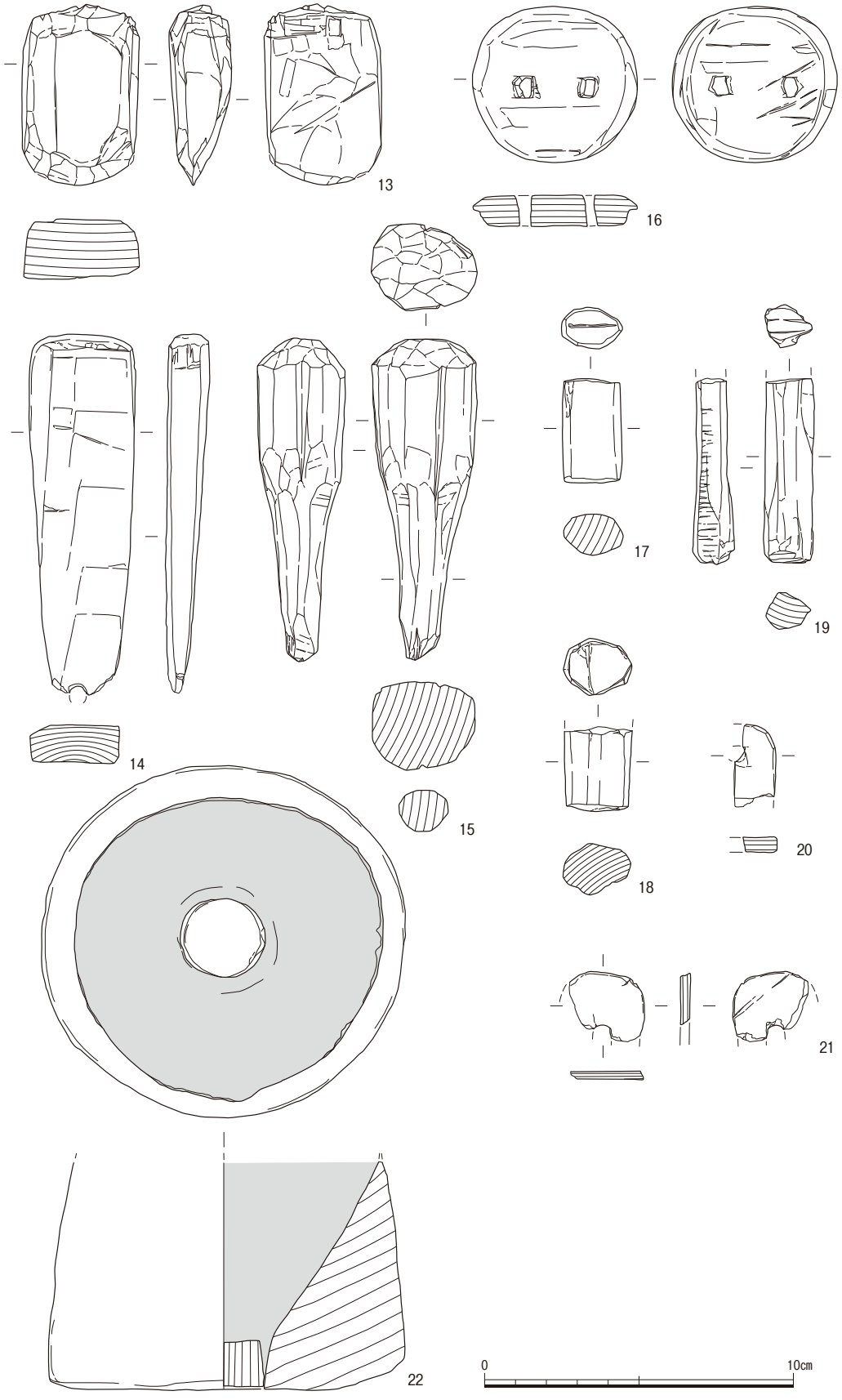


Fig. 94　SE800　礫混砂出土木製品（1）　1：2

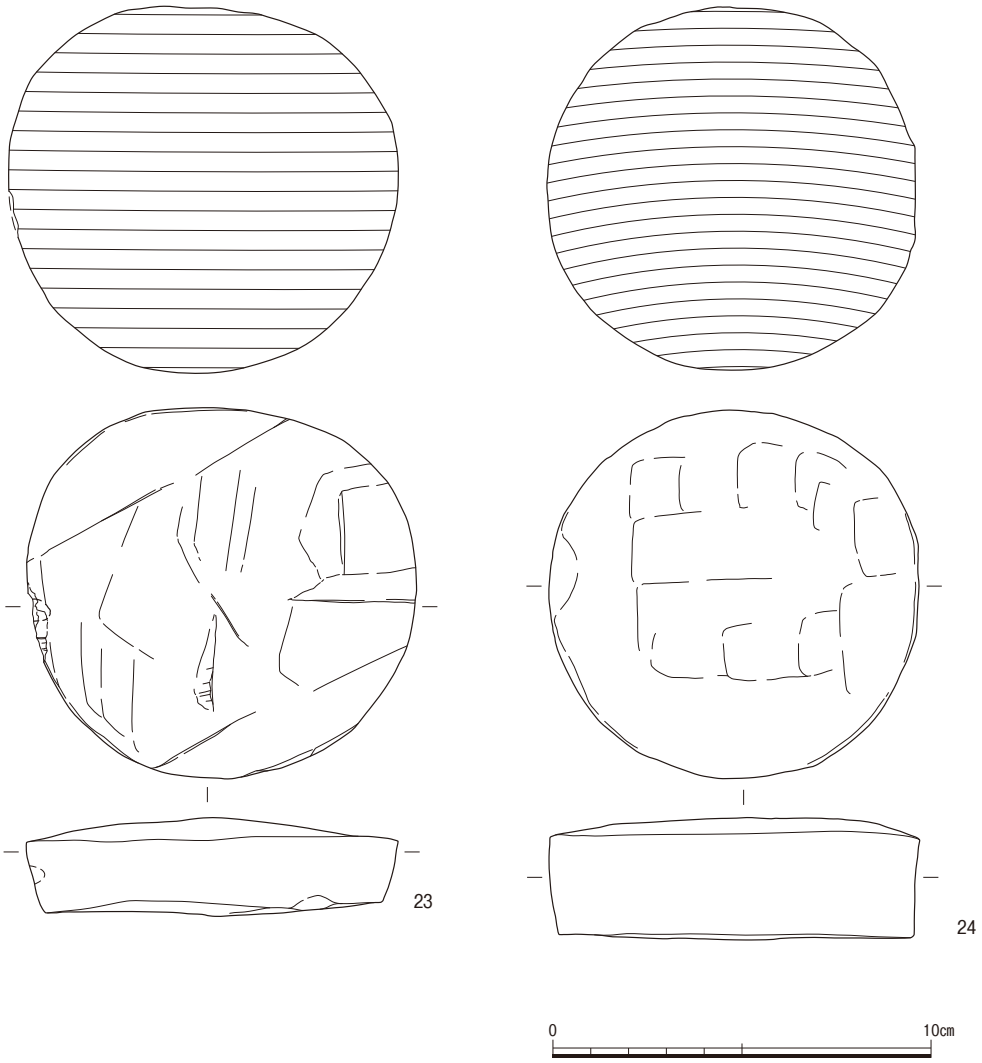


Fig. 95　SE800　礫混砂出土木製品（2）　1：2

とくに内面は滑らかに整えている。漆が底部の穴内面まで塗布されていることから、内面前面に漆を塗った後に円形の栓を嵌めている。栓に漆の塗布はみられない。用途不明品。横木取りで、残存高7.3cm、底径11.4cm[4)]である。

栓（Fig.95-23・24）　ともに円柱状を呈する。一面は細かな斫り痕が残る。23は直径10.1cm、厚さ2.1cmで、ヒノキの板目材。24は直径9.7cm、厚さ2.8cmで、ヒノキの芯去削出材。

板状品（Fig.94-20・21，Fig.96-31）　端部が楕円形を呈し、細板の表裏を平坦に削り出した板状品。中央に円孔を穿つ。20は残存長2.7cm、残存幅1.4cmで、スギの板目材。21は残存長2.2cm、残存幅2.4cmで、クスノキ科の板目材。31は表裏、両側面を平坦に削り出すが、一方の面に割裂面をわずかに残す。残存長26.4cm、幅2.4cm、厚さ0.4cm。樹種はヒノキの板目材。

加工棒（Fig.94-17～19，Fig.96-25～30）　17のみ完形品。18は断面杏仁形の棒状を呈し、一端は面取りによって平坦に整える。もう一端には1条の沈線がはしる。全長3.2cm、幅1.9cmで、樹種はスギの芯去削出材。18は断面不整方形の棒状を呈し、周囲を面取りにより整形する。両端部は平坦で、一方の面は線状にくぼむ。残存長2.7cm、幅2.2cm。樹種はカエデ属の芯去削出



Fig. 96　SE800　礫混砂出土木製品（３）　1：2（25のみ1：4）

材。19も断面不整方形の棒状品で、側面には細かな線状の加工痕がみられる。端面には線状の凹線がかすかに残る。残存長5.9cm、幅1.5cmで、樹種はマツ属複維管亜属の芯去削出材。17～19は工具の柄の可能性がある。25は棒状を呈し、先端を削り出して平坦に整える。側面には節が一部残る。残存長48.9cm、最大径2.4cm。樹種はウツギ属の芯持丸太材。先端部を平坦に削出して弭部分を作り出そうとした、藤原京右京七条一坊（藤原宮第75-15次）出土の丸木弓未製品と類似するが、樹種が異なるため[5)]、ここでは加工棒として報告する。26・27はウツギ属の中空の部位を利用した突頭棒。節のやや下から半裁し、表面を削って平坦に整え、両側から丸く削り出して端部は隅丸形をなす。外面には節が残る。26は両側から削り出して端部を尖らせる尖頭棒。残存長22.9cm、直径1.7cm、内径は0.5cm。27は残存長8.8cm、直径1.6cm、内径0.4cm。28は断面不整円形の棒状品で、端部を削って尖らせる。残存長1.8cm、直径0.9cm。樹種は

クスノキ科の芯持丸木材。29・30は断面円形の棒状品。29は残存長12.1cm、直径1.2cm。樹種はウツギ属の芯持丸木材。30は残存長20.8cm、直径1.7cm。コナラ属アカガシ亜属の芯持丸木材。

横櫛　このほか、平面長方形で肩部が角張るＡⅠ形式の横櫛が出土した。歯は全体の約３分の１が欠失するが、背と棟部は表面を丁寧に削り、滑らかに仕上げている。長さ9.5cm、幅4.1cm。

このほか図示しないが、礫混砂からは墨痕のある木製品（木簡）が１点出土した。

□　(61)×(20)×10　5081

上端切断、下端二次的切断か、左右両辺割れ。表はチョウナによる整形が施される。欠損により刃幅などは不明。裏は表面を腐食により損なうため加工は判然としない。オモテ面の上から36㎜程度に刃物による傷があり、この部分で切断しようとしたものとみられる。また、上から52㎜付近から楔状に加工した痕跡があるものの欠損により不詳。墨痕は縦方向の１画のみで、文字であるならば右端のごく一部が残ったのであろう。

ⅳ　含砂礫茶褐色有機質土・砂混灰褐色粘質土出土木製品（Fig.97～99，Ph.60・61）

刀子柄（Fig.97-33）　柄の中央部分で刀背方向に曲折するⅠ式の刀子柄で、背部分は特に丁寧に削り、整えている。柄の中ほどから細い錐状の工具を用いて茎挿入部分を刳り抜き、茎孔は長方形を呈する。全長14.5cm、幅1.9cm。樹種はコナラ属アカガシ亜属の芯去削出材。

柄（Fig.97-32・34）　32は全長15.5cm、幅3.4cm、厚さ3.1cmの重厚な柄。断面楕円形を呈し、柄の中ほどから茎挿入部分を刳り抜き、柄元で段をつける。茎孔は長方形を呈する。柄頭側からも、径0.6cm、深さ0.4cmの方形の孔を穿つ。樹種はクスノキ科の芯持丸木材。34は断面隅丸方形の柄で、両端の角を削り出す。茎孔は長方形を呈し、下端付近まで深く穿たれる。柄元から柄頭まで直線の丸棒状に加工するⅢ式の刀子の柄と考えられる。全長10.0cm、幅2.1cm、厚さ1.5cmで、樹種はウツギ属の芯持丸木材。

楔（Fig.99-47～65）　一端を薄く削り出す形状から、楔とみられる。基部の断面形が円・楕円形を呈し、全長の中ほどから削り出して端部を形づくる丸木型（47～51）、基部断面形が長方形を呈し、基部最大幅から次第に幅と厚みを減じ、基部が台状とならない割材ｂ型（52～54）、扁平な方形の基部に、基部から先端までほぼ同じ幅の板材型（55～65）の３種類がある。丸木型、割材ｂ型は全長5.0～10.0cm前後、厚さ2.0～3.0cm前後、板材型は全長5.0～10.0cm前後、厚さ1.5cm前後で、板材型に薄く、小型のものが目立つ。これらのなかには、主面片側だけを削り片刃状としたもの（55）や、全長2.0cm、幅0.6cm、厚さ0.3cmと非常に小型で薄手のもの（65）もあり、割り裂き用とするよりは固定用とみられる楔も混じる。

栓（Fig.98-44・45）　２点ともに片方の端部に向けて広がる円柱状を呈する。44は直径9.4cm、厚さ5.6cmで、ヒノキの芯去削出材。45は直径7.4cm、厚さ5.6cm。

輪切り状木製品（Fig.98-46）　円柱状を呈する用途不明品。最大厚2.0cm、高さは2.8cmで、クスノキ科の板目材。

円盤状木製品（Fig.98-43）　不整形な円盤状を呈する板状片。両面はケズリによって整える。蓋の可能性がある。直径6.1cm、厚さ0.5cm。ヒノキの板目材。

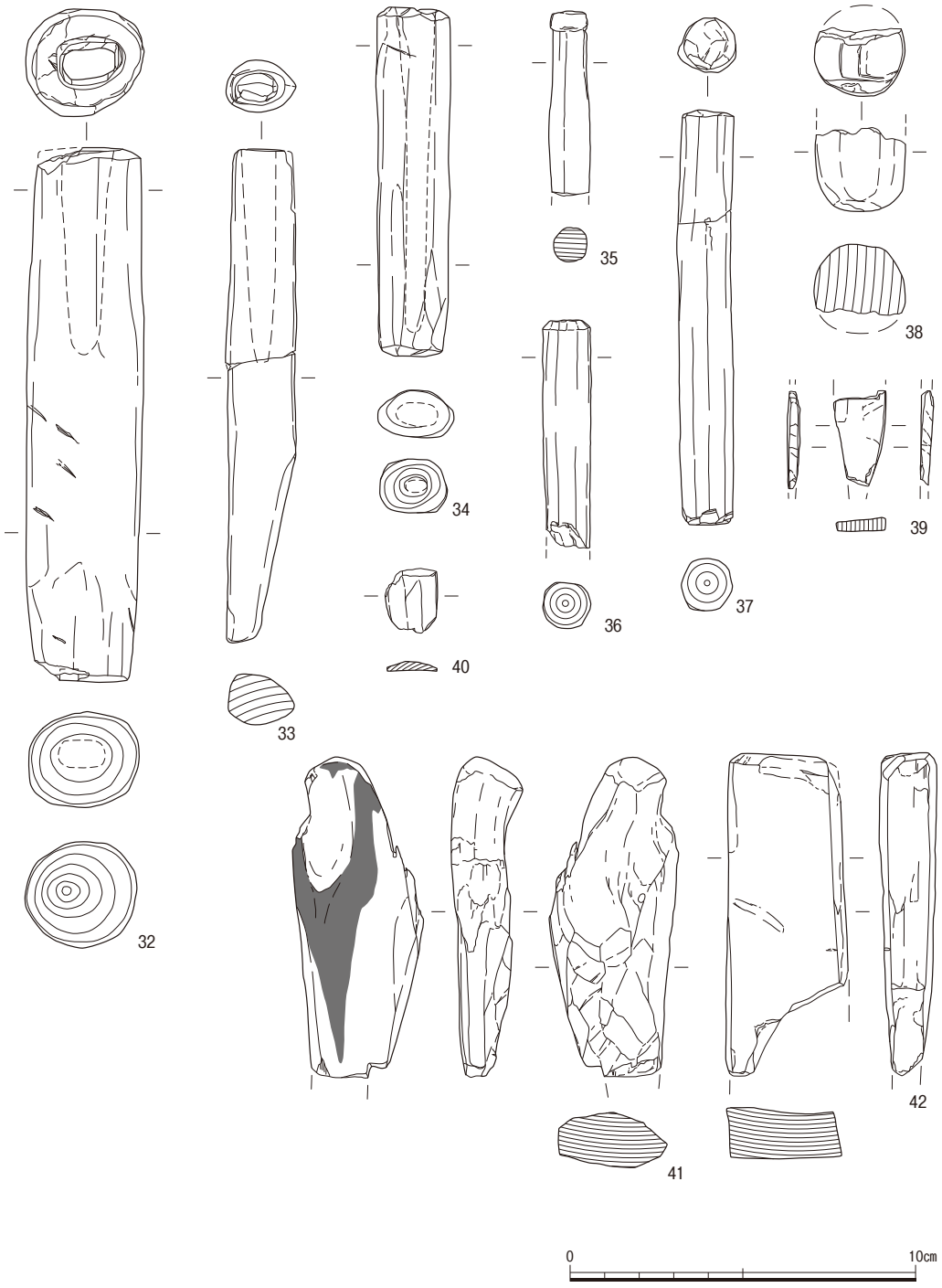


Fig. 97　SE800　含砂礫茶褐色有機質土・砂混灰褐色粘質土出土木製品（1）　1：2

板状品（Fig.97-39・40）　39は両面と両側面を削って整えた板状品。下端を剣先状に尖らせるC型式の斎串片の可能性がある。残存長2.7cm、幅1.5cm、厚さ0.4cm。樹種はヒノキの板目材。40は断面三角形の板状品で、砂混じり灰褐色粘質土直下（粘質砂土混バラス）の出土。残存長1.8cm、幅1.4cmで、樹種はヒノキの柾目材。

加工棒（Fig.97-35～38）　35は上端に刻込みを一周めぐらせた丸棒。残存長5.4cm、直径1.2cm。樹種はコナラ属アカガシ亜属の芯去削出材。36・37は側面を削って整えたのち、両端の角

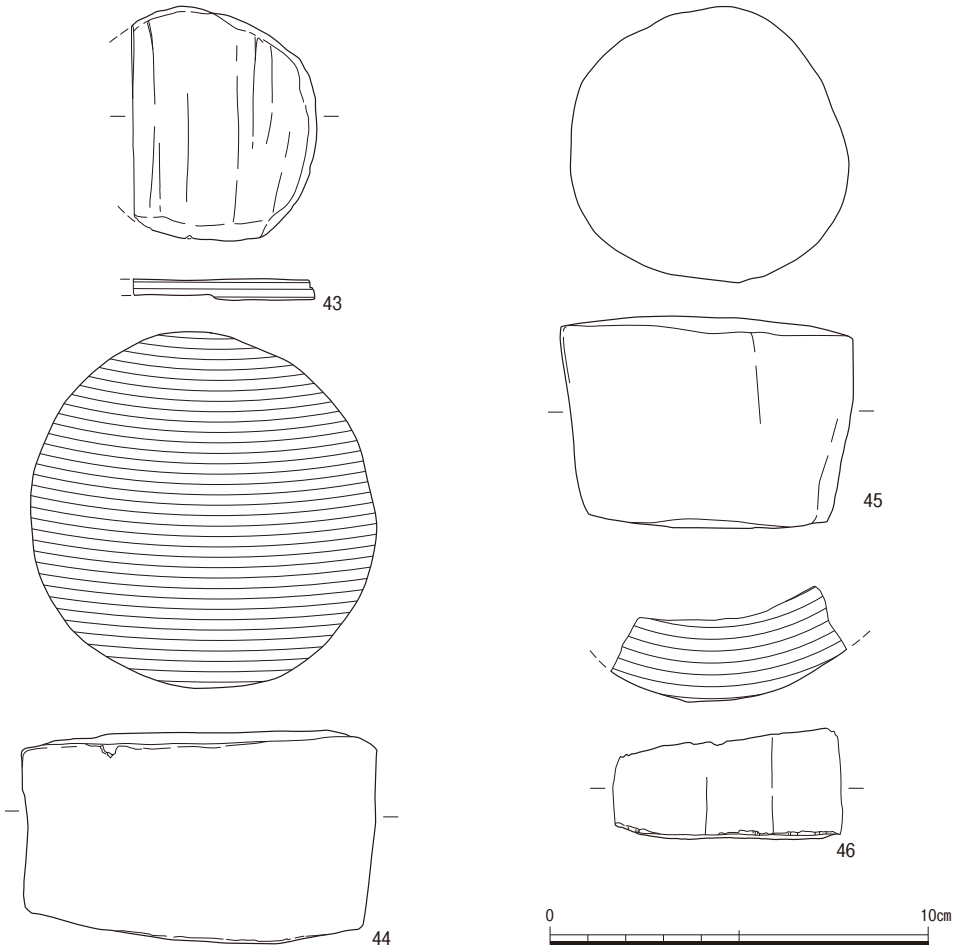


Fig. 98　SE800　含砂礫茶褐色有機質土・砂混灰褐色粘質土出土木製品（2）　1：2

を細かく削り、面取りをおこなう棒状品。36は残存長6.5cm、直径1.3cm。樹種はサカキの芯持丸木材。37は全長11.9cm、直径1.5cm。樹種はコナラ属アカガシ亜属の芯持丸木材。38は側面から端部にかけて滑らかに整えた丸棒で、端部は半球形に整える。残存長2.4cm、最大幅2.6cmである。樹種はサカキの芯去削出材。38は砂混灰褐色粘質土直下（粘質砂土混バラス）の出土。

不明木製品（Fig.97-41・42）　41は節や木本来のうねりをそのまま残すが、片面は削って面を整え、その下端は細かく削り出している。片面が炭化する。残存長9.2cm、幅3.6cmで、樹種はヒノキの板目材。42は長方形の板状品で、残存長9.3cm、幅3.5cmで、樹種はクスノキ科の板目材。

v　井戸枠取水口出土木製品（Fig.100，Ph.61）

井戸枠取水口は、スギ材とされる井戸枠の最下部に開口した孔で、井戸枠内の層序では含砂礫茶褐色有機質土および砂混灰褐色粘質土の層準にあたる。前項とは区別したが、含砂礫茶褐色有機質土とは同じ土層の出土木製品である。

楔（Fig.100-66～80）　一端を薄く削り出した楔で、割材ｂ型（66・67）、板材型（68～80）の２種類に分けられる。板材型は、全長3.0cm前後、幅2.0cm前後と全長2.3cm前後、幅1.4cm前後、そして全長2.0cm以下、幅1.0cm前後に分かれ、とくに全長2.0cm以下の小型のものは厚さも1.0



Fig. 99　SE800　含砂礫茶褐色有機質土・砂混灰褐色粘質土出土木製品（3）　1：2

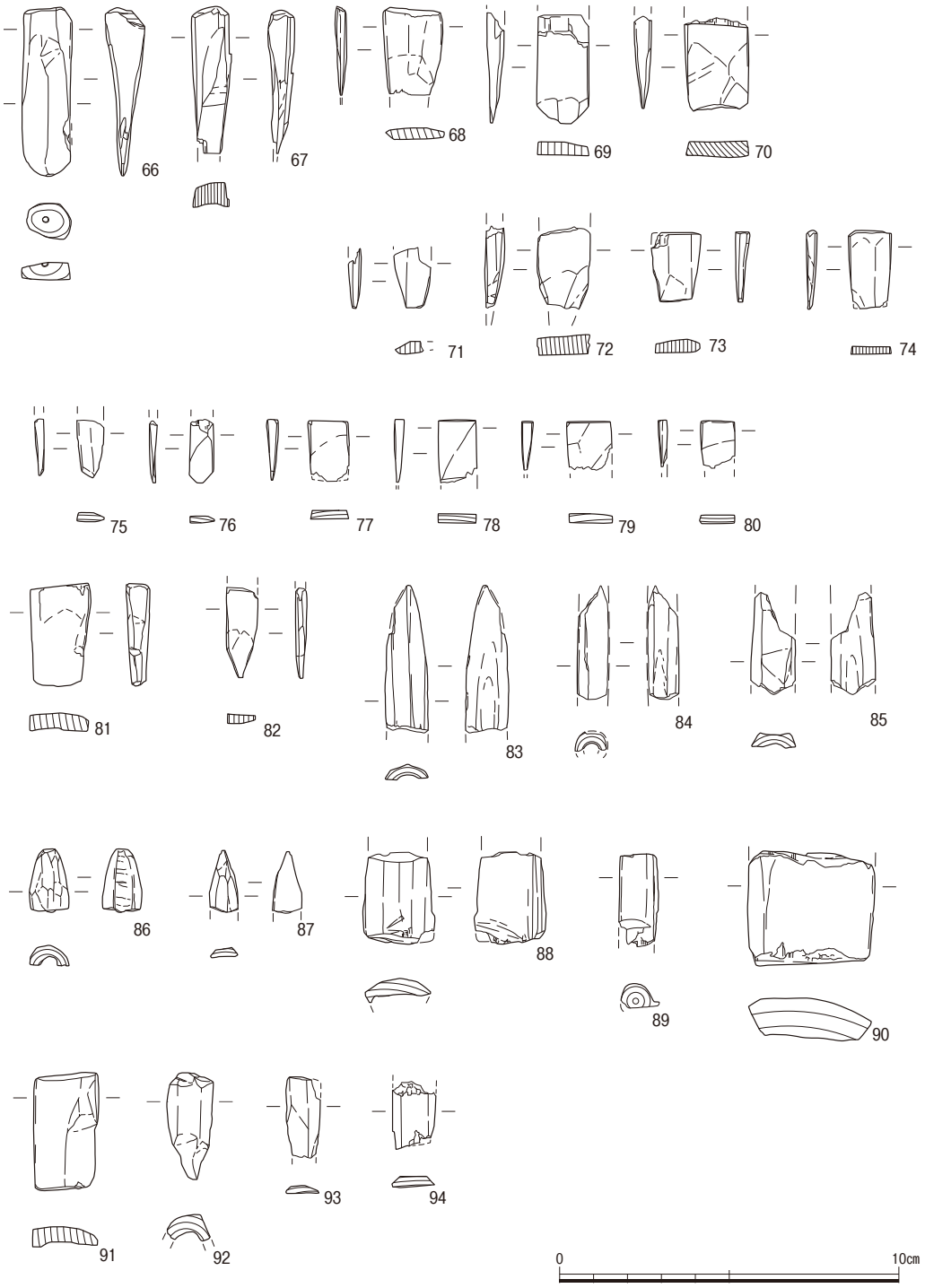


Fig. 100　SE800　井戸枠取水口出土木製品　1：2

cm前後とかなり薄く、固定用の楔と考えられる。小型のものでも平坦に削り出して成形する。これらの樹種等はⅥ章２節のTab.15・16に示す。

板状品（Fig.100－81・82）　81は板状品で、両面から削り出して一端を薄くつくる。板材型の楔の未製品とみられる。全長3.0cm、幅1.8cm、厚さ0.5cmで、樹種はヒノキの柾目材。82は端部が圭頭状に尖る板状品で、両側面も削って整えていることから斎串の未製品とみられる。本例を斎串だとすると、Ｂ形式に該当する。残存長2.7cm、幅0.9cm、厚さ0.4cmで、樹種はス

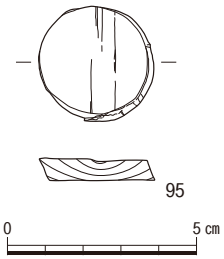


Fig. 101　土坑出土木製品　1：2

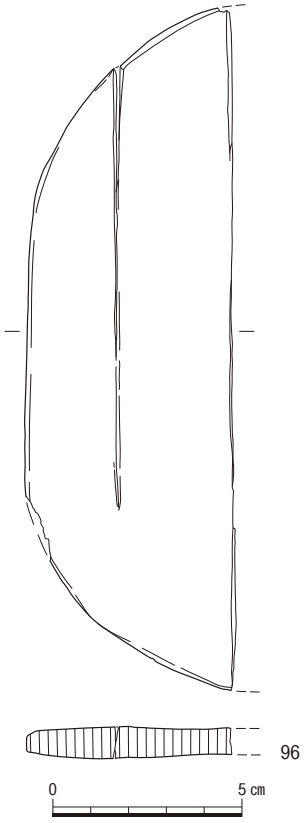


Fig. 102　SE410出土木製品　1：2

ギの柾目材。

加工棒（Fig.100-83～94）　断面円形や半円形で丸棒状のもの、不整形な板状のもの、断面菱形や台形のものがある。83～87は一端が細く尖る尖頭棒。とくに83・85・86はウツギ属の中空の部位を利用し、半裁した内外面をケズリによって滑らかに整えている。86・87は細かなケズリを施し、端部を尖らせている。88は断面凸レンズ状を呈し、外面は縦方向に削る。内面にはわずかな段をもち、柄の可能性がある。残存長2.7cm、幅2.2cmで、樹種はクスノキ科の板目材。

90・91は板状を呈する加工棒で、表面を削って整えるが不整形である。90は残存長3.4cm、幅3.7cmで、樹種はクスノキ科の板目材。91は全長3.5cm、幅1.9cmで、樹種はヒノキの柾目材。92は断面が半円形を呈し、一端は削り出して細く尖らせ、もう一端は不整形であるが丸く整える。これらの樹種等はⅥ章２節のTab.16に示す。

B　その他の遺構出土木製品
（Fig.101・102，Ph.61）

栓（Fig.101-95）　第４次調査区の土坑（UR26区）から出土した栓。円盤状を呈し、側面には樹皮が残る。未製品か。直径3.0cm、厚さ0.6cm。

曲物底板（Fig.102-96）　楕円形曲物の底板片で、井戸枠に転用したもの。復元径18.1cm、厚さは最大で0.8cmである。側板のアタリや側面の釘穴等はみられない。樹種はヒノキの板目材である。第２次調査区の中世井戸SE410内出土。

1）以下、とくに記載のない場合、樹種同定は（株）パレオ・ラボ小林克也氏による。詳細はⅥ章第２節を参照されたい。
2）以下、部位名称と分類は村上由美子「木製楔の基礎的論考」『史林』85-４、2002年を参考にした。
3）奈文研『木器集成図録―飛鳥藤原篇Ⅰ―』2019年。
4）以下、22～24の計測値は保存処理後のものである。
5）弓は用材選択に偏りがあることがかねてより指摘されている。飛鳥地域や藤原宮・京出土資料についても、イヌガヤ、ニシキギ属という、弓に用いられる一般的な用材で製作されていたことが確認されている。片山健太郎「飛鳥・藤原地域出土の弓―第75-15次、85次、115次、193・194次、201-１次」『紀要2021』。

第４節　金属製品

A　鉄 製 品

鉄製品は鉄鏃が主体を占め、ほかに鉄鎌、鉄斧、鉄鑿、鉇、刀子、鏟状鉄製品といった農工具類や、鉄製紡錘車や鉄針、鉄釘、鋲などがある。くわえて、鉄刀・剣片、鞘尻金具、石突、付属金具なども出土しているが、いずれも小片で断片的な資料も多い。錆化が進み遺存状態が良くないものが目立つが、全体形がわかるものを中心に図化し、掲載した。既往の概要報告では、鉄製品は「主に藤原宮期の整地土、土壙から出土[1)]」しているとされてきた。しかし実際には、便宜上「土坑」・「大土坑」と称して掘り下げた「遺構」の埋土と、灰褐色土や褐色土などの整地土とのちがいは不明確で、前者が後者の一部であった可能性が否定できない。よって以下では、南北大溝SD640出土の鉄製品と、遺構番号をもたない「土坑」・「大土坑」や柱穴、整地土・包含層等から出土したそれらとを区別し、項目別に記述をおこなう。なお後者については、出土時の層位や取上名称と、出土した調査区や小地区とを併記しておく（例：「大土坑」（UT27区）など）。

ⅰ　南北大溝SD640出土鉄製品（Fig.103～106、Ph.62・63）

鉄　鏃（Fig.103-１～25、Fig.104-26～33）　破片資料を含めて33点が出土した。南北大溝SD640バラス層、灰褐色砂土からの出土が主体を占める。鏃身部が19点、頸部関が14点みられ、長頸鏃を主体とする。短頸鏃は短頸三角形鏃１点（１）となり、長頸鏃は方頭斧箭式鏃１点（２）、鑿箭式鏃８点（３～10）、片刃箭式鏃９点（11～14、16～20）に分けられる。方頭斧箭式鏃（２）は斜め関で、鏃身部断面形は表裏両面から研ぎ出された両丸造である。短頸三角形鏃（１）の鏃身部断面形も同様であるが、２に比して鏃身部は薄い。片刃箭式鏃のうち、18～20のような端刃箭式鏃が主体を占める。いずれも関部まで残るものは少なく、棘状関（11）が１点ある。鑿箭式鏃には台形関（８）、角関（９・10）があり、鏃身部断面形は両丸造のほかに、片面から研ぎ出された片丸造（５・９・10）、片側にのみ刃が研ぎ出される刀子状の平片刃造（６）がある。片刃箭式鏃には台形関（12・15）、棘状関（13）があり、鏃身部断面形は片刃で両側から刃が研ぎ出される両切刃造（16・17）である。

頸部および関部は角関２点（23・24）、台形関９点（15・22・25～29・31・33）、棘状関３点（21・30・32）がある。頸部はいずれも長く、長頸鏃とみられる。

鉄鏃のなかには、２や14のように鏃身部基部が大きく「く」字状に曲がるもののほか、６のように頸部が「Ｃ」字状に、７のように頸部中位から直角に折れ曲がるものがある。頸部関片も同様に、25や28は頸部が緩やかに弯曲し、33は頸部中位で一度折れたのち、上位で直角近く折れ曲がる。さらには15のように、頸部全体を環状に大きく曲げて頸部先端は茎部に接するものなど、変形した鉄鏃が散見される。

鉄　斧（Fig.104-34～37）　４点出土した。いずれも袋状鉄斧で、有肩鉄斧（34～36）と無肩鉄斧（37）に分けられる。34は強く突出する明瞭な肩をもち、刃部先端は外側へ緩やかに弯曲

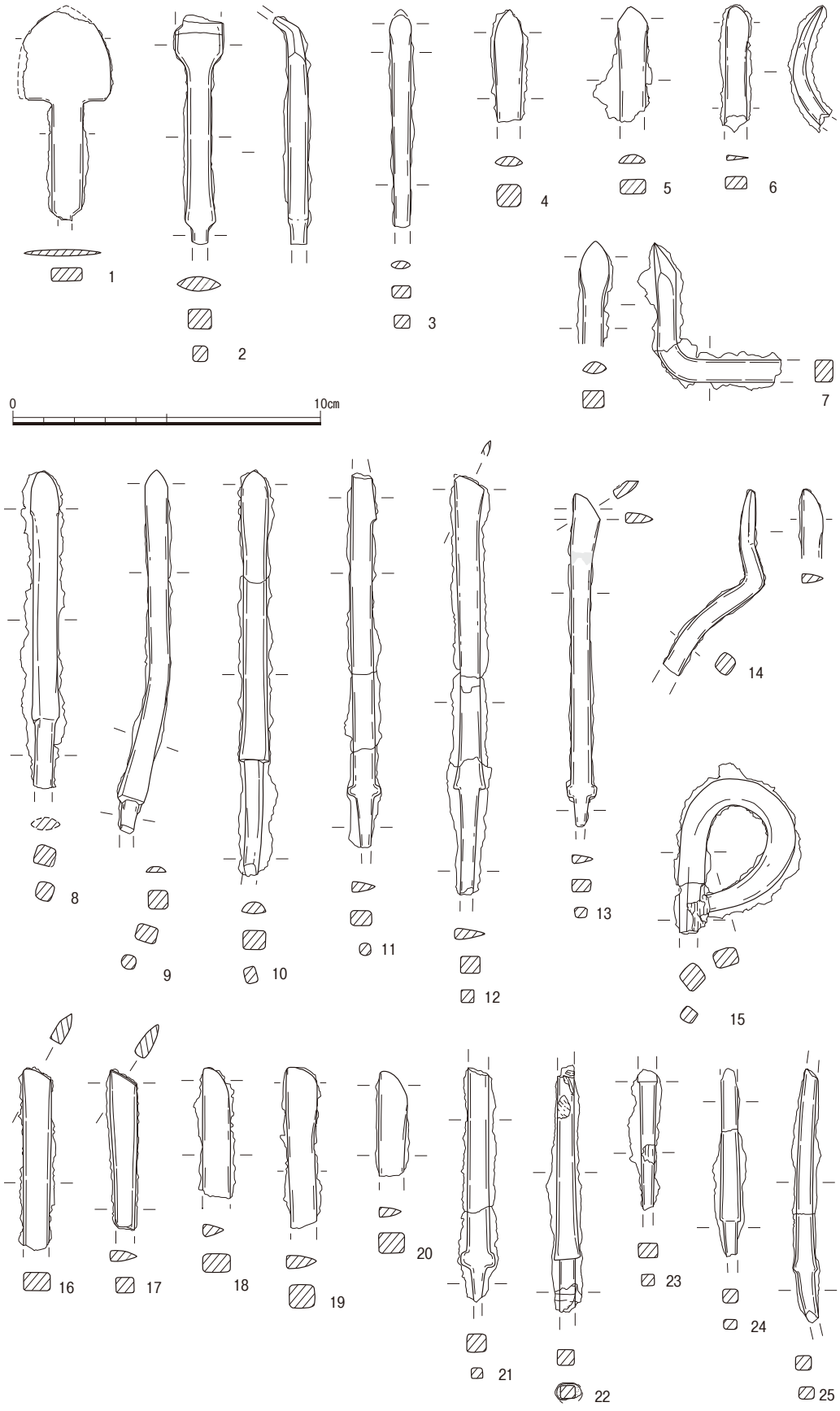


Fig. 103　SD640出土鉄製品（1）　1：2

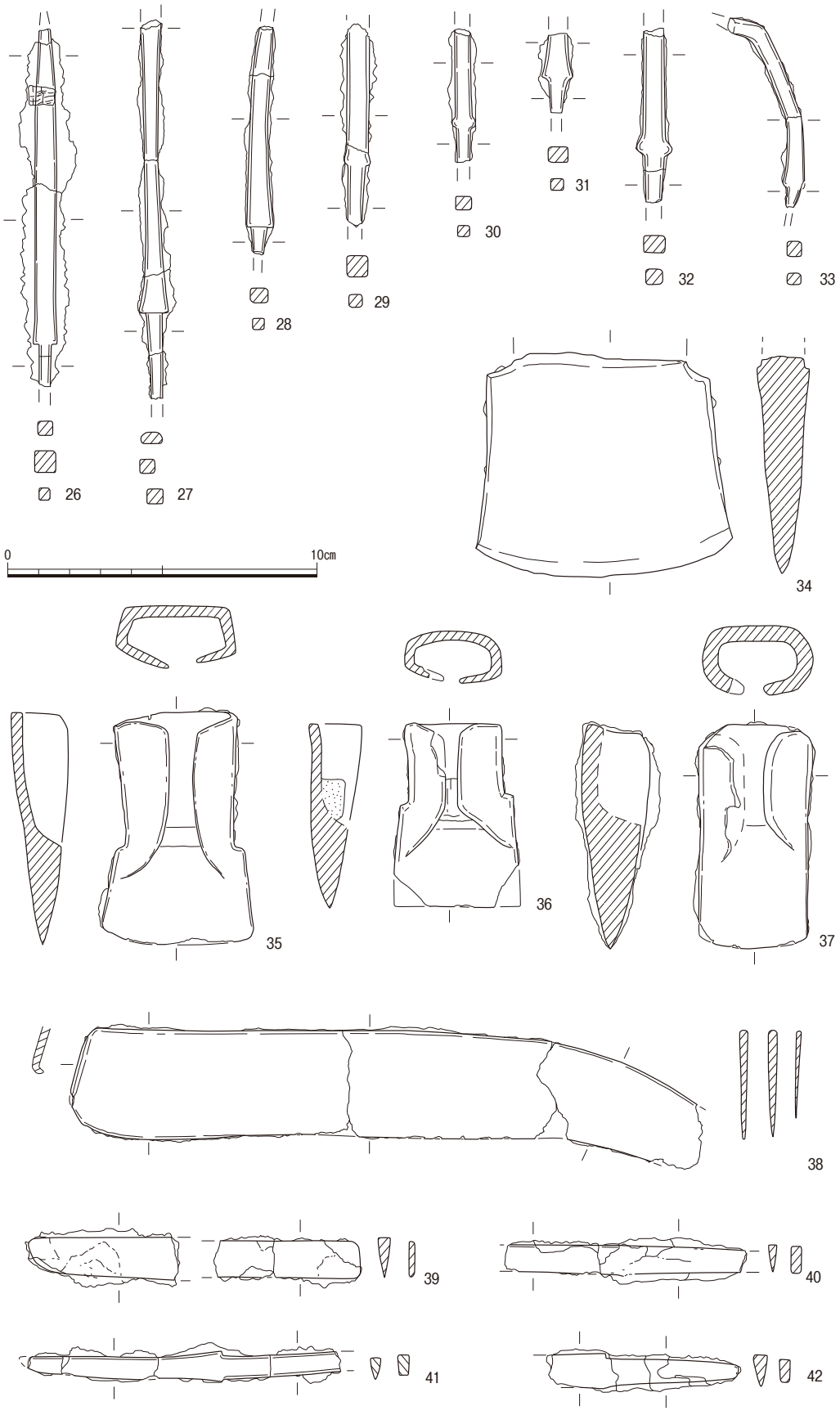


Fig. 104　SD640出土鉄製品（2）　1：2

する。袋部と刃部の境界には不均等な段をもつ。刃部と袋部を別々に作り、鍛接する技法（有肩鉄斧ＢⅢ技法[2]）によるものとみられる。刃部幅8.3cm、基部厚1.7cmで、本報告資料中でもっとも大型で重厚である。遺存長7.1cm、基部幅5.6cm。SD640灰褐色砂土（UP23区）出土。

35は明瞭に突出する肩をもち、袋部に比して刃部が短い。袋部の横断面は長方形で、袋部合わせ目は隙間があり、刃先側へ大きく開く。刃先が一部欠損する。全長7.5cm、袋部幅3.9cm、袋部厚1.8cm、刃部幅5.0cm。SD640灰褐色砂土（UU23区）出土。36は明瞭に突出する肩をもち、袋部よりも刃部が長い形態である。袋部の横断面は楕円形で、折り返しは刃先側へ大きく開く。刃部先端は直線的で、両端は欠損する。袋部内部には柄とみられる木質が遺存する。全長5.9cm、袋部幅3.2cm、袋部厚1.7cm、刃部幅4.1cm。SD640バラス層（UQ23区）出土。

37は無肩鉄斧で、側縁が直線的にのびて刃部は緩やかな弧状をなす。袋部の横断面は隅丸長方形。袋部から中央にかけて急激に厚さを増す。袋部合わせ目は大きく開く。全長7.2cm、袋部幅3.6cm、袋部厚2.2cm、刃部幅3.6cm。SD640褐色土（UP23区）出土。

鉄　鎌（Fig.104-38）　曲刃鎌。刃先を左にし、刃部を下に置いた際に折り返しが裏側になる乙類。刃部断面形は楔形で、先端が欠損する。基部から直線的にのびた後、刃部で曲がる。折り返し部は辺全体を折り返して形成する。遺存長20.5cm、身部幅3.5cm、厚さ0.3cm、折り返し幅0.1cm。SD640炭混り灰褐色粘質土（UT23区）出土。

刀　子（Fig.104-39～42、Fig.105-43～46）　８点出土した。いずれも片刃で、茎部が遺存するものは無関（39・40・44）と両関（41・42・43・46）とがあるが、関部はなだらかに茎部へいたる不明瞭なものが多い。41は関部が比較的明瞭で、刃部は先端に向かって緩やかに反り上がる。表面に有機質が遺存するものが多くみられ、45は切っ先に、40・46は茎部に皮革とみられる有機質が遺存する。鞘痕跡か。

鑷　子（Fig.105-47）　幅0.5cm、最大厚0.2cmの断面長方形の鉄棒を「Ｕ」字状に折り曲げる。上端を小さく括れさせ、吊り手状に作り出す。遺存長は6.3cm。SD640バラス層（US23区）出土。

鉇（Fig.105-48～51）　４点出土した。いずれも刃部と茎部が同幅でのびる柳葉形のもの。48は茎部先端が欠損する。断面凸レンズ形の刃部上面には皮革痕とみられる有機質が、茎部全面には鹿角とみられる痕跡が遺存する。とくに茎部は0.3cmの厚さで遺存する。骨製の柄をもち、革製の鞘に入れられていたとみられる。刃部から「く」字状に折れ曲がる。遺存長12.6cm、幅11.2cm、厚さ1.1cm。49・50は茎部から一旦外方へ屈曲して刃部へいたり、そこから切っ先に向けて先細る。刃部は鏑をもつ断面凸レンズ形で、49は刃部幅は0.2cmと薄い。遺存長7.5cm、幅1.5cm、茎部厚0.5cm。50は遺存長6.9cm、幅2.2cm、基部厚0.7cm。48・49ともにSD640バラス層（UO23区）出土。50は南北溝SD640（UI23区）出土。51は柳葉形を呈する刃部先端の破片。断面凸レンズ形で、切っ先はやや潰れる。遺存長7.7cm、幅1.4cm、刃部厚0.4cm。SD640バラス層（UN23区）出土。

棒状鉄製品（Fig.105-52・53）　平面形は先端に向けて切っ先状に先細る鉇状で、とくに52は鉇（49）と平面形は近似するが、刃部の研ぎ出しはみられない。遺存長7.8cm、基部幅1.4cm、最大厚0.4cm。SD640バラス層（UO23区）出土。53は全長9.9cm、幅0.8cm、厚さ0.7cm。SD640灰褐色砂土（UT23区）出土。

鉤状鉄製品（Fig.105-54）　両端が鋭角に先細る棒状品で、断面形は方形。片端は90°近く直

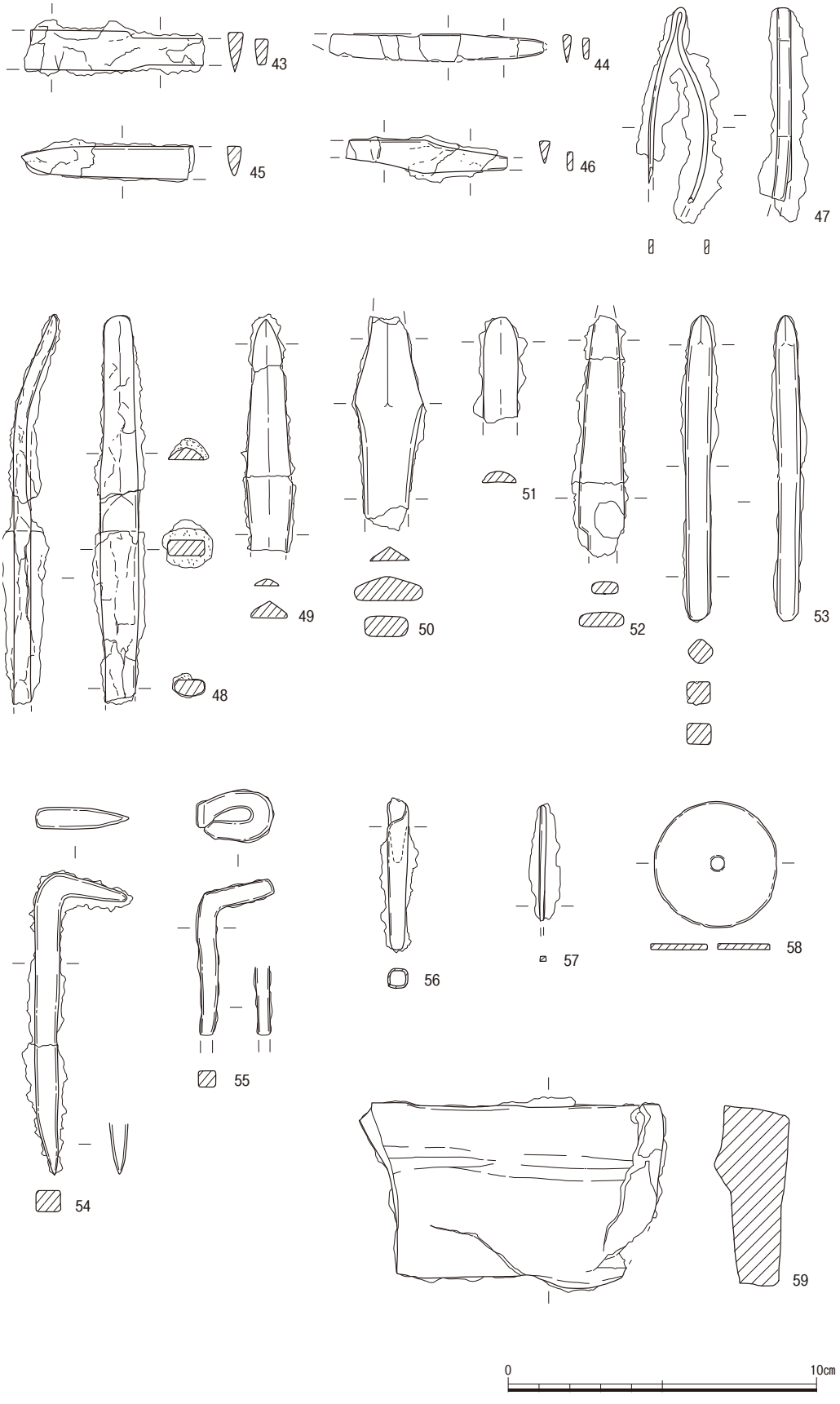


Fig. 105　SD640出土鉄製品（3）　1：2

角に折れ曲がる。全長9.7cm、幅0.8cm、厚さ0.7cm。SD640バラス層（UT23区）出土。

引手状鉄製品（Fig.105-55）　太さ0.6cm程の断面が方形を呈する鉄棒の片側上端を直角に折り曲げ、先端を環状にまわす棒状品。片端が欠損し、環状部と軸部は綴じ合わさない。遺存長5.1cm。北排水溝（UU23区）出土。

石突状鉄製品（Fig.105-56）　太さ0.6cm程の断面方形の鉄棒上端を延ばして袋状に綴じ合わせる。袋部の厚さは0.1cmと薄い。袋部の合わせ目は両面不均等。全長5.1cm、袋部幅0.7cm。袋部長2.2cm。SD640バラス層（UO23区）出土。

鉄　針（Fig.105-57）　針先を欠損する。断面方形で、先端に向けて鋭利に先細る。針孔は確認できなかった。遺存長3.7cm、幅0.2cm、厚さ0.2cm。SD640バラス層（UQ23区）出土。

鉄製紡錘車（Fig.105-58）　直径4.0～4.1cm、厚さ0.2cmで、中央に直径0.5cmの円孔を穿孔する。SD640褐色土（UN23区）出土。

鉄　釘（Fig.106-60～71）　12点が出土した。断面方形の角釘を中心とし、68のみ円頭釘である。60～62・64は頭部を別途作り出さずに軸部上端をそのまま頭とした切釘。61は軸部上位で、

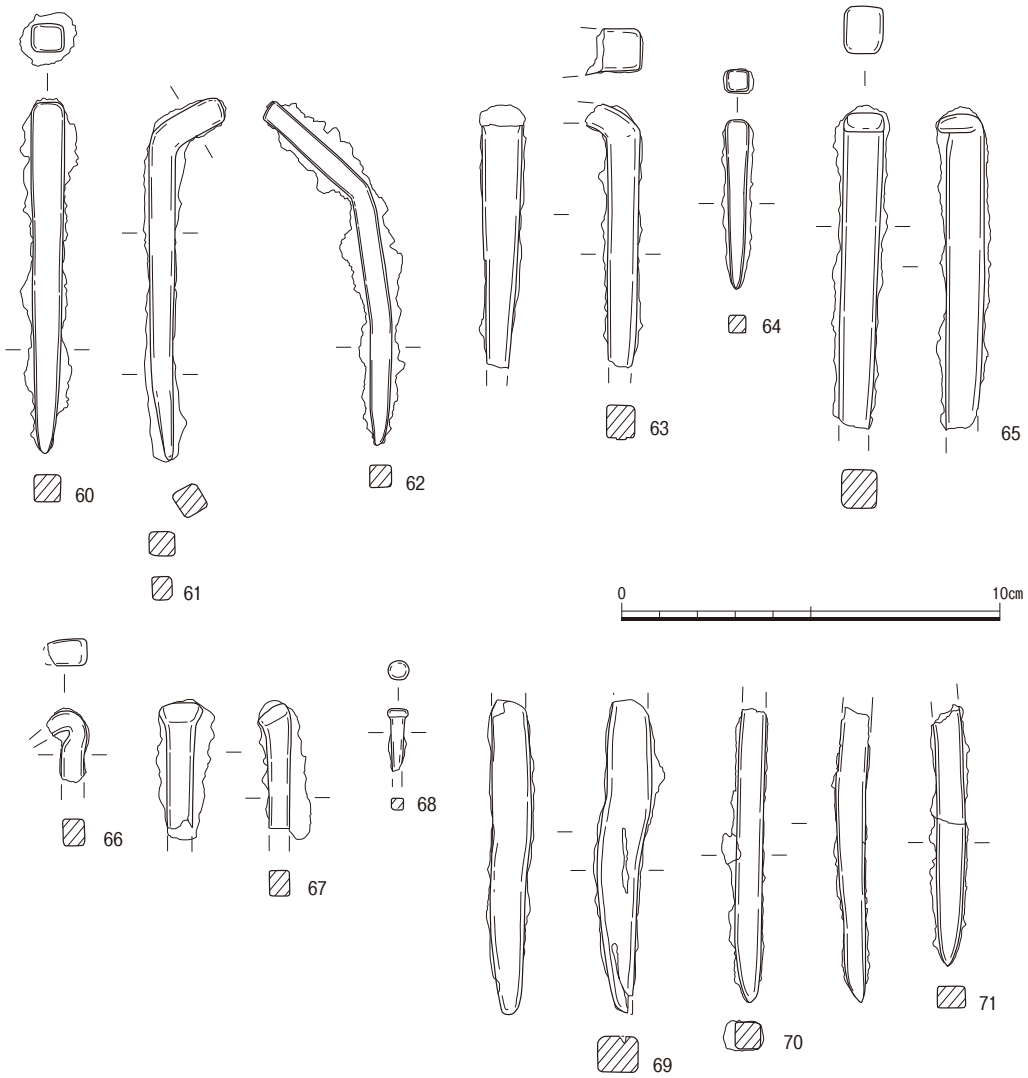


Fig. 106　SD640出土鉄製品（4）　1：2

62は軸部中位で鋭角に折れ曲がる。65～67は軸部上端を叩き出し、叩打方向に折り曲げて頭とした叩打釘。66は折り曲げ部分を重点的に叩き薄くして曲げる。67は他と比して折り曲げが弱い。68は円頭釘。遺存長1.7cm、頭部径0.6cm、幅0.4cmの小型品。このほかに、頭部が欠損するものが４点出土した。いずれも角釘で、63は軸部上位で鋭角に折れ曲がり、69も軸部が全体的に歪む。

鋳造品（Fig.105-59）　上端に鈍い低突帯をめぐらす鋳造品で、端部は内傾面をもつ。低突帯は幅1.3cmで横位にめぐるが歪む。鋳造の鉄釜、あるいは鉄釜の破片を鉄素材として再利用したものか。遺存長5.7cm、最大厚2.3cm。SD640褐色土（UO22区）出土。

ⅱ　土坑・柱穴・整地土等出土鉄製品（Fig.107～129、Ph.64～73）

鉄　鏃（Fig.107～115）　鏃身部100点、頸部関67点を図示した。遺存状況が悪いものもみられるが、総じて長頸鏃が主体となる。そのなかで、短頸鏃は72・76の２点がある。72は短頸三

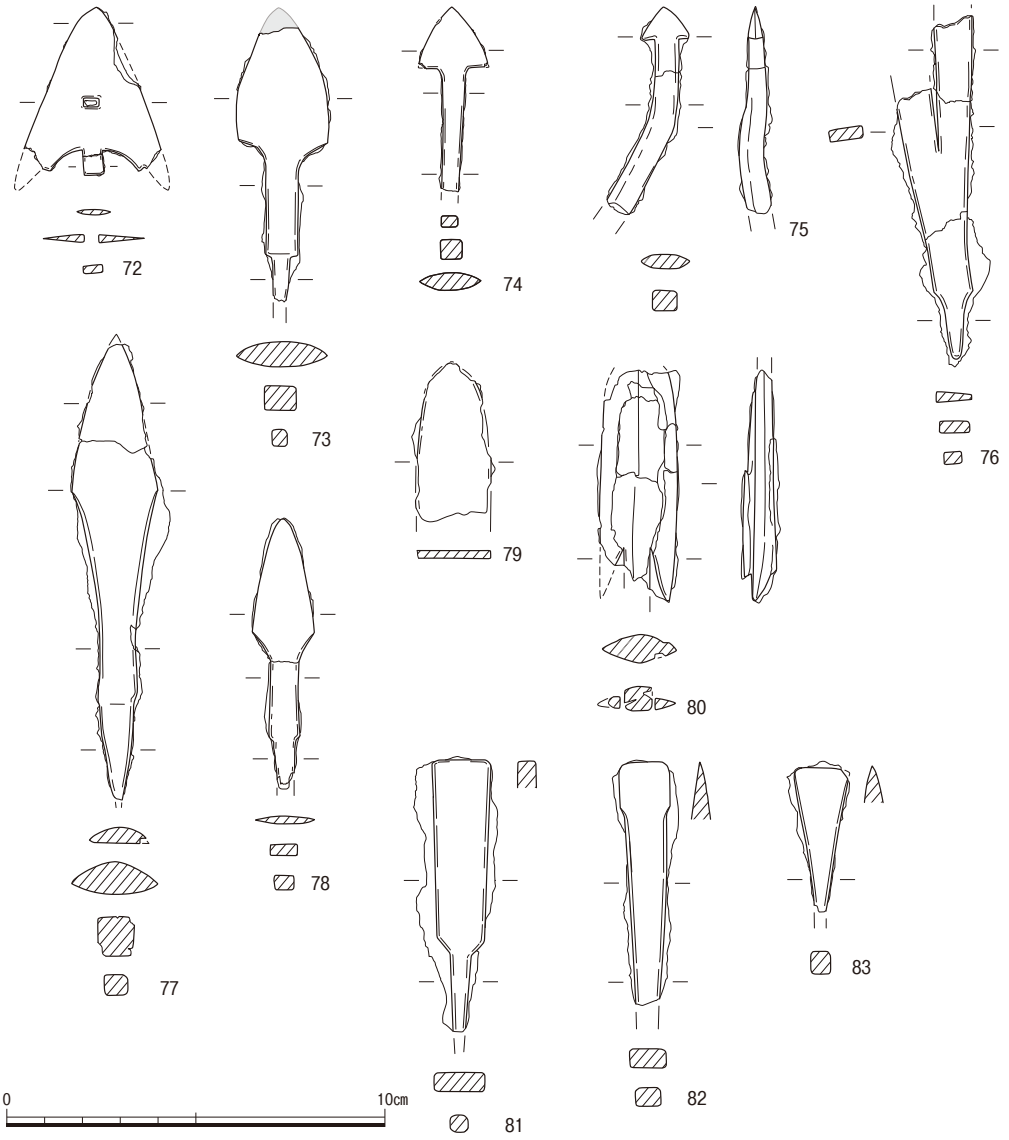


Fig. 107　第１～４次調査出土鉄鏃（１）　１：２

長　頸　鏃　角形式鏃で、無関。腸抉は緩やかに弯曲し、鏃身中央に横長の孔があく。同じく短頸鏃の76は定角式で、鏃身中央に縦位に細長孔をもつ。

長頸鏃は鑿箭式、片刃箭式が主体を占め、三角形式や柳葉形、方頭斧箭式は散見されるのみである。73～75は長頸三角形式鏃で、75は頸部全体が弯曲する。80は両腸抉式の柳葉形で、鏃身断面は両鎬造である。遺存状況は悪いが、鏃身両面は鎬が入り、腸抉は鋭角である。82、83は方頭斧箭式鏃で、82は長い頸部をもつ。81は鉄鏃として報告するが、刃部の研ぎ出しはみられない。鏃身形は方頭鑿根式で、関部は斜め関である。

鑿箭式鏃

鑿箭式は63点が確認された（Fig.108～111）。関部が遺存するものは、無関（91）や角関（92）があるが、大部分は台形関、棘状関である。棘状関は94のような鈍角なものが目立つ。鏃身断面形は両丸造と片丸造とがある。120は２本の鑿箭式が錆着する。鏃身断面形は１本が両丸造、

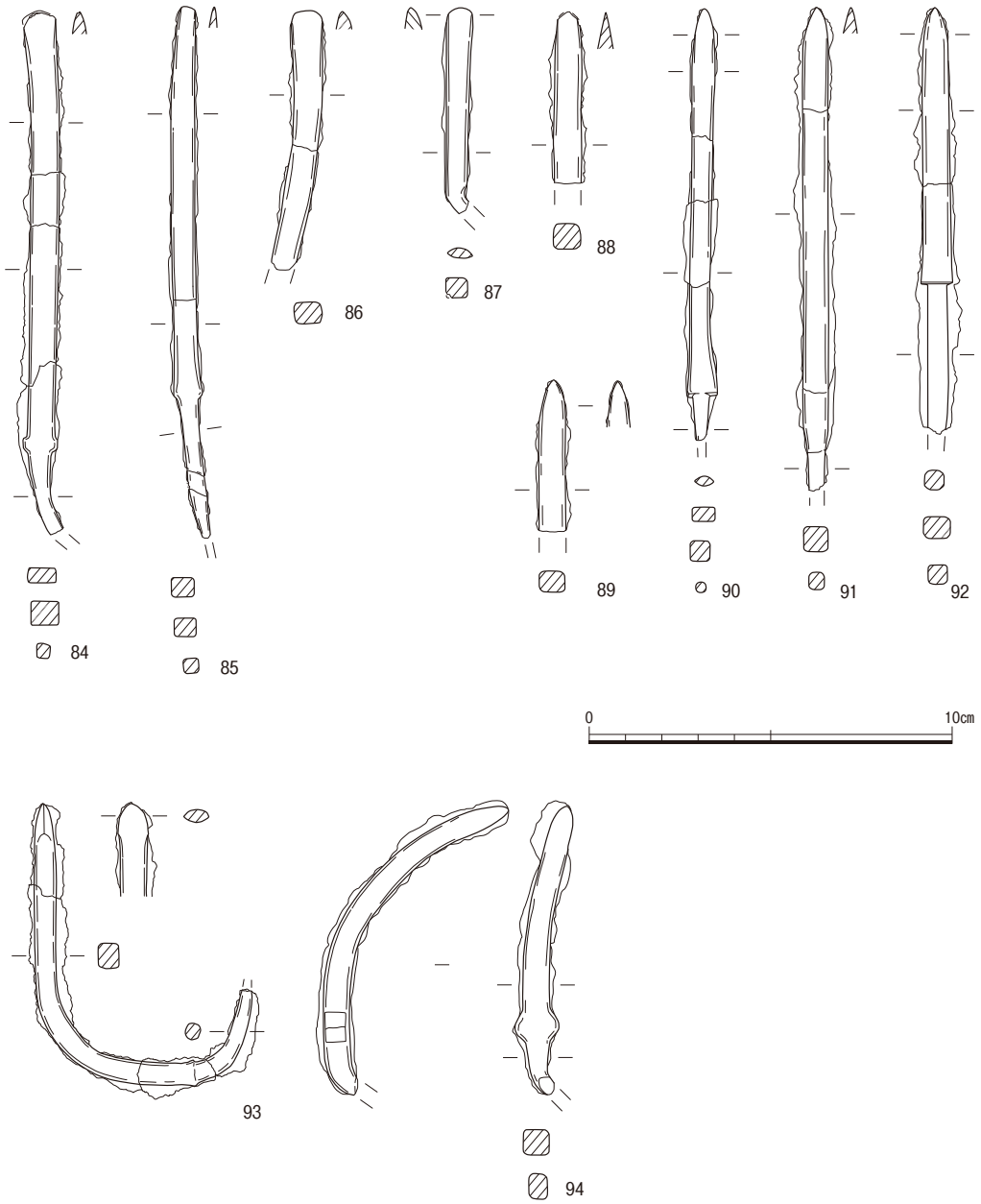


Fig. 108　第１～４次調査出土鉄鏃（２）　１：２

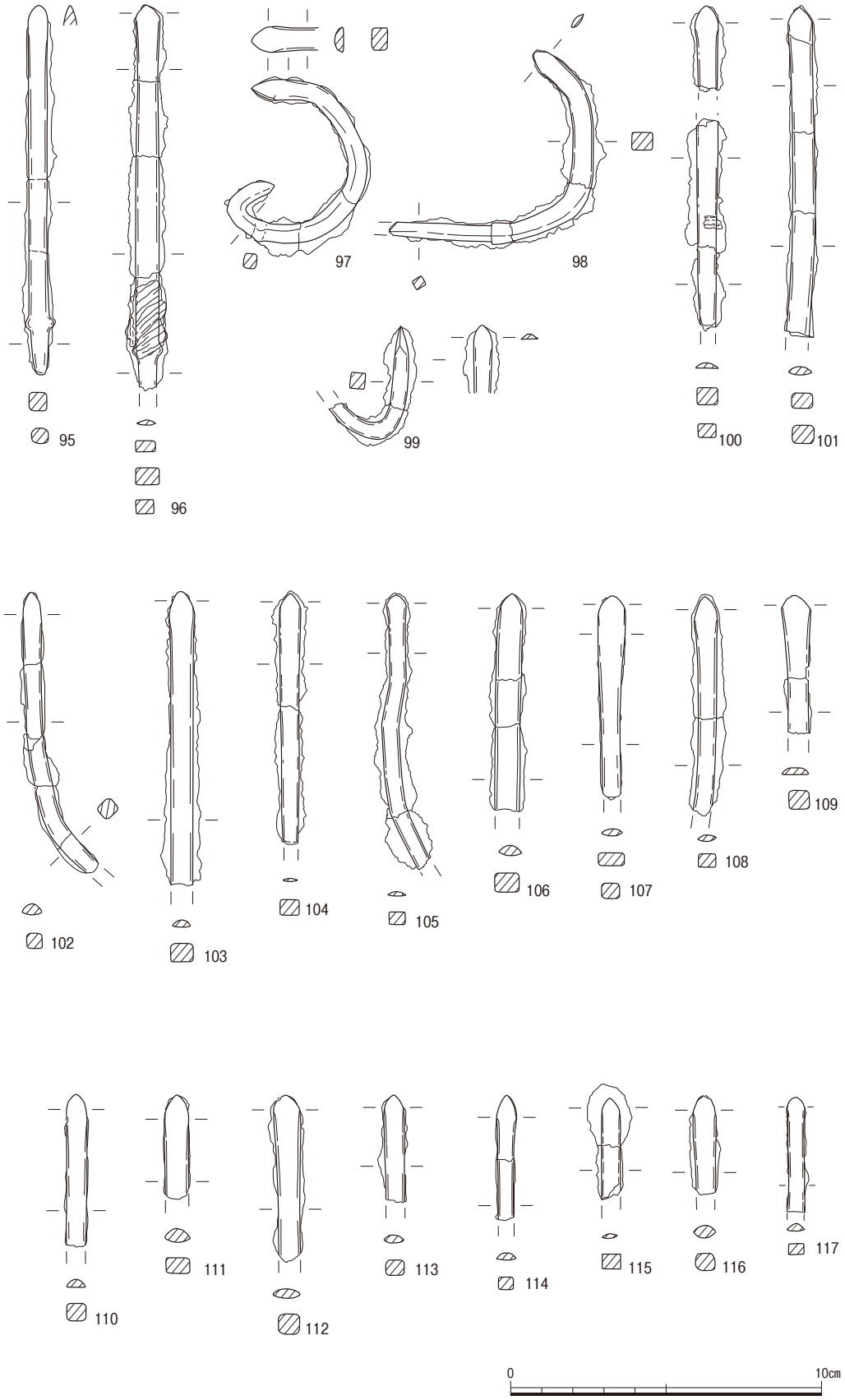


Fig. 109　第 1 ～ 4 次調査出土鉄鏃（3）　1：2

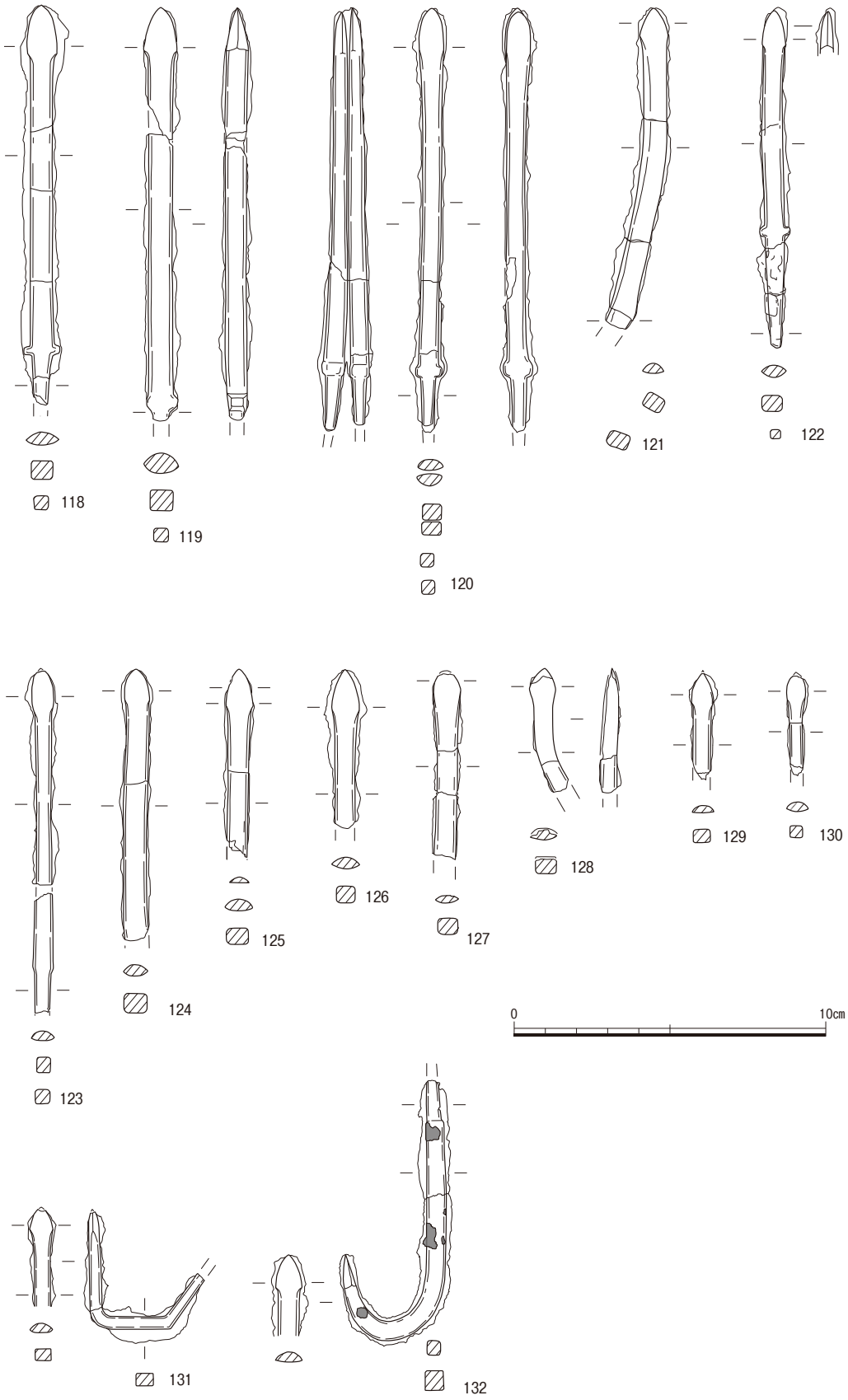


Fig. 110　第 1 ～ 4 次調査出土鉄鏃（4）　1：2

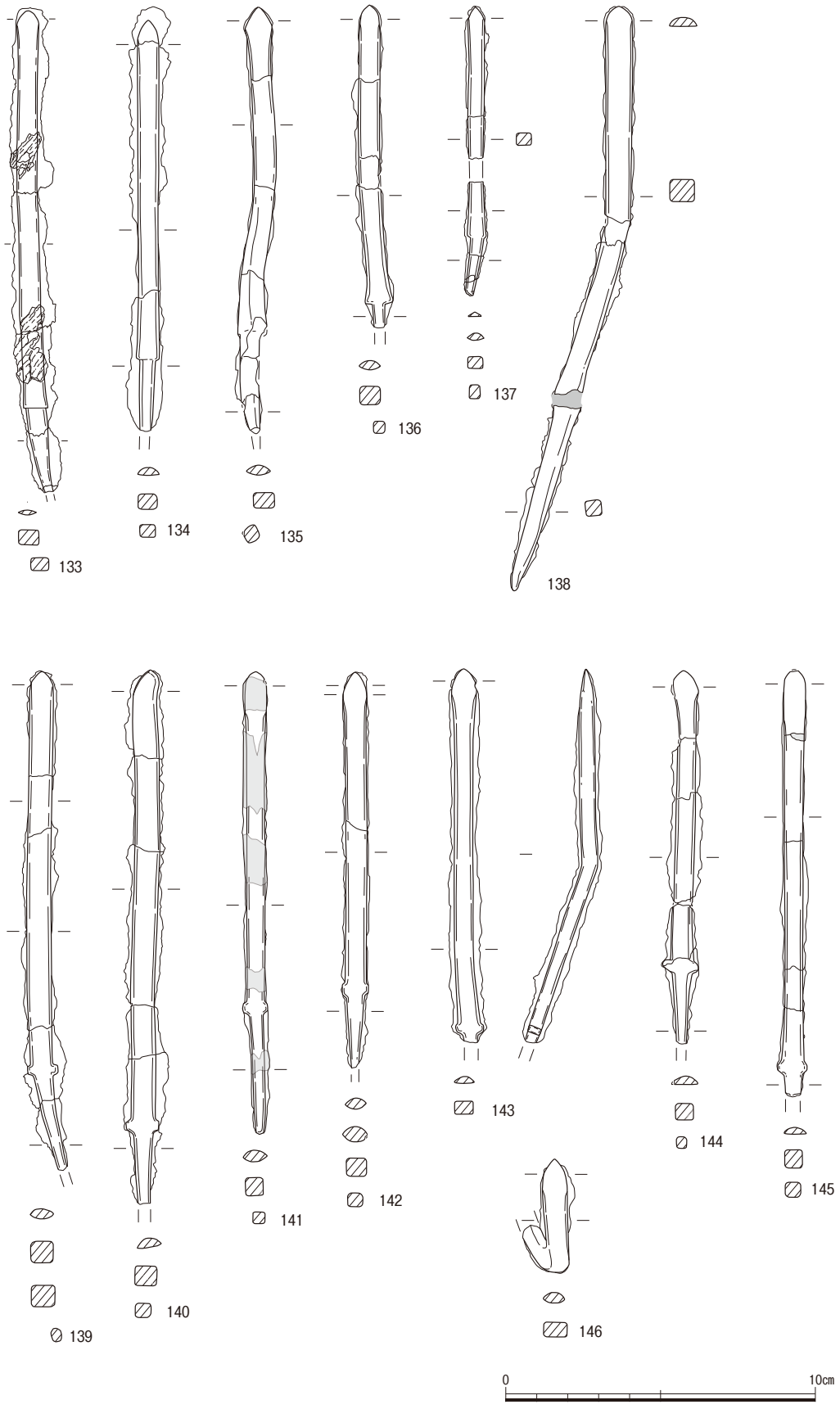


Fig. 111　第 1 ～ 4 次調査出土鉄鏃（5）　1：2

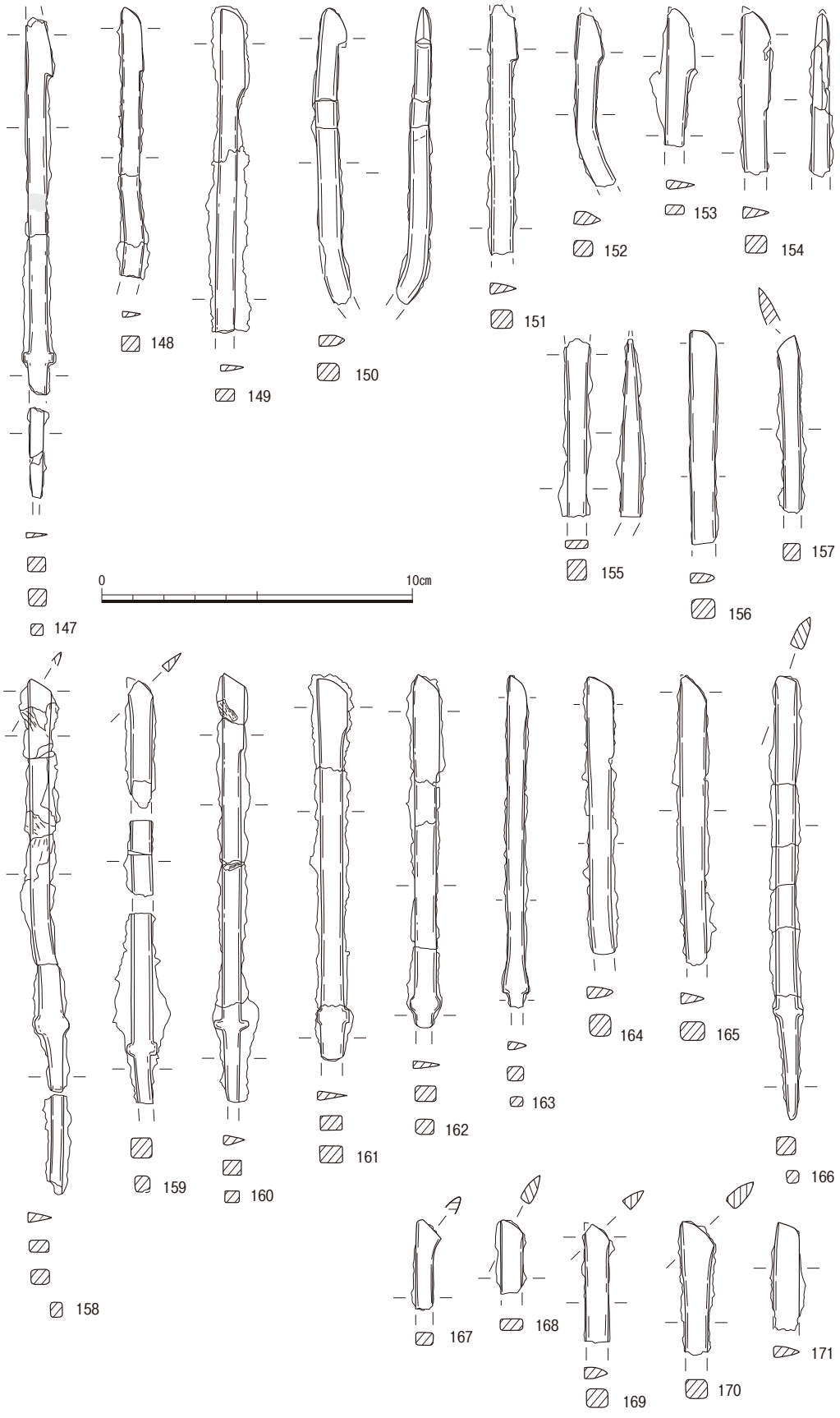


Fig. 112　第 1 ～ 4 次調査出土鉄鏃（6）　1：2

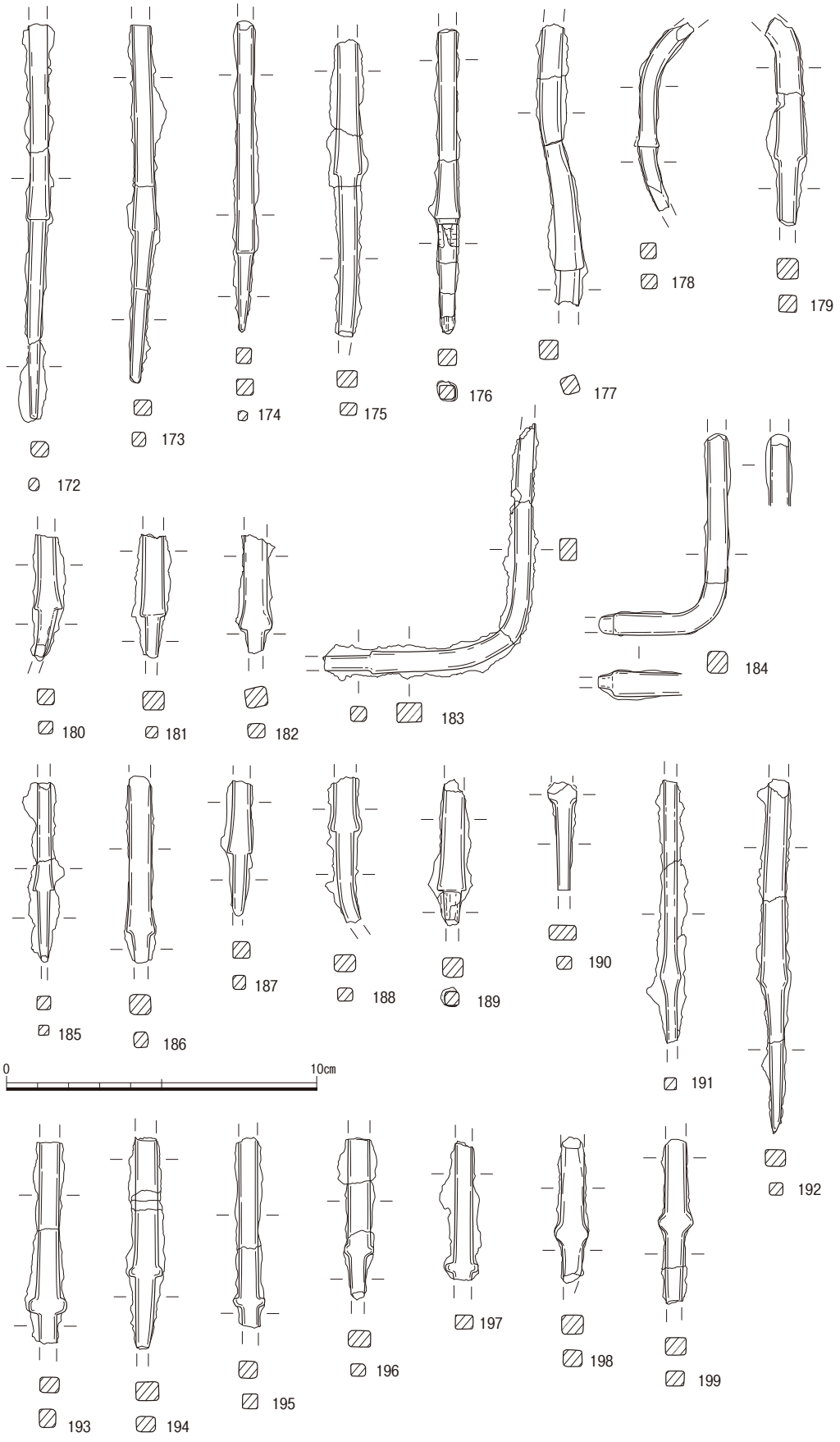


Fig. 113　第 1 ～ 4 次調査出土鉄鏃（7）　1：2

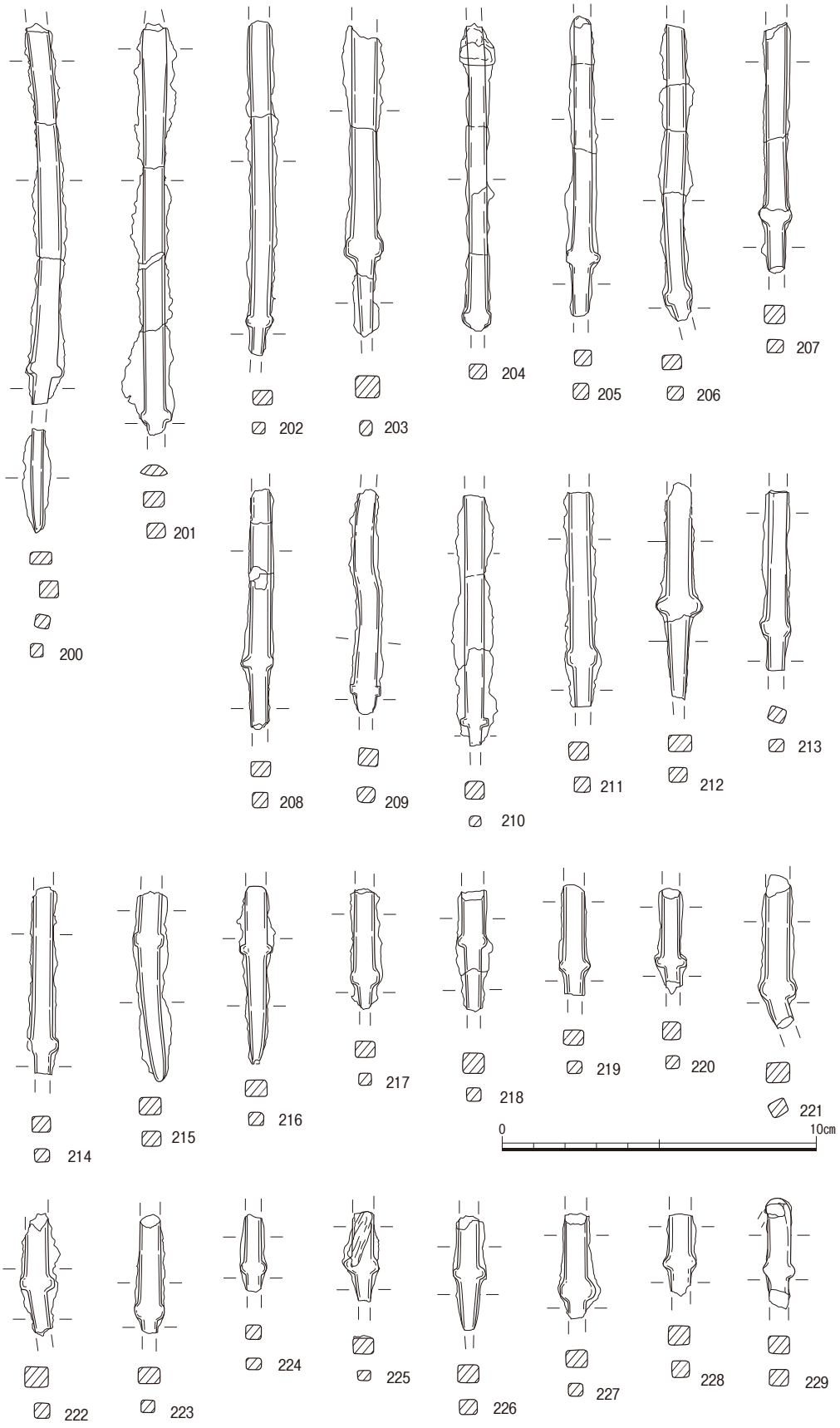


Fig. 114　第 1 ～ 4 次調査出土鉄鏃（8）　1：2

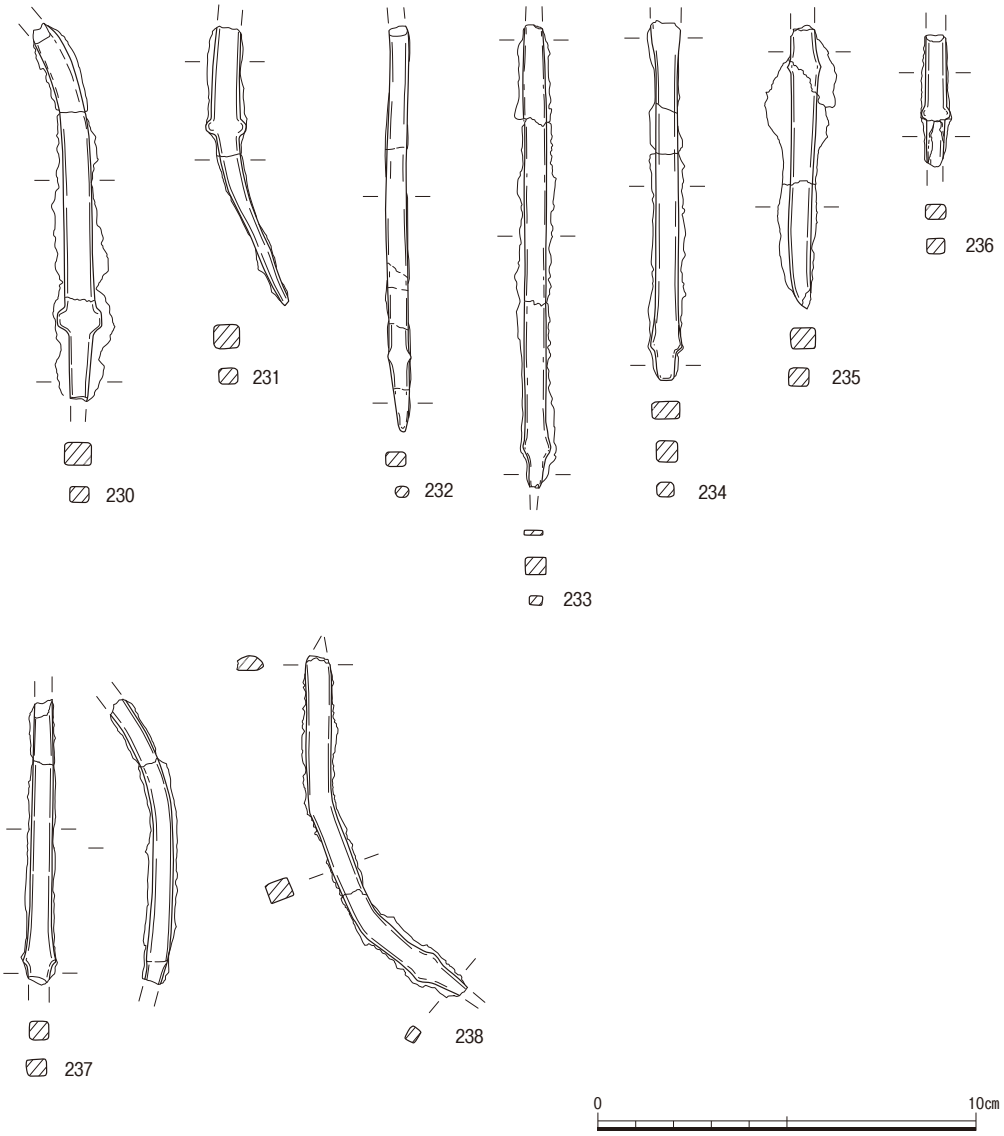


Fig. 115　第１～４次調査出土鉄鏃（９）　１：２

もう１本は片丸造で、ともに関部は棘状関である。96は頸部下位から関部にかけて、133は頸部上位と下位に、長軸に斜行する木目の木質が遺存する。また、132は頸部に木炭の付着がみられる。105や121・128のように頸部全体が緩やかに弯曲するものもあるいっぽうで、93は頸部と関部で直角に近く屈曲して鉤状となるほか、98・131も同様に、頸部を２ヵ所折り曲げて鉤状を呈している。97～99、131・132・146は屈曲が顕著である。とくに97は関部を、146は頸部中位を折り曲げている。99・132は鏃身部近くに頸部を大きく「Ｃ」字状に弯曲させており、釣り針状となる。143は頸部中位で折れ曲がり「く」字状を呈している。

片刃箭式鏃

片刃箭式鏃は25点を確認し、このうち154～171は端刃箭式である（Fig.112）。関部が遺存するものは台形関１点（163）、棘状関７点（147、158～162・166）である。鏃身断面形は、両面から研ぎ出された平片刃造が主体を占めるが、150・152・166は両面から研ぎ出され、側縁でさらに角度を変えて研ぎ出す両切刃造である。鏃身関部は、関をもたないものが主体を占める。関をもつものは片関であり、腸抉（147）のものと、角関あるいは斜め関（148～154、160・161）

とがある。155は刃部が欠損するが、頸部からわずかに広がる形態から、関をもたない片刃箭形鏃とみられる。158・160は頸部に木質が遺存する。148や158は頸部下半が弯曲し、150・152は大きく屈曲する。

頸部および関部（Fig.113～115）は角関２点、斜め関１点、台形関24点、棘状関40点と、台形および棘状関が主体を占めている。頸部が遺存するものはいずれも長く、長頸鏨箭形鏃と長頸片刃箭形鏃のいずれかであったとみられる。176や189は、矢柄痕跡の木質や樹皮による口巻が遺存する。178や179は遺存する頸部端を「Ｃ」字状や直角に近くに曲げ、230や237は頸部全体が緩やかに弯曲する。さらには、183・184のように頸部を直角に折り曲げて「Ｌ」字状を呈するものもある。また、238は頸部下位と中位の２ヵ所で折れる。200のように、全体が緩やかに弯曲するものは土圧の影響を考えるべきであるが、やはり意図的に折り曲げたとみられるものも一定数確認される。

なお、これら以外に棒状鉄製品と分類した鉄器が多数出土している。これらのなかには鉄鏃茎部片が含まれるとみられ、本書の報告範囲で出土した鉄鏃の多さが特筆される。

有肩鉄斧　**鉄　斧**（Fig.116）　11点が出土し、いずれも袋斧である。239～244は有肩鉄斧。239は明瞭な肩をもち、袋部の横断面は長方形を呈する。袋部折り返しは錆化のため不明瞭であり、現状では隙間を生じている。刃部は弧状をなす。「褐色砂質土」（US31区）出土。240は強く突出する肩をもつ。袋部の横断面は長方形で、袋部合わせ目はやや隙間を生じ、刃先側で緩やかに開く。刃部は左右非対称で、片側がすり減る。袋部から中央にかけて急激に厚さを増し、刃部へ向けて先細る。「大土坑」（UT27区）出土。241はなだらかな肩をもつ。袋部の横断面は長方形で、袋部折り返しは刃先側へ大きく開く。「南北礫溝」（UQ32区）出土。242は突出度の弱い肩をもつ。袋部の横断面は明瞭な長方形を呈し、袋部合わせ目は刃先側端部まで密着する。袋部から中央へ向けて急激に厚さを増す。袋部内部には柄とみられる木質が遺存する。「土坑バラス直上」（US32区）出土。243は比較的なだらかに突出する肩をもつ。袋部の横断面は長方形で、袋部合わせ目は鈍角に開き、折り返し部は刃先側へ開く。袋部から中央へ向けて急激に厚さを増す。基部袋部内部には柄とみられる木質が遺存する。「黄褐砂礫土」（UM30区）出土。244はわずかに突出する肩をもつ。袋部の横断面は長方形を呈し、袋部合わせ目は隙間があり、刃先に並行して折り返す。刃先端部は弧状をなし、袋部から中央へ向けて急激に厚さを増す。基部を欠損する。第４次調査区出土。248は刃部片で、刃先の一部と袋部から中央付近にかけて大きく欠損する。「暗褐粘質土」（UU27区）出土。

無肩鉄斧　245～247・249は無肩鉄斧。245は刃部へ向けてなだらかに開く平面形をなす。袋部の横断面は楕円形で、合わせ目は大きく開く。刃部先端へ向けて厚みを増す。刃部先端が欠損する。第３次調査出土。246は撥形の平面形を呈する。袋部の横断面は楕円形で、内部には柄とみられる木質が遺存する。袋部合わせ目は隙間があり、端部は刃先側へなだらかに開く。刃部端部は片側が大きくすり減る。袋部中央から厚みを減じ、刃部端部へいたる。「褐色土下半」（US32区）出土。247は肩部分でわずかに突出するが明瞭な肩部はもたない。袋部の横断面は隅丸長方形で、合わせ目は大きく開く。袋部から中央にかけて急激に厚さを増す。褐色土（UM27区）出土。249は撥形になだらかに開く形態。袋部の横断面は長方形で、袋部合わせ目は大きく開く。刃部で急激に厚さを増す。刃部は弧状をなし、袋部上半から基部にかけて欠損する。淡褐

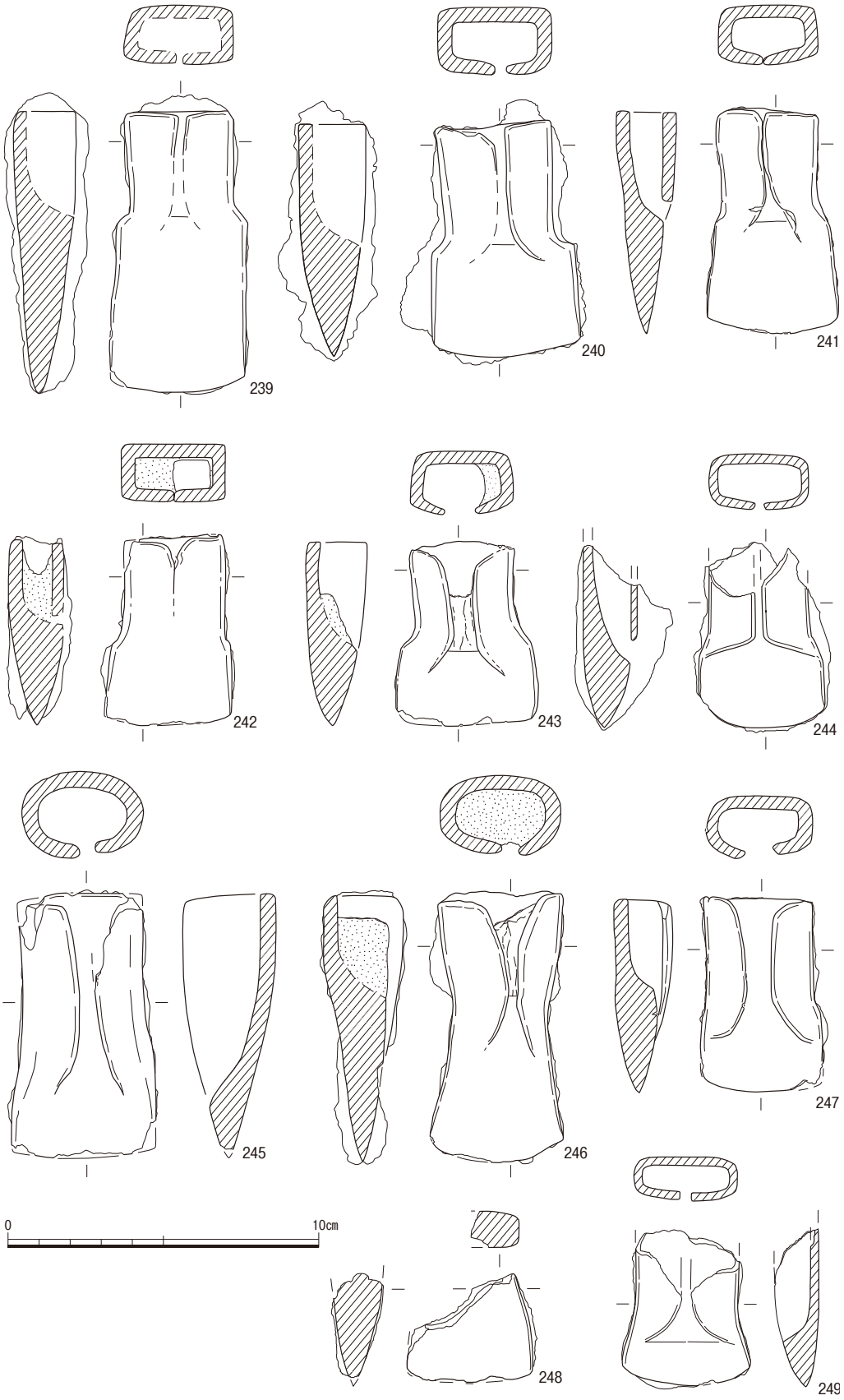


Fig. 116　第 1 ～ 4 次調査出土鉄斧　1：2

色土（UT23区）出土。

鉄　鎌（Fig.117）　12点が出土し、曲刃鎌６点、直刃鎌４点、刃部片２点がある。曲刃鎌は刃先を左にし、刃部を下に置いた際に折り返しが表側になる甲類が３点、裏側になる乙類が２点、基部を設けるものの、折り返しがみられないもの１点がある。着柄等による木質の付着は確認できなかった。

曲　刃　鎌　250は甲類の曲刃鎌で、刃部の断面形は楔形である。基部から刃部先端に向かい、緩やかに

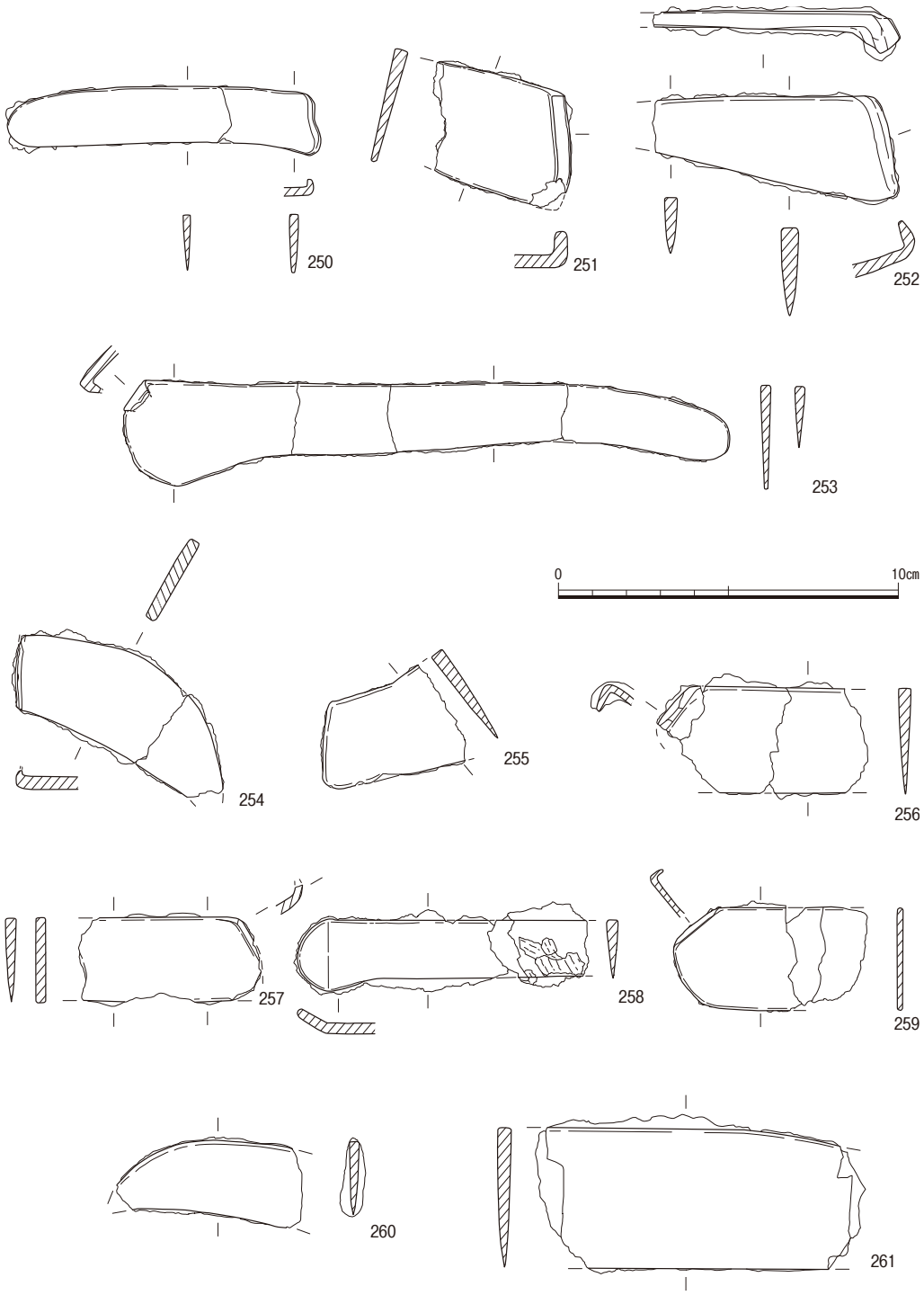


Fig. 117　第１～４次調査出土鉄鎌　１：２

内弯して弧状をなす。先端は丸みをおびる。基部は辺全体を90°に折り返す。第4次調査の「土坑」（UT33区）出土。251・252は刃部を欠損する、甲類の曲刃鎌。252は直線的な身部から、直刃鎌の可能性もある。251は基部を90°に折り曲げて折り返し部を作り出すのに対し、252の折り返しは鈍い。251は褐色土（UO31区）、252は「礫群」（UN24区）出土。253・254は乙類の曲刃鎌で、刃部の断面形は楔形である。基部から直線的にのびた後、刃部で曲がる253と、基部から急角度で下方に曲がる254とがある。254の基部は辺全体を、253は隅角のみを折り返す。253は「南北礫溝」（UM31区）出土、254は「拡張区西土坑」（UU27区）出土。255は、刃部を断面楔形に作り出すが、基部に折り返しはみられない。淡褐色土（UR23区）出土。253は全長17.8cm、刃部幅3.1cmの大型品である。

直　刃　鎌

257は基部の一部と刃部が欠損する甲類の直刃鎌で、刃部は断面楔形に作り出す。折り返し角度は90°以上。「南岸外大土坑」（UB29区）出土。256・258・259は乙類の直刃鎌で、256・259は刃部の大半が欠損する。どちらも折り返し角度は90°。256は「土坑」（UO31区）、259は「大土坑」（UQ32区）出土。258は刃部先端が欠損し、刃部に木質が遺存する。基部は背側が直線にのびるが、刃部側は下方に膨れ、折り返し部は丸く仕上げる。明確な折り返しはみられず、基部中央付近でわずかに折れ曲がる。「礫溝」（UN30区）出土。260・261は刃部片で、どちらも基部を欠損する。260は曲刃鎌。第4次調査区出土。261は刃部幅が4.1cmで、出土した鉄鎌の中で大型に属する。先端に向けてわずかに弯曲することから曲刃鎌の可能性が考えられる。「床土バラス」（UT07区）出土。

刀　子（Fig.118・119）　38点が出土した。完形品は少なく、切っ先や茎部を欠損するものが大部分である。片刃で、関は両関、片関、無関に分けられる。刃部は刃関へ向かい直線的にのびるものが多い反面、切っ先が反るものや緩やかに弯曲するものもみられる。

262は遺存長19.6cm、刃部長が15.5cmをこえる大型品である。切っ先は欠損するが、刃関へ向かい緩やかに弯曲する曲刀子。関は刃部側が直角に作り出されているが、棟側はわずかに屈曲して茎部へといたる。263・264も262と同程度の刃部長となる刀子片で、263も刃部は緩やかに弯曲する。264は鈍い片関を呈し、茎尻は隅丸方形におさめ、茎部には柄の木質が良好に遺存する。部材の合わせ目や溝はみとめられず、さらには刃部側には漆塗りとみられる柄縁装具の装着が確認できる。同様の柄や装具痕跡は、276・284・286・291・293で確認できる。いずれも柄の木質とともに別材による木製の柄縁装具が残る。

全体としては、刃部幅1.0～1.5cm、茎部幅1.0cm前後の細身のものが多くを占める。これらも片刃で関は鈍角となる両関が主体で、片関は272・280・283・290がある。このうち、265は無関で、切っ先は上方へわずかに反り、関部分で緩やかに弯曲して茎へいたる。刀身全体には皮革とみられる有機物が遺存する。鞘痕跡か。茎部は直線的にのびるものが多い中で、277は茎尻へ向かい下方へ緩やかに弯曲する。また、切っ先の平面形が両刃状となる。遺存する茎部長に比して刃部長は2.3cmと極端に短い。283は刀身全体に皮革状の有機質が、茎部全体に多孔質の有機質がもっとも厚い部分で0.8cmと厚く付着する。刀身の有機質は鞘の、茎部の有機質は鹿角製柄の痕跡であるとみられる。同様に、287・288の遺存する刀身全面にも鞘とみられる皮革状の有機質が残る。288は茎部に柄の木質も遺存する。装具が良好に遺存する刀子は、木製の柄を有し、皮革製の鞘に納められていたことがわかる。

鞘　痕　跡

鹿角製の柄

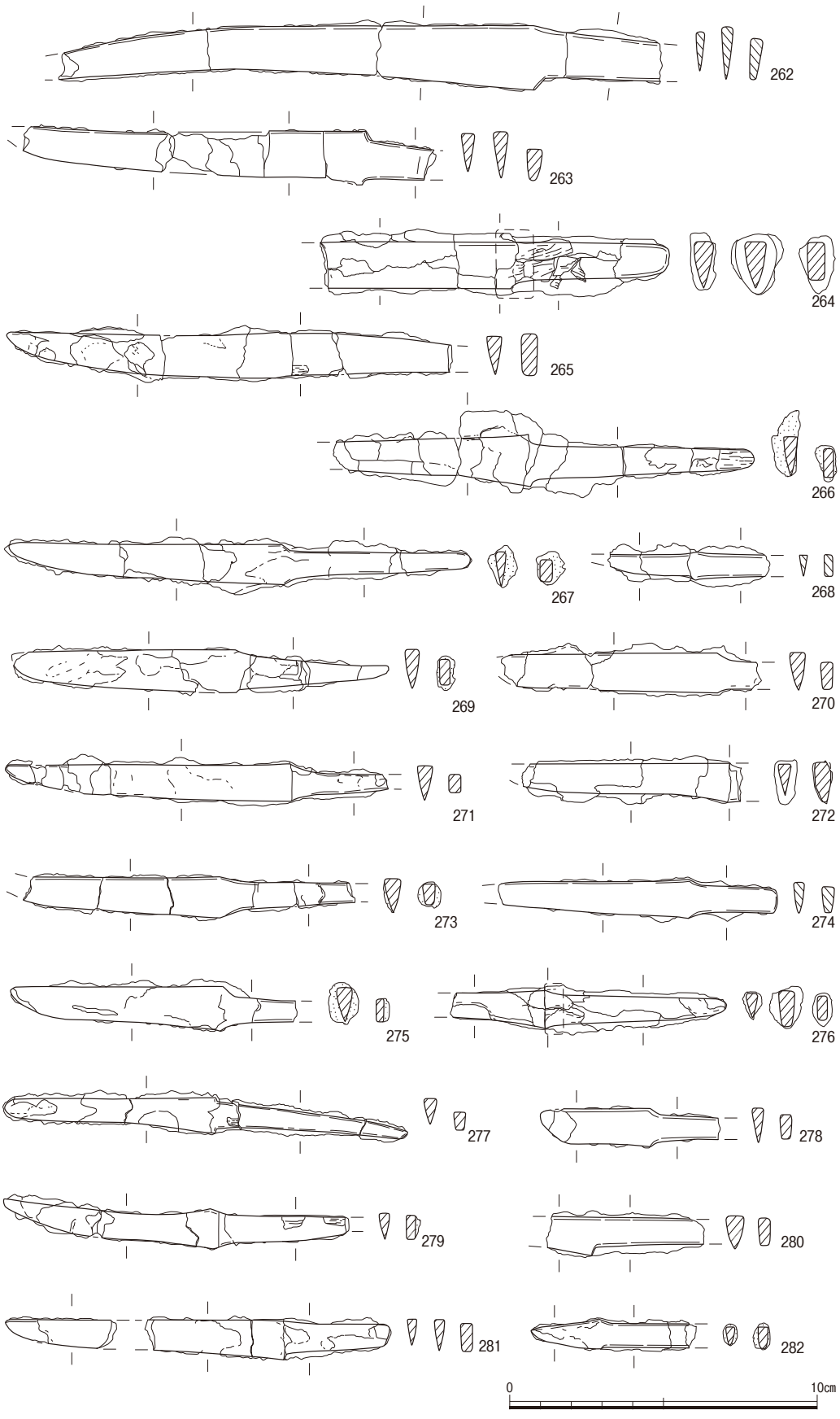


Fig. 118　第 1 ～ 4 次調査出土刀子（1）　1：2

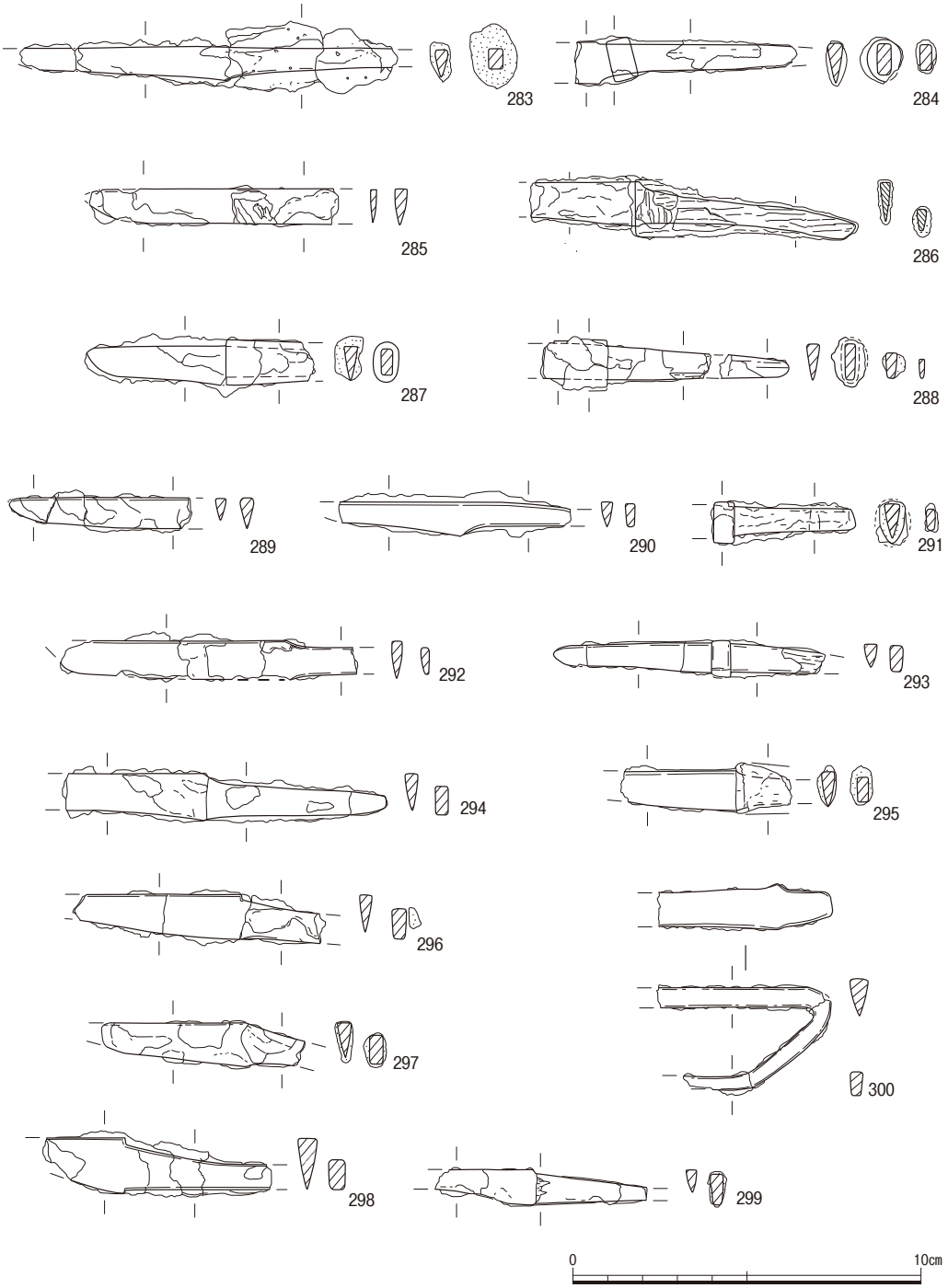


Fig. 119　第１～４次調査出土刀子（２）　１：２

300は刃部先端が欠損する片刃、斜め関状の両関で、刃部中位から90°以上折れ曲がる。

銛（Fig.120-302・303）　302・303は茎部から同幅で刃部へのびるが、刃部と茎部の境界は関状を呈する。ともに刃部は断面三角形で鎬がはしる。302は遺存長8.0cm、刃部長5.0cm、刃部幅1.5cm、茎部幅0.9cm、厚さ0.6cm。褐色土（UP20区）出土。303は遺存長6.8cm、刃部幅1.4cm、茎部幅0.6cm、厚さ0.5cm。黄褐色土（UQ29区）出土。

鉄　鏃（Fig.120-304）　袋部と肩部を欠損した鉄鏃と考えられる。身部は最大厚0.4cmの方形

状の鉄板で、下端に向かって厚みをやや減じながら弯曲する。遺存状態が悪く刃部の有無は不明。身部上端には、身部よりも厚い方形状の鉄棒が上方へのびることから、袋部の基部とみられる。遺存長4.0cm、身部幅3.4cm。淡褐色土（UR23区）出土。

鉄　鑿（Fig.120-305）　装着部が欠損する。両刃作りで、厚い体部から刃部へ向かって先細る。遺存長6.8cm、幅0.8cm、厚さ1.0cm。灰褐色土（UJ28区）出土。

楔（Fig.120-306・307）　306は断面方形の棒状を呈し、片端へ向かい両側から厚さを減じて先細る。頭部は隅丸方形。全長5.3cm、幅1.4cm、頭部厚1.1cm。「石組溝東抜取」（UQ17区）出土。307は両端が欠損する。306に比して全体的に薄く、厚さは一定である。楔か。遺存長5.8cm、幅1.5cm、厚さ0.9cm。「南北礫溝」（UN30区）出土。

鉄　鏨（Fig.120-308）　両刃作りで、頭部はわずかに潰れる。体部中位から「く」字状に折れる。使用によるものかは不明。全長7.8cm、幅0.7cm、厚さ0.7cm。褐色土（UP32区）出土。

鉄　床（Fig.120-310）　方柱状で、上面が大きく下面が小さい形状をなす。上面は平坦な面を形成するが、片方へ傾き歪である。下面は中央がくぼみ、安定感に欠ける。横断面形は正方形に近く、方柱状の体部に上面は外側へ大きく広がる逆台形状のような縦断面形をなす。使用に伴う磨滅の痕跡等は観察できなかったが、上面は下面に比べて大きく外側へ広がる形状をとることから、叩打による変形とみることもできる。高さ5.5cm、上面4.4×4.5cm、下面1.8×2.3cm、現重量は321.2ｇであるが、錆化が進み遺存状態は悪い。「土坑灰褐土」（UO31区）出土。

鉄製紡錘車（Fig.120-311・312）　311は中央の円孔周縁に鉄芯がわずかに遺存する。円孔は直径0.5cmで、両端は歪む。円盤部の厚さは不均一で、片方が上方へ向かい拉げる。直径4.0cm、厚さ0.6cm。「東西小溝①」（UP29区）出土。312は中央に直径0.4cmの円孔を穿孔する。直径3.7～3.8cm、厚さ0.3cm。第４次調査区の盛土中出土。

鉄　針（Fig.120-313・314）　313は頭部を欠損する。断面形は横に広い方形で、先端に向けて鋭利に先細る。遺存長3.2cm、幅0.3cm、厚さ0.2cm。針孔は確認できなかった。排土中（UU27区）出土。314は29本以上の鉄針が錆着する。断面隅丸方形で、１本の遺存長約4.5cm、径0.1～0.2cm。いずれも両端を欠失しており、針孔は確認できなかった。鉄針は錆着して束状となり、その両端は丸まる。表面には繊維状の有機質が付着する。北排水溝（UV21区）出土。

棒状鉄製品（Fig.120-301・309）　301は刃部上半が欠損する。扁平な茎部から一段細く作り出した体部へいたる。体部は茎部に対して断面菱形の方形を呈し、鎬が関部分までとおる。茎部全体に木質が付着し、柄を装着した工具とみられるが用途不明。遺存長9.0cm、茎部長6.2cm、体部幅0.8cm、茎部幅0.9cm、茎部厚0.4cm。「土坑２」（UU23区）出土。309は頭部へ向かい幅を増す棒状品。頭部は薄く、先端は面をもつ。全長6.8cm、幅0.9cm、厚さ0.5cm。「敷石上面褐色砂礫」（UP16区）出土。

鉄　釘（Fig.121～125）　すべて断面方形の角釘であり、頭部形態により、切釘、折釘、叩折釘、方頭釘、円頭釘に大別される。頭部形態がわかるものを中心に報告する。また、鉄釘の中には鉄鏃同様、変形が著しい資料が散見された。

切　　釘　Fig.121-315～330は頭部を別途作り出さず、軸部上端をそのまま頭とする切釘。16点出土。315は全長24.5cmで、今回報告する鉄釘のうち大型に属する。頭部が左右にやや広がる。そのほかに、頭部上端を叩き、頭部直下に稜線がはいるもの（320）や、頭部が軸部よりも広くな

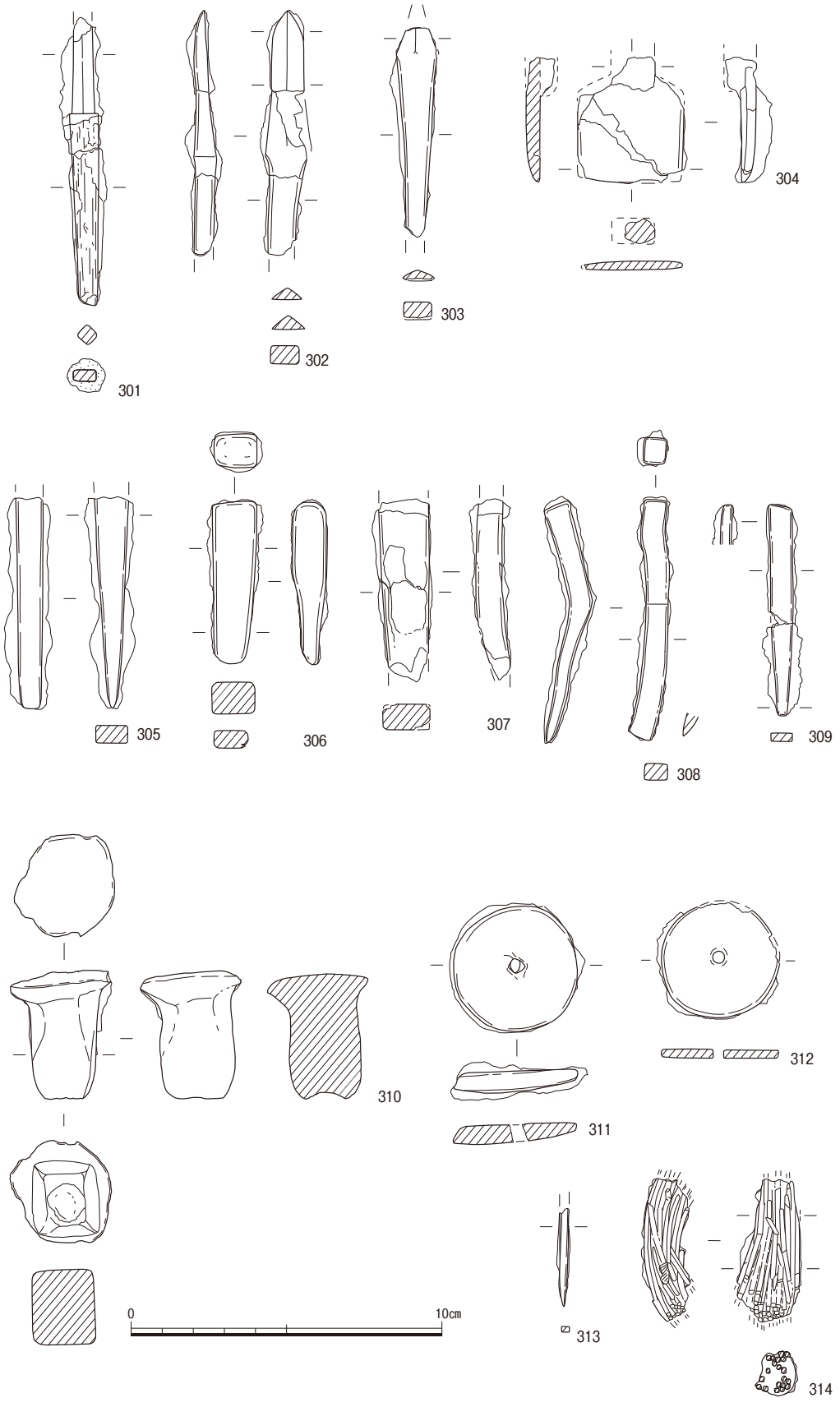


Fig. 120　第 1 ～ 4 次調査出土鉇・鉄鑿・鉄床・鉄鏨・楔・鉄製紡錘車・鉄針　1：2

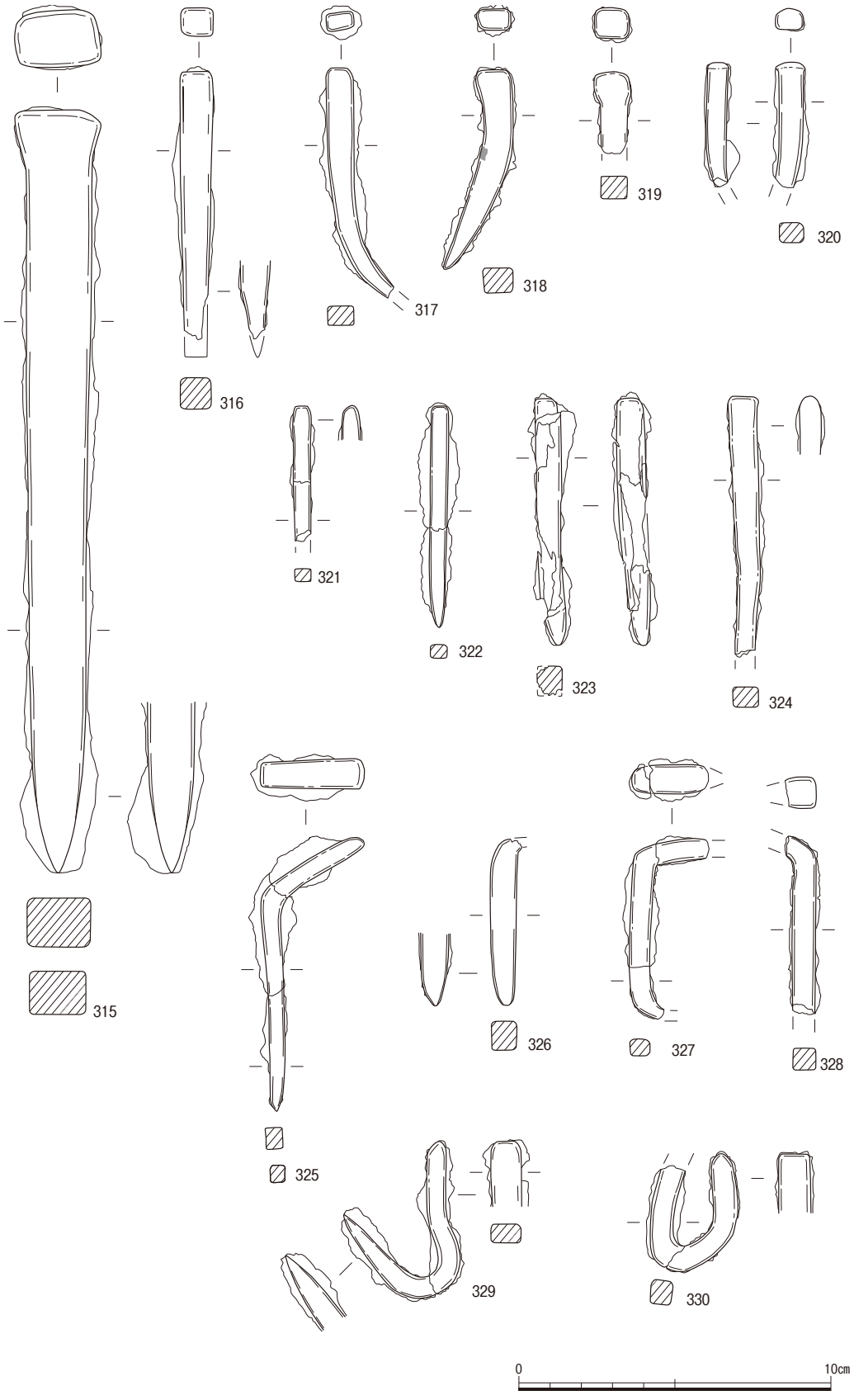


Fig. 121　第 1 ～ 4 次調査出土鉄釘（1）　1：2

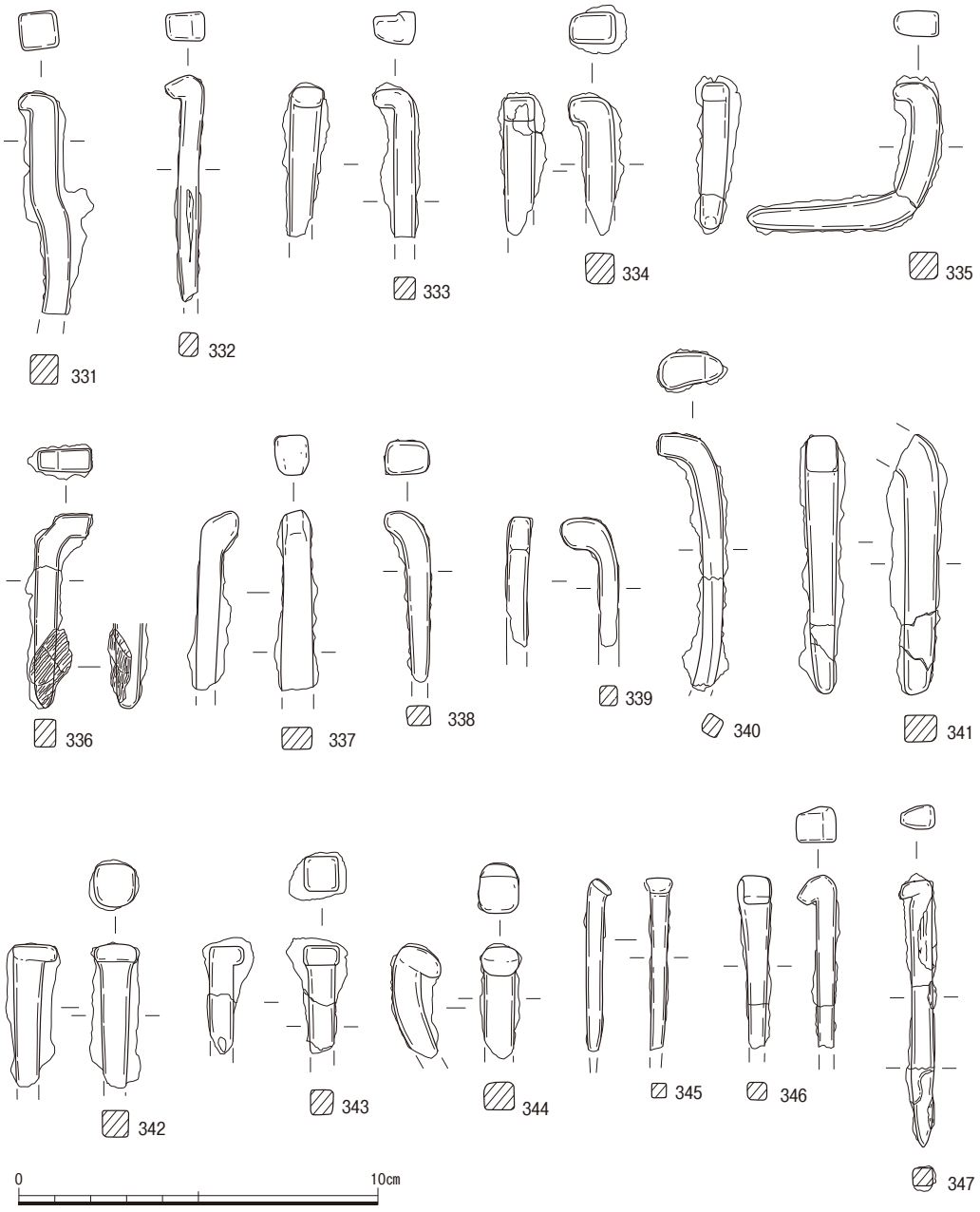


Fig. 122　第１～４次調査出土鉄釘（２）　１：２

るもの（319）もある。また、軸部上端を叩き出して頭部が先細るもの（321・325・327～330）もみられる。317や320のように、土圧等の影響で緩やかに曲がるものがあるいっぽうで、326・328は軸部上位で、325は軸部中位で鋭角に折れ曲がる。さらに327は軸部上位と下端が「く」字状に折れ曲がり、鏃のような形状となる。329・330は軸部中位から「U」字状に大きく折れ曲がる。

Fig.122-331～347は軸部上端の厚さを減さずに折り曲げて頭とする折釘。17点出土。頭部が　折　釘
直角近くに曲がるもの（331～336）、90°以上曲がり、端部が下方を向くもの（344～347）、方頭釘状を呈するもの（342・343）、緩やかに曲がり蕨手状を呈するもの（337～341）に分けられる。332・336・347は軸部に木質が遺存する。336は全長に対して斜め方向に、332・347は並行方向

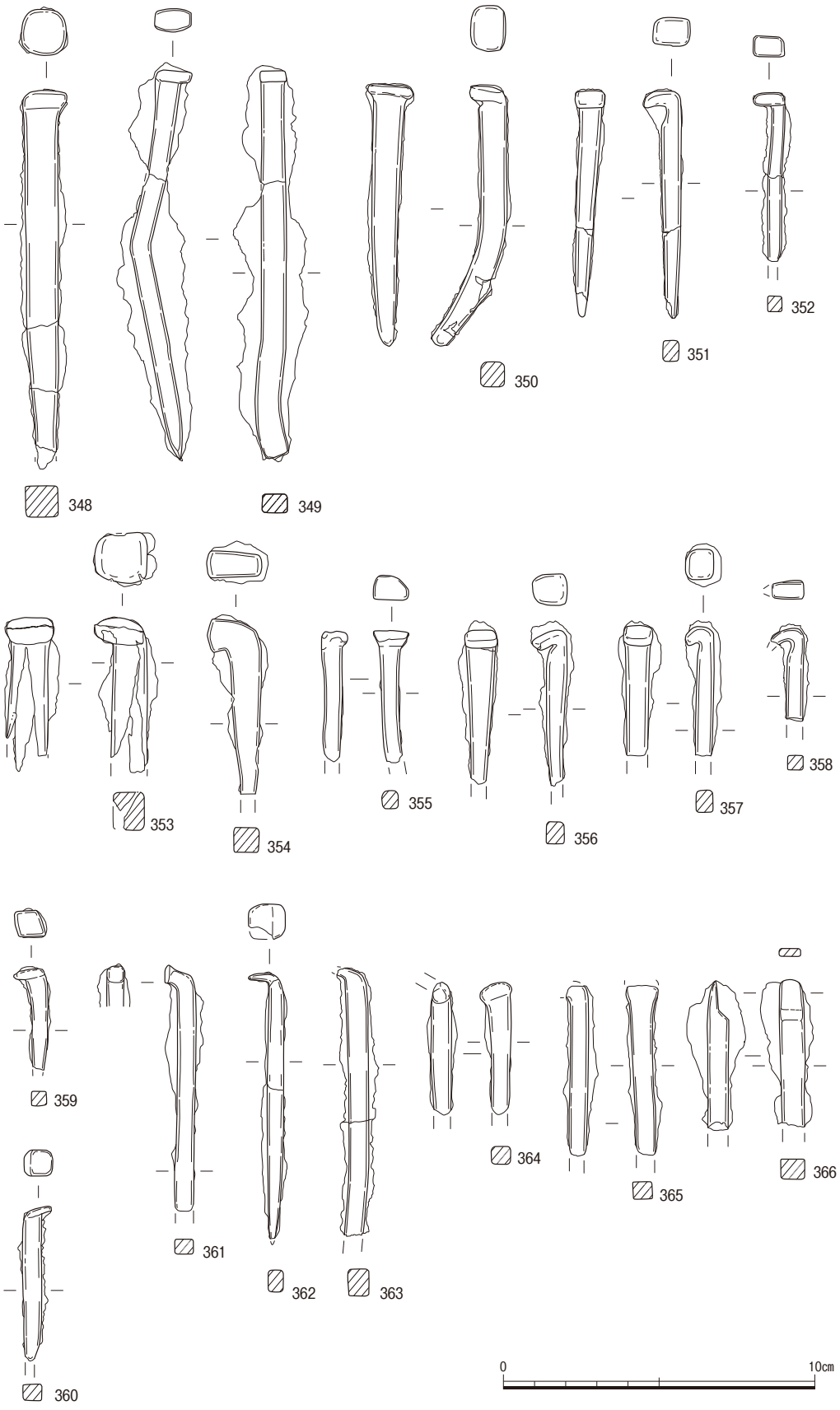


Fig. 123　第 1 ～ 4 次調査出土鉄釘（3）　1：2

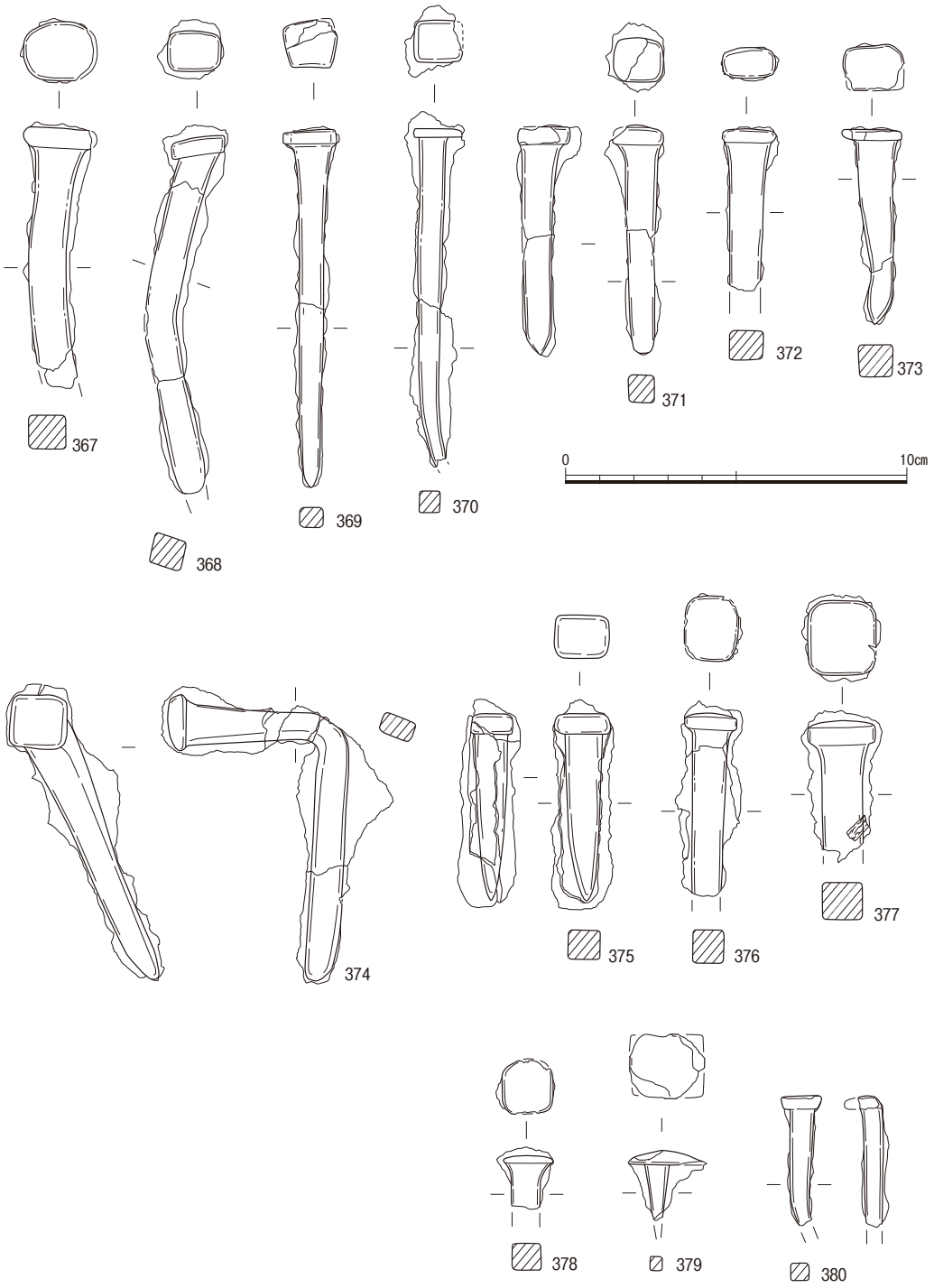


Fig. 124　第１～４次調査出土鉄釘（４）　１：２

に木目がつく。331は軸部中位が歪み、335は軸部中位で直角に折れ曲がる。

Fig.123-348～366は軸部上端を叩き出し、叩打方向に折り曲げて頭とする叩折釘。折釘との判別が曖昧なものもあるが、頭部幅が軸部よりも広いものを叩折釘とした。15点出土しているほか、頭部は欠損するが叩折釘とみられる破片４点がある。折り曲げ部分を重点的に叩き、厚さを減じて折り曲げるもの（356～358）、先端まで叩き出して折り曲げ、頭部全体を薄く仕上げるもの（359～363）、折り曲げが小さいもの（355）や横に広がるもの（366）などがある。362

叩　折　釘

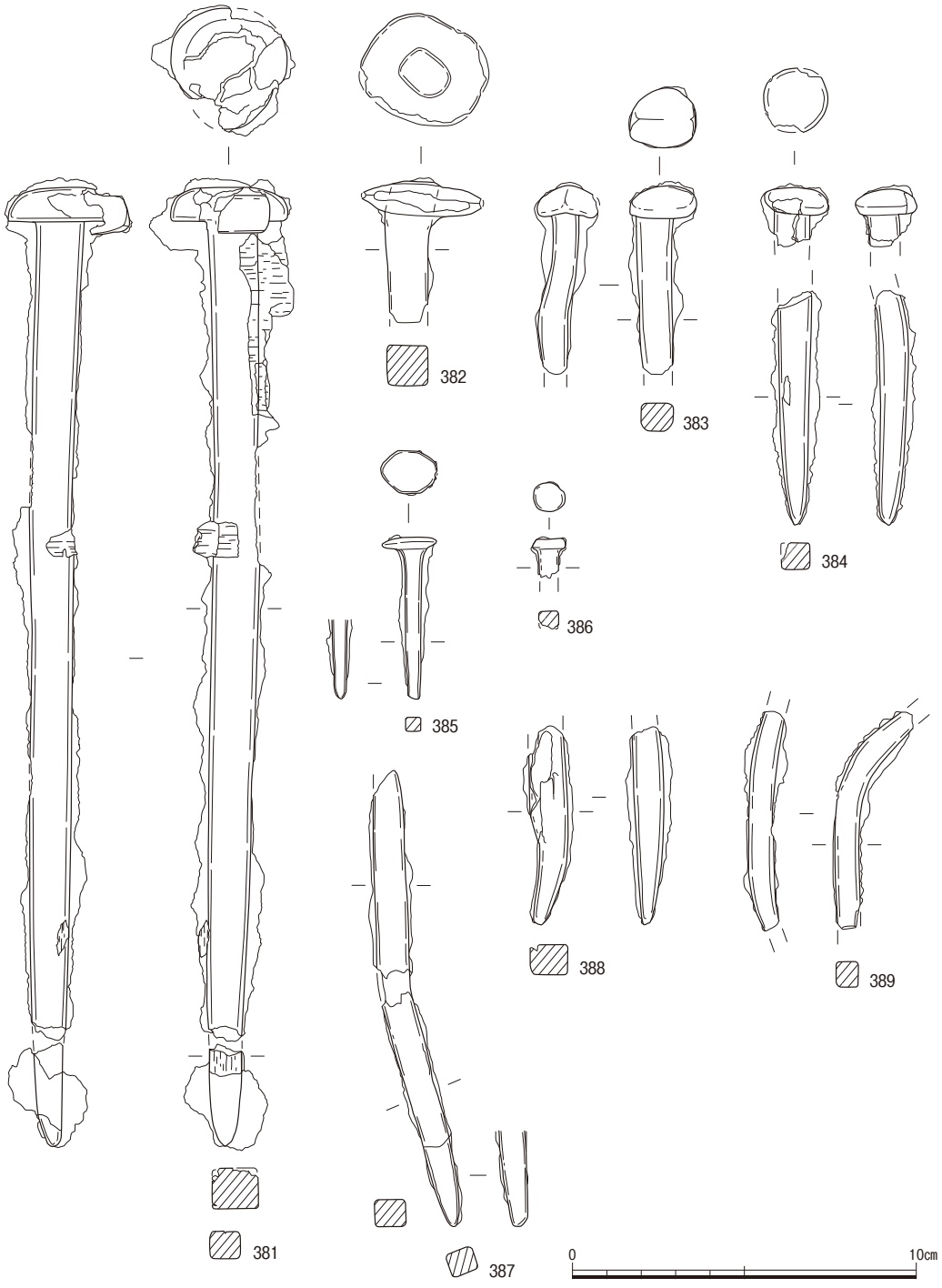


Fig. 125　第１～４次調査出土鉄釘（５）　１：２

～365は頭部が欠損しているが、軸部上位で厚さを減じており、端部へ向かい折れ曲がる形状に復元されることから叩折釘とみられる。349は軸部中位が「く」字状に、350は軸部下位から緩やかに曲がる。

方　頭　釘　Fig.124-367～380は軸部よりも大きく方形の頭部を作り出す方頭釘。14点出土し、頭部上端が平坦なもの（367～373・375・380）、やや丸みを帯びるもの（374・376～379）に分けられる。前者は全長10cm前後と６cm前後に二分される。また、後者のうち、374・378・379は頭部周縁

を叩き出して、断面が山笠状をなす。軸部幅は端部から頭部直下まで均一なものが主体である中、379のみ端部下端にかけて先細る。374は軸部端部まで遺存する完形品であるが、軸部中位から90°近く「く」字に折れ曲がる。

円頭釘

Fig.125-381～386は軸部よりも大きく円形の頭部を作り出す円頭釘。６点出土。頭部が分厚く山笠状を呈するもの（381・383・384）、薄く平坦なもの（382・385）、頭部幅が1.0cm以下の小型品（386）に分けられる。381は一部破損するが、全長28cm前後に復元される大型品で、頭部の作り出しも明瞭である。頭部直下の軸部上位、中位、下端に木質が遺存し、軸部上半は全長に対して直行する木目、下半は並行する木目の木質がつく。

387～389は頭部が欠損した軸部片。これら以外に、棒状品としたものの中にも、頭部を欠損

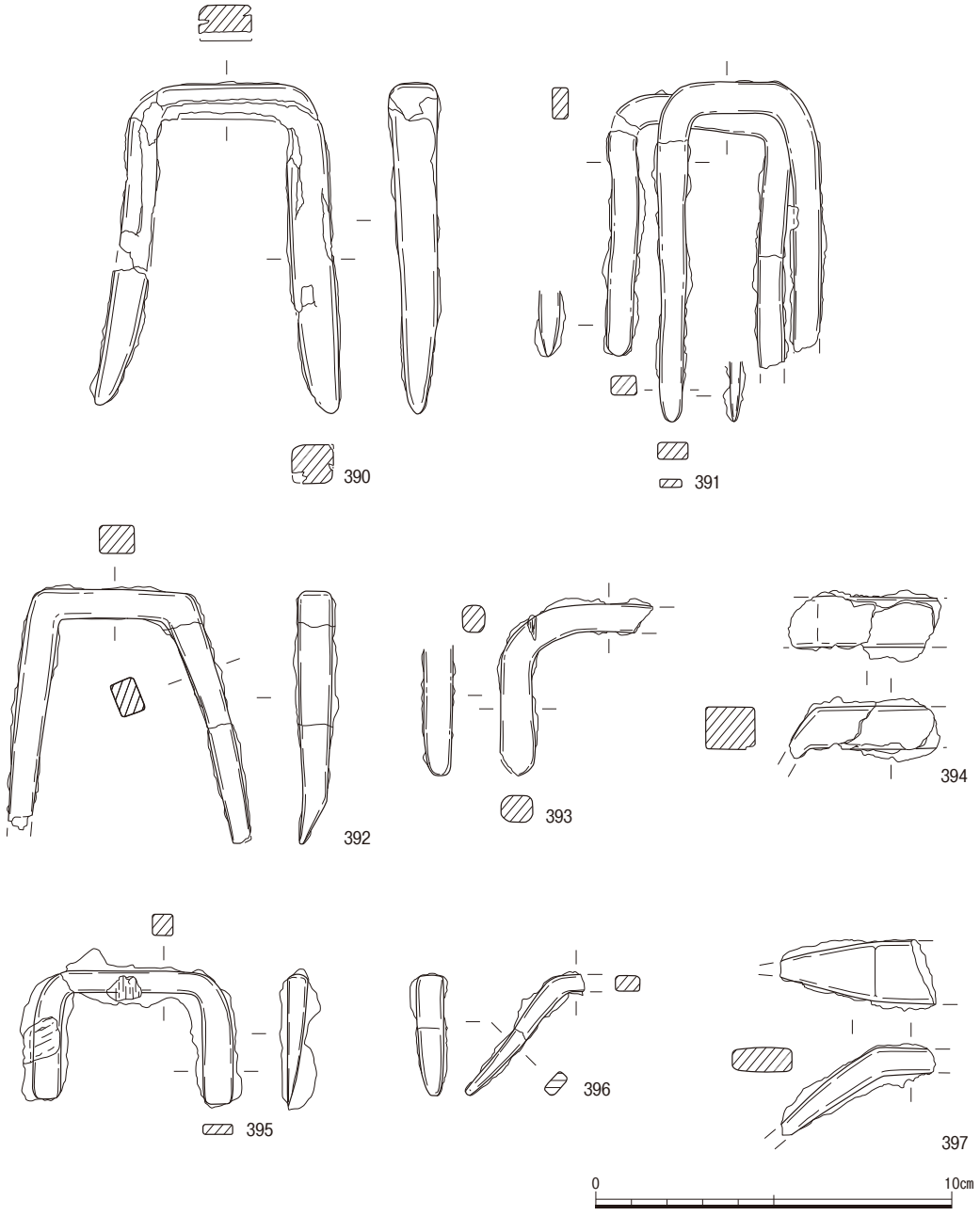


Fig. 126　第１～４次調査出土鎹　１：２

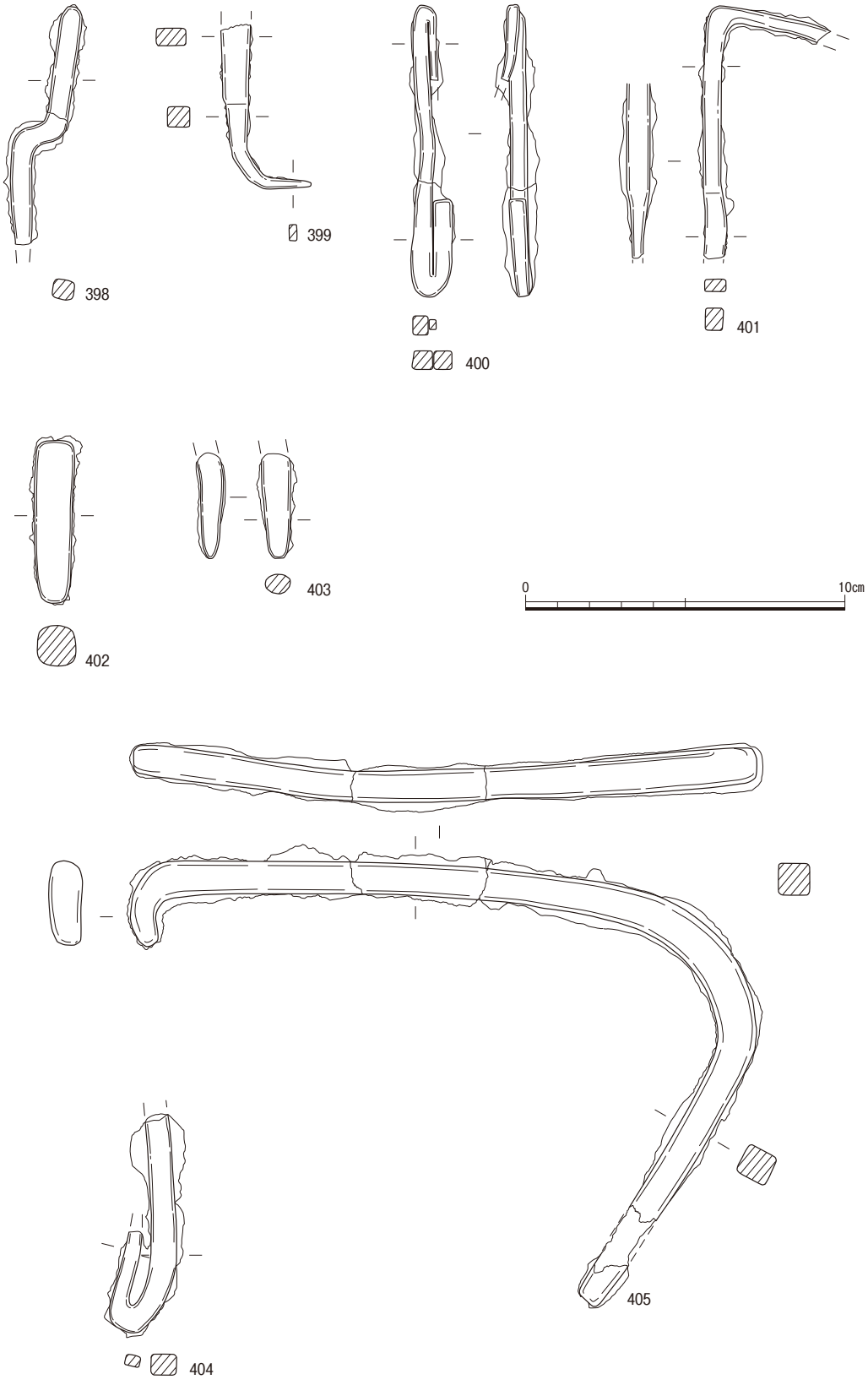


Fig. 127　第 1 ～ 4 次調査出土棒状品・鉤状工具　1：2

した鉄釘が含まれるとみられる。

鎹（Fig.126）　全体形がわかるものが４点、脚の一端を残すものが４点ある。390はほぼ完形品で、脚部がやや曲がる。全長6.9cm、身部幅1.5cm、厚さ0.8cm。褐色土（UO28区）出土。391は２点が溶着する。どちらも片方の脚端部が欠損する。上面の鎹は全長5.0cm、身部幅0.5cm、厚さ0.7cm、下面は全長4.5cm以上、身部幅0.5cm、厚さ0.9cm。「礫群」（UN30区）出土。392は片方の脚が欠損する。遺存する脚は端部が斜め方向に尖る。全長7.0cm、身部幅1.0cm、厚さ0.8cm。「土坑３」（UQ31区）出土。395は完形品で、幅に比して扁平である。身部中央と脚に木質が遺存する。全長5.6cm、身部幅0.6cm、厚さ0.7cm。SK518出土。393・396・397は脚片。394・396・397は身部から明瞭な稜線をもち「ハ」字状に大きく開き、端部は先細る。393

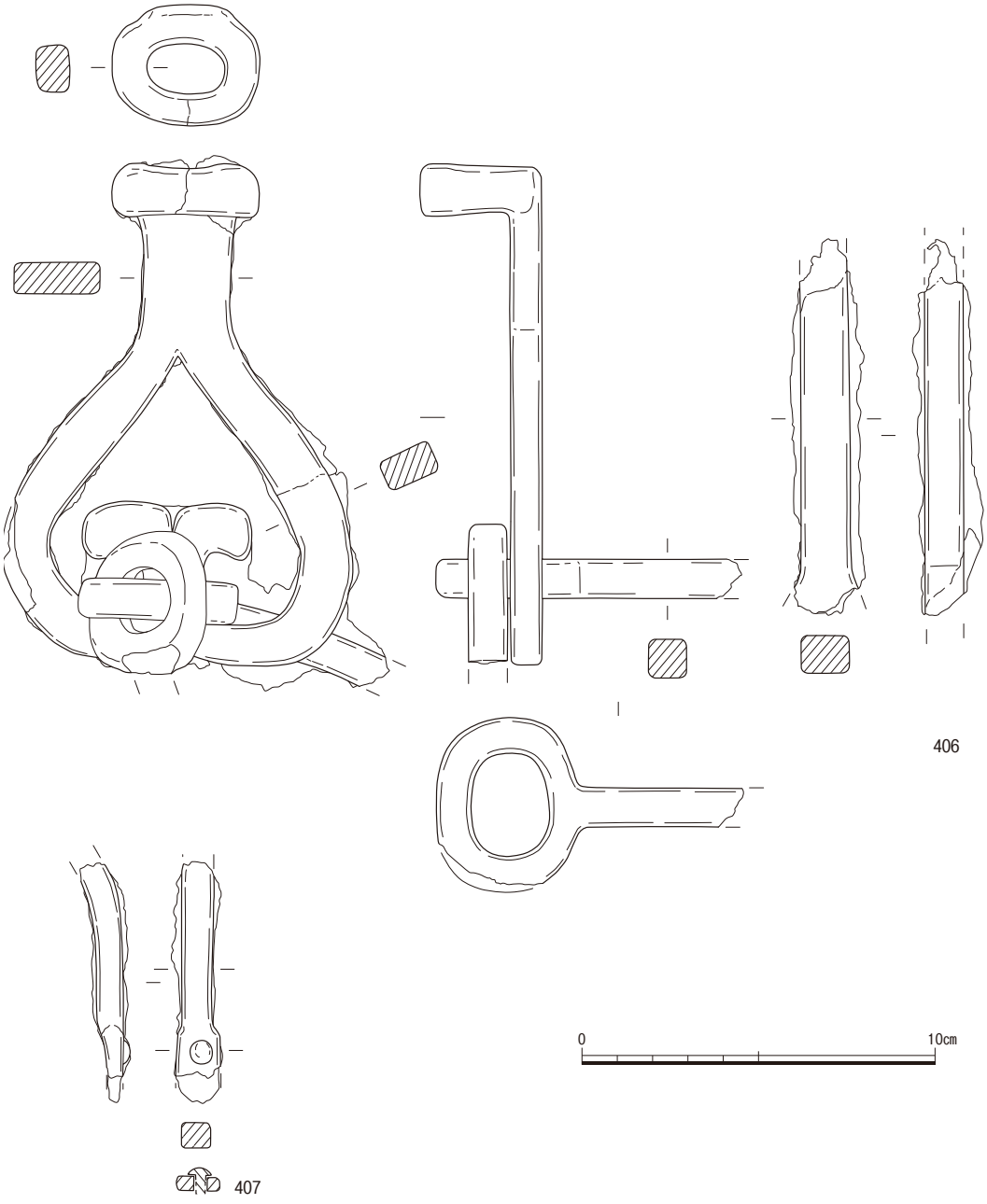


Fig. 128　第１～４次調査出土馬具　１：２

は身部から緩やかに折れ、直線的に下方にのび、端部は丸みを帯びる。木質がわずかに遺存する。393は身部幅0.7cm、厚さ0.8cm。第３次調査区の灰褐色土（UH30区）出土。394は幅1.4cm、厚さ1.1cm。暗黄褐色土（UP27区）出土。396は幅0.7cm、厚さ0.5cm。黄褐色土（UQ30区）出土。397は身部幅1.7cm、厚さ0.7cm。褐色土（UQ33区）出土。

棒状・鉤状鉄製品（Fig.127）　８点出土。棒状や鉄棒の一端ないしは両端を大きく折り曲げる。398・399は幅0.5cmの鉄棒片端を屈曲させるもので、398の先端は柳葉形を呈する。399の先端は先細り、体部は扁平。398は遺存長7.5cm。「土坑下層」（UQ23区）出土。399は遺存長5.2cm。「大土坑」（UQ32区）出土。400は幅0.5cmの鉄棒両端を体部側に折りたたむ。遺存長9.1cm。側石抜取（UB20区）出土。401は幅0.5cmの鉄棒片端を逆「Ｖ」字状に折り曲げる。欠損する片端に向けて先細る。遺存長7.7cm。「大土坑」（UQ32区）出土。402・403は隅丸方形の鉄棒で端部も丸みを帯びる。402は遺存長5.0cm。「大土坑」（UT28区）出土。403は遺存長3.4cm。褐色土下半（US32区）出土。404･405は鉤状を呈する。404は幅0.8cmの方形の鉄棒片端を「Ｕ」字状に大きく折り曲げ、405は幅1.0cmの方形の鉄棒を片方は先端を短く、もう片方は緩やかな「Ｕ」字状に折り曲げる。404は遺存長6.9cm。灰褐色土（UI24区）出土。405は遺存長19.6cm。SE800石組内の「中層礫群」（UU26区）出土。

杏葉轡　**馬　具**（Fig.128）　２点出土。406は杏葉轡。鏡板は、幅1.4cmの断面長方形の鉄棒で杏の葉形を呈し、外径4.2cmの環状の立聞が取り付く。引手は外径4.0cmの引手壺のみが遺存する。銜は外径5.0cmの銜先環から断面方形の鉄棒がのびる。銜先環に鏡板と引手をともに搦め、引手と鏡板は連結されない。形態的特徴から、平安時代以降のものとみられる。床土（UV06区）出土。407は断面方形の鉄棒で、上部端は緩やかに弯曲する。下半は幅を広げて長方形状となり、径0.6cmの鉄鋲が１点打たれる。鐙吊金具か。内面に木質等の痕跡はみられない。黄褐色土（UO29区）出土。

鉄剣・鉄刀（Fig.129-408・409）　408は鉄剣で切っ先と茎下半が欠損する。刃部断面形は緩やかなレンズ状を呈し鎬はみられない。刃の研ぎ出しは不明瞭。刃部上方で曲がる。遺存長13.5cm、幅2.2cm、厚さ0.4cm。暗灰色土（UT10区）出土。409は鉄刀切っ先片。先端に土師器杯とみられる土器片が錆着する。遺存長4.0cm、幅5.3cm、厚さ0.5cm。「バラス」（UT07区）出土。

袋状鉄製品（Fig.129-411・412）　411は厚さ0.5cmの鉄板を袋状にした内部に、径2.0cmの木製柄が挿入する。鉄板下端は欠損し、端部が上方へめくれ上がる。木製柄の上端は鋭利な刃により切断される。鉄板遺存長1.4cm。SE800井戸枠内灰褐色砂（UT26区）出土。412は片刃鉾状を呈する。上半に片刃の刃部を、下半に袋部を作り出す。袋部は下方へ向けて大きく広がり、漏斗状となる。袋部の綴じ合わせは粗く不均等。ミニチュア製品か。遺存長6.8cm、刃部遺存長2.0cm、袋部遺存長4.4cm。

石　突（Fig.129-413～415）　413は両端が欠損する。袋部綴じ合わせの下方に径0.6cmの目釘状の孔が貫通する。釘は遺存しない。遺存長5.5cm、袋部幅1.6cm。褐色土（UQ32区）出土。414は全長2.0cmの小型品。片側に緑青が付着する。袋部幅0.9cm。黄褐色土（UO29区）出土。415は先端を方形におさめ、端面は面を呈する。袋部の綴じ合わせは確認できない。遺存長7.9cm、袋部幅2.8cm。第３次調査区の灰褐色土出土。

楕円形座金具（Fig.129-416）　外径2.4cmの楕円形金具に径0.6cmの軸棒をかしめる。褐色土（UN24区）出土。

方形鉄製品（Fig.129-417）　一辺2.4cm、厚さ0.6cm。全体は緩やかに弯曲する。用途不明で、中軸上方に径0.4cmの鉄鋲が遺存する。褐色砂礫（UM20区）出土。

両頭金具（Fig.129-419・420）　２点出土。ともに完形。楕円球形の頭部と断面方形の棒状部分からなる。棒状部分には薄い鉄板を巻いて管をつくるが、合わせ目はともに確認できなかった。420の管両端は鍔状となる。419の管は片側に偏る。全長3.0cm、棒状部の長さ1.8cm、幅0.6cm。黄褐色土（UO29区）出土。420は全長2.9cm、棒状部の長さ1.9cm、幅1.0cm。「礫溝」（UN30区）出土。

両頭鋲（Fig.129-421）　断面方形の足部両端に円形の頭部からなる。全長1.9cm、鋲頭径0.8～0.9cm、足部長1.4cm、幅0.5cm。SK764出土。

B　銅 製 品（Fig.129、Ph.73）

鞘尻金具（Fig.129-410）　幅0.1cmの鉄筒金具下端に、青銅製の金具を嵌める。内面には木質が遺存する。全長4.8cm、幅2.9cm。床土（UF30区）出土。

鳩目金具（Fig.129-418）　径2.0cmの平面円形の頭部に管が付き、その先端は広がる。鳩目金具とみられる。全長2.0cm。南北溝（UK08区）出土。

鉄地金銅張製品（Fig.129-422）　細長方形の片端を裏面に折り返し、全体は緩やかな弧状を呈する。鉄地金銅張で、鋲等は確認できない。遺存長4.5cm、幅2.6cm、折り返し幅0.4cm。鉄板の厚さ0.1cm。「土坑１」（UT25区）出土。

鉸　具（Fig.129-423）　留金具がはずれ、輪金基部の軸棒と刺金の一部が欠損する。鋳造銅製。輪金の幅約2.9cm、長さ約1.7cm、刺金の遺存長約0.4cm[3]。流路NR310（UF06区）出土。

鉈　尾（Fig.129-424）　平面形は爪形で、長辺に抉りを入れて花弁形にし、中央に幅約0.2cmの稜線を作り出す。長さ約2.9cm、幅約3.1cmで表板の厚さ0.15～0.2cm、裏板の厚さ約0.1cmで、表金具は鋳造銅製、裏金具は鍛造鏨切の銅製とみられる[4]。「二番床」（UO16区）出土。

鉈尾表金具（Fig.129-425）　鋳造銅製で鋲脚も一体鋳造する[5]。遺存長約1.5cm、幅約1.4cm、厚さ0.2～0.25cm。「二番床」（UN29区）出土。

銅　管（Fig.129-426）　中空。遺存長4.3cm、径1.0cm。1936年調査区の埋戻土（UH08区）出土。

1）「石神遺跡第４次調査」『藤原概報15』1985年。
2）金田善敬「有肩鉄斧の製作技法の検討」『古代吉備』第17集、古代吉備研究会、1995年。
3）片山健太郎・田村朋美「飛鳥・藤原地域出土の馬具・帯金具」『紀要2022』。
4）片山・田村、前掲註３）論文。
5）片山・田村、前掲註３）論文。

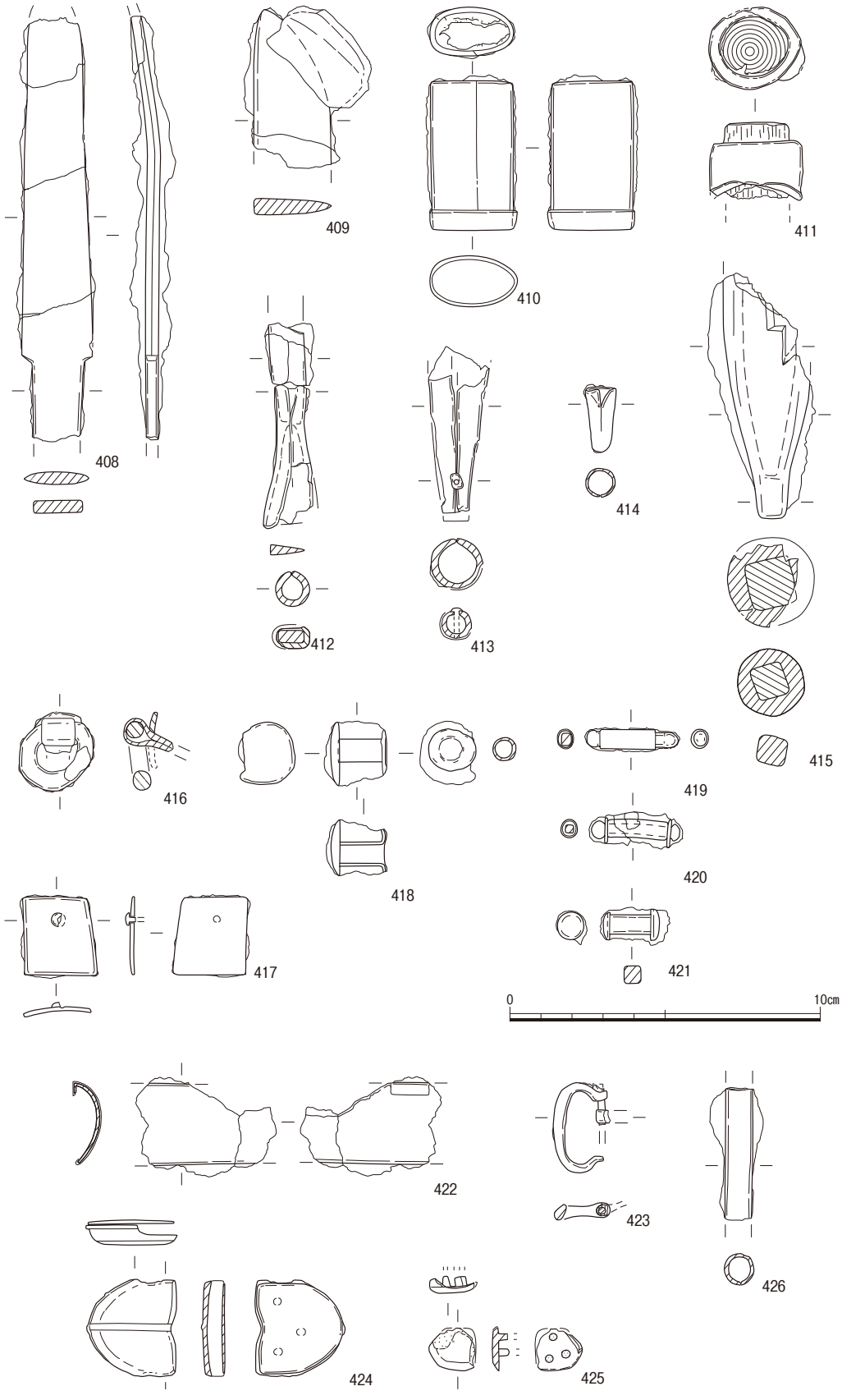


Fig. 129　第 1 ～ 4 次調査出土鉄・銅製品　1：2

第５節　冶金関連遺物

A　鞴 羽 口（Fig.130・131，Ph.74）

鞴羽口は第２次調査区東北隅や、第４次調査区北半で出土している。外径がわかるものは24点以上を数えるが、破片が多く、先端部から後端部まで遺存するものはない。このうち、ある程度形態がわかる20点を図示した（Fig.130・131）。

先端部が遺存するものは、炉内被熱による溶解・発泡がみられ、暗灰色や暗青灰色にガラス質化するものが大半である（Fig.130-１～６、９～12、Fig.131-13～20）。形状は、平面円筒形で先端部は面をもってすぼまり、肉厚のもの（Fig.130-１～７、９・10）、全長が短く、裾が「ハ」字状に広がるもの（Fig.130-８、Fig.131-17）に大別される。破片資料についても、厚さの点から前者の形態が主体を占めるとみられる。外面は縦方向のヘラナデにより多数の面をもつほか、スマキ痕[1)]とされる、縦方向の線状痕や押圧痕が観察される個体もある（Fig.130-１や５・６など）。１の外面は丁寧にナデで面取りがなされ、内面には成形時の絞り痕が残る。孔は後端部へ向かい広がる。第１次調査区の竪穴建物SI315（UH05区）内の小ピット出土。２は第１次調査区石段下西（UM07区）出土。３は先端部片側のみに粘土を貼り付ける。そのためか、孔は中軸からややずれた位置にあり、全体がゆがむ。第４次調査区排土中出土。４は先端部近くの破片で、後端部へ向かい裾が「ハ」字状に広がる。体部下半はユビオサエが顕著で、内面は削り出しにより段をもち、送風管取り付け部を設ける。第３次調査区石組溝SD332（UI18区）出土。５・７・10は先端部に粘土を二重に貼り付けて成形し、内面には細かな縦線状のくぼみが複数条認められる。５は先端部の溶解がとくに顕著で、光沢質、黒色ガラス質滓化が進み、ガラス質状の付着物もみられる。第２次調査区井戸SE410（US02区）・南北溝SD397（UT02区）出土。６は外面に面取り時の縦ナデによるくぼみが残る。孔は中軸からややずれた位置にある。第１次調査区排土中出土。７・８は第４次調査区褐色砂礫（焼土中、UT16区）出土。８は先端部から後端部へ向けて大きく「ハ」字に広がる。他と比して器壁が分厚く重量感がある。中央に穿たれる孔は後端部へ向かい孔径を広げる。外面はユビナデにより緩やかな多面体となり、先端部に粘土を二重に貼り付けて成形する。第４次調査区褐色砂礫（焼土中、UT16区）。９は先端部に無光沢質の黒ガラス質滓が付着する。第４次調査区黄褐色土（UU28区）出土。10は第３次調査区灰褐色土（UG29区）出土。

縦方向の線状痕

ガラス質滓

11以下は先端部の小片資料。厚さの点から、平面円筒形で先端がすぼまる形状とみられる。11・12は第１次調査区東西溝SD351（UL07区）出土。13は先端部に粘土を二重に貼り付け成形した痕跡が残る。第４次調査区南北大溝SD640灰褐色砂礫（UO23区）出土。14は第１次調査区南北溝SD365（UL12区）出土。15は外面に籾殻痕が残る。これのみであるため、意図的に練り込んだかは不明。第２次調査区井戸SE410（US01区）出土。16は第４次調査区褐色砂礫（UT19区）出土。17は後端部片で、端部へ向かい緩やかに広がる。外面はナデによる面取りがなされ、多面体を呈する。内面には成形時の絞り痕が残る。他に比して器壁が薄く均一である。古墳時代中期に盛行する、小型で全長が短いソケット状の羽口と形態が共通する[2)]。第３次調査区土坑

ソケット状羽口

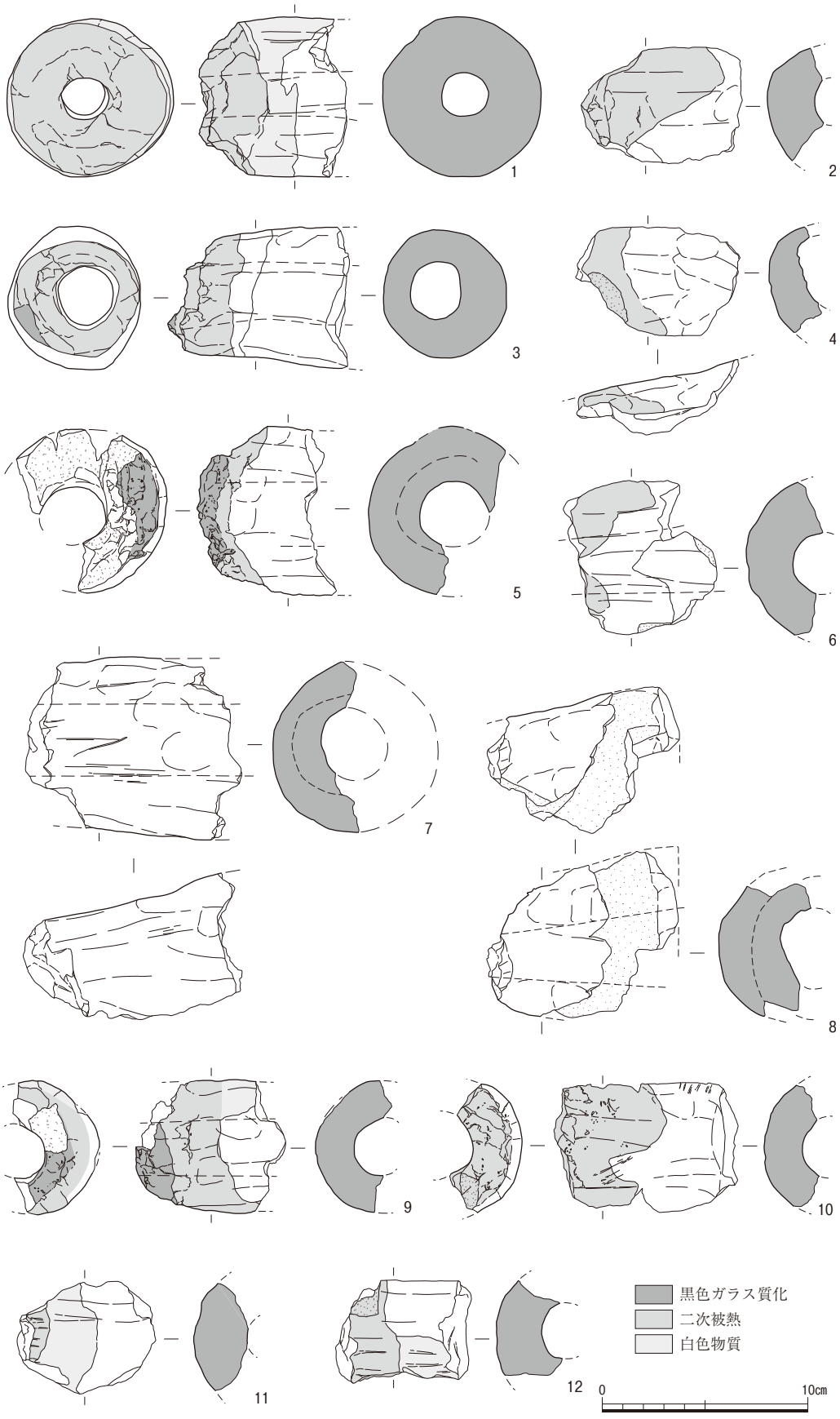


Fig. 130　石神遺跡第１～４次調査出土鞴羽口（１）　１：３

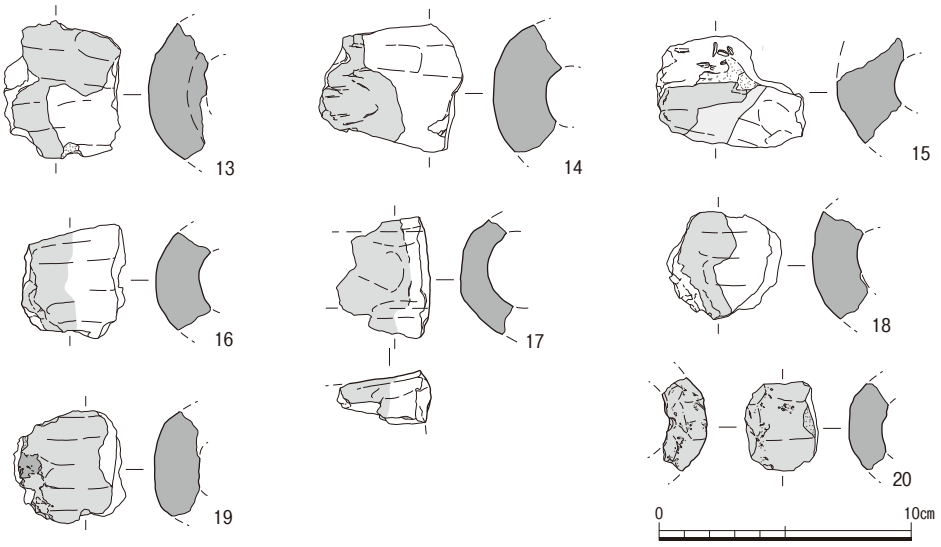


Fig. 131　石神遺跡第１～４次調査出土鞴羽口（２）　1：3

SK518（UB24区）出土。19は第１次調査区東西溝SD351（UL07区）出土。20は第３次調査区流路NR310灰色粗砂（UD20区）出土。

B　鋳型・坩堝（Fig.132・133，Ph.75）

鋳　型（Fig.132-１～６）　　６点が出土した。１は深鉢形の鋳型外型で、胴部は丸みを帯びながら立ち上がり、口縁端部は内側へ向けて面をもち、内外面に肥厚する。胴部下位から口縁部にかけての小片であり、湯口部分は遺存していない。口縁部内面には粘土貼り付けの痕跡が残る。内面の器壁は荒れるが、外面は0.4㎝前後の厚さできめ細かな橙色砂質土を貼り付けて滑らかに整えている。内面に付着物はみられない。ここでは鋳型として報告するが、坩堝の可能性もある。口径は25.4㎝に復元され、遺存する深さは6.3㎝、器壁の厚さは1.7㎝前後。第２次調査区土坑炭混暗褐色土（UP08区）出土。２は浅皿形を呈し、口縁端部は直角に屈曲して水平な面をもつ。内面の鋳肌面は厚さ0.3㎝前後に橙色砂質土を貼り付けて滑らかに整える。器壁の厚さ0.9㎝前後。第２次調査区の「くぼみ黒褐色土」（UP10区）出土。３は浅い椀状を呈し、口縁端部は外方に斜めに面をもつ。内面の鋳肌面は、赤灰色砂質土を0.2㎝前後の厚さで貼り付けて滑らかに整える。外面はナデ調整。また口縁端部はナデや一部ケズリによって整形する。鋳肌面には貼り付けた赤灰色砂質土表面に横位の亀裂が数条走る。器壁の厚さ1.3～2.0㎝。第１次調査区の「バラス土坑」（UL13区）出土。４は鋳肌面とみられる平坦な片側に、一段高く肥厚する縁がめぐる。平坦面は堅く締まり、表面は滑らか。胎土はきめ細かい。第３次調査区排土出土。５は羽釜の鍔部分とみられる破片。端部は先細りし、平坦面表面に凹線状のくぼみがある。胎土はきめ細かく、平坦面は0.4～0.7㎝の幅で帯状に黒褐色に変色する。形態や器面の様子、胎土から、川原寺鉄釜鋳造遺構SX599出土の羽釜鋳型や、山田寺跡鋳造土坑SX440（第３次調査）出土の梵鐘鋳型と形態が類似する[3)]。器壁の厚さ1.1～1.6㎝。第４次調査区の「土坑３」（UL31区）出土。６は胴部片で、鋳肌面とみられる内面は0.7㎝前後の厚さでにぶい黄橙色砂質土を貼り付け、ナデにより滑らかに整える。外面には0.3～0.7㎝大の不整円形状の押圧

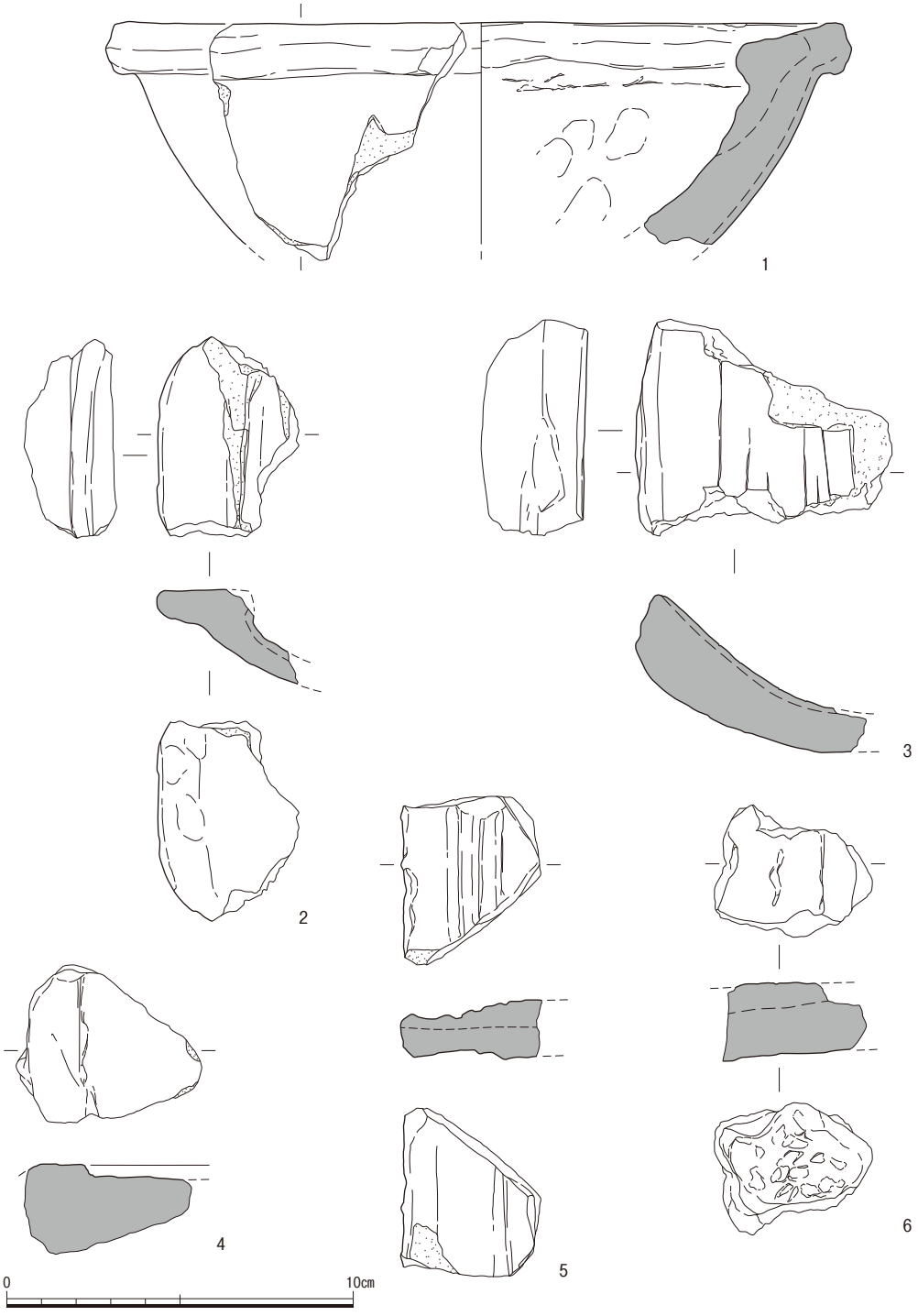


Fig. 132　石神遺跡第１～４次調査出土鋳型　１：２

痕がみられる。籾殻痕か。部位不明の小片であるが、調整や胎土の様子から鋳型とみられる。第１次調査区SI315（UH05区）内の小ピット出土。

坩　堝（Fig.133-１）　　坩堝口縁部片。平坦な底部から緩やかに屈曲して口縁部へといたる。注口部分は先細りし、注口基部の外面には粘土貼り付けの痕跡がかすかに残る。内外面はユビナデ成形、注口外面に一部ハケ目調整がみられる。小片のため、被熱痕や溶融した付着物等は観察できなかった。第２次調査区の「土坑炭混暗褐色土」（UP08区）出土。

C　銅素材・銅滴・銅滓・鉄素材（Fig.133，Ph.75・76）

銅素材（Fig.133-２～８）　２～６・８は銅板片。２は台形状を呈する銅板片。両端は鋭利な工具で切断されたか。最大厚は0.1cm。第２次調査区の褐色砂質土（UO10区）出土。３～６は厚さ0.1cm以下の薄い銅板片。いずれも端面は鋭利で、一辺が内側に折れるもの（４～６）もあり、銅板を鏨で切断した際の削り屑とみられる。３・４はSE800井戸枠内の粘質砂土混バラス（UT26区）出土。５・６は第４次調査区の東西畦褐色土上面（UQ17区）出土。８は方形を呈する銅板。厚さ0.9cmで重量感がある。鋳造とみられ鋳肌は荒れる。第４次調査区の土坑（UU23区）出土。７（Fig.133-７）は先端へ向けて先細る両刃の鏨状を呈する。上端は欠損する。上半の幅0.4cm、厚さ0.5cm。第３次調査区の石組溝SD331南側石抜取（UD16区）出土。

銅　滴（Fig.133-９～11）　３点が出土した。平面形は長方形や楕円形、三角形と不整形で、表面にすが入ったような空隙がみられる。９は0.7×1.0cm、厚さ0.5cm。第２次調査区石組埋土（UP12区）、10は0.9×1.2cm、厚さ最大0.3cm。第４次調査区の南北大溝SD640バラス層（UT23区）出土。11は1.5×1.6cm、厚さ0.2～0.6cm。下面は平坦だが表面は荒れる。第４次調査区の「礫群」（UR31区）出土。

銅　滓（Fig.133-12～15）　４点出土した。12は片端が突出し、下方へ向けて滓が流れた痕跡がある流動滓。最大厚は1.7cm。第３次調査区の「灰色粗砂」（UC18区）出土。13～15は不整形で、表面は荒れ、ガラス質滓化するもの（13・15）がある。13は第１次調査区床土出土。14は第４次調査区の南北塀SA732柱穴（UQ16区）出土。15は断面に凹凸が目立ち、下端隅が緑青化する。第４次調査区の「土坑①暗褐粘質土」（UP22区）出土。

鉄素材（Fig.133-16～25）　鉄素材とみられる鋳造製品（16・20）、棒状・板状鉄製品（17～23）、鉄塊（24・25）が出土している。16は内外面に断面方形の突帯がめぐる鋳造製品。上端は面をもち、下端が逆「U」字状に浅く抉れる。厚さは1.0～0.9cmと均一で上端は面をもつ形状から、口縁部直下に突帯をめぐらせる容器のような鋳造製品を素材として転用・加工したものか。第３次調査区の「流路底バラス」（UD25区）出土。20は厚さ0.8cmの長方形で、片面に有機物が付着する。第３次調査区の灰褐色土（UK29区）出土。18・19・21は棒状、17・22・23は板状を呈する。18・19は片端を欠失するが、短軸2.3～2.7cmの鉄棒状を呈する。第３次調査区の流路NR310褐色土（UD24区）出土。21は両端に丸みがある鉄棒状で、2.1cmと厚い。片側面には縦位に亀裂が走る。第４次調査区の「大土坑」（UT27区）出土。17は厚さ0.6～0.7cmと一定の厚さで、長方形を呈する。第３次調査区の排土中出土。22・23は厚さ0.2～0.6cmで、不定形な板状を呈する。22は表面に敲打痕とみられるくぼみがあり、横断面が弯曲する。第３次調査区の床土（UI22区）出土。これ以外にも、厚さ0.3cmと薄い板状鉄製品が出土している。24・25は鉄塊状を呈するもの。24は断面不定形で、片面は砂がわずかに付着し表面に凹凸がみられる。第３次調査区の暗灰色粘質土（UK19区）出土。25は平面三角形状を呈する。表面にはクラックが無数に入る。厚さは最大で2.4cm。第４次調査区の南北溝（UM29区）出土。

鋳造製品

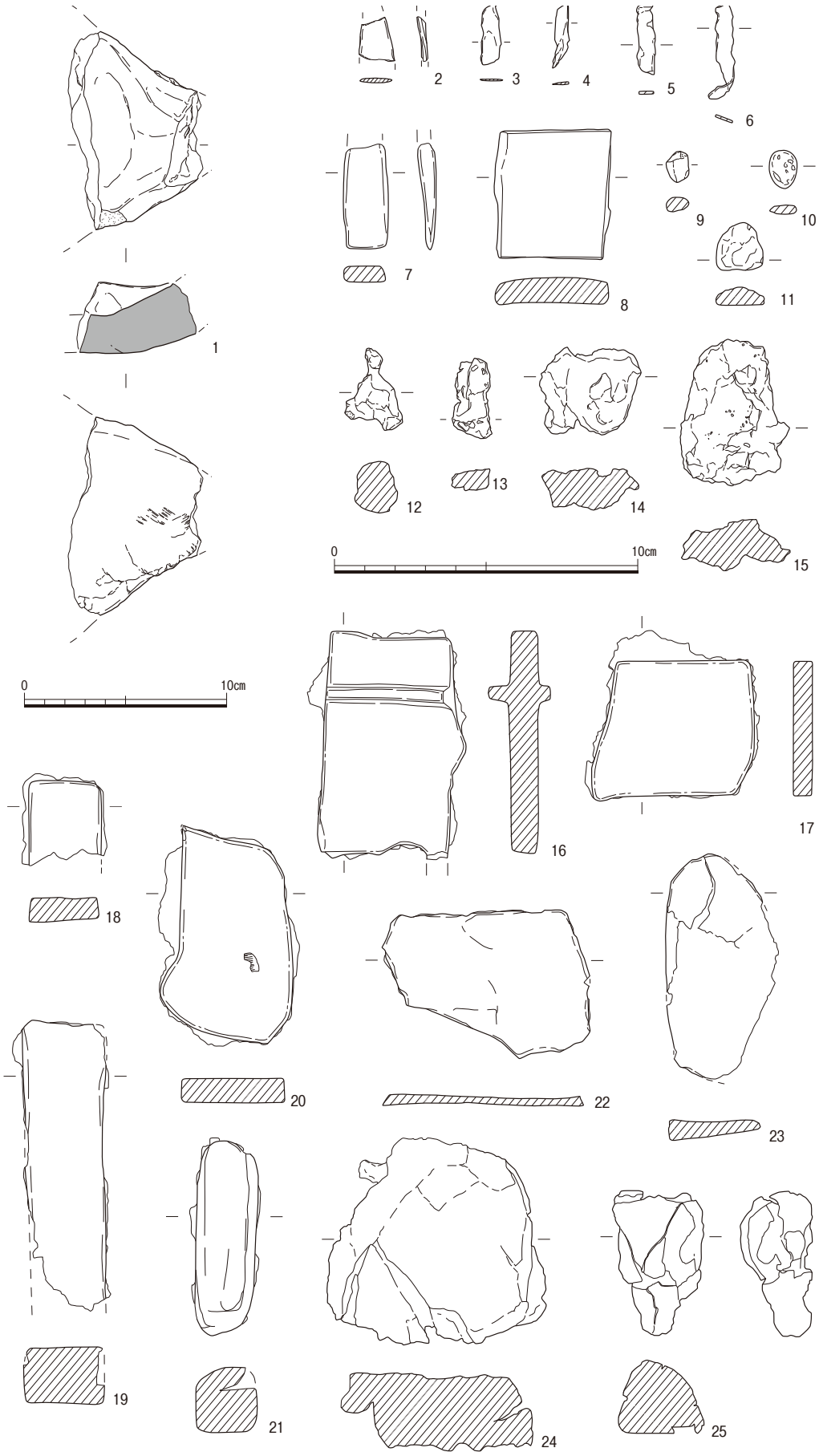


Fig. 133　石神遺跡第１～４次調査出土坩堝　１：3、銅素材・銅滴・銅滓・鉄素材　１：２

D　鉄　　滓
（Fig.134，Ph.76）

第１次調査区から2883.65ｇ、第２次調査区から3618.41ｇ、第３次調査区から1927．87ｇ、第４次調査区から7278.67ｇ、総重量15.7kgの鉄滓が出土した。その詳細は第Ⅶ章第３節に譲るが、第１次調査区の南北溝SD365、第４次調査区西半の整地土（褐色土・暗黄褐粘質土）、南北大溝SD640、調査区東端の南北塀SA732柱穴、南北溝SD630などに出土が集中する傾向がある。

鉄滓は炉底滓、椀形滓、鉄塊系遺物、流動滓に大別され、このうち２点を図示する（Fig.134-１・２）。１は断面形が椀状を呈し、上面は一部ガラス質滓化する。また、燃料とみられる炭がわずかに付着する。重量376.57ｇ、厚さ最大2.0㎝。第３次調査区土坑SK518（UB24区）出土。２は上面に凹凸が目立ち、椀状を呈する下面に炉床粘土が付着する。上面は一部がガラス質滓化する。下面の炉床粘土は、スサなどの草本類の混入はみられず、白色砂礫に金雲母を多く含んだ目の細かな黄褐色を呈する。重量263.28ｇ、厚さ最大4.0㎝。第３次調査区含炭褐色土（UB26区）出土。

椀形滓

炉底滓

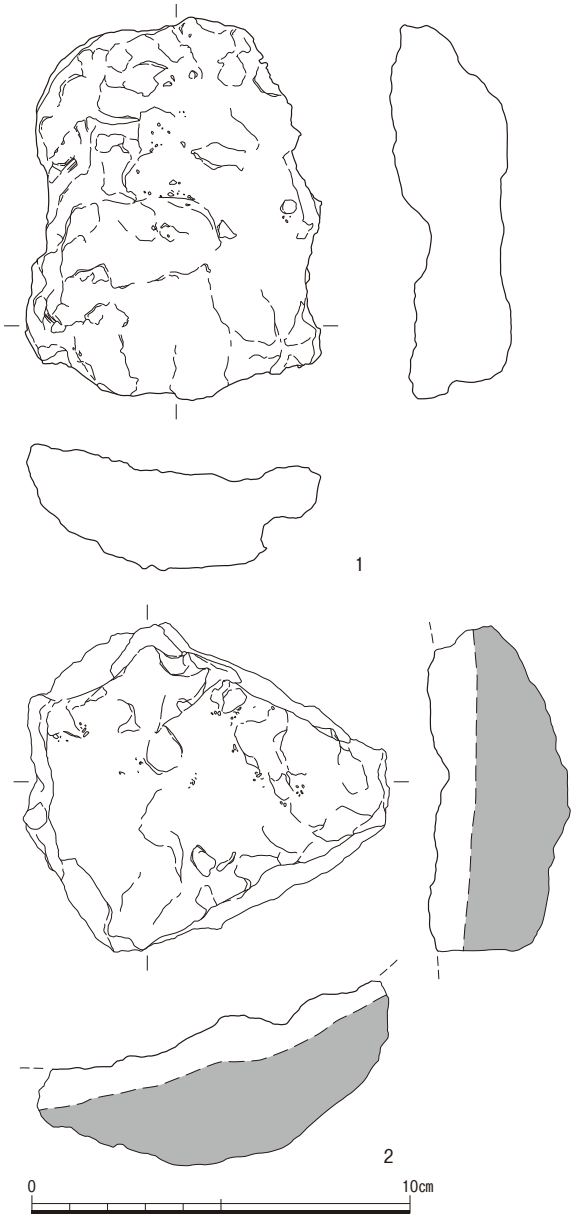


Fig. 134　石神遺跡第１～４次調査出土鉄滓　１：２

1）真鍋成史「鍛冶関連遺物」『考古資料大観』第７巻、小学館、2003年。
2）前掲註１）文献。
3）奈文研『川原寺寺域北限の調査　飛鳥藤原第119-５次発掘調査報告』飛鳥資料館、2004年。
『東アジア金属工芸史の研究13　飛鳥の冶金関連遺跡』（飛鳥資料館研究図録第13冊）、2011年。

第6節　壁　　土

第３次調査区からは総重量966.7ｇ、第４次調査区からは9,066ｇの壁土片が出土した。整地土Ｂ（灰褐色土・含炭褐色土）が厚く堆積する第３次・第４次調査区西半や西北端、南北大溝SD640に出土の集中がみられるほか、第４次調査区西半の南北塀SA781や調査区西端の南北棟建物SB820柱穴から、大型で重量のある壁土片が出土している。これらは長軸10cm以下の小片から、14cm大と大きさはさまざまである。このうち８点を図示した（Fig.135，Ph.77）。いずれも堅く焼き締まり橙色や灰橙色、赤灰色を呈する。１や６のように、一面ないし二面に平坦面をもち、そこから上方へ垂直に立ち上がる柱状のものもあるが、その大半は不整形である。表面や端面には、溝状の圧痕を有するものが５点確認される（Fig.135-３～５、７・８）。３は片側端部に、径3.0cm程度の横断面が楕円形を呈するくぼみが残る。４は片面に径約1.6cmの棒状のくぼみが斜行するように２条あり、５は両端面に径4.1cm程度の横断面が楕円形を呈するくぼみがある。７・８は片面に径約1.3cmの棒状のくぼみが長軸に対して縦位にのびる。

溝状の圧痕

また、表面や断面にはスサとして混入するワラ痕跡を顕著に観察できるものもある。１は第４次調査区淡褐色土（UQ26区）出土。２は第４次調査区排水溝石敷上（UL29区）出土。３は第４次調査区柱穴２柱痕跡（UT23区）出土。４は第３次調査区土坑SK518暗褐砂粘土（UB24区）出土。５は第４次調査区南北大溝SD640炭混り暗褐色粘質土（UU23区）出土。６は第３次調査区東西溝（UJ32区）出土。７は第３次調査区褐色土（UK24区）出土。８は第３次調査区灰褐色土（UH25区）出土。

ワラ痕跡

一定の厚みを有して平坦面をもつ点、そして表面に溝状の圧痕がのびる点から、これらは建物の壁土であり、溝状の圧痕は天井や壁を構築する際に用いた骨材（小舞）の痕跡であると考えられる。木材を用いて梁や桁とし、それを骨組みとして粘土を塗り込み、壁を構築したものである。建物・塀の柱穴やその近隣で出土が集中する点もこれを傍証する。

第7節　石 製 品

A　砥　　石（Fig.136～141，Ph.78・79）

砥石は総数42点が出土した（Fig.136～141）。個々の計測値、出土地点と層位はTab.11に示す。全体の半数ほどが第４次調査区からの出土である。第３次調査区も含めて南北大溝SD640以西からの出土が多い傾向にあり、整地土Ｂの分布と共通する。層位的にも、整地土Ｂ相当の土層からの出土が砥石全体のなかで２割程度を占めている。このほか、南北大溝SD640、SE800井戸枠内、東西溝SD351、土坑などからの出土がみられる。

幅５cm未満の小型品が全体の約７割を占める。長さは、一方の小口が破面となっているものが多く、くわえて後世の欠損と成形時の打ち割りの区別が難しいため正確な値を割り出すことが困難であるが、残存状況からみて全長５～10cm程度のものが多いと推定できる。これら小型

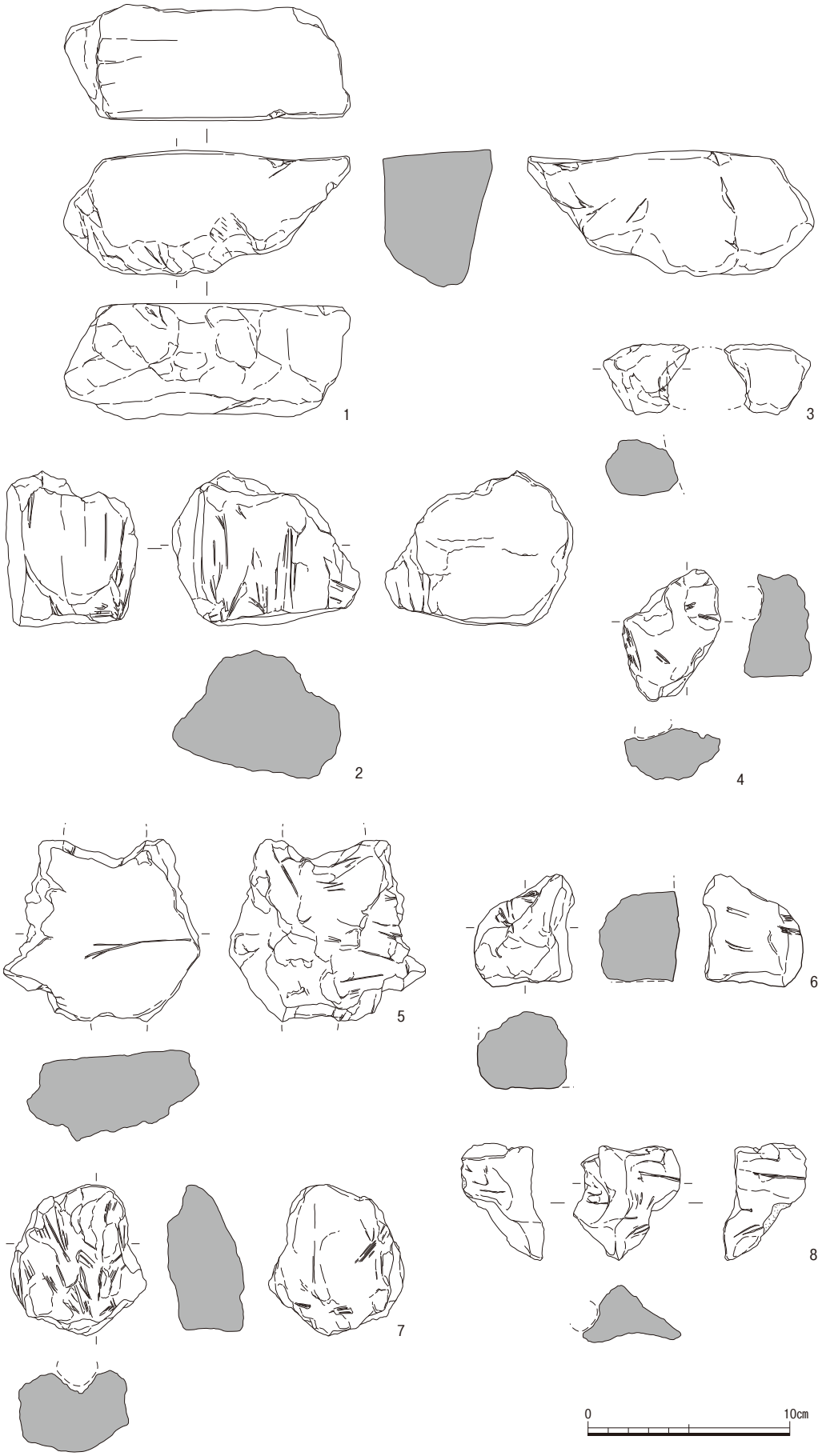


Fig. 135　石神遺跡第１～４次調査出土壁土　１：３



Fig. 136　砥石（1）　1：2



Fig. 137　砥石（2）　1：2



Fig. 138　砥石（3）　1：2

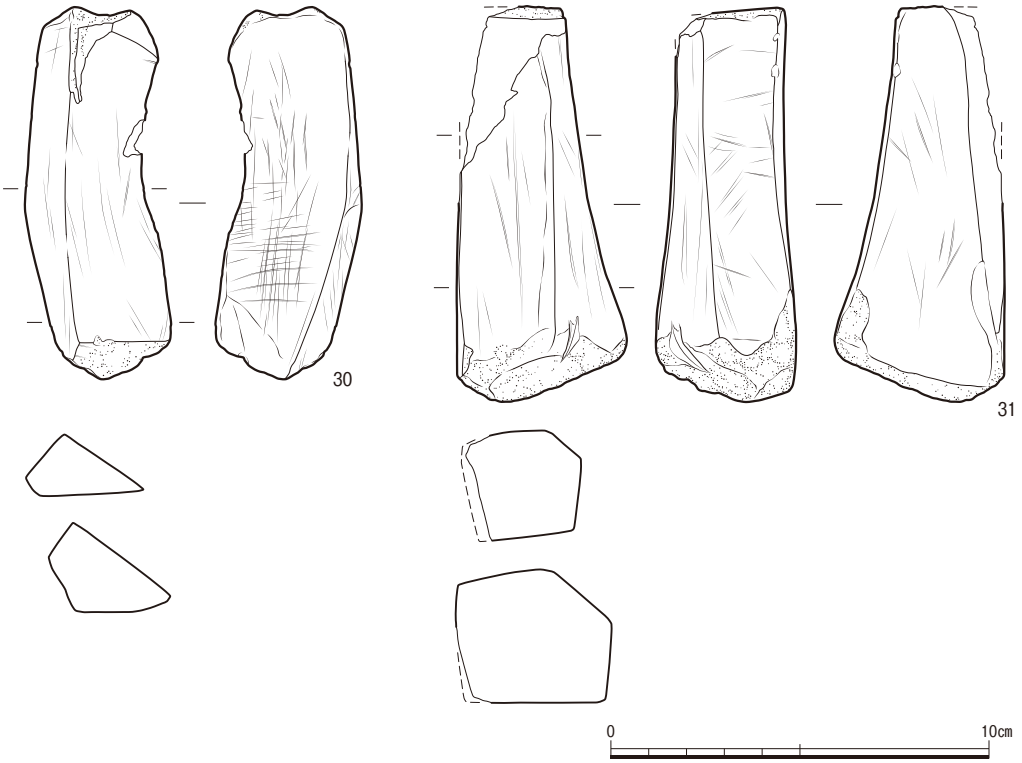


Fig. 139　砥石（4）　1：2

品のほとんどは流紋岩ないし泥岩製であることから中砥～仕上げ砥と理解できる。なかには端部に小孔を穿ったいわゆる有孔砥石が存在しており、欠損資料のなかにもさらに有孔砥石が含まれる可能性がある。小型品は手持ちで使用する提砥とみられ、有孔砥石の存在は、それらの多くが佩用目的で製作されたものであることを示唆する。これに対し、幅5㎝を超える大型品は置砥とみてよく、砂岩、緑泥片岩、流紋岩質凝灰岩など荒砥と評価できる石材も使用されている。

1・2は泥岩製[1)]の有孔砥石。1は平面長方形で上部中央に直径5㎜の孔がある。両面穿孔。全面を使用し、特に長軸方向の4面の使用が顕著。2は1よりもやや粗粒の石材で、不定形な板状を呈する。上部に直径5㎜の孔がある。両面穿孔。上端面と一方の側面は研磨による平坦面をなすが、残りの面は破面が摩滅した状態である。

3は泥岩で不定形な板状を呈し、上端部に直径17㎜ほどの円孔がかかる。円孔部以外は顕著な使用痕がみられず、砥石ではない可能性もある。全体が被熱により赤味を帯びる。

4～9・12は平面長方形の小型品。4は流紋岩製。長軸方向の4面を使用。一方の小口に直径2㎜ほどのわずかなくぼみがかかり、穿孔痕の可能性もある。5は流紋岩製。両小口欠損。長軸方向の4面を使用するが、うち2面の使用が顕著。6は泥岩製。一方の小口は研磨により平坦で光沢を帯びるが、その他の面は破面をわずかに使用した状態で、二次的に分割されたものとみられる。7は流紋岩製。長軸方向の4面と一方の小口を使用し、もう一方の小口は欠損する。側面が長軸に斜行し断面台形を呈する。8は流紋岩製。一方の小口を欠損する。残りの面はいずれも使用されるが、特に長軸方向の面の使用が顕著。9は砂岩製か。一方の側面は研磨により平滑だが、もう一方は成形時の切断面を残し、二次的に分割されたものとみられる。表裏両面と一方の小口も使用しており、もう一方の小口は欠損する。分割前の側面と小口にあ

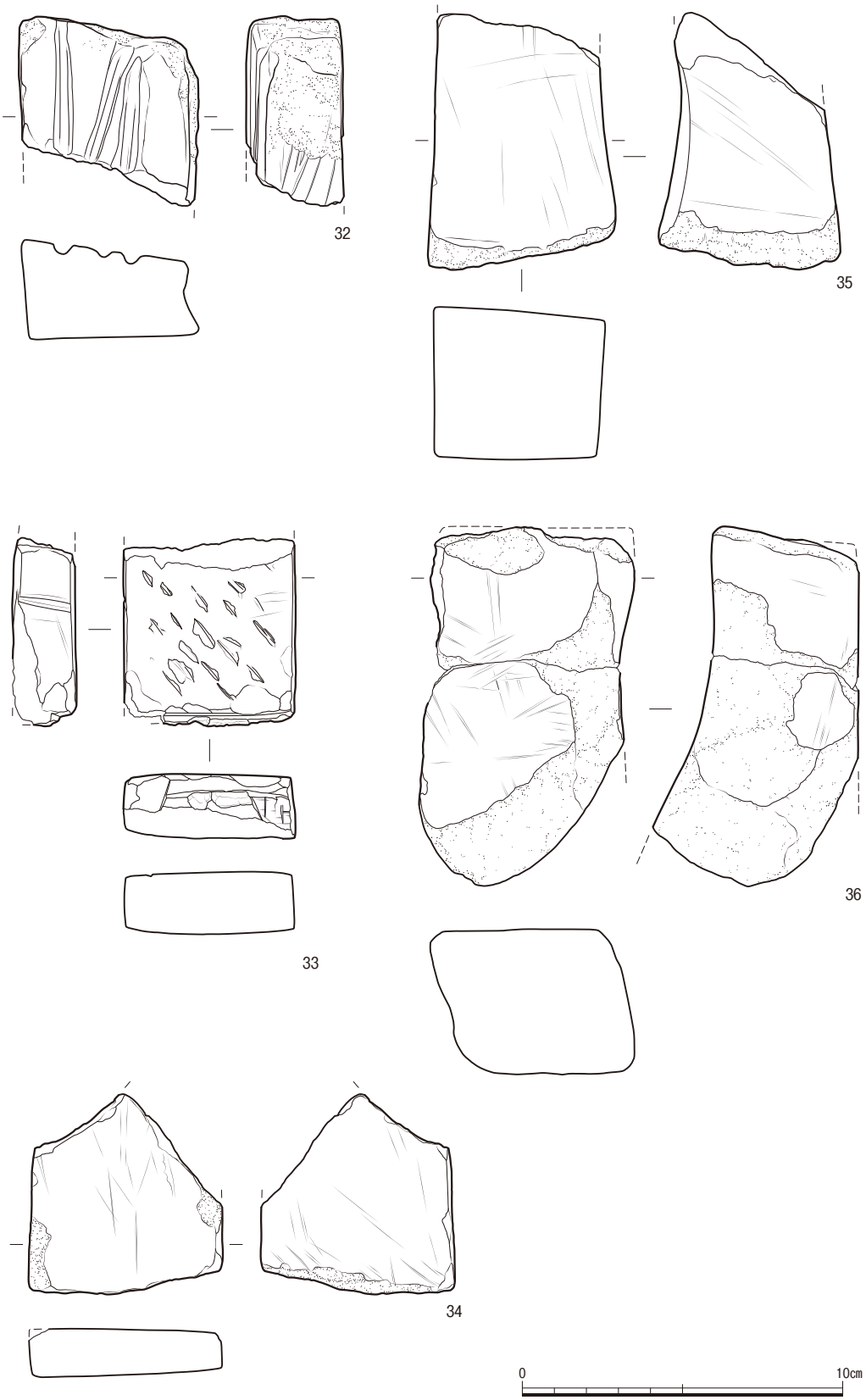


Fig. 140　砥石（5）　1：2



Fig. 141　砥石（6）　1：3

Tab. 11　砥石計測表

No.	幅 (cm)	長 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	出土地点・層位
1	3.6	5.0	1.8	67.0	UH27　灰褐土
2	(3.9)	(5.0)	1.7	35.8	UO26　暗黄褐土
3	3.6	(4.6)	1.5	19.0	UP31　土坑SK776
4	3.3	(3.7)	1.7	23.1	UL05　南北溝SD351
5	2.1	(3.3)	1.7	15.1	UO30　礫溝
6	(3.1)	(4.1)	2.3	38.4	UT28　淡褐土
7	2.6	3.8	2.4	26.3	UT33　拡張区焼土混褐色土
8	3.6	(4.0)	3.1	71.1	UJ31　東西溝暗灰褐土
9	3.5	(4.2)	2.6	49.2	UQ04　土坑SK404
10	1.5	7.7	0.8	15.7	UT26　井戸SE800 礫混砂
11	2.9	(6.7)	1.3	30.4	UW06　床土バラス
12	2.6	3.9	0.9	13.1	UU27　大土坑
13	(2.0)	(3.3)	1.0	4.7	UP18　褐色土
14	2.4	(3.6)	1.4	15.4	UT26　井戸SE800 砂混灰褐粘質土
15	2.0	(3.4)	1.4	11.9	UN23　南北大溝SD640 バラス
16	3.0	(4.1)	2.0	24.5	UN30　南北礫溝
17	3.5	(4.6)	1.8	26.3	UO22　土坑SK748
18	2.3	(6.7)	1.8	27.0	UU23　南北大溝SD640 灰褐砂土
19	2.9	(4.7)	1.4	21.2	UJ23　灰褐土
20	3.2	(5.7)	2.3	33.7	UJ28　灰褐土
21	2.6	6.2	2.0	34.9	UI19　灰褐土
22	4.2	(5.9)	3.1	78.8	UU23　南北大溝SD640 バラス
23	3.7	(5.4)	2.3	48.4	UO31　土坑
24	4.2	(6.3)	1.3	58.7	UG27　灰褐土
25	(4.2)	(6.5)	1.4	55.5	UQ28　二番床
26	3.5	(6.6)	2.6	64.2	UL07　東西溝SD351
27	5.0	(7.7)	2.4	99.5	UU28　土坑SK774 灰褐砂質土
28	4.1	(6.5)	4.7	150.1	UI29　大土坑SK698
29	3.9	8.7	3.2	129.6	UU07　暗灰土
30	3.3	9.8	2.4	68.7	US32　上層レキ敷下
31	4.5	10.4	3.7	192.4	UG14　石田トレンチ
32	5.6	(5.9)	3.1	112.0	UR33　石組
33	5.4	(5.8)	2.0	88.4	UU23　褐色土
34	5.9	(6.1)	1.5	69.6	UW06　床土バラス
35	5.8	(7.9)	5.7	309.4	UG28　円形土坑灰褐土
36	6.7	(11.2)	6.4	317.4	UQ10　整地土
37	6.5	18.1	1.6	308.4	UU29　南北大溝
38	6.2	18.6	2.4	544.7	UH24　灰褐土
39	(13.8)	(15.7)	2.0	492.6	UP32　大土坑SK797
40	(10.5)	(8.8)	5.7	663.0	UZ　—
41	9.4	11.7	7.9	934.0	UR33　含炭黄褐土
42	8.4	15.4	7.1	679.0	UD18　自然流路褐色砂土

( ) は残存値

たる面には、浅い筋状の使用痕が残る。12は泥岩製。板状で、長軸方向の３面を顕著に使用する。両小口欠損。裏面は破面を残すがわずかに使用がみられる。

10は扁平な棒状で一方の端部を細長く切り欠く。全面が平滑に研磨されており、砥石ではない可能性もある。粘板岩～泥岩製。11は流紋岩製。一方の小口を欠損し、平面は細長い台形を呈する。長軸方向の４面を使用。13は瓦転用砥石。不定型な小片の表裏両面と側面を使用したもので、裏面には布目が残る。両小口欠損。

14～31は長軸方向の面が砥ぎ減りで弯曲するもの。その多くは断面四角形で、砥ぎ減って薄くなった部分で折損している。14は流紋岩製。長軸方向の４面を使用し、一方の小口を欠損。表面に幅４㎜、深さ２㎜ほどの筋状の使用痕が３条みられるが、これを切って二次的に分割されている。分割面も砥面として使用されている。15は流紋岩製。長軸方向の４面と残存する小口を使用。もう一方の小口は欠損するが、直径３㎜ほどのくぼみがわずかにかかり、穿孔痕の可能性がある。全体が被熱により赤みを帯びる。16は流紋岩製で長軸方向の４面を使用し、一方の小口を欠損する。17～24は長軸方向の４面を使用し、残存する小口にも使用がみられる。21のみ完形で、他は一方の小口を欠損する。18・20は泥岩製、17・19・22～24は流紋岩製、21は瓦転用砥石。17は両側面の使用がやや弱い。24は一方の側面に刃物による短い線状痕がみられる。

25は流紋岩製。板状で両側面の研ぎ減りが顕著。両小口を欠損する。26は流紋岩製で研磨面がややふくらむ。裏面は使用がやや弱い。27・28は流紋岩製で、長軸方向の４面が研ぎ減りにより弯曲する。一方の小口を欠損し、残存する小口には鋭利な刃物による線状痕が縦横方向に多数みられる。28は全体が被熱により赤みを帯びる。29は流紋岩製。平面形はやや細長い不整な長方形で、砥ぎ減りにより一方の小口に向かって厚さを減ずる。長軸方向の３面と一方の小口を使用。小口と側面には刃物による短い線状痕がみられる。

30・31はやや細長い多角柱状の砥石。30は泥岩製。細長くいびつな三角柱状を呈し、表面は研ぎ減りによる弯曲が著しい。裏面はややふくらみ、針状の工具によるとみられる線状痕が縦横方向に多数みられる。31は流紋岩製。五角柱状で、研ぎ減りにより一方の小口に向かって細

くなる。一側面に成形時の分割面を残す。

32～42は幅5㎝以上の大型品。32は流紋岩製。長軸方向の4面を使用するほか、表面に幅6㎜、深さ2.5㎜の筋状の使用痕がみられ、玉砥石の可能性がある。一方の小口を欠損。33・34は流紋岩製で板状を呈し、表裏両面と両側面を使用する。33は平面長方形で一方の小口を欠損する。もう一方の小口から裏面にかけても欠損がみられるが、小口の残存部には成形時のものとみられる段状の痕跡が残る。表面には長さ5～7㎜の斜め方向の使用痕が無数に残る。34は一方の小口を欠損し平面五角形を呈するが、破面にも二次的な使用がみられる。

35・36は厚みのある砥石。35は流紋岩製。長軸方向の4面が砥ぎ減りにより弯曲し、一方の小口を欠損する。36は流紋岩もしくは流紋岩質凝灰岩製か。側面と端面の一部を欠損する。表面と一方の側面が研ぎ減りにより弯曲し、不定方向の使用痕が残る。二次的な分割を受けているとみられる。

37・38は緑泥片岩製で細長い板状を呈する。37は表面が研磨により平滑となるが、裏面は未使用で片理面を残す。38は一方の小口を除くすべての面が使用されており、一方の側面が砥ぎ減りにより顕著に弯曲する。39は室生火山岩（榛原石）の転用品か。やや幅広の板状を呈するが、欠損により本来の平面形は不明。裏面も欠損する。表面は研ぎ減りによりわずかに凹面となり、不定方向の擦痕が残る。側面の残存部にも使用がみられる。

40は砂岩製で扁平な五角柱状を呈する。長軸方向の面を使用し、研磨面は砥ぎ減りにより弯曲する。一方の小口を欠損。41・42は流紋岩か。表面が風化する。41はやや不整な隅丸の直方体を呈する。側面・小口のそれぞれ一方と表裏両面が研ぎ減りにより弯曲する。裏面には回転運動で生じたとみられる扇形の線状痕がみられる。42は下端がやや不整形で裏面に割れ肌を残すが、上半は研磨が進行し方柱状を呈する。表面と一方の側面は研ぎ減りにより弯曲する。

B　小円礫（Fig.142，Ph.79）

丸みを帯びた天然の小石（Fig.142）。形態や法量が藤原宮・京内や平城宮などから出土する碁石と共通するが、ここでは小円礫として報告する[2)]。計29点のうち、22点がSE800井戸枠内から出土した。12～15の4点は礫混砂から出土した須恵器壺（PL.9-110）内から取り出したもの。楕円形ないし不整円形を呈し、断面形は扁平なものと、やや厚いものがある。角はなく、表面を滑らかに整えている。色調は白色・黒色に分かれるが、灰色も混じる。直径0.9～2.0㎝、厚さ0.2～0.8㎝。なかには断面形が球形に近く、表面に凹凸があるものや、石質がチャートとみられるもの（28・29）もある。大きさや重量等はTab.12に示す。

Tab.12　小円礫計測表

No.	長径 (cm)	短径 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	色調		出土地点・層位
1	1.4	1.1	0.3	0.65	黒	UT26	SE800礫混砂
2	1.3	1.1	0.3	0.64	黒	UT26	SE800礫混砂
3	1.2	1.1	0.4	0.74	黒灰	UT26	SE800礫混砂
4	1.1	1.0	0.4	0.68	白	UT26	SE800礫混砂
5	1.3	1.1	0.5	0.98	黒	UT26	SE800礫混砂
6	1.3	1.1	0.4	0.86	黒	UT26	SE800礫混砂
7	1.3	1.1	0.4	0.72	黒	UT26	SE800礫混砂
8	1.0	0.9	0.5	0.54	白	UT26	SE800礫混砂
9	1.4	1.2	0.4	0.99	黒	UT26	SE800礫混砂
10	1.4	1.0	0.4	0.68	黒	UT26	SE800礫混砂
11	1.1	1.0	0.5	0.61	黒	UT26	SE800礫混砂
12	1.3	1.2	0.6	1.35	黒	UT26	SE800礫混砂
13	1.2	1.1	0.5	0.79	黒	UT26	SE800礫混砂
14	1.3	1.2	0.4	0.83	黒	UT26	SE800礫混砂
15	1.2	0.9	0.5	0.70	黒	UT26	SE800礫混砂
16	1.9	1.3	0.4	1.10	白灰	UT26	SE800砂礫茶褐有機土
17	1.9	1.8	0.3	1.68	灰	UT26	SE800砂礫茶褐有機土
18	1.3	1.1	0.6	1.15	黒	UT26	SE800砂礫茶褐有機土
19	1.2	0.7	0.4	0.40	白	UT26	SE800砂礫茶褐有機土
20	1.7	1.6	0.4	1.77	灰	UT26	SE800砂混灰褐粘質土
21	1.6	1.6	0.6	2.41	黒	UT26	SE800砂混灰褐粘質土
22	1.7	1.5	0.7	1.91	白	UT26	SE800砂混灰褐粘質土
23	1.1	1.1	0.8	1.44	白	UW12	中央ピット
24	1.2	1.2	0.4	0.71	灰	UI24	灰褐土
25	1.4	1.2	0.2	0.56	黒	UI24	灰褐土
26	1.8	1.5	0.8	3.04	黒	UQ29	黄褐色土
27	2.0	1.4	0.7	2.80	白	US26	褐色土下半
28	1.6	1.2	0.5	1.54	赤褐	US29	南北大溝
29	1.4	1.2	0.6	1.33	赤褐	UU28	SK774

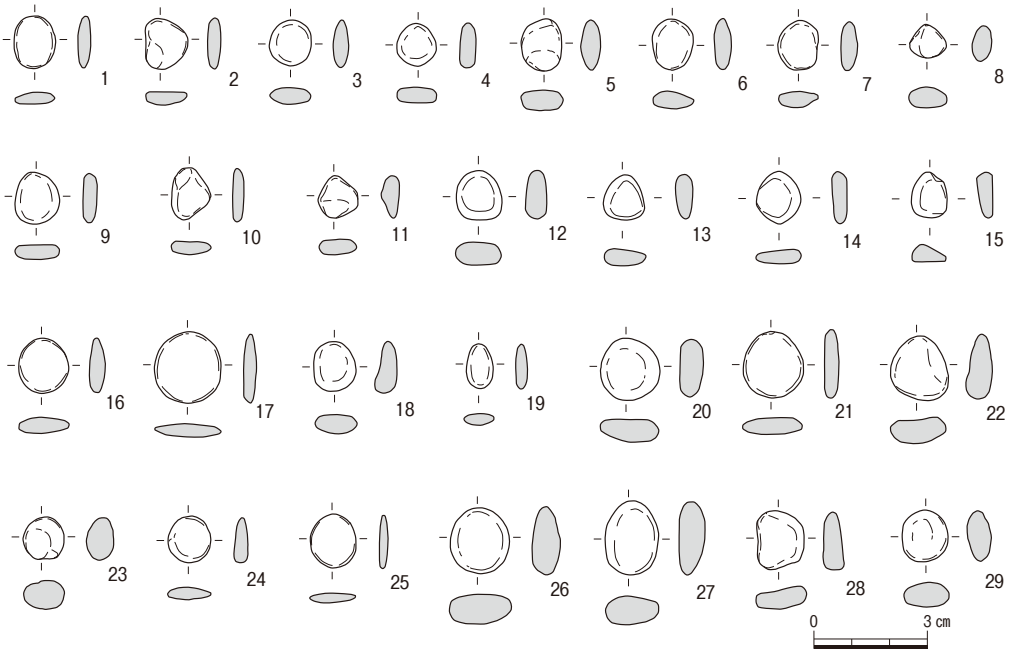


Fig. 142　小円礫　1：2

C　その他の石製品・玉類（Fig.143，Ph.79）

瑪瑙製垂飾（Fig.143-30）　厚さ0.9cmの板状を呈し、懸垂用の孔をもつ。体部を大きく欠損するため全体形は不明だが、孔部付近は半円形に突出し、その両側が肩状に滑らかにふくらむ平面形を呈する。淡褐色～暗褐色で透明感のある良質な瑪瑙を素材とし、表裏面と側面をきわめて滑らかに研磨する。残存幅4.0cm、残存長3.7cm、孔径0.3cm、重さ17.70g。石組溝SD335埋土（柱穴底）出土。

ガラス小玉（Fig.143-31）　緑色半透明を呈する鉛ガラス製[3)]で、巻き付け技法で製作された扁平な小玉。表面はやや風化し、側面には孔と直交するガラスの流れがみられる。直径0.82cm、厚さ0.39cm、重さ0.43g。第３次調査区灰褐色土（UH25区）出土。

以上の瑪瑙製垂飾、ガラス小玉は古代のものと考えられる。このほかに古代の遺物として第４次調査区西北隅で雲母片が出土した。多くが小片で、最大で一辺2.2cm。明確な加工痕や穿孔などはみられない。「炭化物土坑」（UT32区）、「大土坑」（UU28区）、「炭化物土坑」（US33区）、「上層礫敷下」（US33区）出土。以上のほか、古墳時代以前の遺物として以下がある。

滑石製臼玉（Fig.143-32・33）　２点出土。32は直径0.5cm、厚さ0.3cm、孔径0.2cm、重さ0.07ｇで、SE800井戸枠内の砂混灰褐色粘質土出土。33は一方の面に研磨痕が顕著に残る。直径0.5cm、厚さ0.2cm、孔径0.25cmで、重さ0.05ｇ。第４次調査区「石敷直上」（UR29区）出土。

滑石製管玉未製品（Fig.143-37）　研磨により多角柱状を呈し、両端面も研磨されているが、穿孔には至らない未製品。全面に研磨痕が残る。直径0.7cm、全長1.94mm、重さ1.58g。第４次調査区南北畦炭混暗褐色粘質土（UT25区）出土。

滑石製有孔円盤（Fig.143-38）　ややいびつな円形を呈し、中央に直径1.5～2.0mmの孔を２個穿つ。両面は研磨による擦痕が残り、側縁はとくに細かく研磨する。直径2.7cm、厚さ0.35cm、重さ4.65ｇ。第２次調査区排土中出土。

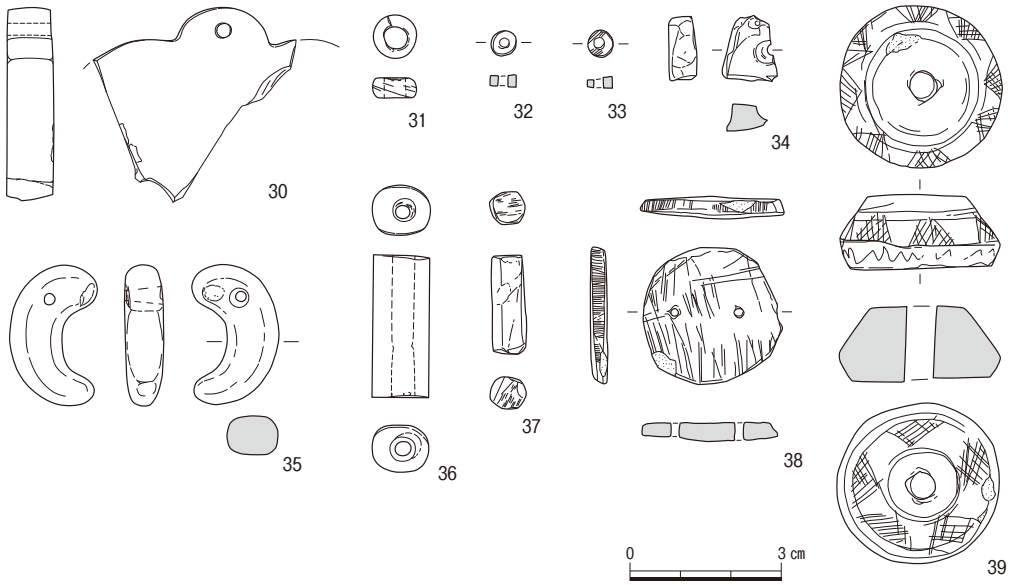


Fig. 143　その他の石製品・玉類　1：2

滑石製紡錘車（Fig.143-39）　側面形は算盤玉状を呈し、側面下端は丁寧なミガキ調整によって面取りする。上面・底面ともに平坦に整える。角は丸みを帯びる。中央には直径0.6cmの孔を穿つ。側面上段と底面には沈線で区画した後に鋸歯文を、側面下段には波状文を線刻により施文する。上面の直径1.9cm、底面直径2.8cm、高さ1.5cm、重さ21.53ｇ。SE800井戸枠内の含砂礫茶褐色有機質土出土。

勾　玉（Fig.143-35）　透明度の低い淡緑色の翡翠製。被熱により褐色味を帯びる。平面形は滑らかなＣ字形を呈し、鉄錐により片面穿孔される。幅1.66cm、全長2.76cm、厚さ0.77cm、重さ5.64g。第４次調査区褐色土上面（UO32区）出土。

管　玉（Fig.143-36）　青灰色味の強い緑色を呈し、光沢に富む。やや楕円柱状で、一方の端面は長軸に斜行する。石針による両面穿孔で、孔内には穿孔時の回転痕が明瞭に残る。直径1.17cm、全長2.80cm、孔径0.50㎜、重さ5.82g。第３次調査区灰褐色土（UJ26区）出土。

玉未製品（Fig.143-34）　石英質で緑色の石材で、全体の形状は不整形だが、研磨により光沢をもつ。側縁に直径４㎜のすり鉢状の孔がかかり、穿孔中に破損したものか。その上方にも未貫通のくぼみが残る。石材や形態からみて、弥生時代前期以前に遡るものか。幅10.8㎜、長さ12.6㎜、厚さ5.8㎜、重さ0.98g。第４次調査区「大土坑」（UQ32区）出土。

D　室生火山岩製板石（Fig.144，Ph.80）

第１～４次調査区から、室生火山岩製の板石が177点（128.03kg）出土した。室生火山岩（火砕流堆積物）は、奈良県東北部から三重県西北部にまたがる山岳地帯（大和高原・宇陀山地）の南半に広く分布する、主として流紋岩質溶結凝灰岩からなる硬質の岩石である。節理に沿って割れる性質から入手が容易であったとみられ、飛鳥・宇陀地域の寺院や古墳を中心に７世紀前・中期にもっとも盛んに利用された。石材としての呼称は、「榛原石」「室生石」「名張石」など産地により異なる。出土した177点の板石は、基本的に黒色・灰色・白色を呈するが、自然作用により節理面が赤褐色や茶褐色に変色したものも含まれる。

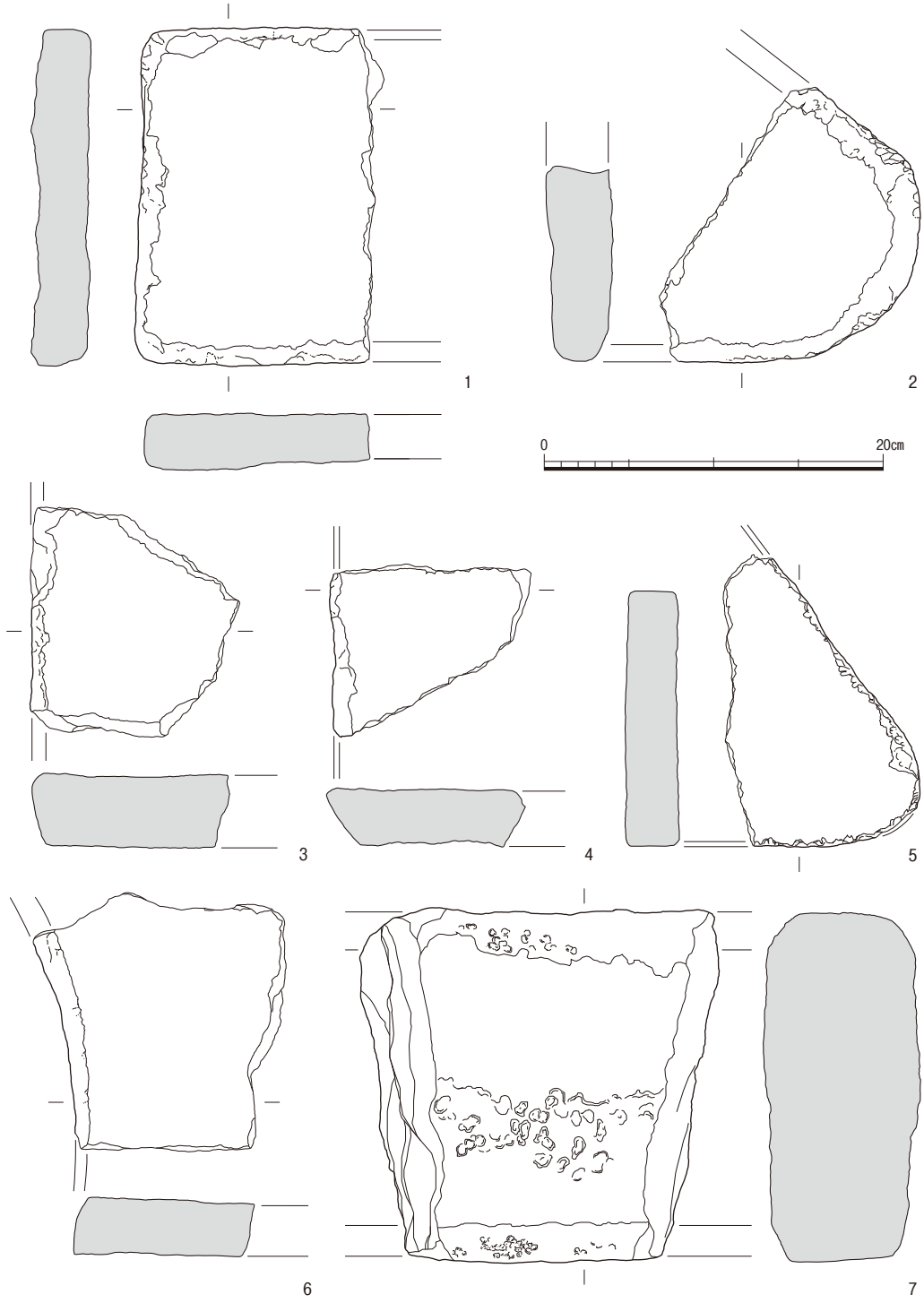


Fig. 144　室生火山岩製板石　1：4

板石の形態　　全点とも破片資料であり、かつ当初面を残す側面（以下、単に「側面」とのみ記す）が最多で３面に限られるため、使用時の全形は不明である。本報告では、隣り合う側面が２面以上残存する12点に限り、上面・下面[4)]の形態（以下、便宜的に両者を「平面」と呼ぶ）に基づき下記の１類・２類に分類した。また、残る資料のうち特筆すべきものを報告する。

板石の分類　　**１類**（Fig.144-１，Ph.80-１）　　平面の角が直角をなすもの。10点出土。３側面が残存する資料が３点に限られることから断定はできないが、基本的には平面を長方形ないし正方形に

復元して問題ないだろう。いずれも側面に明瞭な「逃げ」はとらない。1は3側面が残存する資料のうちで最も状態が良いもの。

2類（Fig.144-2・5，Ph.80-2・5）　平面の角が直角をなさないもの。2点出土。いずれも、平面を構成する隣り合う2辺が延長線上で鋭角をなす。その角度は2が約40°、5が約50°である[5]。2点とも角を丸く整形し、側面に「逃げ」はとらない。

このほか、側面が残存する資料として、向かい合う2側面を残すものが1点（Fig.144-7，Ph.80-7）、側面を1面のみ残すものが42点あるが、これらには側面に「逃げ」をとるものが9点含まれる[6]。Fig.144-3・4・7（Ph.80-3・4・7）がその例。またFig.144-6（Ph.80-6）は平面の輪郭が直線とならない点において特殊である[7]。正確な平面形は不明だが、これを仮に正円の弧の一部とみた場合、推定される円の直径は約60cmとなる。

板石の寸法　平面の長さないし幅を確定できるのは、1類のうち3側面が残存する3点のほか、向かい合う2側面が残存する1点（Fig.144-7）に限られる。1類のうち1点は幅が判明しており、幅16.2cm×長さ28.0cm以上。残る2点は幅・長さのいずれかは不明であるが、それぞれ20.0cm×14.5cm以上（Fig.144-1）、23.3cm×18.5cm以上。Fig.144-7は片方の側面に「逃げ」をとるが、上面で幅21.2cm×長さ22.0cm以上である。　**平面の寸法**

厚さに関しては、177点の板石を①側面が残存し、上下両面の縁に面取りがあるもの（38点）、②側面が残存し、上・下面のいずれか一方の縁に面取りがあるもの（15点）、③側面は残存するが縁に面取りがないもの（3点）、④側面が残存しないもの（121点）に分けて考える。①～④それぞれについて厚さを計測し[8]、その度数分布を示した（Fig.145）。両面の縁に面取りがあ　**板石の厚さ**

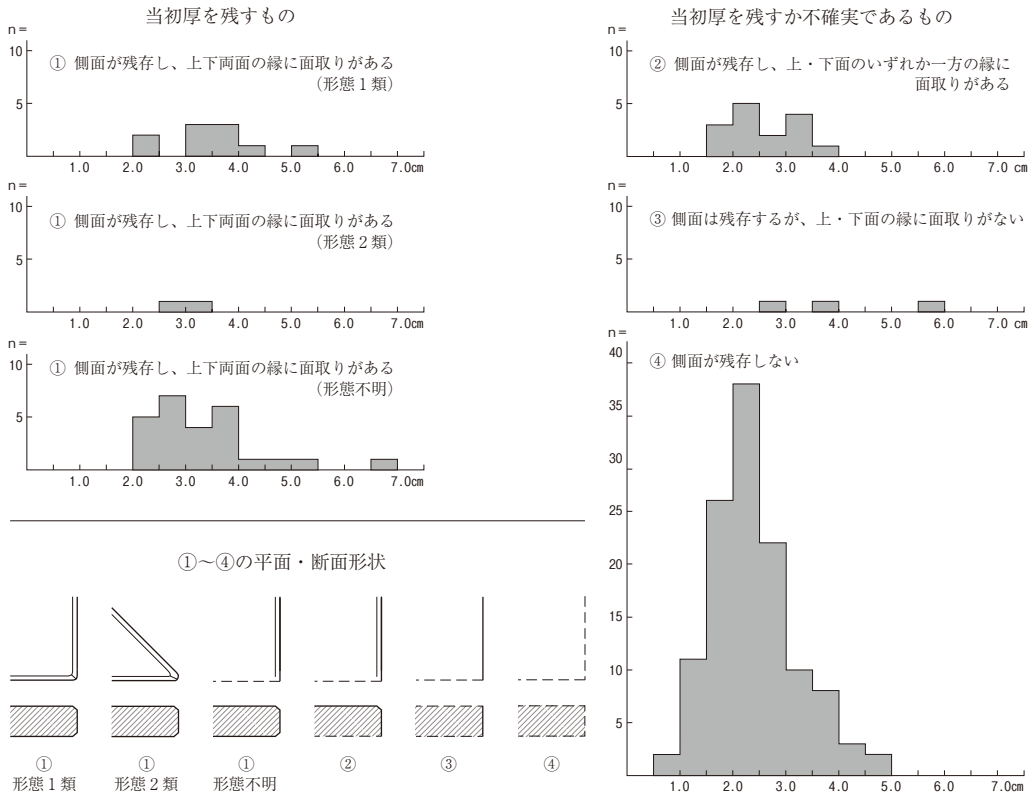


Fig. 145　室生火山岩製板石の厚さと点数

る①は当初厚を残していると判断した資料で、形態１類・２類全点を含む。②～④は当初厚を残しているか否か判断できない資料ではあるが、全体の様相を把握するため計測の対象とした。

まず①に限れば、上述の形態１類では２～４cm台のものが９点（１類の９割）、形態２類は２点とも３cm前後、平面形態が不明であるものは２～４cm台が24点（平面形態不明の個体の９割以上）となっている。以上から、少なくとも当初厚を残すと判断した資料は、平面形態を問わず２～４cm台となる傾向にあるといえる。

次に②～④をみると、残存厚２cm台が計67点（②～④の総数の48％）、２cm以下が計42点（同30％）、３cm台が計24点（同17％）、４cmを超えるものはわずか６点（同４％）であった。実際には厚さ４cmを大きく超える板石が４％より多く含まれていた可能性があるものの、②～④の多くが①と同様の厚さであったと推測できる結果である。出土総数の７割以上が一定の数値に収まることからは、２次的な剝離で厚さを減じた個体はさほど多くないと考えられる。

以上に関して、大半を占める厚さ２～４cm台のものとそうでないものの差が何を示すかは定かでない。ただし、山田寺出土の類例は、使用場所や用途により厚さや平面規模を異にしていることから[9]、同様の要因を考慮する必要はあるだろう。今後の検討を要する。

板石の製作技法　節理に沿って剝離する性質を利用して得た板材から整形する。以下、上面・下面、側面、縁に分けて整形技法を記す。想定される使用工具の名称は和田晴吾[10]に準じる。

上面・下面の整形

まず上面・下面に関して、節理面は平坦に近いものの、緩やかな起伏や部分的に深い凹凸があるため、上下両面または片面（上面）を平滑に加工する場合がほとんどである。突出部のみを落とした可能性があるものも存在するが（Ph.80-11）、多くは面の全体を加工している。Fig.144-７（Ph.80-７）は未製品であることに加え、厚さが7.0cmと分厚いため、他の資料とは製作時期や来歴が異なる可能性もあるが、先の尖ったノミ（タガネ）で敲打し、途中まで粗く面を作り出したことがみてとれる。ノミ先端の径は約４～５㎜。他の資料には敲打痕がみられず、このような粗い整形工程を踏んでいるかは不明であるが、最終的に平滑面の作り出しに適した刃部をもつ工具で削ったか、平滑に剝離した材のみを用いた可能性が高い。Ph.80-１・５・６・９は、チョウナないしノミ（刃付タガネ）で削った痕跡が明瞭に残る例。またPh.80-８の下面はあきらかな節理面で表面に起伏やざらつきがあるのに対し、上面はきわめて平滑であるため、工具の単位は不明瞭であるものの、面的に削ったものと考えられる。

第１～４次調査区から出土した177点のうち、６割強が片面のみ平滑なもの、３割弱が上下両面とも平滑なものであった（Tab.13）。残存面積が小さい場合、偶然残存した部分から後者に分類している可能性があり、本来は前者の割合がより高かったことも考えられる[11]。

Tab. 13　面の加工と側面の残存状況

側面の残存状況と面取りの有無	形態	上下両面が平滑 （ ）内は100㎠に満たない小片	片面のみ平滑	上下両面に凹凸が残る
①側面が残存し、かつ上下両面の縁に面取りがある	１類	３（２）	7	0
	２類	１（０）	1	0
	不明	７（２）	19	0
②側面が残存し、上・下面のいずれか一方の縁に面取りがある	不明	２（１）	12＊	1
③側面は残存するが、上・下面の縁に面取りがない	不明	0	3	0
④側面が残存しない	不明	36（25）	75	10

＊全て面取りのある側の面が平滑

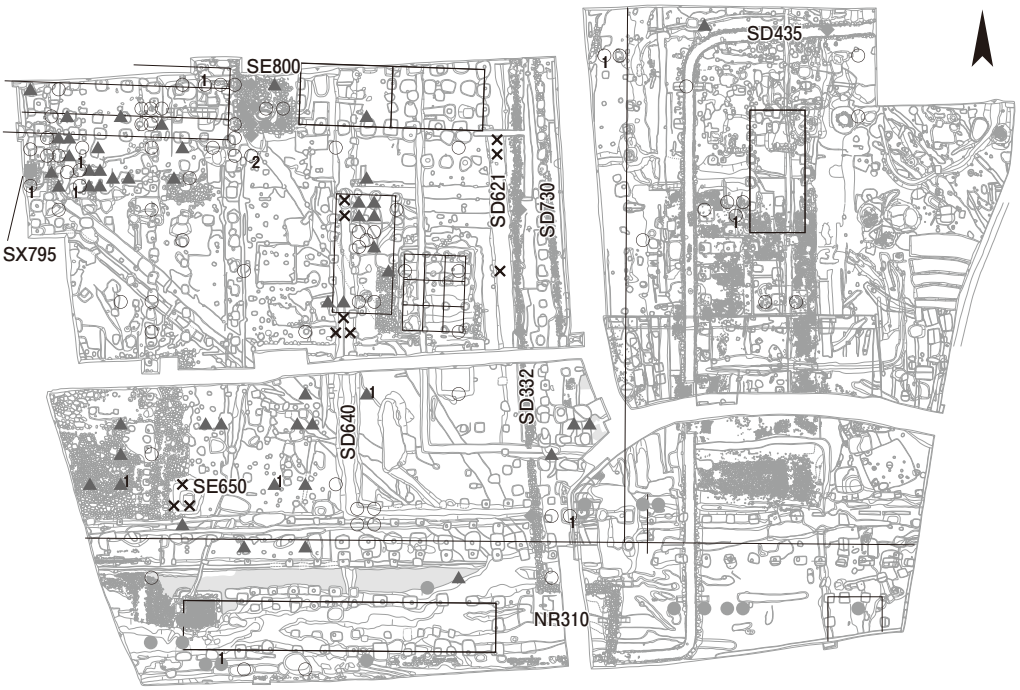


Fig. 146　室生火山岩製板石の分布

側面は、破面の凹凸を落とし平坦に仕上げる。Ph.80-10はチョウナ叩きで破面の凹凸を粗く落とした例。Ph.80-1・3・9は面の平坦化がさらに進んだ資料で、チョウナ叩きと、チョウナないしノミ（刃付タガネ）で削った痕跡が残る。表面が滑らかで明瞭な工具痕が認められない資料もあるが、チョウナなどで粗く整形したのち、細かく突出部を落としたとみられる。　**側面の整形**

縁に関しては、上述の通り、基本的に片縁か両縁に面取りを施す。面取りの手法は、角を斜めに打ち欠いただけのものが主流であるが、形態1類の中で厚みのある個体や、形態2類のうち1点（Fig.144-2）は、角を丁寧に落とし丸みをもたせる。Ph.80-5・9は打ち欠きの単位が明瞭な資料。先の尖ったノミ（タガネ）で敲打した痕跡が径4㎜程のくぼみとして残る。　**縁の面取り**

板石の分布と出土層位　出土状況が判明している162点の分布および出土遺構・層位を示す（Fig.146）。いずれも据えた状態になく、原位置から遊離していることがあきらかである。点数の制約から、形態別の出土傾向は把握できないが、整地土Bから出土したものが全体の3割弱を占める。これらは、当該整地土が削平を免れた南北大溝SD640以西に集中する。石神遺跡出土の板石を評価する際に重要なのは、整地土B出土分の由来や使用形態であるが、この点は第5次以降の調査における室生火山岩製板石の出土状況[12)]や他遺跡での使用状況、整地土Bの性格などを踏まえつつ、別稿にて検討する。

このほか点数は少ないが、Ⅰ・Ⅲ期の井戸や溝などから数点ずつが出土している。いずれも埋土に含まれていたもので、井戸や溝などの構築材ではない。このうち、Ⅲ期遺構出土分は、基本的に整地土Bに含まれていたものが混入ないし廃棄されたものであろう。また、Ⅳ期の流路NR310からも10点あまりが出土している。整地土Bに含まれていたものに由来するか、東方からの流れ込みを含むと考えられる。

1）以下、石材の同定は埋蔵文化財センターの脇谷草一郎による。
2）丸みを帯びた白黒の小石を碁石と認定することについては、橿原市教育委員会が実施した藤原京右京三条三坊の調査成果によるところが大きく、37個の小石がまとまって出土したという出土状況も重要な根拠となっている。今回報告した小石群はこれらと共通した特徴をみせているが、量の面ではまとまっていない。くわえて、囲碁の歴史が藤原宮期（694～710年）を上限とすると考えられている現時点において、井戸SE800出土層位はそれよりも古くなるため、これらの評価には注意を要する。松村恵司「藤原京の「碁石」」『季刊明日香風』第65号、財団法人飛鳥保存財団、1998年。
3）蛍光Ｘ線分析により材質を確認した。分析は田村朋美による。
4）ここでは面の呼称として「上面・下面」の表記を用いるが、大半の資料はいずれが上面かの判別がつかないものであり、上面・下面を認定した資料は一部に限られる。その認定基準は以下の通り。基準１：側面に「逃げ」をとる資料は、当初厚を残しているか否かに関わらず上下を確定できる。側面を除く２面のうち、辺の長い方が上面である。なお、この基準に該当する資料は、全点とも上面側を平滑に加工していた。基準２：当初厚を残す資料で、側面を除く２面のうち片面のみ平滑に加工されている場合、側面に「逃げ」をとらずとも、平滑である方の面を上面と考える。
5）平面を構成する隣り合う２辺が約45°をなす古代の板石のうち使用状況が判明している例として、時期はやや降るが河内国分寺跡出土の凝灰岩製の敷石（大阪府教育委員会『柏原市国分東条町河内国分寺跡発掘調査概要』1970年）がある。これは塔基壇の上面を覆う四半敷の材である。第１～４次調査区出土の２点についても、形態の類似性から四半敷の材であった可能性がある。なお、使用状況は不明であるが、同様に２辺が約45°をなし、寸法が本書報告例の２点に類似する流紋岩製の例が、法隆寺若草伽藍から出土している（奈文研『法隆寺若草伽藍発掘調査報告』2007年）。
6）「逃げ」をとることから敷石と考えられる。
7）特定の辺が直線とならない板石の事例として、礎石まわりに配された敷石が挙げられる（島田敏男「６　基壇上の仕上げ」『平城宮第一次大極殿の復元に関する研究１　基壇・礎石』奈文研、2009年）。石神遺跡ではこれまでに確実な礎石建物は検出されていないことから、Fig.144-６を礎石に接する敷石と考えるには問題があるが、弧をもつ何らかの材を納めるために加工された可能性はあるだろう。弧を描く側の断面が台形に似た形状を呈する点も、納まりをよくするための工夫と考えられる。また、山王廃寺・周山廃寺・法華寺旧境内で発見された根巻石や、文化再建時のものとされる四天王寺の方形心礎下で検出された内側円筒状の石は、形態の特徴から柱まわりに配されたと推測されており、使用方法を推測するうえで参考となる。天沼俊一編『四天王寺図録　伽藍編』四天王寺、1936年。石田茂作・三宅敏之「丹波国周山廃寺」『考古学雑誌』45-２、日本考古学会、1959年。津金澤吉茂「古代上野国における石造技術についての一試論―山王廃寺の塔心柱根巻石を中心に―」『群馬県立歴史博物館紀要』第４号群馬県立歴史博物館、1983年。奈文研「法華寺旧境内の調査」『奈文研年報1974』1975年。
8）面の一部に凹凸のある資料については、そうした特殊な部分を除き、上下両面とも平坦で、かつ該当資料の最も標準的な厚さを呈する部分を計測した。
9）箱崎和久「第Ⅴ章　10　建築石材・壁材」『山田寺報告』奈文研、2002年。
10）和田晴吾「第２部　古代の石工とその技術」『古墳時代の生産と流通』吉川弘文館、2015年。
11）この点を考慮し、Tab.13には平面の面積が100㎠に満たないものの点数を併記した。
12）室生火山岩製板石は、第７次調査で164.5kg（398点）、第９次調査で36.4kg（117点）、第10次調査で47.4kg（95点）が出土し、石神遺跡の中央部から南部にかけて出土量が多い。このような分布傾向や出土層位を詳細に検討することが、板石を評価するうえでの課題の１つである。

第Ⅵ章　自然科学分析

第１節　SE800出土土師器甕の残存脂質分析

Ａ　はじめに

本稿ではSE800井戸枠内出土の土師器甕に付着した炭化物について、残存脂質分析結果を報告する。これは既報告の分析結果[1)]に、個別脂肪酸の安定炭素同位体比データを新たに追加して加筆修正したものである[2)]。

Ｂ　分析試料

分析対象とした試料は、SE800井戸枠内から出土した土師器甕９点の内面に付着した炭化物である。これらの炭化物は、煮炊き調理時に焦げ付いた食物であったと考えられる。土器の分析試料番号は、石神遺跡を示すISGに３桁の個体識別番号を組み合わせ､ISG001からISG009とした（Fig.147)。試料を採取した土器の状態は次のとおりである。

土師器甕の付着炭化物

ISG001は底部から胴部内面の下半にかけて、炭化物粒が付着しており、その一部を試料として採取している。ISG002は頸部から胴部中位までが残り、褐色を呈する内側面に炭化物が付着している。胴部外面にはススが付着し、被熱による剝離痕がある。ISG003は胴部内面中位にコゲがあり、その部分に炭化物粒が点状に付着している。ISG004（PL.９-99）は底部内面の中央が黒ずんでおり、炭化物粒が点状に付着している。また、胴部内面には素地が点状に露出した部分もあるが、これらは器壁に付着していた炭化物粒が剝落した痕跡とみられる。ISG005（PL.９-101）の底部中央には暗褐色の炭化物が厚く付着しており、内底部の素地を層状に覆っている。SE800出土の土師器甕のなかでは、もっとも顕著な焦げ付き例である。ISG006（PL.９-100）は底部内面の中央に厚い炭化物層が付着しており、胴部内面のコゲへと連続している。ISG007は胴部内面が褐色を呈し、その一部に黒ずんだ炭化物が薄く付着している。外面は被熱で荒れており、表面が円形に剝落している。ISG008は底部から胴部にかけての破片数点からなる。内面のコゲは暗褐色を呈し、一部に炭化物が薄く層状に付着している。ISG009は底部から胴部中位までの破片である。胴部内面には帯状のコゲがある。外面には被熱で生じた円形の剝離痕が点在する。

井戸枠内から出土した土師器甕は底部のみを残すものも含めると、全部で200個体を超えている。そしてそのほとんどは外面にススが付着し、内面が褐色ないしは暗褐色を呈しており、内容物が焦げ付いた例もある。つまりこれらは、出土層位にほぼ関係なく、使用した形跡がある土師器甕ばかりである。またこれらの出土層位が、井戸枠内下層の堆積層から、中・上層の

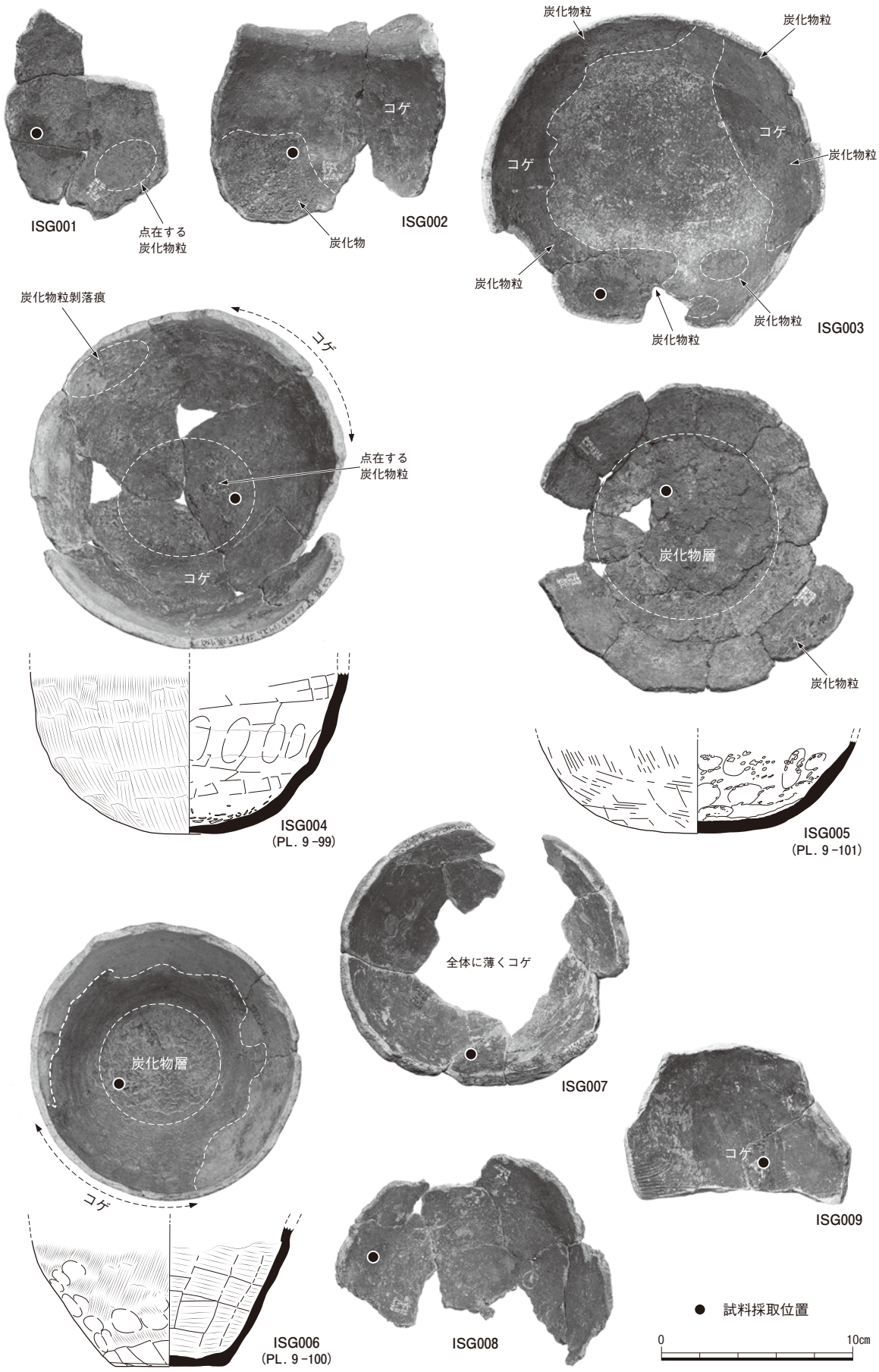


Fig. 147　**分析試料**（SE800井戸枠内出土の土師器甕）　1：3

埋立土にもおよんでいることから、使用後に廃棄物として、空井戸に投げ込まれた土師器甕を多く含んでいると考えられる。試料９点のうち、ISG003が含砂礫茶褐色有機質土出土であるほかは、すべて礫混砂からの出土である。礫混砂は井戸廃絶後に投入された埋立土の下部にあたるので、出土した土師器甕は井戸が機能していた時期のものではない（第Ⅶ章第１節、Fig.154）。

付着炭化物の採取方法

土器内面に付着した炭化物は、滅菌済みの医療用メスを用いて採取した。採取した炭化物の分析試料番号は、炭化物を示す「Ｆ」と内面からのサンプリングを示す「Ｉ」を組み合わせ、ISG001FI－ISG009FIとした。メスの刃は試料ごとに交換した。採取した炭化物は精製水、メタノール、ジクロロメタンで洗浄したメノウ乳鉢ですりつぶし、均質化した。また、土器は水溶性アクリル樹脂によって含浸強化されていたが、分析結果への影響がないことは模擬試料を作製して確認している。

C　分析方法

ガスクロマトグラフ質量分析計（GC-MS）による、残存脂質濃度の評価と生物指標を中心とした化合物の検出および同定をおこなった。本分析をおこなうため、粉末状の試料から脂質を抽出し、誘導体化した。試料が40mg以上得られた場合には酸抽出および溶媒抽出法を用い、40mg未満の場合は酸抽出のみをおこなった。酸抽出試料のうち脂質残存量が良好な試料についてはガスクロマトグラフ燃焼安定同位体質量分析計（GC-C-IRMS）を用いて個別脂肪酸の安定炭素同位体比を測定した。

酸抽出の方法

酸抽出　既存のプロトコル[3)]にしたがった。はじめに試料20mg±５％と内部標準テトラトリアコンタンC$_{34}$（１μg μL^{-1}）10μLが入った試験管を準備した。試験管に４mLのメタノールを加えたのち、超音波洗浄機を用いて15分、25℃で攪拌した。攪拌後、濃硫酸800μLを加え、４時間、70℃で加温した。室温まで冷却した試験管を遠心分離にかけ（4000rpm、５分間）、上澄みを取り出した。取り出した溶液にさらに２mLのヘキサンを加えボルテックスで攪拌した後に静置分離した。この溶液から脂質を含むヘキサン抽出液のみを回収した。ヘキサン抽出液を回収する作業は合計３回繰り返した。得られた抽出液は窒素ガスによって乾固した。乾固した抽出物にヘキサンを加え（１回目：90μL、２回目：50μL）、内部標準ヘキサトリアコンタンC$_{36}$（１μg μL^{-1}）10μLが入ったGCバイアルへ移した。なお、実験過程での汚染の有無を検討するため、１点のブランク・コントロール試料を挿入した。

溶媒抽出の方法

溶媒抽出　既存のプロトコル[4)]にしたがった。はじめに試料20mg±５％と内部標準テトラトリアコンタンC$_{34}$（１μg μL^{-1}）10μLを入れた試験管を準備した。試験管に５mLのジクロロメタン・メタノール混合溶液（DCM：MeOH, ２：1V/V）を加えたのち、超音波洗浄機を用いて15分間、25℃で攪拌した。攪拌後、遠心分離にかけ（4000rpm、15分間）、脂質を含む抽出液（上澄み）を回収した。抽出液を回収する作業は３回繰り返した。得られた抽出液は窒素ガスによって乾固した。乾固した抽出物にヘキサンを加え（１回目：90μL、２回目：50μL）、内部標準ヘキサトリアコンタンC$_{36}$（１μg μL^{-1}）10μLが入ったGCバイアルへ移した。なお、実験過程での汚染の有無を検討するため、１点のブランク・コントロール試料を挿入した。GC-MS測定の直前にBSTFA＋TMCS, 99：１（N, O-bis（trimethylsilyl）trifluoacetamide with 1% trimethylchlorosilane）によりトリメチルシリル化し、分析に供した。

GC-MS測定　得られた抽出液についてGC-MSによる測定をおこなった。GC-MS分析に用いた分析装置は島津製作所製ガスクロマトグラフ質量分析計（GCMS-QP2010Ultra）である。スプリットレス注入法により、1μLの試料を注入口温度300℃で導入した。カラムはフロンティアラボ社製Ultra ALLOY-5（30m×0.25㎜，膜厚0.25μm）を用い、酸抽出試料と溶媒抽出試料を対象に、Scanモードによる分析をおこなった。カラム温度は50℃で2分間保持したのち、10℃/minで325℃まで昇温し12分間保持した。m/z50から800までのスペクトルを獲得し、測定時間は41.5分である。イオン源温度は230℃、イオン化法はEIモード、イオン化電圧は70eV、キャリアーガスはヘリウム（3.00mL/min）を用いた。

次に、キビの生物指標であるミリアシン[5)]の検出を目的とし、酸抽出試料と溶媒抽出試料を対象に同カラムを用い、SIMモードによる分析をおこなった。分析条件について、カラム温度は50℃で1分間保持したのち、280℃まで20℃/min、325℃まで5℃/minで昇温し、8.5分間保持した。モニタリングイオンは、m/z189・204・231・425・440を選択した。測定時間は30分である。イオン源温度は230℃で、イオン化法はEIモード、イオン化電圧は70eV、キャリアーガスはヘリウム（3.00mL/min）を用いた。また、ω－アルキルフェニルアルカン酸（APAA）やイソプレノイド脂肪酸（トリメチルデカン酸、プリスタン酸、フィタン酸）などの特定の化合物をより高感度で分析することを目的とし、酸抽出試料を対象に、Agilent社製のDB-23（60m×0.25㎜，膜厚0.25μm）を用い、SIMモードによる分析をおこなった。分析条件について、カラム温度は50℃で2分間保持したのち、100℃まで10℃/min、140℃まで4℃/min、160℃まで0.5℃/min、250℃まで20℃/minで昇温し、11.5分間保持した。モニタリングイオンは、トリメチルデカン酸の検出を目的としたm/z74・87・213・270、プリスタン酸の検出を目的としたm/z74・88・101・312、フィタン酸の検出を目的としたm/z74・101・171・326、炭素数16から22のAPAAsの検出を目的としたm/z74・105・262・290・318・346を選択した。測定時間は73分である。イオン源温度は230℃で、イオン化法はEIモード、イオン化電圧は70eV、キャリアーガスはヘリウム（2.00mL/min）を用いた。

GC-C-IRMS測定　酸抽出資料のうち、十分な脂質濃度が確認された試料7点について、ヨーク大学に設置されたガスクロマトグラフ燃焼安定同位体質量分析計を用いて個別脂肪酸の安定炭素同位体比を測定した。使用した分析装置は、GCがAgilent 7890 Series Gas Chromatograph（Agilent Technologies, Cheadle, Cheshire, UK）、インターフェースがIsoprime GC5 interface（Isoprime, Cheadle, UK）、IRMSがIsoprime 100（Isoprime，Cheadle，UK）である。

スプリットレス注入法により、1μLの試料を注入口温度300℃で導入した。カラムはJ&W Scientific Technologies社製DB-5MS UI（60m×0.25㎜、膜厚0.25μm）を使用した。分析条件は、カラム温度を50℃で0.5分間保持したのち、25℃/minで175℃まで、次に8℃/minで325℃まで昇温し、20分間保持した。溶出液はカラムから直接インターフェースに導入され、850℃に保持されたGC5チューブ（CuO）で二酸化炭素化された。二酸化炭素はIRMSを用いてイオン化し、m/z44・45・46を検出し、Ion VantageとIonOSソフトウェア（Isoprime, Cheadle, UK）を用いて$^{13}C/^{12}C$比を算出した。測定結果は国際基準V-PDBに対するパーミル（‰）で示した。分析精度の評価には、標準物質（Indiana standard F8-3）を用いた。これらの報告値が$\delta^{13}C_{16:0}$が-29.90±0.03‰、$\delta^{13}C_{18:0}$が-23.24±0.01‰であるのに対し、測定値は$\delta^{13}C_{16:0}$が-29.88±

0.14‰、$\delta^{13}C_{18:0}$が−23.32±0.22‰であり、十分な測定精度が確保されていることを確認した。

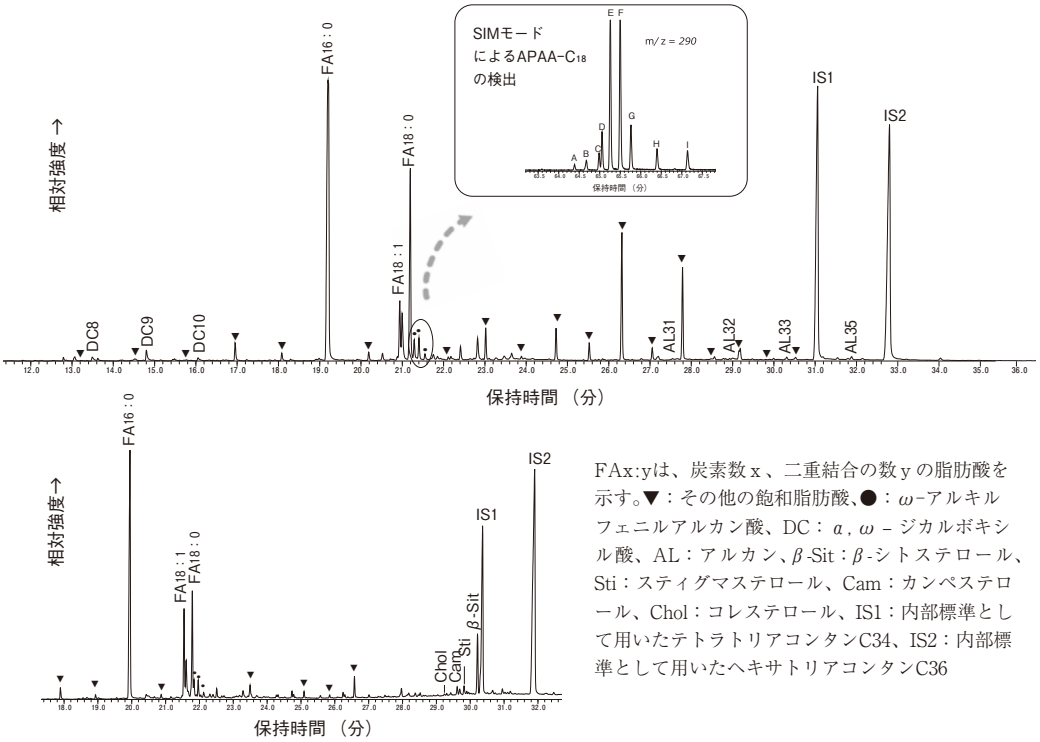
D　分析結果

GC-MS分析によって得られたスペクトルの例をFig.148に示す。各測定法および抽出法により同定された化合物はTab.14の通りである。酸抽出試料について、直鎖飽和脂肪酸（炭素数８から34まで）および不飽和脂肪酸（炭素数18）のほか、APAA（炭素数18）、分枝脂肪酸（炭素数15から17まで）、ジカルボン酸（炭素数４から13まで）、アルカン（炭素数25から35まで）、フィタン酸がScanモードで検出された。

ピークの全体的な特徴としてパルミチン酸（$C_{16:0}$）がステアリン酸（$C_{18:0}$）と比較して高い傾向にあった。Dunneらによる研究によれば、パルミチン酸／ステアリン酸比（P/S比）が４以上の高い値を示すことは、現生サンプル、考古遺物共に動物性脂質では見られず、植物である可能性が高いという[6]。本分析試料についてパルミチン酸、ステアリン酸のピーク面積からP/S比を算出したところ、ISG004FIおよびISG006FIは４以上の値が得られた。

溶媒抽出は９点中３点のみ実施したが、コレステロール、β－シトステロール、カンペステロール、スティグマステロールがScanモードで検出された。β－シトステロール、カンペステロール、スティグマステロールは植物に含まれる特徴的な化合物である（Fig.148）。セルロースやデンプンの熱分解生成物であるレボグルコサンは認められなかった。また、ミリアシンの検出を目的としたSIMモードによる分析では、酸抽出・溶媒抽出試料ともにミリアシンは検出されなかった。

APAAならびにイソプレノイド脂肪酸の検出を目的としたSIMモードによる分析では、全試料



FAx:yは、炭素数ｘ、二重結合の数ｙの脂肪酸を示す。▼：その他の飽和脂肪酸、●：ω-アルキルフェニルアルカン酸、DC：α, ω－ジカルボキシル酸、AL：アルカン、β-Sit：β-シトステロール、Sti：スティグマステロール、Cam：カンペステロール、Chol：コレステロール、IS1：内部標準として用いたテトラトリアコンタンC34、IS2：内部標準として用いたヘキサトリアコンタンC36

Fig. 148　分析結果例（ISG002FI）
上図：酸抽出で得た脂質の部分クロマトグラム、下図：溶媒抽出で得た脂質の部分クロマトグラム

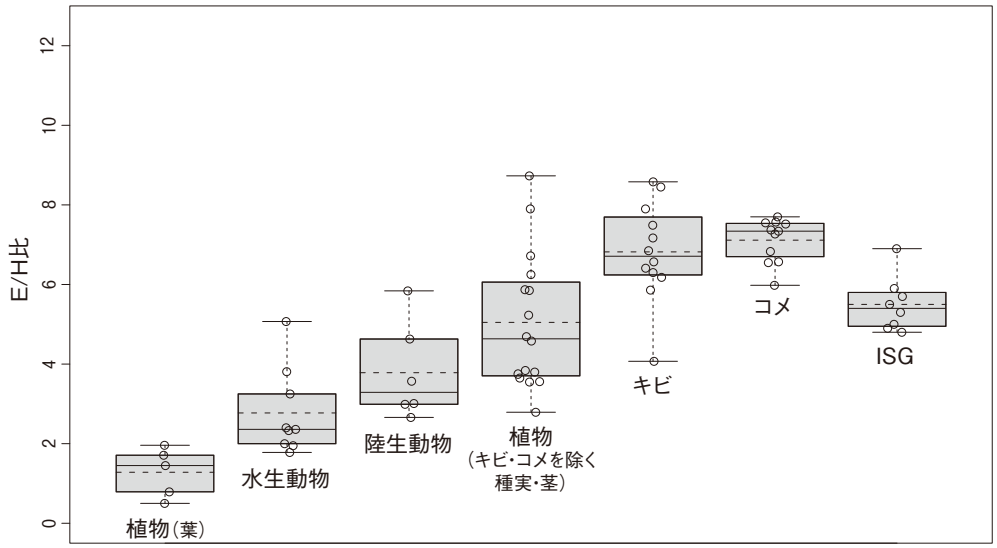


Fig. 149　箱ひげ図による炭素数18のω-アルキルフェニルアルカン（APAA）E/H比の現生標本（参照データはLundy et al. 2024）との比較（横線実線は中央値、横線点線は平均値をあらわす）

Tab. 14　残存脂質分析結果

試料ID	出土層位	AE秤量（mg）	TLE秤量（mg）	濃度（μg g-1）	酸抽出による主な検出化合物	溶媒抽出による他の検出化合物	E/H比	S/P比
ISG001FI	礫混砂	16.0	n/a	1255	FA(C9:0-32:0, C18:1, C17:0br), DC(C8-11), APAA(C18), AL(C27-35)	n/a	5.9	3.9
ISG002FI	礫混砂	19.7	19.9	1497	FA(C9:0-34:0, C18:1, C15:0br-17:0br), DC(C4-11), APAA(C18), AL(C29-35)	β-Sit, Stig, Cam, Chol	6.9	3.0
ISG003FI	含砂礫茶褐色有機質土	20.0	n/a	1450	FA(C8:0-34:0, C18:1, C15:0br-17:0br), DC(C8-10), APAA(C18), AL(C27-35)	n/a	5.0	3.1
ISG004FI	礫混砂	20.3	n/a	1226	FA(C9:0-32:0, C18:1), DC(C4-10), APAA(C18), AL(C27-35)	n/a	5.5	4.9
ISG005FI	礫混砂	20.1	20.1	1898	FA(C9:0-34:0, C18:1, C15:0br), DC(C4-11), APAA(C18), AL(C27-35)	β-Sit, Stig, Cam, Chol	5.3	3.6
ISG006FI	礫混砂	19.7	n/a	979	FA(C9:0-32:0, C18:1), DC(C8-11), APAA(C18), AL(C25-35)	n/a	4.9	4.0
ISG007FI	礫混砂	20.3	n/a	740	FA(C8:0-34:0, C18:1, C15:0br-17:0br), DC(C4-11), APAA(C18), Phy, AL(C27-35)	n/a	5.7	2.5
ISG008FI	礫混砂	20.2	15.4	406	FA(C9:0-34:0, C18:1, C15:0br-17:0br), DC(C7-13), APAA(C18), Phy, AL(C26-35)	β-Sit, Chol	—	3.0
ISG009FI	礫混砂	15.2	n/a	311	FA(C12:0-32:0, C18:1, C15:0br-17:0br), DC(C4-10), APAA(C18), Phy, AL(C25-35)	n/a	4.8	2.4

FA：脂肪酸。Cx：yは、炭素数x、二重結合の数yを示す。br：分枝脂肪酸、DC：α，ω－ジカルボキシル酸、
APAA：ω-アルキルフェニルアルカン酸、Phy：フィタン酸、AL：アルカン、β-Sit：β-シトステロール、
Sti：スティグマステロール、Cam：カンペステロール、Chol：コレステロール

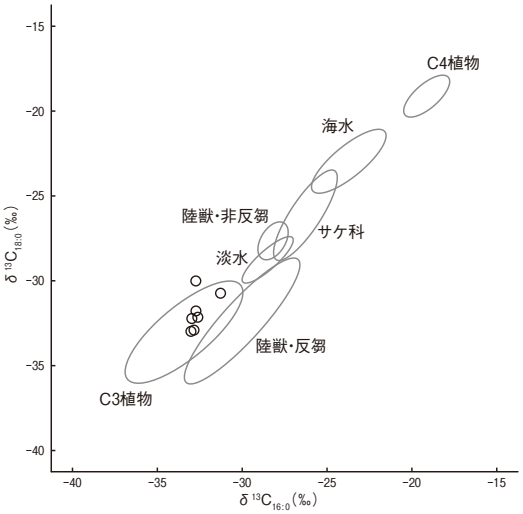


Fig. 150　個別脂肪酸の安定炭素同位体比分析

ＡＰＡＡの検　出

に共通して炭素数18のAPAA（APAA-C_{18}）が検出された（Fig.148）。水生生物に特徴的にみられる炭素数20および22のＡＰＡＡについては検出されなかった。APAA-C_{18}の異性体についてはｎ＝４とｎ＝１の異性体の比率（Ｅ/Ｈ比）が、水生動物、陸生動物、植物の葉、植物の種実・茎で有意に異なることが報告されている[7]。Lundyらはこれらの結果に現生のイネとキビを追加し、他の植物の種実・茎と比較してこれらのＥ/Ｈ比はさらに高い傾向にあることを示している[8]。そこでＥ/Ｈ比が算出できた試料８点について、Lundyらの論文で提示された現生標本分類と比較した。その結果、ISGは比較的まとまった値を示し、植物（種実・茎）に近い傾向にあった（Fig.149）。目視による観察で炭化物は飯粒と推測されたが、これらの試料のＥ/Ｈ比はイネの現生標本の測定値よりは低い。ただし、現生試料と出土試料との直接的な比較は現段階では厳密には困難であり、本結果はコメの存在を否定するものではない。

フィタン酸

イソプレノイド脂肪酸のひとつであるフィタン酸にはＲ体とＳ体が存在し、その比率（SRR比）は水生生物と反芻動物において異なる傾向を示すことが報告されている[9]。SRR比のみで水生生物か反芻動物かを判断することは難しいが、炭素数20以上のAPAAやイソプレノイド脂肪酸である4,8,12－トリメチルトリデカン酸（4,8,12-TMTD）など他のバイオマーカーと組み合わせることで、その由来について検討することが可能となる。本研究においても、ISG007FI、ISG008FI、ISG009FIについてフィタン酸のピークが認められたが、検出強度が低くSRR比を求めることはできなかった。

最後に、GC-C-IRMSによる個別脂肪酸の安定炭素同位体比分析の結果、ほぼ全ての試料はC3植物の参照範囲にプロットされた（Fig.150）。

Ｅ　考　　察

GC-MS分析によって同定された化合物のうち、APAAは加熱による多価不飽和脂肪酸の変成によって生じる、自然界にはみられない化合物である[10]。その由来が水生生物であるかどうかは、炭素数20および22のAPAAの存在や、炭素数20と炭素数18のAPAAの比率が指標となる。しかし今回のように炭素数18のAPAAだけが検出された場合、炭素数20以上のAPAAが含まれないのか、単に残存濃度が低く検出されなかったのかは判断できない。そこで炭素数18のAPAAの異性体比を算出し、既往の研究で示された参照データと比較したところ、植物（種実・茎）に近い傾向にあった。植物（種実・茎）のＥ/Ｈ比は他の現生標本と比較して高いことが特徴であるが、Ｅ/Ｈ比が低い他の食材との混合によって値が低くなることが予想される。換言すれば、Ｅ/Ｈ比が特に高い試料（ISG001FI・ISG002FI）については動物あるいは植物（葉）

の可能性は低いといえる。また、分析点数が３点のみではあるが、溶媒抽出試料についてもすべての試料からβ－シトステロール、カンペステロール、スティグマステロールからなる一連の植物ステロールが検出されている。以上のように複数の検討を組み合わせた結果、分析対象とした付着炭化物はいずれも植物（種実・茎）である可能性が高いと思われる。さらに、APAAは加熱によって生成される化合物である。分析に供した土師器甕には外面にススが付着しており、一部資料には被熱による外面剝離痕も認められることから、土器による加熱調理が想定されていた。本結果も加熱調理を支持する内容といえる。

個別脂肪酸の安定炭素同位体比分析では、ほぼすべての試料がC3植物の参照範囲内にプロットされた。C3植物が他の動物質の脂質と混合された場合にはこの領域から容易に逸脱することが想定されるため、これは相当な重量比でC3植物が寄与しているといえる[11]。すなわち、SE800井戸枠内出土の土師器甕がC3植物（種実・茎）の煮炊きに特化した調理器具であった可能性を示唆する。

C３植物の煮炊に使用

F　おわりに

本分析の結果、すべての試料について植物質資源の強い寄与が確認された。実は、日本における残存脂質分析において、植物の寄与を強く示す分析事例は多くない。それは、日本の残存脂質分析が縄文時代など先史時代を中心にデータが蓄積されており、かつ先史時代の土器利用が海産物などの水産資源に偏っているためである[12]。日本の事例とは対照的に、中国の新石器時代の田螺山遺跡出土土器および付着物の分析事例ではデンプン質食材の調理・加工対象を示す化合物や個別脂肪酸の安定同位体比が確認されているが、本研究事例のように全ての試料に強い植物の寄与が認められるのではなく、一部にとどまっている[13]。以上のことから、SE800出土土器は、これまでの分析例とは異なる新たな使用パターンを示している可能性がある。他の器種やサイズの異なる土器を分析することで、土器使用のパターンについてさらなる知見が得られるであろう。

本稿はJSPS科研費若手研究（22K13241）「考古生化学から探る古代日本の土器利用（代表：村上夏希）」、基盤研究Ａ（21H04370）「東北アジアの農耕化過程における食と調理の変化への考古生化学的アプローチ（代表：庄田慎矢）」および基盤研究Ａ（20H00033）「東ユーラシア東辺における古代食の多角的視点による解明とその栄養価からみた疾病（代表：三舟隆之）」の成果の一部である。

1）村上夏希・森川 実・庄田慎矢「石神遺跡井戸SE800出土土器付着炭化物の残存脂質分析」３『文化財論叢Ⅴ』821-834頁、奈文研、2023年。

2）サンプル採取・調整、GC-MSによる分析は村上夏希（昭和女子大学）、鈴木美穂・庄田慎矢が、個別脂肪酸の安定炭素同位体比の測定はリュキャン アレクサンドル・クレイグオリヴァー（ヨーク大学）が、資料の選定と考古学的解釈については森川 実がおこなった。本文は村上夏希、森川 実、庄田慎矢が執筆した。

3）Craig, O. E., Saul, H., Lucquin, A., Nishida, Y., Taché, K., Clarke, L., Thompson, A., Altoft, D. T., Uchiyama, J., Ajimoto, M., Gibbs, K., Isaksson, S., Heron, C. P., & Jordan, P. Earliestevidence for the use of pottery. *Nature*, 496（7445）, 351-354. 2013

４）Evershed, R. P., Heron, C., & John Goad, L. Analysis of organic residues of archaeologicalorigin by high-temperature gas chromatography and gas chromatography-mass spectrometry. *The Analyst*, 115（10）, 1339–1342. 1990

５）Heron, C., Shoda, S., Breu Barcons, A., Czebreszuk, J., Eley, Y., Gorton, M., Kirleis, W., Kneisel, J., Lucquin, A., Müller, J., Nishida, Y., Son, J.-H., & Craig, O. E. First molecular and isotopic evidence of millet processing in prehistoric pottery vessels. *Scientific Reports*, 6, 1–9. 2016；庄田慎矢・Edward Standall・村上夏希「キビの起源と拡散をめぐる考古生化学的探求」『雑穀研究』36　pp. 1–8. 2021年。

６）Dunne, J., Mercuri, A. M., Evershed, R. P., Bruni, S., & Di Lernia, S. Earliest direct evidence of plant processing in prehistoric Saharan pottery. *Nature Plants*, 3, 1–6. 2016

７）Bondetti, M., Scott, E., Courel, B., Lucquin, A., Shoda, S., Lundy, J., Labra-Odde, C., Drieu, L., & Craig, O. E. Investigating the formation and diagnostic value of ω-(o-alkylphenyl) alkanoic acids in ancient pottery. *Archaeometry*, 63(3), 594–608, 2021 ：庄田慎矢・新里貴之・鈴木美穂・高宮広土・タルボット＝ヘレン・クレイグ＝オリヴァー「土器残存脂質による貝塚文化北限地域における動植物資源利用の復元」『文化財科学』83　pp. 55–76. 2021年。

８）Lundy, J., Bondetti, M., Lucquin, A., Talbot, H. M., Murakami, N., Nakayama, S., Harada, M., Suzuki, M., Endo, E., Stevens, C., Crema, E. R., Craig,O. E., & Shoda, S. Culinary continuity in central Japan across the transition to agriculture. *Archaeological and Anthropological Sciences*, *16*(7), 1–13. 2024

９）Lucquin, A., Robson, H. K., Eley, Y., Shoda, S., Veltcheva, D., Gibbs, K., Heron, C., P., Isaksson, S., Nishida, Y., Taniguchi, Y., Nakajima, S., Kobayashi, K., Jordan, P., Kaner, S., & Craig, O. E. The impact of environmental change on the use of early pottery by East Asian huntergatherers. *Proceedings of the National Academy of Sciences*, 115(31), 7931–7936. 2018

10）Hansel, F. A., Copley, M. S., Madureira, L. A. S., & Evershed, R. P. Thermally produced ω-（o-alkylphenyl）alkanoic acids provide evidence for the processing of marine products in archaeological pottery vessels. *Tetrahedron Letters*, 45(14), 2999–3002. 2004；Evershed, R. P., Copley, M. S., Dickson, L., & Hansel, F. A. 2008. Experimental Evidence For The Processing of Marine Animal Products and Other Commodities Containing Polyunsaturated Fatty Acids In Pottery Vessels. *Archaeometry*, 50(1), 101–113. 2008

11）庄田慎矢・鈴木美穂「混合モデルを用いた土器残存脂質における植物質食料の寄与度の評価」『日中共同研究成果報告書Ⅱ 中国新石器時代文明の探求』pp. 293–305, 2023年。

12）庄田慎矢・オリヴァー＝クレイグ「土器残存脂質分析の成果と日本考古学への応用可能性」『日本考古学』43　pp. 79–89, 2017年：Shoda, S., Lucquin, A., Sou, C. I., Nishida, Y., Sun, G., Kitano, H., Son, J.-H., Nakamura, S., & Craig, O. E. Molecular and isotopic evidence for the processing of starchy plants in Early Neolithic pottery from China. *Scientific Reports*, 8(1), 1–9. 2018

13）Shoda, S., Lucquin, A., Sou, C. I., Nishida, Y., Sun, G., Kitano, H., Son, J.-H., Nakamura, S., & Craig, O. E. 2018 Molecular and isotopic evidence for the processing of starchy plants in Early Neolithic pottery from China. *Scientific Reports*, 8(1), 1–9. 2018

第２節　SE800井戸枠内出土木製品の樹種調査

Ａ　試料と方法

対象とした試料は、第４次調査区の井戸SE800井戸枠内から出土した木製品94点である。出土土器の年代によれば、井戸SE800は７世紀前半から半ばにかけて埋没している（本書Ⅴ章１節参照）。このほか、第２次調査区の中世井戸SE410等から出土した木製品２点をくわえ、合計96点について樹種調査を実施した。各試料について、切片採取前に木取りの確認をおこなった。

樹種同定では、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）について、カミソリで薄い切片を切り出し、ガムクロラールで封入して永久プレパラートを作製した。その後乾燥させ、光学顕微鏡にて検鏡および写真撮影をおこなった。

Ｂ　樹種調査の結果

同定の結果、針葉樹ではモミ属とマツ属複維管束亜属、コウヤマキ、スギ、ヒノキの５分類群、広葉樹ではクスノキ科とコナラ属アカガシ亜属（以下、アカガシ亜属）、カエデ属、ウツギ属、サカキ、ハイノキ属サワフタギ節（以下、サワフタギ節）の６分類群の、計11分類群がみられた。

ヒノキが34点で最も多く、クスノキ科が16点、ウツギ属が13点、アカガシ亜属が10点、サカキが５点、モミ属とコウヤマキ、スギが各３点、カエデ属が２点、マツ属複維管束亜属とサワフタギ節が各１点であった。同定結果をTab.15・16に示す。

以下に、同定された材の特徴を記載し、図版に光学顕微鏡写真を示す。

（１）モミ属 *Abies* マツ科 Ph.81 1a–1c（Fig.99–47）

SE800砂混灰褐色粘質土出土の楔。仮道管と放射組織で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列で、高さ１～８列となる。分野壁孔は小型のスギ型で、１分野に２～４個みられる。また、放射組織の末端壁は数珠状に肥厚する。

モミ属には高標高域に分布するシラビソ、オオシラビソ、ウラジロモミと、低標高域に分布するモミなどがあり、いずれも常緑高木である。材はやや軽軟で、切削その他の加工は容易、割裂性も大きい。

（２）マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* マツ科 Ph.81 2a–2c（Fig.94–19）

SE800礫混砂出土の加工棒。仮道管と垂直および水平樹脂道、放射柔細胞および放射仮道管で構成される針葉樹である。放射組織は放射柔細胞と放射仮道管によって構成される。放射仮道管の内壁の肥厚は鋸歯状であり、分野壁孔は窓状となる。

マツ属複維管束亜属には、アカマツとクロマツがある。どちらも温帯から暖帯にかけて分布し、クロマツは海の近くに、アカマツは内陸地に生育しやすい。材質は類似し、重硬で、切削等の加工は容易である。

（３）コウヤマキ *Sciadopitys verticillata*（Thunb.）Siebold et Zucc．コウヤマキ科
Ph.81 3a-3c（Fig.100-72）

SE800井戸枠取水口出土の楔。仮道管と放射組織で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列で、高さ１～５列となる。分野壁孔は窓状となる。

コウヤマキは温帯から暖帯にかけて隔離分布する１科１属１種の常緑高木の針葉樹で、日本の固有種である。材はやや軽軟、切削などは容易で、水湿に耐朽性がある。

（４）スギ *Cryptomeria japonica*（L.f.）D.Don ヒノキ科 Ph.82 4a-4c（Fig.94-20）

SE800礫混砂出土の板状品。道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列で、高さ２～15列となる。分野壁孔は孔口が大きく開いた大型のスギ型で、１分野に普通２個みられる。

スギは大高木へと成長する常緑針葉樹で、天然分布は東日本の日本海側に多い。比較的軽軟で、切削などの加工が容易な材である。

（５）ヒノキ *Chamaecyparis obtusa*（Siebold et Zucc.）Endl．ヒノキ科 Ph.82 5a-5c
（Fig.100-77）

SE800井戸枠取水口出土の楔。仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は薄く、早材から晩材への移行は急である。放射組織は単列で、高さ１～15列である。分野壁孔はトウヒ～ヒノキ型で、１分野に２個みられる。

ヒノキは福島県以南の暖温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。材はやや軽軟で加工しやすく、強度に優れ、耐朽性が高い。

（６）クスノキ科 Lauraceae Ph.82 6a-6c（Fig.93-11）

SE800井戸バラス出土の加工棒。小型の道管が単独ないし２～３個複合し、やや密に散在する散孔材である。軸方向柔組織は周囲状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、幅１～２列となる。木部繊維内には、油細胞が認められる。

クスノキ科にはニッケイ属やタブノキ属、クロモジ属などがあり、暖帯を中心に分布する、主に常緑性の高木または低木である。

（７）コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen．*Cyclobalanopsis* ブナ科 Ph.83 7a-7c
（Fig.97-33）

SE800含砂礫茶褐色有機質土出土の刀子柄。厚壁で丸い大型の道管が、放射方向に配列する放射孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属アカガシ亜属は、道管の大きなイチイガシ以外は、材組織の観察では種までの同定ができない。したがって、本試料はイチイガシ以外のアカガシ亜属である。アカガシ亜属にはアカガシやツクバネガシなどがあり、暖帯に分布する常緑高木の広葉樹である。材は重硬かつ強靭で、耐水性があり、切削加工は困難である。

（８）カエデ属 *Acer* ムクロジ科 Ph.83 8a-8c（Fig.100-89）

SE800井戸枠取水口出土の加工棒。小型の道管が単独ないし２～３個複合してやや疎らに散在する散孔材である。木部繊維の壁の厚さの違いで、木口面に雲紋状の文様がみられる。道管

は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は同性で、幅１～６列となる。

カエデ属にはイタヤカエデやウリハダカエデなどがあり、代表的なイタヤカエデは各地に普通にみられる落葉高木の広葉樹である。材はやや重硬で、切削加工はやや困難である。

（９）ウツギ属 *Deutzia* アジサイ科 Ph.83・84 9a–9c（Fig.96–26）、**10a–10c**（Fig.96–26）

SE800礫混砂出土の加工棒。小型の道管がほぼ単独で、やや密に散在する散孔材である。道管は40段以上の階段穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端１～３列が直立する異性で、幅１～４列である。また、放射組織は鞘細胞を有する。

ウツギ属にはウツギ、マルバウツギなどがあり、日当たりの良い小川付近などに分布する落葉低木である。代表的なウツギの材は重硬で、切削加工は中庸である。

（10）サカキ *Cleyera japonica* Thunb．モッコク科 Ph.84 11a–11c（Fig.99–53）

SE800含砂礫茶褐色有機質土出土の楔。小型の道管がほぼ単独で、やや密に散在する散孔材である。道管は20～40段程度の階段穿孔となる。放射組織は上下端１～４列が直立する異性で、単列となる。

サカキは日本海側で新潟県、太平洋側で関東以西の本州、四国、九州などの温帯から亜熱帯に分布する常緑高木である。材は強靭、堅硬で、切削加工は困難である。

（11）ハイノキ属サワフタギ節 *Symplocos* sect．*Palura* ハイノキ科 Ph.84 12a–12c（Fig.99–49）

SE800含砂礫茶褐色有機質土出土の楔。小型の道管がほぼ単独で、やや密に散在する散孔材である。軸方向柔組織は短接線状となる。道管は 40段程度の階段穿孔を有する。放射組織は上下端２～４列が直立する異性で、幅１～３列となる。放射組織の単列部と多列部は、同じ大きさとなる。

ハイノキ属サワフタギ節にはサワフタギやタンナサワフタギがある。サワフタギは北海道、本州、四国、九州に分布し、タンナサワフタギは関東以西の本州、四国、九州に分布する落葉低木である。 材は重硬で、靭性がある。

C　考　　察

刀子柄はクスノキ科（１）とアカガシ亜属（33）、柄はウツギ属（34）、クスノキ科（32）であった。クスノキ科とアカガシ亜属、ウツギ属は堅硬な樹種である[1)]。平城京および平城宮で出土した道具類の柄では、ヒノキが多く確認されるが、アカガシ亜属、ウツギ属も確認されており、傾向は一致する[2)]。

楔はモミ属（47・69・73）とコウヤマキ（68・72）、ヒノキ（13・14・54～59・61・62・65・67・70・71・74・77～80）、クスノキ科（52・60・64）、アカガシ亜属（２・48・50）、ウツギ属（66・75・76）、サカキ（51・53・63）、サワフタギ節（49）であった。モミ属とコウヤマキ、ヒノキは真っすぐで加工性の良い樹種であり、サカキとサワフタギ節は堅硬な樹種である[3)]。平城京および平城宮で出土した楔では、ヒノキが最も多く確認され、コウヤマキとスギ、アカガシ亜属も確認されている[4)]。SE800井戸枠内出土の楔は、ヒノキが多い点で傾向は一致するが、堅硬な広葉樹も多く利用されている点が特徴的である。

曲物底板（96）、蓋（16）、栓（15・23・24・44）は、いずれもヒノキであった。平城京および平城宮で出土した曲物底板や容器の蓋にはヒノキが多く利用されており、傾向は一致する。一

Tab. 15　SE800井戸枠内出土木製品の樹種

Fig.	No.	器　種	木取り	樹　種	出土層位
92	1	刀子柄	芯去削出	クスノキ科	埋土最上部（灰褐色砂）
	2	楔	芯持丸木	コナラ属アカガシ亜属	埋土最上部（灰褐色砂）
	3	加工棒	芯持丸木	コナラ属アカガシ亜属	埋土最上部（灰褐色砂）
	4	加工棒	芯持丸木	コナラ属アカガシ亜属	埋土最上部（灰褐色砂）
	5	加工棒	芯持丸木	コナラ属アカガシ亜属	埋土最上部（灰褐色砂）
	6	輪切り状木製品	ミカン割	コウヤマキ	埋土最上部（灰褐色砂）
93	7*	斎串	柾目	ヒノキ科	バラス層
	8	加工棒	芯去削出	ヒノキ	バラス層
	9	加工棒	芯持丸木	クスノキ科	バラス層
	10	加工棒	芯持丸木	クスノキ科	バラス層
	11	加工棒	芯持丸木	クスノキ科	バラス層
	12	不明木製品	板目	—	バラス層
94	13	楔	板目	ヒノキ	礫混砂
	14	楔	板目	ヒノキ	礫混砂
	15	栓	芯去削出	ヒノキ	礫混砂
	16	蓋	板目	ヒノキ	礫混砂
	17	加工棒	芯去削出	スギ	礫混砂
	18	加工棒	芯去削出	カエデ属	礫混砂
	19	加工棒	芯去削出	マツ属複維管亜属	礫混砂
	20	板状品	板目	スギ	礫混砂
	21	板状品	板目	クスノキ科	礫混砂
	22	剝物	横木取り	—	礫混砂
95	23	栓	板目	ヒノキ	礫混砂
	24	栓	芯去削出	ヒノキ	礫混砂
96	25	加工棒	芯持丸木	ウツギ属	礫混砂
	26	加工棒	芯持丸木	ウツギ属	礫混砂
	27	加工棒	半割	ウツギ属	礫混砂
	28	加工棒	芯持丸木	クスノキ科	礫混砂
	29	加工棒	芯持丸木	ウツギ属	礫混砂
	30	加工棒	芯持丸木	コナラ属アカガシ亜属	礫混砂
	31	板状品	板目	ヒノキ	礫混砂
97	32	柄	芯持丸木	クスノキ科	含砂礫茶褐色有機質土
	33	刀子柄	芯去削出	コナラ属アカガシ亜属	含砂礫茶褐色有機質土
	34	柄	芯持丸木	ウツギ属	含砂礫茶褐色有機質土
	35	加工棒	芯去削出	コナラ属アカガシ亜属	含砂礫茶褐色有機質土
	36	加工棒	芯持丸木	サカキ	含砂礫茶褐色有機質土
	37	加工棒	芯持丸木	コナラ属アカガシ亜属	含砂礫茶褐色有機質土
	38	加工棒	芯去削出	サカキ	粘質砂土混バラス
	39	板状品	柾目	ヒノキ	含砂礫茶褐色有機質土
	40	板状品	柾目	ヒノキ	粘質砂土混バラス
	41	不明木製品	板目	ヒノキ	含砂礫茶褐色有機質土
	42	不明木製品	板目	クスノキ科	含砂礫茶褐色有機質土
98	43	円盤状木製品	板目	ヒノキ	含砂礫茶褐色有機質土
	44	栓	芯去削出	ヒノキ	砂混灰褐色粘質土
	45	栓	—	—	含砂礫茶褐色有機質土
	46	輪切り状木製品	板目	クスノキ科	砂混灰褐色粘質土
99	47	楔	芯持丸木	モミ属	砂混灰褐色粘質土
	48	楔	芯持丸木	コナラ属アカガシ亜属	砂混灰褐色粘質土
	49	楔	芯持丸木	ハイノキ属サワフタギ節	含砂礫茶褐色有機質土
	50	楔	芯持丸木	コナラ属アカガシ亜属	含砂礫茶褐色有機質土
	51	楔	芯去削出	サカキ	含砂礫茶褐色有機質土
	52	楔	追板目	クスノキ科	含砂礫茶褐色有機質土
	53	楔	板目	サカキ	含砂礫茶褐色有機質土
	54	楔	追板目	ヒノキ	砂混灰褐色粘質土
	55	楔	板目	ヒノキ	含砂礫茶褐色有機質土
	56	楔	柾目	ヒノキ	含砂礫茶褐色有機質土
	57	楔	板目	ヒノキ	砂混灰褐色粘質土
	58	楔	板目	ヒノキ	砂混灰褐色粘質土
	59	楔	柾目	ヒノキ	砂混灰褐色粘質土
	60	楔	板目	クスノキ科	含砂礫茶褐色有機質土
	61	楔	柾目	ヒノキ	砂混灰褐色粘質土
	62	楔	柾目	ヒノキ	砂混灰褐色粘質土
	63	楔	柾目	サカキ	砂混灰褐色粘質土
	64	楔	板目	クスノキ科	砂混灰褐色粘質土
	65	楔	柾目	ヒノキ	砂混灰褐色粘質土

Fig.93-7（＊）の樹種同定は藤井裕之氏による。

Tab. 16　SE800井戸枠内等出土木製品の樹種

Fig.	No.	器　種	木取り	樹　種	出土遺構・層位
100	66	楔	芯持丸木	ウツギ属	井戸枠取水口
	67	楔	柾目	ヒノキ	井戸枠取水口
	68	楔	柾目	コウヤマキ	井戸枠取水口
	69	楔	柾目	モミ属	井戸枠取水口
	70	楔	柾目	ヒノキ	井戸枠取水口
	71	楔	柾目	ヒノキ	井戸枠取水口
	72	楔	柾目	コウヤマキ	井戸枠取水口
	73	楔	柾目	モミ属	井戸枠取水口
	74	楔	柾目	ヒノキ	井戸枠取水口
	75	楔	板目	ウツギ属	井戸枠取水口
	76	楔	板目	ウツギ属	井戸枠取水口
	77	楔	板目	ヒノキ	井戸枠取水口
	78	楔	柾目	ヒノキ	井戸枠取水口
	79	楔	板目	ヒノキ	井戸枠取水口
	80	楔	板目	ヒノキ	井戸枠取水口
	81	板状品	柾目	ヒノキ	井戸枠取水口
	82	板状品	柾目	スギ	井戸枠取水口
	83	加工棒	半割	ウツギ属	井戸枠取水口
	84	加工棒	半割	クスノキ科	井戸枠取水口
	85	加工棒	半割	ウツギ属	井戸枠取水口
	86	加工棒	半割	ウツギ属	井戸枠取水口
	87	加工棒	半割	ヒノキ	井戸枠取水口
	88	加工棒	板目	クスノキ科	井戸枠取水口
	89	加工棒	半割	カエデ属	井戸枠取水口
	90	加工棒	板目	クスノキ科	井戸枠取水口
	91	加工棒	柾目	ヒノキ	井戸枠取水口
	92	加工棒	半割	クスノキ科	井戸枠取水口
	93	加工棒	板目	ウツギ属	井戸枠取水口
	94	加工棒	板目	ウツギ属	井戸枠取水口
101	95	栓	板目	―	土坑（UR26区）
102	96	曲物底板	板目	ヒノキ	中世井戸SE410

方、栓については、平城京および平城宮ではヒノキも利用されているが、多様な広葉樹も利用されているのが確認できる[5)]。

板状品（20・21・31・39・40・81・82）では、では、スギとヒノキ、クスノキ科がみられた。平城京および平城宮で出土した板には、ヒノキとスギが多く利用されており、傾向は一致する。

加工棒（3～5・9～11・25～30・35～38・84～94）では、マツ属複維管束亜属とスギ・ヒノキ、クスノキ科、アカガシ亜属、カエデ属、ウツギ属、サカキがみられた。マツ属複維管束亜属は真っすぐで加工性が良く、油分が多くて耐水性の高い樹種、カエデ属は堅硬な樹種である[6)]。平城京および平城宮で出土した棒では、ヒノキとスギが多く確認されているが、アカガシ亜属やウツギ属なども確認されている[7)]。今回の石神遺跡の木製品では、棒状の木製品にヒノキなどの針葉樹の利用は少なく、堅硬な広葉樹類が多い点が特徴的であった。

円盤（43）はヒノキ、不明木製品（41・42）はヒノキとクスノキ科、輪切状木製品（6・46）はコウヤマキとクスノキ科であった。いずれも加工性の良い針葉樹や、堅硬な広葉樹である。

1）伊東隆夫・佐野雄三・安部久・内海泰弘・山口和穂『日本有用樹木誌』238頁、海青社、2011年。
2）前掲註1）文献。
3）前掲註1）文献。
4）伊東隆夫・山田昌久編『木の考古学―出土木製品用材データベース―』449頁、海青社、2012年。
5）前掲註4）文献。
6）前掲註1）文献。
7）前掲註4）文献。

第３節　石組溝SD335の堆積環境と流向

試料と方法　飛鳥藤原第214次調査区で再検出したⅠ期の石組溝SD335について、石組溝構築以前、さらに機能時、そして埋没過程にかけての堆積環境を検討するため、地質切取試料を採取し堆積構造の分析をおこなった。採取地点は第１次調査区の北壁で、この石組溝の断面図をかつて作成した場所である。第214次調査時に埋戻土を除去し、第１次調査時の壁面を露出させたうえで、改めて土層観察と分層をおこない、10分の１で層相断面図を作成した。採取年月日は2024年３月４日である。

地質切取試料は、本来の溝の埋土、さらに埋土を被覆する溝上層の埋立土（１層・２層）とその上位の整地土、くわえて溝埋土より下位となる砂泥層や砂礫層から計５試料である。これらの試料は、スチロールケース（14㎝×22㎝×４㎝）を壁面に埋め込んで採取した。試料の採取層位と、スチロールケースの位置はFig.151に示したとおりである。採取試料は研究室に持ち帰ったのち整形し、層相観察ならびに層相写真（Ph.85左列）を撮影した。その後、２通りの方法で堆積構造の分析を進めた。１つは低出力Ｘ線撮像解析で、フジフイルム社製軟Ｘ線撮像装置（μFX-1000）とイメージングプレートを用いた（Ph.85左から２列目）。イメージングプレートのスキャンは、フジフイルム社製DynamixTMHR2を用いた。もう一つの方法は、試料を高出力Ｘ線CT（HiXCT-1M-SP）で撮像し、３次元構造解析をおこなうものである。CT撮像は日立Hibrid方式でおこない、ボクセル解像度は１辺あたり0.1㎜、Ｘ線透過度の出力は16bit（65,536階調）グレーに設定した。撮像後、さらに断層画像データについて、Ｘ線透過度と検出テクスチャー形状に注目して、Python3.11とOpenCV4.5.1を用いたWentworth粒度階区分分析をおこなった。分析結果は粒度階ごとに任意色を適用し、ExFact2.1を用いて３次元

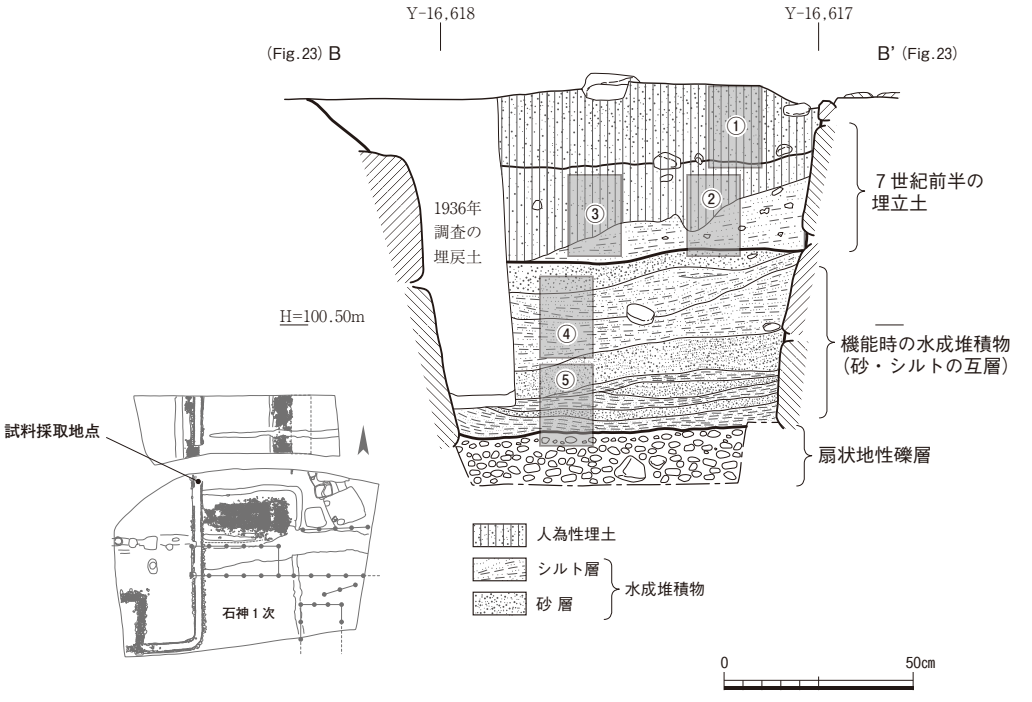


Fig. 151　石組溝SD335の層相断面図と試料採取位置　1：20

構造化して示した（Ph.85左から３列目）。

結　果　分析結果をPh.85に示す。各画像については前項で示したとおりである。画像の最右列は、軟X線画像の上に堆積構造の解釈線を記載した。図の右側には、地質学的な層区分と、考古学的な層区分の見解（以下、層記述という）を記載した。

今回の分析の結果、堆積環境は１）石組溝機能以前の扇状地砂礫堆積物（Ph.85層記述１）、２）石組機能時の水成堆積物（Ph.85層記述２～11・13）、３）浚渫と考えられる溝内の遺構（Ph.85層記述12a~12d、13e）、４）溝遺構廃棄に伴う埋土および整地（Ph.85層記述14）の変遷を大きく辿ることがあきらかとなった。また本遺構の堆積物を大きく特徴づけるものとして、地震痕跡（液状化）の存在が挙げられる（Ph.85黄色線）。分析をおこなった堆積物は、軟Ｘ線、Ｘ線CTによる堆積物の構造観察結果、そのほとんどが、初生としてラミナ構造や級化構造をもつ水成堆積物であった。しかし、この液状化効果によって堆積物は分断され、全体として団粒の集積体の様相を呈している。くわえて、この液状化はロード構造や羽状構造、さらに上方への脱水を伴う皿状構造等をあちこちに形成している。この段階で観察されるラミナ構造は、大きな変形を受けている可能性が高い。そのため堆積構造の観察のみで堆積環境を検討することはやや難しいが、あえて推定すると、以下の堆積環境の変遷が考えられる。

第１期（石組溝以前：層記述１）　奈良盆地に形成された扇状地堆積物。堆積物の特徴から扇央付近か。

第２期（石組溝機能時前期：層記述２～11）　平滑ラミナ、斜交ラミナが発達する流水性に富む堆積物。初期には水流の弱い滞水的な環境（層記述２・４）と、通水性に富む環境（層記述３・５）の互層が発達するが、徐々に堆積物の粒子が粗粒化していくことから、溝の流水機能が高まったと考えられる。

第３期（石組溝機能時後期：層記述12・13）　浚渫時と推定される掘り込みがみられる層位より上位の堆積物。堆積構造は不明瞭であるが、全体として級化した砂質堆積物が繰り返し堆積している。液状化の影響がそれほど大きなものでないとするならば、この級化構造は流量の多少を反映している可能性が高く、季節的な雨量の変化や農閑期、農繁期の水利用との関係性も推察される。

第４期（石組溝機能後：層記述14）　中礫から微細粒砂までの淘汰の悪い堆積物。典型的な人為性埋土。埋め立てる工程として堆積物の変化はあるものの、粒子構造としては不均質で不規則である。層上部では、堆積物中の粗粒物質がやや増える傾向があり、整地をおこなっている可能性がある。

地震痕跡について　石組溝埋土に大きく影響を及ぼした液状化の痕跡は、SD335埋土最上位の整地土を砂脈が貫進しており、残念ながら地震の発生時期の特定には至らない。しかし、この地域では、古墳を含めた近隣遺跡に多数の地震痕跡が発見されており、それらと合わせ、過去の地震災害の実体をあきらかにする重要な資料であることに間違いはない。今後も継続して注目していく必要がある。

第Ⅶ章　考　　察

第１節　土　　器

Ａ　Ａ－３期遺構群の出土土器とその年代

石神遺跡における現行の時期区分は第４次調査以来、調査ごとに暫定的な修正を施しつつ踏襲されてきた。最新案は第21次調査の概要報告で示されたものである。この案では７世紀代の遺構をＡ－１期からＡ－３期の３小期と、Ｂ・Ｃ期とに区分しており、Ａ－３期の遺構群が斉明朝の饗宴施設であると考えられてきた[1)]。

しかし、この枠組に基づく遺構変遷案（以下、旧案とする）は、主として遺構本位で構築されたもので、出土土器の年代的な裏付けを欠いている。本書をなすにあたり、旧案の見直しや出土遺物の検討を重ねた結果、これまでＡ－３期に組み込んでいた遺構のいくつかに関して、その年代に疑義が生じることとなった。それが石組溝SD335・435と、井戸SE800である。旧案における遺構の年代観を、改めて見直す必要がある。

そこで本書では、Ａ－３期遺構群の出土土器と、飛鳥地域で出土した既知の土器群とを比較し、前者の年代について再検討をおこなうこととした。この比較検討をふまえた、SD335・435およびSE800の修正年代観に関しては、すでに別稿にて詳しく述べたところである[2)]。本書ではその要点をまとめることで、時期区分を見直すだけでなく、新たな遺跡観の樹立にも寄与したい。なお、以下は旧案の問題点や、Ａ期に属すると考えられてきた遺構の年代観を修正するものであるから、旧案の時期区分（Ａ－１期～Ａ－３期・Ｂ期など）をそのまま用いる。旧案と新案との対応関係は、本章４節に示しておく。

ここではおもに、旧案のＡ期に属するとされたSD335・435、SD365・500（第１・２次）や、SD332、SE800井戸枠内（第３・４次）および水落遺跡貼石周辺出土の土器群と、飛鳥Ⅰ・Ⅱの基準となる土器群とで、土師器杯・須恵器杯の法量を比較しておこう。SD335・435や、SE800井戸枠内の層序[3)]と出土土器に関しては、本書第Ⅳ章４節および第Ⅴ章１節を適宜参照されたい。また、水落遺跡貼石周辺出土の土器群については、近年の再検討をふまえ、出土層位があきらかな資料のみを比較検討の対象とした。

対比に用いるのは①山田寺下層SD619および整地土の土器群（『山田寺報告』2002年）、②甘樫丘東麓遺跡SX037出土の土器群（『藤原概報25』1995年）、③飛鳥池遺跡灰緑色粘砂層出土の土器群（『飛鳥池報告』2022年）、④甘樫丘東麓遺跡SK184出土の土器群（『紀要2010』）、⑤坂田寺SG100出土の土器群（『紀要2018』）、⑥石神遺跡Ｂ期整地土出土の土器群（『紀要2018』）である。①～④は飛鳥Ⅰとして報告されたものだが、このうち③・④は飛鳥Ⅰの最新相にあたり、⑤は

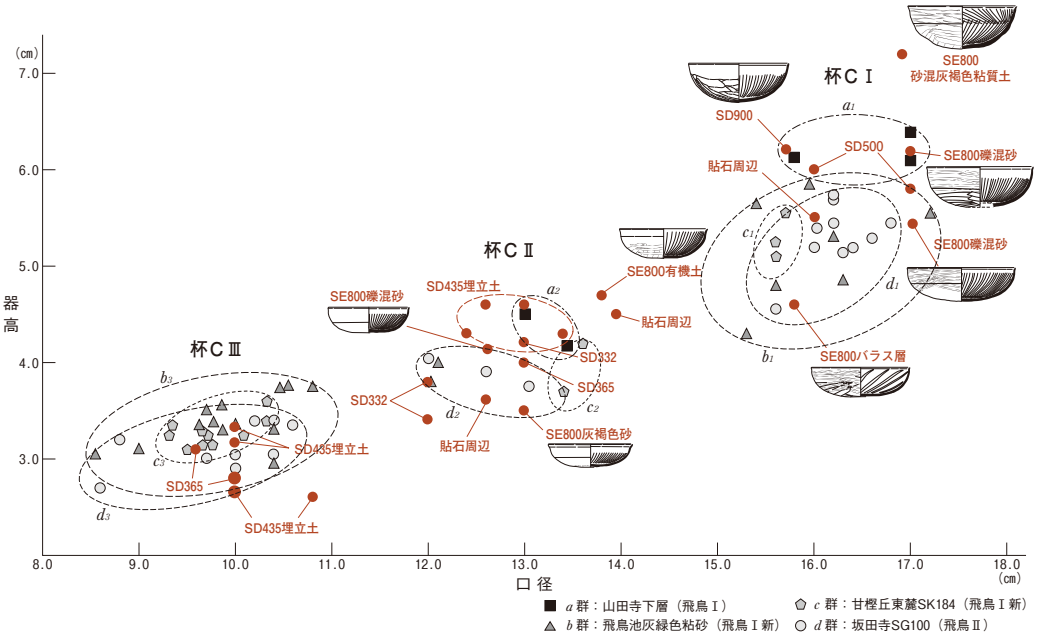


Fig. 153　土師器杯Cの口径×器高

飛鳥Ⅱの基準資料で、⑥は飛鳥Ⅳの土器群である。本稿では、③・④の標本が作り出す散布図上のまとまりを「飛鳥Ⅰ新」、⑤のまとまりを「飛鳥Ⅱ」と呼ぶが、両者に顕著な法量差は認められない[4)]。限られた標本同士の計量的比較によると、年代差を識別できるのは①・②と③～⑤の間である。

土師器杯C

Fig.153に土師器杯Cの法量分布を示す。本図の見方を下記に示し、そこから読みとれることを整理しておこう。

A）杯Cはその口径と器高とによって、大・中・小の3群に分かれている。大をCⅠ、中をCⅡ、小をCⅢと呼んでいる。この3群のうち、CⅠの器高には一定のバラツキがあり、深浅の差が生じやすいが、CⅡ・CⅢでは器高のバラツキが小さい。CⅠ・CⅡに関しては、散布図の上方にあるほうが古く、下方のほうが新しい、という傾向を見てとれる。

B）まずCⅠを見ると、SE800井戸枠内出土例は下層から中・上層にかけて、深い方から浅いほうへと順当に並んでいる。井戸廃絶時の砂混灰褐色粘質土から出土したCⅠ（径高指数42.6・残存率83%、以下同）は山田寺下層例よりも深く、より古相を示す。反対にバラス層出土例はかなり浅く（29.1・100%）、坂田寺SG100出土例（飛鳥Ⅱ）のなかでもとくに浅い個体に近い。SD365・500出土例（34.1・46%、37.5・38%）は山田寺下層例と、飛鳥池灰緑色粘砂層例・SG100例との中間に位置している。貼石周辺（灰色粘土）出土例（34.0・23%）は、SG100例とほぼ同じである。

C）次いでCⅡを見ると、このまとまりのなかでもっとも深手なのがSE800含砂礫茶褐色有機質土出土例（34.1・22%）とSD335・435埋立土出土例（32.1～36.5・18～63%）で、山田寺下層例とはほぼ重なり合う。これらよりも浅いのがSD365出土例（30.8・12.5%）と、SD332堆積土出土例（約28～32・12.5～14.0%）で、SG100出土のCⅡに近似している。SE800礫混砂出土例（32.9・60%）はSD335・435埋立土出土例よりやや浅く、SD332出土のCⅡに近似するが、井戸枠内最上層の灰褐色砂出土例（26.9・39%）は飛鳥ⅣのCⅡにあたる。

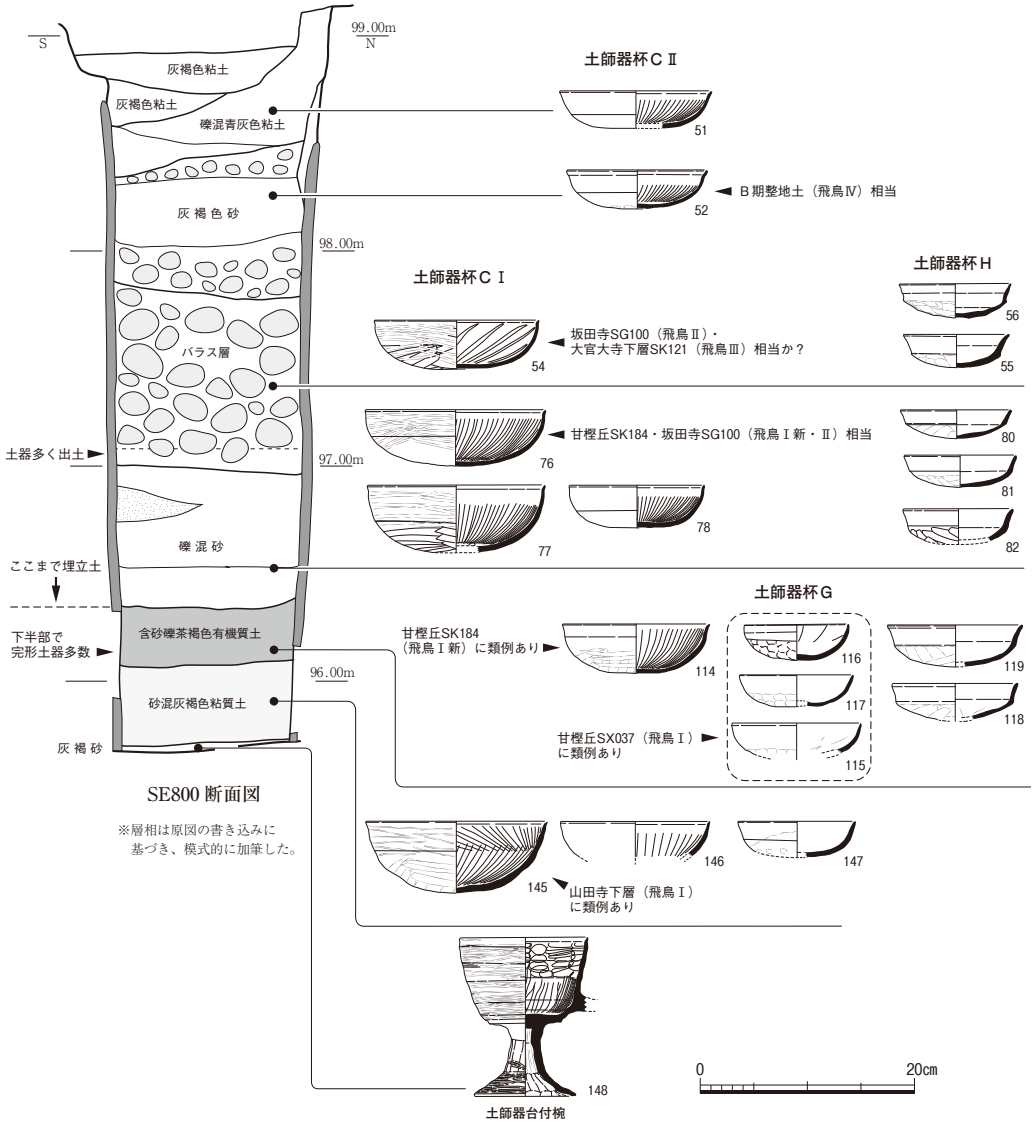


Fig. 154　SE800井戸枠内の層序と土師器食器の変遷

D）CⅢは小口径で器高の差も小さく、土器群間で深浅の差があまり明瞭でない。

以上を総合すると、杯CⅠおよび杯CⅡの深浅から、次のように整理できる。すなわち、

飛鳥Ⅰ　SD335・435埋立土、SE800砂混灰褐色粘質土・含砂礫茶褐有機質土＝基準資料①

飛鳥Ⅰ新・Ⅱ　SD365・500、SD332、SE800礫混砂・バラス層、貼石周辺灰色粘土＝基準資料③～⑤

飛鳥Ⅳ　SE800灰褐色砂＝基準資料⑥

となる。ごくかぎられた出土土器によるものの、石組溝SD335・435は飛鳥Ⅰの時間帯（7世紀前半）でその役割を終え、飛鳥Ⅱまでに埋め立てられた可能性が高い。同じくSE800も、井戸としての役割は飛鳥Ⅰのうちに終えていたとみる。廃絶直後に堆積したとみられる砂混灰褐色粘質土・含砂礫茶褐色有機質土から出土した土師器杯CⅠ・Ⅱは、飛鳥Ⅱではなく、飛鳥Ⅰの類例と法量が一致するからである。一方、その上位にあたる礫混砂からは、飛鳥Ⅱに属する土器が出土する（Fig.154）。礫混砂とその直上のバラス層は埋立土である。つまり斉明朝のとき、

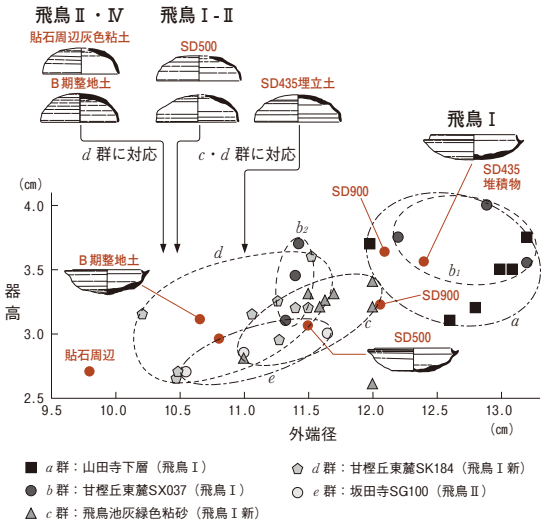


Fig. 155　須恵器杯Ｈの口径×器高

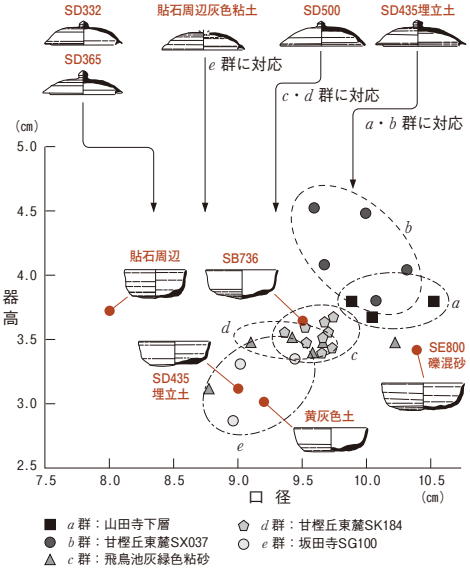


Fig. 156　須恵器杯Ｇの口径×器高

SE800は土砂や瓦礫で半ばまで埋まっていたと考えられる。これらの遺構が、斉明朝のときに機能していたと考えることはできない。

須恵器食器

Fig.155は須恵器杯Ｈ身の、Fig.156は須恵器杯Ｇ身の口径×器高を散布図で示し、それぞれに見合う蓋との関係を整理したものである。各図から読みとれるのは下記Ａ）～Ｆ）のとおり。

Ａ）SD435の機能時堆積層にあたるニコ１層から出土した杯Ｈ身は、その復元外端径が12.4cmで、山田寺（*a* 群）やSX037（b_1群）のレンジ[5]に含まれ、飛鳥Ⅰに属する。これに対し、同じSD435でも埋立土から出土した杯Ｈ蓋はその口径が11.0cmで、こちらは飛鳥池灰緑色粘砂層の一群（*c* 群）や甘樫丘SK184・坂田寺SG100のまとまり（*d*・*e* 群）に一致し、山田寺下層例やSX037例よりもあきらかに小さい。

Ｂ）SD500で出土した須恵器杯Ｈ身は外端径11.5cm・受部径10.5cm（ともに実測値）である。その蓋も外端径10.3cmで、杯身に見合う大きさである。これらは山田寺下層例やSX037例より小さく、SK184例や飛鳥池例に近似している。つまりSD500とSD435埋立土出土の須恵器杯Ｈは、山田寺下層やSX037よりも新しく見える。

Ｃ）杯Ｇは口径のレンジが杯Ｈに比して狭く、その分口径差が生じにくいものの、Fig.156では大きい方から山田寺（*a* 群）・SX037（*b* 群）、飛鳥池（*c* 群）・SK184（*d* 群）、そしてSG100（*e* 群）という５つの群を識別できる。このうち、SD435埋立土から出土した杯Ｇ身はSG100のまとまり（*d* 群）に含まれる。本例は飛鳥Ⅰにではなく、同Ⅱに属しているのがあきらかである。

Ｄ）これに対し、SE800の埋立土下部（「礫混砂」）で出土した杯Ｇ身は口径10.4cm（100%）で、山田寺（*a* 群）やSX037（*b* 群）のそれらに近似する口径を示し、飛鳥Ⅱまでは降らない個体に見える。

Ｅ）杯Ｇ蓋では、SD500で受部径9.3cmの個体が、SD435埋立土で受部径10.0cmの個体が出土している。これらに見合う杯Ｇ身は山田寺下層・甘樫丘SX037（*a*・*b* 群）や飛鳥池灰緑色粘砂・甘樫丘SK184（c ・*d* 群）にある。

以上A）～E）を総合すると、SD335・435の機能時堆積層から出土した須恵器食器は、飛鳥Ⅰに属すると考えられる。これに対し、SD335・435埋立土から出土した杯H蓋や杯G身は、SD365・SD500やSD332等のほか、水落遺跡の貼石直上出土土器と同様に、飛鳥Ⅰ新相から同Ⅱに降る個体を含んでいる。したがって、これらを斉明朝の零細土器群とみなす場合、SD335・435は、斉明朝が始まる前にほぼ埋まっていたことになる。

SD332の設置時期

出土土器の検討によれば、A－3期の石組溝はSD335・435が古く、SD332のほうが新しい。ところが旧案では、両者はA期をつうじて併存していたと考えられてきた。例えば『紀要2009』に示された「石神遺跡遺構変遷図」（80頁）では、SD335・435とSD332とがA－2期からA－3期にかけて同時存在していたことになっている（本章4節Fig.165）。そこで両者の関係を、いくつかの事実に基づいて整理しておこう。・

第1～4次調査で検出した石組溝には、SD334・SD335・SD435という配水系αと、SD330・SD331・SD332という配水系βとの2つがある。両系統の石組溝が同時存在したか、それとも一方が古く他方が新しいという前後関係にあったかは、その交差点が昭和11年の発掘範囲に含まれるためあきらかにできない。ただし、下記の状況証拠から、αが古くβが新しいと考えるのが自然である。

① 配水系αと同βとの間には底石の有無や側石の積み方に工法上のちがいがあり、少なくとも設置の時期が異なると考えられる。

② 配水系αはSD334からSD435にかけて、その側石がほぼ完存していたのに対し、配水系βではSD332のほぼ全区間で、側石が抜き取られており、その埋土のみが帯状に残存していた。

③ 配水系αは黄灰色土＝整地土Aに覆われており、飛鳥Ⅱの土器が出土したSD365・500の下層に埋没している。

上記のうち②・③より、SD335の側石は整地土AやA－3期の石敷に保護されたためほぼ完存したのに対し、SD332の側石は保護層がなかったため多くが抜き取られた[6]と考えられる。したがって、①～③を総合すると配水系αが古く、配水系βが新しい、と判断できる。これは出土土器の検討結果と同じ結論である。

SE800の埋立時期

旧案ではSE800が、A－3期の遺構であると考えられてきたが、この点にも疑義が生じている。その出土土器を検討した西口壽生によれば、おもに土師器杯Cの径高指数より、上位から順に灰褐色砂が飛鳥Ⅳ、バラス層が飛鳥Ⅲ、礫混砂が飛鳥Ⅱ（坂田寺SG100）に近く[7]、その下位の含砂礫茶褐色有機質土が飛鳥Ⅰであり、「井戸SE800は飛鳥Ⅰに始まり、飛鳥Ⅲで廃絶し、飛鳥Ⅳに壊されている」（10頁）という[8]。しかし西口は、礫混砂を「人頭大の石が多量に混じる埋立土」（傍点加筆）としている。したがってSE800の埋め立て時期は、礫混砂出土土器の年代で決定することになるから、結果的に坂田寺SG100出土土器の年代に近いという解釈になる[9]。つまり西口の説明でも、SE800の廃絶は飛鳥Ⅲではなく、遅くとも飛鳥Ⅱの時期であったことになる。この場合、この井戸は斉明朝（655-661）までに廃絶し、礫混砂やバラスの投入によって埋没していたというシナリオを考案できた可能性がある。

また西口は、井戸枠内埋土の下部にあたる含砂礫茶褐色有機質土以下を「使用時の堆積土」とするが、調査日誌によればその下部で「完形の土器が投げ込まれた状態で出土」しているこ

とから、この土層も廃絶直後の埋立土であった可能性がある。いずれにせよ、この土層から出土した土器は飛鳥Ⅰに属し、井戸の機能時か、廃絶直後の年代を示していると考えられる。

新案樹立の根拠

ここまでを整理すると、A－3期の建物群（SB860・980・990・1100等）と併存していたのはSD332である。本書で旧案に代わり、新たな年代的枠組を提示するのにはいくつかの理由があるが、SD335とSD332とが併存しないというアイデアが、新案を構想する最初の手がかりとなった。また、詳しくは述べないが、第1次・第2次調査区のSD365・500も、出土土器からは同時期と考えられる。これらの溝はSD335・435よりも層位的に新しく、A－2期以前には遡らない。

SD335・435およびSE800は、いわゆる「饗宴施設」の構成要素から除外すべきである。前者は石田茂作の発掘調査のときから、当地で出土した「噴水塔」（須弥山石・石人像を指す）や、そこで催したとされる「曲水宴」とのかかわりで語られ[10)]、A－3期まで存続していたと信じられてきたが、斉明朝の遺構であるという明確な証拠がない。むしろ出土土器の検討結果をふまえると、斉明朝よりも古い時期に遡る可能性が高い。SD335・435は、旧案ではA－2期以前に位置づけるのが正しい。また、SE800もA－2期以前の井戸で、遅くともA－3期までには廃絶し、投入された土砂で埋め立てられた可能性が高い。この井戸はA－3期建物群よりも古い、と考えるのが穏当であろう。

奈文研では第5次から第8次調査で検出したA－3期の建物群を、調査時から現在にいたるまで、「饗宴施設」の中枢部と考えてきた。この遺跡観の正否は別の機会に問うとして、上述の観点でA期遺構群を再整理すると、斉明朝の前後に対比できるのはA－3期のみであって、A－2期以前はさらに古い時代（640年代）に遡ると考えられる。つまりA期の遺構群は、出土土器の年代と層位的な事実とによって、A－2期以前（7世紀前半）とA－3期（7世紀中頃）とに大別できる。飛鳥Ⅰの時間帯の中では、旧案のA－2期は皇極朝か、それ以前となろう。

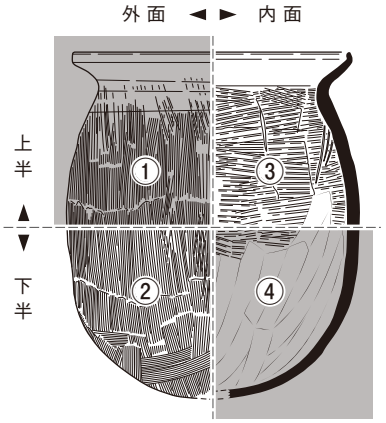
SD335等が機能していた時期を旧案よりも古くすることは、A－3期に位置づけていた他の遺構の年代観にも直接影響をおよぼす。昨年度に実施した飛鳥藤原第214次調査では、石神遺跡南辺の東西塀SA600が、SD334・335に沿って北へと折れていることが判明した。このことはSA600が、SD335等と併存していたことを意味する。したがって、SD335・435が皇極朝以前に遡るとなると、旧案ではA期を通じて存続していたSA600もあわせて古くなり、A－3期まで降らせる理由がなくなる。そしてその結果、この東西塀は斉明朝のときの、南の漏刻地区と北の饗宴施設とを隔てる区画塀ではなくなるものの、SD335等とともに、皇極朝以前に存在した重要施設を囲う大垣の一部として再認識できるようになる。SA600の柱穴が、藤原宮大垣の柱穴と同等の大きさであることを参考にすると、7世紀前半の石神遺跡に、未確認の宮殿が存在していた可能性が浮上してくる。

SA600の年代

このように本書では、A－3期遺構群というまとまりを部分的に解消し、一部の構成要素を古く位置づけることで、新たな遺跡観の樹立を模索することとなった。しかしながら、A－3期建物群（SB860・980・990・1100等）の年代を確定するにはいたらなかった。これらが同時に存在したのはあきらかであるが、出土土器が少ないこともあり、正確な存続期間を絞り込むのは難しい。ここでは旧案を踏襲しつつ、この建物群を斉明朝前後に位置づけておくものの、その見直しはいずれ必要である。本書の続巻では、必ずこの課題に取り組むことになろう。

B　SE800井戸枠内出土の煮炊具

第４次調査で検出したⅠ期の井戸SE800井戸枠内からは、およそ200個体におよぶ土師器煮炊具が出土している。その中にはスス・コゲが付着した個体が多く含まれ、重度の被熱痕跡が残る個体もある。SE800は廃絶後にゴミ捨て穴となり、多量の礫や土砂とともに、使い終えた土師器煮炊具や、空虚となった須恵器壺類が投棄されたと考えられる。以下、井戸枠内から出土した土師器甕が、いかなるコンテクストで廃棄されたかを考察し、SE800埋め立ての契機をあきらかにしておこう。



類型：①＋②＋③＋④
（上図は「HHHK」）

Fig. 157　土師器甕の類型記載法

その胴部内外面に残る器面調整痕の組み合わせを記号化するために、ここでは土師器甕を内面と外面・上半と下半との４つの象限に区分し、外面上半→外面下半→内面上半→内面下半の順で、H（ハケ）・K（ケズリ）・N（ナデ）という３つの記号を組み合わせて表現してみよう。例えばHHHKは、外面の上半・下半がハケ、内面の上半もハケ調整だが、その下半にヘラケズリを施した個体を指す（Fig.157）。このように、４つのアルファベットからなる記号を用いることで、さまざまなパターンの土師器甕を類型化できる。この記述式によれば、いわゆる「大和型」の典型例はHHNN、「河内型」はHHKK、「伊勢型」の典型例はHHHK、そして「近江型」がHKHHとなる[11]。これら４類型の亜型（例えば、HHHNやHHHHなど）も、漏れなく類型化できるのである。

土師器甕の類型化

記号化の原則をこのように定めたうえで、SE800井戸枠内出土の土師器甕を整理すると、Tab.17のとおりとなる。組み合わせ類型がわかる77個体のうち、HHNN型が44個体（57.1％）を占め、最も数が多い。この類型は一部に他地域産とみられる個体を含むものの、多くが大和産と考えられるので、大和盆地南部の在地色を色濃く反映しているといえる。このほかの18類型は１～５個体ずつにすぎないが、伊勢型にあたるHHHK型は３点（95を含む）、近江型の典型であるHKHH型も３点（92を含む）で、これらの亜型とみられるHHNK型が２点、HKHK型が１点（131）、HHHHも４点ある（86・94を含む）。これら５類型が伊勢・伊賀国や近江国などの近国産でよければ、その割合は16.9％となる。このほかにも河内産といわれるHHKK型が２点あり、石神遺跡周辺では類例をあまり見ないNNNK型の長胴甕（98）と、平底のHHXH型（100）１個体ずつのほか、NKNN型（83・89）や、KKNN型（150）も他地域産か。また、礫混じり砂から出土した木葉底の土師器甕（96：HHNN型）は産地を特定できなかったが、東北地方産の可能性がある。他地域産が占める割合は、これら諸類型をあわせて概ね30％となる。

SE800出土の土師器煮炊具204個体のうち、口縁部から胴部にかけての外面にススが付着する個体は135例（66.2％）を占める。また、内面にコゲが付着している個体は40例（19.6％）あり、これらとは別に、内面が全体に褐色を呈する個体も100例（49.0％）ある。後者も煮炊きで付着した、ごく薄いコゲであろう。両者をあわせると、約６割が何かを煮た痕跡をとどめていることになる。コゲの中には飯粒とみられる炭化穀粒が付着した事例もあり、残存脂質分析の結果（第Ⅵ章１節参照）ともよく符合している。このほか、胴部外面に被熱剝離痕をとどめ

重度の使用痕跡

Tab. 17　土師器甕の諸類型と集計結果

外　面	内　面	類　型	度数	%	実測図番号	推定産地
ハケ（一部ナデ）	ナデ	HHNN	44	57.1	57~62/65~69/84/85/87/88/91/93/96(平底)/99/121/122/125/126	大和他地域（96）
		HNNN	5	6.5	119/120	大和／他地域
		NHNN	1	1.3	97	
	ナデ＋ハケ	HNNH	1	1.3		大和ｂ
	ハケ＋ケズリ	HHHK	3	3.9	70/95	伊勢
	ナデ＋ケズリ	HHNK	2	2.6	64/90	
	ハケ＋ケズリ	HHKK	2	2.6		河内
	ナデ＋ハケ	HHNH	2	2.6	127	他地域
	ハケ	HHHH	4	5.2	86/94	近江～山城
	ケズリ＋ハケ	HHKH	1	1.3	128	
ハケ＋ケズリ	ハケ	HKHH	3	3.9	63/92/123	近江・伊賀・山城
	ハケ＋ケズリ	HKHK	1	1.3	130	
	ナデ	HKNN	1	1.3		
ナデ＋ケズリ	ナデ	NKNN	2	2.6	83/89	他地域？
ナデ	ナデ	NNNN	1	1.3	149	大和ｃ？
	ナデ＋ケズリ	NNNK	2	2.6	98	
ケズリ	ナデ	KKNN	1	1.3	150	
	タタキ	HNNT	1	1.3	100	他地域

H：ハケメ、N：ナデ、K：ケズリ、T：タタキ

た個体が12例あり、胴部下半が熱ストレスで赤変した個体も多い。要するに、SE800出土の土師器煮炊具は炊飯用の堝（なべ）として用いられ、その後消耗して廃棄されたものであったと推定できる。また、煮炊具のほとんどは井戸底からではなく、廃絶直後の堆積物や埋立土からの出土であるから、埋立時に瓦礫や土砂とともに投入されたゴミであったことがわかる。SE800埋め立ての契機を考えるとき、以上の事実は重要である。そしてそのうえで、これら煮炊具に少量の他地域産が含まれることは、およそ次のように解釈できる。

出土量の少なさから考えて、SE800出土の伊勢型や近江型が、飛鳥での需要を満たすために供給された煮炊具であったとは考えにくい。これらは伊勢または近江・伊賀と、飛鳥・藤原地域とを往来する人びとが、その短い旅路での炊事用に携行していたものであり、行き着いた飛鳥で偶々廃棄されたものである。郷里からみやこまでの往路で用いるのは、むろん彼らの地元で使われていた煮炊具であったにちがいない。このことから想起されるのは、『日本書紀』孝徳紀に見える旧俗改廃の詔である。

路傍の炊飯と役民

大化２年３月の詔において、孝徳天皇は薄葬と旧俗の改廃とを宣言した。全部で12段からなる「悪しき旧俗」の中に、旅する役民が巻き込まれたさまざまなトラブルが垣間見える。その８段目は、故郷への帰路で斃死した役民の友伴に祓除を強要し、財物を奪うことだが、10段目・11段目は役民たちが路傍で炊飯をすることによって生じる強請の話になっている。ここでその部分を抜粋しておこう。

> 復、役はるる民有りて、路頭に炊き飯む。是に、路頭の家、乃ち謂ひて曰はく、「何の故にか情の任に余路に炊き飯む」といひて、強に祓除せしむ。復、百姓有り、他に就きて甑を借りて炊き飯む。其の甑、物に触れて覆る。是に、甑の主、乃ち祓除せしむ。此等の如き類、愚俗の染へる所なり。今悉くに除断めて、復せしむること勿れ。
>
> （坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野 晋校注『日本書紀』下、岩波書店）

10段目に見える役民が、路傍での炊飯に土師器煮炊具を用いていたならば、彼らはみやこまでの旅に、炊飯用のそれらを携行していたはずである。そしてその土師器甕は、往路の終着点である飛鳥や藤原の地で廃棄されることもありえた。このように考えると、古代宮都で出土する他国産の土師器甕で、スス・コゲが付着し、被熱痕跡が著しい個体は、そうした役民が故郷から携行してきたものを含む可能性がある。なお、SE800例は7世紀前半から中頃にかけての土器群であるから、孝徳天皇の旧俗改廃令とはほぼ同時代のものである。

宮都造営に従事した役民の土器といえば、平城宮下層SD1900Aから出土した土師器煮炊具の一群がよく知られている。これらには小形の甕Aと長胴の甕Cとがあり、前者はスス・コゲの付着や被熱痕跡が目立つという点で、SE800出土の煮炊具によく似ている。その報告では蛍光X線分析の結果に基づき、土師器を第1群土器と第2群土器とに分けており、後者は「滋賀県琵琶湖周辺や京都府南部の諸遺跡から多量に出土する土器と形態・製作手法をおなじくするもの」で、煮炊用土器の大部分を占めている（91頁）という[12]。そしてそのうえで、「本遺構出土土器は平城宮造営に従事した諸国役民の使用した土器とも考えうる余地を残している」と述べている。この言い回しは慎重だが、宮都の造営時に埋め立てた遺構や整地土から出土した、他国産の煮炊具の一群は、その宮都造営に従事した役民の土器であったと考えられるわけである。そして平城宮SD1900Aの場合、その役民たちはおそらく、近江や山城の出身者が主であったと想定することになろう。藤原宮下層SD1901A出土の土器群[13]も、同様に解釈しうる煮炊具が含まれている可能性がある。

井戸埋立の契機

最後に、SE800がゴミ捨て穴と化した背景について考えておこう。前項で述べたように、この井戸の廃絶時堆積土からは飛鳥Ⅰの土器が出土しているので、機能時は7世紀前半と推定できる。井戸はその第2四半期には用いられなくなっており、ゴミや土砂が投入される縦坑となった。出土土器の年代観からは、その埋め立ては一度にではなく、徐々に進んだようだが、これはゴミや土砂の投棄が数次におよんだことを意味する。つまりおそらく、SE800が廃絶したのは、この井戸を構成要素とする施設群が使われなくなり、廃墟と化したときである。そして井戸を埋め立てたのは、この場所の再開発に伴う改作時であったと考えればよい[14]。今は旧案のA－3期を想定しておこう。

ここまでを相互に関連づけると、石神遺跡の再開発に徴発された役民らが、使い込んで消耗した土師器甕を、廃絶後のSE800に投棄していたと考えうる。また他地域産の甕は、役民らが故郷から持ち込んだものであろう。大多数を占めているHHNN型（推定大和産）の一群は、A－3期の改作に従事した役民らが在役中に使用し廃棄したものであったとすれば、この類型が半数以上を占めている状況も説明できる[15]。結局、SE800はA－3期の井戸ではなく、A－3期（新案ではⅡ期）の大改作に先立つ整地で埋め立てられた古井戸であったと考えられるのである。その埋没コンテクストをこのように復元すると、出土土器の年代から、SE800を古く位置づけることともよく整合するはずである。

1）既往の概要報告（『藤原概報17』～『同19』、『同21』～『同24』）では、その冒頭でA期＝斉明朝（7世紀中頃）、B期＝天武朝（7世紀後半）、C期＝藤原宮期（7世紀末～8世紀初頭）と、時期区分を大まかに説明している場合が多い。このためA－1・A－2期も、A－3期と同じく斉明朝の時期に含まれるような印象を与えている。ただし第21次調査の概要報告によれば、

A－１期には瓦葺建物など、「少なくともA2・３期とは性格の異なる施設が存在した」が、A－２期にはこれを廃し、これに続くA－３期には長廊状建物で囲まれた大型建物群が饗宴施設として整備されたという（『紀要2009』83頁右段）。このときの「まとめ」は、A－２期から饗宴施設とすべきかをあきらかにしていないが、いずれにせよA期の前半は斉明朝よりも古いと考えたようである。

2）森川 実「石神遺跡A期遺構群の出土土器とその年代」『奈文研論叢』４、2024年。

3）SE800井戸枠内における層序や調査の経過、および各層の解釈については、前掲註２）論文を参照されたい。

4）本節で試みる計量的比較の目的は、石神遺跡A期遺構群出土土器の中で、新旧二群を識別することである。こうした目的のもと、本稿では③～⑤と、①・②とが計量的に区別できることを説いたが、これはかぎられた標本に基づいて、計量的特性を整理したひとつの結果にすぎない。また、③・④と⑤とを計量的に識別するためには、各資料の質・量がなお不十分であることも付言しておく。

5）Fig.155ではSX037出土の須恵器杯Ｈ身について、外端径が12.0～13.0㎝強のb_1群と、11.0～11.5㎝のb_2群とを区別することにした。これはこの土器群の杯Ｈに、大きさのバラツキがあることを意味する。

6）第４次調査の概要報告では、「石組溝SD332の底石や掘立柱建物の掘形底面の標高からみると、当初の生活面は抜き取られた石組溝側石分の高さだけ高く、0.5～0.6ｍの盛土整地が行われていたことが想定できる。このように、A期の造成および改造にあたって大規模な盛土整地が行われたことが確認でき、この時期の造営がはなはだ大規模なものであったことが想定できる。」（『藤原概報16』、51頁）と述べている。この記事からは、SD332がA期の造成後に構築されたことが読みとれるが、SD335・435はこのときの造成で、A期整地土によって埋没したことも想起できよう。

7）西口によれば、３層で出土した土師器杯Ｃの径高指数は31～32で、杯ＣⅠの底部を削らない点でも坂田寺SG100（飛鳥Ⅱ）に近い内容とする。径高指数のレンジが31～32というのは、坂田寺SG100の平均値（32.7±1.8、標本平均±１σ）に近く、この点では同じ結論になる。

8）西口壽生「石神遺跡SE800出土土器の再検討」『年報1997－Ⅰ』。

9）水落遺跡の報告書である『藤原報告Ⅳ』（1995）のなかで、SB200貼石遺構周辺出土の土器を「飛鳥Ⅱの末」（650年代から660年代）に位置づけた西口の説明にしたがうとき、斉明朝の土器を含む可能性がある層準は、「礫混砂」（西口のいう「飛鳥Ⅱ」＝SG100の土器群）から「井戸バラス」（同じく「飛鳥Ⅲ」）にかけてとなり、いずれにしても埋立土の中である。

10）石田茂作「飛鳥の須弥山遺跡」『飛鳥随想』1972年。

11）旧国単位での土師器甕の諸類型は、小笠原好彦「近畿地域の七・八世紀の土師器とその流通」『考古学研究』27－２、1980年を参照。しかし現在、旧国名を冠して「○○型甕」と呼ぶことは少なくなった。それはそう呼ばれる特定型式の甕が、旧国の地理的範囲を越えて分布しているからである。例えば「近江型」は近江国（滋賀県）だけでなく、その南側の伊賀国とその周縁部や、伊勢国の北勢地域にも分布している。

12）奈文研『平城宮発掘調査報告Ⅸ』1978年。

13）奈文研「藤原宮第20次（大極殿北方）の調査」『藤原概報８』1978年。

14）井戸の廃絶から埋め立てまでには、一定の時間が経過していた可能性が高い。この間に堆積したのが含砂礫茶褐色有機質土である。この有機質土が堆積する間、SE800は古井戸として開口していたと考えられる。

15）使用時に絶えず熱ストレスを受ける土師器甕はライフ・サイクルが短く、頻繁な交換が必要であったと考えられる。

第２節　瓦

第１～４次調査区出土瓦は主として、①これまでに石神遺跡でのみ出土しているか石神遺跡での出土が多くを占める瓦[1)]と、②飛鳥寺所用瓦からなる。以下、①については軒丸瓦に対象を絞り、これにあたる石神Ａ・Ｂ・Ｄ・Ｅ（角端点珠式）と石神Ｆ（弁端切り込み式）の年代観および来歴を、②については来歴を検討する。文中で触れる型式名は、特に断らないかぎり『古代瓦研究Ⅰ』[2)]に準じ、それらの瓦当文様をFig.158[3)]に示す。

Ａ　石神Ａ・Ｂ・Ｄ・Ｅの生産年代

石神Ａ・Ｂ・Ｄ・Ｅの年代の根拠

はじめに、石神Ａ・Ｂ・Ｄ・Ｅの生産年代を、瓦当文様および製作技法から検討する。また、他遺跡出土の角端点珠式の年代観とも照らし合わせ、それぞれの理解が整合するか確認する。

瓦当文様からみた年代　石神Ａ・Ｂ・Ｄ・Ｅが属する角端点珠式は、文様構成の単純さゆえ、明確な根拠に基づいて組列を組むことが難しい。この点を踏まえ、ここでは角端点珠式の変遷における石神Ａ・Ｂ・Ｄ・Ｅの相対的な位置づけに踏み込むのではなく、１様式としての角端点珠式がもつ年代幅を示すことにする。

先学が指摘するように、角端点珠式の祖型は、弁端点珠式の系譜に属する飛鳥寺Ⅶに求められる可能性が高い[4)]。その根拠は、飛鳥寺Ⅶの弁端が角張るとともに蓮子が１＋４である点や、蓮弁・蓮子の数を同じくする飛鳥寺Ⅷよりも蓮弁が均整に割り付けられている点が、角端点珠式に通ずることにある[5)]。そして、弁端の形状や弁数が飛鳥寺Ⅶに近く、中房の形状が角端点珠式に似る岡燈明田遺跡出土例を経て、８弁を均等に割り付け中房が低い半球状を呈する角端点珠式が成立したと考えるのが、現時点では自然である[6)]。上限の実年代については、包含層出土の岡燈明田遺跡出土例からは知り得ず、飛鳥寺Ⅶやこれに類する飛鳥寺Ⅷの生産年代、すなわち飛鳥寺造営期間である６世紀末から７世紀初頭とするのが限界である。

瓦当文様からみた年代の下限はどうか。640年前後には単弁蓮華文軒丸瓦の吉備池廃寺創建瓦や山田寺創建瓦が登場し（後述）、大和における瓦造りは最初の画期を迎える[7)]。「瓦当文様をはじめとする瓦の構成要素に流行があり、年代差を鋭敏に反映する[8)]」という前提から、角端点珠式の盛行期間は上記の単弁蓮華文軒丸瓦の登場までにおさまると考えられる。ただし、角端点珠式に属する個々の型式の生産期間が640年頃以降に降らないとまでは断言できない。

製作技法からみた年代　瓦当文様という点では、弁端点珠式、すなわち「星組」の瓦である飛鳥寺Ⅲの系譜から派生した角端点珠式であるが、奥山廃寺をはじめとする他遺跡出土の同文異笵瓦の検討から、角端点珠式の製作技法には複数系統の特徴が認められ、その背景として、当該様式の生産時には造瓦集団の拡大や再編が進んでいたことが指摘されている[9)]。

今回、石神Ａ・Ｂ・Ｄ・Ｅについても、上記の理解を追認した（Tab.18）。例えば丸瓦先端の加工については、片枘加工・凸面側ケズリ・無加工とするもののほか、少なくとも凹面側を斜めに削るもの（凸面側の加工の有無は把握できない）があり、石神Ａ・Ｄにはこのうち２種類以上の技法が認められる。片枘加工は、飛鳥寺造営に携わった「星組」瓦工やその系譜をひく瓦工に特徴的な技法であるが、その他の技法は少なくとも飛鳥寺造営時の「星組」にはみられ

ない。丸瓦の接合技法については、石神Ａの一部に丸瓦凹面側に支持ナデツケを施したのち内面接合粘土を貼るものがあるが、それ以外は支持ナデツケを施さない。支持ナデツケは、飛鳥寺の「星組」瓦にはない特徴である。瓦当裏面については、飛鳥寺Ⅲのように中高となるものと平坦なものがあるが、いずれも「星組」系の瓦に典型的な回転痕跡は認められない。

ここで、瓦当文様は弁端点珠式ないしその派生型式の系譜にありながら、製作技法の面で「星組」祖型の飛鳥寺Ⅲにはみられない特徴をもち、かつその特徴が石神Ａ・Ｂ・Ｄ・Ｅと共通する他様式に注目し、石神Ａ・Ｂ・Ｄ・Ｅの生産年代を類推する。最も良好な比較対象は、斑鳩地域の飛鳥時代中期の瓦[10]であろう。これまでに、斑鳩寺（若草伽藍）所用の斑鳩寺6D・7Aが丸瓦先端凹面側を斜めに削ること、斑鳩寺6C・6D・7Aの一部に接合部の丸瓦凹面沿いに支持ナデツケを施す個体があること、斑鳩寺６・７に属する大半の個体が瓦当裏面を回転によらないナデ調整によって仕上げることが判明している。また、法輪寺所用で斑鳩寺にも搬入された斑鳩寺8Bは、瓦当裏面下縁を突出させる。これらの斑鳩地域の瓦には、丸瓦先端にキザミを施す個体や瓦当裏面を回転ナデにより仕上げる個体があるなど、厳密には石神遺跡出土の角端点珠式と異なる要素も認められるが、共通する要素の多さに鑑みて、両者の生産時期は大きく違わないものと推測する。

上記の斑鳩地域の瓦のうち、斑鳩寺6C・6Dは若草伽藍の塔所用であった可能性が指摘されているものの、出土点数や分布状況からはその帰属を限定しがたい[11]。また、両型式とも他遺跡から同笵品が出土していないため、他遺跡の資料と照合して実年代にかんする手がかりを得ることはできない。いっぽう、斑鳩寺7Aは中心伽藍の北方で一定数がまとまって出土しており、同様の出土傾向を示す軒平瓦の斑鳩寺213A・213Bとのセット関係が想定されている[12]。213Bの押し型は、若草伽藍での使用後に吉備池廃寺創建瓦（吉備池廃寺ＩＡ・ＩＢ）に用いられるが、吉備池廃寺は伽藍規模からみて舒明11年（639）前後に造営を開始したとみられる百済大寺の最有力候補であることから[13]、213Bやそれと組み合う7Aの生産は、639年頃には終盤にあったことが推察される。斑鳩寺8Bについても、瓦当文様および組み合う可能性のある軒平瓦から、吉備池廃寺創建をやや前後する頃とされている[14]。以上より、製作技法からみても、640年前後という数字が石神Ａ・Ｂ・Ｄ・Ｅの生産年代の下限にあたる可能性が高い。

生産地における角端点珠式とその推定年代　石神Ａ・Ｂ・Ｄ・Ｅの生産地は不明であるが、生産地が判明している他の角端点珠式から、生産時期を類推することは可能であろう。角端点珠式（鬼瓦を含む）が発見された生産地遺跡としては、天神山瓦窯、末ノ奥窯、横井窯跡群、今池瓦窯、楠葉平野山窯が知られている。ただし、前四者は遺構から遊離した状態で出土したか表採によるもので、遺構にともなって出土した例は楠葉平野山窯（以下、平野山窯）に限られる。

楠葉平野山窯の様相　平野山窯では、四天王寺第１期の軒丸瓦NMIa、角端点珠式軒丸瓦の奥山廃寺ⅡＤ、四天王寺第２期の軒平瓦NHIIa2がそれぞれ異なる窯の最終床面や窯体付近から、四天王寺NHIIa2とのセット関係が想定される四天王寺第２期の軒丸瓦NMIIa1が灰原から出土しており、瓦当文様の相対的な前後関係から四天王寺NMIa→奥山廃寺ⅡＤ→四天王寺NMIIa1・NHIIa2の順に焼成されたと考えられている[15]。１・８号窯を除き、各窯にともなう整地層や灰原の範囲、層数、重複関係などが不明であるため、各窯の操業開始時期や操業期間の前後ないし併行関係は知りえないが、各型式の焼成開始順序は上記のとおりであろう。

石神Ａ・Ｂ・Ｄ・Ｅは、胎土や焼成の特徴が奥山廃寺ⅡＤと異なるうえ、これまでに平野山窯で出土していないことから、当該窯産でない可能性が高い。しかし、いずれも外縁が直立し上面が平坦である点や、石神Ａ・Ｂ・Ｅには外縁と弁区の間に幅0.7㎜を超える平坦面がある点が、角端点珠式の中でも相対的に奥山廃寺ⅡＤに近く、奥山廃寺ⅡＤとさほど変わらない時期に生産されたと推測できる。そこで、四天王寺第１・２期の軒瓦や関連する出土物から、奥山廃寺ⅡＤの生産年代がどれほど絞り込めるか検討する。

① 四天王寺NMIaは、斑鳩寺（若草伽藍）の金堂完成後（直後かどうかは不明）に、金堂所用である斑鳩寺4Aの笵を平野山窯に移して生産された。若草伽藍の金堂完成年については、７世紀第１四半期のなかで、根拠とする仏像の光背銘や様式、古文献などの解釈により、さまざまな見解が提示されているが[16]、遺構や出土土器からは、いずれの蓋然性が高いかを判断するに足る情報が得られていない[17]。

② 四天王寺NMIIa1は、吉備池廃寺創建瓦である吉備池廃寺ＩＡの笵を平野山窯に移して生産された。上述のとおり、吉備池廃寺は百済大寺の最有力候補であり、吉備池廃寺ＩＡの瓦当文様が舒明13年（641）頃を上限とする山田寺創建瓦にわずかに先行する特徴を有すること[18]も、それを根拠づける。よって、吉備池廃寺ＩＡの笵は639年より後に平野山窯に移された蓋然性が高い[19]。

③ 平野山窯では、須恵器窯１基と瓦陶兼業窯７基が確認されている。大半の窯体が未完掘であるうえ、灰原出土資料の多くが未報告であるため、当該地における須恵器生産の全容は不明であるが、各窯の最終操業時の焼成物を主とした一部の既報告資料（四天王寺NMIa・NHIIa2のそれぞれと３号窯・７号窯の最終操業面で共伴した須恵器を含む）からは、窯が異なっても須恵器に型式差が認められないことが指摘されている[20]。出土状況やこの指摘から、既報告の須恵器型式の下限年代が平野山窯操業期間の下限を示すと判断でき、必然的に奥山廃寺ⅡＤの生産期間は当該須恵器型式の下限年代におさまることがわかる。ただし、上記須恵器の実年代については、７世紀前半のなかで見解が分かれており、現時点ではいずれの蓋然性が高いかを判断しがたい[21]。

以上より、奥山廃寺ⅡＤについては、その生産開始が若草伽藍金堂完成を遡ることはなく、その生産終了は平野山窯最終操業期の須恵器の下限年代におさまることが確実である。また、確証は得られないが、当該型式の生産のピークは、平野山窯への吉備池廃寺ＩＡの瓦笵の移動前であったと推測できる。将来的に平野山各窯の灰原出土須恵器の整理が進めば、奥山廃寺ⅡＤに近似する石神Ａ・Ｂ・Ｄ・Ｅの実年代についても、より具体的な数字が与えられよう。

消費地における角端点珠式とその推定年代　詳しくは後述するが、石神Ａ・Ｂ・Ｄ・Ｅの出土状況からは、当該型式が石神遺跡内の建物に葺かれていたとは考えられず、それらの生産年代を絞り込むことは難しい。そこで、発掘調査により角端点珠式が一定数出土している消費地遺跡のうち、生産時期の検討が比較的進んでいる奥山廃寺を取り上げ、同遺跡出土の角端点珠式（奥山廃寺Ⅱ）の年代観を確認する。ただし結論から述べると、奥山廃寺Ⅱの生産年代は、塔の創建時期および建て替えの有無、堂塔所用瓦の比定など、今後の調査をまたねば解決しえない問題に左右されるため、以下では発掘調査の所見[22]を整理したうえ、当該型式の年代に関する仮説や課題を記し、石神Ａ・Ｂ・Ｄ・Ｅの年代を考えるうえでの参考とする。

奥山廃寺の様相

まず発掘調査の所見をまとめる。第一に、金堂と塔はともに基壇を１度改修しているが、それぞれの造営時期・基壇改修時期の前後ないし併行関係は、遺構や土層の重複関係からは判断できない。第二に、塔基壇下では２期分の掘込地業を検出しており、塔基壇にともなうのは上層の地業である。下層の地業が塔の計画変更により不要となったものか、何らかの前身建物にともなうものであったかは不明である。第三に、点数が多い中心伽藍出土軒瓦は、軒丸瓦の山田寺式（奥山廃寺Ⅷ）、角端点珠式、船橋廃寺式（同Ⅳ）、重弧文軒平瓦である。ただし、調査範囲が限られているうえ、それらはいずれも金堂・塔・回廊とその周辺から出土していること、特に金堂と塔の距離は基壇縁間で11mに満たないことなどから、各瓦の帰属は特定しがたい。第四に、塔基壇土から軒丸瓦の奥山廃寺ⅡＣ・ⅣＡ・ⅣＣ・Ⅵ（種不明）や鬼瓦Ａ、多量の丸瓦・平瓦、７世紀後半の土器が出土したと報告されている。しかし、調査の整理が未完のため、これらが基壇のどの部位から出土したかという点や、７世紀後半とされる土器の量およびそれが塔廃絶後の混入である可能性の如何、出土瓦の本来の帰属などは不明である。

先学においては、２つの仮説が提示されている。第一は、塔が金堂よりも大幅に遅れて創建されたとみる説[23]で、軒丸瓦の奥山廃寺Ⅱ・奥山廃寺Ⅳ（船橋廃寺式）の各種を金堂創建瓦、奥山廃寺Ⅷ（山田寺式）と重弧文軒平瓦を塔創建瓦と考える。つまり、ⅡとⅣとの間に時期差をほぼ想定しない。第二は、塔の建て替えを想定し、奥山廃寺Ⅷの時期に金堂の改修および塔の建て替えを実施したとみる説である[24]。この説では、瓦当径の違いや瓦の分布から、奥山廃寺ⅡＢを金堂創建瓦、ⅡＡ・ⅡＣ・ⅡＤ・ⅡＥを中門・回廊創建瓦、蓮子数が共通するⅡＦ・ⅣＢと、ⅣＡを塔創建瓦と推定する。また、ⅡＦをⅡの中で最新のものとし、ⅣＡ・ⅣＢの年代観から奥山廃寺ⅡＦを630年頃とする。必然的に、ⅡＡ～ⅡＥはこれより古い年代を得る。

上記の２説は、奥山廃寺Ⅱと奥山廃寺Ⅳとの間に時期差を想定するか否かという点で理解が異なる。両説の妥当性は将来の調査をまって判断する必要があるが、瓦当文様に関して確実であるのは、ⅡＦとⅣＢの蓮子数が一致する点に限られており、ⅡＡ～ⅡＥとⅣＡ・ⅣＢの前後・併行関係を直接示す手がかりはない。つまり現時点では、奥山廃寺Ⅱの下限年代を広く見積もり、奥山廃寺Ⅳの年代の下限と仮定しておくよりほかない。船橋廃寺式の年代に関してはさまざまな理解があり、概ね吉備池廃寺創建瓦に先行するものの、重弧文軒平瓦とのセット関係が想定できる場合はそれ以降に展開するとの指摘もある[25]。従来、奥山廃寺出土の重弧文軒平瓦は、山田寺式の奥山廃寺Ⅷとのセット関係が想定されてきたが、この指摘にしたがえば、確認されている２型式４種のうち、一部は奥山廃寺Ⅳと組み合う可能性も浮上する[26]。ここでは、奥山廃寺Ⅱの年代の下限が吉備池廃寺の造営開始をやや降る可能性も考慮しておきたい。以上より、奥山廃寺Ⅱおよび関連資料の様相からも、石神Ａ・Ｂ・Ｄ・Ｅの年代の下限は吉備池廃寺の造営開始前後と類推でき、前述の理解と整合する。

小　結　以上より、石神Ａ・Ｂ・Ｄ・Ｅの相対的な位置づけを示すと、直接の系譜関係にある飛鳥寺Ⅶに後出し、また共通する技法で製作された斑鳩地域の飛鳥時代中期の瓦と併行する可能性が高い。さらに奥山廃寺ⅡＤの例から、四天王寺第１期と第２期にはさまれた期間に生産された種が多いと推測できる。実年代のうち、上限は飛鳥寺造営期間の６世紀末から７世紀初頭とせざるをえないが、下限は吉備池廃寺の造営開始とみられる639年前後となる。つまり、生産年代の下限は、広く見積もっても石神遺跡のⅠ期におさまることが確実である。

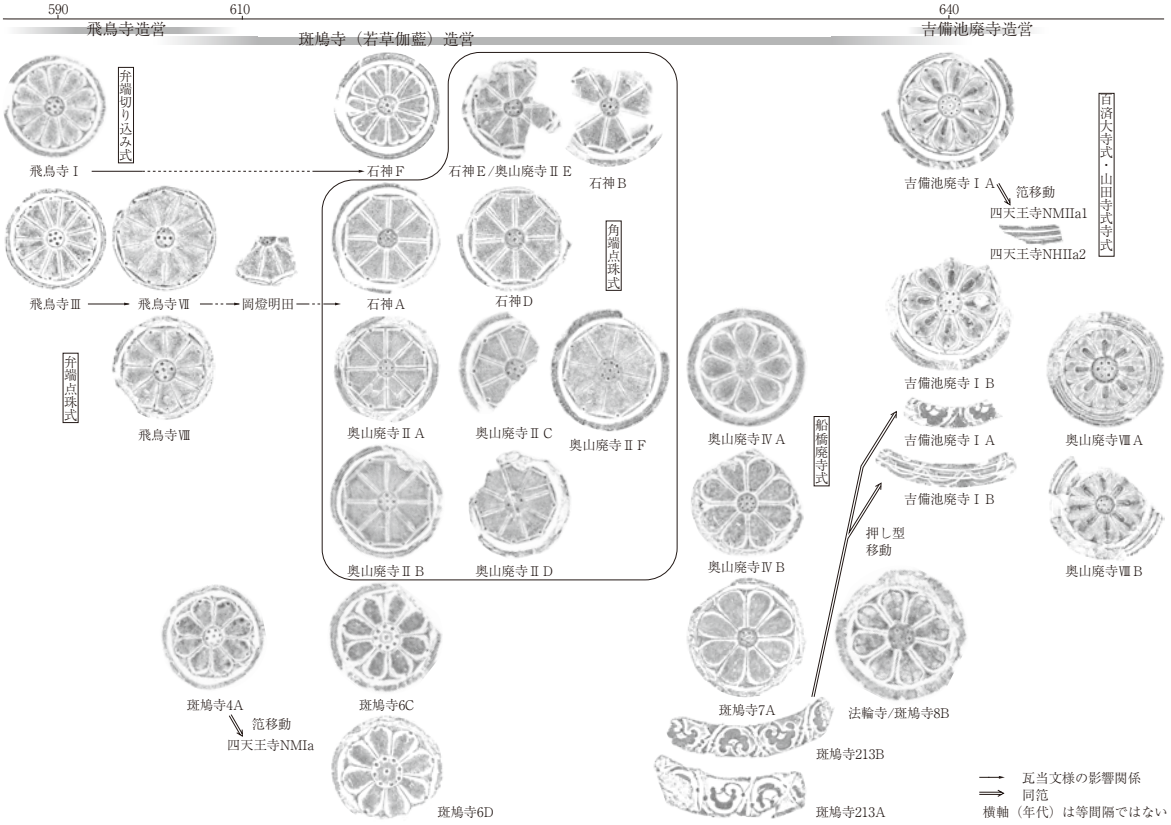


Fig. 158　6世紀末から7世紀代の瓦

Tab. 18　石神A・B・D・E・Fおよび関連軒丸瓦の製作にかかる諸要素

型式名	笵	瓦当断面にみえる瓦当部成形粘土	丸瓦接合部		瓦当裏面		胎土	焼成	色調
			丸瓦先端の加工	支持ナデツケ	形状	調整			内面/外面
石神A	—	層状粘土の境界あり	片枘	一部の個体にあり	平坦	ナデ	やや粗	硬質	灰,青灰/灰,青灰
			無加工	一部の個体にあり	平坦	ナデ	やや粗	やや軟質	灰黄/灰,暗灰
飛鳥寺C	—	—	—	—	平坦	ナデ	やや粗	硬質	赤褐/暗褐
石神B	Bヵ	—	無加工ないし少なくとも凹面側を削る	なし	平坦で下縁が凸	ナデ	やや粗	やや軟質	橙/灰
石神D	—	層状粘土の境界不明瞭	少なくとも凹面側を削る	なし	やや中高	ナデ	極めて粗	硬質	青灰,赤褐/青灰,赤褐
			凸面側ケズリ	なし	—				
			片枘ないし無加工	なし	平坦				
			—	なし	やや中高，下縁に凹凸				
石神E 奥山廃寺ⅡE	Bヵ	層状粘土の境界不明瞭	片枘（凹面側ケズリの可能性ある個体も）	なし	平坦/やや中高	ナデ	精良	硬質	暗青灰/暗青灰
斑鳩寺6C	—	—	古段階：片枘	なし	平坦	回転ナデ	—	硬質多め	—
			新段階：片枘+キザミ目	あり	平坦	ナデ			
斑鳩寺6D	—	—	古段階：凹面側ケズリ	なし	やや中高	回転ナデ	—	硬質多め	—
					平坦	ナデ			
			新段階：凹面側ケズリ+キザミ目	あり	平坦/やや中高	ナデ			
斑鳩寺7A	Bヵ	—	凹面側ケズリ+一部の個体にキザミ目	あり	平坦	ナデ	—	やや軟質多め	—
法輪寺 斑鳩寺8B	—	—	凹面側ケズリ	なし	中央やや窪み下縁が凸	ナデ	—	—	—
奥山廃寺ⅡD	Bヵ	層状粘土の境界不明瞭	無加工ないし少なくとも凹面側を削る	—	平坦	ナデ	やや精良	軟質	灰白/灰白
石神F	—	層状粘土の境界なし	少なくとも凹面側を削る	一部の個体にあり	平坦（下縁に凹凸ある個体も）	ナデ	精良	軟質	灰/灰 橙/灰黄

※　笵の分類は、毛利光俊彦1990「軒丸瓦の製作技法に関する一考察―笵型と枷型―」『畿内と東国の瓦』東京国立博物館に準じる。「ナデ」としたものは回転台不使用。斑鳩寺所用瓦については、毛利光俊彦ほか1992『法隆寺の至宝　瓦』法隆寺昭和資材帳編集委員会、中川あや2007「若草伽藍の軒丸瓦・軒平瓦」『法隆寺若草伽藍跡発掘調査報告』奈文研に、斑鳩寺8Bについては、清水昭博2012『古代日韓造瓦技術の交流史』清文堂に拠る。

B　石神Fの生産年代

石神Fには、①蓮弁が10弁で先端に桜花状の切れ込みをもつ、②中房が低い半球状を呈する、③中房に1＋4の蓮子を置く、④外縁と弁区の間に幅広の平坦面をもつ、⑤丸瓦先端の凹面側をヘラケズリする、⑥丸瓦接合時に支持ナデツケを施す場合がある、⑦瓦当裏面に回転ナデを施さず、下縁にくぼみや突出が生じる場合がある、という特徴がみられる。

石神Fの年代の根拠

瓦当文様は、弁端切り込み式でありながら、弁端点珠式やその派生型式にみられる特徴②～④をあわせもつ（②：岡燈明田、角端点珠式、船橋廃寺式、吉備池廃寺Ⅰなど、③：飛鳥寺Ⅶ、大半の角端点珠式など、④：一部の角端点珠式・船橋廃寺式など）。また製作技法の特徴である⑤～⑦も、前述の斑鳩地域飛鳥時代中期の瓦や石神A・B・D・Eなど、弁端点珠式およびその派生型式と共通する（⑤：斑鳩寺6D・7A、一部の弁端点珠式・角端点珠式・船橋廃寺式など、⑥：斑鳩寺6C・6D・7A、一部の角端点珠式など、⑦一部の角端点珠式・船橋廃寺式など）。以上からあきらかであるが、石神Fは①を除く全ての項目で角端点珠式と共通する特徴を有しており、当該様式と併行する時期、すなわち飛鳥寺造営開始後から吉備池廃寺造営開始前後の期間内に生産された可能性が高い。これまでに、石神A・B・D・Eと同じく石神遺跡南部でのみ出土していることも、これを傍証する（Fig.159）。

C　石神A・B・D・E・Fの来歴

石神A・B・D・E・Fの分布

石神遺跡第1～4次調査区における石神A・B・D・E・Fの分布（Fig.159）や当該型式の年代観を踏まえ、これらの瓦の来歴を検討する。全体として数が少なく傾向の把握は難しいが、石神A・Dは第3次調査区、石神Fは第4次調査区東部に分布のまとまりが認められる。また、種が特定できない角端点珠式は、石神A・D・Fの分布域において密となっている。しかし、これらの分布域と重複ないし近接する範囲に存在したⅠ期ないしⅡ期の掘立柱建物SB745・SB530・SB735・SB520・SB580は、いずれも瓦葺に相応しい構造を有しておらず、上記の瓦が葺かれていたとは考えがたい[27]。また、瓦の年代や遺構の検出状況からみて、何らかの瓦葺建物を解体・削平したのちに、Ⅰ－1期の造営に至った可能性も低い。したがって現時点では、上記の瓦が第1～4次調査区外からもたらされた蓋然性が最も高いといえるだろう。

2024年までに石神遺跡の調査[28]で出土した角端点珠式と石神Fは計82点であるが、その9割が第6次調査区以南から、8割弱が第1～4次調査区から出土していることから、上記型式の分布は石神遺跡の南端に偏っているといえる。また、石神遺跡と飛鳥川に挟まれた範囲では上記型式は出土していない。よって、少なくとも遺跡の中心部や北半、西隣は瓦葺建物の候補地から外してよいだろう。

石神Dや、種不明の角端点珠式が多く出土した第3次調査区南半は、奈良時代以降の流路NR310で一時浸食を受け、その流路も土砂で埋没している。この流路により、一部の瓦が石神遺跡の東方からもたらされた可能性はどうであろうか。まず、少なくとも第1次調査区の東方で実施した飛鳥藤原第209・212次調査では、角端点珠式や石神Fは出土していない。また、NR310は出水時に土砂や人頭大の礫などを押し流す、あるいは堆積させるという扇状地面上の自然流路であったにせよ、流路の範囲から出土した個体に著しい摩耗は認められない。さらに、

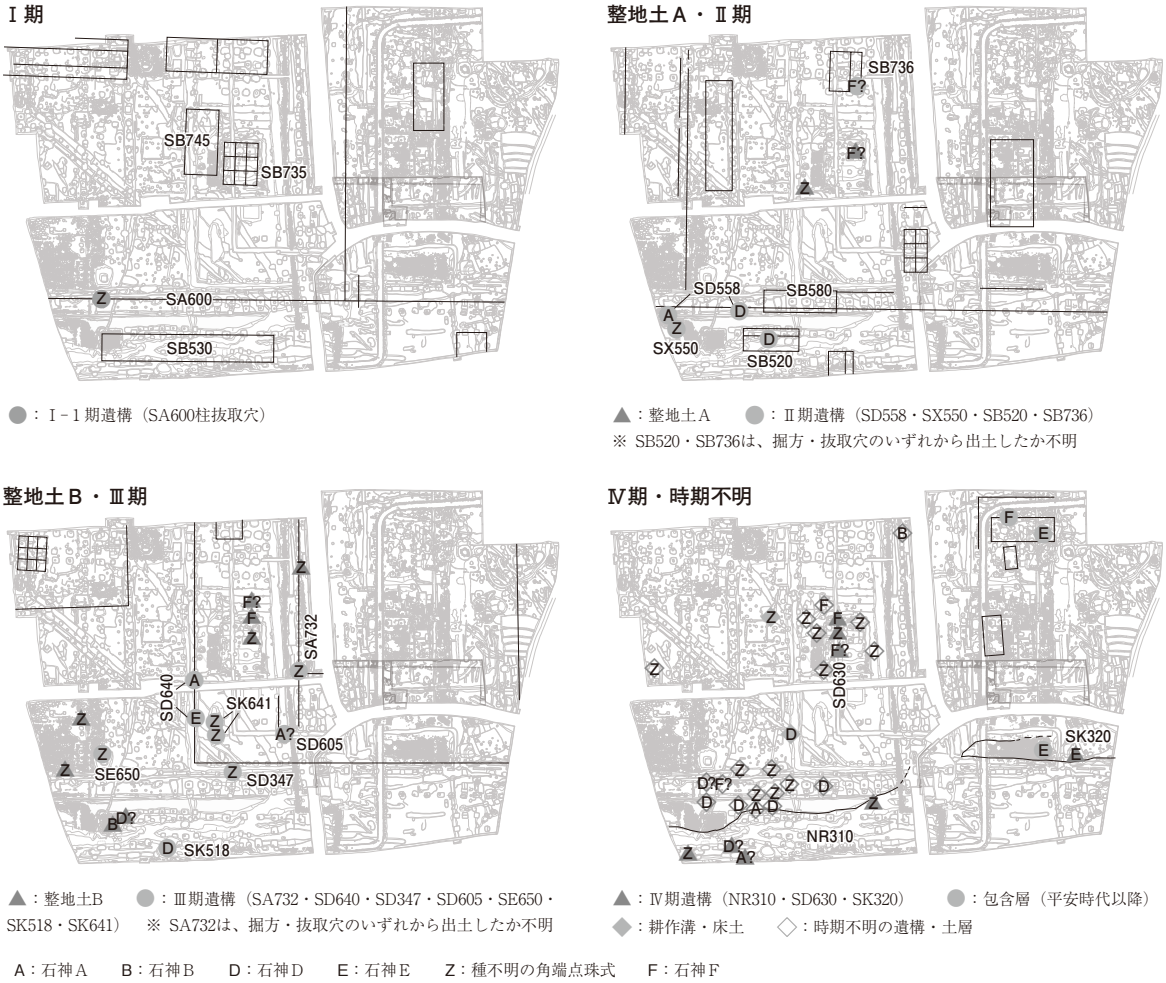


Fig. 159　石神Ａ・Ｂ・Ｄ・Ｅ・Ｆおよび種不明の角端点珠式の分布

NR310の底部の標高は、第１次調査区東端から第３次調査区西端の間でさほど変化しておらず、遺物の溜まり場を生み出す状況ではないが、流路内における瓦の分布にはあきらかな疎密がある。これは、後述の飛鳥寺所用瓦がNR310の範囲内に満遍なく分布する状況と異なる。NR310の営力が瓦の分布に何らかの影響を与えたことは疑いないものの、以上の状況からはNR310出土瓦の多くが確実に石神遺跡の東方からもたらされたとまではいえないだろう。

上記を踏まえると、近傍において瓦葺建物の候補地として残るのは、石神遺跡に南接し、飛鳥寺と水落遺跡に挟まれた未調査地に限られる。西隣の水落遺跡で角端点珠式が１点しか出土していないことの評価が難しいが、この点も含め、将来の調査をまって検証する必要がある。なお、本来であれば石神Ａ・Ｂ・Ｄ・Ｅ・Ｆと組み合う丸瓦・平瓦を抽出し、その分布傾向も踏まえて議論すべきところであるが、この点は別稿にて詳しく述べたい。

Ｄ　飛鳥寺所用瓦の来歴

第１～４次調査区出土瓦のうち、すでに飛鳥寺所用と判明しているもの（軒丸瓦の飛鳥寺Ⅰ・Ⅲ・Ⅵ・Ⅻ、軒平瓦の飛鳥寺ＩＢ・Ⅵ、平瓦の１類A1・４類A2）と、これまでに指摘はないが寺域における分布状況から飛鳥寺所用と考えられるもの（軒平瓦の飛鳥寺Ⅱ）の分布をFig.160に

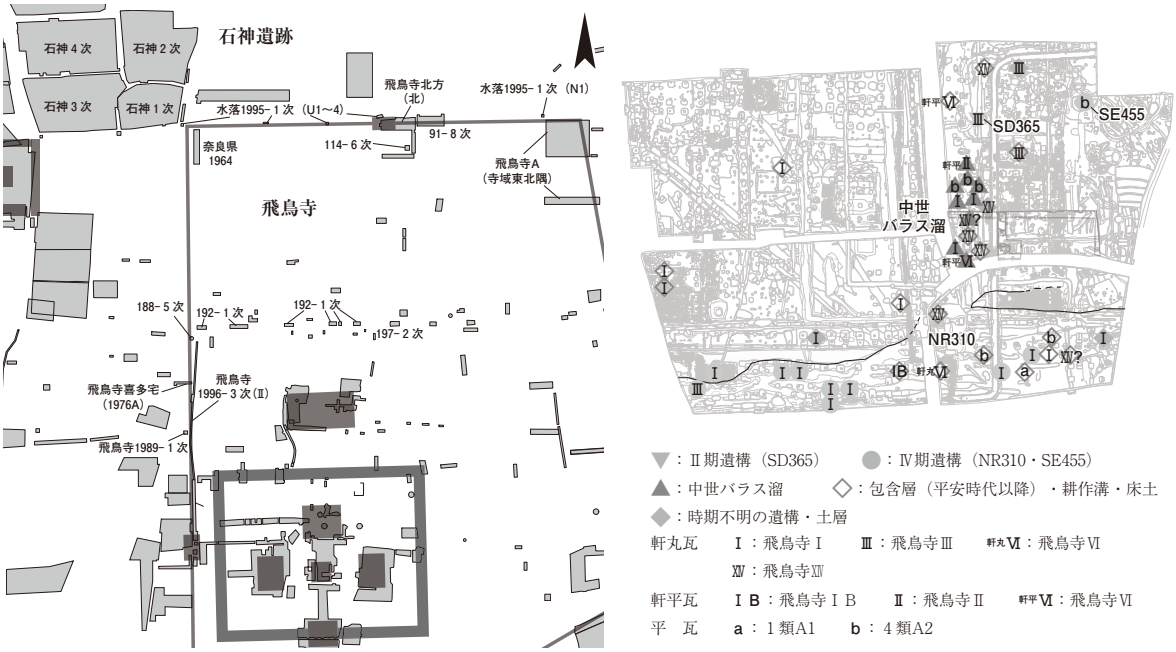


Fig. 160　飛鳥寺所用瓦の分布

Tab. 19　飛鳥寺北面大垣・西面大垣北半出土の古代軒瓦集計表

調査次数	軒丸瓦														軒平瓦						
	Ⅰ	Ⅰ？	Ⅲ	Ⅲ？	Ⅴ	Ⅵ	Ⅷ	Ⅻ 川原601	ⅩⅢ	ⅩⅢ？	ⅩⅤ	ⅩⅤ？	6308	不明	Ⅱ（種不明）	ⅢB	ⅢC	重弧	ⅣB 6661B	ⅣDa 6661Da	Ⅵ
飛鳥寺A（寺域東北隅）	17	6			2	1	1		12	3	1	1	1	10	2				1	1	
飛鳥藤原91－８次	23	9	3						4					6				1	1		2
飛鳥寺北方（北区）	28	8	1	1			1	4	9		1				2						
水落1995－１次（N・U区）	2	1							1	1						1					
飛鳥寺喜多宅（1976A）									1		1										
飛鳥寺1996－３次（Ⅱ区）	1	2	2														1				

飛鳥寺1989－１次、飛鳥藤原114－６・188－５次は軒瓦の出土なし。奈良県1964年度調査出土瓦の内訳は報告なし。

示す（埋戻土出土分・出土小地区不明分を除く[29]）。丸瓦・平瓦を中心に図に反映できていないものがあると考えられるが、上記の軒瓦だけでも第１～４次調査区出土軒瓦総数の２割を超える[30]。

飛鳥寺所用瓦の分布

大半が７世紀代の主要遺構が廃絶した後の遺構や土層から出土しているが、特にⅣ期の流路NR310や、第１次調査区西北部から第２次調査区西南部にかけての中世バラス溜に、分布のまとまりが認められる。調査地の位置からは、近接する飛鳥寺大垣西北部の瓦が流入していることがまず想像できるが、NR310の範囲に満遍なく分布することやその数が多いこと、摩耗の著しい個体が含まれることを踏まえると、この流路によって東方からもたらされた瓦、すなわち調査地からやや離れた北面大垣の瓦も一定数数含まれていることが考えられる。北面・西面のいずれにせよ、Tab.19に示す大垣出土瓦の組成とは矛盾しない。中世バラス溜は大規模な土坑群からなっており、飛鳥寺創建期から平安時代までの瓦が混在して出土していることから、大垣周辺や石神遺跡内外で不要となった瓦がまとめて廃棄された可能性が高い。

1）このうち軒丸瓦は、第１～４次調査区出土軒丸瓦総数の４割強を占める。
2）奈文研『古代瓦研究Ⅰ』2000年。
3）Fig.158の岡燈明田資料のみ、奈良県立橿原考古学研究所『奈良県文化財調査報告書』第154集、81頁図51、2012年より転載。
4）清水昭博『蓮華百相―瓦からみた初期寺院の成立と展開―』奈良県立橿原考古学研究所付属博

物館、1999年。佐川正敏・西川雄大「奥山廃寺の創建瓦」『古代瓦研究Ⅰ』奈文研、2000年。納谷守幸「軒丸瓦製作手法の変遷―飛鳥地域出土の７世紀前半代の資料を中心にして―」『明日香村文化財調査研究紀要』第４号　明日香村教育委員会、2004年。清水昭博『古代日韓造瓦技術の交流史』清文堂、2012年。

５）清水昭博は、飛鳥寺Ⅶの中房がなで肩の円柱状を呈するとし、この点も角端点珠式に通ずる要素とみる（清水1999年・2012年、前掲註４）論文）。ただし実見の限り、摩耗した個体を除けばⅦの中房は角張った円柱状であった。角端点珠式やその直前型式とみられる岡燈明田遺跡出土例が、摩耗により丸みを帯びた飛鳥寺Ⅶをもとに作笵された可能性も考えられるが、確証は得られない。

６）清水1999年・2012年、前掲註４）論文。大西貴夫「葛城地方の飛鳥時代軒丸瓦」『古代瓦研究Ⅰ』奈文研、2000年。

７）佐川正敏・花谷 浩ほか「瓦の編年と使用堂塔の比定」『山田寺報告』本文編　奈文研学報第63冊、2002年。花谷 浩「出土瓦をめぐる諸問題」『吉備池報告』奈文研学報第68冊、2003年。

８）上原真人「第１章　瓦論」『瓦・木器・寺院』すいれん舎、2015年。

９）菱田哲郎「畿内の初期瓦生産と工人の動向」『史林』69-２、史学研究会、1986年。佐川・西川、前掲註４）論文および納谷、前掲註４）論文。近江俊秀「軒丸瓦製作技法における丸瓦先端加工に関する若干の検討―飛鳥地域における七世紀代の資料を中心として―」『考古学論究：小笠原好彦先生退任記念論集』小笠原好彦先生退任記念論集刊行会、2007年。清水2012年、前掲註４）論文。

10）林 正憲「若草伽藍から西院伽藍へ―年代論の再整理―」『法隆寺若草伽藍跡発掘調査報告』奈文研学報第76冊、2007年の理解にしたがう。

11）斑鳩寺6C・6Dは塔所用とされる（花谷 浩「法隆寺の造営と瓦　１　若草伽藍の造営」『法隆寺の至宝　瓦』法隆寺昭和資材帳編集委員会、1992年および林、前掲註10）論文）。金堂所用の斑鳩寺3Bb・4Aに対し、瓦当文様・製作技法に新しい要素が加わることが根拠であるが、分布のうえからは、それらの帰属を塔のみに限定できるかどうか判断できない（中川あや「若草伽藍の軒丸瓦・軒平瓦」『法隆寺若草伽藍跡発掘調査報告』奈文研学報第76冊、2007年）。

12）毛利光俊彦ほか『法隆寺の至宝　瓦』法隆寺昭和資材帳編集委員会、1992年。

13）小澤 毅「寺名比定とその沿革」『吉備池報告』奈文研学報第68冊、2003年。

14）斑鳩寺8Bが吉備池廃寺創建瓦と近い時期にあることは疑いないが、両者の前後関係は確定していない。奈文研『古代瓦研究Ⅰ』（船橋廃寺式軒丸瓦と百済大寺の創建瓦　討議）、2000年。

15）楠葉平野山窯とその出土瓦については以下による。窯番号は八幡市教育委員会の記載にしたがう。瀬川芳則「河内楠葉の飛鳥瓦窯群をもつ遺跡　大阪府枚方市楠葉東遺跡」『日本歴史』第388号　吉川弘文館、1980年。瀬川芳則「四天王寺瓦窯址と出土の須恵器」『考古学と古代史』同志社大学考古学シリーズ刊行会、1982年。八幡市教育委員会『平野山瓦窯跡発掘調査概報』1985年。八幡市教育委員会『楠葉平野山窯跡（第２次）発掘調査概報』、1992年。大脇 潔「吉備寺はなかった―『京廿四寺』の比定に関して―」『文化財論叢Ⅱ』奈文研、1995年。
四天王寺所用瓦の時期区分と型式名は以下に準じる。網 伸也「四天王寺出土瓦の編年的考察」『堅田直先生古希記念論文集』堅田直先生古稀記念論文集刊行会、1997年。網伸也「四天王寺の「百済大寺式」軒丸瓦」『古代瓦研究Ⅰ』奈文研、2000年。

16）大きくは、法隆寺金堂薬師如来像光背銘にみえる斑鳩寺創建年から推古15年（607）前後とみる説と、法隆寺金堂釈迦三尊像光背銘にみえる厩戸王子薨死の年や当該像の造像年から推古30・31年（622・623）前後とみる説に分かれる。それぞれの論者や根拠、問題点については、村田治郎「法隆寺創立の研究史」『法隆寺の研究史』中央公論美術出版、1987年に詳しい。

17）若草伽藍の金堂基壇造成に後出し、塔造営に先行する素掘溝SD7040（奈文研『法隆寺若草伽藍跡発掘調査報告』奈文研学報第76冊、2007年）からは、良好な土器が出土していない。いっぽう、若草伽藍の造営にともなって埋められた流路SD2140からは６世紀末から７世紀初頭の土器、SD2140を付け替え西院伽藍の造営に先行する水路SD3560からは７世紀前半の土器が出土したと報告されており（法隆寺『法隆寺防災施設工事・発掘調査報告書』、1985年）、若草伽藍の造営期間をある程度はうかがえる。とはいえ、伽藍全体の造営過程を考慮すれば、これらにより得られた造営期間の下限年代は、斑鳩寺4Aの笵が平野山窯に移動した時期よりもやや

降る可能性が高い。

18）菱田哲郎「瓦当文様の創出と７世紀の仏教政策」『ヤマト王権と交流の諸相』５　名著出版、1994年。大脇、前掲註15）論文。寺崎保広「山田寺の沿革」『山田寺報告』本文編　奈文研、2002年。花谷、前掲註７）論文。

19）網、前掲註15）論文。佐藤 隆「四天王寺の創建年代―土器・瓦の年代決定をめぐって―」『大阪の歴史と文化財』第３号　大阪市文化財協会、1999年。畑中英二「近畿地方の飛鳥・白鳳時代土器編年研究と問題点」『飛鳥・白鳳の瓦と土器―年代論―』帝塚山大学考古学研究所歴史考古学研究会・古代の土器研究会、1999年。

20）佐藤 隆「四天王寺の創建年代について」『飛鳥・白鳳の瓦と土器―年代論―』帝塚山大学考古学研究所歴史考古学研究会・古代の土器研究会、1999年。畑中、前掲註19）論文。両者は、四天王寺NMIaから同NMIIa1・NHIIa2までの生産期間が須恵器の単一型式がもつ時間幅におさまるとするが、出土状況からして、各窯の最終操業段階以前に焼成された軒瓦が最終操業面に混入している可能性も否めない。加えて、平野山窯における瓦と須恵器の併焼開始時期を明確にする必要もある（網 伸也「古代寺院の創建と瓦陶兼業窯―四天王寺の創建年代を中心として―」『あまのともしび：原口正三先生古稀記念集』原口正三先生の古稀を祝う集い事務局、2000年）。灰原出土資料の報告をまって、佐藤・畑中説の妥当性を評価する必要があるだろう。

21）八幡市側の①２号窯最終床面、②３号窯最終床面（四天王寺NMIaと共伴）、③７号窯最終床面（四天王寺NHIIa2と共伴）、④８号窯前庭部、⑤８号窯灰原と、枚方市側の⑥７号窯窯体内外から出土した須恵器が対象。菱田哲郎は②⑥を610年頃から７世紀第１四半期、④を620～630年代とし（前掲註９）論文、菱田哲郎「瓦の年代決定法―西日本を中心に―」『飛鳥・白鳳の瓦と土器―年代論―』帝塚山大学考古学研究所歴史考古学研究会・古代の土器研究会、1999年）、佐藤隆は①～⑤を７世紀第２四半期中心とする（前掲註20）論文）。

22）奈文研「奥山久米寺の調査（1987-１次）」『藤原概報18』1988年。奈文研「奥山・久米寺の調査（1989-１次）」『藤原概報20』1990年。

23）前掲註22）文献。山本忠尚「奥山廃寺出土の軒丸瓦」『季刊　明日香風』第43号　飛鳥保存財団、1992年。

24）佐川・西川、前掲註４）論文。なお、佐川・西川は塔の創建が軒丸瓦Ⅷの時期に降る可能性を否定してはいない。

25）前掲註14）文献。

26）ただし、角端点珠式と組み合う確実な軒平瓦の例がないことを踏まえると、奥山廃寺Ⅱ・Ⅳが同時期のもので、かつそれらに重弧文軒平瓦がともなった可能性は低いと推測できる。この点から逆説的に、重弧文軒平瓦の一部がⅣと組み合う場合、Ⅱ・Ⅳには時期差があると推測できる。従来の認識どおり、重弧文軒平瓦が奥山廃寺Ⅷとだけ組み合う場合、Ⅱ・Ⅳに時期差があるか否かは判断できない。

27）いずれも礎石建ちでないうえ、基壇を備えず、同時期の瓦葺建物とはあきらかに構造が異なる。柱痕跡を確認した建物の中には、柱径が20cm程度と細いものが含まれる点も根拠。

28）石神遺跡第１～21次・1990-１次・1996-１次調査、飛鳥藤原第114-１次・214次調査。

29）軒平瓦の飛鳥寺Ⅱは、少数ながら飛鳥寺北方遺跡（第192-１・197-２次調査区）からまとまって出土していることや、他遺跡で出土していないことから、飛鳥寺所用と考える。なお、第１～４次調査で出土した飛鳥寺所用軒瓦は、2021年度までに石神遺跡で出土した飛鳥寺所用瓦の５割強を占める。

30）以下は、飛鳥寺から流入した寺所用瓦の可能性があるものの、確証が得られず図に含めていない。①これまでに寺域から１点しか出土しておらず、位置づけが難しい軒丸瓦の飛鳥寺Ⅵ・A。②川原寺から飛鳥寺に供給された可能性が指摘される川原寺601A・651E（花谷 浩「京内廿四寺について」『研究論集Ⅺ』奈文研、2000年）。飛鳥寺からの流入品ではなく、別ルートでもたらされた可能性も否定できないため。③飛鳥寺所用瓦と共通する特徴をもつが、寺域出土瓦を網羅的に再整理しなければ正確な帰属を判断できないもの。無段式丸瓦１類、平瓦１～４類などを含む。

第３節　金属製品

Ａ　鉄製品の分布と「小墾田兵庫」説

石神遺跡は、都貨羅人や陸奥・越の蝦夷、粛慎を饗応したとする、『日本書紀』斉明３年および５・６年条に関連し、斉明期の饗宴場であったといわれる場所であるが、壬申の乱時の「小墾田兵庫」（『日本書紀』天武天皇元年６月巳丑条）の推定地とする見方もある。これは、鉄鏃を中心とした鉄製品が多量に出土していることを根拠とするが、これまでに『藤原概報』を通じて示してきた鉄製品はその一部にすぎない。そこで、石神遺跡出土鉄製品をめぐる研究状況を整理するとともに、鉄製品とその生産・加工に関連する鍛冶関連資料の分布と組成を検討し、鉄製品からみた石神遺跡の性格について考えておきたい[1)]。なお以下では、小墾田兵庫説の成り立ちを説明するために、旧案の時期区分（Ａ～Ｃ期）を用いる場合があるが、その必要がない部分では新案の時期区分（Ⅰ～Ⅲ期）にしたがった。

「小墾田兵庫」説　石神遺跡から出土する鉄製品の性格については、第４次調査の報告（以下、『藤原概報15』[2)]）を嚆矢とする。そこには、「金属製品には大量の鉄製品のほか、……（中略）なかでも鏃は100点以上あり、注目される。大量な鉄製品の出土量から、付近に工房、あるいは保管庫のあったことが推定される。」（67頁）とあり、遺跡内に工房あるいは保管庫が存在した可能性に触れている。また、相原嘉之は上記を引用しつつ、建物の配置に着目し、「小墾田兵庫」とかかわる可能性について論じた[3)]。相原によれば、鉄鏃は天武朝（Ｂ期）のもので、同時期の南北棟建物や遺跡南部の倉庫状総柱建物が、これら武器類の収納施設であるという。「小墾田兵庫」の記載は壬申の乱にかかる文脈で登場するものであるため、672年を定点としてＡ期の廃絶年代およびＢ期造営時期を推定し、上記建物群が「小墾田兵庫」の時期と矛盾しない点、そしてこれら建物群に納められたとみられる多量の鉄製武器類は、「小墾田兵庫」との関わりで考えても時期的に矛盾がないと、自身の論を補強した[4)]。

このように、『藤原概報15』では石神遺跡を小墾田兵庫に比定しているわけではないが、おもに相原の一連の論考により、鉄製品からみた石神遺跡のイメージが確定したとみてよいだろう。このほか、重見 泰も石神遺跡と小墾田兵庫との関係を説く[5)]。小墾田兵庫の時期は、相原はＢ期、重見はＡ期と両者で異なるものの、比定する性格は一致する[6)]。反対に、山本 崇は、『日本書紀』天武元年（672）６月己丑条にみえる、大伴吹負の軍が飛鳥寺西の軍営へ攻め込む際の描写や、飛鳥寺の西の槻木の下から小墾田兵庫までの一定程度の距離を思わせる描写から、飛鳥寺のすぐ北に位置する石神遺跡を小墾田兵庫に比定する見解に疑問を呈した[7)]。

石神遺跡における出土鉄製品の組成と量は、Ⅴ章４節で示したとおりである。『藤原概報15』では、鉄鏃、刀子、鉄斧が図示され、鉄鏃の出土量の多さが強調された報告となっているが、今回の整理により、これら３器種のみならず、鉄鎌、鉄鑿、鉇、金床、鑷子、鏟状鉄製品など、鉄製農工具類の一定量の出土、そして鉄針や鉄製紡錘車のような生業器種、さらには多量の鉄釘あるいは鋲といった建築部品もともに出土していることを提示した。そして後述するように、これらは柱穴や土坑などのような遺構よりは整地土からのものが圧倒的に多い。

鉄製品の分布と組成　　Fig.161は石神遺跡全体における鉄製品の出土位置を示したものである。南北溝SD640を基準に、調査区西半に広く分布する整地土Ｂから出土していることが見て取れる。整地土Ｂは、これまでの『概報』や『紀要』でいう「藤原宮期」の整地土に当たり、第３・４次調査では灰褐色土または褐色土等、第５・６次調査では黒褐土、赤褐土、褐色土として称されるものである。整地土Ｂが残らない第１・２次調査区では鉄製品の出土量は少なく、Ⅱ期・Ⅲ期遺構群の検出に留めた第３次調査以降、さらにはⅢ期の基幹排水路である南北溝SD640を境に西半に分布が密となる様相からは、これら鉄製品の帰属時期はおのずと絞られる。大きな特徴としてはやはり、ある段階に遺跡西半に大々的に敷設された整地土中から多量に出土している点と、その分布が調査区域の南西部に集中する点を改めて強調したい。

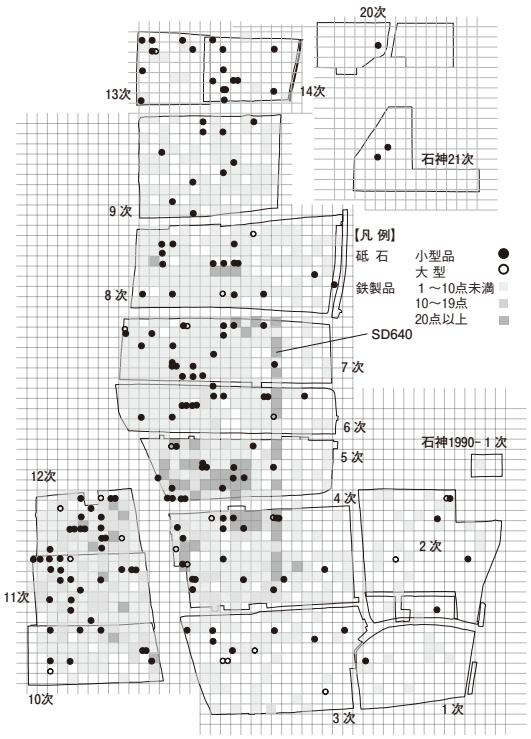


Fig. 161　鉄製品の出土分布図

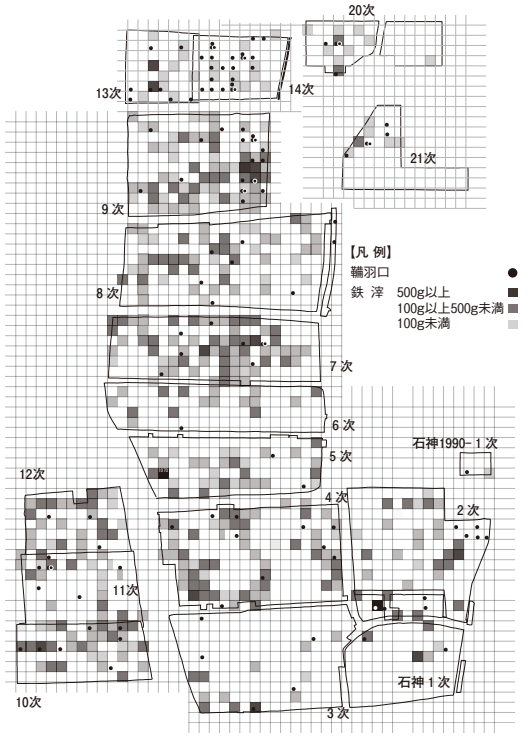


Fig. 162　鞴羽口・鉄滓の出土分布図

従来指摘されてきたように、石神遺跡出土の鉄製品は鉄鏃が圧倒的主体をなし、次いで鉄釘、刀子、鉄斧、鉄鎌、鉇などからなる。今回報告した第１次～第４次調査区出土鉄製品419点のうち、鉄鏃は破片を含めて200点とその半分弱を占めることからも、その量的突出性は明白である。鉄鏃は長頸鏃を基本とし、石神遺跡北方の第15次調査区で木製鳴鏑が出土することから鏑矢の存在が推測されるものの、長距離戦闘用の征矢である鏃箭式、片刃箭式を中心とした尖根系長頸鏃に三角式などの少量の平根系鉄鏃を含む組成をみせる。篦被形態は、棘状関が目立ち、台形や角関を含む。このような鉄鏃の組成は、７世紀後半にみられる特徴である。くわえて、後述する小型砥石の分布と重なる点も注意したい。

冶金関連資料の出土分布傾向　　石神遺跡では、冶金関連資料の出土も着目される。鞴羽口や鉄滓、銅滓、坩堝や鋳型片、加工用素材とみられる鉄・銅製の鋳造品や銅板は、鍛冶工房あるいは金属加工工房の存在を示唆する。このことは、加工時の工具である金床、鏨、砥石の出土からも裏付けら

れる。そこで、冶金関連資料のうち、鞴羽口と鉄滓の分布を示したのがFig.162である。鉄滓は遺跡全体から広く出土し、例えば井戸SE800埋立土のような点的な集中地区は読み取れるが、大半は、遺跡西半に広く敷設された整地土（褐色土・暗黄褐色粘質土等）から出土する傾向にあり[8]、工房のような作業所の特定は難しい。なお、竪穴建物SI315からは鞴羽口とともに鋳型とみられる小片が出土しているが、時期は５世紀後半である（『藤原概報12』）。また、黄褐色粘土が敷かれ、中央が赤変した硬化面から小鍛冶炉の炉床部分と報告された炉跡SX795（『藤原概報15』）からは鉄滓などの冶金関連資料が出土したものの、時期比定しうる土器の出土もなく、本節で論じる鉄製品・冶金関係資料に伴う時期の金属加工工房とみることは難しい。

いずれにしても、石神遺跡出土鉄製品の特徴として、征矢である尖根系長頸鏃を中心とした多量の鉄製品にくわえ、冶金関連資料、そして後述する大・小の砥石が遺跡南西半の整地土中から出土する点を指摘できる。

B　石神遺跡出土鉄製品と軍防令の戎具

軍防令備戎具条からみた石神遺跡　ここで833年に撰述された律令の解説書である『令義解』に着目したい。川田壽文は、古代の集落、都城、地方官衙や寺院などの遺跡出土砥石について検討を進める中で、『令義解』軍防令戎具条（以下、「軍防令」とする）に記された、軍団兵士が行軍の際に自ら備え携帯する装備の品目に着目した。そして、軍防令中に登場する鉄製品が複数個体出土する遺構（竪穴建物）は、軍団兵士10人を指す「火」を構成する軍団兵士の兵舎であり、出土する鉄製品は、徴兵された軍団兵士が自備戎具として備えていたものであるという解釈を示した[9]。つまり、軍防令記載の鉄製品は軍団兵士の戎具であり、それらが出土する遺構を兵舎に比定した。

『令義解』巻五　軍防令備戎具条には、次の道具類がみえている。

> 凡兵士ハ。毎ニ火紺ノ布ノ幕一口。着ク裏（ウラヲ）。銅盆小キナル釜（カナヘ）。随チ得ンニ二口。鑿（クワ）一具。剉碓一具。斧一具。小斧一具。鑿一具。鎌二張。鉗（カナハシ）一具。毎ニ五十人。火鑽（ヒウチ）一具。熟艾（ヤイクサ）一片。手鋸一具。毎ニ人弓一張。弓弦袋（ユンツルフクロ）一口。副弦二條。征箭（ソヤ）五十隻（シャク）。胡籙（ヤナクヒ）一具。太刀（タチ）一口。刀子（カタナ）一枚。
>
> 礪（ト）石一枚。藺帽一枚。飯袋一口。水甬（ヲケ）一口。塩甬一口。脛巾（ハヽキ）一具。鞋（カラワラク）一両。皆令メヨ自備。不可闕少。行軍ノ之日。自盡將去（モチユケ）。（傍線部は石神遺跡出土鉄製品に該当）

このうち鉄製品は、斧、小斧、鑿、鎌、鉗、火鑽、手鋸、弓弦袋、副弦、征箭、胡籙、太刀、刀子となろう。ここで、石神遺跡出土鉄製品と上記道具類を比較したのがFig.163である。これらは石神遺跡全体の出土鉄製品を集成したものであるため、各器種の同時代性は検討の余地を残すものの、大局としては、上記鉄製品の多くを満たしているといえる。くわえて、鉄製紡錘車や鉄針は、布あるいは繊維製品の作成・修繕に用いるものとみれば、石神遺跡においては、軍防令に規定される兵士の携帯品の大部分が装備できることになる。古代の農具類は、戦闘時には武器としても機能したとみられていることから、鉄斧や鉄鎌、鑿なども武器使用の一側面を示すものであり、大刀や刀子とともに鉄鏃を主体とした鉄製武器組成の装備を見て取れる。なによりも、出土鉄製品の約半数を占める鉄鏃は、尖根系の鑿箭式、片刃箭式長頸鏃を中心と

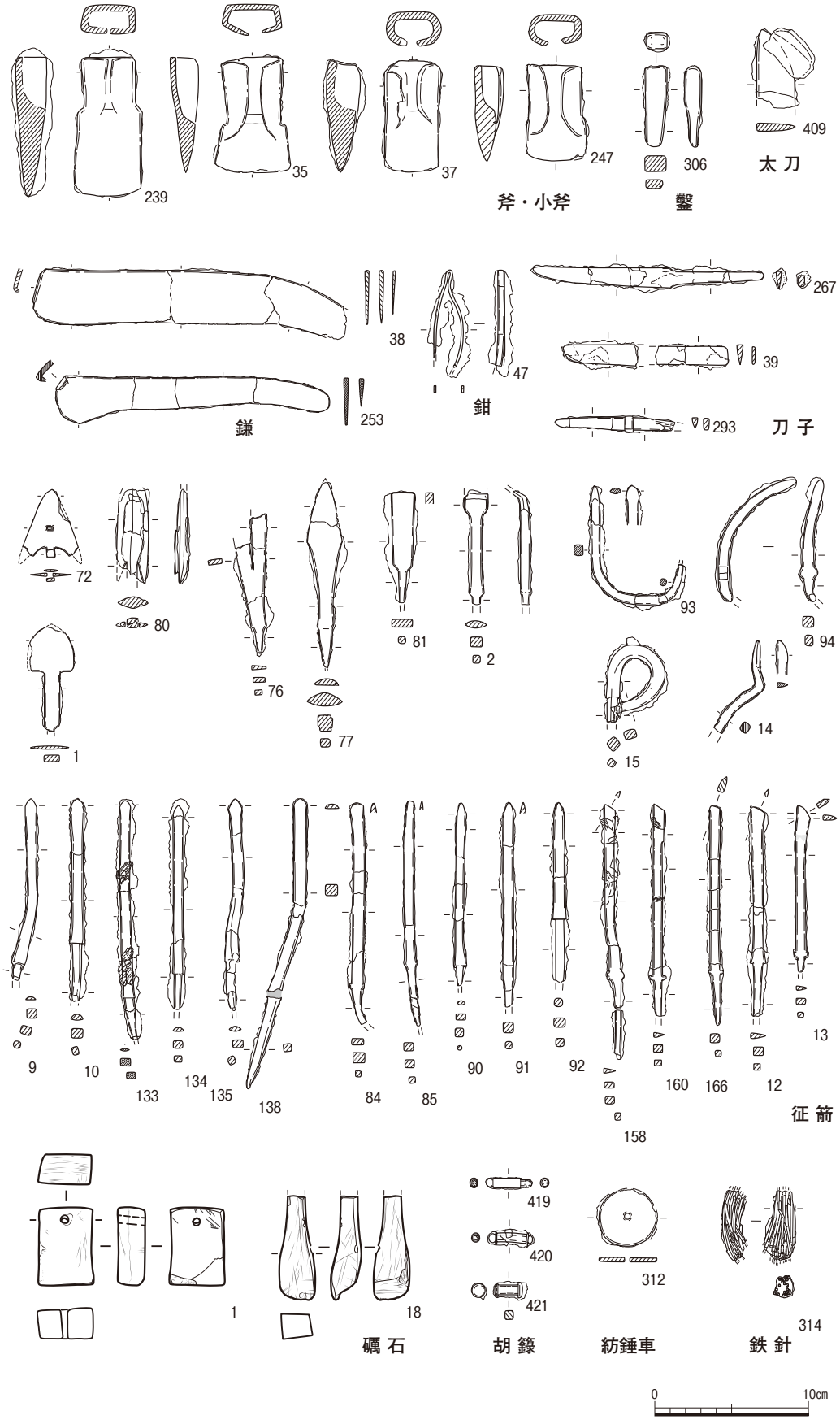


Fig. 163　石神遺跡出土の『令義解』軍防令にみえる戎具組成　1：4

した征矢である点を改めて強調したい。

同様に、上記携帯品の一つである砥石に着目すると、石神遺跡出土のそれらは大・小に分かれ、幅5.0cm未満の小型は懸垂用の小孔を穿つ有孔砥石を含む。この有孔砥石をはじめとする小型砥石は提砥あるいは手持ち砥であり、幅5.0cm以上の置砥としての使用が想定される大型砥石を再加工したものとみられる。そして小型砥石の分布は、大型砥石に比して、鉄製品の集中域と重複することから、両者の使用場面は異なっていた可能性を指摘したい。つまり、小型砥石は鉄製品との相関性から軍防令の礪石一枚を、大型砥石は鉄滓、羽口とともに金属加工の場での使用と、性格を異にしていた[10)]。

このように、石神遺跡の鉄製品および砥石の組成は、軍防令にみられる軍団兵士の戒具と一致する。

古代における鉄製品組成と出土遺跡　組成の点では上記のような特徴が指摘できるが、もう一つの特徴である、量の点ではどうか。こうした大量の鉄製品を検討した事例として、大宰府史跡蔵司地区出土の検討例が参考となる[11)]。大宰府では、一定の地区から出土した膨大な量の武器・武具の検討の中で、被熱鉄遺物である鉄鏃、小札、鉄刀、刀子、鉄釘のうち、束の状態で被熱した鉄鏃、綴じられた状態で被熱した小札等の状況を多量の武器・武具の集積とみて、同地区に何らかの保管施設の存在を想定した。

あるいは、古代集落・城柵遺跡出土鉄製品組成の比較からは、秋田城跡や茨城県鹿の子Ｃ遺跡の様相が類似する。秋田城跡の外郭築地内側に密集する建物からは鉄鏃53点以上、鉄鎌、金鉗、斧、刀子、鉄釘とともに、有孔砥石59点が出土しており、石神遺跡のそれに類似する。とくに斧３点、鎌５点、鉗が１点出土する第10次調査の竪穴建物跡は、軍団兵士の兵舎であるこ

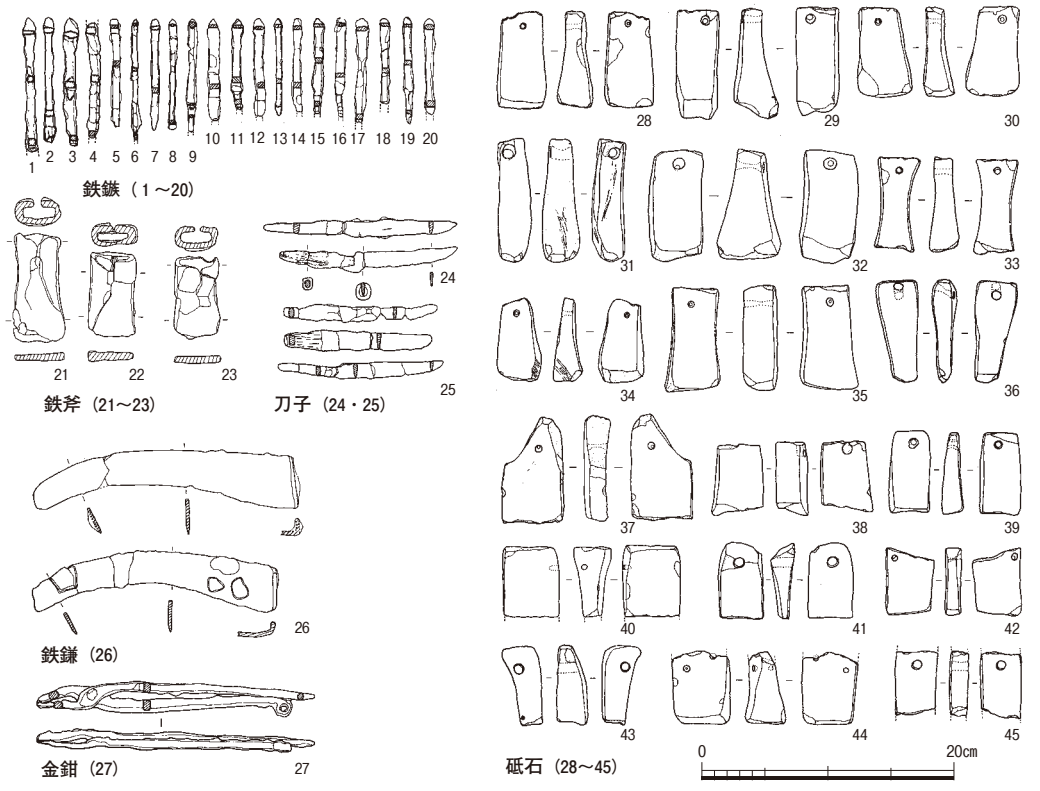


Fig. 164　秋田城出土の鉄製品と砥石　1：6

とが指摘されている[12]。

国府関連遺跡である鹿の子Ｃ遺跡は、竪穴建物跡や工房跡、掘立柱建物からなり、竪穴建物跡から刀子、鎚、鉄鏃、刀縁金具、鉗、鑢子、斧、弓弭という組成の鉄製品が出土している。この組成は前述した兵士の戎具と共通し、溝で区画された建物配置と、これら鉄製品と共伴する漆紙文書の記述から、竪穴建物は一般兵士の居住家屋、工房は軍団・鎮兵に付属する武器製造・修理工場と位置付けられている[13]。

以上のように、古代の集落・城柵遺跡における多量の鉄製品出土とその組成は、武器・武具の保管施設、あるいは兵舎の存在を想起させるものとして解釈されている。そして石神遺跡の鉄製品も、その出土量や組成が、これらの遺跡と類似する。とくに整地土中から出土した多量の鉄製品は、付近に工房や保管庫が存在した可能性を示唆することからも、近接し、倉庫状建物と報告されてきた遺構を根拠に、当地に小墾田兵庫を想定した既往の研究は、他事例との比較からも適切な解釈といえるだろう。

そこで、改めてこれら鉄製品類の意味を考える際に着目したいのが、やはり近接する建物である。鉄製品類の分布集中域には、第４次調査区のSB735・736、第３次調査区のSB620、そして第10次調査区のSB1701・1702といった総柱建物、あるいは倉庫状建物と報告される建物が示されてきたが、かつては総柱建物と報告されたSB735・736は、本書では武器庫の候補ではなくなった。さらには、その代わりになりうる倉庫状の建物も、第１～４次調査の範囲では見つかっていないため、石神遺跡の南部に小墾田兵庫があったとは、簡単に言えなくなった。とはいえ、整地土から出土した鉄製武器だけでなく、砥石や冶金関連遺物も含めて考えると、これら遺物群が兵士の装備品（戎具）であったと解釈するのが自然である。したがって小墾田兵庫が、石神遺跡近傍の未発掘区域に存在していた可能性はなお否定されない、というべきであろう。なお、これら鉄製品が出土した整地土には、多量の土器も包含されていた。これらは天武朝の大改作時に整地土に混ざり込んだ遺物群とみられるが、土器と鉄製品それぞれが、本来はどの場所で用いられていたかと、整地土がどこからもたらされたかをよく考える必要がある。

石神遺跡から出土する鉄製品の特徴を改めてまとめると、長距離戦闘用の征矢である尖根系長頸鏃を中心に、鉄釘、刀子、鉄斧、鉄鎌、鉇をはじめとする武器類が主体となる点は、従来指摘されてきたとおりである。そしてその組成は『令義解』に規定される兵士の戒具と合致し、軍事的性格が強い点が指摘できる。また、遺構よりも整地土からの出土が圧倒的に多い点も特徴であり、大宰府例のように被熱痕跡こそみられないが、複数個体が銹着するものや、土圧によって折れ曲がったものもある。石神遺跡第10～12次調査区からは、鉄製品とともに白土が付いた壁土が出土している。鉄製武器類とともに鉄釘が一定量共伴する点、未製品や様の出土がないことから、冶金関連資料はこれら多量の鉄製品の加工や修理の痕跡を示すものと捉えると、建物との関係は依然、注意を払う必要がある。今回報告対象とした第３・４次調査区から第５・６次、そして第10～12次調査区は鉄製品の分布の集中域である。整地土と周辺建物との層位的な関係を引き続き整理することで、今回示した多量の鉄製武器類の集積との関係がより明確となれば、小墾田兵庫説を含めた石神遺跡の性格を鉄製品からあきらかにできるであろう。まずはその基礎的整理として、本節を位置付け、多量の鉄製品が示す意味についての問題提起としたい。

1）本稿の作成においては、奈文研在籍中に当該資料の基礎的整理を継続的に進めてきた諫早直人氏（京都府立大学）、片山健太郎氏（埼玉県立歴史と民俗の博物館）、大谷育恵氏（京都大学白眉センター）、内藤京氏（当時京都大学大学院生）による資料を基にしている。また、全体の構成についても同様で、諫早氏、片山氏にくわえ廣瀬覚（奈文研古墳壁画室）との議論によるものである。

2）「石神遺跡第４次調査」『藤原概報15』1985年。

3）相原嘉之「小治田宮の土器～雷丘東方遺跡出土土器の再検討～」『瓦衣千年』森郁夫先生還暦記念論文集、1999年。

4）相原嘉之「飛鳥古京の攻防－壬申紀にみえる小墾田兵庫と留守司－」『琵琶湖と地域文化』林博通先生退任記念論集、2011年。その註３）によれば、小墾田兵庫を石神遺跡に求める考えは、『藤原概報15』や重見 泰の論考にもみられるという（重見 泰「石神遺跡の再検討－中大兄皇子と小墾田宮－」『考古学雑誌』91-１、2007年）。これを機に、小墾田兵庫＝石神遺跡説は『藤原概報15』が初出のような表現へと変わってゆくようである。さらには、多量の鉄鏃が出土することから、天武朝期の施設を『日本書紀』天武元年（672）六月二十九日条に記された「小墾田兵庫」に比定する説がある、と相原の説を引用しながら石神遺跡の性格について論究したものもある（豊島直博「方頭大刀の生産と古代国家」『考古学雑誌』98-３、2014年）。

5）重見 泰「第二章　石神遺跡の再検討」『新羅土器からみた日本古代の国家形成』学生社、2012年（初出は「石神遺跡の再検討－中大兄皇子と小墾田宮－」『考古学雑誌』91-１、2007年）。重見は多量の鉄鏃をはじめとした鉄製品の出土、鉄製品の出土は遺跡南方に集中する点、鉄製品出土地区の周囲には、倉庫状建物と報告されたSB1701・1702（石神第10次『藤原概報22』）が位置する点、そして遺跡南方は飛鳥寺西の北方にあたる点を挙げる。

6）いっぽう、津野 仁は石神遺跡出土鉄鏃型式に言及する際に、その時期を７世紀後半から８世紀初めとする。津野 仁「第二章　鉄鏃からみた武器所有と武器政策」『日本古代の武器・武具と軍事』吉川弘文館、2011年。

7）山本 崇「壬申の乱と飛鳥寺西槻下－小墾田兵庫をめぐって－」『明日香風』第122号、2012年。なお『日本書紀』天武元年（672）六月己丑条には、次の記事がみえる。「爰に留守司高坂王、及び兵を興す使者穂積臣百足等、飛鳥寺の西の槻の木の下に據りて営を為る。唯し百足のみは小墾田の兵庫に居りて、兵を近江に運ぶ。時に営の中の軍衆、熊が叫ふ声を聞きて、悉くに散け走げぬ。仍りて大伴連吹負、数十騎を率て劇かに来る。則ち熊毛及び諸の直等、共與に連和し。軍士亦従ひぬ。乃ち高市皇子の命を挙げて、穂積臣百足を小墾田の兵庫に喚す。爰に百足、馬に乗りて緩く来る。飛鳥寺の西の槻の下に逮るに、人有りて曰く・・・・」（坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野 晋校注『日本書紀』下、394-396頁、1965年、岩波書店）。

8）ただし、一部では一定地区に集中する調査区もある。鉄滓は第７次・９次調査区に集中し、特に第９次調査区ではSA1475、SB1480、あるいはＣ期の基幹排水路SD1347と併走するSD1476に沿って鉄滓の集積と羽口の分布の集中が重なる。また、第12次調査区では東西棟建物SB1900周囲や水落遺跡から北流する木樋Ｈの抜取溝とそれを据え付けるための溝SD297に集中する。いずれも今後刊行予定の調査区であり、近接する遺構の性格とともに検討を進め報告したい。

9）川田壽文「砥礪考３－古代の砥石－」『白門考古論叢Ⅲ』中央大学考古学研究会開設45周年記念論文集、2013年。

10）古墳時代の事例ではあるが、提砥・置砥には副葬時の取り扱いに明確な違いがあることは既に指摘されている。時代は異なるものの、石神遺跡出土の２種の砥石を考えるうえで参考となる視点であり、使用場面の違いを傍証するものである。細川晋太郎「五条猫塚古墳出土砥石の副葬背景」『五条猫塚古墳の研究』奈良国立博物館、2016年。

11）小嶋 篤「大宰府の兵器－大宰府史跡蔵司地区出土の被熱遺物－」『九州歴史資料館　研究論集』36、2011年。

12）前掲註９）論文。

13）前掲註９）論文。

第４節　遺構変遷案の再検討

Ａ　既往の調査と時期区分

奈文研が実施した石神遺跡の発掘調査は1981年から2008年までに21次におよび、さらに近年はその東側隣接地でも発掘調査を進めてきた。これらの調査成果は『藤原概報』や『紀要』、『報告書集』等において、逐次あきらかにしてきたが、検出遺構が非常に多く複雑であることと、大量に出土した遺物の総量とに鑑み、その学術報告は少なくとも４巻に分けて刊行してゆく予定である。本書はその第１巻にあたるため、記載の方針や遺跡の時期区分等は、必ず次巻でも踏襲できるものでなければならない。この場合、既往の年代的枠組を適宜改良しつつ踏襲するのが至便である。しかしながら、検出遺構や出土遺物の整理作業を進めてゆくにつれ、既往の時期区分を部分修正しつつ踏襲するのには課題が多い、と考えられるようになった。そこで本書では、近年の調査成果に基づき、新しい時期区分を用いることとする。

既往の３時期区分

奈文研がおこなった石神遺跡の発掘調査では、Ａ期・Ｂ期・Ｃ期の３時期区分案（以下、旧案という）に基づき、７世紀の遺構群を年代順に編制してきた。しかし、この旧案は第４次調査のときにはじめて採用された枠組で、第３次調査以前にはまだ用いられていなかったものである。以下、本書の報告範囲を超えて、第５次調査以降の調査成果をまとめ、旧案の成立過程を整理しておきたい。その範囲は、石神遺跡北限の区画施設とみられるSA3893・3895を検出した第13・14次調査と、その東側隣接地でおこなった第20・21次調査までとする。これより北側は石神遺跡北方とし、その概要を述べるにとどめる。

なお、個別遺構の年代や、遺構どうしの前後関係に関しては、『藤原概報』等の見解を踏襲しておくが、本書の見解と合致しない場合がある[1)]。こうした齟齬は、第２巻以降で逐次修正される可能性がある。

第５次調査　1985・1986年に飛鳥280−１番地で実施した調査である。第４次調査区のすぐ北側の水田において、建物SB850、石組溝SD332・SD900、石敷SX895A（Ａ−１期）、建物SB820、SB855・860・870、石組溝SD790、石敷SX880等（Ａ−２−１期）、石組溝SD890・SD888、石敷SX895B・Ｃ（Ａ−２−２期）、建物SB861・875、SA670、石敷SX862（Ｂ期）、建物SB742・863・925、SA751、方形石組SX910、南北溝SD621・640（Ｃ・Ｄ期）等を検出した。『藤原概報16』では、Ａ期は斉明朝の遺構群で、「饗宴に関わる施設と推定」しつつ、建物の建て替えや、井戸SE800を水源とする（とされる）石組溝の付け替えによって、Ａ−２−１期とＡ−２−２期とに細分している。Ｂ期は天武朝、Ｃ・Ｄ期は藤原宮直前または藤原宮期であるという。

第６次調査　1986・1987年に飛鳥279−１番地で実施した調査で、第５次調査区のすぐ北側の水田にあたる。第５次調査とは異なり、第６次ではＡ期を１～３小期に細分している。検出遺構には建物SB1090・1110、石組溝D332・SD900（Ａ−１期）、回廊SC820・建物SB980・990・1000・1100、石敷SX880（Ａ−２期）、井戸SE1050、石組遺構SX1010（Ａ−３期）、建物SB1040、塀SA986・1041・1060（Ｂ期）、塀SA751・1020・1048等（Ｃ期）、建物SB863、SB1085・1086、塀SA780・781、南北溝SD621・640等がある。このうち、SB980・990は、第５次調査で検出し

たSB860とともに回字形に並び、東西棟SB1000を囲むという、独特な殿舎配置を見せることが判明した。また、回廊SC820（本書ではSB820）の西側には四面庇建物SB1100があり、主要施設の西側にも何らかの重要施設が存在したことが判明している。

第７次調査　1987・1988年に飛鳥278-１番地で実施した調査で、第６次調査区のすぐ北側の水田にあたる。調査の成果をふまえ、第６次までのA-１・２期を新A-２・３期に改め、その前に新しいA-１期を追加している。このため、A期の小区分は第６次以前と合致しない。検出遺構には石組溝SD1220（A-１期）、石組溝SD900（A-２期）、建物SB980・9990・1200・1300、回廊SC820、石組溝SD790・890・1130等、石敷SX1205等（A-３期）、建物SB1120・1215・1250・1295、塀SA1121・1122（B期）、建物SB1140、塀SA1060（C期）、建物SB1180、塀SA781・1175、井戸SE1170・1280、南北溝SD621・640（D期）等がある。この調査では、昭和６年に中岡清一が発見し、露出展示していた石敷SX1310も調査の対象とし、それが「浄見原宮」の石葺遺構ではなく、A-３期のものであることを確認した。出土遺物は各次調査の中でもっとも多く、木箱で508箱の土器が出土した。

中岡清一の石葺遺構

第８次調査　1988・1989年に飛鳥273-１・274番地で実施した調査で、第７次調査区のすぐ北側の水田にあたる。石組溝SD1210（A-１期）、建物SB1320・1340、石組溝SD900（A-２期）、長廊状建物SB820および建物SB980・990・1300・1330・1350、石組溝SD890（A-３期）、建物SB1295、塀SA986・1348、石組溝SD332（B期）、南北溝SD621およびSD640・1346・1347等（C期）を検出した。このうち、A-３期の東西棟SB1350は、第７次調査までに検出していたSB850・980・990とともに、その内側のSB1200等を囲んでいたことが判明した。また、C期の南北溝SD640は、２度曲折してSD1346→SD1347となり、さらに北方へと延びているのを確認した。

回字形の殿舎群

第９次調査　1990・1991年に飛鳥272-１番地で実施した調査で、第８次調査区のすぐ北側の水田にあたる。検出遺構には石組溝SD1210・1345、建物SB1550、塀SA1524・1525（A-１期）、建物SB1485・1325・1530・1540、石組溝SD900（A-２期）、建物SB1480・1500・1510・1535・1545（A-３期）、建物SB1505・1515、塀SA1475・1490（B期）、建物SB1478・1491、井戸SE1481（C期）、建物SB1478・1491、井戸SE1481（D期）等がある。この調査区では、石組溝SD890・900がさらに北へと延びていることを確認した。しかし、石神遺跡の北限を示す区画施設は発見できず、各時期ともに遺構がさらに北へと続くことがあきらかとなった。

第１次調査から第９次調査までは、旧飛鳥小学校東側の水田を対象とし、南から順に１筆ずつ調査を進めてきた。これらの調査の間、第４次調査で確立した遺構変遷案の枠組は適宜改変されつつも踏襲された。第３次調査の概要報告で「・・・・・須弥山石も含めた饗宴の場に関連した施設」のこと（『藤原概報13』52頁）に触れて以降、第４次調査の概要報告では「饗宴地区」（『藤原概報14』67頁）という単語がすでに見えている。これは、A-３期に属する殿舎群を順次検出する以前の話であり、やや予断を含んだ認識に基づいていると判断される。さらに第６次調査時には、A-３期遺構群が「斉明朝石神遺跡の中枢」にあたり、「饗宴に伴う多様な機能」を有していた（『藤原概報16』59頁）と述べるにいたっている。つまり奈文研は、この期間に「斉明朝の饗宴施設」説への傾斜を強めていったのである。反面、「飛鳥浄御原宮推定地の調査」という触れ込みは、第２次調査の概要報告を最後に見られなくなっている。かくして石

饗宴施設説の成立

神遺跡は、浄御原宮の候補地ではなく、斉明朝の饗宴施設として語られるようになった。

第10〜12次調査　　飛鳥209−１番地（旧飛鳥小学校校庭）で実施した調査で、第３・４次調査区の西隣に位置し、「史跡 飛鳥水落遺跡」のすぐ北側にあたる。調査は1991〜1994年の３ヵ年におよび、水落遺跡側から旧飛鳥小学校の校舎のほうへ、南から北へと調査を進めた。その結果、Ａ期には長廊状建物SB820を東限とする、回字状の殿舎群に対して「西区画」とも称すべき大規模かつ中枢的な施設があり、その中心をなすのが四面庇の東西棟SB1900であることが判明した。この建物は四方に石敷をめぐらせるもので、石神遺跡の建物ではもっとも格式が高い。

さらに第10次・第11次調査区では、水落遺跡の礎石建物SB200（漏刻台）から北へと延びる木樋の抜取痕跡SD1595・1713およびSD297を確認した。前者は木樋Ｅの抜取痕跡で、北へ延びるSD1595が西へ折れてSD1713となり、調査区の西へと抜けている。また、木樋Ｈの抜取痕跡であるSD297はSB1900の東側を通り、さらに北へと延びている。一連の調査では水落遺跡から北へと流れる水の処理、あるいは余水の再利用が予想以上に複雑であること（『藤原概報24』）と、２つの遺跡が漏刻台の時期に一体で機能していたことがあきらかとなった。この事実は、石神遺跡の最盛期を斉明朝に当てる根拠のひとつとなろう。なお、第３次調査区から西へと延びている南限の塀SA600は、第10次調査区の東南部でその続きを検出している。それはいちどとぎれるが、その西側には方位と柱間を揃えた東西塀SA1600が続いていることから、両者は一連の計画にもとづき造営された大垣であるという（『藤原概報22』55頁）。ただし、SD297およびSD1595と、SA600の大柱穴との前後関係は定かでない。

第10次から第12次調査区までは「含炭褐色土」が厚く堆積していたため、出土遺物の総量が多い。土器は木箱で668箱が出土している。

第13・14次調査（飛鳥藤原第110・116次）　　水落遺跡北側の調査を終えたのち、飛鳥265−１番地で実施した調査（2000・2001年）で、調査地は第９次調査区のすぐ北側の水田である。このうち、第13次は水田西半を、第14次は東半を調査対象とした。両次の調査は、第９次調査では確認できなかった遺跡北限の探索の目的としたものである。調査の結果、東西塀SA3893（第14次のＡ−２期）と、その北側で東西石組溝SD3896（同Ａ−１・２期）とを検出した。さらにＡ−３期には、SA3893を北へと付け替えてSA3895とし、SD3896を石組溝SD3950へと造り替えたことも判明した。これら同時期の塀と石組溝は、それぞれが石神遺跡北限の区画施設にあたるとみられる。南限の塀SA600からの南北距離は、SA3893までが174.95m、SA3895までが179.55mとなり、ともに大宝令大尺の500尺、小尺の600尺に近似するという（『紀要2001』75頁）。これらの調査により、Ａ期における石神遺跡の南北規模が確定した。

北限の区画施設

第20次調査（飛鳥藤原第150次）　　2007年から2008年にかけて、飛鳥267番地で実施した調査。その調査地は第14・17次調査区のすぐ東側の水田にあたる。次に述べる第21次調査とともに、石神遺跡の東限施設の確認を目指した調査である。その結果、Ａ期より古い石組溝等のほか、建物SB4300、塀SA3895、石組溝SD332・3950（Ａ期）、建物SB4311、塀SA4290・4301・4302（Ｂ期以降）を検出した。石神遺跡の北限を示す石組溝SD3896・3951（Ａ−１〜Ａ−３期）や東西塀SA3893（Ａ−２・Ａ−３期）は確認できず、SD3950が南北石組溝SD332に接続していることが判明した。結局、この調査では明確な東限の区画施設を見つけておらず、南北棟SB4300およびSD335（第１・２次）を遺跡の東限とみなすにとどまった。

第21次調査（飛鳥藤原第156次）　2008年から2009年にかけて、飛鳥275−１番地で実施した調査。1981年から続いた石神遺跡の継続的な発掘調査は、この調査で一旦終了した。検出遺構は、素掘溝SD4345（A1期）、建物SB4341、塀SA4327・4333・4325（A2期）、建物SB4340・4342、塀4326・4332・4363（A3期）、建物SB4334、塀SA4329・4330（B1期）、建物SB4343・4335・4336、塀SA4328（B2期）、建物SB4337・4338（C1期）等である。このうち、SD4345は基壇建物の雨落溝か、外装抜取痕跡とされ、A−１期礎石建の瓦葺建物が存在していた可能性がある。いっぽう、A期の東限施設とされたのはSA4326であるが、これは総柱建物SB4342に取り付くもので、この建物より南側は未発掘である。南方の第２次調査区でもSA4326の続きは未検出であるから、遺跡東限の区画施設と断じることはできない。飛鳥藤原第214次の調査成果に鑑みると、遺跡東限はさらに東方に位置する可能性が高い。

遺跡北方の調査　石神遺跡北方では、2002年から2007年にかけて、遺跡北限の北側で第15次調査（飛鳥藤原第122次）、第16次調査（第129次）、第17次調査（第134次）、第18次調査（第140次）、第19次調査（第145次）を相次いで実施している。これら一連の発掘調査は、石神遺跡北側の土地利用と、「阿倍山田道」の検出を目指したものである。このうち、第15次調査では、SD1347等から天武朝期の木簡約320点、削屑700点以上や、木製品等の出土を見たものの、石神遺跡北方がA期を通じて沼沢地であったことが判明した（『紀要2003』）。最北端にあたる第19次調査区では道路SF2607を検出し、「阿倍山田道」にあたる可能性を論じている（『紀要2007』）。しかし、本書とその続刊で報告するのは第13・14次と第20次調査以南であるため、ここでは詳しく述べない。

B　時期区分の見直しとその論理

旧変遷案の問題点

旧案は飛鳥時代の遺構群をA・B・C期に大別し、このうちのA期を１〜３小期に細分するものであるから、実際にはA−１・A−２・A−３期とB期・C期という５期区分であるといってよい。これは第４次調査以来、前年度調査の時期区分を部分的に修正しつつ継承されてきており、第21次調査時のもの（『紀要2009』）が最新である（Fig.165）が、ここにいたるまでには調査ごとに辻褄を合わせる必要があったようで、とくに第７次調査までの揺れが著しい（Fig.166）[2)]。そのいっぽうで、第３次調査まではA〜C期という時期区分を用いておらず、旧案のどこに位置づけるかがあきらかでない遺構が生じている。

しかし旧案の弱点は、その成立過程で繰り返した暫定的な改訂という、幾多の曲折にあるのではない。旧案は出土遺物の、ことに土器の年代を十分に踏まえたものではなかったのである。それには既往の遺跡観が強く表出しており、理念先行であった点は否めない。

新変遷案の樹立

本書で採用する新案は、旧案とは異なる材料と論理とに基づいて編成しているので、その画期も旧案のそれとは異なったものとなる。つまり新案は、旧案の枠組を保持するために、最小限の改良を施したという、単なる修正案ではないのである。石神遺跡は調査の進展にともない、今後東側へと拡張する公算が非常に大きい。したがって、新案に必要なのは、今後の調査の進展を見越した、年代的な枠組としての拡張性である。

さて新案では、おもに下記の事実に基づき、遺構群の相対年代を階層的に整理している。

①　柱穴や溝・土坑の重複から論理的に推定できる、遺構どうしの相対的な前後関係。



Fig. 165　既往の遺構変遷図（『紀要2009』 84頁掲載図の原データを一部改変）

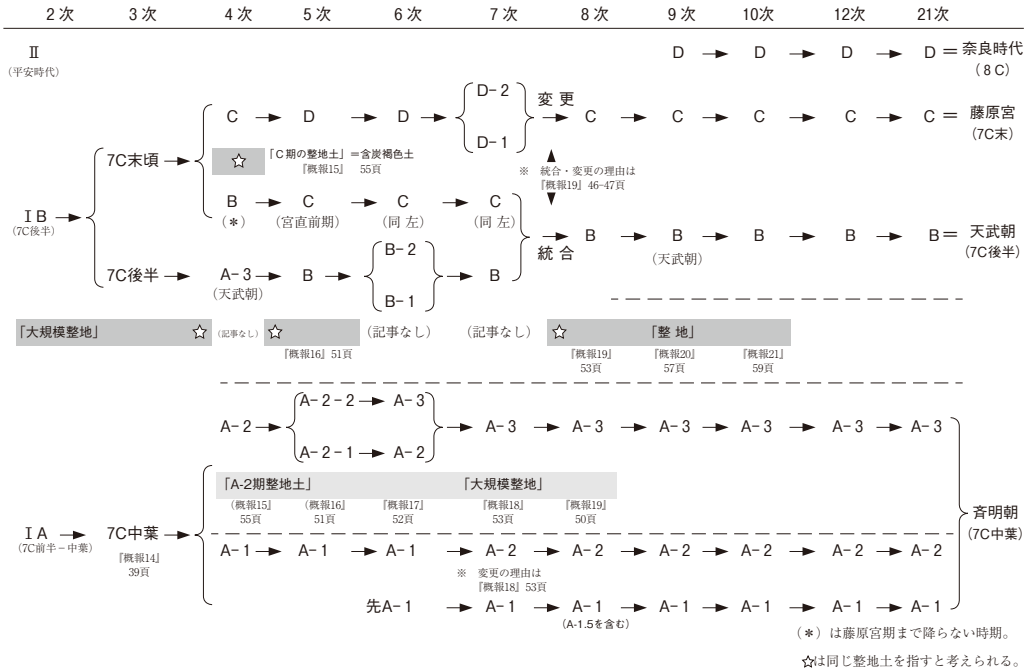


Fig. 166　遺構変遷案の変遷（第２次から第21次まで）

②　それぞれの遺構と、整地土Ａ・整地土Ｂとの層位的関係（ただし推定を含む）。

③　柱穴埋土の特徴に基づく、建物・塀どうしの同時期性の推定。

④　建物・塀の振れや柱間間隔の一致等に基づく、建物・塀どうしの同時期性の推定。

⑤　出土土器の年代。

これらのうち、おもに①・②を用いて年代的枠組の骨格を作り、③～⑤で各遺構の相対年代を絞り込んでゆくわけである。つまり前者が経糸となり、後者が緯糸となるが、遺構の相対年代を決定するにあたっては、前者がつねに優先される。新案では大規模な整地をともなう改作の時機や、建物等柱穴埋土の特徴、それに主要遺構で出土した土器の年代を参考にしつつ、旧案のＡ－１・Ａ－２期と、Ａ－３期およびＢ期との間に大きな画期を設ける案を採りたい（Fig.167）。「斉明朝の饗宴施設」とされるＡ－３期の遺構群と、これに続くＢ期（天武朝）とを異なる段階として区別していた旧案とは、この点が大きく異なるといえよう。

第２１４次調査の成果

令和５年度に実施した第214次調査は、飛鳥287番地（第１次調査区）における再発掘である。本書をなすための学報班が進んで計画したこの調査では、第３次調査区から東へと延びている遺跡南辺の掘立柱塀SA600が、SD335に沿って北へと折れていることを確認した。この発見の意義は、ある時期における石神遺跡の東南隅を確定したことにとどまらない。これまでは水落遺跡の漏刻と同時期と考えられてきたSA600が７世紀前半に遡ることで、Ａ－３期遺構群に含まれる遺構の年代を、個別に再検討する必要が生じたのである。と同時に、SA600に囲われた何らかの重要施設が、７世紀前半の石神遺跡に存在していた可能性が高いと考えられるようになった。つまり旧案のままでは、石神遺跡の機能や性格を正当に評価できなくなったのである。本書の執筆陣は、SD335やSE800を斉明朝よりも古く位置づける必要性には早くから気付いていたものの、この第214次調査によって、その正当かつ合理的な理由を得るにいたったといえる。石神遺跡の機能や構造を再考するための条件が、こうして整ったのである。

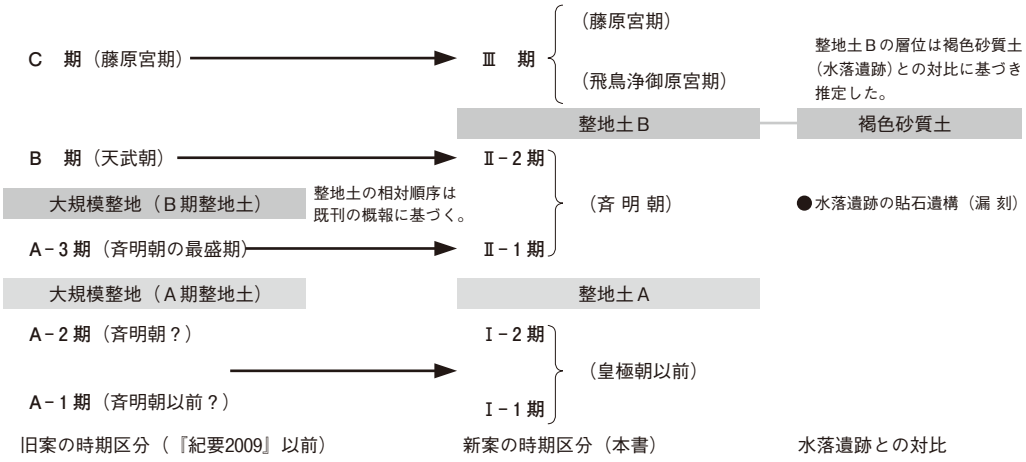


Fig. 167　新旧時期区分案の対応関係

C　遺構の相対順序

新案樹立の準備作業として、以下では第１次から第７次までの調査と、第214次調査の成果に基づき、検出遺構どうしの相対的な前後関係をまず整理しておく。

新案の骨組

Fig.168は遺構の相対順序を示す系統図である。図の下方には古い遺構を、上方には新しい遺構を配置してある。上向きの矢印線で繋いだ２つの遺構のうち、新しいほうを上方に配置した。これに対し、一体性や同時存在が考えられる複数の遺構群は、なるべく同じ高さで横に並列させた。また、土層図や遺構カードなどからは特定しづらいが、『藤原概報』等で言及している整地土の相対的な位置も、横方向の帯で表示した。各遺構は、下位から順にⅠ－１期・Ⅰ－２期、Ⅱ－１期・Ⅱ－２期、そしてⅢ期と、５段に配列した。本図で示した相対順序の案は、次節に述べる遺構変遷の新案に対応したものである。これは重複関係にない遺構どうしの前後関係や同時期性を正確に反映したものというよりは、論理的に構築できる１つの案にすぎない。したがって『石神遺跡発掘調査報告Ⅱ』では、この案を土台に修正を加える場合がある。

遺構群の相対順序

本書の報告範囲において、新案樹立の基礎となる相対順序は、おもに下記のとおりである。

① SB450（旧案のA期）→SB400（旧案のB期）
② SD335・435→整地土A→SD360・500
③ SD335→SA4645
④ SX550・SX555→SX540
⑤ SB530→SB510、SB530→SB520
⑥ SB745→SB735
⑦ SB750→SB736
⑧ SB810→SB811→SB830
⑨ SB810→SB770→SA780、SX700→SA670→SA780、SB770→SA780
⑩ SB811→SA781、SB820→SA781、SA990（第７次）→SA781
⑪ SD730→SA732

また、次の遺構どうしは、相互の一体性や位置関係等により、同時に存在したと解釈できる。

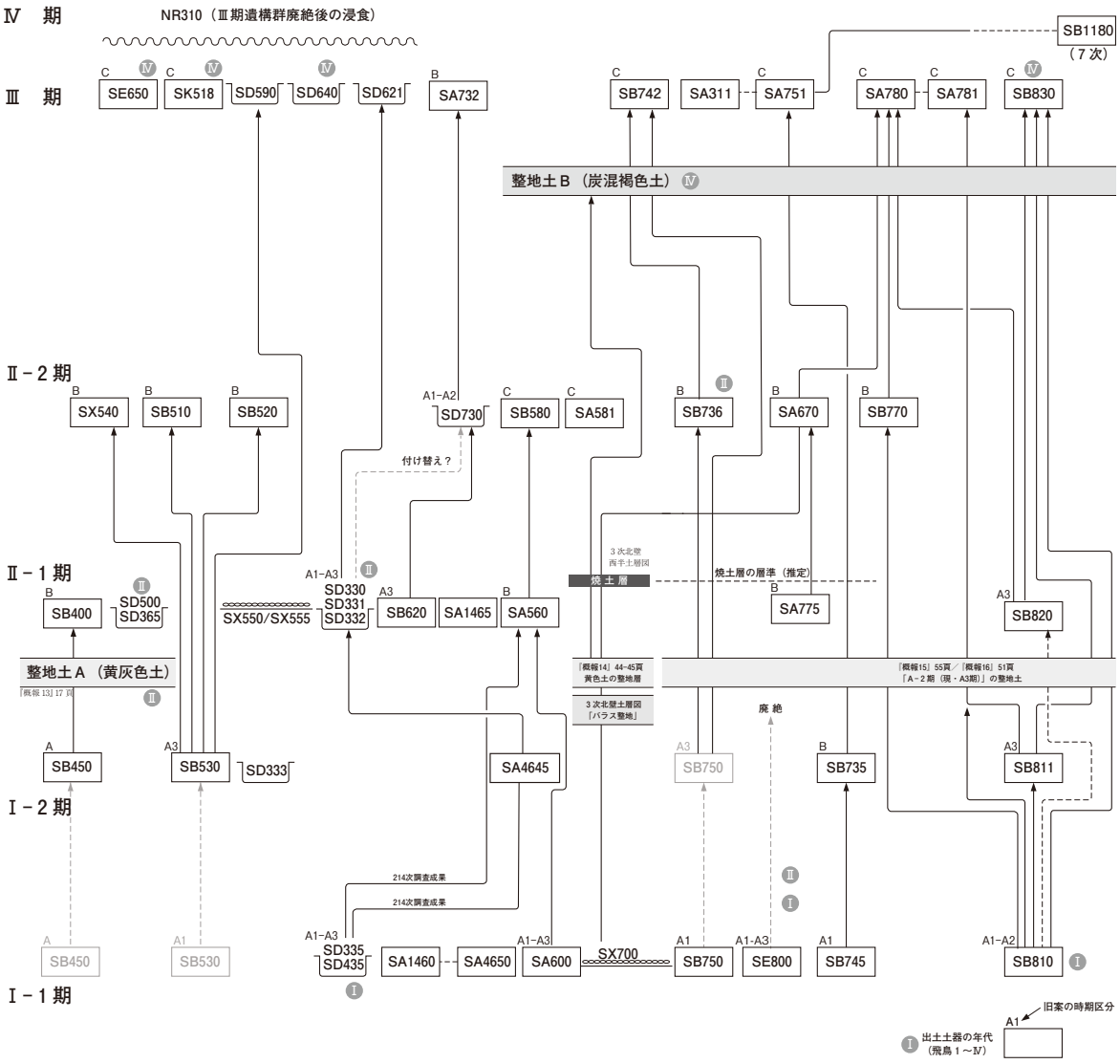


Fig. 168　遺構の相対順序（第１～４次調査他）

⑫　大垣SA600・4650と石組溝SD334・335・435（旧案のＡ期）

⑬　大垣SA600・4650とSA1460（両者間に未発掘部分あり）

⑭　井戸SE800と建物SB750・810およびSB750・SB811（旧案のＡ期）

⑮　SB620とSD332

⑯　回字形の殿舎群SB860・980・990・1000・1200・1220（旧案のＡ－３期）

⑰　SD347・640と塀SA311・751（旧案のＣ期）

紙幅の都合により、第５次から第７次までの遺構の順序は割愛するが、回字形の殿舎群（⑯）は重要施設であるから、あえてここに示しておく。これらの事実に基づき、次節では石神遺跡における時期区分や、遺構変遷案の見直しをおこなう。

１）例えば石組溝SD332は、第５・６次調査ではＡ－１期としているが、第８次調査ではその続きとみられる石組溝をＢ期に降らせている。本書ではSD332を旧案のＡ－３期・Ｂ期に降らせているから、既往の概報とはまた異なる案を示すことになる。

２）Fig.166に示すように、第４次調査時の「Ａ－３期」は天武朝とされており、第５次調査以降のＡ－３期よりも新しい段階を指しているので、注意が必要である。

第５節　遺　　構

A　柱穴埋土の類型化

Ⅳ章第１節で述べたように、第１～４次調査区では、基盤層の上に整地土Ａ、整地土Ｂという７世紀の盛土層が順に堆積する。基盤層は暗褐色砂礫で、Ⅰ期（７世紀前半）の遺構群はこの基盤層を掘り込んで造営される。整地土Ａは「山土を含む灰褐色土」や黄灰色砂質土、黄色粘質土などといった造成土で、最初の改作時の盛土である。この整地土Ａを掘り込んでⅡ期（７世紀中葉から後半まで）の遺構群が造営された。さらに、２度目の改作時の盛土である整地土Ｂは「含炭褐色土」と称されるように、炭化物を多く含む褐色土または灰褐色土である。この整地土Ｂを掘り込んで、Ⅲ期（７世紀後半～末まで）の遺構群が造営されたと考えられる。ただしⅢ期の遺構は、整地土Ｂ相当層除去後に検出した例が多い。

一般に掘立柱建物や塀の柱穴は、その掘方埋土に基盤層や整地土に由来する土塊を含むいっぽうで、柱痕跡または抜取穴は、これを直接覆う整地土で埋まったと想像できる（Fig.169）。石神遺跡の調査記録では、整地土と建物等柱穴との層位的関係があきらかでない場合もあるため、柱穴埋土の類型化によって、建物等のおよその時期と、整地土との関係を推定できると考えられる。この見通しのもと、第１～４次調査の各建物および塀の遺構について、柱掘方および柱痕跡（または抜取穴）の埋土を再整理した（Tab.20・21）。なお、調査日誌や遺構カードなどでは、柱穴埋土に含まれる土塊などを指すのに「山土」や「黄色山土」という単語を頻繁に用いている。第214次調査では、この「山土」・「黄色山土」が、おもに黄色系の真砂土（花崗岩風化土）やその土塊を指していることが判明したものの、整地土Ａがこれら山土や黄色粘土の土塊を含まない灰黄褐色土であることもあわせて確認した。そのため、この山土は遺跡の広範囲に造成された整地土というよりは、建物の低い基壇や床の仕上げ、塀の基壇に相当する部分に局所的に設けられた盛土と理解した。石神遺跡の柱穴埋土に山土が含まれる事例が少なくないのは、おそらくこのような施工法と関係があると考えられる。

山　　土

柱穴埋土の類型

柱穴の断面図や遺構カードを再整理した結果、例外はあるものの、以下のような柱穴の類型化と時期の対応傾向が確認できた。

Ⅰ類：柱掘方埋土に黄色等の粘土ブロックや炭化物を含まないが、柱抜取穴埋土に黄色等の粘土ブロックを含む

Ⅱ類：柱掘方埋土に黄色等の粘土ブロックを含み、柱抜取穴（もしくは柱痕跡）埋土に炭化物を含む

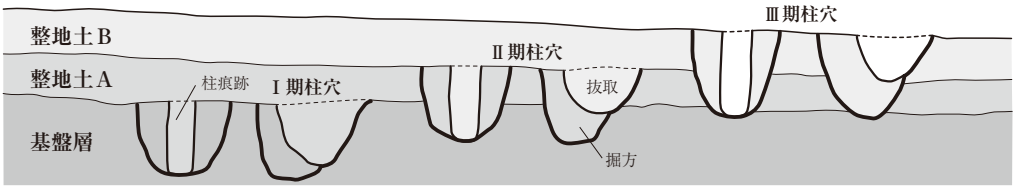


Fig. 169　石神遺跡における柱穴埋土の模式図

Tab. 20　掘立柱建物の柱穴埋土一覧

調査次数	遺構番号	柱穴寸法（単位m）	柱穴深さ（単位m）	埋土の特徴（掘方）	埋土の特徴（柱痕跡・一部抜取）	時期
1次	SB301	1.0	0.6～0.7	黄灰色粘土ブロック入り暗灰色砂	黄灰色粘土入り暗灰色粘土	Ⅰ-2
2次	SB400	1.2	0.9～1.0	暗褐・灰褐色粗砂、一部礫混じり	抜取：黄褐色粘土含む灰褐色粘質土、一部礫混	Ⅱ-1
2次	SB440	0.4～0.6	—	断割なし、埋土不明	断割なし、埋土不明	Ⅳ
2次	SB450	0.9～1.1	0.9～1.0	黄褐・暗褐・灰褐色粘質土、粗砂	灰褐色粘質土（黄褐色ブロック混じりもあり）	Ⅰ-2
2次	SB459	0.4	—	断割なし、埋土不明	断割なし、埋土不明	Ⅳ
2次	SB460	0.4～0.5	—	断割なし、埋土不明	断割なし、埋土不明	Ⅳ
3次	SB510	0.7～1.1	0.5～0.6	黄色粘土ブロック混じり、暗褐色砂質土もしくは粘質土	黄色粘土ブロック混暗褐色砂・粘質土	Ⅱ-2
3次	SB520	1.0～1.3	0.7～0.9	暗褐色砂質土もしくは粘質土、一部黄色粘土ブロック混じり	黄色粘土ブロック混暗褐色粘質土	Ⅱ-2
3次	SB530	1.1～1.8	0.8～1.3	暗灰・暗褐色砂質土または粘質土一部黒色・黄色粘土ブロック・礫・砂礫混	黄色粘土ブロック混暗褐色粘質土	Ⅰ-2
3次	SB580	0.7～0.9	0.5～0.9	黄色粘土ブロック混じりの暗褐色粘質土	暗褐・灰褐色粘質土	Ⅱ-2
3次	SB620	1.4～1.8	0.8～1.2	暗褐色砂礫	抜取穴　　：黄色粘土 一部柱痕跡：暗褐色砂礫	Ⅱ-1
4次	SB735	1.2（隅柱） 0.7～1.1（その他）	1.5（布掘深さ）	暗褐・褐色砂礫土（布掘埋土）	黄褐・黄色粘土	Ⅰ-2
4次	SB736	1.2～1.6	0.8～1.0	身舎：山土含む褐色砂礫・暗褐色粘質土 廂　：褐色砂質土・砂礫土	身舎：淡黄褐色粘質土（黄色粘土山土含） 廂　：含炭褐色土（赤褐色山土多量に含）	Ⅱ-2
4次	SB742	0.9～1.2	0.5～0.9	暗黄褐色粘質土、炭化物・黄橙色の山土含む	未検出	Ⅲ
4次	SB745	1.2	0.6～1.2	暗褐色粘質土	黄色粘土（山土）入り暗褐色粘質土	Ⅰ-1
4次	SB750	1.2～1.6 1.0（間仕切穴）	0.9～1.5 0.6（間仕切穴）	側柱　：灰褐色砂質土・粘質土 間仕切：山土を少量含む暗褐色粘質土・砂質土	抜取穴；黄・赤褐色粘土ブロック（山土）を多量に含む褐色土	Ⅰ-1
4次	SB770	0.9～1.1	0.3～0.8	未検出	灰褐色粘質土（山土含む）	Ⅱ-2
4次	SB810	1.3～1.4	0.5～1.1	暗褐色・暗灰褐色の砂質土・粘質土	黄色・赤色粘土を含む黄褐色粘質土	Ⅰ-1
4次	SB811	1.2	0.5～0.7	暗褐色砂質土・粘質土	黄色粘土混じり暗灰褐色粘質土	Ⅰ-2
4次	SB820	1.1～1.3	0.8～1.2	山土・黄色粘土ブロックを含む灰褐色砂質土・粘質土	炭・焼土含む赤褐色粘質土	Ⅱ-1
4次	SB830	0.5～0.7	0.4～0.6	礫・山土・炭を含む褐色粘質土	未検出	Ⅲ

Tab. 21　掘立柱塀の柱穴埋土一覧

調査次数	遺構番号	柱穴寸法（単位m）	柱穴深さ（単位m）	埋土の特徴（掘方）	埋土の特徴（柱痕跡・一部抜取）	時期
1・3・214	SA311	0.7～1.0	0.3～0.7	1次：暗褐色土 3次：黄色粘土ブロック混の暗褐色砂質土 214次：黄・橙色粘土ブロックを含む黄褐色粘質土	1次：黄褐色土 3次：青灰褐色粘質土（柱痕跡ヵ） 214次：黄褐色粘質土（柱痕跡）	Ⅲ
2	SA380	0.7～0.9	0.4～0.6	バラス（礫）・黄褐色土ブロック混灰褐色土もしくは褐色土（掘方か抜取か不明）		Ⅲ
2	SA420	0.4	—	断割なく埋土不明	断割なく埋土不明	Ⅳ
2	SA461	0.3～0.6	—	断割なく埋土不明	断割なく埋土不明	Ⅳ
2	SA462	0.3～0.6	—	断割なく埋土不明	断割なく埋土不明	Ⅳ
214	SA4650	1.1	0.5～1.1	バラス混灰褐色砂質土	黄褐色土	Ⅰ
3・214	SA560	0.8～1.2	0.8～1.2	暗褐・灰褐・黄褐色砂質土一部礫混じり	暗褐色粘質土、一部黄色粘土ブロック混じり	Ⅱ-1
3	SA581	0.7～1.1	0.5	黄色粘土ブロック混灰褐色砂質土	黄色粘土ブロック混灰褐色砂質土	Ⅱ-2
3・214	SA600	1.4～1.9	1.8～2.0	礫を含む暗褐・灰褐色砂質土	柱痕跡：黄色粘土ブロック含む黄褐・茶褐色砂質土 柱抜取：黄色粘土ブロック含む暗黄褐・茶褐色粘質土	Ⅰ
3	SA617	0.8	0.6	黄灰・暗褐色砂質土	未検出	Ⅱ-1
3	SA622	0.8～1.1	0.3～0.5	黄色粘土ブロック混黄褐・暗褐色砂質土	未検出	Ⅲ
3	SA670	3次0.6～1.0 4次0.7～1.5	3次0.6 4次0.5～0.8	3次：黄灰色粘質土 4次：暗褐色砂質土	3次：黄色・黄灰色粘土、黄色粘土ブロックを含む 4次：褐色粘質土（赤褐色の山土）	Ⅱ-2
4	SA731	0.8～1.1	0.6	バラス・暗褐色土の混じる暗褐色粗砂	未検出	Ⅲ
4	SA732	0.8～1.4	0.5～1.0	黄灰・暗褐色の砂混粘質土 礫・黄色土・炭・山土含む	小礫含む暗灰色砂質土（1基のみ）	Ⅲ
4	SA751	0.8～1.0	0.5～0.9	黄色粘土と褐色粗砂の互層、山土・炭含む	炭化物・焼土が入る黄褐色粘土	Ⅲ
4	SA775	0.5～1.0	0.3～0.6	山土を含む褐色粘質土	黄褐色粘質土	Ⅱ-1
4	SA780	0.9～1.4	0.6～0.7	含炭褐色土	山土混含炭褐色土	Ⅲ
4	SA781	1.1～1.3	0.3～0.9	土師器・須恵器・炭・山土を含む暗褐色粘質土	未検出	Ⅲ
1990-1	SA1460	1.0～1.6	0.8	茶褐色粘質土と灰褐色砂質土の互層	山土・灰黒色粘土を含む黄褐色砂質土	Ⅰ
1990-1	SA1465	0.8～1.3	0.6～0.9	山土を含む暗褐色土と明黄褐色土の互層	暗褐色粘質土	Ⅱ
214	SA4645	1.0～1.2	0.8	礫混灰黄褐色砂質土	黄色粘土ブロックを含むにぶい黄褐色砂質土	Ⅰ-2
214	SA4646	0.8～1.4	0.9	不明	橙色の粘土塊を多く含むにぶい黄褐色礫混粘質土	Ⅱ-1
214	SA4647	0.8～1.0	0.6	一部に小礫を含む暗褐・黒褐色粘質土	黄色粘土ブロック・土器片を含む暗褐色粘質土	Ⅰ-1

Ⅲ類：柱掘方埋土に山土や炭化物を含む（埋土が整地土Ｂに似る）

本書では、これら埋土の特徴に加えて、柱穴の検出面からの深さや遺構の重複関係とあわせて、各遺構の時期を決定した。第５次調査以降でも、今回の柱穴埋土の類型化を念頭におき、基本層序や整地土の状況をふまえて、各遺構の時期を引き続き検証していく必要がある。

Ｂ　石組溝の造営工法と機能

第１～４次調査区内では複数の石組溝を検出した。それらのうち、SD334・335・435（以下、SD334等と略称）とSD330・331・332（以下、SD330等と略称）とでは底石の有無や側石の積み方など、石組溝そのものの構築方法が異なる。これら２系統の石組溝は、これまではＡ期を通じて併存していると考えられてきたが、本書では前者が古く、後者が新しいことをあきらかにした。出土遺物の年代観もあわせると、両者に時期差があることは第Ⅳ章でも述べたとおりである。ここでは再度、両者の相違点を整理・比較して考察を加えたい。

第Ⅳ章でも述べたとおり（第Ⅳ章Fig.23・24・34・35参照）、SD334等は底石を敷かず、側石には幅30～70㎝、高さ30～40㎝の自然石を３～４段横積みして造られる。溝の断面形状は上端から下端に向かって幅を狭める逆台形を呈する。いっぽう、SD330等は、底石を敷き、側石の最下段に高さ60～70㎝、幅50～60㎝の大きな一枚石を立て並べている。側石上部の数段分は流路NR310によって壊されているとみられるものの、SD334等のような逆台形断面ではなく、側石が垂直に立ち上がっている。積石の大きさや底石の有無など、構築方法の相違は明白である。

加えて、石組溝の屈曲部分にも、その形状に相違が認められる。SD334等の場合は、側石が緩やかな曲面を描いて緩やかに曲折しているが、SD330等はほぼ直角に溝を屈折させている。

これらの相違点は、単に遺構の時期差によるものだけではなく、石組溝の機能の差異によるものと考え得る。ひとつに、石神遺跡の区画における石組溝の位置が挙げられよう。第Ⅳ章でも述べたが、SD334等は、Ⅰ期の区画塀である東西塀SA600および南北塀SA4650に並行して造営される。SA4650が石神遺跡1990-１次で検出した東西塀SA1460に接続すると仮定すると、区画塀と石組溝はともに遺跡の外郭を構成していることから、両者が一体的に機能していたことがあきらかである。つまり、SD334等は遺跡の区画外に設けられた基幹水路の役割があり、区画塀と一体的に、高い計画性のもと施工されたと考えられる。

Ⅰ期の基幹水路

これに対してSD330等は、遺跡南方から引水している点は同じであるものの、Ⅱ期の南限区画施設である東西塀SA560の南手前で西へ屈折し、約７m西進したのち、短区間で再び北折してSA560基壇を貫通して北進している。くわえて、側石に大きな一枚石を用い、底石を敷設するなど、SD334等よりも高い意匠性を有し、区画内に設けられた基幹水路として機能していたといえる。

Ⅱ期の基幹水路

第５次調査区以北についても、基幹水路とみられる石組溝が多数検出されている。今後も出土遺物や遺構の時期にくわえて、その構築方法や意匠性について検証を深めていくことで、石神遺跡だけでなく、７世紀代の飛鳥地域における石組溝の変遷過程をあきらかにすることができると考える。

C　第１～４次調査区の遺構変遷

遺構の重複関係や整地土との層位的関係からみた相対順序、出土遺物の年代観、柱穴埋土等を再検討してきた。再調査である第214次調査を実施し、未検出の遺構を新たに検出したことや、整地土の上下関係を再認識したことも踏まえて、旧来の時期区分を見直し、新たな時期区分を設定した。ここでは、『石神遺跡発掘調査報告Ⅰ』として、第１～４次および石神遺跡1990-１次調査区の範囲（以下、対象地と略称）に限定して、遺構変遷をまとめておく（Fig.170・171）。なお旧案では、遺構変遷をＡ・Ｂ・Ｃの３期に分け、さらにＡ期を１～３小期に分けるという５期区分を踏襲してきたが、以下に述べる新案では、７世紀以降をⅠ～Ⅳ期に大別する。旧案を継承しないのは、①これが飛鳥藤原第214次調査の最中に考案された、最新の見方に基づくものであり、②旧案と新案とでは区分の仕方が異なるため、その呼び方も変えることが望ましいこと、③旧案と同じようにアルファベットを符牒に用いたのでは、新旧両案の区別において、必ず混乱が生じるためである。

６世紀以前　対象地の東端部分を中心に、古墳時代中期の竪穴建物SI315やSI318がある。これらの竪穴建物は、周辺の既往調査で検出したそれらと同様に、方眼北に対して約25°西へ振れている。飛鳥京として開発される以前にも、人々が当地に集住していたことがわかる。

さらに、対象地西半には、斜行溝SD575・576・577がある。これら斜行溝からは古墳時代の須恵器や羽口だけでなく、瓦片も出土したことから、飛鳥寺創建前後（６世紀末から７世紀前半）の遺構と考えられる。溝埋土には流水を示す痕跡はなく、石神遺跡造営直前の木樋を据えた暗渠状の導水施設であった可能性もある。

石神遺跡造営以前の遺構

Ⅰ　期（７世紀前半）　層位的には整地土Ａの下位で検出できる遺構群の時期。旧案のＡ-１・Ａ-２期に相当する。Ａ-１期を斉明朝よりも古くし、Ａ-２・Ａ-３期を斉明朝にあてる見方が『紀要2009』で示されたが、本書ではこの案を踏襲せず、Ⅰ期を推古朝から皇極朝までの７世紀前半にあてる。建物等の柱穴埋土は、前述のⅠ類に合致するものが多い。建物等の重複関係から１期と２期に細分する。

Ⅰ-１期　掘立柱塀SA600やSA4650によって、区画の南辺および東辺が囲われる時期。これら柱穴の規模は藤原宮大垣のそれに匹敵し、まさに大垣というにふさわしい。このうち、東辺を縁どる南北塀SA4650は、石神遺跡1990-１次で検出した東西塀SA1460に接続する可能性も指摘できる。これらの区画塀のすぐ外側には、基幹水路とみられる石組溝SD334・335・435がある。この石組溝と区画塀は並行して遺跡東方へつづいており、両者は一体的に機能していたことがあきらかとなっ

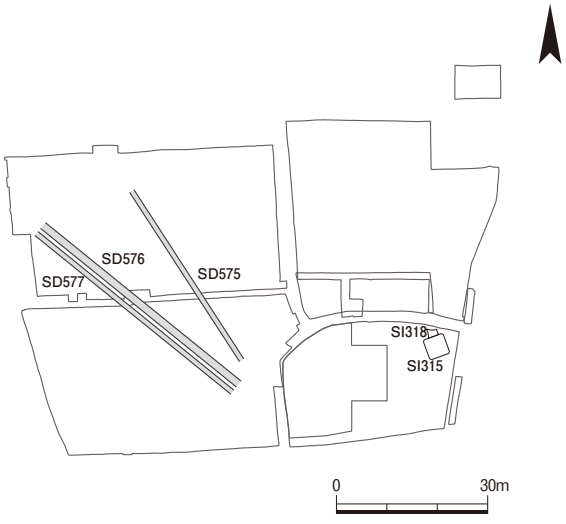


Fig. 170　６世紀以前の遺構　1：1,500

た。SA600等の区画塀の内側には、大規模な井戸SE800と、その東西に建つ東西棟の掘立柱建物SB750・810がある。SB750の南には南北棟建物SB745も建つ。井戸の南、SB745の西には方形区画SX760が設けられ、区画施設の内側にはSX700・771のような石敷が施されていたと考えられる。なお、井戸SE800は、井戸枠の埋立土から出土した土器が飛鳥Ⅰ・Ⅱに属することから、Ⅰ期の間に廃絶したものとみられる。

東西塀SA600は、旧案ではA－1～A－3期の区画施設とされ、斉明朝まで存続したと考えられたが、ここではⅠ－1期の南面大垣として再認識した。つまりSA600は、斉明朝まで存続しない遺構である。また、これより北側は大垣の内側となり、何らかの重要施設が存在していた可能性が高い。SA600が北に折れてSA4650となる地点は、7世紀前半のある時期に存在した施設の東南隅にあたる。ここは2024年現在で確認できている、石神遺跡で唯一の出隅になる。そのいっぽうで、SA1460やSD435がさらに東方へ延びていることを考慮に入れると、SA4650とSA1460との交点が入隅となって、Ⅰ－1期の区画が東側へと張り出す可能性もある。この入隅の確認は将来の調査に俟たねばならないが、石神遺跡の範囲は、今後さらに東へと広がると推定される。

7世紀前半の区画東南隅

Ⅰ－2期　Ⅰ－1期から、建物の建て替えや区画が延長される。特に、石組溝SD334・335・435を埋め立てたのち、SA600の東側に東西塀SA4645を増築する。SA4645の柱穴規模はSA600と比して小規模であり、Ⅰ－1期の区画施設に付け足すかたちで、区画を東へ拡張したものと考えられる。

区画を東へ拡張

SB750はⅠ－1期から存続するが、SB810は東西掘立柱建物SB811に、SB745は総柱建物SB735に建て替えられる。さらにSA4650より東の拡張した区画にはSB450が建てられる。南限区画施設SA600およびSA4645よりも南側には、大規模な東西棟建物であるSB530などが建設されている。

Ⅰ－2期はⅠ－1期の区画施設や建物も一部残しながら、区画をさらに東に拡張し、区画内の建物の建て替えや区画外に新たに建物を建設するなど、区画内外の施設の更新と充実を図った時期といえるだろう。

Ⅱ　期（7世紀中葉から後半まで）　Ⅰ期の遺構を廃したのち、1回目の大改作を経て始まる段階。その遺構は整地土Aの上面か、その同一層準で検出できる。整地土Bよりは層位的に下位の遺構群であると考えられる。建物や塀の柱穴埋土は、前述のⅡ類と同じ特徴を示す。旧案ではおもにA－3期からB期に位置づけていた遺構を多く含むが、新案ではA－3期とB期を大別せず、同じⅡ期の中で1期・2期に細分するにとどめた[1)]。斉明朝の遺構は、このⅡ期遺構群に含まれると考えられる。なお旧案では、B期を天武朝にあてたが、新案では出土土器の年代観にもとづき、Ⅲ期が飛鳥浄御原宮期から藤原宮期となる。

Ⅱ期の建物群を建てたのは、Ⅰ期の遺構を廃し、整地土Aによる造成をおこなった直後である。建物の建て替え等により、Ⅱ－1期（7世紀中葉）と、Ⅱ－2期（7世紀後半）に細分できる。両時期を明確に区分する整地土はないため、遺構の重複関係等によって区別した。そのため、遺構の重複関係がないものについては、Ⅱ期を通して存続した可能性もありうる。

Ⅱ－1期　Ⅰ期の南限区画施設であるSA600がSA560に建て替えられる。SA560は対象地のさらに東西外へつづくとみられる。このSA560の柱間を通るように、区画内を流れる基幹水路

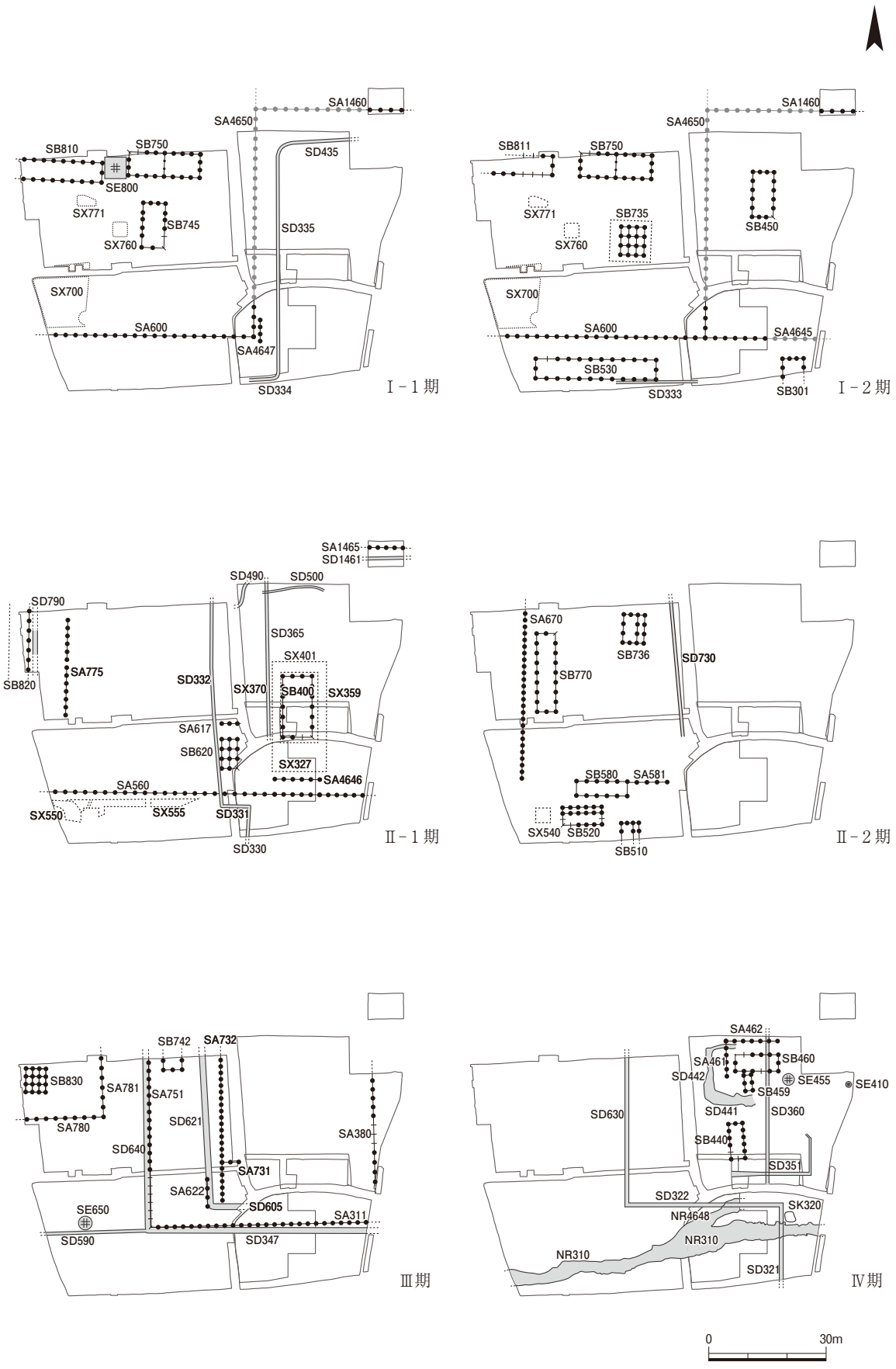


Fig. 171　第１～４次調査区の遺構変遷図　１：1,500

の石組溝SD330・331・332が新たに設けられ、対象地のさらに北外へとつづく。対象地東半には、周囲に石敷をめぐらせた南北棟建物SB400があり、その南にはSA560との間に東西柱列SA4646がある。その他にも区画内の間仕切塀とみられる南北塀SA775や、第５次調査以北で主に検出されている南北方向の長廊SB820がある。またSA560の南には石敷SX550・555がある。

回字形の建物群

なお、第５次調査区から第８次調査区にかけて検出した回字形の建物群SB860・980・990・1200・1350は、このⅡ－１期に属すると考えられ、この点では旧案を踏襲している。そのいっぽうで、旧案ではＡ－３期まで存続させていた一部の遺構（SD335等・SE800）は、本章１節で述べたとおり、これよりも古く位置づけることになった。

Ⅱ－２期　Ⅱ－１期の遺構群が一部で建て替えられる。特にSA560を廃して、SB580やSB520を建設したことで、遺跡南の明確な区画施設は存在しなくなる。さらにSD330・331・332は石組溝SD730に付け替えられ、対象地西辺には南北塀SA670が設けられる。その他には東面に廂を設けた南北棟建物SB736やSB510が新たに建設された。

明確な区画施設の消失

Ⅱ期の南限区画施設にはSA600の後身といえるSA560があるものの、これまでの区画南外にも石敷が敷設されていることや、区画外に位置するSD330・331も底石を敷設して意匠性を高めて造営されている点を考えると、SA560はⅠ期のSA600・4650のような内外を明確にする区画施設というよりは、大きな大区画の中に位置する間仕切りの区画塀と考えられる。Ⅱ－１期は旧案のＡ－３期にあたり、いわゆる斉明朝の時期にあたる。石神遺跡の南側に位置する水落遺跡も含めた大きな区画が存在し、SA560はその大区画内を南北に二分する区画施設であった可能性も十分にあろう。飛鳥寺やその寺域北面道路との関係など、さらに検討を深める必要もあるが、ひとつの仮説としてここで取り上げておきたい。

斉明朝の大区画

Ⅲ期（７世紀後半から末まで）　旧案のＣ期（概報では「藤原宮期」ともいう）にほぼ相当する段階。Ⅱ期の遺構を廃し、２回目の改作によって始まる。このときの造成土である整地土Ｂには、炭化物や遺物が多く含まれる。出土土器は膨大で、いずれも飛鳥Ⅳに属することから、天武朝期（飛鳥浄御原宮期）から藤原宮期にかけての段階にあたる。建物や塀の柱穴埋土は、前述のⅢ類と同じ特徴を示す。

小区画による構成

Ⅰ・Ⅱ期とは異なり、区画塀SA311・751やSA780・781によって囲われた小区画ができる。SA780・781の内側には総柱建物SB830が建つ。SA311・751の区画内は、南北塀SA732およびSA380によってさらに細分されていたと考えられ、その細分された区画内には南北棟建物SB742がある。

Ⅲ期では石組溝は未検出で、区画施設に併走するSD347・640や区画内を流れるSD605・621といった素掘溝がある。これまでⅠ・Ⅱ期で主要な水路として検出されていた石組溝がⅢ期では未検出であることは、次項で詳述するように、遺跡の性格の変化が要因として挙げられよう。

Ⅳ期（奈良時代以降）　Ⅳ期は奈良時代から14世紀代までの遺構を含む。Ⅲ期の遺構群が廃絶したのち、奈良時代以降の流路NR310が対象地の北東から南西に向かって流れている。NR310は拳大から人頭大の礫を多量に含み、扇状地面上を東から西へと流下した土砂で埋没した流路の跡である。石神遺跡において奈良時代の遺構は希薄であり、平城遷都後早くも石神遺跡周辺では、人々の営みは失われている。代わりに東方から土砂が供給されることで、石神遺跡は浸食を受け、あるいは土砂が堆積する場に転じた。回復した自然の営力が、遺跡を大きく破壊す

流路NR310

るようになったのである。石造物が小字石神の水田に埋没したのも、おそらくこの前後の時期であろう。

ところが平安時代になると、掘立柱建物SB440・459が建ち、素掘溝SD321・322・630が設けられるなど、人々の営みが再び当地に戻る。さらに14世紀代になると、掘立柱建物SB460や建物を取り囲む掘立柱塀SA461・462、区画を示す素掘溝SD351・441・442等の遺構があり、区画をともなった宅地が建設される。これは石神遺跡周辺での人々の定住を示している。　**宅地の出現**

本書では、以上のように遺構変遷をまとめた。当地が大規模に造営されたのは７世紀前半であり、SA600のような藤原宮の大垣に匹敵する規模の区画施設をともなった大規模施設が存在した。さらにこの大規模施設は、外郭に一体的に機能した区画施設と基幹水路を設け、非常に高い計画性を有していたと考えられる。その後、７世紀前半のうちに、さらに区画を東へ拡張させ、一部で建物の建て替えや新築をおこない、施設を充実させていたことが読み取れる。７世紀中葉頃には、Ⅰ期の施設を廃して整地土を施し、新たに石組溝や石敷をともなった掘立柱建物等を建設した。南限の区画施設の位置はⅠ期の位置をほぼ踏襲し、遺跡東方まで延びており、Ⅰ－２期で東へと拡張した区画も踏襲している可能性が高い。７世紀後半から末には、Ⅱ期の施設を廃して整地土Ｂを造成した後にⅢ期の施設群が造営され、Ⅰ・Ⅱ期とは異なって、より小規模な区画を造営していた。

第５次調査以降においても、遺構の重複関係等を整理することで、さらに変遷過程は細分化される可能性があり、今後も引き続き検討を加えていく必要がある。しかしながら、７世紀代の各遺構はこれまで調査をおこなってきた石神遺跡の範囲よりも、さらに東方へ遺構が連続していることがあきらかである。第214次調査のように必要に応じた再発掘調査や石神遺跡東方の発掘調査を並行しておこなうことは、遺跡の性格追究に向けて必要不可欠であると考える。

旧案からの変更点　ここまでは石神遺跡の遺構群をⅠ～Ⅳ期に整理し、旧案に代わるべき新たな遺構変遷案とした。既往の概要報告に見えているとおり、旧案では斉明朝、天武朝、そして「藤原宮期」という年代的な枠組が強固であったが、その割には位置づけの根拠が不明確な遺構も少なくなかった。新案ではこの点を改めるべく、出土土器の年代も考慮に入れながら、主として整地土との層位的関係や遺構どうしの重複関係、それに柱穴埋土の特徴などから、７世紀における３つの段階（Ⅰ～Ⅲ期）を識別した。とはいえ結果的に、遺構の年代的位置づけを変更する必要はあまり生じなかった。例えばA－３期からⅡ－１期へというように、旧案を踏襲しつつ新案へと無理なく、順当に編入できた遺構が少なくなかったのである[2)]。

しかしながら、新案を樹立する過程で、その年代的な位置づけを大きく見直す必要が生じた遺構もいくつかある。とくにその中には、斉明朝の重要遺構と考えてきたものも含まれる。そこで以下、旧案から新案へと、年代的位置づけに大きな変更が生じた遺構を挙げておこう。　**年代的位置づけを大きく変更した遺構**

SD334・335・435　A－１期～A－３期（斉明朝）　→　Ⅰ－１期（斉明朝までに廃絶）

SA600　A－１期～A－３期（斉明朝）　→　Ⅰ－１・２期（斉明朝までに廃絶）

SE800　A－１期～A－３期（斉明朝）　→　Ⅰ－１期（斉明朝までに廃絶）

SB750　A－１期～A－３期（斉明朝）　→　Ⅰ－１・２期（斉明朝までに廃絶）

SB810　A－１期～A－２期　→Ⅰ－１期（斉明朝までに廃絶）

SB811　A－３期（斉明朝）　→　Ⅰ－２期（斉明朝までに廃絶）

SD330・331・332　A－１期～A－３期　→　Ⅱ期（斉明朝に造営）

SB745　A－３期（斉明朝）　→　Ⅰ－１期（斉明朝までに廃絶）

SB735　B期（天武朝）　→　Ⅰ－２期（斉明朝までに廃絶）

SA751　B期（天武朝）　→　Ⅲ期（飛鳥浄御原宮期から藤原宮期）

全体的には、斉明朝まで存続すると目された遺構のいくつかが、それよりも古くなる場合が多い。つまりA－３期からⅠ期へと位置づけを変更した場合が多かったといえる。そのいっぽうでSB400は、新案ではⅡ期に位置づけても矛盾が生じないことから、SD330～332と同じく斉明朝の遺構として再解釈した。同様に、B期の南限区画塀SB560も、新案では水落遺跡の漏刻と同時期とした。『石神遺跡発掘調査報告Ⅱ』にも引き継げるよう、新案にはさらに修正をくわえつつ、実用的な枠組へと育てていくことになろう。

D　石神遺跡における水路網と機能の変化

上述の遺構変遷案からは、石神遺跡の７世紀代の水路網が、Ⅱ期以前とⅢ期以後で様変わりしていることが読み取れる（Fig.172）。Ⅰ・Ⅱ期の水路網はいずれも第１次調査区西南隅を起点とする石組溝で、Ⅰ期の石組溝SD334・335・435は区画外郭に沿って東方へ進む。またⅡ期の石組溝SD330・331・332は鉤形に折れつつ、区画内を北方へと延びている。付けくわえるならば、石神遺跡造営直前の遺構とみられる斜行溝SD575・576・577も、同様にこの起点付近から北西へ向かって造営されている。つまり、Ⅱ期以前の石神遺跡の水路網の起点がこの場所に集中するのである。この起点以南の引水経路は、地形や飛鳥寺の存在を考えれば、飛鳥寺西方に存在していたことは間違いないであろうし、その取水源は和田萃が唱えたように、飛鳥京跡苑池の北西、弥勒石の近くにある「木葉堰」とするのがやはり有力である。

いっぽう、Ⅲ期の水路網は素掘溝で、SD347・640のように石神遺跡の東方から流入し、第３次調査区内で折れて北へと延びる。石神遺跡東方は未調査区も多く、これらの溝の引水経路は不明だが、飛鳥寺寺域内もしくは八釣川や中の川といった東方の河川からの引水が推定される。

石組溝から素掘溝へ

以上のように、Ⅱ期以前とⅢ期以後、つまり７世紀後半頃を境に、石神遺跡周辺の水路網とその引水経路が大きく変容したことがあきらかである。そして溝の構築方法も石組溝から素掘溝へと変化している。本書では、この変容の要因として、石神遺跡の性格の変化と、それに関連した溝機能の変化をあげておきたい。

前項でも触れたように、Ⅰ期の石神遺跡は大垣並の区画塀を外周に構えた大規模施設であり、Ⅰ－２期で区画東南隅を拡張している。この拡張された南限区画塀の位置は、Ⅱ期においても踏襲され、区画内には建物群が回字形に配置されている。さらに、Ⅱ期の施設群は、水落遺跡も含めたさらに大規模な区画をともなっていた可能性もある。いっぽう、Ⅲ期になると、整地土Bによる大規模な造成をおこない、Ⅰ期・Ⅱ期よりも区画がより小さくなっていることから、遺跡の性格が一変したことが読み取れる。

石神遺跡の性格の変容は、溝の構築方法や機能にも表れている。構築方法では、Ⅰ・Ⅱ期の意匠性を備えた石組溝から、Ⅲ期の素掘溝へと変化する。くわえて機能では、Ⅰ・Ⅱ期の石組溝は区画内外に設けられた基幹水路であり、遺跡全体への導水の役割もある。いっぽうで、Ⅲ

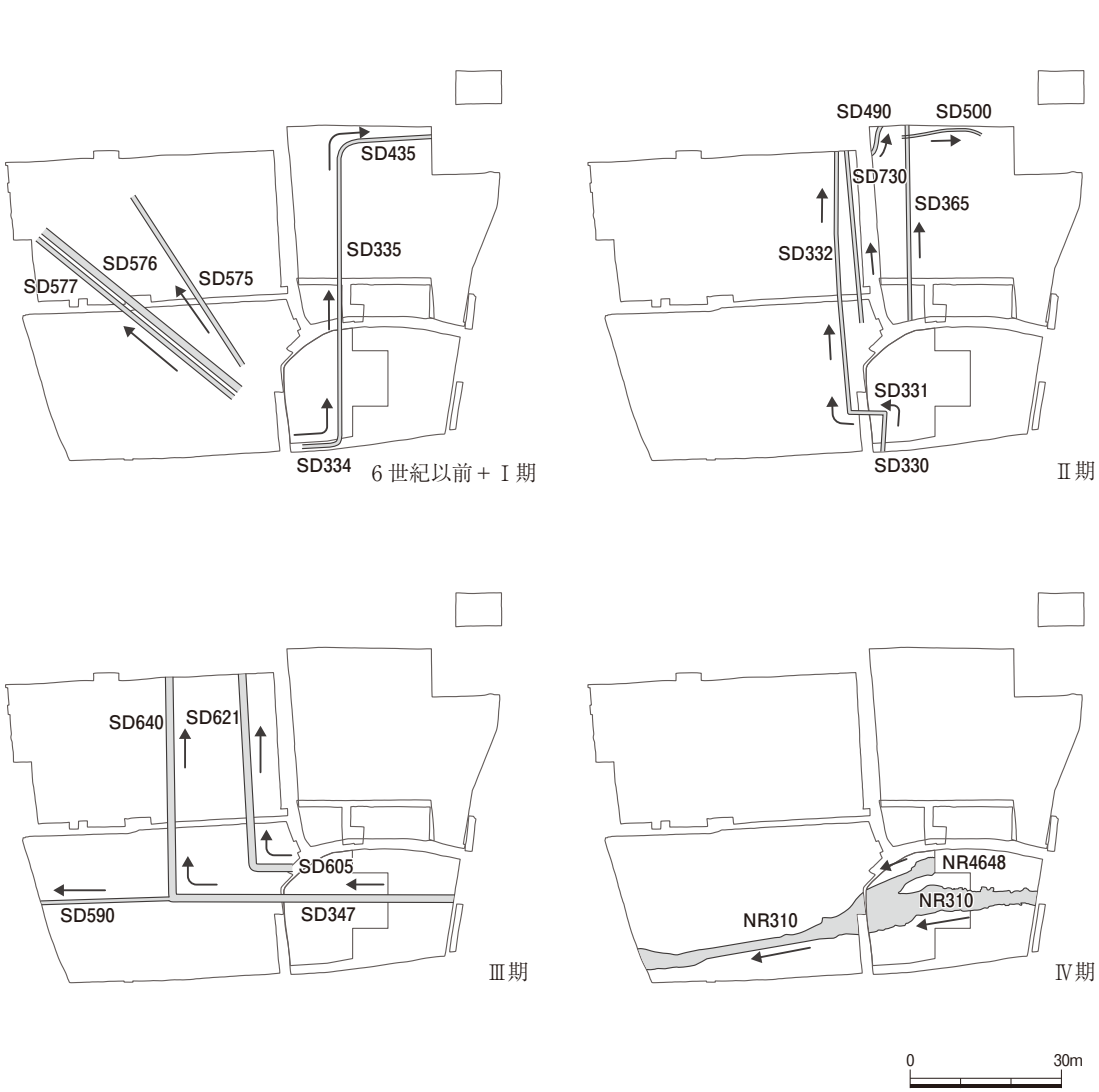


Fig. 172　6 世紀以前・Ⅰ～Ⅳ期の溝と流向の変化　1：1,500

期ではおもにSD347・640による排水が主目的といえる。

遺跡の性格の変化

以上のような水路網と溝の変容から、Ⅰ・Ⅱ期とⅢ期では遺跡の性格が大きく変化したといえる。具体的な性格の言及は『石神遺跡発掘調査報告Ⅱ』にゆだねるが、Ⅰ・Ⅱ期において、意匠性を高めた石組溝は、その必要性がある大規模施設の存在を表象するものでもあろう。対してⅢ期では意匠性が排除され、排水を主目的とし、Ⅰ・Ⅱ期よりも格を下げた施設群であったと考えられる。

石神遺跡の各時期の水路網については、引水経路やその取水源の検討をさらに深める必要がある。石神遺跡の水路網は、飛鳥地域一帯の水路体系の中にも位置づけられるため、より広域的で地理的な観点で検討を進める必要がある。

E　NR310からみえる石神遺跡

奈良時代以降の流路NR310は、西下がりの扇状地面を東から西へと流下した流路跡で、現在のところ第１・３次調査区で検出している。さらに西へと延び、最終的には飛鳥川へと流れ込んでいたと考えられる。第214次調査では、この流路跡が拳大から人頭大の礫を含む砂礫層で埋没していることを確認した。砂礫層からは奈良時代の土器が出土している。この土砂は水流で運ばれてきて、７世紀代の遺構を浸食してできた流路に堆積したものである。NR310の上流側は、調査地東側がほぼ未調査であるため、なお未検出であるが、土砂の供給源は東方の山地か、あるいは現在の中の川に求められよう。飛鳥藤原第209次調査の成果を参考にすると、Ⅲ期の東西溝SD347が自然流路と化し、奈良時代の石神遺跡に砂礫を堆積させた可能性もある。中の川の河道付近には、この頃まだ狂心渠が水路として残っており、出水時にそこから溢流したのがこのNR310であったかもしれない。

いずれにせよNR310は、扇状地面の地形発達と同じメカニズムで形成された自然の河道であったと考えられる。その流向は、飛鳥川から人工的に取水し、南から北へと引水する７世紀の石組溝とはまったく異なっている。大字飛鳥の灌漑水路網は、今でも飛鳥時代のそれをある程度踏襲していると考えられるが、十分な水量を石神遺跡とその周辺に導くためには、そのレイアウトが必然的に似通ってくることを意味する。

NR310の河道は、石敷SX327の南縁を蝕み、石組溝SD335の側石の最上部を洗い出し、SD330の側石上半を押し流している。古代の地表面はすでに削平されているため、NR310の深さはわからない。しかしこの流路は、すでに埋没していた飛鳥時代の遺構を破壊しつつも東から西へと流れ、最終的に土砂で埋まったと考えられる。石神遺跡の古代遺構を最初に破壊したのは、NR310の浸食だったわけである。

奈良時代の石神遺跡

第１～４次調査の範囲では、奈良時代の遺構はほとんど見つかっていない。このため奈良時代の石神遺跡は、ほぼ無住の地であったようにみえる。この場所が居住地等にならなかったのは、まさにNR310のような流路が扇状地面を流下していたからで、出水時にはたびたび土砂が堆積するなど、いわば荒れるにまかせた状態にあったからであろう。このとき飛鳥寺は、なお偉容を保っていたと考えられるが、NR310からは飛鳥寺所用の瓦片も出土している。飛鳥寺の北側に小規模な建物が建つのは平安時代以降のことである。

1）新案で旧案のA－３期とB期の区別を踏襲しなかったのは、おもに次の理由による。それは①旧案の区別は、A期を斉明朝、B期を天武朝とする、石神遺跡の調査が始まった頃の年代観をそのままとどめていることと、②A－３期とB期は、層位的には整地土Aの上位、同Bの下位にあたると考えられ、両者を区別する土層が介在しないこと、③遺構変遷上、両者のいずれに帰属させても、継起的な順序が破綻しない遺構が存在することの、以上３点である。したがって、A－３期とB期に属していた遺構の多くは「Ⅱ期」の遺構として再編してよく、その中での相対順序に基づき、Ⅱ－１期とⅡ－２期とに細分することにしたわけである。

2）ただしこのことは、旧案の年代的枠組を依然保持してよい理由にはならない。それに旧案は、石神遺跡が斉明朝の一大遺跡であるという、そのイメージの強化に大きな影響を与えてきた枠組であったといえる。本書ではこのイメージのさらなる増幅を恐れつつ、またこうした見方を相対化するためにも、新案の樹立を目指したのである。

第Ⅷ章　総　　括

本書は石神遺跡第１次～第４次調査と、第１次調査の補足調査である飛鳥藤原第214次調査等の正式報告である。この範囲は、奈文研がこれまで継続的な発掘調査をおこなってきた地区の東南部にあたる。とりわけ、飛鳥寺の寺域に最も近い飛鳥287番地は、明治35・36年に須弥山石・石人像が相次いで出土したことで知られ、昭和11年に石田茂作が発掘調査をおこなった水田である。つまり本書は、単に奈文研が刊行する発掘調査報告の第１冊目であるだけでなく、石造物の出土から120年におよぶ、石神遺跡の長い研究史に連なるものである。今後、石神遺跡の発掘調査報告書は逐次刊行する予定であるので、遺跡全体の評価を下すのは尚早ではあるが、本書では近年の調査研究に基づく新しい時期区分を提案し、『紀要2009』で示した遺構変遷にいくつかの重要な修正をくわえた。

時期区分の新案　石神遺跡における既往の調査では、Ａ－１期・Ａ－２期・Ａ－３期、Ｂ期、Ｃ期という５期区分を用いてきた。これは第４次調査以来、調査ごとに修正を加えてきたものである。『藤原概報』では、Ａ期はおもに斉明朝（７世紀中頃）で、Ｂ期が天武朝（７世紀後半）、Ｃ期が藤原宮期とされてきた。しかしながら、この時期区分は調査ごとで揺れがあり、概ね統一されたのは第７次調査（1987年）のときである。したがって、おもに1984年以前の調査成果をまとめて報告する本書では、調査時の暫定的な時期区分をそのまま用いるのが困難であった。くわえて、第１次調査区の再発掘（飛鳥藤原第214次）を実施したことで、主要遺構の年代的位置づけを変更する必要も生じた。そこで旧案に代えて、本書では新しい時期区分案を採用することとした。この新案では、７世紀の遺構群はⅠ－１期・Ⅰ－２期、Ⅱ－１期・Ⅱ－２期、Ⅲ期という５段階に分けられる。それぞれの年代観と主要遺構は次のとおりである。

Ⅰ　期　１回目の改作（整地土Ａ）よりも相対的に古い遺構群の時期。遺構どうしの重複関係などから、Ⅰ－１期とⅠ－２期に細分する。両者をあわせて旧案のＡ－１・２期に相当するが、斉明朝よりも古く、皇極朝以前にあてた。Ⅰ期の区画施設は藤原宮の大垣にも匹敵する規模で、南面のSA600がその東端で北に折れ、SA4650となる。その出隅は飛鳥287番地の水田（第１次調査区）にあり、７世紀前半に存在した大規模区画の東南隅にあたる。SA4650はその北端で東へと折れ、東西塀SA1460（石神遺跡1990-１次）に繋がる可能性が高い。石組溝SD334・335・435は、SA600・4650に沿って流れ、東へと折れて小字丁通りの方へと延びている。石神遺跡の東方へと延びる基幹水路が、大垣の外側を縁どるように配置してあったと考えられる。これら大垣の内側は全容があきらかでないが、SB745、SB750、SB810・811や、SB450、SB530、SB735などの建物がある。このうち、遺構どうしの重複関係や柱穴埋土の特徴などから、SB745・SB810をⅠ－１期に、SB450・SB530・SB735をⅠ－２期に位置づけた。また、SD334・335・435や井戸SE800は、旧案ではＡ－３期まで存続するとされていたものの、出土土器の年代観を見直し、本書ではⅠ期に遡らせた。同様に、SA600もⅠ期にあてたことで、水

落遺跡の漏刻よりも古く位置づけた。このほか、旧案ではＢ期としていたSB735は、その石敷の高さからⅠ期の遺構に変更している。

Ⅱ　期　　１回目の改作（整地土Ａ）から、２回目の改作（整地土Ｂ）までの間におさまると考えられる遺構群の時期。遺構どうしの重複関係などから、Ⅱ－１期とⅡ－２期に細分する。旧案のＡ－３期とＢ期（天武朝）に相当し、あわせて斉明朝前後とする。ただし、Ａ－３期遺構群の一部はⅠ期に遡らせた（前述）。Ⅰ期の南面大垣SA600は廃絶し、ほぼ同位置でSA560へと建て替える。南から延びる石組溝は、南北塀SA560の手前で西に曲折し、また北へと折れて区画内に引き込んでいる（SD330・331・332）。この石組溝は、旧案ではＡ期を通じて存続する（SD335等とは併存）とされたが、本書ではこの見方を採らず、Ⅱ－１期の石組溝と考えた。これは側石の多くが抜き取られており、その施工レベルがSD335等よりも高かったと推定できるからである。SD332に連動して、SB620もⅡ－１期にあてた。石組溝SD730とSD332との前後関係について議論を重ねた結果、本書ではSD332→SD730という相対順序を推すことにした。東西塀SA560の柱間を貫くために、鍵の手に曲げていたSD330・331・332を真直ぐに付け替えたのがSD730である、と考えたのである。

Ⅱ期の建物にはSB620（Ⅱ－１期）、SB510・520・580、SB736、SB770（Ⅱ－２期）がある。周囲に石敷を配したSB400は、これまで天武朝に降らせていたが、本書ではⅡ－１期の建物とした。つまり、斉明朝の建物と考えたわけである。

Ⅲ　期　　２回目の改作（整地土Ｂ）よりも新しい時期で、７世紀後半から末までにあたる。旧案のＣ期（藤原宮期）にほぼ対応するが、出土土器の年代観に鑑み、飛鳥浄御原宮期から藤原宮期までとする。このように少し幅をもたせたのは、石神遺跡で膨大に出土する飛鳥Ⅳの土器群の年代的下限が、藤原宮の時代まで降る可能性を考慮したためである。この時期には東西塀SA311と東西溝SD347が東から延びてきて北へと折れ、それぞれSA751・SD640として北へと続いている。区画はⅡ期以前と一変しており、しかもその内側に建つのはSB742のみである。いっぽう、第４次調査区の西北部には、SA780・781で囲まれた区画内に、総柱建物SB830が建つ。なお、Ⅲ期建物等の柱穴埋土は炭を含む褐色土であることから、整地土Ｂの上面から掘り込んだものとみられるが、実際にこれらを検出できたのは、第３・４次調査の日誌等によれば褐色系土（整地土Ｂ相当層）の下位であったようである。

Ⅳ期（奈良時代以降）　　Ⅲ期の建物や塀などが廃絶したのち、８世紀には流路NR310が東から西へと流下し、７世紀の遺構群を破壊している。SB400の南石敷SX327や、石組溝SD330等は、この流路によって浸食を受けている。NR310は９世紀には土砂で埋没し、小規模な掘立柱建物であるSB440・460等が建ったようである。

主要遺構の年代見直し　　上記のように、石神遺跡の時期区分を大きく改変し、出土土器の年代を見直した結果、年代的な位置づけが大きく変わった遺構がいくつかある。例えば、かつてはＡ期をつうじて存続したとされた東西塀SA600は、Ⅰ－１期の石神遺跡における南面大垣となり、斉明朝の区画施設ではなくなった。同じく、石田茂作が「噴水塔」への配水や、曲水宴とのかかわりを想起した石組溝SD334・335・435も、出土土器の年代と、SA600等との同時期性から、やはりⅠ－１期の水路とした。井戸SE800も出土土器からⅠ－１期の井戸としたが、これはその機能時が、斉明朝の時期まで降らないことを意味する。これらの遺構は、「斉明朝の

饗宴施設」（旧案のA－3期）の構成要素ではなくなり、皇極朝以前に位置づけることになった。その結果、SA600は斉明朝の漏刻（水落遺跡SB200）と、いわゆる「饗宴施設」とを画する大垣ではなくなった。漏刻台と同時期の区画施設は、かつてはB期に置いていた東西塀SA560（Ⅱ－1期）である。また、SD334・335・435と、『日本書紀』斉明6年条の須弥山造立記事とを単純に結びつけることも、もはやできなくなった。その代わり、Ⅰ期には藤原宮の大垣に匹敵する規模の区画施設で囲まれた、何らかの重要施設が存在していた可能性が浮上しつつある。

飛鳥浄御原宮説の評価　石神遺跡における奈文研の発掘調査は、「飛鳥浄御原宮推定地の調査」として始まった。しかし第2次調査で「石神遺跡」という名称を用いてからは、この遺跡を「飛鳥浄御原宮推定地」と呼ぶことはなくなっている。旧案でも新案においても、飛鳥浄御原宮期の遺構は比較的疎らで、この場所に飛鳥浄御原宮があったとは考えにくい状況である。現在の有力な候補が飛鳥宮跡のⅢb期遺構群であることも考慮すると、喜田貞吉以来の飛鳥浄御原宮説は棄却してよいものと考えられる。しかし石神遺跡のすべての調査区で、飛鳥浄御原宮期の遺物がきわめて多く出土している点は特筆されてよい。

膨大な出土土器　石神遺跡の概要報告ではあまり触れていないが、この遺跡を特徴づけているのが、出土遺物の多さである。例えば、本書の報告範囲で出土した土器は、整理用の木箱で780箱である。これは第21次調査までに出土した土器・土製品4,788箱のうち、16.3％を占めている。出土土器の大部分は飛鳥Ⅳに属し、いずれも整地土BやⅢ期の遺構にともなうものである。かつてはA－3期と呼んでいた、いわゆる斉明朝の遺構から出土した土器は少量にすぎない。これは時期区分を見直した後のⅡ期遺構群についても同じである。土器から見た場合、遺跡の最盛期はあたかもⅢ期（飛鳥浄御原宮期から藤原宮期）であったように見える。また、以前は斉明朝の饗宴施設と関連づけて解釈されることが多かった新羅土器や、東北地方産の黒色土器も、斉明朝の遺構にではなく、飛鳥Ⅳの膨大な土器群に伴うことがあきらかとなった。多量に出土した鉄製品の年代も、飛鳥Ⅳの土器とは同時代と考えるのが自然である。

Ⅰ期の井戸SE800からは、井戸枠内から大量の土師器甕や須恵器壺・甕類が出土した。その年代から、SE800は飛鳥Ⅰから同Ⅳまで存続したとされたが、本書ではこの見方を採らない。土師器供膳具の器形等からは、井戸の埋没は飛鳥Ⅰから同Ⅱにかけてである。土師器甕の多くにはスス・コゲが付着し、付着炭化物の安定炭素同位体比分析でもC3植物の煮炊きに用いたことが判明している（第Ⅵ章1節）ことから、使用済のそれらを空井戸と化したSE800に投棄したものである。つまりこの井戸は、斉明朝までにその役割を終えており、出土土器も埋め立て時に投入された廃棄物であったと考えられる。これまでSE800は、第5次調査区から北へと延びている石組溝SD900に通じており、A－3期の代表的な遺構のひとつとされてきた。その位置づけや埋没契機の見直しは、続巻以降の遺構変遷案にも影響をおよぼすことになる。

出土瓦の生産年代　出土量が膨大な土器に対し、瓦は軒丸瓦155点、軒平瓦9点、垂木先瓦1点、丸瓦381点（49.63kg）、平瓦1,715点（116.19kg）であった。石神遺跡の中では多いほうだが、他の遺物よりは出土量が少ない。これらの生産年代を検討した結果（第Ⅶ章2節）によれば、角端点珠式の石神A・B・D・Eは直接の系譜関係にある飛鳥寺Ⅶより新しく、共通する技法を用いた斑鳩地域の瓦（飛鳥時代中頃）と併行する可能性が高い。実年代の上限は飛鳥寺造営期間の6世紀末から7世紀初頭となり、下限は吉備池廃寺の造営開始とみられる639年

前後となる。生産年代の下限は、広く見積もっても石神遺跡のⅠ期におさまる。弁端切り込み式の石神Ｆも角端点珠式と併行する時期、すなわち飛鳥寺造営開始後から吉備池廃寺造営開始前後に生産されたと考えられる。これに対し、飛鳥寺所用瓦の大半は流路NR310や包含層からの出土である。飛鳥寺の大垣に葺かれていた瓦が細片化し、流入したものであろう。

SE800出土の木製品　　本書で報告する木製品のほとんどは、SE800井戸枠内からの出土である。バラス層からは楔、斎串、加工棒などが、礫混砂層からは楔、栓、刳物、加工棒などが、最下層の含砂礫茶褐色有機質土・砂混灰褐色粘質土からは刀子柄や楔、栓などが出土している。

金属製品・冶金関連遺物等　　鉄製品は鉄鏃が主体で、ほかに鉄鎌、鉄斧、鉄鑿、鉇、刀子、鏟状鉄製品といった農工具類や、鉄製紡錘車や鉄針、鉄釘、鋲などがある。「土坑」・「大土坑」出土の鉄製品は、多くが整地土Ｂに包含されていたものとみられるが、南北大溝SD640からも出土している。鉄製武器の種類と出土量の多さが、石神遺跡出土鉄製品を特徴づけている。

冶金関連遺物には鞴羽口、鋳型、坩堝、鉄滓や銅・鉄の素材などがある。羽口や坩堝は水落遺跡の貼石遺構を覆う暗褐色土からも出土しており、彼我の距離が近いことも考慮すると、２つの遺跡が同じ整地土で地均しされたことがうかがえる。これがⅢ期の改作に先立つ整地土Ｂである。大量の土器と、鉄鏃を中心とする鉄製品、それに冶金関連遺物は、概ね同時期の遺物群であると考えられる。おもに整地土Ｂの分布域から出土する砥石も、この遺物群に含まれよう。鉄鏃をはじめとする鉄製武具と砥石などを相互に関連づけることで、本書では石神遺跡の近傍に武器庫が存在していた可能性を指摘した（第Ⅶ章３節）。これは相原嘉之らが唱えた「小墾田兵庫」説をある程度継承した見方である。しかし本書では、この武器庫と目されることもあったSB735・736を、それぞれⅠ期・Ⅱ期の建物として再認識したため、石神遺跡に小墾田兵庫があったとは断定できなくなっている。ただしこのことは、遺跡近傍に兵庫があった可能性を否定するものではない。整地土中にどうして多量の鉄製品が含まれることになったか、膨大な土器や冶金関連遺物なども含めて、これら遺物群の来歴をあきらかにする必要があろう。

続巻との関係　　上で述べたように、本書ではこれまでの時期区分案に代わる新案を採用した。この枠組は、続巻でも用いる予定である。その結果、考えうる遺構変遷もまた、調査時の旧案とは異なるところが出てきた。この変化は、いずれは石神遺跡全体の評価にも影響を与えるであろう。本書は石造物出土地の報告書であったこともあり、石神遺跡が「斉明朝の饗宴施設」として語られるようになった経緯を整理した。これは第２巻の報告範囲（第５～９次調査区）において、そこで見つかった殿舎群をいかに評価するかと密接にかかわってくるので、先んじてこの点を検討しておく必要があったからである。

石神遺跡のイメージは、高橋健自らが唱えた須弥山説と、石田茂作らの「斉明朝の饗宴場」説とが混淆し、さらには奈文研がこの見方に即して遺跡全体を説明してきたことで、自然に醸成されたものである。この定説とは別の、石神遺跡の全体をよりよく説明できる新しい見方は、本書では完成にいたらなかった。しかし、次巻では第５次調査区から第９次調査区までの範囲を報告の対象とすることが決まっている。そこは「饗宴施設」「迎賓館」とも目されてきた、「Ａ－３期」の中枢施設が建っていた場所である。この遺跡が何の遺跡であるのかは、『石神遺跡発掘調査報告Ⅱ』であきらかにしたい。

附篇　小字石神出土の石造物

第１節　各石の原状

小字石神出土の石造物は、その出土からおよそ70年を経て飛鳥の地に戻り、現在は昭和50年（1975）に開館した飛鳥資料館の屋内に展示されている。昭和55年（1980）６月には「石造男女像／石造須弥山」という名称で、重要文化財に指定された。このうち、石造須弥山像（以下、「須弥山石」と記す）は３つの石を積み上げた状態で１基としており、飛鳥資料館でも同様に展示している。なお、須弥山石の構造と機能に関しては、その内側の構造も描き出した正確な実測図（fig.172）を載せた岩本圭輔の研究[1)]が最も詳しいので、あわせて参照されたい。以下、須弥山石と石人像の原状とその機能について、簡単に述べておこう。

須弥山石　基底部の第１石（甲）は高さ96㎝、胴回りの最大径は112㎝で、口径80㎝・深さ40㎝の内刳りがある。第２石は未発見であるから、第１石の直上に第３石（乙）をそのまま積んでいる。第３石は高さ74㎝、直径112㎝で、中央部には径22㎝の孔が縦方向に貫通している。最上部の第４石（丙）は高さ70㎝、直径82㎝で、底部の浅い内刳りが第３石上面の凸部と勘合する仕組みとなっている。３石を積み上げた状態では、各石の内部や底部の様子は観察できないが、第１石には内刳り底部の壁寄りから外面やや下方へと通じている４本の細孔（C）がある。これは「導管を具えたある種の噴水装置」に当たり、第１・２石の内側を満たした液体等を余すところなく噴出させる役割を果たしたと考えられる。また第１石には、内刳りの少し外側を貫く縦通孔Ａ・Ｂがある。このうち、Ａは上面近くで、内刳りから水平に延びる横孔に通じている。また、Ｂも上面近くで、外方へと抜ける横孔（スリット）に通じている。岩本圭輔によれば、縦通孔Ａは水の取り入れ口で、同Ｂは余分な水の吐出口であったという。なお、第１石の下面にも浅い刳り込みがあり、台座に据えるためのものか。すべて花崗岩製。東京国立博物館蔵。

石造男女像　二人の人物を一体に象った石造物で、通称は石人像。一方の人物は男性とされ、頭には帽を被る。瞼や耳、額の皺などは溝状の彫りで表現している。その胸元には、両手で杯を捧げ持つ彫刻を施していたとみられるが、この部分は縦方向の割れで大きく欠損している。この割れ面には、男像の足元から口吻まで延びる縦通孔が露出しており、男像の胸元から、女像の口腔へと通じる細孔が分岐している様子もわかる。それぞれの口元から液体が噴き出す仕組みであったとみられる。女像は右半身を浮き彫りにしつつ、左半身は男像と一体になっている。このため両像は相対せず、女像は男像の右側を向きつつ、その右手を男像の右肩に添えている。口元から噴出する液体は２方向に噴出したと考えられる。花崗岩製。東京国立博物館蔵。

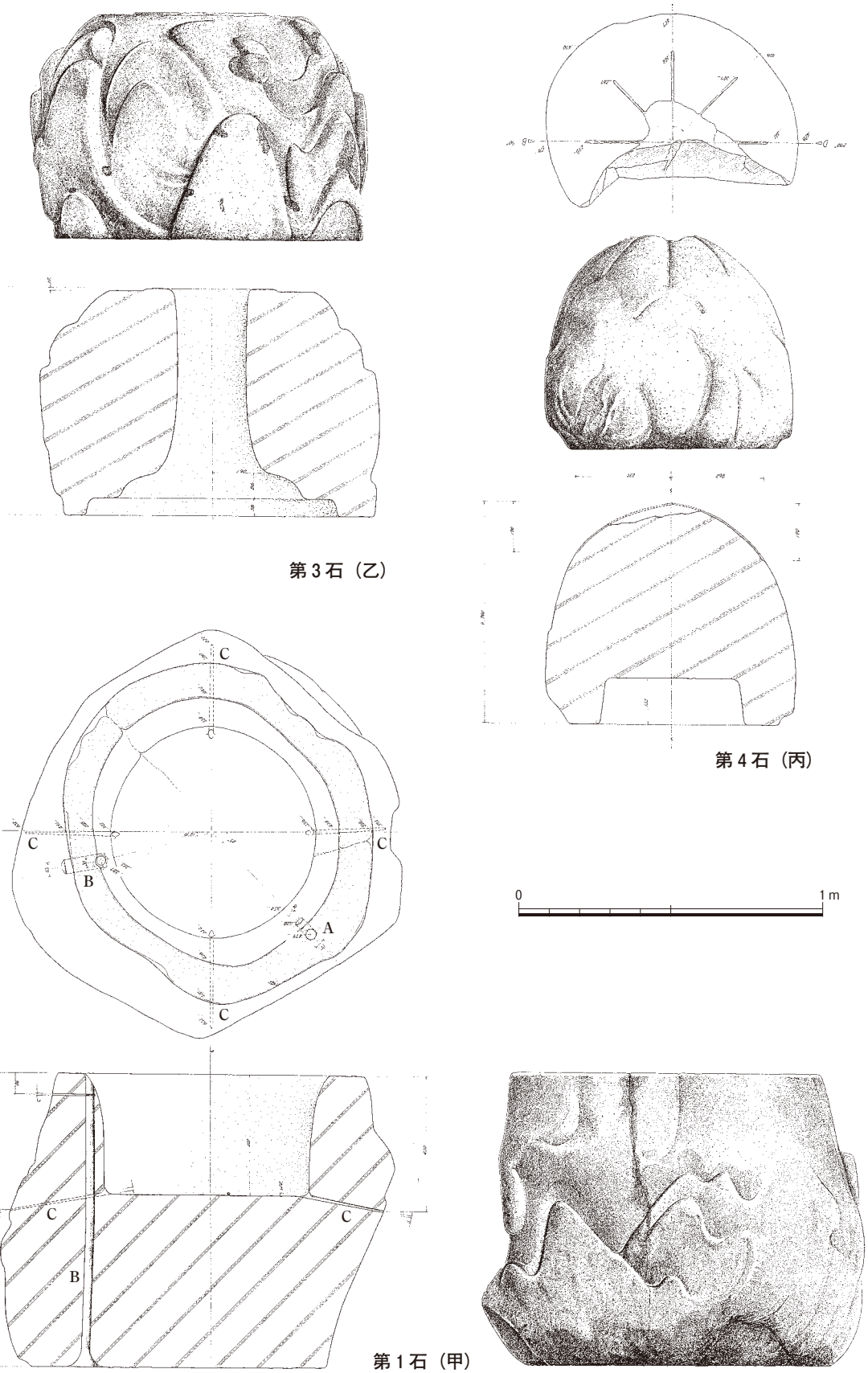


Fig. 172　須弥山石実測図

（註１）論文に掲載の石造物実測図を一部改変のうえ1：20で掲載）

1）岩本圭輔「須弥山石の構造」『斉明紀』飛鳥資料館図録第29冊、1996年。

第２節　出土の経緯と須弥山説

高橋健自の観察　第Ⅱ章で一部述べたように、小字石神出土の石造物を広く学界に紹介したのは高橋健自である。彼は明治36年（1903）春頃に大字飛鳥の森家を訪れ、下記の３石を詳しく実見している[1)]。高橋はその報告で石造物の出土と、それが森家に一時安置された経緯を詳しく述べているので、ここでその関連記事を抜粋しておこう。

石造物出土時の聞書き

「去年の秋、大和高市郡、大字飛鳥に、学校増築の工事ありしとかにて、石材を得んがため、同地の小字石神といふ田地の畔に、大なる石の一部分（即ち甲號の石、南面の上半）露出せるを堀（ママ）り出でしが、頗る奇形なりしかば、更にその近くを求めしに、また類似せる石を得たり。同村長森氏、のち之を其庭中に保存することとなしぬ。最初に発見せしは甲號の石にして、第二回に発見せしは乙號の石なりといふ。本年春、余も一二回之を観、いかにも面白く感じたりき。然るにその後幾程もなく、同じ場所より、また両面ある石地蔵の如きものを掘出したりと聞きたれば、友人とまたゆきて一覧せしに、こは同地の辻本某の屋敷中に安置せられたり、その頃はこの石人発見後、僅に一週を出でざりしが、近村の老若来り賽するもの少からず、序に去年発見の石を見るものまた漸く多くなりき。かくて参詣人も見物人も、それぞれ解釈を試み、或はさきの石の模様を梵字ならむといひ、或は神代文字ならむといふあり。後の石人をあるいは地蔵といひ、或は聖天などいふに至れり。」

（「飛鳥発見の石製遺物」225頁）

この記事によれば、いわゆる須弥山石の出土は確かに明治35年で、学校増築（おそらくは飛鳥小学校を指すとみられる）のために水田畦畔に露出していた巨石を掘り出したところ、それが異形の石造物であったため、これらを森家の庭に一時安置していたことが読みとれる。高橋健自がこれらの石造物を観覧したのは明治36年春で、その場所は森家の庭先であったと考えられる。ところが上掲のように、石人像は高橋が甲號・乙號・丙號の各石を観覧した後に発見しているから、その出土は明治36年春以降であったことになる。結局、高橋は新発見の石人像を観覧するために、再び飛鳥を訪れた。そこで辻本家にて、石人像に賽する近在の老若を見、それがにわかに尊崇の対象となったことを知るのであった。なお、高橋論文を収めた『考古界』３-５の巻首には、「大和飛鳥の石造遺物」と題した写真３枚（八木町の小川氏撮影）を載せており、このうちの一葉に写るのは森家の庭先に安置された甲號石であると推測できる。

前節で述べた石造物の原状ともやや重複しているが、高橋が記すところを整理すると、花崗岩で造られた各石の寸法や形状は次のとおりとなる[2)]。

甲號石　直径３尺３寸弱×高２尺３寸余（約100×約70㎝）で、不整円柱状を呈する。上面より直径２尺７寸×深さ１尺９寸（約80×57㎝）の穴を穿ち、その穴の底面と内側面とが接する部分に４つの小孔（イ～ニ）がある。これらの小孔は蝙蝠傘の骨が入るくらいの太さで、それぞれ斜め下へと延びて外面まで貫通している。また、この石造物を垂直方向に貫く２つの小孔（ヘ・ト）と、外側面から小孔（ト）へと通じる孔（ホ）もある。外底面には直径１尺２寸５分×深さ２寸の穴を穿つ。外側面には不規則な彫刻を施している。

甲　號　石（第１石）

乙號石（第２石）

乙號石　直径３尺３寸弱×高さ２尺３寸５分（約100×約70cm）、周囲は下部に向かうにつれ長さを減じ、上面より最大径２尺７寸５分（約85cm）、最小径８寸５分（約25cm）の漏斗状の穴が貫通している。外側面には岩窟を模したような不規則な彫刻がある。

丙號石（第３石）

丙號石　直径２尺５寸×高さ２尺４寸（75×72cm）、穴の直径１尺５寸５分×深さ５寸（47×15cm）。甲號石に似るが粗い作りで小さい。半分欠損しているが全形の推測は難しくない。

石人像

石人像　高さ５尺８寸２分、周長は最も太い部分で６尺６寸５分。２面からなる。片面はやや背が高い人物像で袋状の冠を戴き、筒袖の上衣に着帯し、靴を履き、左手に保持した何かを自らの口元に当てている。もう一方の面はやや背が低い人物像で筒袖の上衣に裳を着け、右手は左の上臂を押さえている。両者の面相は滑稽味を帯び、口から穿った２本の穴は胸部で１本となり、底部まで垂直に貫いている。

須弥山説の登場　高橋はこれら４石が古代の遺物であり、甲乙丙の３石と石人像とが同時期のものと考えている。また、ここからは斉明紀３年条の「作須弥山像於飛鳥寺西」、同５年条の「甘檮丘東之川上造須弥山」の記事を引用しながら、斉明朝における都貨羅・蝦夷饗応の史実と、そのたびに造立した須弥山との関係に早くも着目している。そして高橋は、「余は甲乙丙の石は彼の須弥山の残缺にして石人はこれに附属せしものならむと推考せり」と述べたうえで、「誠に甲號石を最下に置き、丙號の石をその上に置き、更に乙號の石を最上部に載せたらむには、自ら須弥山の像を成し、上部より注ぎ入れたる液体の漏りたるは、下部の石槽に溜り、やがて（イ）（ロ）（ハ）（ニ）の小孔より外面に迸出する装置となるべし。」と推定している（fig.173）。この一文では、丙號石を中段に、乙號石を上段としているものの、これは各石の大きさを考慮すると高橋の誤記とみられ、正しくは甲號石の上に乙號石を据え、その上に丙號石を載せる、という案であろう。高橋案がこの通りであれば、それは今日の復元案と大きく変わるところはない。なお高橋は、その文末にてこれら以外の石造物がまだ埋まっている可能性に触れ、「十分なる大捜索を行ひし後にあらずば、明かなる解決を見ること難かるべし」と結ん

高橋健自の須弥山説

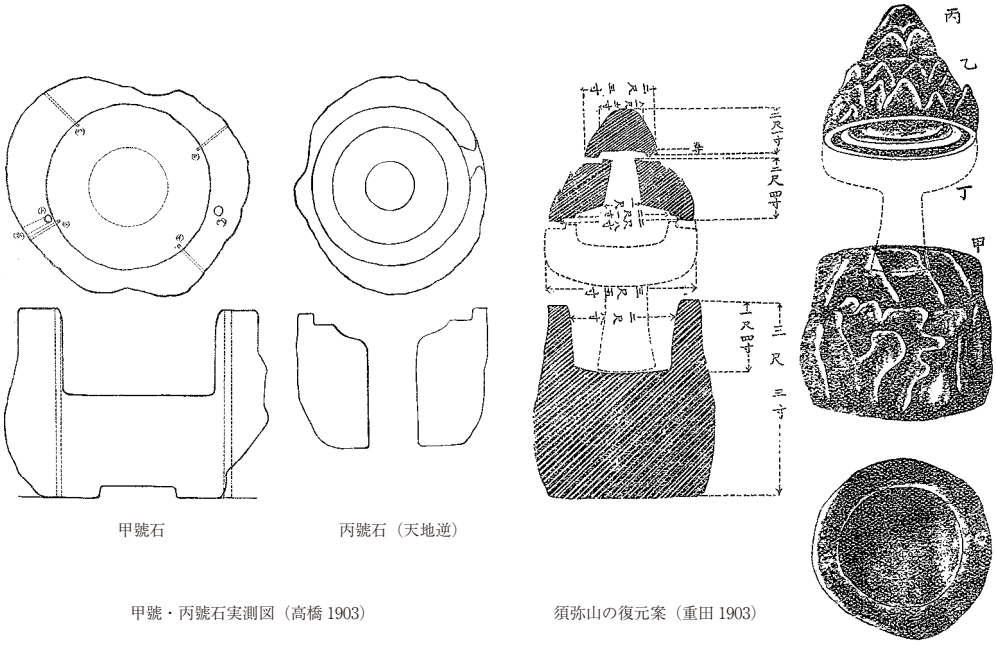


Fig. 173　明治35年時の須弥山石図解（高橋1903・重田1903より転載）

Tab. 22　須弥山石の寸法

名称		文献・資料	本体		孔				重量
			直径（または「口径」）	高さ	直径		深さ		
第１石	甲號石	（高橋1903）	３尺３寸弱	約100cm	２尺３寸余	約70cm	２尺７寸	80cm	１尺９寸　57cm
	甲號石	（重田1903）	３尺５寸	105cm	３尺３寸	約100cm			１尺４寸　42cm　800貫
	一号石	「発見届」	３尺８寸	114cm	３尺３寸	約100cm	２尺８寸	84cm	１尺６寸　48cm　800貫
第２石	乙號石	（高橋1903）	３尺３寸弱	約100cm	２尺３寸５分	70cm	２尺７寸５分	83cm	
	乙號石	（重田1903）	３尺８寸	114cm	２尺４寸	72cm	２尺８寸	84cm	500貫
	二号石	「発見届」	３尺８寸	114cm	２尺５寸	75cm	２尺８寸	84cm	450貫
第３石	丙號石	（高橋1903）	２尺５寸	75cm	２尺４寸	72cm	１尺５寸５分	47cm	５寸　15cm
	丙號石	（重田1903）	２尺３寸	69cm	２尺１寸	63cm	１尺５寸	45cm	５寸　15cm　100貫

でいる。ただし、高橋は須弥山の中段部分が未発見であることは想定しなかったようである。

重田定一の須弥山説

高橋が須弥山説を開陳したのと同じ巻号の『考古界』誌では、重田定一もこれら石造物を３段に積んで須弥山とし、山岳や廟塔のごとく構築されたと考えている。重田は奈良出張の折、明治36年７月16日に石造物４石を実見し、うち３石は「斉明天皇五年製作の須弥山なりと信ずる」にいたった[3)]。重田はその後、この須弥山を図入で解説し、「臼形にして高三尺三寸、周囲一丈四尺乃至五尺、口径三尺五寸、深一尺四寸、量八百貫」を甲號石、「饅頭形にして高二尺四寸、周囲一丈二尺乃至一丈四尺、穴ありて上下に貫通す、その口径下部に在りては二尺八寸、上部に在りては三尺三寸、量五百貫あり」を乙號石、「槲実形にして高二尺一寸、竪に缺損してその小半を逸したり、下部に孔あり口径二尺三寸、深五寸、量百貫あり」を丙號石と呼んだ。次いで、未発見の一石を丁號石とし、甲・丁・乙・丙の順に積み上げた図を示したうえで、その形状の層々相構へて廟塔山岳の如くなるはよく書紀の文に合ひ・・・・・」と述べており[4)]、現在の復元案と大きくは変わらない。各石の寸法や孔の直径・深さは、高橋が測ったそれとは必ずしも一致しない（Tab.22）ものの、本来は四石からなることが最初から想定されていた。

また重田の説くところ、中国には海中博山を象った博山炉という香炉があり、小字石神出土の石造物とは図様が似ている。博山は海中の大高山、つまり須弥山であるから、この石造物は須弥山ではないか、という。このように、小字石神出土の石造物を須弥山に見立て、推古紀や斉明紀に見える須弥山像であると解釈した論説は、出土直後に早くも登場していた。

ところが、重田の須弥山説に関しては反論も出た。重田に論駁した長井行によれば、博山とは天山山脈にある火山・博克達山（Bogdo-ula）を指し、その奇勝を香炉に模したものが博山香炉であるから、須弥山（スメール）とは同一視できない。それに「須弥山は重田氏の言へる如きキャベチの如き状をなせるものに非らず、これを譬へば、煉瓦の高き煙突の上に、五重塔の屋根を加へたる如きものにして、斉明紀に高如廟塔とあるは、形容し得て適当なり、故にツクネ芋の如き状をなしたる石造遺物は、決して須弥山に非らず、今回の遺物は斉明紀中のものにあらず、余は諸種の須弥山図を蒐集するも、未だ彼れに似たる如きものを見ず。」と述べ、重田説を否定した[5)]。要するに長井は、キャベツやツクネ芋のような石造物が、佛説にいう須弥山を模したものであるはずがない、と述べたのである。その言い条は、重田が説く「須弥山」の不格好を強調することで、重田説の不合理を指摘しているようでもある。ただし長井は、重田のいう須弥山が一体何であるかは述べていない。結局、その性格に関する議論では、須弥山説を超える有力な代案が出なかったため、小字石神の石造物は須弥山であるというイメージが次第に定着していったものと考えられる。

第３節　石造物の発見届

ここで石造物の発掘と一時保管に関与した地元の人物が、この石造物をどのように取り扱ったかを見ておこう。

奈文研では、須弥山石発見時の届出書類等の写しとみられる複写物と、その翻刻文とを、１つのファイルで保管している。すべての届出が飛鳥村長であった森国松によるもので、須弥山石が東京帝室博物館に編入されるまでの経緯がよくわかる史料である。おそらく、森家に伝わった文書を、あるとき複写したものであろう[6]。この届出等は

①「埋蔵物発見届」（明治36年６月22日付・八木警察署宛　縦書／罫紙１枚）

②「解説書」（縦書・罫紙２枚）

③「保管受書」（明治36年６月22日付・八木警察署宛　縦書／罫紙１枚）

④「上願書　写」（明治37年２月７日付・宮内省帝室博物館宛　縦書／罫紙１枚半）

の４通で、便箋に墨で書いた文書である。日付と内容からみて、②が①の付属資料で、さながら別記様式のようなもの。また、③が①の届出にかかる２石の保管証にあたる。これに対し④は、その日付が明治37年２月７日になっていて、届出のおよそ８ヵ月後になっている。矢島恭介によれば、須弥山石や石人像の編入日は明治37年５月18日で、須弥山石は森国松から、石人像は辻本宇吉から奈良県経由で譲渡されたものという[7]。よって④は、編入日の３ヵ月前のものである。以下、①～④の順に、内容を詳しく見ておこう。

森国松の「発見届」

①「埋蔵物発見届」

埋蔵物発見届

一石貳個

右別紙解説書ノ通ナル分明治参拾五年

五月頃高市郡飛鳥村大字飛鳥辻本宇吉

ナルモノノ所有地同村大字飛鳥字石神ト云フ田

地ノ畦畔ニ畦畔ノ代リニ据エ有リシモノ

拙者買受掘出候処其石ハ前陳ノ

通畦畔ノ代リトシテ其大体ノ幾分ヲ見シ

アリシモノナルニ依リ埋蔵物ニ（発見届ヲ為スベキモノニ）アラサルモノト解シ（其当時）届

出ヲ為サザリシガ其后今日迄多数観

覧人ノ評ニ依レバ其彫刻等普

通ノ石ニアラサル様子ニ付更ニ御届申上候也

明治三十六年六月廿弐日

高市郡飛鳥村飛鳥

森国松

八木警察署御中

この「発見届」は森国松が、明治36年６月に八木警察署へ提出したもの。この届出によれば、森が小字石神の水田畦畔に露出していた石を買い取り、掘り出したのは明治35年５月頃[8]であった。森はこの巨石の存在を以前から知っており、田植え前に辻本家から買い取り掘り出したことがわかる。その目的は、高橋が伝えているように小学校増築のための用材獲得であったと考えられる。なお森は、発掘時は届出不要と考えていたが、その後これらの石が特別であることに気づき、１年後に発見の届出をおこなったようである。須弥山石の編入が、土地の所有者である辻本宇吉からでないのは、これらの石を森が買い取っていたからである。

②「解説書」

一号・二号石

解説書

一号

一高サ参尺参寸位周囲拾五尺位ニシテ稍丸形、上
下平カニ切均シ其上ノ切口ハ径三尺八寸位ニシテ其
縁凡五寸位残シ口径貳尺八寸深サ一尺六寸位ニ堀下ゲ其
底ノ四隅ヨリ径一分位ノ細キ穴ヲ外辺マデ堀貫キアリ
又其残シタル縁ニ口径一寸位ノ穴ヲ下ノ切口マデ堀通シ
アリテ其堀通シタル穴ニ向テ上口ヨリ二寸位下リタル所ヨリ
出口径ノ穴ヲ内方ヨリ堀通シタリ又今一ケ所其縁ニ口
径一寸位ノ穴ヲ下ノ切口迄堀通シ其穴ニ向テ上口ヨリ
凡二寸位下リタル所ニテ外辺ヨリ厚サ一分巾一寸五分位薄
刃包丁ヲ差シ通シタル様ノ穴ヲ通シアリ又下ノ
切口モ平カニシテ其切口ニ径一尺位深サ弐寸位堀込ミ
アリ周囲ハ一面ニ何カノ模様ヲ彫刻シアリ（或人ハ神代文字ナラント云フ）
総重量八百貫位

二号

一高サ弐尺五寸位周囲拾四尺位ニシテ上下平カニ切
均シ其上ノ口径ハ三尺八寸位内縁ヲ五寸位残シ径
弐尺八寸位深サ二寸位堀下又其堀下ゲタル所ニ径弐尺
位深サ三寸位堀下ゲ又其堀下ゲタル所ニテ口径壱尺位
丸形ニ下ノ切口迄堀貫キアリ又下ノ切口ハ径一尺五寸
位ニシテ恰モ蜜柑ヲ横ニ切リテ上向キナシタル様ノ大体ナリ
而シ周囲ハ一面ニ何カノ彫刻アリ重量四百五十貫位
丸石ノ格好大略書キ述タルモノノ如ク
書キ尽スヲ得ズ又図面ヲ添付スル筈ナ
ルモ其図面専門家ニアラサレバ尋常ノ事
ニテ詳細ヲ知ラシムルヲ得サルニ依リ添付
セズ

森国松が買い上げて掘り出した２つの石は「解説書」でそれぞれ「一号」・「二号」とされ、寸法や形状等について詳しく説明している。その記事によれば、１号石は直径３尺８寸×高さ３尺３寸で、その内側には口径２尺８寸×深さ１尺６寸くらいの大きな刳り抜きがある。「掘通シタル穴」とした導水のための孔の位置や口径も記してあり、これが須弥山石の１段目にあたるのはあきらかである。また、２号石は直径３尺８寸×高さ２尺５寸で、その内側には径２尺８寸と、径２尺の浅い彫り込みがあり、中央には径１尺の掘り貫きがある。解説書では２号石の天地を逆に見立てているようだが、これは須弥山石の２段目にあたるとみてよい。

③「保管受書」

保管受書

一石貳個　　此度発見届ヲ為シタルモノ

右保管ヲ命セラレラルニ依リ自宅ニ於テ
保管可致候条此受書仕候也
明治参拾六年六月弐拾貳日
高市郡飛鳥村大字飛鳥
森国松

八木警察署御中

「保管受書」の日付は、「発見届」と同じ。したがって、①～③は同じ届出の写しとみられる。森国松から八木警察署に届け出たこの受書には、石２個を自宅に保管する旨が書かれてある。この保管中に、森家の庭先で撮影されたとみられる一号石の写真が、『考古界』３-５の口絵写真に見えることは、上で述べたとおりである。これら一号・二号石が須弥山石の一部であるのはいうまでもないが、帝室博物館に編入された石造物は４石で、うち３石が須弥山石である。しかし解説書や保管受書によれば、森国松が保管していた石は１号石・２号石の２個しかなく、須弥山石の頂部にあたる１石が足りない。須弥山石の３段目は、この保管受書には見えない。

森国松の上願書

④「上願書（写）」

寫

上願書
一石　貳個
右ハ客年御省ノ命ニ依リ差上置候処
此度見積價額書差出方御達ニ相成
候ニ付テハ速ニ價額上申可仕筈之処右
石ハ畏キニ　田中宮内大臣閣下御検分
ノ際一通リ上申仕置候通リ貳個ノ内壱個ハ
可成宮内省ノ御許可ヲ得テ献納仕度

今一個ハ当地ニ関係アル古石ナルヲ以テ土地
ニ保存仕置度候間御下戻被下度候其
下戻ヲ出願スル理由右石発見ノ場所ハ畏多
クモ人皇十九代
允恭天皇遠飛鳥宮ノ宮址ニシテ兼テ村
内有志七人間ニ於テハ大ニ其古跡ノ今日迄
烏有ニ皈シ去リシヲ嘆キ居リシガ此度右古
石発見ヲ機トシ何トカ一ノ方法ヲ企テ此
古跡ヲシテ永遠ニ維持セントスルニアリ依之
其地ニ大関係アル古石ナルヲ以テ一個丈御
下戻ヲ出願スル次第ニ有之候間何卒
願□□□御□納被下度上願候也
明治三十七年二月七日
奈良県高市郡飛鳥村飛鳥
□□□□　森　国松（印）

宮内省
帝室博物館御中

この「上願書」は、石造物の帝室博物館への編入（明治37年５月）より３ヵ月ほど古い時期のもの。ここには、宮内大臣の検分時に、いちどは一石の現地保存を訴えていたように、やはり「御下戻被下度（御下げ戻し下されたく）」、つまり現地に返還してほしいと書いてある。同年２月の時点で、須弥山石の２石はすでに東京に移動していたことになるか。結局、２石のうちの１石が飛鳥に戻ることはなかったわけだが、森は当地が允恭天皇の「遠飛鳥宮ノ宮址」だと信じており、その顕彰を村内有志とともに企図していたことがうかがえる。

以上の届出等からは、須弥山石は耕作時の不時発見で出土したのではないこと、１石目の出土は明治35年５月頃であったこと、１・２号石は帝室博物館への編入まで森家で一時保管されていたことなどがわかる。ただし、高橋の著述には、石造物は「去年の秋」（明治35年）と「本年春」（明治36年）に出土したとあり、森の「発見届」に見える「明治参拾五年五月頃」とはやや食い違う。また、重田も「本年六月」（明治36年）に埋蔵物４個が出土したと述べており、出土時期について錯誤が著しい。石造物を最初に掘り出した時期に関しては、ここではその当事者であった森の「発見届」に信を置くことにしたい。

石人像出土から譲渡まで　いっぽう、石人像の出土はこれら石造物の中で最も遅く、明治36年になってからのことである。というのは、高橋健自が森家で甲・乙・丙號石の３石を実見したのが同年の春頃で、いちど帰京後、新たに「石地蔵の如きもの」出土の報に接したため、再び飛鳥を訪れたと記しているからである。この「石地蔵」は、辻本宇吉が掘り出した石人像のことを指している。したがってこの石造物は森家ではなく、水田を所有する辻本家で保管されたが、高橋が伝えているように参詣人や見物人が多数訪れる事態となっていた。このときの石

石人像と参詣人

人像の写真が、『考古界』３-５の口絵写真に見える。考古学的遺物が出土後に、「地蔵」や「聖天」として俄かに尊崇の対象となったことは興味深いが、学者であった高橋はむろんこの見方を採らず、その報告文では「石人像」として、客観的な事実のみを伝えている。

高橋の伝聞によれば、小字石神の水田における石造物の出土は明治35・36年の２年にわたり、その機会は少なくとも３度におよんでいたことが知られる。こうして掘り出した石造物は世間の注目を集めるところとなった。そのうえ森国松の「上願書（写）」によれば、田中宮内大臣がこれらを検分したことがうかがえ、その際には森家で管理している２石のうち１石を献納したい、という話まで出たようである。

遠飛鳥宮説と返還運動

ところが「上願書」には、「今一個ハ当地ニ関係アル古石ナルヲ以テ土地ニ保存仕置度候間御下戻被下度候」ともあり、続けて「右石発見ノ場所ハ畏多クモ人皇十九代允恭天皇遠飛鳥宮ノ宮址ニシテ兼テ村内有志七人間ニ於テハ大ニ其古跡ノ今日迄烏有ニ皈シ去リシヲ嘆キ居リシガ此度右古石発見ヲ機トシ何トカ一ノ方法ヲ企テ此古跡ヲシテ永遠ニ維持セントスルニアリ」と、その理由を陳情している。つまり森らは、高橋健自の「允恭天皇遠飛鳥宮ノ宮址」説[9]を信じており、その「宮址」の保存と顕彰のために、１石の返還を願い出たのである。その動機と目的は、現代における史跡や文化財の保護とはやや異なっているものの、飛鳥村長であった森国松とその有志が、石造物出土地をいわば重要な遺蹟として認識し、その顕彰を模索していたことは今後記憶されてよい。しかし、森による石造物返還の陳情は成功しなかった。これらの石造物が明日香村に戻るのは、およそ70年後のことである。

甲號・乙號の献納

矢島恭介の著述によれば、小字石神出土の石造物は明治37年（1904）５月18日付で、奈良県経由で東京帝室博物館に移されたという[10]。このとき、石人像は辻本宇吉から、須弥山石は森国松からの譲渡となっているから、前者は出土時から譲渡までの約１年間、辻本家に安置されていたと考えられる。なお大字飛鳥には、石造物を畝傍駅まで馬車で運び、亀山経由で名古屋に運んだという伝承が残っている[11]。石造物の出土から停車場への運搬までの経緯を、明日香村の近・現代史の一コマとして書き残す必要があろう。それは石造物の保存に人知れず尽力した、地元の人びとの物語なのである。

丙號石の編入

小字石神出土の石造物は、およそこのようにして帝室博物館へと献納されたのであるが、４石の中には献納にいたる経緯がわからない１石がある。高橋のいう丙號石がそれである。高橋健自の報告文と、森国松の「発見届」に見える石造物とを対照してゆくと、森が届け出たのは一号石（甲號石）と二号石（乙號石）との２石であって、高橋がいう丙號石は含まれていないことがわかる。「発見届」と同時に警察署へ提出したとみられる「保管受書」にも、石２個を自宅に安置する旨が書いてあり、丙號石の存在は確認できない。つまり丙號石は、八木警察署への届出前に、森家から他所へと移動していたか、あるいは森家の庭先で長らく保管しない事情がすでに発生していたことになる。現在の森家での聴き取りによれば、森国松は当初、今でも須弥山石と呼ばれている石造物の３石を所有していたが、うち１石を京都の料亭に売却したという[12]。高橋が甲・乙・丙の３石を森家で実見したのは明治36年春であるから、同年６月の「発見届」提出までに、森は丙號石を某所へと売却した可能性がある。ただし、重田が石造物４個を実見したという明治36年７月までは、丙號石はまだ森家に安置されていた可能性も否定できない。いずれにせよ帝室博物館は、丙號石を二番目の持ち主から入手したことになるが、

その編入経緯はあきらかでない。

1）高橋健自「飛鳥発見の石造遺物」『考古界』３－５、1903年。
2）前掲註１）。
3）重田定一「飛鳥京の須弥山」『考古界』３－５、1903年。重田は「本年六月奈良縣高市郡飛鳥村大字飛鳥石神の田畠中より石造の埋蔵物四箇を発掘し志ばらく土地所有者森国松辻本宗吉の私宅に保存せり」と、石造物発見の経緯を紹介したが、森国松の届出等によれば、石造物の出土は明治35・36年の２ヵ年にわたることから、関係者からの聴き取り時に何らかの誤解を生じていたと考えられる。また、所有者の一人である「辻本宗吉」は、おそらくは辻本宇吉とするのが正しいが、「宗吉」という名義は東京帝室博物館の「埋蔵物目録」にも見える。
4）重田定一「飛鳥の須弥山（図入）」『考古界』３－６、1903年。
5）長井 行「博山香炉と飛鳥遺物」『考古界』３－８、1904年。
6）これら届出の原本は大字飛鳥の森家に伝存していたと推測できるものの、奈文研がいつ・いかなる経緯で、その複写を入手したかはあきらかでない。そこで、現在の森家にも所在を問い合わせたが、2024年12月時点で、その原本はまだ確認できていない。このため、これら文書の複写物を載せるべきか大いに迷ったが、刊行後に再び見つかる可能性を考慮し、またそういう文書が存在したことを後世に伝える意味で、これらの翻刻を本書で紹介することにした。その理由は①水田畦畔に露出していた石造物を買い取り掘り出した経緯など、高橋健自が「飛鳥発見の石製遺物」（前掲註１）論文）に記した内容とほぼ一致すること、②森国松が一時所有していた甲・乙・丙號石のうち、八木警察署に届け出たのは甲・乙號のみで、これが帝室博物館に献納した２石に一致すること（つまり明治37年に献納した２石に漏れた丙號石が、「発見届」や「保管受書」でも見えず、おそらく何らかの事情で、届出前に他者に渡っていたとみられること）、③「上願書　写」に見える「允恭天皇ノ遠飛鳥宮ノ宮址」説は、高橋健自が「遠飛鳥宮と飛鳥寺との旧跡（図入）」（『考古界』２-12、1903年）で論じた説を、石造物を通じての交流があった森国松が引用したものであることの、以上３点である。要するに①～③は、石造物出土時から東京帝室博物館への献納にいたるまでの間に生じた、当事者であった森国松しか知りえない事実に基づいていると判断できる。これにくわえて、森が献納したのは３石のうちの２石であったとする博物館側の記録（後述）とも矛盾しない。したがって、これら複写物に書かれている事柄は、須弥山石出土時の様子を伝える重要な事実であると認定でき、今は行方不明となっている原本の真正性を保証するものである。これにくわえて、小字石神出土の石造物が後世に残るきっかけを作った、飛鳥村長・森国松の名前が長く記憶されるためにも、これら届出文書の写しには重要な価値が存している。
7）矢島恭介「飛鳥の須弥山と石彫人物について」『国華』58-12、1949年。
8）高橋健自（1903）は、森国松からの聴き取りに拠りつつも、甲號石が出土したのは明治35年秋と述べているが、「埋蔵物発見届」に記された出土時期とは一致しない。本書では、この石造物を実際に掘り出した森の「発見届」を重視し、その出土時期を明治35年５月頃とみなす。
9）高橋健自「遠飛鳥宮と飛鳥寺との旧跡（図入）」『考古界』２-12、1903年。同論文の文末謝辞によれば、この説は高橋が、森国松からの聴き取りに基づいて着想したものとわかる。森もまた、須弥山石のうち１石を地元にとどめるために、高橋説を引用したのである。明治期における学者と地元有力者との交流と、相互の影響関係が垣間見えて興味深い。
10）矢島恭介「飛鳥の須弥山と石彫人物について」（『国華』58-12、1949年。
11）2023年９月26日に大鳥昌司氏（大字飛鳥）から聴き取り。同氏にこの言い伝えを語った人物はすでに故人であり、石造物出土に関する新たな情報は得られなかった。
12）2022年９月22日に森佳子夫人から聴き取り。夫人は祖父（森国松の子息）から、「１石は京都に行った」と聞かされたという。

第４節　石田茂作の発掘調査と饗宴場説

石造物の出土位置と痕跡　石造物が出土した場所は、小字石神287番の水田西辺である。高橋健自の呼び方にしたがうと、明治35年に甲號石→乙號石の順で相次いで出土し、さらに周囲を探索したところ、明治36年に「石地蔵の如きもの」すなわち石人像を発見したという。これらの記事からは、水田畦畔に露出していた甲號石をまず掘り出し、その後は類似の石を求めて東へと掘り進めたようである。昭和11年（1936）に出土地周辺を発掘した石田茂作の著述[1)]によれば、これらの石造物が出土したのは「この田地の北西隅に近く、山形石は三個相接して西より東に並び、石神はその東に倒れ伏していたという。」（158頁）とあり[2)]、実際にその付図である「須弥山遺跡発掘実測図」（164頁）では、石造物の出土状態を復元的に描いている（本書第Ⅱ章fig. 6、17頁）。ただしこの描写は、石造物出土時の様子を知る辻本定四郎からの聴き取りに基づいていると思われる。

石田が実施した1936年の発掘調査は、石造物の性格を突き止めるための調査であったから、発掘は石造物の出土地から着手したようである。その結果、そこでは地表下約２尺の深さで川原石の集積を発見し、これを崩さないように調査範囲を拡張したものの、石造物がどのように埋蔵されていたかは、ついに知ることができなかったという。この後、石田は「敷石遺構」（SX327）と石組の「溝」（SD335・435等）とを相次いで発見したため、これら新発見の遺構を追跡するかたちで調査を進めていったが、石造物出土地の精査をおこなうことが当初の目的であったといえる。

1936年調査のトレンチ跡は、その輪郭が概ね判明している（fig.174）。奈文研の第１次調査時に、床土上面でこれを検出していたからである。しかしそのトレンチ跡は、明治35・36年の

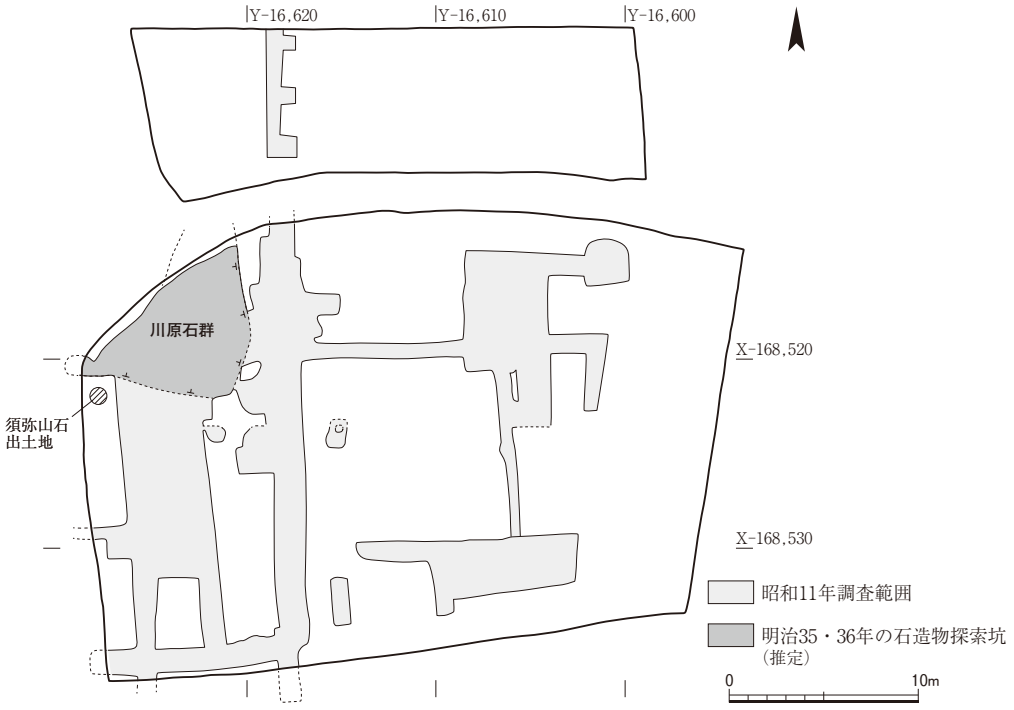


Fig. 174　石造物探索坑および1936年調査のトレンチ跡　1：400

石造物探索坑を含んでいると思われる。例えば、水田の西北部で石田が発見した「川原石群」は、明治時代の石造物探しのときに攪乱を受けた礫層の可能性がある。その回想の中で、川原石群は「人工的に積んだという形ではなくそこに投げ込まれているというかっこう」だったと石田が述べている[3]からである。石造物探索坑と石田のトレンチ跡との区別はできないが、おそらくこの川原石群は、前者の埋め戻し時に再堆積したものと考えられる。

奈文研の発掘調査　小字石神の水田は、その後も長らく重要遺物の出土地として認知されてきた。しかし、この場所が周知の遺跡として「石神遺跡」と呼ばれるようになったのは、奈文研が継続的な発掘調査に着手した1980年代以降である。その第１次調査を実施した1981年には、隣接する水落遺跡で史跡整備のための第２次調査が進行中であった。そしてこのとき、小字石神の水田は、改めて「石神遺跡」と呼ばれ、「飛鳥浄御原宮推定地」としての調査が開始されたのであった。

石神遺跡第１次調査では1936年の調査が、石造物の出土地付近に深く及んでいることがあきらかになった。しかし、その範囲外で花崗岩石造物の痕跡を２ヵ所で検出している。このうち、痕跡SX350は調査区の西端近くにおいて、床土面から掘り込んだ穴の底で検出したもので、幅７～14㎝の花崗岩薄層が直径1.0～1.2ｍの不整輪状に残存した痕跡である。その概要報告では、この痕跡が須弥山石の第１石目（下段）上端に酷似するとし、出土時に天地が転倒していたと考えている。第１石は高橋健自がいう甲號石にあたり、かつて水田畦畔に露出していたものである。床土面から掘り込んだ穴は、明治35年にこれを掘り起こしたときの攪乱坑であろう。いっぽう、痕跡SX344はSX350の東側約７ｍの地点に位置し、須弥山石の第２・３石目か、あるいは石人像の痕跡とされた（『藤原概報12』）が、その北側は昭和11年調査で深く蚕食されていたため、残されたのは南半分に限られる。石造物が出土した順序や石田の著述を参考にすると、乙號石・丙號石はSX350とSX344との間に埋没していた可能性があるが、この範囲も明治35・36年の石造物発掘時か、昭和11年調査時に深く掘り下げているため、第１次調査ではその痕跡を確認していない。令和５年度に実施した飛鳥藤原第214次調査（第１次調査地の再調査）でも、第１石の出土地付近を精査したものの、SX350は第１次調査時の掘り下げで消滅している[4]のを確認したにとどまり、石造物に関する新たな情報は得られなかった。また、須弥山石が４石からなると見立てた場合、第４石はなお未発見である。

石造物の痕跡

石造物と遺跡観　小字石神の水田で異形の石造物が相次いで出土してから、すでに120年が経つ。このうち、石人像は当初「石地蔵」、「聖天」などと呼ばれたが、いわゆる須弥山石のほうは出土後すぐに、高橋健自らが斉明紀３年条・５年条に見える「須弥山」に見立てている。石田茂作は須弥山説ではなく、噴水塔説を採った[5]ものの、やはり斉明紀５年条に着目し、斉明朝の饗宴場説を唱えるにいたった。このとき石田は、自らの発掘調査で発見した「石敷広場」（SX327）を「甘橿丘を借景とした饗応の場」に見立て、石組溝（SD330・335等）を「噴水塔」への給水や、饗応時の曲水宴に関連づけることで、須弥山造立地のひとつである「甘檮丘東之川上」が、この小字石神の水田と見て間違いない、と断定したのである。

この石田説と軌を一にしているのが、矢島恭介の説である。矢島は昭和11年の発掘調査に石田とともに参加し、「飛鳥の須弥山と石彫人物について」という論文をまとめており（『国華』58編、1949年）、発表は石田の「飛鳥の須弥山遺跡」より早い[6]。そこには発見した遺構等の図が

なく、少しわかりにくい部分もあるが、石積の「溝渠」が「十字路」で西と東とに分かれていた、と述べている。そして「この溝渠の構造から見ると、水は南から引いて、相当豊富な水量を場の入口で調節して、一途は東を迂回して北に進め（SD334-335を指す）、一途は西に引いて屈曲した溝渠を流したもの（SD330-SD331-SD332にあたる）であることは明瞭である。この中央部に山形石と、男女人物像等を据えた」（323頁）と、踏み込んだ解釈を試みている[7]。さらに矢島は、斉明５年条の須弥山造立記事に関連して、「それは単なる須弥山ではなくてここは饗宴場であって、その会場の景物として作られ噴水塔の様なものであり、饗宴の会場は曲水の酒宴に擬して作られた造園であり、人物像は即ちその酒席にあって歓楽の興を添えるバッカスの神であったのではあるまいか」と述べた（324頁）。矢島が主張したいのは、斉明紀で「「須弥山の像を造る」と云うのは山形を造ることばかりではなく、饗宴場そのものの施設を意味するものと思われる」（327頁）ということであって、いわゆる須弥山石や石人像を含む、遺跡としての総合的な理解を目指していたようにみえる。

ここで「斉明朝の饗宴施設」という、石神遺跡にまつわる遺跡観の形成過程を単純化すると、それはおもに斉明朝の須弥山説（高橋・重田説）と、饗宴場説（石田・矢島説）との融合によって作られた、ということになろう。両説に共通しているのは、小字石神周辺が斉明紀に見える、蝦夷饗応の場（「甘檮丘東之川上」斉明５年３月条）であったという認識である。この特殊なイメージは、石造物の出土から現在にいたるまでの、およそ120年におよぶ調査研究の蓄積が醸成したものである。かくして石田らの饗宴場説は、奈文研の調査では遺跡全体を理解するための枠組として一定の影響を与え、延いては斉明朝の饗宴施設説へと受け継がれた。そしてこの語りは、奈文研の刊行物を媒体としつつ、社会へと広く発信されたのである[8]。

1）石田茂作「飛鳥の須弥山遺跡『飛鳥随想』1972年。

2）なお、石田は須弥山説を採らなかったため、この著述では須弥山石を「山形石」、石人像は「石神」と呼んでいる。

3）前掲註１）論文、159頁。

4）SX350は第１次調査の終盤で、その下位にある東西溝SD347を掘り下げる過程で消滅している。その出土レベルを伝えているのは現場で作成した平面図と写真のみである。

5）前掲註１）論文。その表題が「飛鳥の須弥山遺跡」であるにもかかわらず、石田はあの石造物を「須弥山と見るむきが多かった」が決定的ではなかったと文中で記しており、須弥山説に対しては懐疑的である。また同書40頁でも、『日本書紀』の記事と対応させて「須弥山であろうといわれたものであろうが、まだ定説とするわけにはいなかい」とし、ほかにも水時計説があったことに触れている。

6）なお石田は、昭和11年調査の概要をごく手短に報告している（石田茂作「飛鳥須弥山遺蹟の発掘調査」『考古学雑誌』26-７、1936年）。

7）なお、本書での時期区分や遺構変遷案に基づくと、SD334-SD335はⅠ期、SD330-331-332はⅡ期の石組溝となるので、矢島が考えたように同時期の溝渠とは考えがたい。また、これらの石組溝が「噴水塔」である須弥山石や石人像に水を送っていたという見方も今やできなくなっている。

8）例えば奈文研編集の展示図録『飛鳥・藤原京展　奈良文化財研究所創立50周年記念』（朝日新聞社、2002年）では、石神遺跡は「服属と饗宴の場」とされ、「蝦夷をはじめとする辺境の民や朝鮮半島の外国使節に対する饗宴の場と考えられる。隣接する水落遺跡とともに、都の威厳を示し、服属を確認するための施設であった。」とする（65頁）。またこの文脈で、「中国や朝鮮半島産の舶来の土器や東北地方の土器が出土しているが、それらは「賓客」たちが飛鳥の地にもたらしたもの」と述べている（68頁）。

別　　表

1　石神遺跡出土土器の器種分類（土師器）
2　石神遺跡出土土器の器種分類（須恵器）

〔解　説〕石神遺跡等出土土器の器種分類

1．平城宮土器分類と飛鳥分類

奈良文化財研究所における土器の分類網（以下、奈文研分類という）は、『平城報告Ⅱ』（1962年）において、初めてその分類記載法としての大要が示された。しかし『平城報告Ⅶ』（1976年）では、『平城報告Ⅳ』、『平城報告Ⅵ』を刊行するごとに、「それぞれ器種名を一部改変しており，各報告書間の記述に若干の不一致」が生じていることを受け、改めて器種名の統一を図っている。そこで基本的な分類網は『平城報告Ⅱ』に拠りつつも、器種名を統一した新分類を「平城分類」と呼ぼう。奈文研では以後、土器の分類記載にはこの平城分類を踏襲しており、飛鳥・藤原地区で出土する７世紀の土器に対しても、これを準用している。

しかし平城分類は、平城宮・京で出土する奈良時代の土器を分類記載するために考案された体系であるから、これを飛鳥・藤原地区で出土する土器に当てはめるときには、若干の修正が必要であった。例えば土師器杯Ｇ・Ｈは、７世紀から８世紀にかけての頻出器種である杯Ａ～Ｃを除き、おもに飛鳥地域で出土する器形を指すために、平城分類の枠組に新たに付加された器種である。同様に須恵器杯Ｇ・Ｈも、飛鳥時代の間で消滅する器種を指すために追加された分類単位である。つまり飛鳥・藤原地区における７世紀の土器分類（以下、「飛鳥分類」）は、平城分類に最小限の修正をくわえて運用されてきたのである。

飛鳥・藤原地区で出土する７世紀の土器の分類は、現在のところ『藤原報告Ⅴ』（2017年）の別表２・３に示された器種分類が公式の分類体系である。しかし、これには既刊の刊行物に見える器種名が一部漏れており、あるいは一部で８世紀の土器を図示しているために、読者の混乱を招くおそれがある。そこで、以下ではこうした分類上の問題点を整理したうえで、とくに混乱が生じていた器種にかんして統一的で、かつ公式の名称を与えるものである。ただし、これは類型分類の構造に由来している問題を完全に解決するものではないので、飛鳥分類の見直しは今後も必要である。

2．器種分類の修正・変更点

本書では石神遺跡出土土器の分類記載をおこなうため、別表１・２のとおりに土師器・須恵器の器種名を統一する。各器種の特徴等は別表で解説し、おもに石神遺跡出土の実例を実測図で示した。また、適当な実例を欠く器種は、飛鳥池遺跡や藤原宮下層SD1901A、藤原宮東面内濠SD2300や、藤原京左京六条三坊等の出土土器で補った。以下、『藤原報告Ⅴ』や『飛鳥池報告』本文編〔Ⅱ〕との変更点を下記で詳しく述べる。

土師器杯Ｄ　『飛鳥池報告』には見えるが、『藤原報告Ⅴ』別表２に登載がないもの。平底で、内弯気味に立ち上がる口縁部の端部が丸く肥厚する供膳具である。一段暗文を施したものと、無暗文との２種類がある。本書ではSD347・640出土例２点を杯Ｄとして分類記載する。

土師器杯Ｊ　『藤原報告Ⅱ』（1978年）によれば、土師器杯Ｇは本来「内面と口縁部外面をヨコナデしただけの簡素なつくりの杯であるが、赤褐色系の色調をもつ杯Ａ・Ｂ・Ｃ類とは胎土・色調を異にし、金雲母を含む茶褐色の胎土・色調をもつ」粗製杯（同書51頁）を指していた。しかし『藤原京右京七条一坊西南坪発掘調査報告』（1987年）では、丸底の粗製杯を指す杯Ga・Gb・Gc類を付加したことで、土師器杯Ｇの概念が多様で曖昧となった。本書では、これらを相互に区別し、適切に分類記載するため、『藤原報告Ⅱ』で杯Ｇと呼んだ一群を「杯Ｊ」と呼び替えた。

土師器杯Ｊは口径11.0～13.0cmの平底食器で、底部外面を不調整にとどめ、その色調はにぶい黄色（Hue 2.5Y 6/3等）を典型とする。完形品の場合、ヨコナデは例外なく左回りである。これらは石神遺跡だけでなく、藤原宮下層SD1901A、藤原京先行条坊東一坊大路西側溝SD8551、藤原宮SE1105、同SK8471、同SD384・SX385などでも出土しており、飛鳥Ⅳ・Ⅴの土器群に伴出する。なお、杯Ｊと胎土・色調を同じくする土師器甕もあるが、本書ではその特徴を述べるにとどめた。

土師器盤Ａ　『藤原報告Ⅴ』別表２には「大型鉢」という器種が見えるが、本書では土師器盤Ａとする。口径30～35cmで把手をもたず、無台で鉢が開いたこの器種は、既刊報告では盤ないしは盤Ａと呼んだ事例が多いからである。

須恵器杯Ｊ　『山田寺報告』（2002年）に見える器種名であるが、『藤原報告Ⅴ』別表３に登載されていないもの。口径10.0cm前後で、口縁端部が外反するものを指す。飛鳥Ⅰ・Ⅱの土器群に含まれる。本書ではSD335・435、SE800井戸枠内、SD365出土例を杯Ｊとして分類記載する。

須恵器杯蓋　これまでの奈文研分類では、須恵器の杯蓋は一概に「杯Ｂ蓋」に分類されることが多かった。しかし、飛鳥Ⅳ・Ⅴの須恵器にかんしていえば、杯Ａ（無台杯）や椀Ａ（無台椀）も有蓋食器であったことが計量的にあきらかである。このため、「杯Ｂ蓋」の中には、潜在的に椀Ａ等の蓋が含まれている可能性が高い。そこで本書では、杯身の口径や、杯蓋の受部径の度数分布をよく考慮したうえで、両者の対応関係を次のように整理する。

外端径12.0cm未満・かえり付・・・・・・・・・・・杯Ｇ蓋
外端径12.0～13.0cm・かえり付・・・・・・・・・・・杯Ａ蓋
外端径14.0～15.0cm・かえりなし（推定尾張産）・・・椀Ａ蓋（推定尾張産）
外端径14.0～16.0cm・かえり付・・・・・・・・・・・杯Ａ蓋／杯Ｂ蓋
外端径16.0～19.0cm・かえり付（推定尾張産）・・・・杯Ｂ蓋／椀Ａ・椀Ｂ蓋（推定尾張産）

上記の対応関係は石神遺跡出土須恵器の計量的な分析に基づく目安であって、一定の例外を含んでいると考えられる。今後、計測値が増えるごとに見直しをおこなう必要がある。

須恵器壺・瓶類　『平城報告Ⅶ』等で示された平城宮・京出土土器の分類では、須恵器の壺・瓶類は壺Ａ、壺Ｂ、壺Ｅ、壺Ｇ、壺Ｈ、壺Ｋ、壺Ｌ、壺Ｍ、壺Ｑなどと細分され、それぞれが固有の器形を指しているが、飛鳥地域で出土する壺・瓶類に適用するのが難しい。これは７世紀における須恵器壺・瓶類の器形が多様で、用途ごとに定型化していないためである。そこで本書では、壺Ａ・壺Ｂ・・・・・という器種名は部分的に用いるにとどめ、多くを**短頸壺・細頸壺・広口壺**などと呼ぶこととした。『藤原報告Ⅴ』の別表３とは、この点が異なる。また、算盤玉形の体部に喇叭形の頸部を付した須恵器壺（壺Ｋ）は、短頸壺・広口壺という汎称にあわせて、本書では**長頸壺**と称する場合がある。平瓶、横瓶や提瓶は、考古学上の符牒としてこれを踏襲する。要するに、７世紀半ばまでの須恵器壺類を指すときに、壺Ａ・壺Ｂ・・・は用いないこととし、そのように呼ぶのは飛鳥Ⅳ以降の事例に限定した。

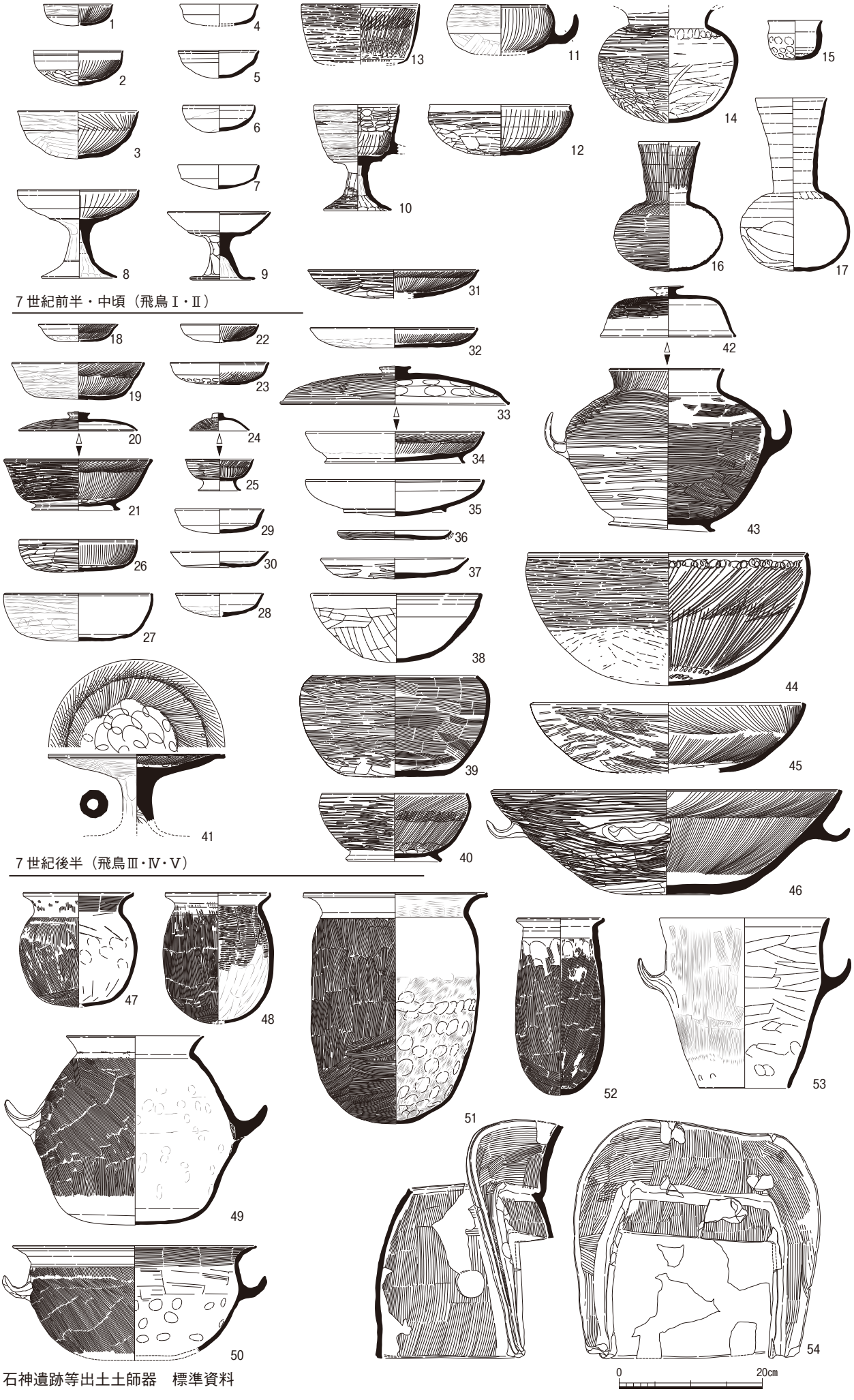
須恵器甕類　須恵器甕Ａと甕Ｂとのちがいは、刊行物によってまちまちである。両者の識別点は口縁部の形態にあるといい、『藤原報告Ⅴ』別表３では口縁部が外反するものが甕Ａ、内弯気味のものが甕Ｂであるとしたが、この両者は既往の刊行物でも不統一が著しい器種となっている。こうした状況に鑑み、本書では甕Ａ・Ｂを明確に区別せず、口縁部形状を少し具体的に説明するにとどめた。

なお、別表１・２に示した器種分類案は、『石神遺跡発掘調査報告』Ⅱなどにも継承できるよう、本書には載せない土器も採録している。今後は適宜改訂を施しつつ、長く活用されることを望んでいる。

別表１　石神遺跡出土土器の器種分類（土師器）

器種名／規格		番号	標準例（付図掲載資料）		定義／分類記載上の特徴	既刊の器種名（表記揺れ）		
杯Ａ	古相	13	甘樫丘東麓SX037	④ Fig.71-19	広く平坦な底部から口縁部が斜め上にひらく埦形の供膳具。端部が内側に巻き込むものや、丸くおさめるものがある。外面にヘラミガキ、内面に二段放射暗文を施した個体が多い。口径16～18㎝の杯ＡⅠと、10～12㎝の杯ＡⅢとがあるが、杯ＡⅡは少ない。飛鳥Ⅰ・Ⅱに古相の例（13）があるが、定型化したものが増えるのは飛鳥Ⅲ以降である。			
	Ⅰ	19	SD640	本書				
	Ⅲ	18	SD640	本書				
杯Ｂ	蓋	20・24	灰褐色土・大官大寺下層SK121	本書・⑦ 図44-1	杯ＡⅠに高台を付した供膳具で、内面に二段放射暗文を施した個体が多い。その蓋は笠形の頂部につまみを付し、外面にヘラミガキを施すのを通則とする。これらとは別に、小口径の杯身・杯蓋で一具をなす例（24・25）もある。			
	身	21・25	SE800石敷埋土・大官大寺下層SK121	本書・⑦ 図44-6				
杯Ｃ（深形）	Ⅰ	3	SE800	本書	丸底に近い底部から口縁部が内弯気味に立ち上がる埦形の供膳具で、鋺（かなまり）のかたちを写したもの。口縁端部に内傾する面をもつものが多い。口径16～18㎝の杯ＣⅠ、12～13㎝の杯ＣⅡ、10㎝前後の杯ＣⅢがある。杯ＣⅠの径高指数は30～40（飛鳥Ⅰ・Ⅱ）。内面には一段放射暗文を施すが、飛鳥Ⅰには二段放射暗文を施した例（３）もある。			
	Ⅱ	2	SD335	本書				
	Ⅲ	1	SD335	本書				
杯Ｃ（浅形）		22・23	SD347・640	本書	深形の一群とは異なり、低平で浅手の杯Ｃ。径高指数は20～30（飛鳥Ⅳ・Ⅴ）。内面に一段放射暗文を施し、底部外面を不調整にとどめる例が多い。飛鳥Ⅳ以降。			
杯Ｄ		26・27	SD640	本書	内弯気味の口縁端部が内側に肥厚する平底の土器で、外面をヘラミガキで整えるもの。一段暗文を施すものが多いが、無暗文で器形を同じくする個体もこれに含める。	（鉢Ｂ）	⑩ Fig.55	
杯Ｅ・杯Ｆ		36	褐色土（第４次）	本書	広い底部から口縁部が内弯気味に立ち上がるⅢ形の供膳具。把手を付した杯Ｅ（36）と、高台を付した杯Ｆがある。			
杯Ｇ	a	4		③ 第10図39～42	端部を小さく外反させた直立気味の口縁で、金雲母を含む細かい砂質土で茶褐色を呈する。	—		
	b	5	SD435	本書	杯Ｃに似た比較的精良な赤褐色の胎土で、口縁端部も杯Ｃに似て小さな面を内側につくる。	（椀）	① PL.54-8～10	
	c	6	SD500	本書	口縁端部外側に面をつくり内弯する。淡褐色で砂を含む。	—		
杯Ｈ		7・28	SD435・SD640	本書	口縁部を強くヨコナデし、底部を粗いヘラケズリで調整する粗製の杯。口縁部と底部との境に稜をなす。	（杯Ｅ）		
杯Ｊ		29・30	SD640	本書	内面と口縁部外面をヨコナデで整形し、底部を不調整にとどめる平底の杯。にぶい黄色を呈し、胎土には金雲母を含む。かつて「杯Ｇ」（文献①）と呼ばれた一群で、杯（29）とⅢ形のもの（30）とがある。	（杯Ｇ）	① PL.54-11～13	
						（杯Ｄ）	② PL.86-13	
Ⅲ Ａ		31・32	水落遺跡貼石周辺・SD640	⑥	広く平坦な底部から短い口縁部が立ち上がる浅形の供膳具。底部が丸みを帯びるもの（31：飛鳥Ⅱ・Ⅲ）から、平坦なもの（32：飛鳥Ⅳ・Ⅴ）へと遷移する。			
Ⅲ Ｂ	蓋	33	灰褐色土（第３次）	本書	Ⅲ Ａに高台を付したもので、Ⅲ Ａよりも大口径の個体を含む。笠形の頂部に扁平なつまみを付した大型の蓋（33）が被さる。			
	身	34・35	灰褐色土・SD640	本書				
Ⅲ Ｈ		37	藤原宮SE1105	①	底部を粗いヘラケズリで調整する粗製のⅢで、胎土・色調は杯Ｈに同じ。			
高杯Ａ		41	藤原宮SD2300	⑧	広く平坦な皿状の杯部に脚柱を付した器形。脚柱は周囲を縦方向のヘラケズリで面取りする。杯部内面に放射暗文と螺旋暗文を施す。飛鳥Ⅳに出現し、奈良時代に盛行。古器名の「土高盤」。			
高杯Ｃ		8	SD335	本書	杯Ｃに似た背部に、断面円形の脚柱を付したもの。口縁部内面に一段放射暗文を施す。胎土・色調は杯Ｃに同じ。	高杯Ｂ	① PL.60-103	
高杯Ｇ		9	SD500	本書	杯Gb類に共通する胎土・色調の高杯で、無暗文のもの。			
盤Ａ		45・46	左京六条三坊SD4135	⑨	平坦な底部から口縁部が斜め上に大きくひらく器形で、無台のもの。内面に放射暗文を、外面にヘラミガキを施す。飛鳥Ⅳ・Ⅴでは口径30～40㎝前後の個体が多い。一対の把手を付したものもある。	（大型鉢）	⑨ 別表2-24（SD1901Ａ）＊原報告では「盤」	
盤Ｂ					盤Ａに高台を付したもの（本書では掲出資料なし）。			
大型鉢		44	甘樫丘東麓SX037	④	丸底で口縁部が内弯する大口径の鉢で、内面に二段放射暗文を施すもの。			
鉢Ａ		39	SD1476（８・９次）	本書	平坦な底部から口縁部が内弯気味に立ち上がる深手の鉢で、口縁端部を丸くおさめる。内面に二段放射暗文を施す個体や、横方向のハケ目を施す個体がある。			
鉢Ｂ		12	SE800	本書	狭く平坦な底部から口縁部が内弯気味に立ち上がる浅手の鉢で、口縁端部が短く外反する。内面に一段放射暗文を施す個体や、横方向のハケ目を施す個体がある。			
鉢Ｃ		40	藤原宮SD3206	⑤	鉢Ｂに高台を付したもの。			
鉢Ｈ		38	SE800石敷埋土	本書	杯Ｈと同様の器形と調整で、直立気味の口縁部をもつ鉢。胎土も杯Ｈに同じ。			
把手付椀		11	SD335	本書	口縁部が強く内弯する椀の中位に角形の把手を付したもの。内面に一段暗文を施す個体がある。			
脚付椀		10	SE800	本書	狭く平坦な底部からやや長く直線的な口縁部を付すコップ形の椀に、喇叭形の脚柱を備える。角状の把手を１本付し、外面にヘラミガキ、内面に暗文を施す。			
壺Ａ・同蓋		42・43	SK648	本書	肩の張った球形の胴部に短く直立する口縁部を付した有台・広口の壺。いわゆる薬壺形。胴部から頸部にかけてヘラミガキを施す。胴部中位に一対の把手を付した個体が多い。その蓋は頂部に釦形のつまみを付しており、頂部外面に４分割のヘラミガキを施すのを通則とする。杯Ａの底部外面につまみを付して壺Ａの蓋とした例もある。			
壺Ｂ		15	SD640	本書	小さな底部といびつな球形の胴部とからなり、短く外反する口縁部をもつ広口の小壺。胴部は手捏ねで成形し、外面は不調整のままとする。			
短頸壺		14	SE800	本書	扁球形の胴部に、外反する短い口縁部を付した無台・広口の壺。			
長頸壺		16・17	SE800	本書	扁球形の胴部に、やや外方へとひらく長い頸部を付した無台の壺。胴部から頸部にかけての外面をヘラミガキで整えた個体（15）がある。			
甕Ａ		47・48	SE650・SE800	本書	球形の胴部と、短く外反する口縁部とからなる広口の煮炊具。頸部以下の容量が２～４ℓまでの個体が多い。胎土や器面調整（ハケ・ヘラケズリ）の組み合わせ等により、複数群を識別できる。古代の塝（なべ）に当たる。			
甕Ｂ		49	甘樫丘東麓SX037・SE800	④・本書	球形の胴部中位に一対の把手を付した広口の煮炊具。頸部以下の容量が４ℓを超える個体が多い。大容量の個体は古代の瓮（ほとぎ）にあたる可能性がある。			
甕Ｃ		51・52	SK518・SE650	本書	半球形の底部と長い胴部とからなり、短い口縁部が外方へとひらく背高の煮炊具。いわゆる長胴甕。器面調整（ハケ・ヘラケズリ）の組み合わせ等により、複数群を識別できる。			
鍋		50	灰褐色土（第３次）	本書	半球形の胴部から外方へと大きくひらく口縁部とからなる広口の煮炊具。把手を付したものを鍋Ｂと呼び、これをもたない鍋Ａと区別する場合がある。			
甑		53	SX795	本書	胴部がややひらき気味の円筒形をなす煮炊具で、底部に複数の蒸気孔を開けたものと、筒抜けのものとがある。胴部中央に一対の角形把手を付している。			
竈		54	藤原宮SD145	未報告	截頭砲弾形の片側を大きく切開して焚口（火口）とし、胴部上端に掛口を開けた移動式のかまど。焚口の周縁には庇を付している。側面に手がかりの孔を開けたものがある。韓竈。			

①『藤原報告Ⅱ』（1978）、②『藤原報告Ⅲ』（1980）、③『藤原京右京七条一坊西南坪発掘調査報告』（1987）、④『藤原概報25』（1995）、⑤『奈文研年報1997-Ⅱ』、⑥『藤原報告Ⅳ』（1995）、⑦『紀要2001』、⑧『紀要2012』、⑨『藤原報告Ⅴ』（2017）、⑩『紀要2018』

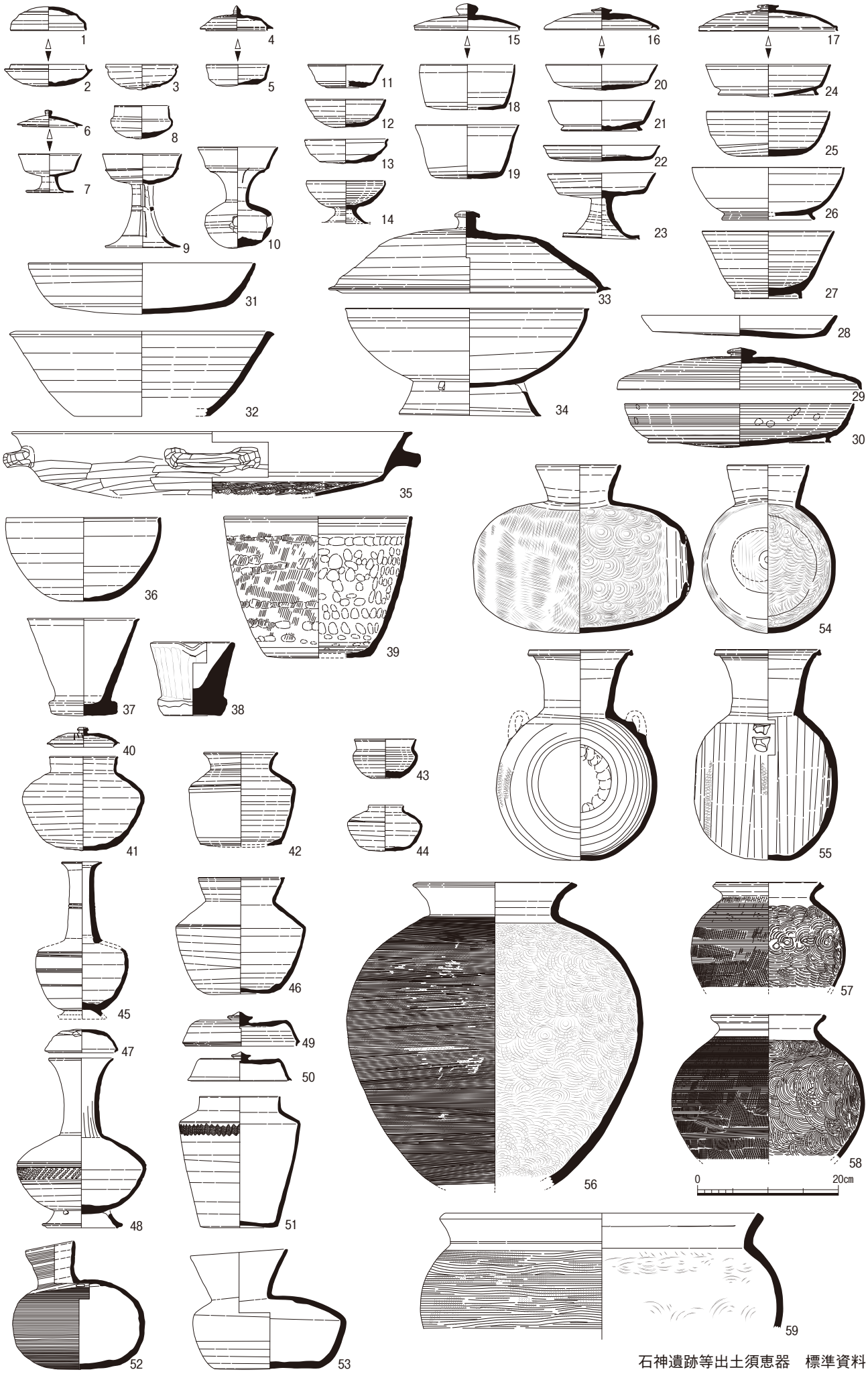


石神遺跡等出土土師器　標準資料

別表２　石神遺跡出土土器の器種分類（須恵器）

器種名／規格		番号	標準例（付図掲載資料）		定義／分類記載上の特徴	既刊の器種名（表記揺れ）		
杯Ａ		11～13・20	SD640	本書	口縁部が外方へとひらく平底の無台杯。口径13.0㎝前後のものと、15.0～18.0㎝のものがある。			
杯Ｂ		21・24	SD640	本書	口縁部が外方へと開く平底の有台杯で、輪状の高台をめぐらせたもの。口径13.0㎝前後のものと、15.0～18.0㎝のものがある。			
椀Ａ		18・19	SD640	本書	平坦な底部から口縁部が直立する無台の供膳具で、杯Ａより背高で深手のもの。径高指数は40～50。口径14.0㎝前後・器高5.0～7.0㎝の個体（尾張産）が多い。その蓋（15）は平坦な頂部に丸い宝珠形のつまみを付したもので、かえりをもたない。			
椀Ｂ		26・27	SD640	本書	平坦な底部から立ち上がる口縁部がやや外方へとひらく有台の供膳具で、杯Ｂよりも背高で深手のもの。			
椀Ｃ		25	SD640	本書	やや丸みを帯びた平坦な底部から内弯気味の口縁部が立ち上がる無台の供膳具で、鋺形のもの。口径18.0㎝前後で尾張産のものを典型とする。			
杯蓋（かえり付）		16	SD640	本書	笠形の頂部中央に宝珠形やボタン形のつまみを付した蓋で、内面の外縁寄りにかえりを付して身受けの溝をめぐらせたもの。杯類の口径に対応し、外端径は10.0～18.0㎝のレンジに収まる。			
杯蓋（かえりなし）		15・17	SD640	本書	笠形の頂部中央に宝珠形やボタン形のつまみを付した蓋で、内面の外縁を折り曲げて身受けとしたもの。尾張産で13.0～15.0㎝のものは無台椀（椀Ａ）の蓋に、18.0㎝を超えるものは杯Ｂや椀Ａ等の蓋に当たる。尾張産以外で14.0～18.0㎝の個体は杯Ｂの蓋である。			
杯Ｇ	蓋	4	SD435	本書	小さく平坦な底部と、ほぼ直立する口縁部とからなる、無台・有蓋の小型杯。受部径が10㎝前後で、乳頭状または宝珠形のつまみを付したものは、杯Ｇの蓋として認識されることが多い。			
	身	5	SD435					
杯Ｈ	蓋	1	SD435	本書	丸底の底部からやや外反した「受部」へとつながり、受部の付け根から短い口縁部が立ち上がる器形。古墳時代以来の伝統的器種で、杯身（２）と杯蓋（１）とで一具をなす。			
	身	2	SD435					
杯Ｊ		3	SE800	本書	小さく平坦な底部と、内弯気味の口縁部とからなり、口縁端部が外反する小型杯。飛鳥Ⅰ・Ⅱの土器群に少数がともなう。杯Ｇの変種とみられる。一部に近江産を含む。			
皿Ａ		22・28	SD640・SK641	本書	広く平坦な底部から短い口縁部が立ち上がる浅形の供膳具で、無台のもの。			
皿Ｂ	蓋	29	灰褐色土（第３次）	本書	皿Ａに高台を付した浅形・有蓋の供膳具で、大口径の個体が多い。			
	身	30	SD640					
短脚高杯		６・７・14	甘樫丘東麓遺跡SX037	③	小さく平らな底部から口縁部がほぼ直立して立ち上がる小型の杯部に、ラッパ形にひらく短い脚柱を付したもの。かえり付の小型蓋と一具をなす例（６・７）あり。	高杯Ｇ・Ｈ	⑩	Fig.69
長脚高杯		9	甘樫丘東麓遺跡SX037	③	口縁部下半に１～２条の稜線をめぐらせた杯部に、二段透孔を開口した長い脚柱を付したもの。			
高杯Ａ		23	石神遺跡（第11次）	⑧	浅い皿状を呈する杯部に喇叭状の脚柱を付したもの。			
盤Ａ		31	SD500	本書	広く平坦な底部から、短い口縁部が斜め上にひらく鉢形ないしは盌形の大口径器種で、無台のもの。浅鉢形（31）と深鉢形（32）のほか、大口径の盌形（35）がある。飛鳥Ⅳ・Ⅴでは口径40～50㎝の個体が多い。鍵形や角形の把手を付したものもある。陶手洗または洗盤に当たるか。			
		32	石神SK1245（第７次）	⑨				
		35	飛鳥池遺跡SK1128	⑩				
鉢Ａ		36	SD640（第３次）	本書	ごく狭く平坦な底部から、強く内弯する口縁部が立ち上がる半球形の鉢。いわゆる鉄鉢形。			
鉢Ｅ		39	褐色土（第４次）	本書	平坦な底部から直線的な口縁部が立ち上がるバケツ形の器形。			
鉢Ｆ		37	藤原京東一坊大路SD5110	②	厚い円盤状の底部から、長く直線的な口縁部が外方へと立ち上がる背高の器形で、古代の陶臼に当たる。底部下面に多数の穿孔を施す個体がある。飛鳥・藤原地域では、須恵器のほかにも瓦質のもの（38）が少数出土している。			
		38	藤原京右京一条一坊SB8670	④				
台付大型鉢		33・34	石神遺跡（第17次）	⑥	口径35㎝前後で、底部に台脚を付した鉢形容器（34）。台脚には透孔を開けている。ドーム形の大型蓋（33）と一具をなす。			
瓶		10	飛鳥池遺跡灰緑色粘砂	⑩	球形ないしは算盤玉形の胴部に、外方へとひらく長い頸部を付した壺形の器形。胴部中央の１ヵ所に孔をあける。口径は胴径を上回る。			
壺蓋		40	SE800	本書	壺類（短頸壺や平瓶など）の蓋で、つまみを付し、かえりをもつもの。			
		47	大官大寺下層SK121	⑤	壺類（短頸壺や平瓶など）の蓋で、椀形で口縁端部を内側に小さく折り曲げるもの。			
短頸壺		41	SE800	本書	蕪形の胴部に外反する短い口縁部を付した無台の壺で、本表と平城宮土器分類の壺Ａ（いわゆる薬壺形）とは異なる器形を指す。かえり付の蓋が付属するとみられる。	「壺Ａ」	⑦	別表２
長頸壺		48	飛鳥池遺跡SD1173	⑩	肩が「く」の字形に張り出す胴部に、外方へとひらく長い頸部を付した壺。透孔を開けた台脚を付し、胴部側面に列点文をめぐらせる個体がある。平城宮土器分類の壺Ｋに通じる器種。			
広口壺		42・46	SE650	本書	肩が「く」の字形に張り出す胴部に外方へとひらく口縁部を付した無台の壺で、従前の壺Ｂとは異なる器形を指す。	「壺Ｂ」	⑦	別表２
直口壺		8	SD500	本書	球形の胴部に長く喇叭形の頸部を付した壺。頸部の高さは全高の50％前後を占める。７世紀前半から半ばまでの該当器種を指す。			
壺Ａ・同蓋		49・50	SD640	本書	肩の張った球形の胴部に短く直立する口縁部を付した有台・広口の有蓋壺。いわゆる薬壺形。専用の蓋はボタン形のつまみを付した平坦な頂部と、直角に折れ曲がる口縁部とからなる。７世紀半ばまでの短頸壺とは区別する。			
壺Ｂ		51	SD640（第５次）	①	平坦な底部から長い胴部が立ち上がり、肩部を強く屈曲させて短く直立する口縁部を付した背高で広口の有蓋壺。肩部に１～２対の把手を付した個体がある。底部に「瓮五十戸」と刻書した例など、尾張産が目立つ。			
壺Ｃ		43・44	SE800・SD640	本書	算盤形の胴部に短い口縁部を付した、広口で無台の小型壺。			
細頸瓶		45	飛鳥池遺跡SD1110	⑩	扁球形の胴部に細く長い頸部を付した無台の瓶。			
平瓶		52・53	SE650・SE800	本書	扁球形ないしは逆台形に成形した胴部をいちど閉塞し、器軸から外れた部分に開口して頸部を付した器形を指す。			
横瓶		54	SE650	本書	俵形に成形した胴部をいちど閉塞し、側面に開口して外方でとひらく頸部を付した器形。			
提瓶		55	SE650	本書	扁球形に成形した胴部をいちど閉塞し、器軸から外れた部分に開口して頸部を付した器形。肩部に環状あるいは角状の把手を付した例あり。			
甕		56～59	SE800・SK518・SD640	本書	苺形の胴部に広口の口縁部を付した大型の貯蔵具。胴部外面はタタキ目またはカキ目に覆われ、内面に当て具痕を残す例が多いが、当て具痕を摺り消した個体もある。			

①『藤原概報16』（1986）、②『藤原京左京二条一坊・同二条二坊発掘調査報告』（1987）、③『藤原概報25』（1995）、④『藤原京右京一条一坊発掘調査報告』（1997）、⑤『紀要2001』、⑥『紀要2005』、⑦『藤原報告Ⅴ』（2017）、⑧『紀要2018』、⑨『紀要2019』、⑩『飛鳥池報告』本文編〔Ⅱ〕（2022）



石神遺跡等出土須恵器　標準資料

RESEARCH REPORT No.106 Publication of
The Nara National Research Institute
for Cultural Properties

ISHIGAMI SITE I

THE FINDSPOT
OF THE ANCIENT STONEWORK

2025

NARA NATIONAL RESEARCH INSTITUTE
FOR CULTURAL PROPERTIES

Ishigami Site I

THE FINDSPOT OF THE ANCIENT STONEWORK

CONTENTS

Chapter I Introduction ····· 1

1 Background of the Excavation ····· 1

2 Excavation Teams / Organizations ····· 3

3 Preparation of the Excavation Report ····· 3

Chapter II Historical Environment ····· 6

1 Location and Topography of the Site ····· 6

2 Archaeological Sites in the Surroundings ····· 10

3 Creation of the Site Image and the Previous Excavations ····· 14

Chapter III Excavation ····· 21

1 Surveying and Grid System ····· 21

2 Outline of the Excavations ····· 25

3 Excavation Logs (Abstract) ····· 29

Chapter IV Archaeological Features ····· 47

1 General Stratigraphy ····· 47

2 Fills and Confirmation Surface of Features ····· 50

3 Later Modification of the Topography ····· 52

4 Descriptions of Archaeological Features ····· 54

A Phase I (First Half of the Seventh Century AD) ····· 54

B Phase II (Mid to Late Seventh Century AD) ····· 68

C Phase III (Late to End of the Seventh Century AD) ····· 77

D Phase IV (After the Nara Period) ····· 82

E Kofun Period (Before the Sixth Century AD) ····· 84

F Features related to the Stonework ····· 85

Chapter V Artifacts ····· 87

1 Pottery and Clay Objects ····· 87

A Pottery from Phase I Archaeological Features ····· 88

B Pottery from Phase II Features and Fill B ····· 98

C Pottery from Phase III Archaeological Features ····· 110
D Pottery of the Nara and Heian Periods ····· 129
E Blackened *Haji* Ware imported from Northeastern Japan ····· 131
F Inscribed Pottery with Spatula ····· 132
G Ceramic Inkstones ····· 132
H Silla Pottery ····· 135
I Clay Objects ····· 136
J Pottery of the Kofun Period ····· 137
K Pottery of the Medieval Period ····· 139
2 Roof Tiles and Bricks ····· 143
A Round Eave-end Round Tiles ····· 143
B Flat eave-end Tiles ····· 150
C Rafter-end Tile ····· 152
D Round Tiles ····· 153
E Flat Tiles ····· 156
F Tiles with Inscriptions ····· 166
G Discs cut from Rooftile ····· 167
3 Wooden Objects ····· 171
A Wooden objects from SE800 ····· 171
B Wooden objects from the Other Archaeological Features ····· 182
4 Metal Objects ····· 183
A Iron Objects ····· 183
B Copper Objects ····· 215
5 Artifacts related to Metallurgy ····· 217
A Earthen Tuyeres ····· 217
B Molds and Crucibles ····· 219
C Copper Material, Copper Droplet, Copper Slags, Iron Material ····· 221
D Iron Slags ····· 223
6 Mud Plaster ····· 224
7 Stone Objects ····· 224
A Whetstone ····· 224
B Small rounded Pebbles ····· 233
C Other Stone Objects and Beads ····· 234
D Muro Volcanic Slate ····· 235

Chapter VI Scientific Analyses ····· 241
1 Residual Lipid Analysis of *Haji* Jars from SE800 ····· 241
2 Tree Species of wooden objects from SE800 ····· 250
3 Depositional Environment and Flow Direction of the Ditch SD335 ····· 255

Chapter VII Discussions ····· 257
1 Pottery ····· 257
A Dating of Pottery from the PhaseA-3 Features ····· 257
B *Haji* Jars from the Well Frame of SE800 ····· 263
2 Roof Tiles ····· 267
A Dating of Ishigami Types A, B, D, and E ····· 267
B Dating of Ishigami Type F ····· 272
C Background of Ishigami Types A, B, D, E, and F ····· 272
D Background of the Roof Tiles of Asuka-dera Temple ····· 273
3 Metal Objects ····· 277
A Distribution of Iron Objects and the location of "*Oharida Hyogo*" ····· 277
B Relationship between the Iron Objects and the Soldiers' Equipment ····· 279
4 Reconstruction of the Chronological Transition of the Features ····· 284
A Previous Excavations and the Periodization ····· 284
B Reconsideration of the Periodization and the Rationale ····· 287
C Relative Sequence of Archaeological Features ····· 290
5 Archaeological Features ····· 292
A Typology of Deposits in Pillar Holes ····· 292
B Construction Method and Function of Masonry Ditches ····· 294
C Changes of the features in the First to fourth Excavation Areas ····· 295
D Changes of the Water Channel Network and Function ····· 300
E Features destroyed by Natural Flow NR310 ····· 302

Chapter VIII Conclusions ····· 303
Appendix: Ancient Stonework from Koaza Ishigami ····· 307
Appendix Tables ····· 319
English Summary ····· 329
PLAN
PLATE
PHOTOGRAPHS

Summary

This first volume of the final official report publishes the results of the first to the fourth excavations at the Ishigami site (石神遺跡) and the Asuka Fujiwara 214th excavation, as a supplementary investigation of the first excavation covering the southeastern part of the area where the Nara National Research Institute for Cultural Properties (hereafter, Nabunken)has conducted excavations continuously. Among them, the rice field at Asuka 287 (飛鳥287番地) is well-known for the provenance of the *Sumeru* (須弥山石), a sacred mountain of ancient India, and the stone statue (石人像) in Meiji 35 and 36 (1902–1903). At the same location, Ishida Mosaku (石田茂作) carried out an excavation between May and June of Showa 11 (1936). Therefore, this is regarded as not only the first volume of excavation reports published by Nabunken but also a culmination of the 120-year research history on the Ishigami site, starting from the excavation of the stonework. In this volume, the authors propose a new periodization based on the current research and revise the chronological transition of the confirmed features shown in the annual bulletin 2009 on several important points, although this new interpretation should be evaluated after the publication of the other volumes of the excavation report.

1. Background of the Excavations

The Ishigami site, a seventh-century archaeological site situated in Asuka, Asuka Village, Takaichi district, Nara prefecture, Japan, is located to the north of the Asuka-dera Temple (飛鳥寺) and the east of Amakashi-no Oka (甘樫丘). In the rice field of Koaza Ishigami, the stonework so-called *Sumeru* stones and the stone statue were unearthed 120 years ago, between Meiji 35 and 36 (1902–1903).

In the research history, two main hypotheses have been highlighted. The first hypothesis interprets the site as the banquet hall (or guest house) of Empress Saimei (reign: 655–661), based on the characteristics of the *Sumeru*. Another hypothesis explains the Asuka-Kiyomihara Palace (飛鳥浄御原宮) of Emperor Tenmu (reign: 673–686) was situated at the Ishigami site and the surroundings. These hypotheses have been argued respectively without any mixture. The ongoing excavations by the Nabunken during approximately three decades are closely affected by these hypotheses.

Until around 1980, the current Ishigami site was called the "estimated site of Asuka Kiyomihara Palace," because of a hypothesis that the palace was once located in Asuka Elementary School and the eastern neighboring land by Kida Sadakichi (喜田貞吉). Notwithstanding the very narrow area, the excavation in Showa 4 (1929) revealed a stone pavement in the territory of the elementary school, which was regarded as the remain of Asuka Kiyomihara Palace by the excavators. In the rice fields of Koaza Ishigami, the east of the elementary school, a hypothesis that identified pieces of the unearthed stonework

with *Sumeru* in the *Saimeiki* (斉明紀) was proposed in Meiji 36 (1903), immediately after the discovery.

The excavation in Showa 11 (1936) produced a masonry ditch and a stone pavement near the findspot of the stonework, which were regarded as remains of the banquet hall of the Saimei era in the later period. In sum, Asuka Elementary School and the surroundings have long been considered to be important sites occupied from the Saimei to the Tenmu eras through examination of toponyms and partial excavations. Nevertheless, the entire site remained unclear for a long time due to the limited excavations.

After WWII, the continuous excavations at the Asuka-dera Temple caused academic interest in the estimated site of Asuka Kiyomihara Palace to the north of the temple. Specifically, an identification of the northern boundary wall of Asuka-dera Temple (1977) revealed that the rice fields of Koaza Ishigami were included in the northwest corner of the temple precinct. Since it is assumed that the rice fields also contained the intersection of the Nakatsu-Michi road(中ツ道), which likely passed in front of the west gate of Asuka-dera Temple, and the "Asuka-dera North Road"(「飛鳥寺北路」)mentioned in the article of the Jinshin Rebellion (壬申の乱, 672) in the *Nihon-Shoki* (『日本書紀』), comprehensive research was required from a new perspective. In addition, a remain of the water clock during the Saimei era was found at the Mizuochi site(水落遺跡), in the vicinity of the estimated site of the palace. Based on these results, Nabunken started excavations at the estimated site of the palace in Showa 56 (1981). At that time, the site was first called "Ishigami Site".

As mentioned above, the continuous excavations by Nabunken started at the rice fields of Koaza Ishigami (Asuka 287). A series of excavations continued until the 21st excavation (2008) in one rice field borrowed per fiscal year. When the organization of excavation data for the final report started in 2009, the authors faced a significant contradiction that the east-west fences (SA600 and SA560) and the east-west ditch (SD347) confirmed in the third excavation have not been identified in the east-neighboring area of the first excavation. Among these, pillar holes of SA600, likely bending northward along the masonry ditches (SD334 and 335), had to be confirmed in the area of the first excavation .

In Reiwa 5 (2023), the re-excavation at the area was carried out after 42 years of the first excavation, with the consent of the rice field's owner (Asuka Fujiwara 214th excavation). As the excavation revealed that SA600 turned north before SD335, we partially revised the results of the first excavation. Primarily based on the original records of the first to fourth excavations, the authors revised the previous assessment of the Ishigami site through the reinterpretation of the records and the current re-excavation.

2. Major Archaeological Features

New Periodization: The previous excavations at the Ishigami site have adopted the five-phase periodization: A-1, A-2, A-3, B, and C. This periodization has been constructed through revisions in each excavation after the fourth excavation. According to the Fujiwara annual summary reports (『藤原概報』), Phase A was mainly dated to the Saimei era (mid-seventh century), Phase B was assigned to the Tenmu era (late seventh century), and Phase C corresponded to the period of Fujiwara Palace(藤原宮). However, the excavation reports show changes in the periodization before the seventh excavation (1987), in which the general periodization was almost established. Since this volume reports the results of excavations mainly before 1984, the periodization cannot be used without any revisions . In addition, the re-excavation of the first excavation area (Asuka Fujiwara 214th excavation) caused modification of the chronological assessment of the main features . Given the situation, the authors decided to adopt a new periodization in this volume rather than the conventional one. This new periodization consists of five phases, I-1, I-2, II-1, II-2, and III, to each of which the archaeological features of the seventh century are allocated . The following describes these phases and their main features.

Phase I: This is the period comprising the features earlier than the first fill (Fill A). Based on the overlapping features, the phase is subdivided into two: Phases I-1 and I-2. Although both subphases correspond to the conventional Phase A-1 and 2, the formers date to the period earlier than the Kogyoku (皇極朝) and Saimei (斉明朝) eras. The southern fence in Phase I, which was as large as the great fence(Ogaki 大垣)of Fujiwara Palace, turned north as SA4650 at the eastern end of SA600. The southeastern corner, located in the rice field at 287 Asuka (1st excavation area), bordered a large area in the first half of the seventh century. SA4650 turned east at the northern end and was likely to connect to the east-west fence SA1460 (in Ishigami Site 1990-1). A masonry ditch consisting of SD334, SD335, and SD435 along the large fence (SA600 and SA4650) turned east in the north toward the Cho-dori(丁通り)area. The main water channel, extending to the east of the Ishigami site, was likely arranged to border the exterior side of the large fence. Although the entire area inside the great fence remains unclear, some buildings, such as SB745, SB750, SB810 and SB811, SB450, SB530, and SB735, were confirmed. Based on the overlapping features and sediments of pillar holes, SB745 and SB810 were assigned to Phase I-1, and SB450, SB530, and SB735 were assigned to Phase I-2. In the present volume, the masonry ditch consisting of SD334, SD335, and SD435 and the well SE800, which were once regarded as features functioning until the conventional Phase A-3, dated back to Phase I based on the revised chronological assessment of the pottery assemblages from them. AsSA600 was assigned to Phase I as well, it dated to the earlier period than the water clock (*Rokoku*漏刻) at the Mizuochi site. Furthermore, the period of SB735, originally assigned to the conventional Phase B , has been revised to Phase I

based on the elevation of the stone pavement.

Phase II: The features built between the first fill (Fill A) and the second fill (Fill B) were allocated to the phase.. Based on the overlapping features, the phase is subdivided into two: Phases II-1 and II-2. Corresponding to the conventional Phases A-3 and B (Tenmu era), the present phase dates to the Saimei era, although some features of the conventional Phase A-3 were dated back to Phase I (see above). After the large southern fence SA600 in Phase I was totally abandoned , SA560 was built at almost the same location. A masonry ditch from the south, consisting of SD330, SD331, and SD332, turned west before the north-south wall SA560 and turned north again to run into the interior space . Whereas it is assumed that this masonry ditch, contemporaneous to SD335, was used during the entire Phase A in the previous interpretation , the authors reinterpreted that the same masonry ditch functioned in Phase II-1 in the present volume because the frequent removal of the lateral stones allowed us to estimate the higher elevation of the construction than SD335 . As with SD332, SB620 was assigned to Phase II-1. After scrutinizing the chronological sequence between SD730 and SD332, the authors estimated that SD332 was built older than SD730 . In other words, it is assumed that the straight ditch of SD730 was built to replace the bent ditch consisting of SD330, 331, and 332 to penetrate between the pillars of the fence SA560.

The buildings of Phase II include SB620 (II-1), SB510, SB520, SB580, SB736, and SB770 (II-2). In the conventional interpretation, SB400associated with the stone pavement in the surroundings , was dated to the Tenmu era.. In the present volume, SB400 was regarded as the building of Phase II-1, the Saimei era.

Phase III: This period dates to the second half to the end of the seventh century, which is later than the second fill (Fill B) . The phase roughly corresponds to the conventional Phase C (Fujiwara Palace period) . Given that the Asuka IV pottery assemblage, which has been found at the site in large quantities, may be dated as late as the Fujiwara Palace period, the present phase covers from the Asuka Kiyomihara Palace period to the Fujiwara Palace period. During the phase, the east-west wall SA311 and the east-west ditch SD347 running from the east turned north and continued northward as SA751 and SD640, respectively. Only SB742 was situated inside the boundary, which was drastically changed from before Phase II. In the northwestern part of the fourth excavation area, SB830, as a building with internal pillars, was built in the area bordered by SA780 and SA781. Although the pillar holes of the Phase III buildings were buried with the brown soil containing charcoal, which may have been derived from Fill B by digging from the upper surface, these remains were confirmed in the lower part of the brown soil, equivalent to Fill B, according to the logs of the third and fourth excavations.

Phase IV (after the Nara period): After the abandonment of the buildings and walls of Phase III, the natural flow NR310 ran down to the west in the eighth century, which

destroyed the features of the seventh century. The south stone pavement SX327 attached to SB400 and the masonry ditch SD330 were eroded by the natural flow. Small post-in-ground structures SB440 and SB460 were built after NR310 was buried with sediment in the ninth century.

3. Artifacts

Huge amount of excavated pottery: Notwithstanding a paucity of mentions in the interim reports of the Ishigami site, the large amount of excavated artifacts characterized the site impressively. The pottery sherds excavated in the area, which was reported in the present volume, totaled 780 wooden boxes for the organization. This number occupied 16.3% of4,788 boxes which contain all the pottery sherds and clay objects excavated until the 21st excavation. Most of the pottery sherds found in Fill B and the features of Phase III were classified as Asuka IV, while a small amount of pottery sherds were found in the features of the Saimei era, the conventional Phase A-3. . The same situation can be observed in the features of Phase II after the renewal of the periodization. Therefore, the large amount of the pottery sherds may lead us to conclude that the site was most flourishing during Phase III, the period from the Asuka Kiyomihara Palace to the Fujiwara Palace. In addition, the current analyses revealed that the Silla pottery, frequently related to the venue of the royal feasting in the Saimei era, and the smoked Haji ware imported from northeastern Japan (Tohoku region) were contained in the vast amount of the Asuka IV pottery sherds rather than the features of the Saimei era. Furthermore, the large amount of iron implements found in the focused area was likely contemporaneous with the Asuka IV pottery assemblage.

From the well SE800 in Phase I, a large number of *Haji* jars and *Sue* jars and pots were found in the inside of the frame. Although it was assumed that SE800 was continuously used from Asuka I to IV based on the pottery chronology, the present volume does not adopt this interpretation. The typological features of the *Haji* tableware imply that the well was buried from Asuka I to II. As the stable carbon isotope ratio analysis of the adhering carbides showed (see Section VI-1), many sooted and charred Haji jars were used for boiling C3 plants, Given that these jars were dumped into the well after the abandonment,, SE800 likely functioned before the Saimei era, when the well was filled by waste such as the pottery assemblage . The previous papers have described SE800 as a representative feature of the conventional Phase A-3, which was connected with the masonry ditch SD900 extending north from the fifth excavation area. The current revision of the chronological assessment and the burying sequence will affect the interpretation of the chronological transition of the features in the forthcoming volumes .

The dating of rooftiles: While a huge amount of pottery has been excavated, the amount of roof tiles is small: 155 round eave-end tiles, 9 flat eave-end tiles, 1 rafter tip

tile, 381 round tiles (49.63 kg), and 1,715 flat tiles (116.19 kg). This quantity is outstanding in the Ishigami site as roof tiles, but less than other artifacts. As discussed in Chapter II, Ishigami type A, B, D, and E were newer than Asuka-dera type VII and were most likely made at the same time as tiles from Ikaruga area using a common technique. The upper limit of the production date of these types is from the end of the 6th to the beginning of the 7th century, the period during which Asuka-dera temple was built, and the lower limit is around 639, when the construction of Kibiike-haiji temple is considered to have begun. Production period of these types ended during Phase I of Ishigami site. Ishigami type F is thought to have been produced at the same time as Ishigami A, B, D and E. On the other hand, most of the tiles of Asuka-dera temple were excavated from flow channel NR310 and the later cultural layer, suggesting that these tiles had once been roofed on the Ogaki of Asuka-dera temple but were fragmented into smaller pieces and flowed into the Ishigami site.

Wooden Products from SE800: Most of the wooden products described in the volume were found in the well frame of SE800. Stratum1 (gravel sediment) contained wedges, skewers, and processing rods . Stratum2 (sandy gravel sediment) yielded wedges, stoppers, cutting objects, and processing rods. Strata 3 (brown organic soil sediment) and 4 (clay sediment) as the lowest layers included sword handles, wedges, and stoppers.

Metal products, metallurgical artifacts: Iron products consist of mainly arrowheads, agricultural tools such as sickles, axes, chisels, halberds, knives, and chisel-shaped implements, and others such as spindle wheels, needles, nails, and sickles. Most iron products found in "pits" and "large pits" are likely derived from Fill B, although the north-south ditch SD640 contained these artifacts. The variety and large number of iron weapons characterize the assemblage of iron products from the Ishigami site.

Artifacts related to metallurgy include tuyeres, molds, crucibles, iron slags, and ingots of copper and iron. Given that tuyeres and crucibles were also found from the dark brown soil overlaying the stone pavement of the neighboring Mizuochi site, both sites were likely leveled by the same fills, which were Fill B prior to the renewal in Phase III. A large amount of pottery sherds, iron products primarily comprising arrowheads, and metallurgical artifacts date approximately to the same period. The assemblage may include whetstones mainly from the area covered by Fill B. Focusing on the relation between iron weapons such as arrowheads and whetstones, the authors pointed out the possibility that an armory was situated in the vicinity of the Ishigami site (see Section VII-3). Although this hypothesis almost agrees with the "*Oharida-Hyogo* (armory situated in Oharida area)" hypothesis mainly by Aihara Yoshiyuki (相原嘉之), SB735 and SB736, regarded as remains of the armory, were reassigned to Phases I and II, respectively, in the present volume. Consequently, the presence of the *Oharida-Hyogo* at the Ishigami site is not necessarily asserted. Even so, it should be kept in mind that the evidence shown in the

present volume does not deny the possibility that the armory was located near the Ishigami site. The provenance of the iron products found in the fill should be identified in conjunction with an enormous amount of pottery sherds and artifacts related to metallurgy.

4. Conclusion

Background to the discovery of stonework: Given that this volume reported the results of the excavations, including the findspot of the stonework, the authors summarized the background that pieces of the stonework were unearthed and donated to the Tokyo Imperial Museum in 1904 (Meiji 37). The related documents described that, Mori Kunimatsu (森 国松), the mayor of Asuka Village, bought the stonework from Tsujimoto Ukichi(辻本宇吉), the owner of the rice field, and unearthed them from the field. Another report by Takahashi Kenji (高橋健自, in 1903) and a copy of the notification documents, probably left by Mori, revealed that the *Sumeru* stones were dug up to obtain the construction materials for the expansion of Asuka Elementary School. The documents also mentioned that Tsujimoto Sadashiro (辻本定四郎), the son of Tsujimoto Ukichi, proposed Ishida to excavate the findspot of the stonework. In short, the stonework was preserved and the research of the Ishigami site was promoted through a cooperative relationship between local residents and researchers from the museum. The *Sumeru* stones and the stone statue were designated as Important Cultural Properties of Japan in 1980 (Showa 55). These pieces of stonework are now exhibited inside the Asuka Historical Museum 50 years after its opening.

Evaluation of the hypothesis of Asuka Kiyomihara Palace: Excavations at the Ishigami site by Nabunken started as the research of "the estimated site of the Asuka Kiyomihara palace." After being named "Ishigami " in the second excavation, the site has never been called the name. In both conventional and present assessments, the sparse distribution of the features during the Asuka Kiyomihara Palace period never allows us to advocate the presence of the palace at the site. Given that the features of Phase IIIb in the Asuka Palace site can be regarded as the current persuasive candidate for the palace, the hypothesis of the Asuka Kiyomihara Palace by Kida should be rejected. Therefore, there is no evidence that the palace was located in the Ishigami site.

Evaluation of the Ishida's hypothesis: The revision of the periodization and the pottery chronology resulted in reclassifying some features to the period older than one in the conventional periodization.The east-west fence SA600, considered to be used through the conventional Phase A, was newly regarded as the southern great fence of Phase I-1, which was not the boundary of the Saimei era. Based on the pottery chronology and the simultaneity with SA600, the masonry ditch comprising SD334, 335, and 435 was reevaluated as the water channel of Phase I-1, by which Ishida and his colleagues

imagined the water supply to the "fountain tower". The hypothesis of the "banquet hall of the Saimei era" by Ishida and others cannot be validated. Furthermore, the chronological assessment of pottery enabled us to arrange SE800 to Phase I-1, which was buried before the Saimei era.

Since the features mentioned above were newly dated before the Kogyoku era, these are never regarded as constituents of the "banquet facility" in the conventional Phase A-3a. The boundary fence SA560 (Phase II-1), simultaneous with the water clock at the Mizuochi site, was once arranged to the conventional Phase B. Consequently, the rearrangement of the features implies the presence of an unidentified important facility in Phase I, surrounded by the boundary fences as large as the great fence of Fujiwara Palace.

Toward the forthcoming volumes: The forthcoming volumes will adopt the new periodization of the Ishigami site proposed in the present volume. The new periodization leads to some changes in the chronological transition of the features expected in the conventional periodization. Eventually, these changes will affect the evaluation of the entire Ishigami site. Because of the report on the findspot of the stonework, the present volume included a summary of the background that the Ishigami site came to be regarded as "the banquet facility of the Saimei era." Since the background is deeply related to the evaluation of the main buildings confirmed in the areas of the fifth to eighth excavations, which will be dealt with in the second volume, the authors recognized the necessity to clarify the topic in advance.

The interpretation of the Ishigami site has been shaped by a mixture of the hypothesis of *Sumeru* first advocated by Takahashi and the hypothesis of the "banquet hall of the Saimei era" primarily proposed by Ishida, and the assessment of the entire site by Nabunken based on the mixed hypothesis. This interpretation has been supported as an established theory during the past 120 years. The new interpretation leading to a better understanding of the entire Ishigami site remains unfinished in the present volume. As the second volume will focus on the areas of the fifth to ninth excavations, where the central facility of the conventional Phase A-3, identified as the “banquet facility” and “guest house,” was located, we hope to finalize the interpretation of the site in the next volume titled “ISHIGAMI SITE II.”

図　　面

PLAN

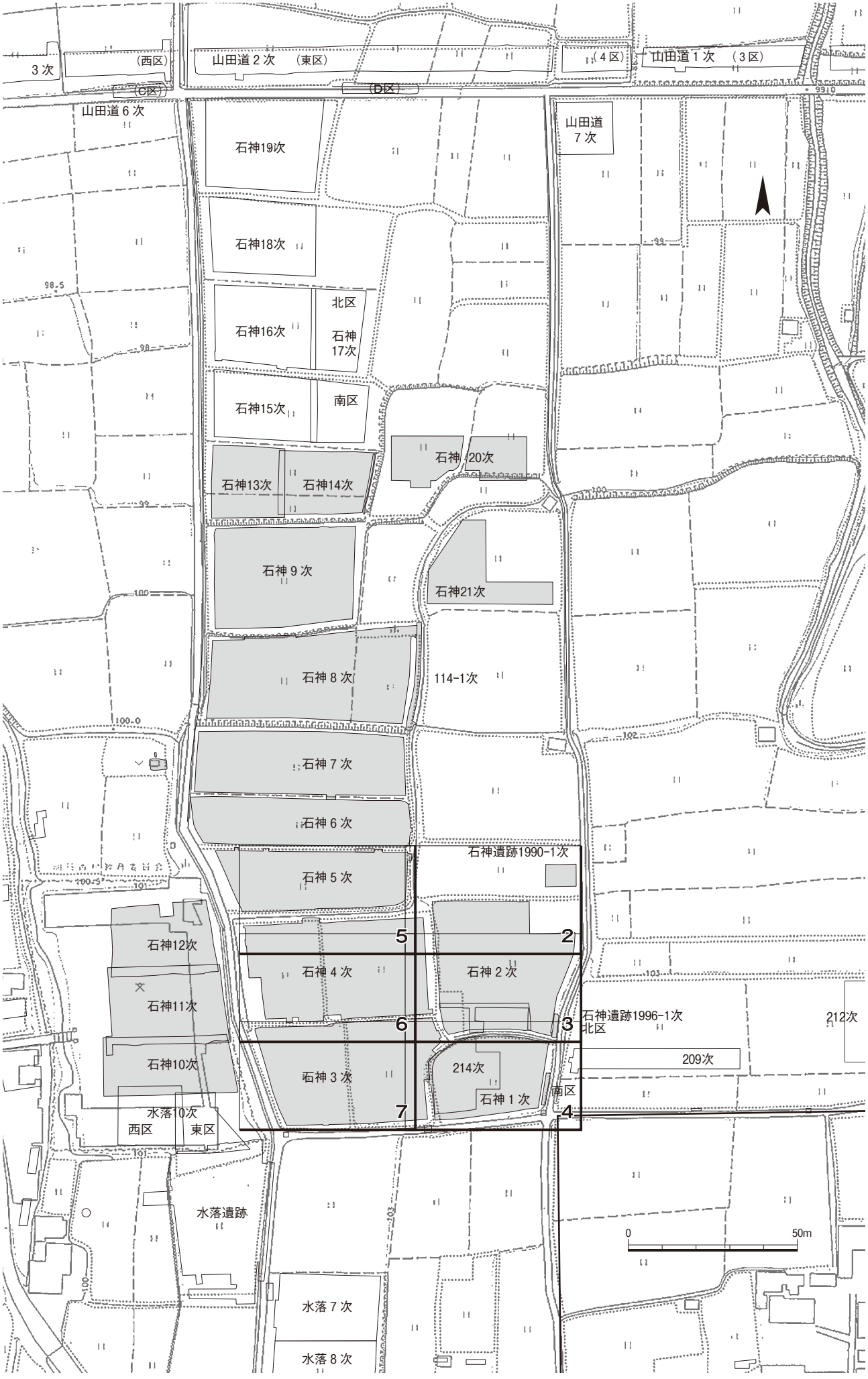
1　平面図の割り付け
2　第２次・石神遺跡1990−１次
3　第１次・第２次・石神遺跡1996−１次
4　第１次・石神遺跡1996−１次・飛鳥藤原第214次
5　第４次・（第５次）
6　第４次・第３次
7　第３次

図　　版

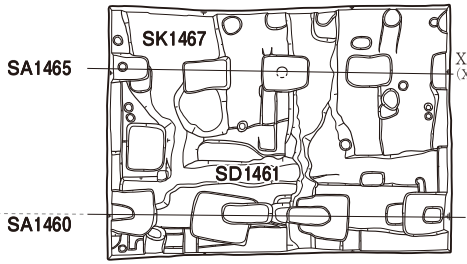
PL.

1　石神遺跡第１次調査区土層図
2　石神遺跡第３次調査区北壁土層図
3　石神遺跡第３次調査区西壁土層図
4　石神遺跡第４次調査区北壁土層図
5　SD335・435出土土器
6・7　SE800井戸枠内（バラス層）出土土器
8・9　SE800井戸枠内（礫混砂層）出土土器
10・11　SE800井戸枠内（含砂礫茶褐色有機質土）出土土器
12　SE800井戸枠内（砂混灰褐色粘質土）出土土器
13　SD500出土土器
14〜17　整地土Ｂ（灰褐色土・褐色土）出土土器
18〜24　SD640出土土器
25〜27　SE650出土土器
28　SK518出土土器
29　SK405出土土器

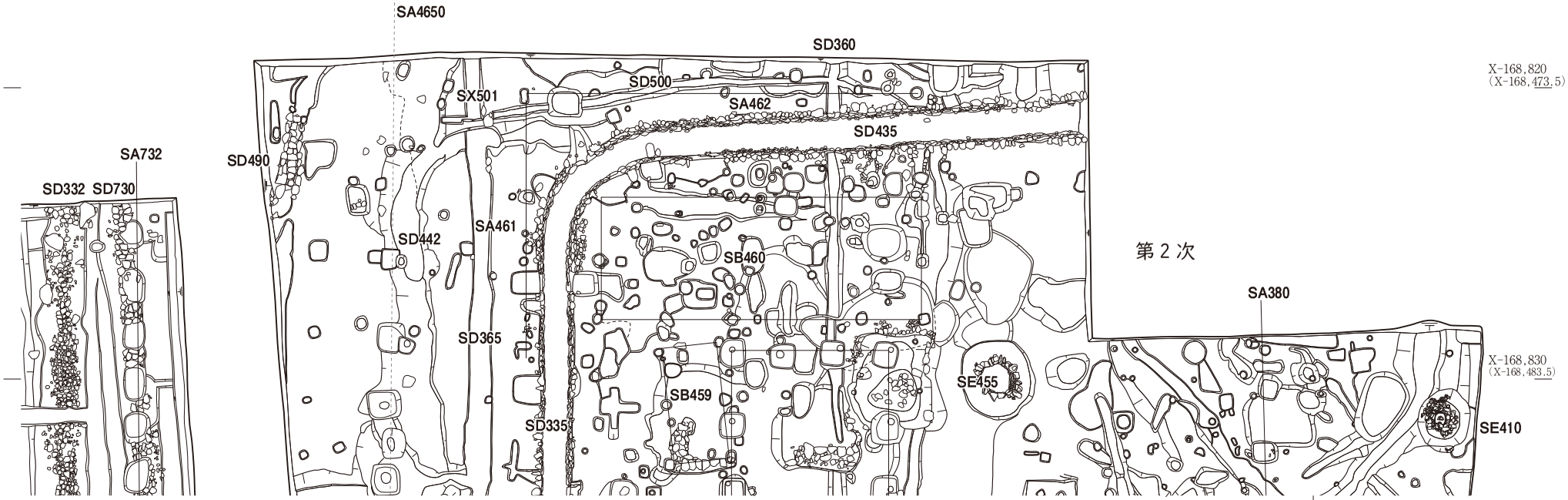
平面図の割り付け　PLAN 1



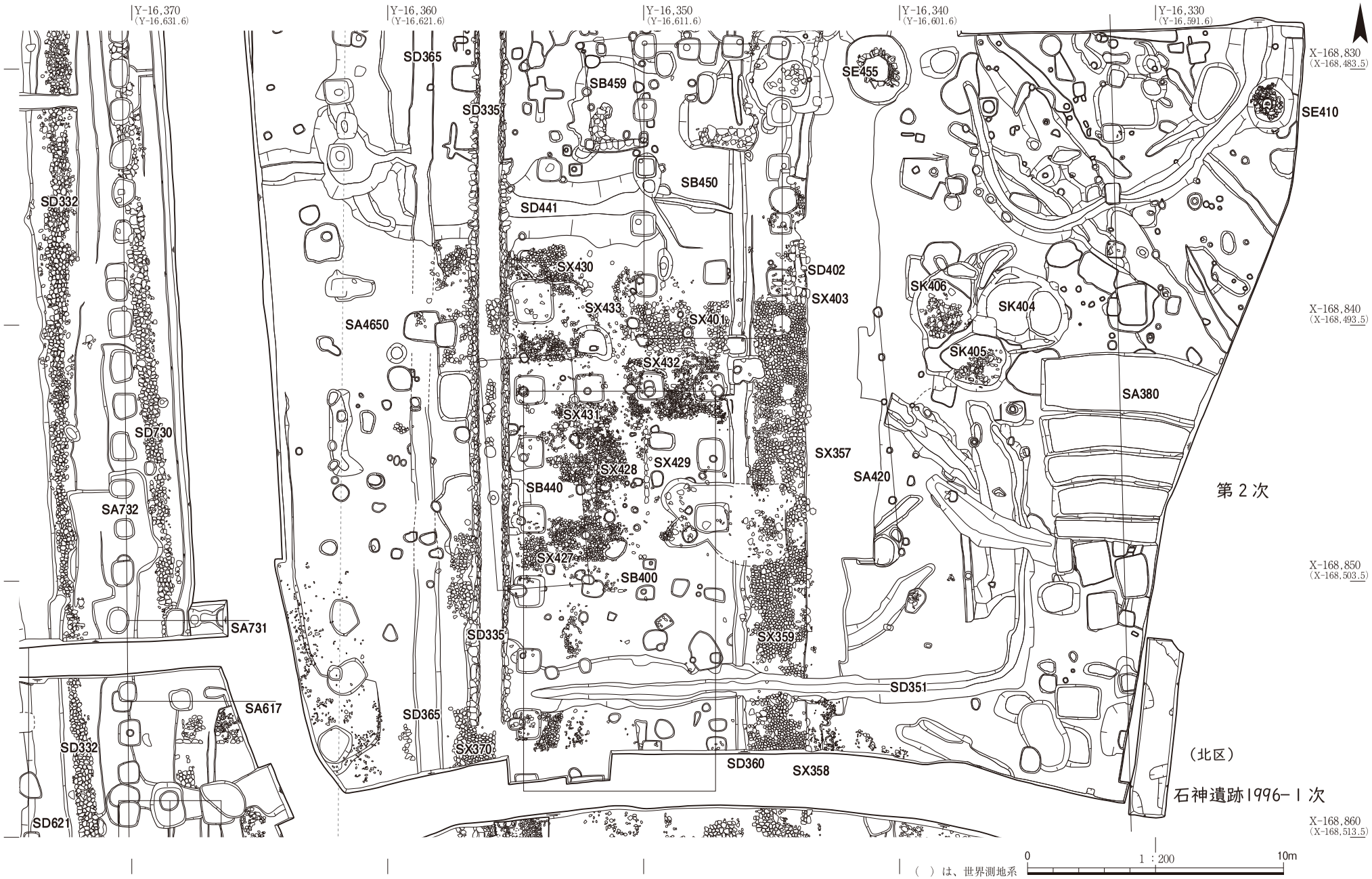
Y-16,370 (Y-16,631.6)　Y-16,360 (Y-16,621.6)　Y-16,350 (Y-16,611.6)　Y-16,340 (Y-16,601.6)　Y-16,330 (Y-16,591.6)



石神遺跡1990-1次

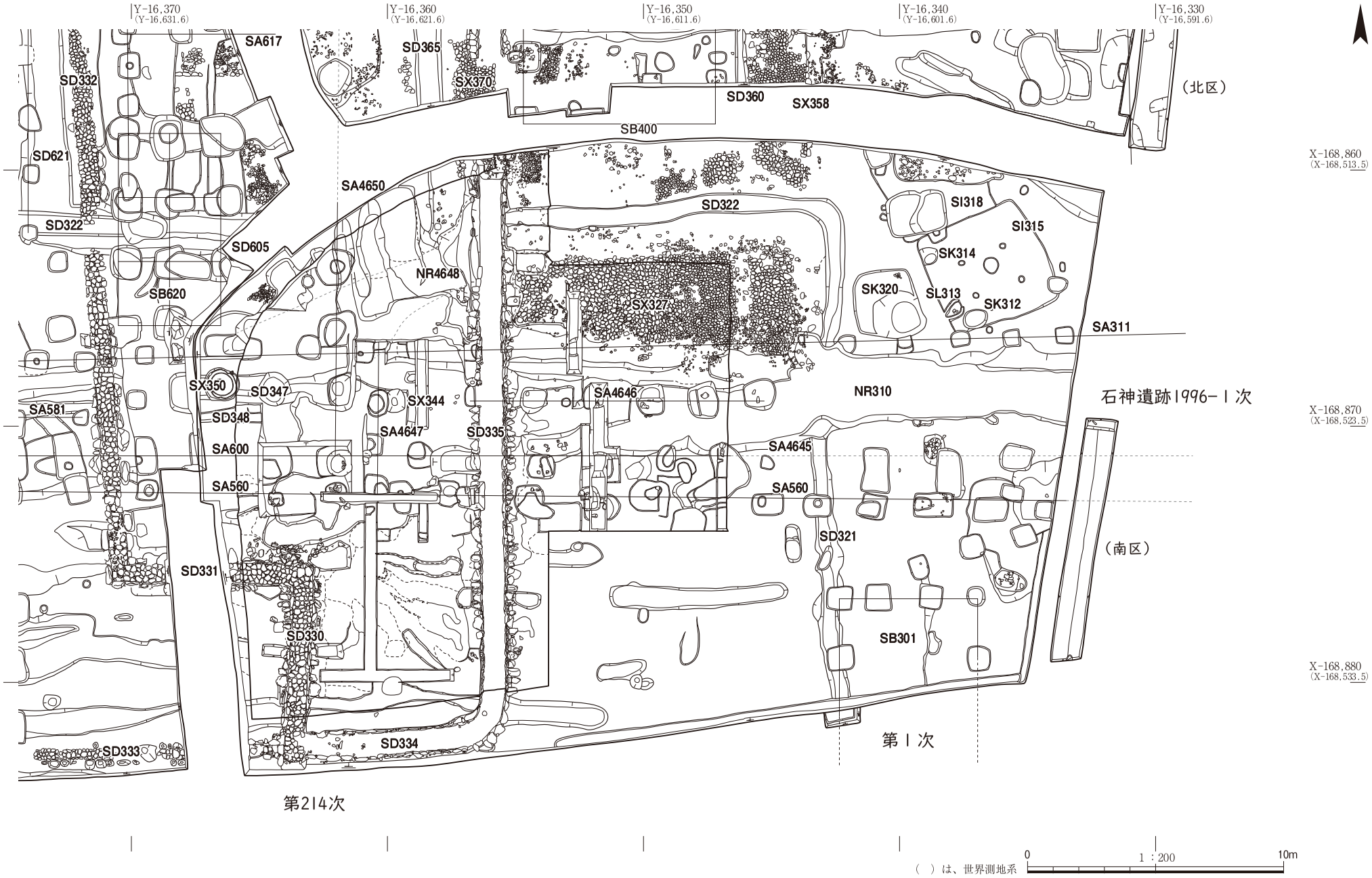


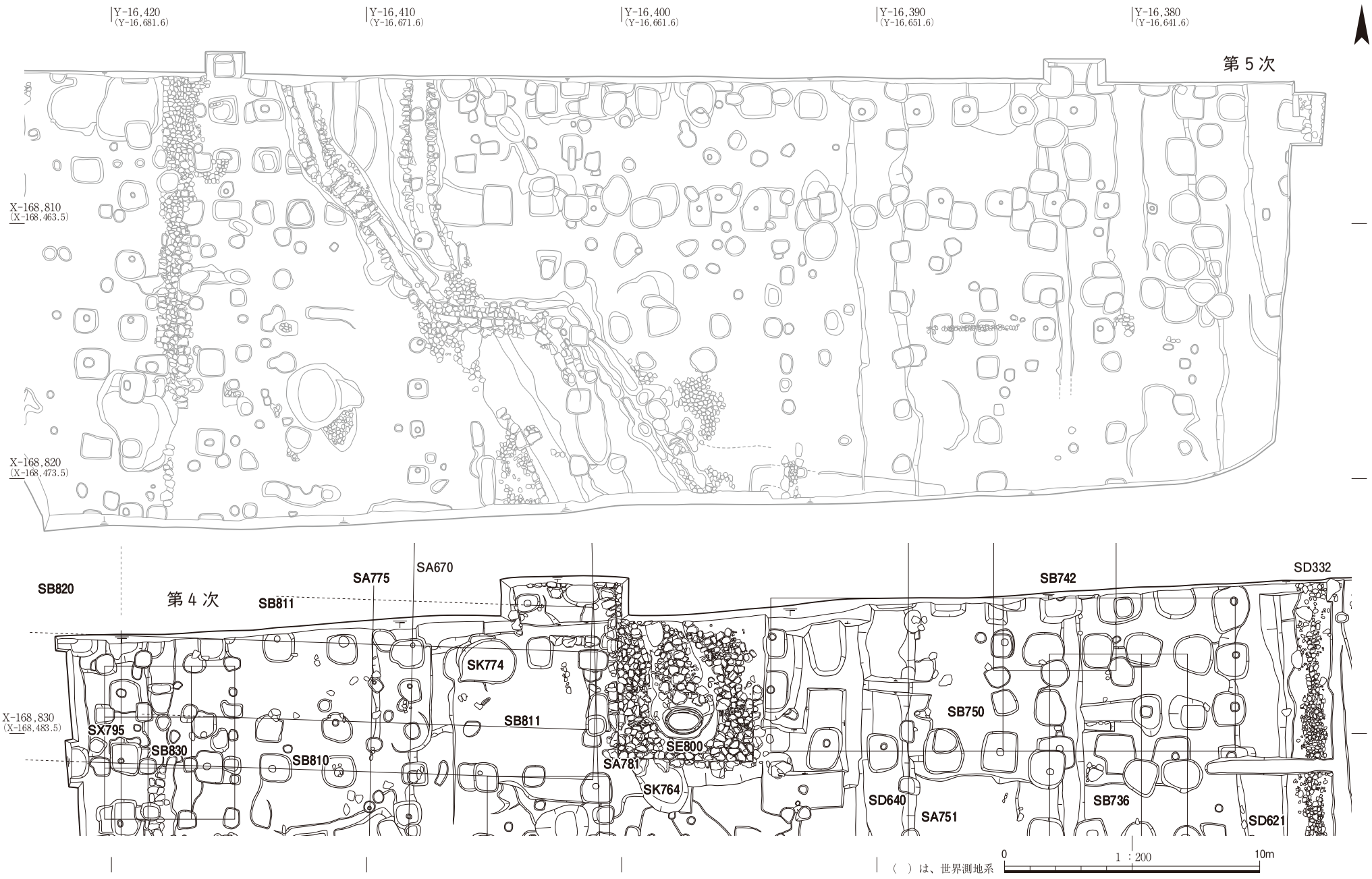
（　）は、世界測地系

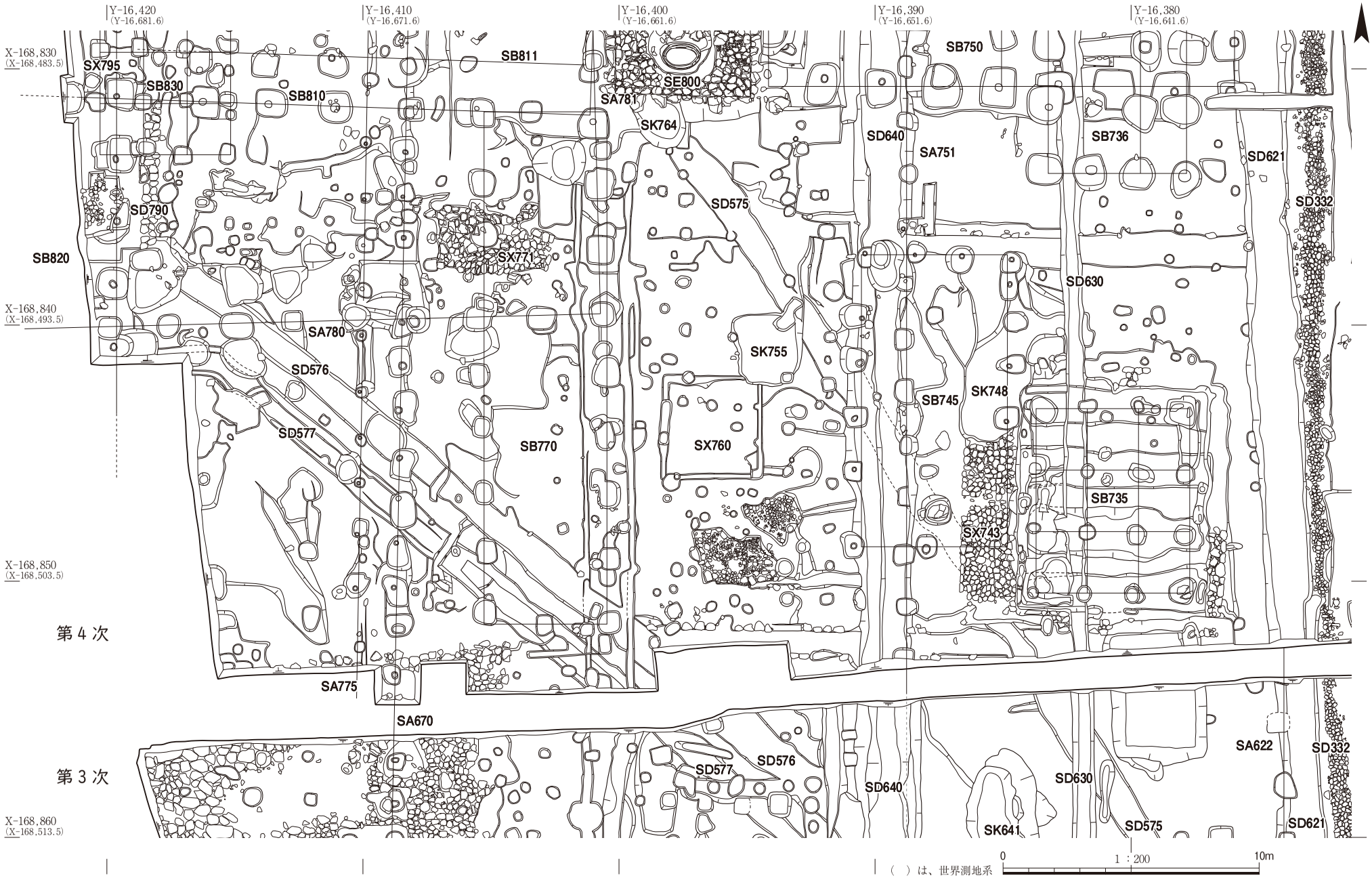


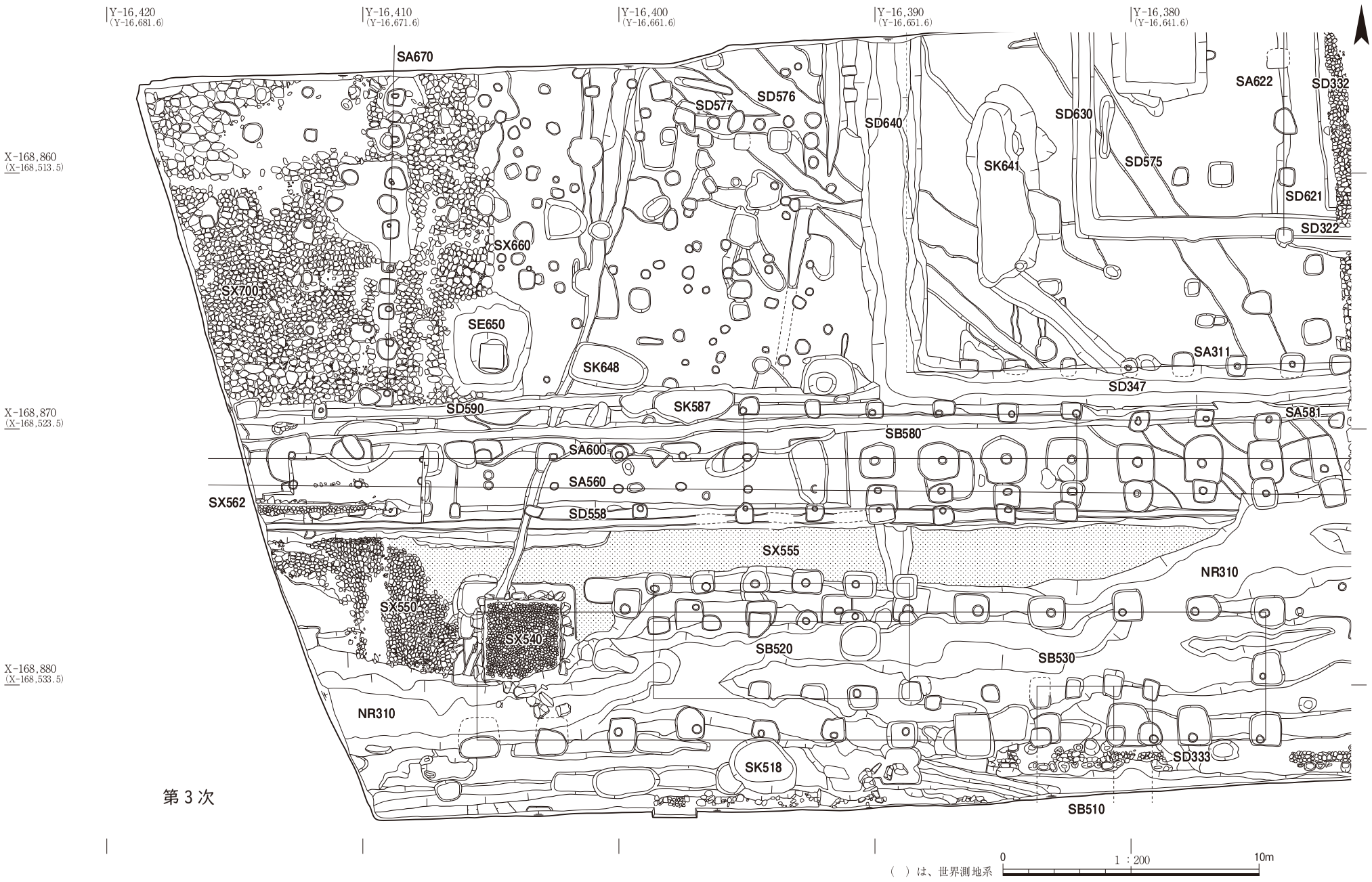
第１次・第２次・石神遺跡1996－１次　PLAN 3

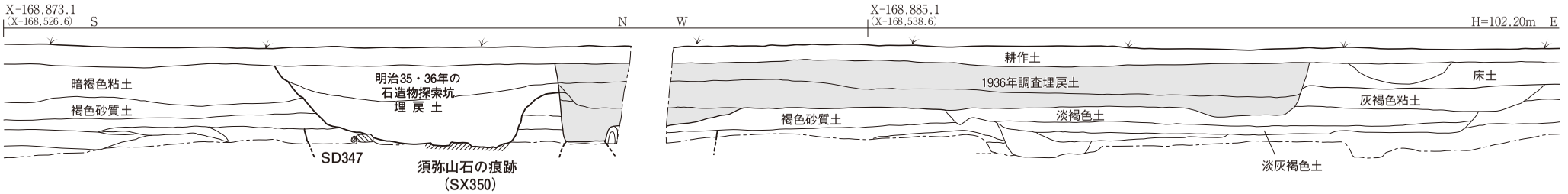
PLAN 4　第1次・石神遺跡1996-1次・飛鳥藤原第214次



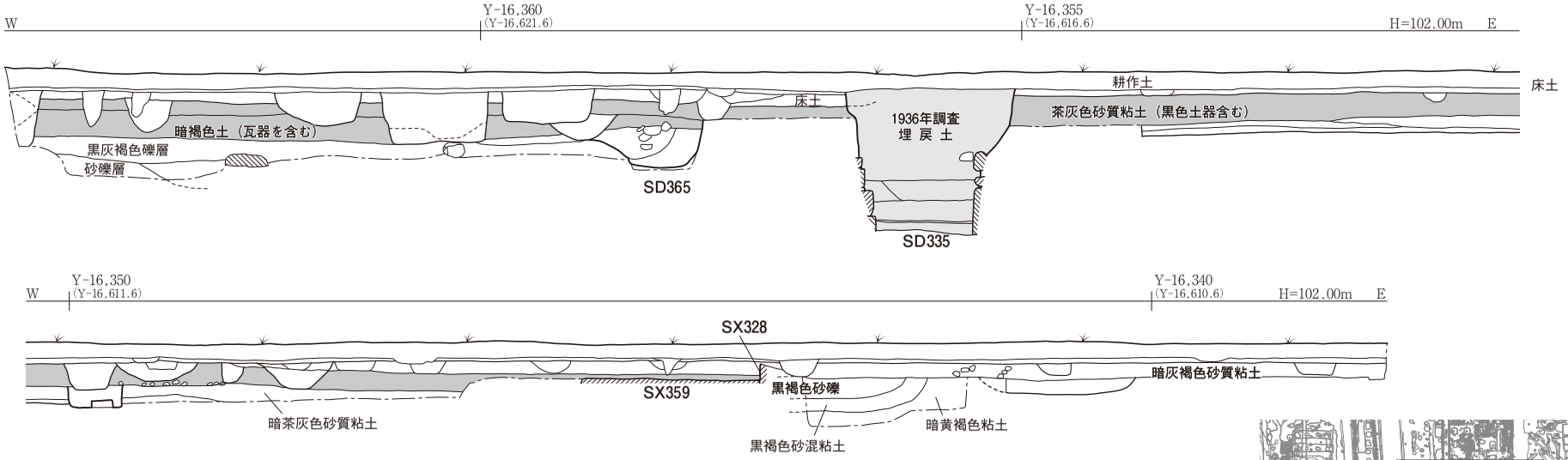

Y-16,420
(Y-16,681.6)
Y-16,410
(Y-16,671.6)
Y-16,400
(Y-16,661.6)
Y-16,390
(Y-16,651.6)
Y-16,380
(Y-16,641.6)
第５次
X-168,810
(X-168,463.5)
X-168,820
(X-168,473.5)
SB820
第４次
SB811
SA775
SA670
SK774
SB811
SB742
SD332
X-168,830
(X-168,483.5)
SX795
SB830
SB810
SE800
SA781
SK764
SB750
SD640
SA751
SB736
SD621
0
1：200
10m
（ ）は、世界測地系


Y-16,420
(Y-16,681.6)
Y-16,410
(Y-16,671.6)
Y-16,400
(Y-16,661.6)
Y-16,390
(Y-16,651.6)
Y-16,380
(Y-16,641.6)
X-168,830
(X-168,483.5)
X-168,840
(X-168,493.5)
X-168,850
(X-168,503.5)
X-168,860
(X-168,513.5)
第4次
第3次
SX795
SB830
SB810
SB811
SE800
SA781
SK764
SB750
SD640
SA751
SB736
SD621
SD332
SD790
SD575
SB820
SX771
SD630
SA780
SD576
SK755
SD577
SB770
SX760
SB745
SK748
SB735
SX743
SA775
SA670
SA622
SD577
SD576
SD640
SD630
SK641
SD575
SD621
0
1：200
10m
（ ）は、世界測地系

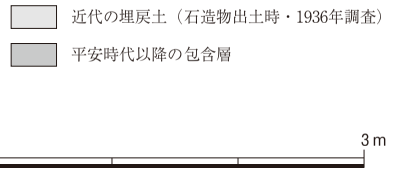

Y-16,420
(Y-16,681.6)
Y-16,410
(Y-16,671.6)
Y-16,400
(Y-16,661.6)
Y-16,390
(Y-16,651.6)
Y-16,380
(Y-16,641.6)
X-168,860
(X-168,513.5)
X-168,870
(X-168,523.5)
X-168,880
(X-168,533.5)
SA670
SD577
SD576
SD640
SD630
SA622
SD332
SK641
SD575
SD621
SD322
SX660
SX700
SE650
SK648
SA311
SD347
SD590
SK587
SA581
SB580
SA600
SA560
SX562
SD558
SX555
NR310
SX550
SX540
SB520
SB530
NR310
SK518
SD333
SB510
第３次
( ) は、世界測地系
0
1 : 200
10m

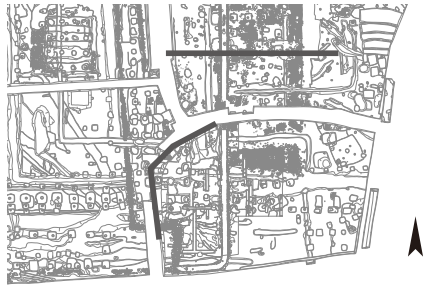


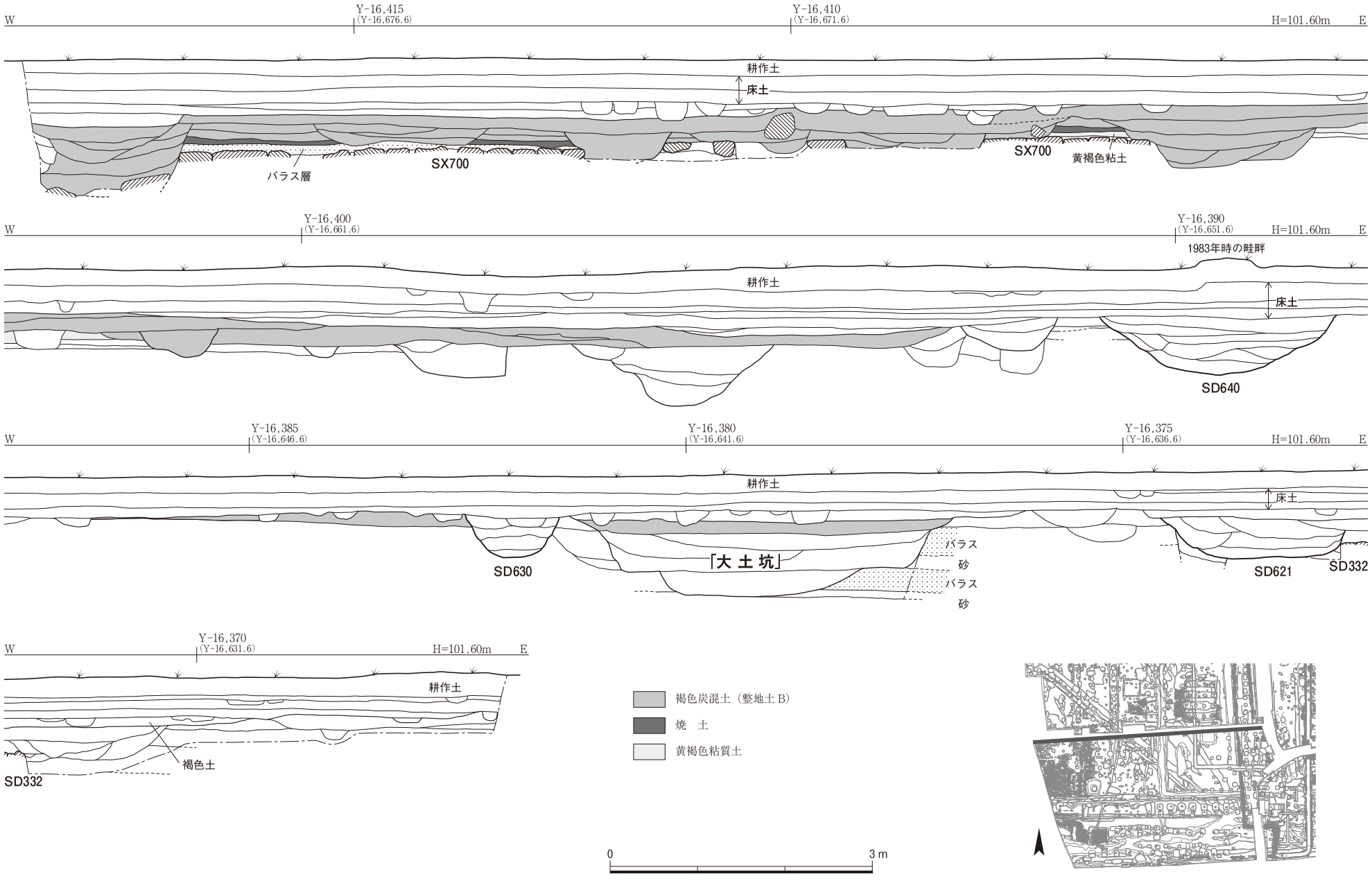
第１次調査区（南区）　西壁・北壁（部分）



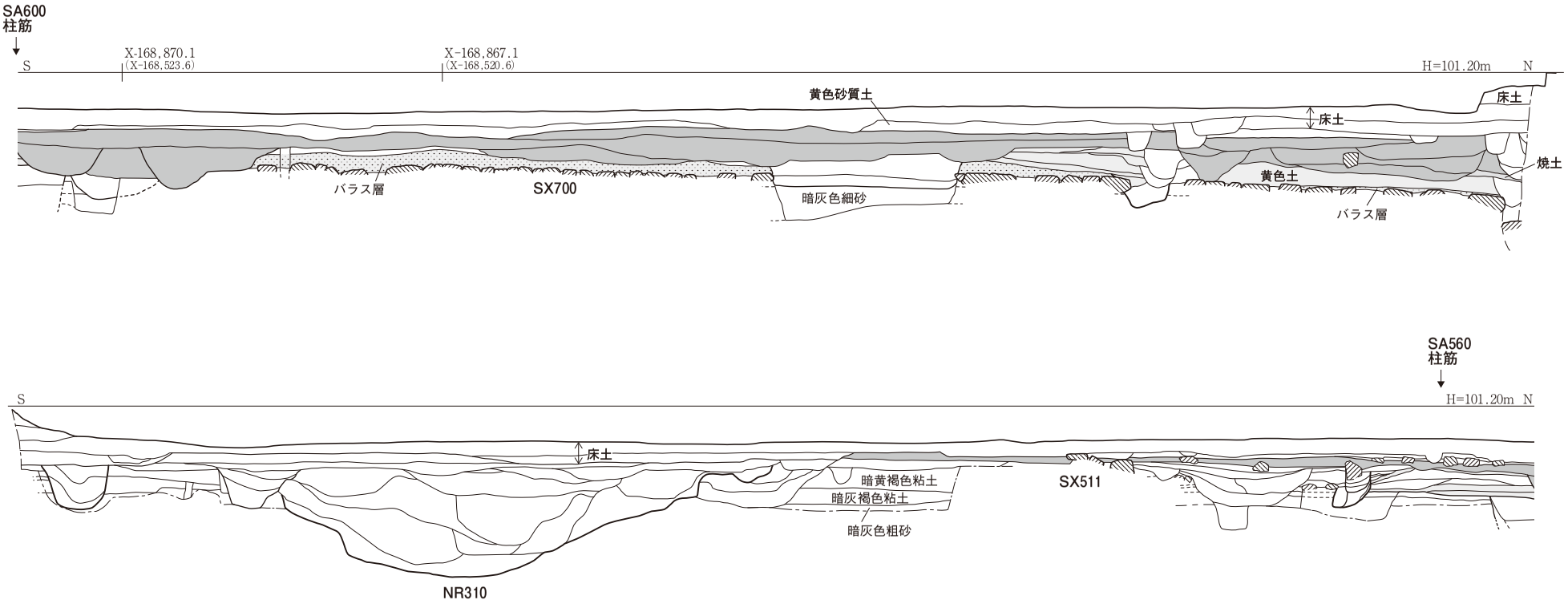
第１次調査区（北区）北壁

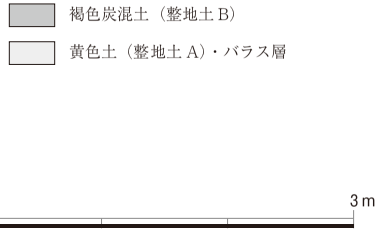


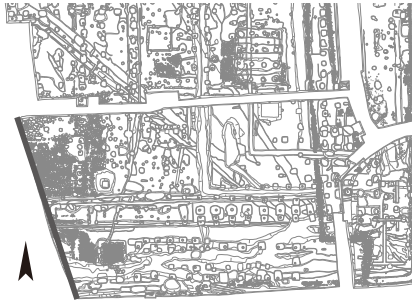


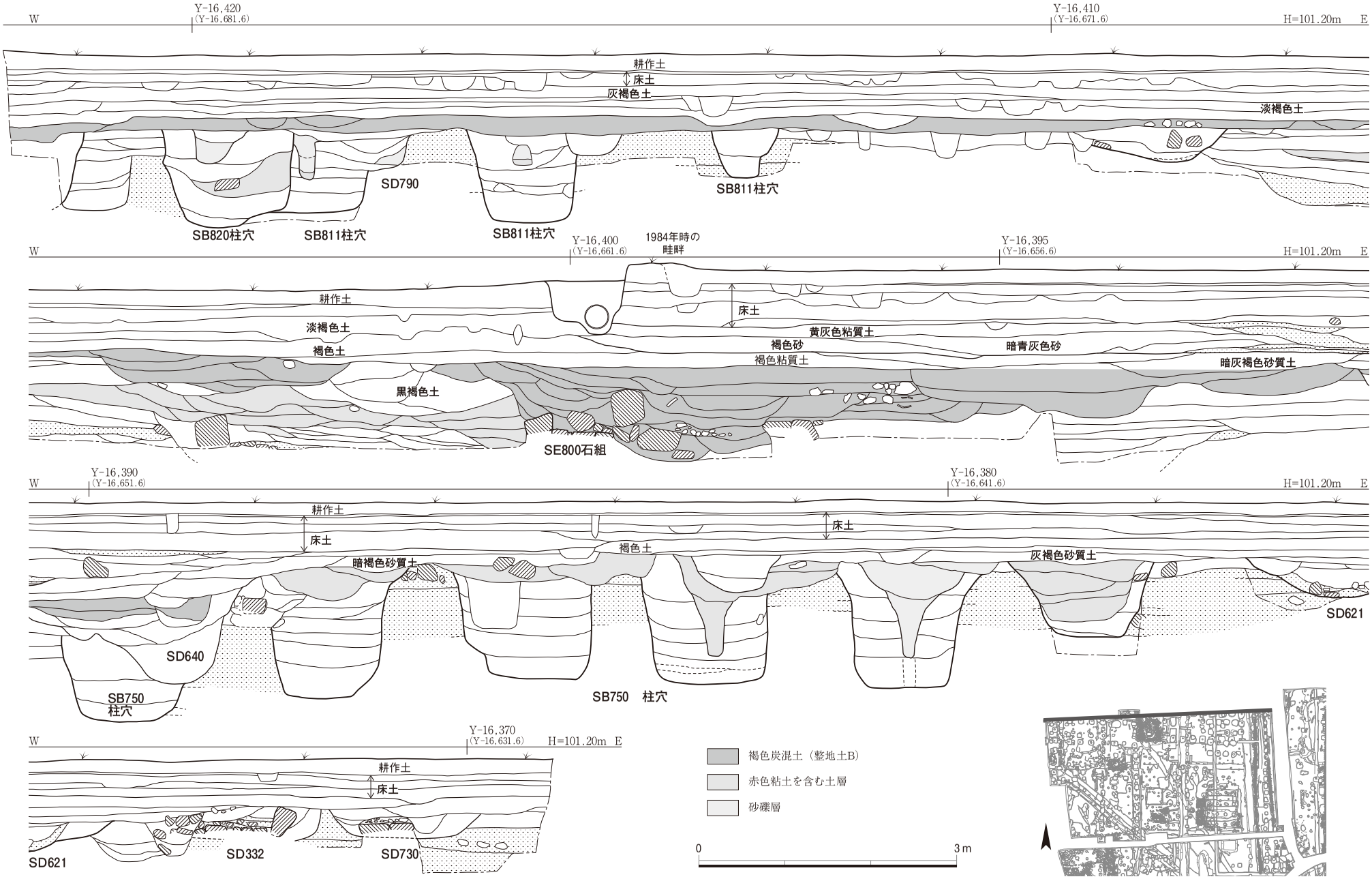


石神遺跡第３次調査区　北壁土層図　PL. 2


SA600
柱筋
S
X-168,870.1
(X-168,523.6)
X-168,867.1
(X-168,520.6)
H=101.20m
N
黄色砂質土
床土
床土
焼土
黄色土
バラス層
SX700
暗灰色細砂
バラス層
SA560
柱筋
S
H=101.20m
N
床土
暗黄褐色粘土
暗灰褐色粘土
暗灰色粗砂
SX511
NR310

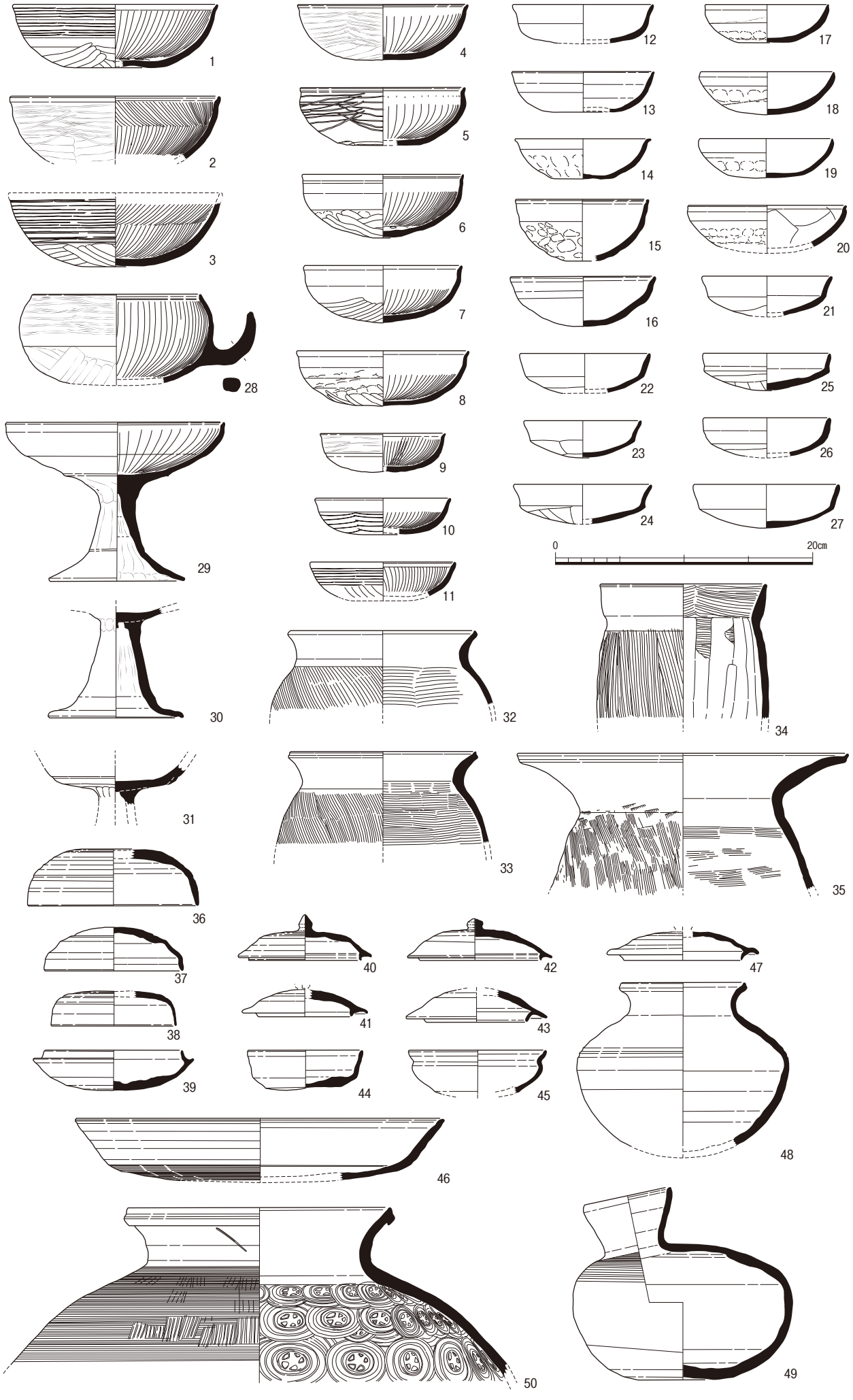

褐色炭混土（整地土Ｂ）
黄色土（整地土Ａ）・バラス層
0
3m





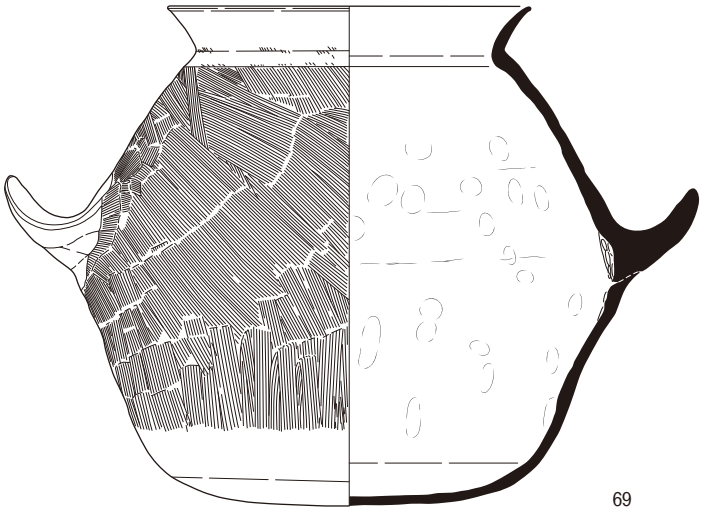
石神遺跡第４次調査区　北壁土層図　PL.４

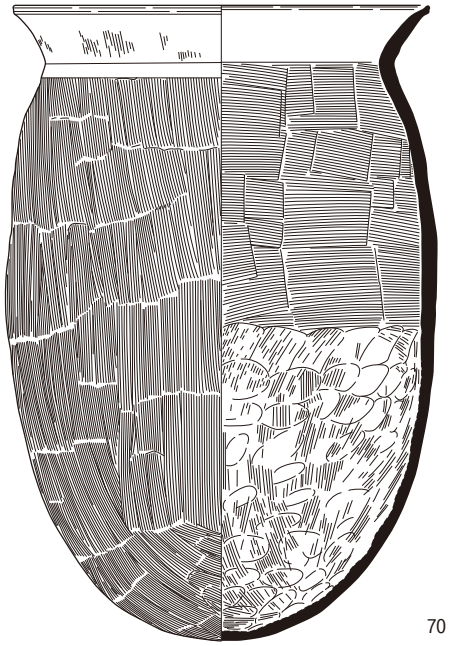
PL. 5　SD335・435出土土器

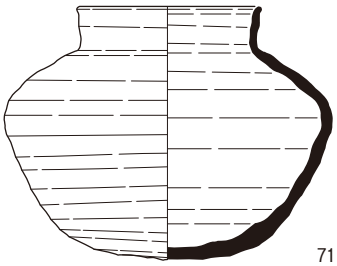


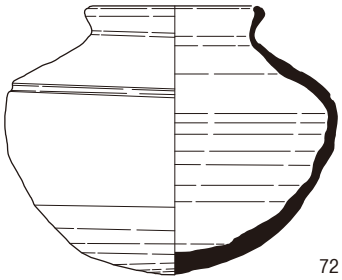

54
55
56
65
57
58
66
59
60
61
62
67
63
64
68
0
20cm

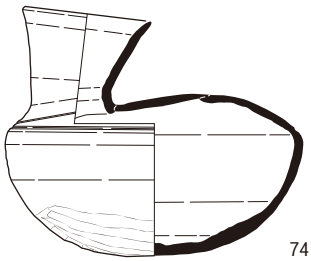
PL．７　SE800井戸枠内（バラス層）出土土器（２）

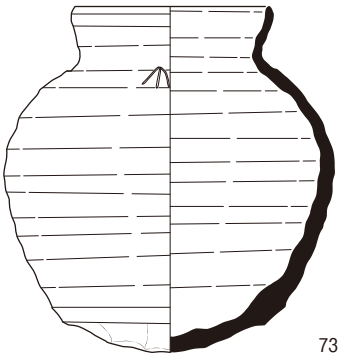

69

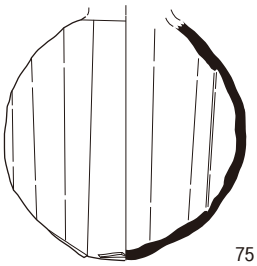

70


71

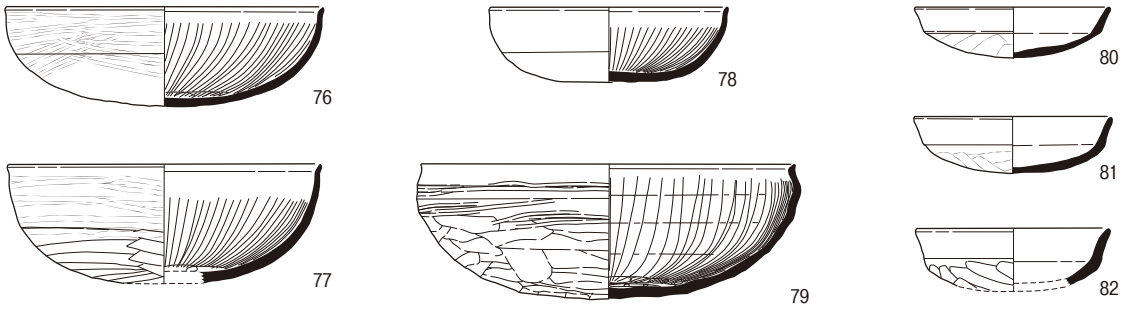

72

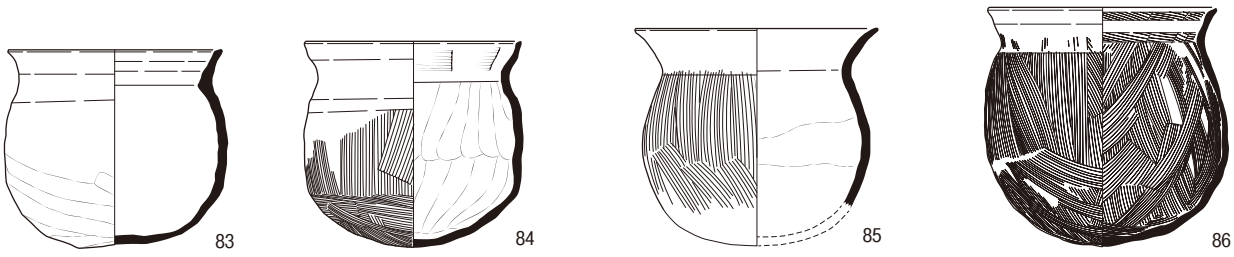

74

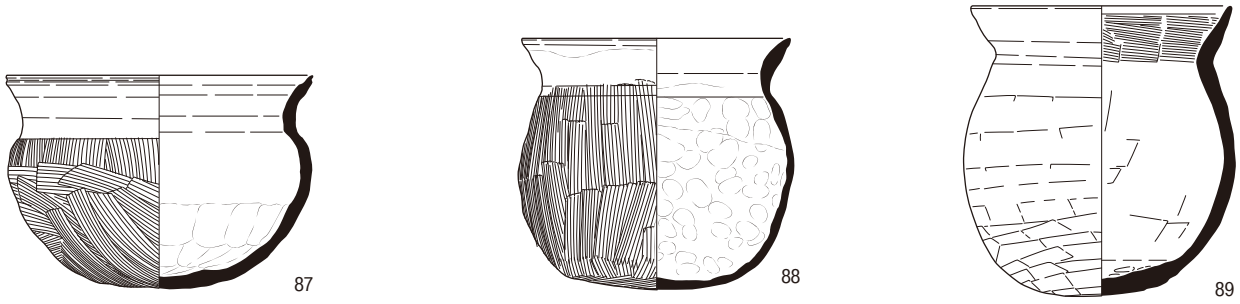

73

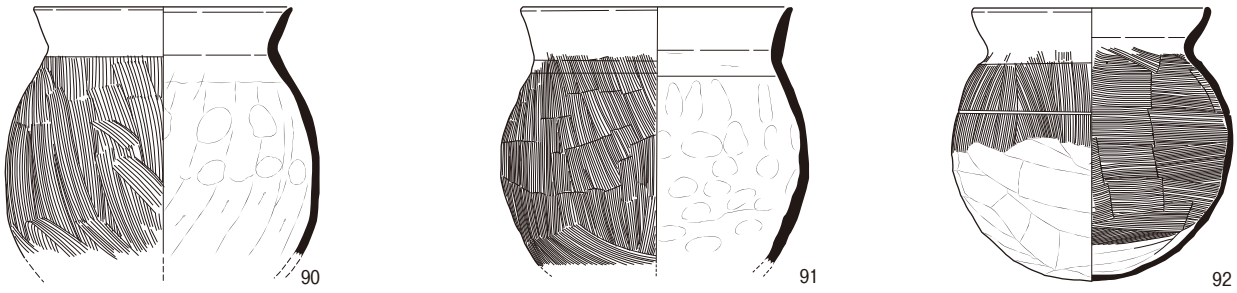

75

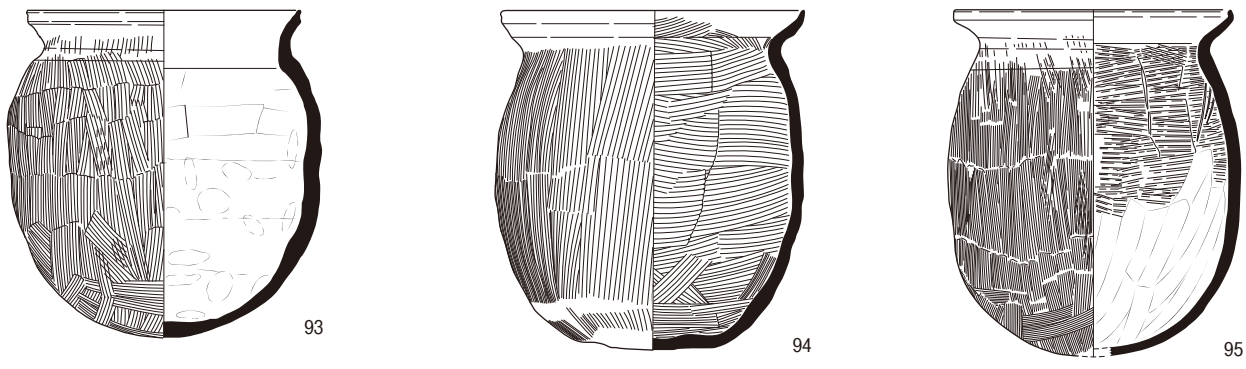



76
78
80
77
79
81
82


83
84
85
86

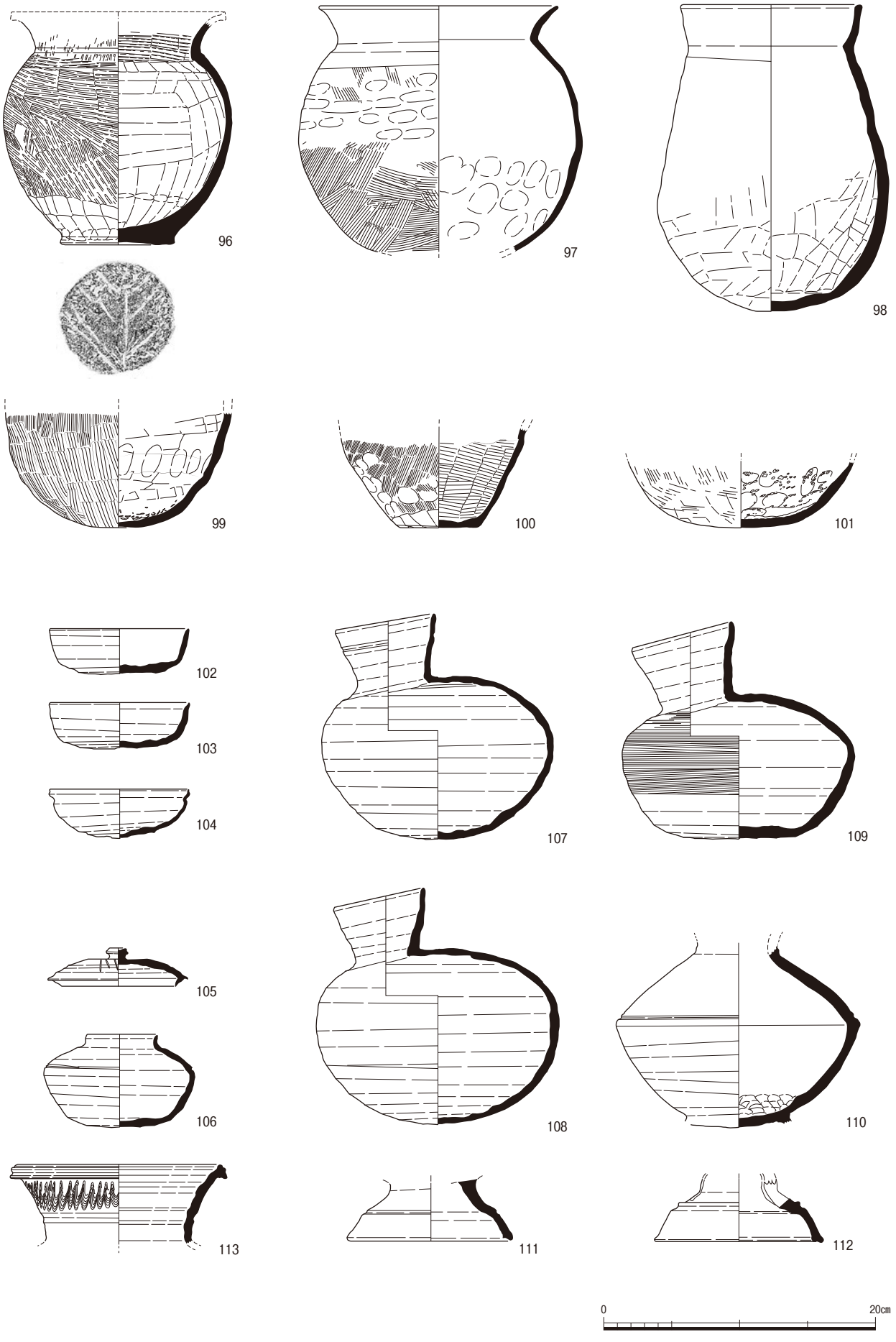

87
88
89

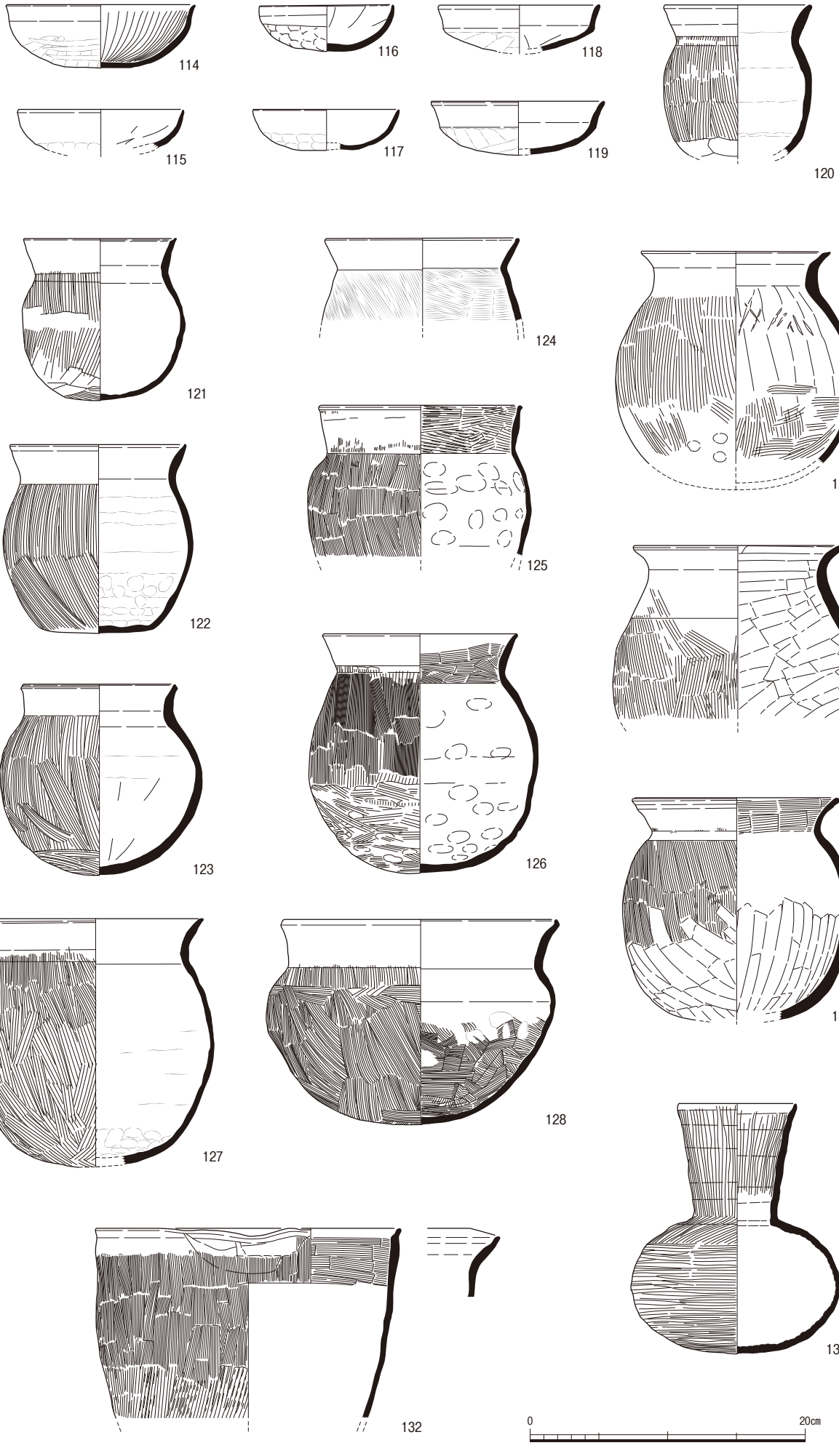

90
91
92


93
94
95

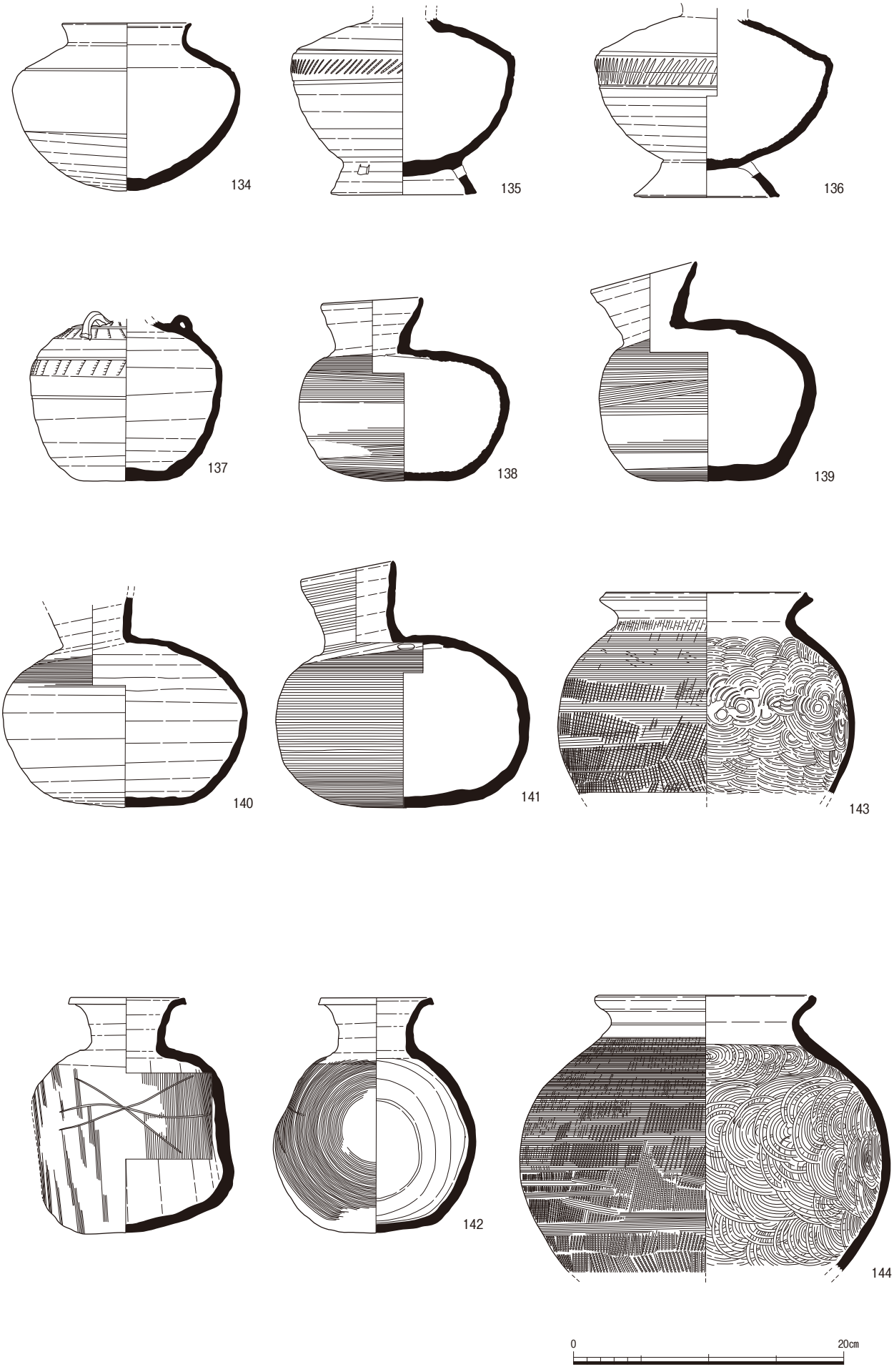

0
20cm

PL．９　SE800井戸枠内（礫混砂）出土土器（２）

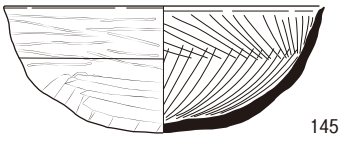


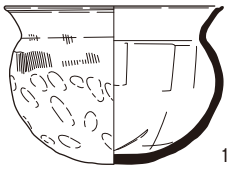

114
116
118
115
117
119
120
121
124
129
122
125
130
123
126
131
127
128
132
133
0
20cm

PL．11　SE800井戸枠内（含砂礫茶褐色有機質土）出土土器（２）

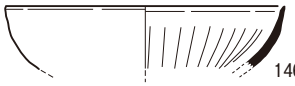


SE800井戸枠内（砂混灰褐色粘質土）出土土器　PL．12

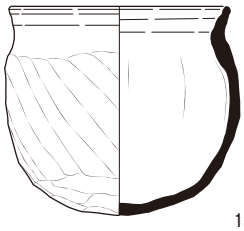

145

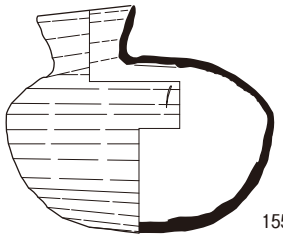

149

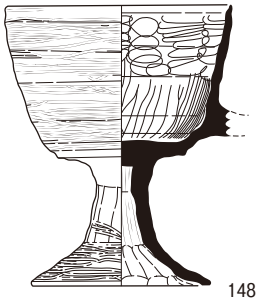

154

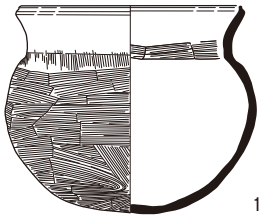

146

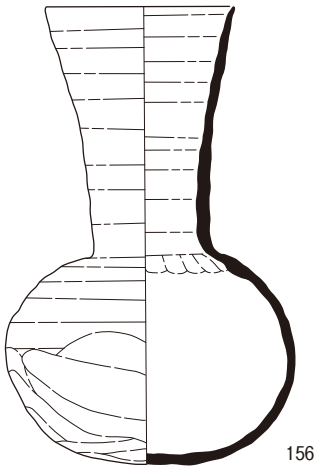

147

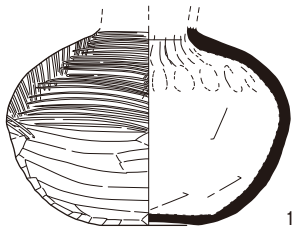

150

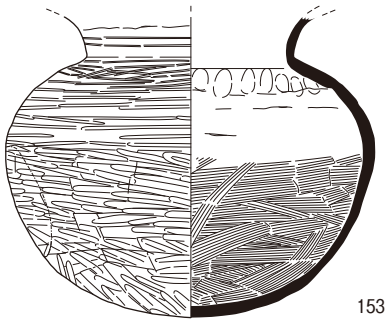

155


148


151


156

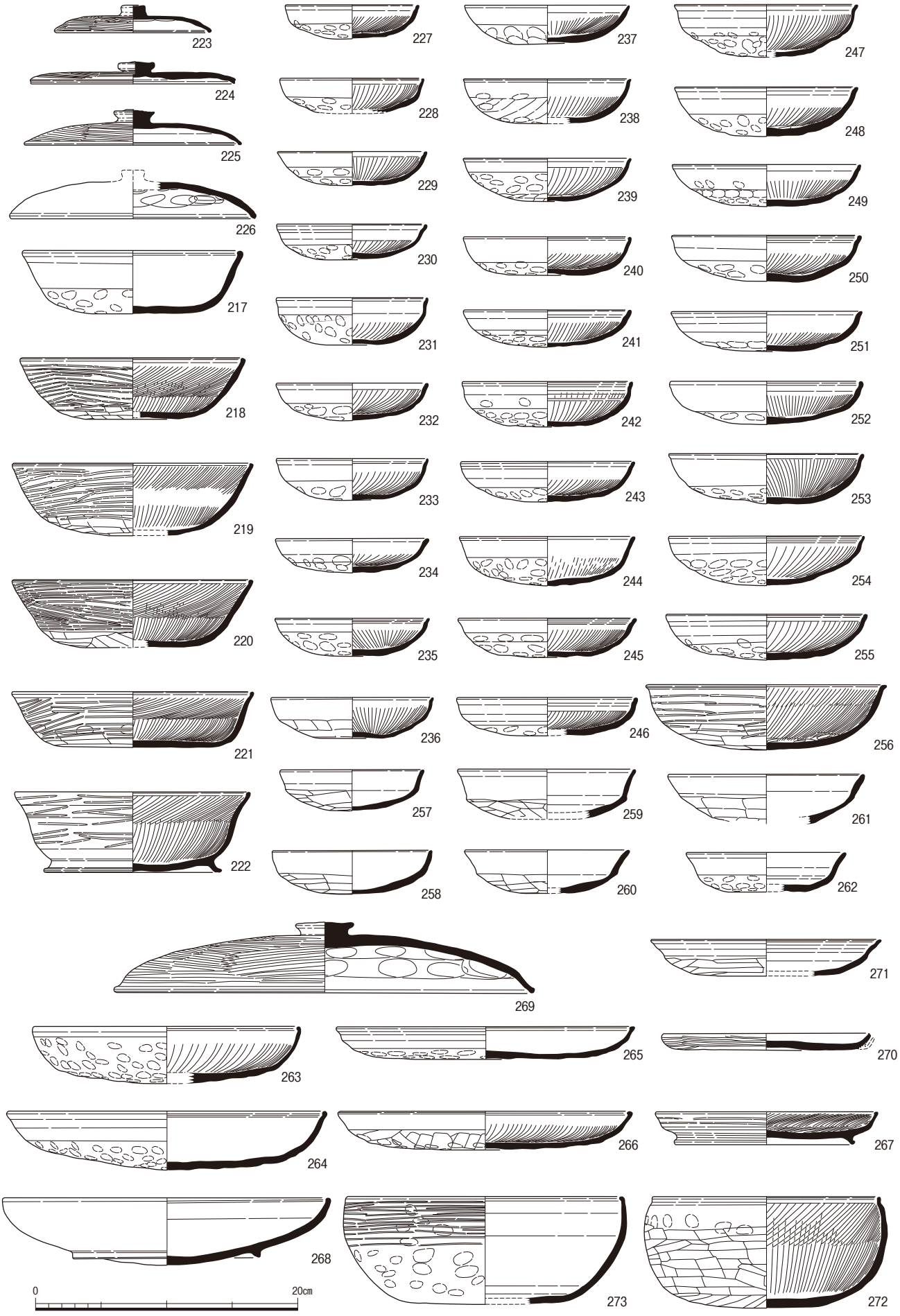

152


153

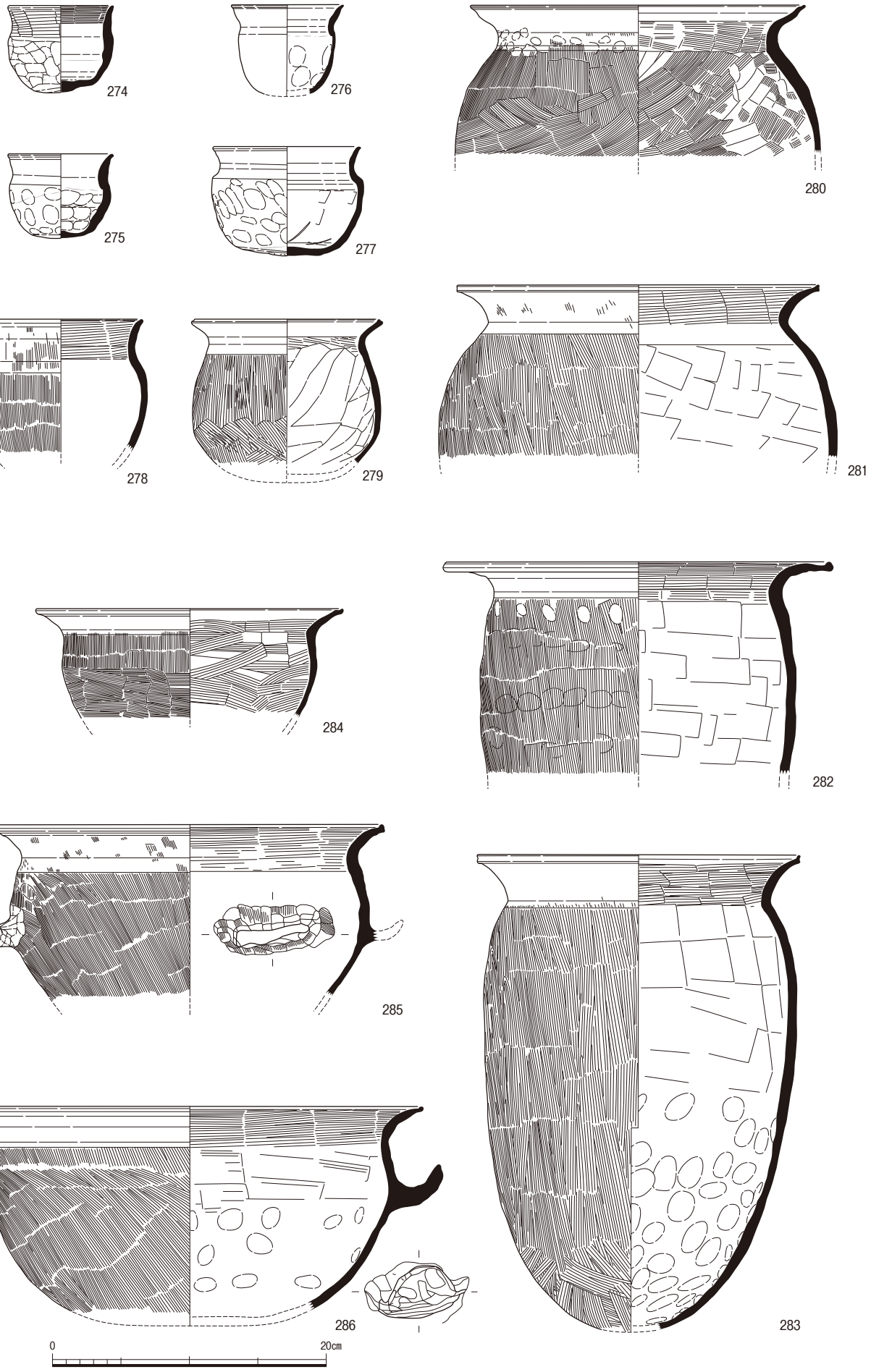


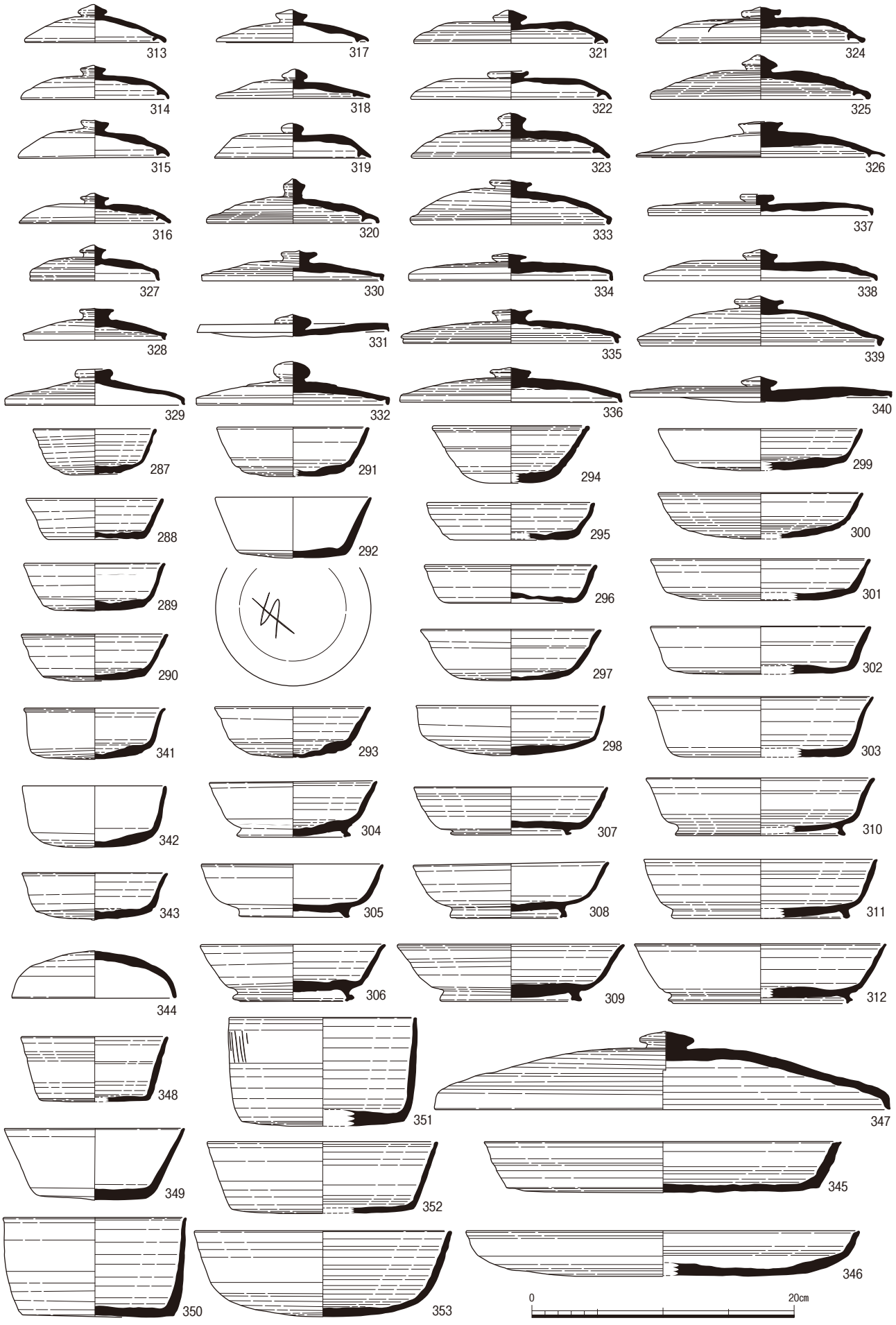
PL. 13　SD500出土土器



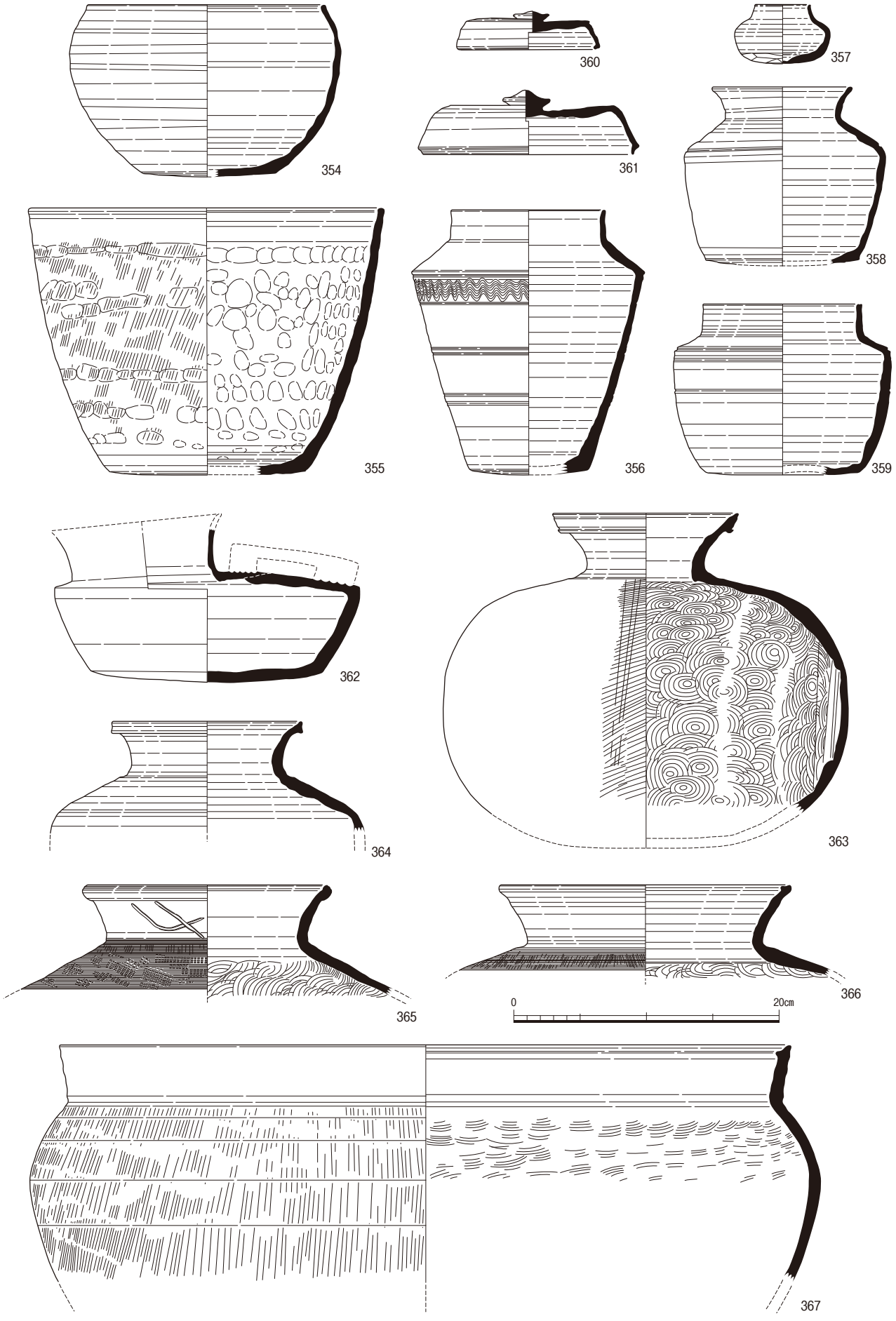

223
224
225
226
217
218
219
220
221
222
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
257
258
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
259
260
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
261
262
269
271
263
265
270
264
266
267
268
273
272
0
20cm

PL. 15　整地土B（灰褐色土・褐色土）出土土器（2）



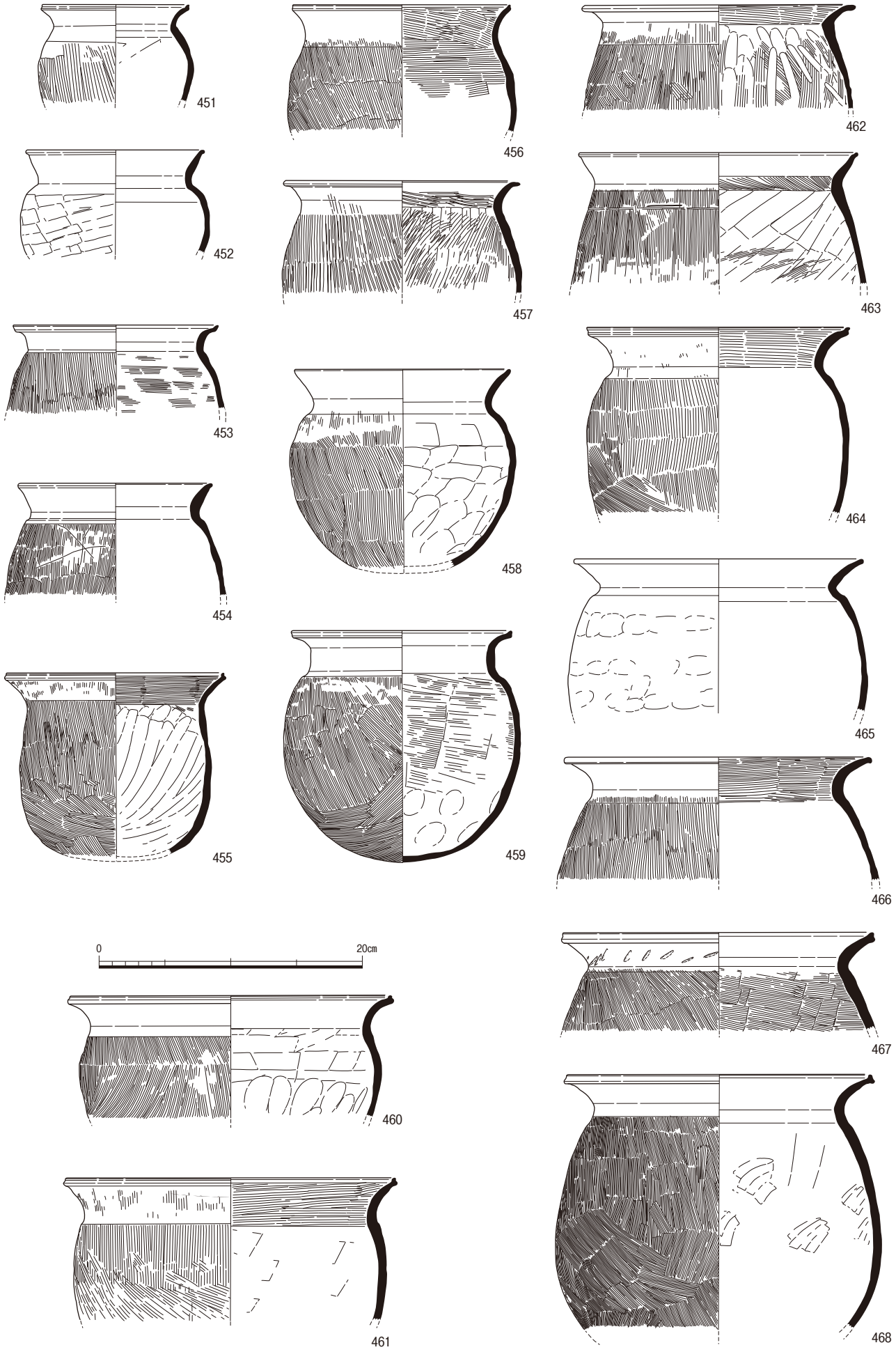

313
317
321
324
314
318
322
325
315
319
323
326
316
320
333
337
327
330
334
338
328
331
335
339
329
332
336
340
287
291
294
299
288
292
295
300
289
296
301
290
297
302
341
293
298
303
342
304
307
310
343
305
308
311
344
306
309
312
348
351
347
349
352
345
350
353
346
0
20cm

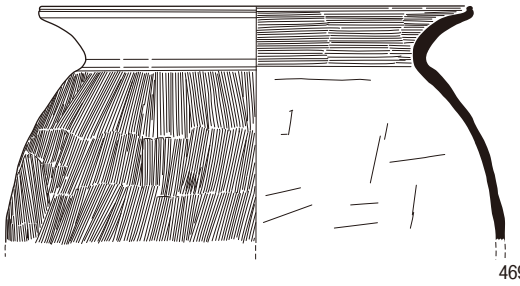
PL. 17　整地土B（灰褐色土・褐色土）出土土器（4）

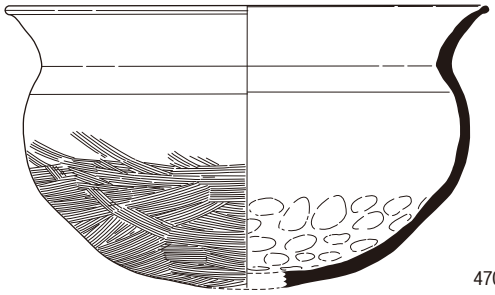


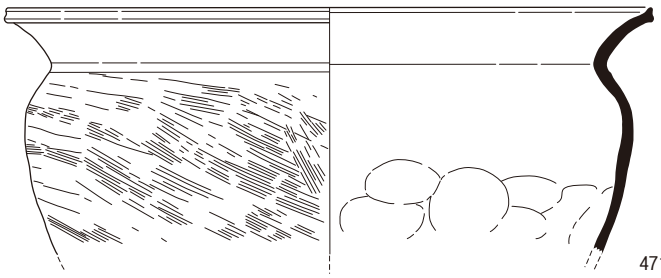

390
391
392
393
394
395
396
397
398
399
400
401
402
403
404
405
406
407
408
409
410
411
412
413
414
415
416
417
418
419
420
421
422
423
424
425
426
427
428
429
430
431
432
433
434
435
436
437
438
439
440
441
442
443
0
20cm
444
445
446
447
448
449
450

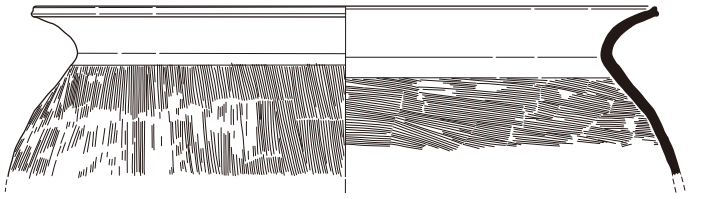
PL. 19　SD347・640出土土器（2）

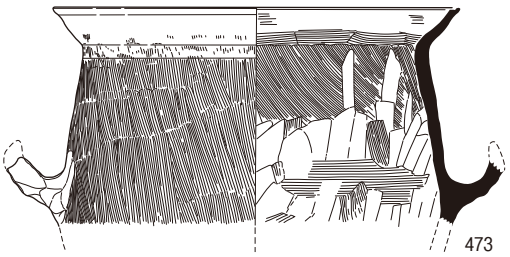


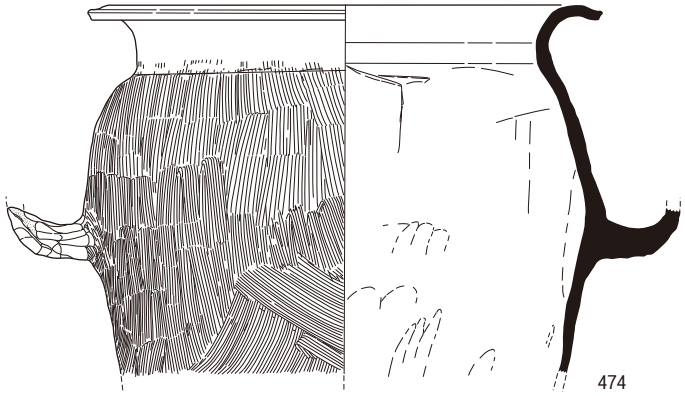

469

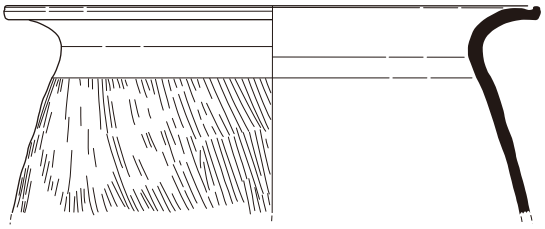

470

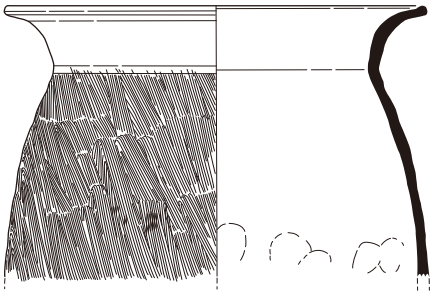

471

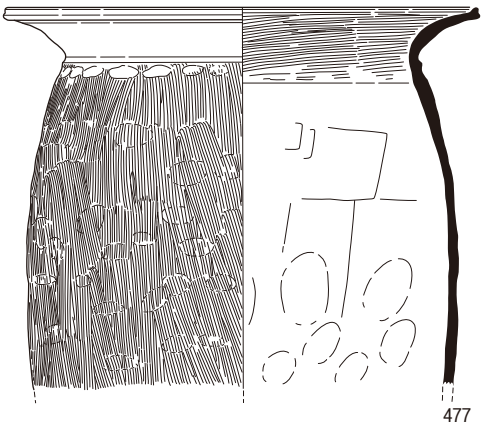

472

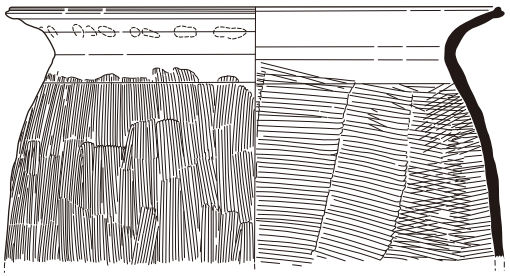

473


474


475

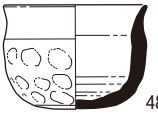

476

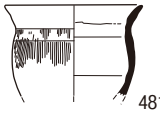

477


478


479

0　20cm

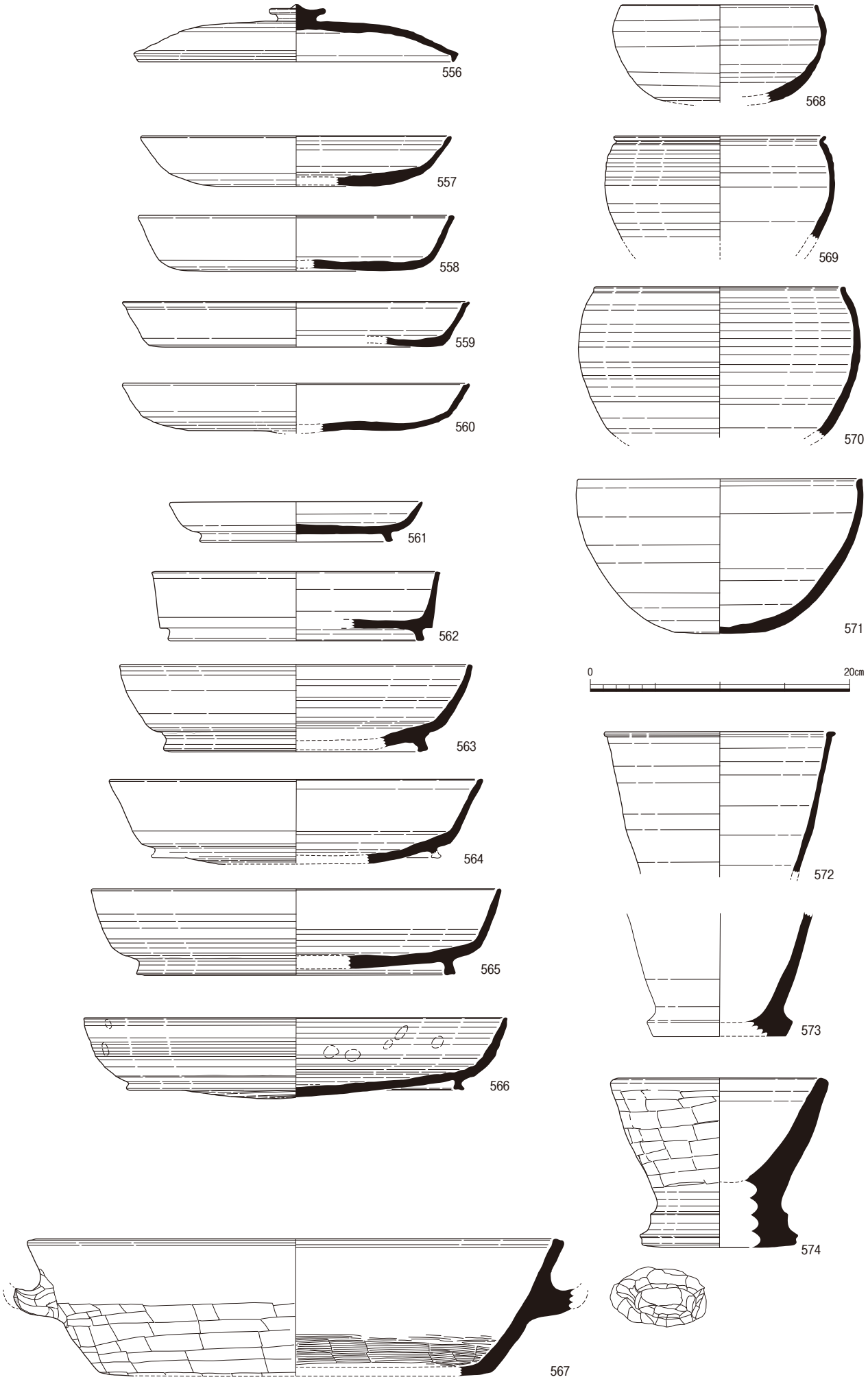

480


481

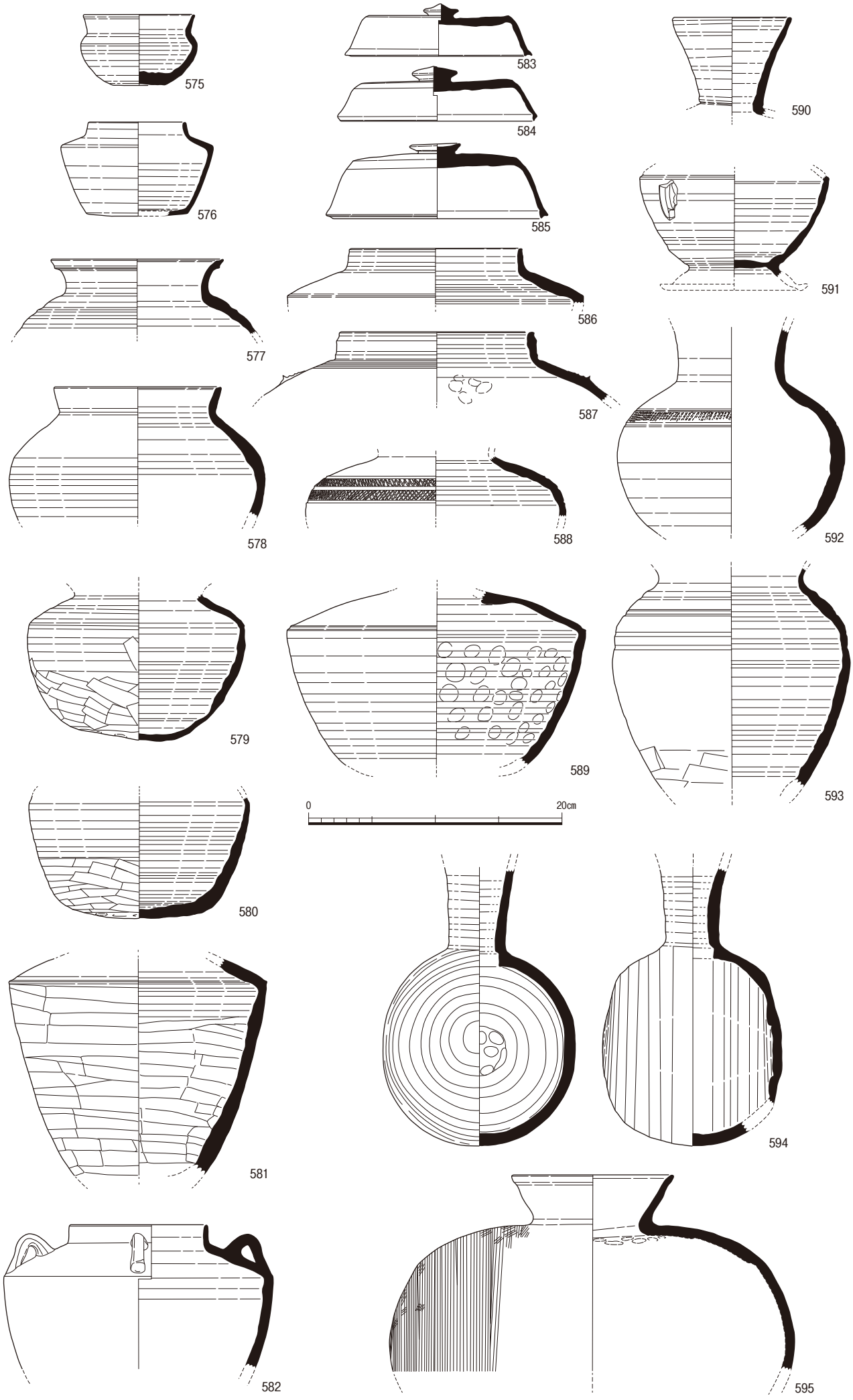

482

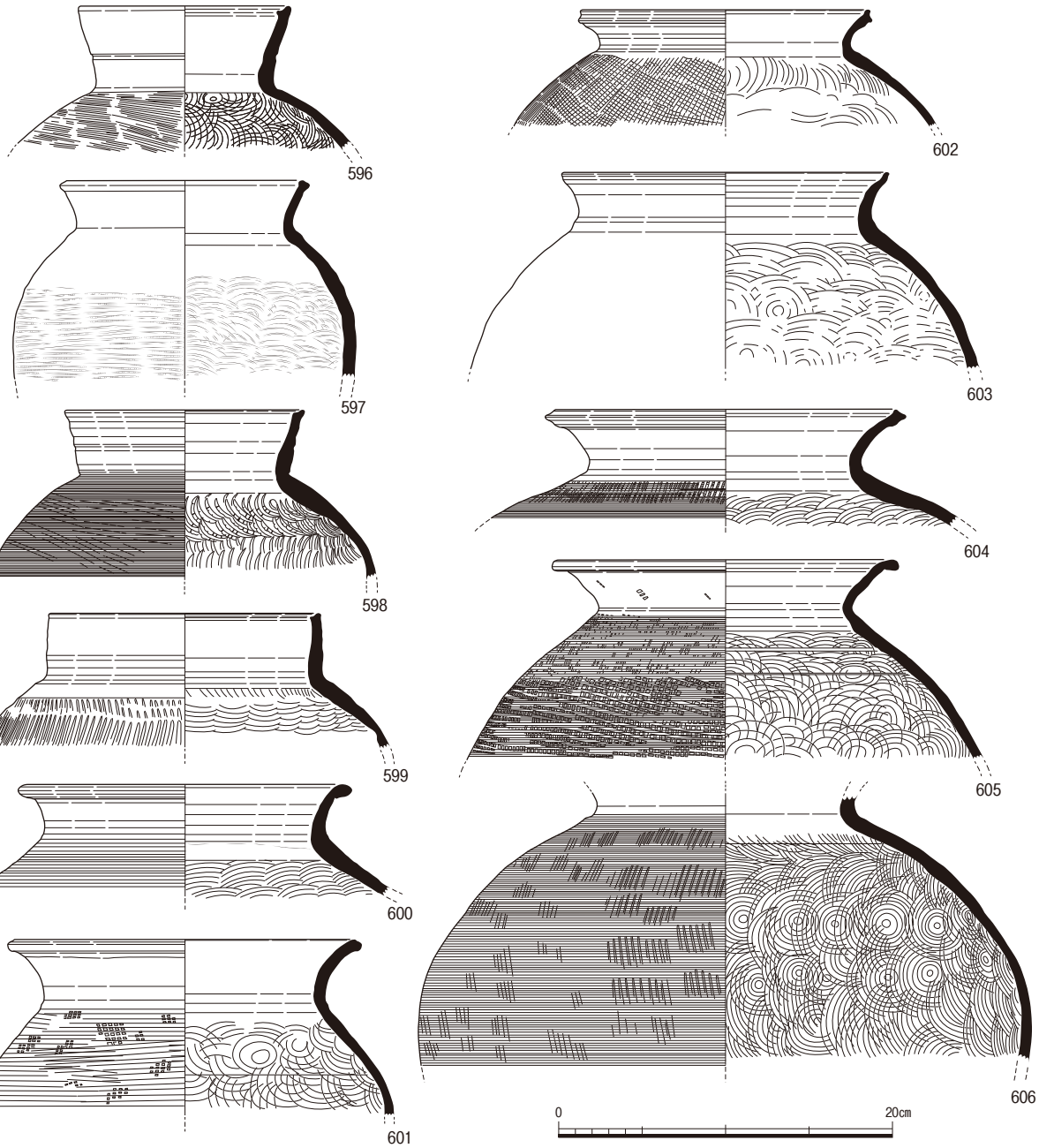
PL. 21　SD347・640出土土器（4）



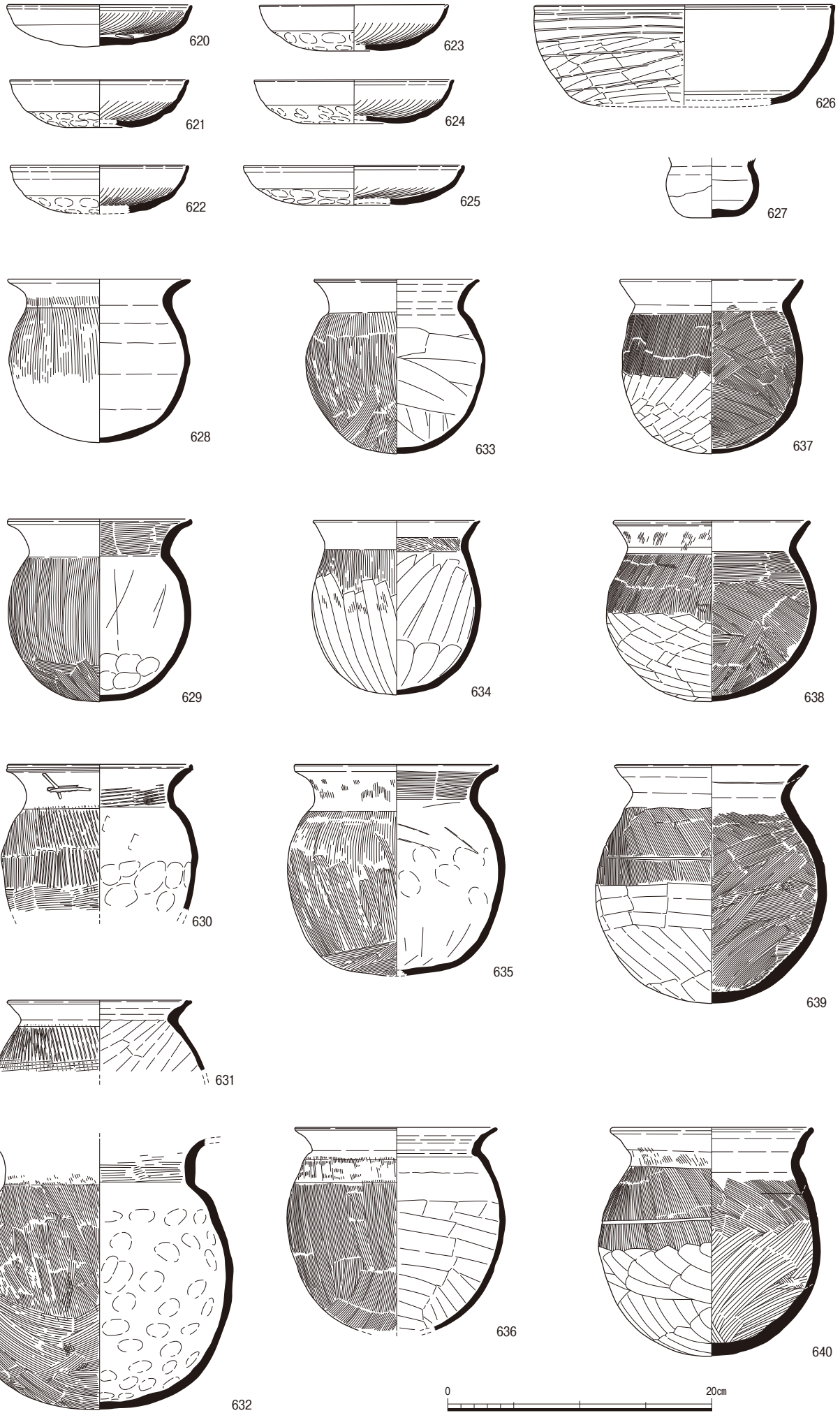

556
557
558
559
560
561
562
563
564
565
566
567
568
569
570
571
0
20cm
572
573
574

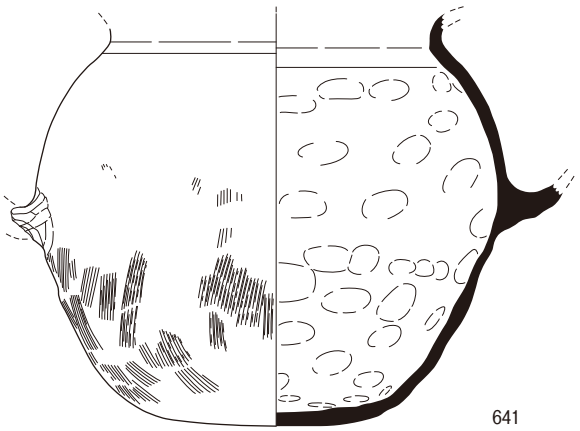
PL. 23　SD347・640出土土器（6）

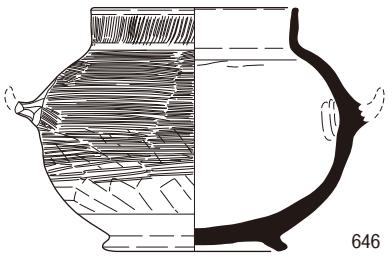


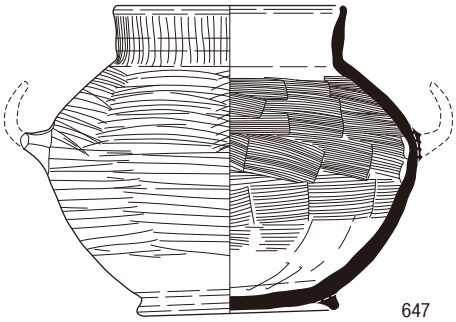

596
597
598
599
600
601
602
603
604
605
606
0
20cm
607
608
609

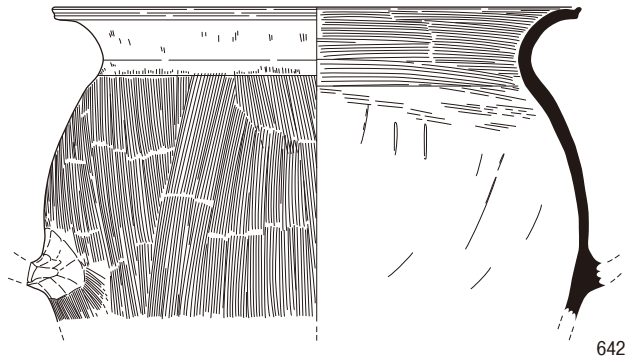
PL. 25　SE650出土土器（1）



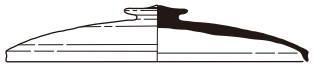

641


646

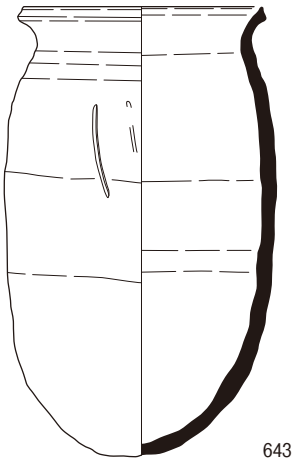

647


642

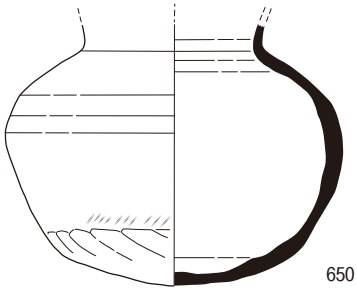


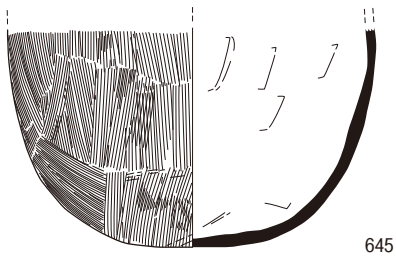

648

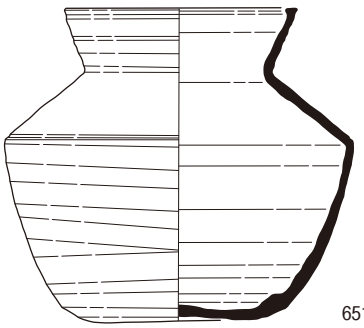

649

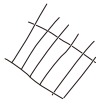

643


644

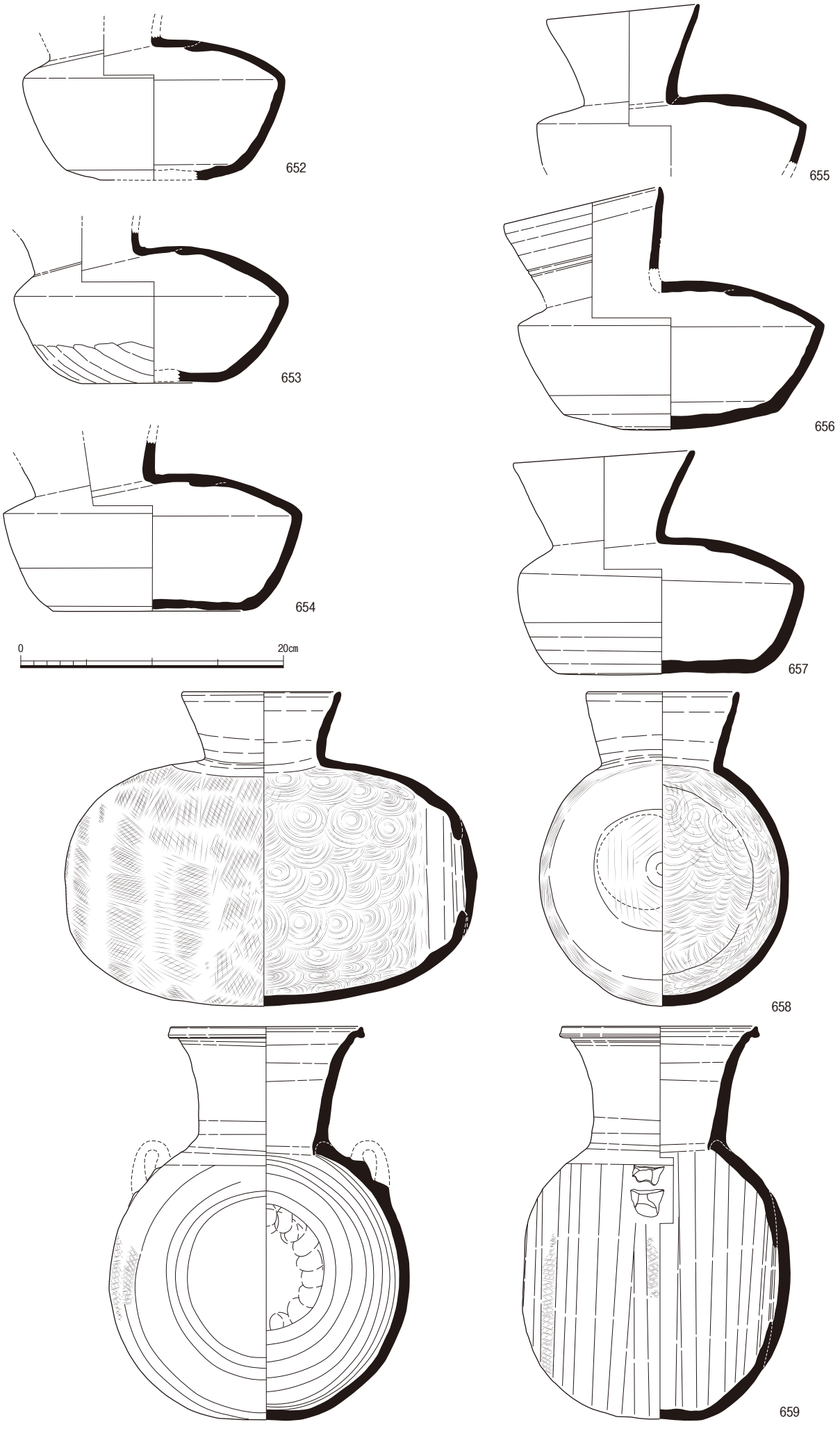

650

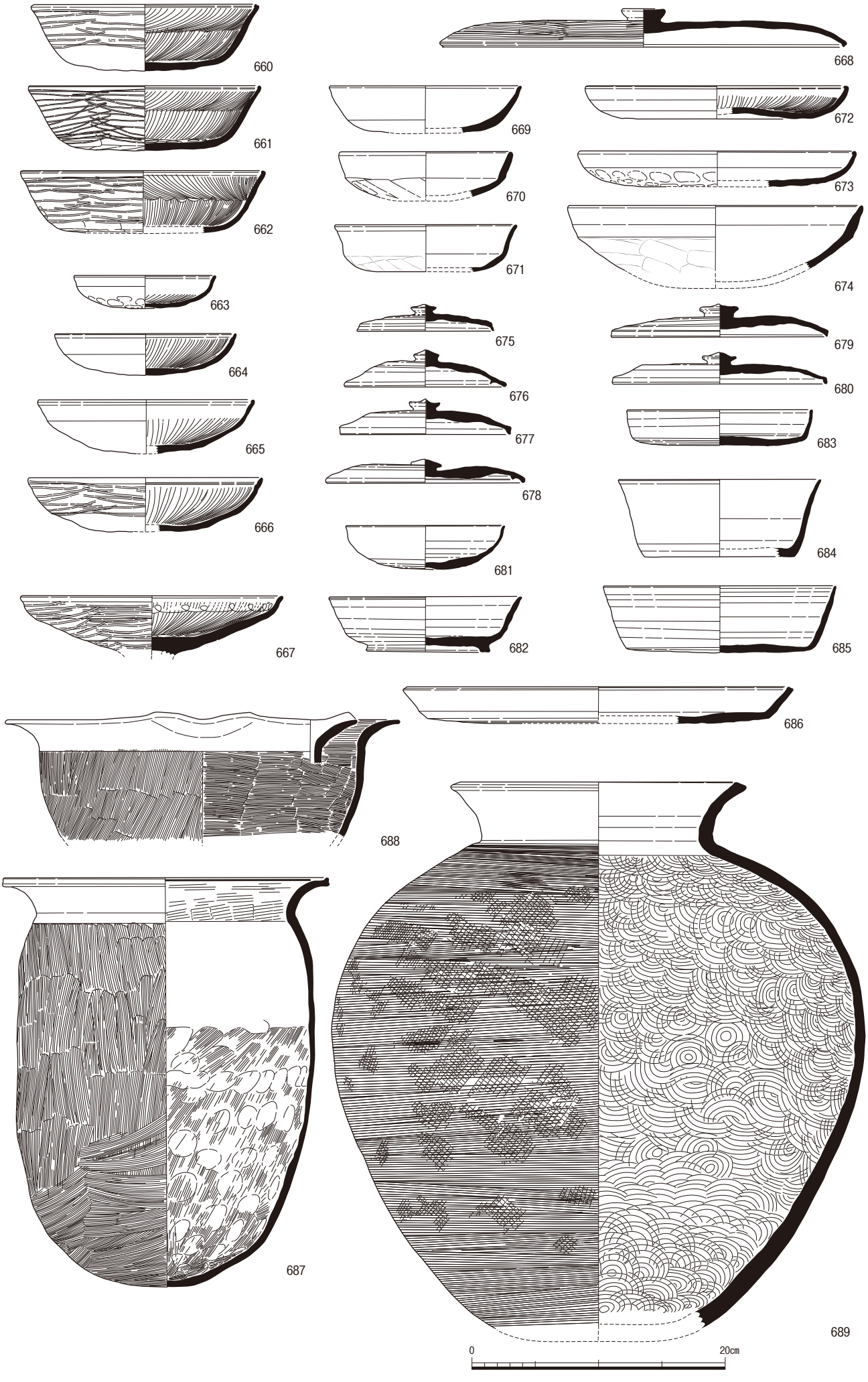

645


651



PL. 27　SE650出土土器（3）




660
661
662
663
664
665
666
667
668
669
670
671
672
673
674
675
676
677
678
679
680
681
682
683
684
685
686
687
688
689
0
20cm

PL. 29　SK405出土土器

